

又见奇闻



4

特大号

… (第二集) …… [縛られた女ばかりの豪華アルバム] …… (第一集) …

マニアの方は必ず一本をコレクション下さい。

頒価 一部 五百円 (送料五十円)

美術コロタイプ印刷 各葉解説入

(詳細の説明紹介はKK通信第十二号に)

全部未発表特写の女体緊縛写真

内容

猿ぐつわ 紅と口 蠟燭責
雁字搦目 観 念 芋 虫
犠牲台 床の置物 鞭 打
目の綾 滑車吊 高手小手
荒 縄 くさり エビ責

美しき縛しめ

第一集 第二集 第三集

九人の緊縛モデルを駆使して完全した緊縛フォトの圧巻 未発表の秘作集

代表的な縛りポーズ三十二態

(詳細な説明はKK通信第十七号に)

32態

◆責め写真はほしいが、印刷紙に焼付けたものは高く困ると、おっしゃる方は極く鮮明なコロタイプ印刷のアルバムをお求め下さい

◆三十二枚の変ったフォトがぎっしりと並んできつと皆さまの胸をわくわくさせることでしょう 全く素晴らしいです

美術コロタイプ印刷、アルバム装釘

頒価 一部 五百円 (送料三十円)

晴雨『美人乱舞』

伊藤晴雨先生著並画菊版和装美本 定価 四〇〇円 二四

図版目次

▲人体時計 ▲天国の女 ▲美人燈 ▲島田髻のこわれる迄 ▲丸髻のこわれる迄 ▲美女のなやみ ▲崩れたる女 ▲鉄砲責にされる女 ▲火葬場異聞 ▲佛々に抱かれた美女 ▲死神につかれた女 ▲特別附録、娘風俗年中行事十二月、外特別読物として先人未発の貴重な春画文獻五章十九項に亘って詳説す。晴雨ファンに薦む。

◎浣腸フォト三態 第一集 第二集 第三集

キヤビネ判 各三枚一組 三百円

ベテランの方々の御意向を総合して完成した、あつと驚く新趣向の浣腸フォト、三〇C、五〇C C浣腸器、イルリガートル、いちじく浣腸等を用いて、施術者と被施術者とを同一画面に入れた真に迫るマニア待望の品、

◎浣腸責め三態 第一集 第二集 第三集

キヤビネ判 各三枚一組 三百円

浣腸と縛りを併用したフォト、手又は足の自由を奪って身動き出来ない姿態のま、無理に浣腸されようとする被施術者に、施術者の持つ浣腸器は情容赦なく迫ってゆく。浣腸責めのかもし出す甘美な雰囲気は、皆さんを妖しい感激のルッポへ誘ってゆく

華麗な責めの色刷画帖

横トシ豪華美本、各葉説明文句入

三条春彦画 一部三百円 (送料)

時代物責絵巻

内容

一、山法師と静御前 五、八百屋お七の最期
二、女スリと岡引き 六、新撰組と芸妓
三、淀君と千姫 七、十郎左エ門と腰元
四、犬公方と侍女 八、小紫と悲旗本

御申込みは迅速と確実を誇る曙書房代理部へ

御申込次第早速厳重荷造の上急送申上げます
代金引替は送料が高くつきますので、必ず前金でお願いいたします

曙書房代理部

奇譚クラブ臨時増刊号

吾妻新氏の麗筆により心にくき迄執拗に描写されたサディズム文学の決定版
サディブラッケイズ作・吾妻新訳

アリスの人生学校

一冊 百円 (送料共)
美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く堂々五百枚に垂んとする傑作口絵、挿絵カット多数挿入

女体縛り悦虐姿態集

川端多奈子嬢

ベテラン多奈子嬢の
定評あるフォト

第一集、第二集

各(手札型七枚一組)三百円

村田那美子嬢

純情型の清新なしぼり

手札型五枚一組二百円

伊吹真佐子嬢

豊満な肉体に強烈なしぼり

手札型五枚一組二百円

急襲

手札型十五枚
一組五百円

モデル (杉美美嬢)

連続十五枚続きで女が縛られる
迄の過程を描いた最優秀作

台上の殉教者

キャビネ判二枚一組二百円

モデル (杉、村田、坂口嬢)

吊り3態特選集

モデル (川端多奈子嬢)

キャビネ判各三枚一組五百円

第一集、第三集

第二集、第四集

二女連縛集

(中富綾子、並川トミ嬢)

手札型六枚一組三百円

椅子責め五態

モデル (伊吹真佐子嬢)

キャビネ判 五枚一組五百円

磔

(キャビネ判)

第一組 二枚一組 三百円

第二組 一枚組 百円

モデル (村田那美子嬢)

半吊り二態

モデル (村田、坂田嬢)

キャビネ判二枚一組二百円

女体各種趣向縛り写真

各組一組 (キャビネ判) ……三枚 一組

三百円

※三人得意のポーズ

モデル (村田、坂口、杉嬢)

※水辺水責め三態

モデル (萩千恵子嬢)

※悦虐遊戯三態

モデル (坂口、杉二嬢)

※後手高手小手二百体

モデル (伊吹真佐子嬢)

※レインコート3態

モデル (萩千恵子嬢)

※溪流の飛魚

モデル (村田那美子嬢)

※高手小手三態

モデル (木田雅子嬢)

※制服の女学生

モデル (雲井久子嬢)

※野外全裸の縛り

モデル (村田那美子嬢)

※猪吊り3態

モデル (萩千恵子嬢)

※猿ぐつわ三態

モデル (浅野末乃嬢)

※繃帯縛り3態

モデル (萩千恵子)

※蠟燭責め3態

モデル (坂口、村田、二嬢)

※腰巻縛り3態

モデル (萩千恵子嬢)

※梯子責め三態

モデル (伊吹真佐子)

※ナイロン女体縛り

モデル (杉美美嬢)

※鞭打ち三態

モデル (杉美美嬢)

※三嬢連縛棒吊り

モデル (杉、村田、坂口、三嬢)

※基盤責め三態

モデル (雲井久子嬢)

※灸責め三態

モデル (杉美美嬢)

※女が女を責める

モデル (坂口、杉、二嬢)

※繃帯縛りの特選

モデル (伊吹真佐子嬢)

◎全部卓絶した未発表の特写真写真ばかりです。

◎価格は全部送料共です。どうぞ多少に拘らず御申込み下さい。

◎女体縛りの詳細説明はKK通信第二十三号にあります。



定價 四拾圓

IBM 2805

モデル嬢 股間縛り競艶

各組（キヤビネ判）

三枚一組 三百円

問題の股間縛り、各嬢競艶、縛りマニアの絶体に見逃すことの出来ない珍品

中富綾子嬢 三態

純情可憐、芳紀正に十七才の乙女、無垢の肌に喰い込んだ痛々しい縄目

杉 芙美嬢 三態

昨年十二月号の口絵に掲載して大好評を得た作品

萩 千恵子嬢 三態

乳房を出すのさえ恥しがらる萩嬢を觀念させた股しぼり

伊吹真佐子嬢 三態

豊満な肉体をタテに喰い込ませる股間しぼりの縄目 縄

坂口利子嬢 五態

キヤビネ判 五枚一組 五百円

十数態の中から最も強烈な股間縛りの代表作を選ぶ、股間縛りを流行させた問題の作品も含んだ特別品揃い

女性切腹擬態写真

○女性切腹姿態写真○

各（手札型六枚一組）三百円

初めて試みた女性切腹の好評作

第一集（三人のモデルによる各態）
第二集（裸体着衣共代表的各態）

○真刀を用いた女性切腹写真

手札型六枚一組 三百円

真刀が白い腹部の肌へグサリと刺さる思わずゾクリとする真迫した切腹フォト

○血紅使用の女性切腹写真

各（手札型六枚一組）三百円

血紅によって女性切腹の様相の経過を示した珍しい文獻的なフォト

第一集 第二集

○女性切腹シリーズ写真

連続八枚続き（順を追うたもの）

キヤビネ判 八枚一組 六百元

○女性切腹「立腹」写真

手札型 三枚一組 二百円

傑作・マゾ・フォト

春日ルミ嬢構成

各組 キヤビネ判 三枚一組 三百円

足舐三態

A、椅子に腰掛けたルミ嬢が男の口の中へ足を入れてい
B、クローズ・アップ、C、男が足を持つて舐めようとしている

足蹴三態

A、ハイヒールで頭を蹴る、B、蹴り倒される男、C、後手に縛られた男が、思うままに頭を蹴られる

凌辱三態

男性をケダモノのように足下に踏みこむにじりついて喜ぶルミ嬢の得意のポーズの中で特にマニアの好む凌辱の姿態

人間椅子三態

A、胸の上へ灰皿を置いて女王様の休息の椅子となっている
B、人間ソファ、C、女王様の膝下に屈伏するドレイ

犬の折檻三態

A、芸を仕込まれるワン公、B、女主人を背にするワン公、C、首環とクサリで吊込まれる

人間馬三態

A、乗馬ズボンに乗馬靴の女に股がられる
B、鞭の苛責、C、乗馬の訓練

マゾ・フォトのベッド・シーン
キヤビネ判 4枚1組 400円

一、馬乗り 二、首締め
三、押え込み 四、足台

奇譚クラブ 春四月特別増大号の目次

明治年間の新聞覚え書……………吾妻新男
血染の毛綱……………伊藤晴雨

「浴衣草紙」……………白金紅次
残虐なる女性達……………森本愛造・沢

アブホート一年生……………狩井麗作
女性のお灸十態……………徳山始

幽囚十ヶ月……………春田一郎
男色者の地域性……………坪内修・西

牛乳風呂の饗宴……………馬族保
奇譚クラブ旧身録目次……………

ボクの責め方……………宝塚一二三夫
貴族の回想……………依田精一・文

あるマゾヒストの手帖から……………沼田正三
「お天狗様」……………木曾の野村間

孤獨……………花村恵美子
「挿絵の為の神美解説」……………山口幸一

悪魔の遊戯……………二俣志津子
夜光島……………吾妻新男

現代マゾヒズム芸術時評……………原忠正
「映画・雑誌」通信……………森本愛造

最近の映画から……………柳一節
大和撫子……………白石一節

調教師……………淡美一郎
アブ追求二十年の回顧……………山田正実

飛行動姿の女腹切……………柴山秋夫
耽美の果て……………中谷冷一

「私切腹」……………大村光子
「私の切腹」……………古田吉郎

女性の下着写真マニア……………不破和子
「現代版「つ家の幻想」」……………伊曾田進

「現代版「つ家の幻想」」……………花房重夫
「現代版「つ家の幻想」」……………

「現代版「つ家の幻想」」……………
「現代版「つ家の幻想」」……………

「現代版「つ家の幻想」」……………
「現代版「つ家の幻想」」……………

「現代版「つ家の幻想」」……………
「現代版「つ家の幻想」」……………

「現代版「つ家の幻想」」……………
「現代版「つ家の幻想」」……………

「現代版「つ家の幻想」」……………
「現代版「つ家の幻想」」……………

「現代版「つ家の幻想」」……………
「現代版「つ家の幻想」」……………

「現代版「つ家の幻想」」……………
「現代版「つ家の幻想」」……………

「現代版「つ家の幻想」」……………
「現代版「つ家の幻想」」……………

「現代版「つ家の幻想」」……………
「現代版「つ家の幻想」」……………

「現代版「つ家の幻想」」……………
「現代版「つ家の幻想」」……………

「現代版「つ家の幻想」」……………
「現代版「つ家の幻想」」……………

「現代版「つ家の幻想」」……………
「現代版「つ家の幻想」」……………

「現代版「つ家の幻想」」……………
「現代版「つ家の幻想」」……………

アブ川柳十態

狩井麗作(句)
瀧れい子(画)

おみ足を
頂きなす

唇は

お尻から
トシと
坐る

レディ力
紳士専用車

答案
書きと
四割を
受け

ない癖を
持ち

コレクションに
おまかせ

おまかせ
とやうに

しきいつい
待てる

ヒップでも
おとしなれば
重石と

胃腸の
困る

令嬢
はトウ
おまかせ

兄の教授ぶり
義理で
曲藝を
教える

執を
帯い

先生の
折檻
なん

その
足で

先生
のは事に

地獄
なり



責の見世物百種の内

伊藤晴雨画

指人形

(解説は本文312頁参照)



画 集

複雑な表情

何かを云っている。しかしそれは聞えません。ただし
貴方にだけはそれが判るのではないのでしょうか？



冷い石蔵

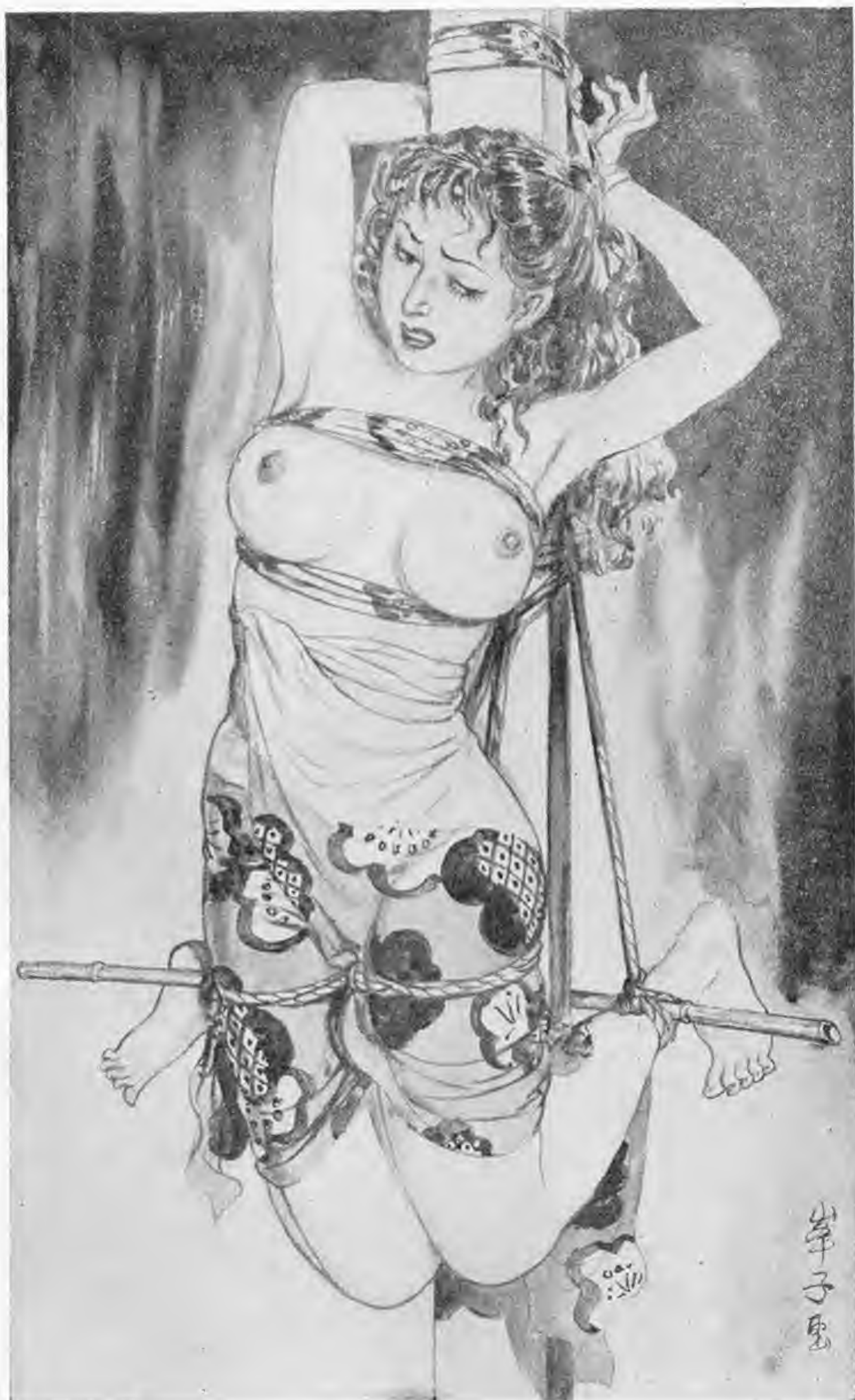
白い若々しい彼女の裸身がふるえている。抜けるような手の痛みが、かたいコンクリートの冷たさが、美しい彼女を無慈悲に責めている。

四馬孝



四馬

都築峯子妖美画集



柱の宙吊り

現代版一つ家の幻想



華子画

血 染 の 毛 綱

伊 藤 晴 雨



一
波沢誠一郎の部下の振武軍が戊辰の歳に飯能に拠つて、官軍に抗したのは、上野の彰義隊が破れたのと同じ結果になったが、勝てば官軍、負ければ賊の譬え、其儘討ち洩らされた旗本の武士は山賊となつてしまつて、奥多摩の鞍馬橋附近に本拠をおいて良民を悩まし



て居た。
其処へ、両手を縛られ、足にはおもり（鉛）をつけた美しい女が通りかゝつたのだから無事に助けてやる筈はない。落花狼籍の一齣を路傍で演じた事は云う迄もない。

二

併し、賊にも涙がある。足のおもりを村の馬蹄鍛冶に命じて鎖を切つてやった序に手の自由を奪われて居るのも解いてやろうとしたが、錠の穴は或る特殊な金属で埋められてあつて、之を破るとすると、熱を其縛られている錠前に加えなければならず、かくする時は、両手が焼けたゞれてしまうので、女が泣きさけぶのを聞いて賊共は之を止めさせて、縛めを

其儘大菩薩峠の方面に引上げようとして女を引立てゝ行つた。

三

鞍馬橋を渡つて甲府方面へ出る甲州街道を、女を引立てゝ歩いて行くと、辻堂の陰から一人の男が出て来た（はかりさし）という此附近独特の生糸買いと見せて、実は八州見廻りの役人で、手先の一種が此女を怪しいと見て、跡をつけていた。



四

「旦那方暫らく」と声をかけて（はかりさし）の男は此女を売ってくれないかと山賊に交渉した。丁度軍用金を費いはたして困っている矢先、女を十五両で売り渡す事にしたが、十五両などという大金を持って旅をする男の方が余程怪しいのだが、賊共は之を何とも感附かなかった。

子・畫

女 囚 人
おんな めし うど

夜のしじまを破って、カタコトと監視の男が近づいてきた。若い女囚人は囚衣のほころびさえかくすことが出来ず、おびえた顔でふりかえるばかりだつた。



生 賛
いけ にえ

御籠場に水御垢をとっていたうら若い乙女は、荒法師たちに後手に縛られて腰巻一つのまゝ、岩の上へ放りなげられた。滝の水しぶきは、白い肌の上へ容赦なく降りそそぐ、神に捧げる悲しいいけにえだった。

瀧れい





虹兒繪

切腹曼陀羅凶絵

杉原虹兒画





美しき囚

太いロープで後手に、両足には鎖でつないだ金鎖性の足枷をはめられた姿で、彼女は暗い倉庫の扉の下の柱につながれていた。……何時間経ったのか……物音だったが、彼女は彼を狙っている男の影にサクゼンとして息を呑んだ。

(依田精二・画)

罅縫の旗

崖面に岩を引いた前衛隊——その新村に吊り下げた裸身の美女の手と足に結ばれた黒い罅縫の旗、火の機軸を狙って船は荒波を蹴って進む——



白い奴隷

四馬 孝画



大都会の裏街、そこには普通人の思いも及ばない悪業と背徳のはびこっているカスバがある。十七の年、田舎から家出をしてきた緋左子は、駅前に網を張る彼等の手先に欺かれてビルの地下室へ連れ込まれた。泣き喚いて助けを乞う彼女は忽ちのうちに荒くれ男たちに取りかこまれ、よってたかつて後手に縛り上げられ、口には垢じみたタオルで猿ぐつわされてしまった。

いるばかりだった。「おい、このぼちや／＼とした餅肌を墨を入れたら、いゝ売物になるぜ」、男の一人が、緋左子のスカートをまくり上げて太股に手を当て、そういつた。日本娘の柔肌に彫つた刺青に大金を払う第三国人の好事家があった。女の肉体に商品価値があるのは、昔も今も変りはなかつた。台の上につ伏せに四肢をひろげて縛りつけられた緋左子は腰部の皮膚に激痛を感じて、思わず猿ぐつわの下で、ううう／＼と呻めいた。青白い螢光灯の下で繰りひろげられる被虐図絵だった。



緋左子のほり込まれた部屋には、各地から誘拐された女、若い男に欺かれた女、家の為に自分から身を売った女、それに緋左子のように、家出をした宿無しの女などが、十人ばかり、皆一様におびえきつた表情で坐つていた。

彼等はこの女体商品を自分の思いのまゝに白い奴隷として仕込んだ上で、生娘は水揚げ

好みの助平爺に、肌のきれいな娘は背中一面に刺青を施して第三国人に。器用な女は、いろ／＼な芸を仕込んで、花電車、白白、或は白黒等の見世物に使う。妾に斡旋したり、醜業につかえたりさせるのは、まだいゝ方だった。強情を張って思いのまゝにならない娘はさんざん彼等一味の玩具になった挙句、遠く香港あたりへ叩き売られるのだった。

そうして、強情娘が上玉であつたときは、彼等の憎しみもひどく、激しい拷問が加えられるのが常だった。十人の中、九人迄は自分の運命と諦めて彼等の言いなりになるのだったが、丁度その時、隣の部屋で逆さ吊りの仕置を受けている娘は、良家の一人娘だったのが後妻にきた継母と仲たがいで、都会へ働く為に出てきて捕えられた娘だった。



「しぶといアマだ」こゝへ連れて来られて一週間、一向に従順に言うことをきかない娘に業をにやした彼等達は、あられもない逆さ吊りにしたが、娘は悲鳴さえ挙げなかった。それより扉のすき間から、この有様を眺めていた十人の娘たちの方が、おじけずいてしまうのだった。

その翌日だった。呼び出された緋左子は、

最初刺青を入れられた部屋で二度目の刺青をされるのだった。汚れのない乙女の肌にいま／＼しい刻印をされることは清純な彼女にとつては耐えられない事だった。それに、このような男達の沢山いる中で、裸になる屈辱にも耐えられなかった。「どうか、それだけは許して、外の事だったらどんな事でもきゝますから」と懇願したが、勿論、きゝ屈ける彼等ではな

かった。

「一寸甘い顔を見せるとすぐつけ上がりやがる」いや、応なしに上半身裸にされてしまった人一倍大きい乳房が両手でかくすひまもなく後にねじ上げられ



てしまった。「いや、いや、許して!」「おい縛り上げてしまおうか」用意の紐が両手首にまきついたが、緋左子は必死になって針を刺させまいともがいた。「これじゃ仕事にならねえ」男は手に注射器をとり上げた。二の腕にチクリとしたかと思うと、彼女は忽ち夢の世界へ転落していつてしまった。

見世物に使われる女二人が、縛られて連れてこられた。この娘たちは、自分から進んで身を売った女だったが、仕込み方が苦痛の多いやり方だけに、身動きならない

ように縛られるのが習慣だった。それが又、次第にこの二人をマゾに誘い込んでゆくのだった。白い肉体の奴隷に対する彼等のあくなき暴虐は、毎日く続けら



れた。売られゆく娘のあとには、何処から連れて来られるのか、水々しい肉体の娘がほり込まれてくるのだった。曲芸師に売られるという痩せた小麦色の肌の娘の悲鳴が、いつか逆吊りのあった部屋から洩れてきた。その部屋ではパンツ一枚にされた娘が、手と足を一緒に二つ折りに縛り上げられて

まるでハンモックのように吊られていた。ムチを持った男が言うことをきかないと言って尻を打つのだった。緋左子は娘の悲鳴とムチの音をきながら、自分も蛇の刺青を入れられてしまったのだからもう仕方がないわと諦めていた。

(おわり)



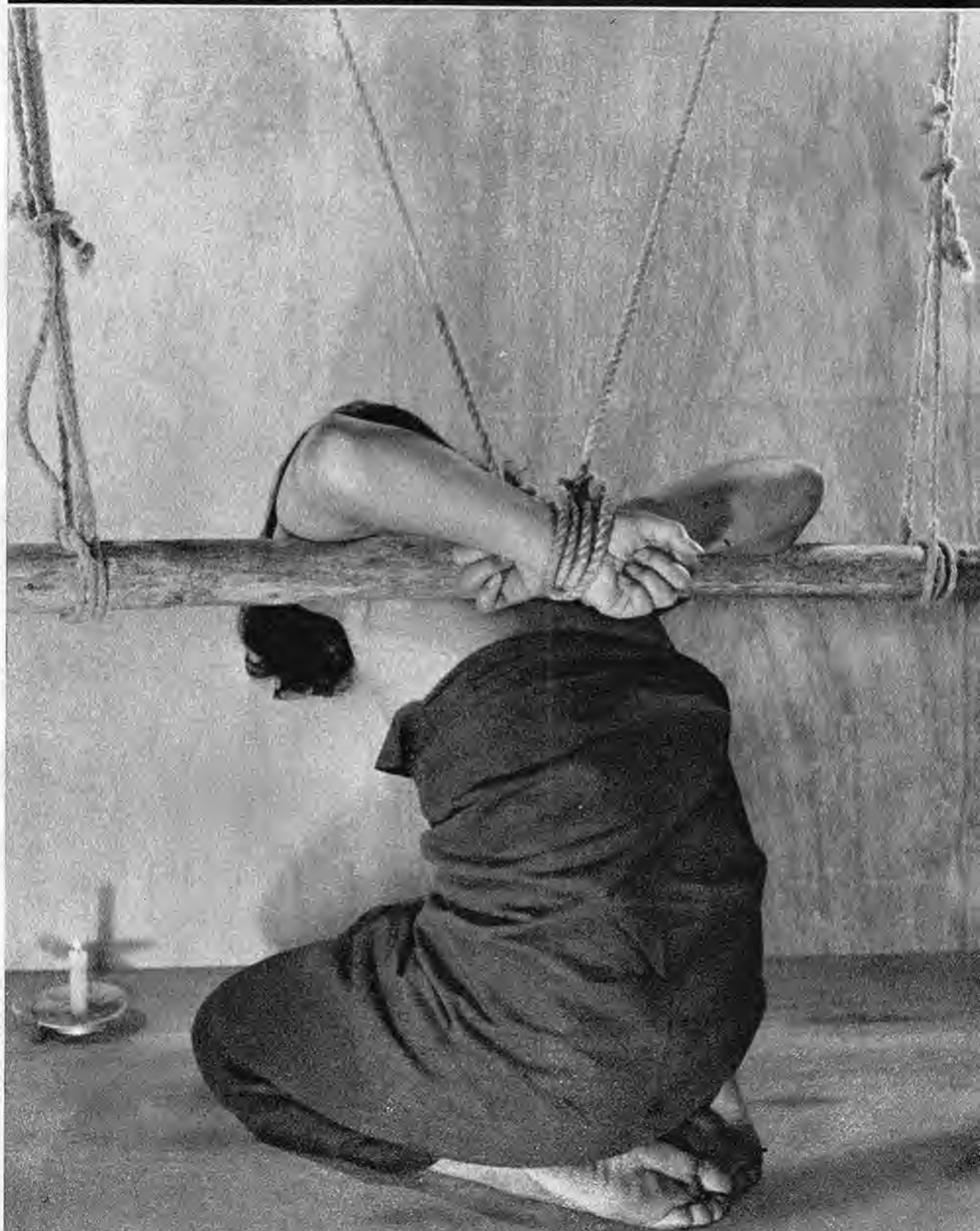


*Ligation photo
album*

後手吊り

恥しいというので腰は特別厳しく巻いてあげた。そして顔も見えないようにうしろ向き、そのかわり後手に少しばかりきつく縛らせて頂いた。キミの御注文通りにネ。

モデル 誰でしょう？





束縛

縛られるのが嫌だ、好きだと言ったって、祭壇の上へ上ってしまった以上は、少々痛いことも辛抱して貰わにやなるまい

痛そうな顔はいくらしても構わないからネ。

モデル 中 富 綾 子 嬢



伊吹真佐子嬢



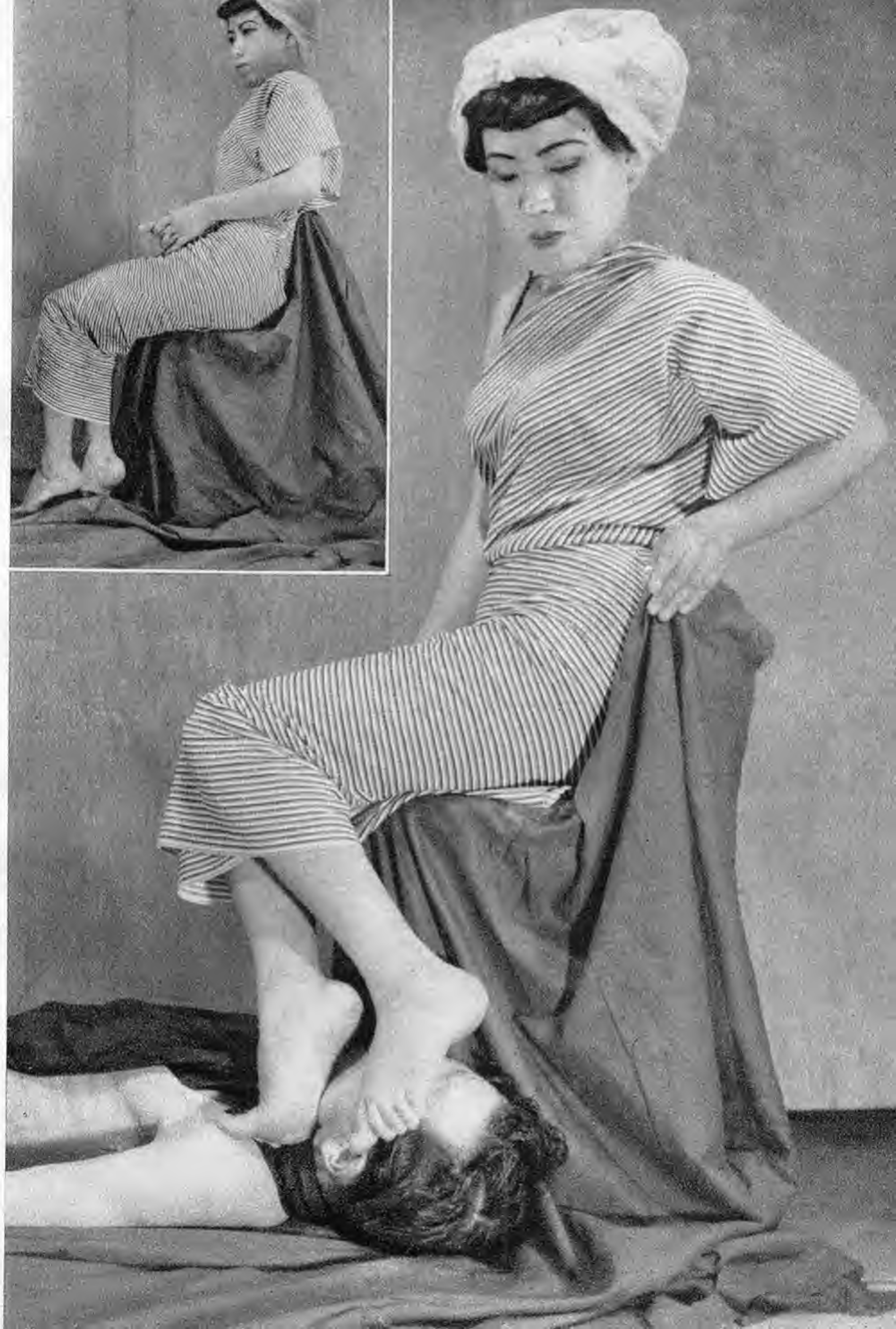
縄と女体の幻想
四態

高瀬忍嬢



萩 千 恵 子 嬢



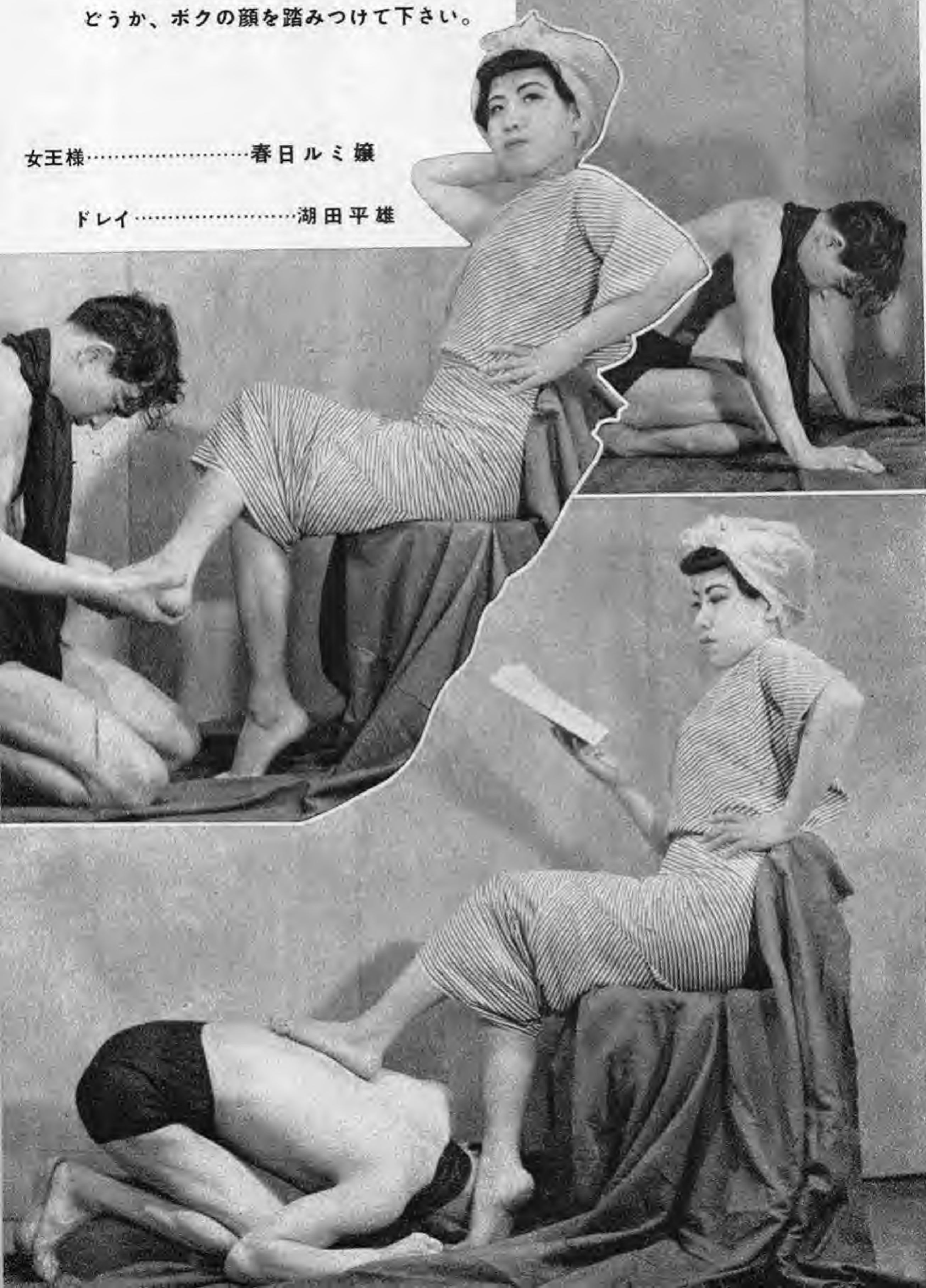


女王様、おみ足をどうぞ

ボクは貴女のドレイです。
どうか、ボクの顔を踏みつけて下さい。

女王様.....春日ルミ嬢

ドレイ.....湖田平雄



春日伊吹 二嬢名コンビ写真「目かくしされて、さて？」



モデル

春日ルミ嬢
伊吹真佐子嬢

昭和二十九年十月上旬
於、四条畷山中



立木にぎりぎり女性綿密
さで縛り上げてゆく。目かく
しをされて、さて、どうされ
るのやら、誰も来ない山の中
呼んでも泣いても助けに来て
くれる人としてありません。
カメラは数十枚のフィルム
に次々とシャッターを切って
ゆく。





人間椅子 「どう？ちっとはこたえたかえ？」

女主人……春日嬢

人間椅子……小沼正三

飼犬

「ワン公、おあずけだよ」

女飼主……春日ルミ嬢

飼犬……湖田平雄



禪美と被縛

モデル……湖田平雄



こんなところで
放っておいたら

恥しいわ!



公園にて

モデル 萩千恵子嬢

足も縛られて
人が来たら
どうしょう?





どうしようって

いうの？



人が来たワ、
早く解いて

残虐な女性達画集

(解説は本文 298 頁参照)



(2)「小学校での懲罰」
(Strafstunde in der Volksschule.)



(1)「ピアノの練習」
(Klavierstunde)



(3)「学校での懲罰」
(一週間の精算)
(Wochenabrechnung
in der Schule.)



(5)「厳しい教師」(Strenge Lehrerin.)



(4)「輸入された女」
(Weib als Mare.)



「号外」 予告(2)



「号外」 予告(1)



あッ、落ちる！

モデル 萩千恵子嬢



明

烏

(浦里の雪責め)



歌川豊国筆

(特別増大号)

文化人の文献研究誌

奇譚クラブ

1955年 4月号

(第九巻 第四号 通刊第七十九号)

明治年間の新聞覚え書

吾妻新

(まえがき)

他の目的で明治の新聞に眼を通しはじめてから久しくなるが、その中で本誌の読者に興味のあるものを抜書してみた。もちろん明治年間の新聞全部をよむことは半年や一年では不可能だし、私の目的もこの種の風俗とは全く別のものだから、見落しはいくらもあると思われるが、まだ誰も試みてないので資料価値はあろうと思われる。尚私の読んだ諸新聞は慶応四年から明治四十五年までの全期間を含むが、少くとも私の見た範囲では、性風俗で面白いものや意義のあるものは沢山あっても、アブノーマルのものは意外に少ない。これは当時——特に初期の新聞のスペースが極めて狭いのと、明治全期を通じて政治的経済的事件が幅映しているためで、しかもその中に柔い添物記事といえは花柳界の噂

話が主で、それは当時の紙面から言えば相当の量をしめている。また今日のように社会の隅々まで報道網が行き届いてなかった。西南戦争ごろまでは地方記事が二日も三日もおくれたし、他の新聞記事を再録することをお互いにやっている。そんないろいろな事情から、極めて個人的なアブノーマルな出来事は眼につきにくいし、載りにくかったのである。

尚、文章は初期から後期に移るにつれて平易化してゆくが、それでも時代が時代だから必ずしも平易とはいえない。また読者には事実をお伝えすればいいので、原文にこだわる必要はないと思うから、適当に書き改めることにした。ただし面白い表現や味のあるものは、これまた適当に原文を引用する。その場合には仮名づかいは勿論、ひどい当字や誤字、句読点もそのままにしておく。往々あるフリガナも原文にあるものだけだと承知していただ

きたい。カッコ内は年月日と新聞名を示す。尚、日刊新聞でないものは号数で現わした。「新聞雑誌」というのも固有名詞である。

舌を噛み切った女 (五、七、七、東京日々)

場所は東京府下とだけあって、番地も名前も伏せているが、ある女が結婚式をあげた最初の晩、寝床のなかで夫の舌を噛み切った事件である。新聞は歓喜のあまりと断定している。もちろん接吻して興奮の極、舌をかむことはいくらもあるが、噛み切ったのは珍らしい。それも明治五年のおそらくは見合結婚ではじめて男と接した娘という事情を考えると、ちよつとアブノーマルである。

この事件を報じたあとで、新聞は愉快な教訓を垂れている。

「試みに問ふ、世上新婚の淫事も亦其次序を設くべし始め汝が舌を以て淫し、次に汝が手を以て淫し、其後汝茎を以て之を犯す時は、快美透骨の極に至るも亦噛截の害なかるべし。」

車のなかで (五、七月、大阪新聞一〇)

やはり某である。その某が芸者を連れて住吉へ参詣に行った。夜になって、そのころあった乗合人力車にのつて帰る途中、場所もあるうに俤のなかでコイタスした。さて難波新地あたりでその難事業を終り、何気ないふりで俤を下り、約束の賃銀を払おうとしたが、車夫は受けとらないで居直った。

「俺の俤はいつも住吉神社へ参詣の客をのせてるんだから、不浄

ということをいちばん忌み嫌うんだ。先刻からお伺い申している様子じやあ、俤あすつかり汚れちまったよ。これじやあ神罰のタタリが恐ろしくつて、今後の客がのせられねえ。仕方がないからこの俤を買い取ってくんな」

「そ、そんな無茶を……」

「なに無茶だ？ ふざけるな。コウ、こちとらは客をのせて走るのが商売で、茶屋酒一杯のませなくとも席料を取るのが商売じやねえぞ。無茶なのはてめえたちだ。よし、そっちがその気なら只じや済まされねえ。屯所へしよつびいて、こういう訳だと訴えるからそう思え」

「わかったよ。こいつあ俺が悪かった。ここは一つ、席料を……いやなに、俤のお清め代を払うから……」

というわけで、結局約束の代金の数倍の金を払って、やっと事がすんだ。

いかに相乗とはいえ俤のなかでよろしくやるなどということは非常な技術を要する。芸者をつれて出歩く男が場所に不自由する筈はないのだから、明かにこれは猟奇趣味のあらわれである。だが俤夫も、ゆるす気があったにしても、最初からそれに気付いて最後までだまっていたのは変っている。途中で難癖をつけようと思えばできたのだから、これはやはり、他人の行為を見たり聞いたりして楽しむ気持があったのだらう。

不動様も困った願い (六、二、二五、東京日々)

この日、深川東仲町吉祥院内の成田不動尊旅宿賽銭箱に、次の

ような額が二つ上げられていた。

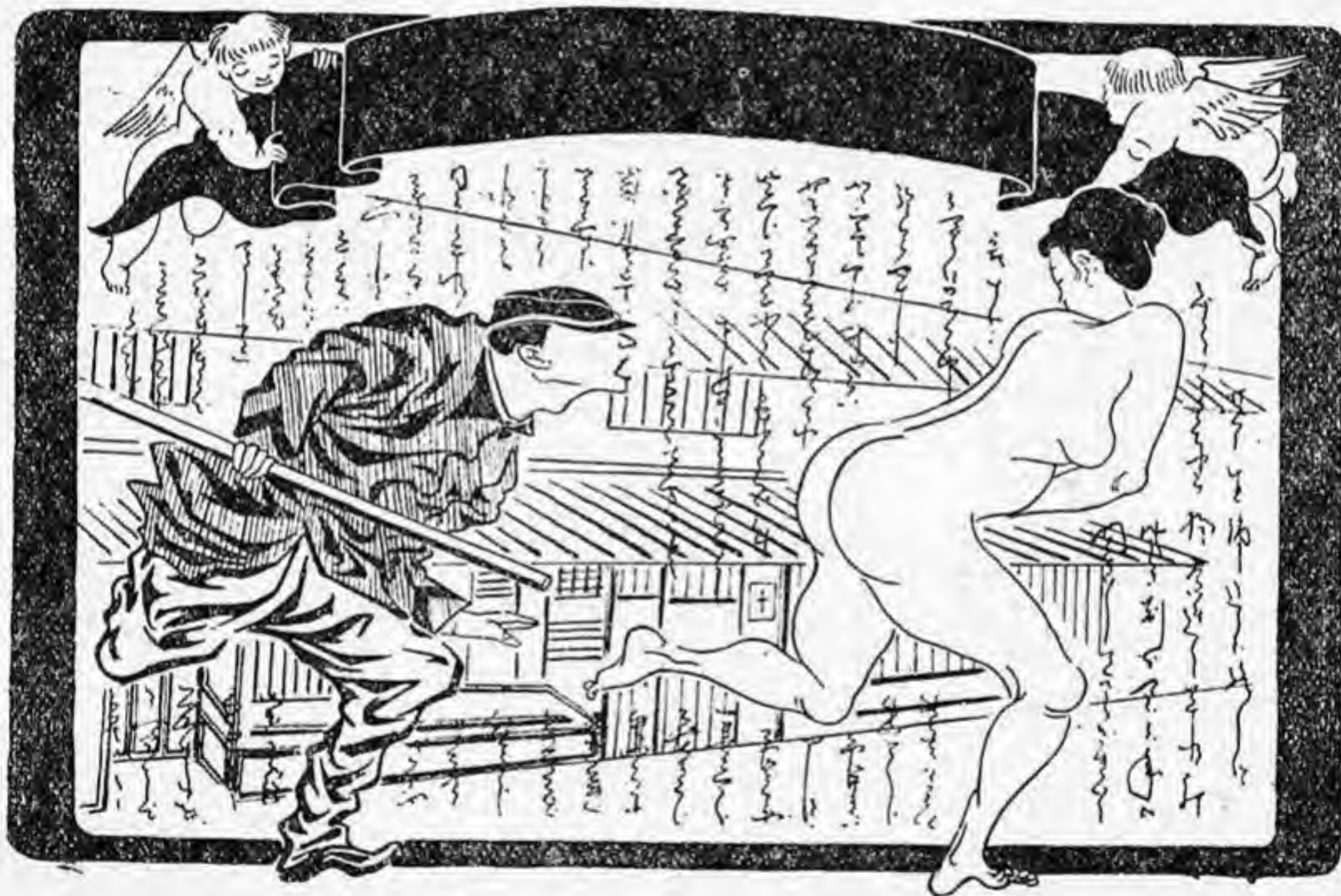
奉納

明治六酉年二月廿日、私事宇多吉と夫婦の約定を致候、然る上ハ宇多吉を私一代の内に、本妻に致候。然る上ハ外に女を拵る事一切禁ず。卅七才男、定吉

奉納

明治六年鳥年二月廿日より、うし年五ヶ年迄のあいだ定吉より外に男きんじ奉り候。廿三才女歌吉

当時は神社などに誓願の額を上げることがはやったが（他にも諸例ある）これは珍らしいので採録してみた。夫婦約束のために二組の額をあげるのも変っているが、内容も変っている。定吉という男のほうは「私一代の内に本妻にする」とあって、現代の解釈でゆくと、これではいつ妻にするのかわからない。しかしこれには註釈が要るので、当時の妾の



地位は今とちがうのである。法律的には二等親として認められ、上は華族から下は平民にいたるまで、公然の存在だった。だから何かの事情ですぐ妻にできないとすれば、いづれ妻にするということは女との関係を保留することでもなければ、非常識な話でもなかった。

ノーマルでないのは歌吉（宇多吉）のほうである。彼女は誓願の額を上げるほど深い仲でありながら、一生貞節を尽すと言っていない。それどころか、五ヶ年の間だけ男を禁ずるとハッキリうたっている。男が将来妻にすることを誓い、その上は他に女をつくらないと言っているのに、「私あ五年たったら男をつくるよ」と宣言しているようなものだ。男尊女卑の時代にこの爆弾宣言は興味がある。もちろん、歌吉があたらしい女だなどというのはコッケイで、男のマゾヒズムの世界から解釈されるべきだろう。

裸体のまま拘引 (六、八月、新聞雑誌一二四)

浅草聖天町辺或ル町家ノ女房、四五日前早朝家内ニ於テ裸体ヲ現シテ蚤を捕ヘ居タルニ、邏卒之ヲ見咎メ其儘屯所迄連レ行キ、理解ノ上、衣類ヲ与ヘ帰サントセシニ、此婦云ヘルニ、斯ノ如ク恥ヲ往来ニ曝セシノミナラズ、夫ニマデ疎ンゼラレ、生キテ甲斐ナキ身ナレバ、此処ニテ餓死スルヨリ外ナシト、今ニ屯所ヲ去ラズ。畢竟此等ノ婦ハ方今ノ御趣旨ヲ奉戴セザル者ナレバ、之ヲ罰スルハ邏卒ノ職ナルベケレドモ、裸体ノ儘街道ヲ連レ行キシハ如何成訳ニヤト、衆人大ニ疑惑ヲ起セリ。(全文)

注意すべきは、當時は東京の風呂屋でも男女混浴が行われて罰せられなかった時代だったことだ。絵画や彫刻の裸体は禁止されてそれだけ人々の刺戟をそそったが、一般生活の中で裸体またはそれに近い姿はザラに見る機会があった。下町の町家などで、夏の朝、腰巻までとって蚤探しをやる風景などは珍らしくなく、人眼につくことも多かったのである。きつとこの場合も、障子かなにか開いていて、通りがかりの巡査(當時は邏卒と言ひ、サーペルはなく六尺棒を持って歩いた)の眼に映ったのであろう。しかし屋内の裸体は罰する規定がないのだから、だまって見逃すか、せいぜい注意するのが当然である。それを拘引するのはすでに非常識で、ここにも明治政府の官権万能主義がある。

だが、丸裸で往来を連れて歩くに至っては非常識だけでは説明

できない。しかも記事にあるように、説諭のあとで着物を与えているのだから、着物は持っていたのだ。それなのに、着ることを許さなかったのだ。

たぶんこの人妻はまだ若くて美しかったのだろう。恥を曝した以上は夫に顔を合せられないから死ぬと言ひ張る位だから、羞恥心のつよい若妻だったにそういない。この推測を押しひろげれば、まさか往来から丸見えのところ裸でいたのでもなからう。ことによると巡査が隙間見て、官権濫用の口実にしたとも考えられる。彼は着物をきてはいけなと命じ、その着物や腰巻をじぶんが抱えて、女を縛り上げ(當時の拘引は女でも縛った)、先に立たせてそのすつ裸の姿を存分に凌辱し楽しんだにそういない。また彼女に着物を返したのは釈放する直前だから、警察で勝手なお説教をならべている間、彼女は裸体でその屈辱を耐え忍ばねばならなかったのである。

このように女を裸にして辱しめるサディズムはのちにも出てくるが、巡査の場合は縛ることが出来たのだから大した役得だったといえよう。

陰陽共に用を弁ず (六、一〇、二三、東京日々)

「世俗^{フタナリ}二生と唱ふる者往々ありと雖も、多くは二物其用を為さず、不犯にして生涯を終れり。然るに二物能く其用をなし、今日耳順の寿をたもつ者あり」とという書き出しで、男女両性の例をのべている。

長野県下信濃国埴科郡下戸倉宿の坂井小五郎は本年六十三才だ

が、子供のころはトサという名で、女として育った。十九の年、更級郡塩崎村から婿を迎えて夫婦となり、同棲生活三年におよんだが、廿二才のとき離別した。そのころから性の転換がはじまった。髪を切り、男装し、同郡杭瀬下村の円作という百姓の娘と通じて妊娠させた。幕末のころに中之条の庁で男か女かの裁きを受けたが、結局ハッキリしなかったらしい。その後、同郡力石村山崎丈右衛門の娘トラと結婚し、慶応三年にその妻が死んでからは



田喜太郎は、お花という妻との間に子供が二人あった。安宿に根が生えて動けない位だから商売も思わしくなく、とうとう十円の借金ができ、日夜責められる身となった。そこで同じ宿にいる甲州人の三ツ井染次郎という男に、その十円の借金の肩代りして払ってくれるなら女房を進呈すると持ちかけたところ、日頃からお花の美貌に欲情をそそられていた染次郎は、よろこんでその相談に乗ってきた。

ずっと独身でくらしている。ただしその間に同宿中村屋卯情次の抱娼妓を根引したこともあるというし、一方ではいまだに彼を女とみてトサと呼ぶ者もある。

この性の転換は、私は服装上の興味からヨーロッパの例を集めたが、それには今日の医学からみても解釈のつかないものがある。しかし純粹の両性具有は世界的にも極めて珍らしいので、ここにあげた例はたぶん男性なのだと思う。妊娠させることはできたが、妊娠しなかったこととわかる。ただ肉体上の問題よりも、三カ年妻としての生活を耐えねばならなかった心理的問題のほうが私たちには興味がある。

十円で売られた妻

(六、四、一八、読売)

内藤新宿南町の旅人宿にずっと住んでいる吉

みじめなのはお花である。男同志の乱暴な約束に死ぬほどおどろいて、どうかそんな気狂いじみたことはやめて下さいとたのんだが、聞き入れる喜太郎ではなかった。彼女は涙にくれながら従うしかなかった。染次郎は舌なめずりして、この哀れな犠牲を公然とじぶんの寝床にひきずりこむことに異常な興奮をかんじた。ただのよろこびではない。彼女の知らない約束の下に、彼女が従わざるをえないということに、残忍な征服慾の満足があったわけだ。封建の蛮風がまだ根を絶たない明治初年のことだから、夫が妻や娘を売り飛ばしたりするようなことはまだあった。しかし同じ屋根の下に二人の男性が住んでいて、一方から一方へ商品のごとく譲り渡されるということはもつとひどい屈辱、凌辱である。男たちは毎日顔を合せ、挨拶したり話しあったりする。「どうだい、うちの女房は？」「うん、なかなかいいよ」というような会話もお花の耳に入る。そのたびに彼女の胸は恥づかしさと悲しさでいっぱいになった。

ところが染次郎は女欲しさに借金を引き受けると約束したものの、イザ自分のものにしてしまえば正直に払う気持はない。そうなる借金取りは依然として喜太郎を責める。もともと口約束であつてみれば、彼は債権者を拒絶することができない。それやこれやで床についてしまった。ばかげた約束をしたために、美しい妻はひとの物になる。債権者には責められる。その上薬代にも困ることになったが、さてまた悪党の染次郎を相手に大喧嘩する勇氣もなかった。その悶々のはけ口は、結局かよいい犠牲に向けられた。

あるとき、お花が返事をしないというので、喜太郎は彼女を責めた。「私はもう、あなたの女房じゃありません」

「なんだと！ きさまはそんな冷たい女か。今までさんざ世話になった男に、口ひとつきけねえってのか」

「だってあなたは、いやだと言うのに私を売ったじゃありませんか」とお花は涙ぐんだ。

「その男が、どうして私に用があるんです？」

「ようし、その生意氣が言えねえように、折檻してやるから覚悟しろ」

おどり上った喜太郎は、逃げようとするお花を押えつけると、有り合う紐でお花を縛りあげた。それから小刀をもってきて、乳房をちくちくと突きはじめた。隣室の染次郎はさつきからの会話を聞いているのだが、止めようとしなかった。嫉妬まじりの先夫の折檻が面白いのである。だから病み上りの喜太郎がお花をねじ伏せて、丹念に縛り上げるまで、知らんふりをしていた。ところがお花の絶叫があまりひどくなったので、のぞいてみると乳房から血が流れている。そこではじめて騒ぎとなった。

「大さわぎになりましたが、末はどう方がつきますか」という言葉で新聞記事は終わっている。

「紅血欠皿」の興奮 (八、四、一七、東京日々)

「紅血欠皿」は河竹黙阿弥の作品でも最もサディズムが露骨に出ているが、それだけに現代ではまず絶対にお目にかかれない芝居である。私が知っているのは慶応年間に沢村田之助が欠皿になっ

たことと、ここで掲げる明治八年四月の中島座（蟻殻町）の上演だけで、このときは国太郎がヒロインの欠皿をやった。誤解をさけるためにおことわりしておくが、本誌で伊藤晴雨氏にお訊ねしたのは、いつごろまでこの上演が許されたか、またその内容は果して原作どおりだったかを知りたかったため、私にはその点がわからない。先日ある劇団の演出家で歌舞伎に詳しい友人に訊ねてみたが、やはり満足した答は得られなかった。だがここに述べるように、少くとも明治初期にはこの異常な作品が公然と上演され、しかも庄巻の責め場がかなりの程度まで行われたことは事実である。

もしこれが現在上演されたら、映画で縛られた女優どころの騒ぎではない。それほど陰惨で徹底している。もちろん初めに濡場があり、最後は勧善懲悪でハッピー・エンドになるのだけれども、最大の見せ場は庭先で継母が下男や老婆と一緒に美しいう欠皿を折檻する情景で、ここに黙阿弥のグロテスクな趣味が最高度に発揮されており、あとに述べるように観客の興奮もこの一場に集中されるのである。

一々筋を語る必要もないが、簡単に説明すると継橋家の後妻片もひは実子の紅皿を可愛がり、先妻の娘欠皿を憎んでいる。その欠皿が、紅皿に添わせようと思っっている左近と恋仲のため、手ひどい折檻を加えられる。

縛られている欠皿は、まず好色の下男脚平に弄ばれる。どうせ責め殺されるのだから、その前に自由にさせろと言って抱きついたりする。無抵抗の欠皿は身を悶えて悲鳴をあげるしかない。こ

れだけでも観客の興奮は相当なものだが、それはホンの序幕にすぎない。継母と老婆のつめとが出場して、本格的な責めがはじまる。

継母は、まず脚平に割竹で欠皿を叩かせる。それから針を束ねて、美しい頬を突かせる。それも「痛からう痛からう、はじめのうちは痛いものだ」などという残忍なせりふが入る。それから左近と抱き合ったことを責めながら、手や足を突つきまわす。次に老婆が蛇をもってきて、左近を思いきったと言わなければ×に入れると迫る。欠皿が氣絶すると、好色の脚平がわざと口うつしに水を飲ませてよみがえらせるのである。

美しい欠皿が無惨に縛られて次から次と淫虐な責め苦を受け、泣いたり叫んだり許しを乞う姿や、ゆるゆるとその折檻を楽しむ継母や老婆や下男の言葉と表情が、蠟燭の灯に照し出された陰影ふかい舞台にどれほど息づまるサディズムの世界を現出したかは想像にかたくない。だから次の新聞記事のような事件も起きたのである。少し長いが全文を写しておく。

「蟻殻町中島座の芝居は、此たび紅皿かけざらと云う狂言を仕組しが、初日より大入にて、土間さじき売切れ申し候の札をかけず程の勢なり。国太郎のかけ皿、さすが大芝居のおやま申し分なしと、昨日の報知新聞に一文字屋が誉たる如く、なかなか上出来のよし。一昨十五日は殊に大入なりしが、彼の継母が下男のすね平に云ひつけて、かけ皿を責めさせる様子の、さも憎く憎くしく実に見るに忍びざる程なりしが、土間に見物して居たるは、組の鳶の

者が、忽ち目を怒らして、何ぼ狂言でも余りな事をしあがるから、己が承知しねえと立あがりて舞台のうしろへ廻り、拳を握り固めて彼の下男すね平に出立たる中島路鳥が楽屋へ入るを待合はせ横頬を力に任せてウンと云ふほど打擲ッたりしかば、路鳥は驚いて倒るゝ処を、猶も打んと拳を握り掛りけるゆゑ、コリヤ大変と人々寄り集りて、漸やく取り鎮めたりとぞ。其芸の妙に入りたる、遂に飯を認めて、真と為すに至る者も昔より少からず。此驚助路鳥がすね平も余りよく出来たから、此拳を一ツ頂戴したるか、又は此驚人足も前号に記したる伊予の国の芝居で、平右衛門の女房が舞台へ押し上りて、亭主を引き立て連れ帰りし如く、只その当人の了見たけの心底より感発したる物か、何れにしても一笑話なり」



初犯料再犯料

(九、八、二八、東京日々)

名古屋の飴屋町という名前からベタつくが、その米屋の栄吉という男は、橋町の吉倉利八の妻おかぎといい仲になった。その噂が利八の耳に入つたので、すつたもんだの騒ぎとなつたが、裏門前の桶屋が仲裁人となつて、こんど犯したときには罰金百円出すという奇妙な証書をつくらせ、その場はともかく納まつた。ところが今度は女のおかぎのほうに盲い米の味を忘れかねてか、またまたヨリが戻つたので、利八も負けぬ氣を出し、じぶんの妻より年増だがまだ色香も失せない栄吉の女房に手を出した。そこで再び悶着が起り、桶屋がまた仲裁に入つて証書を書き直させた。それは、済んだことはともかく、この後不了簡を出したときは、栄吉は再犯だから二百円、利八は初犯だから百円の罰金というのだつた。

明治九年のところに百円や二百円がそう簡単に払えるものでなく、いくとも逡巡してはいくとも証文を書き換えるのだから、お互いに罰金の形で納得することと、初犯料再犯料を分けたところが面白い。

お客を丸裸 (一一、二八、郵便報知)

明治十年十二月廿一日、浅草駒形四四の呉服屋、松屋幸七の店に、わかい女が小娘(女中)をつれて買物に来た。半襟や小切れを出させて見ているうちに、豊吉という手代が、「いままでここにあつた半襟が見えなくなった」と言いだした。

するとその言葉を待っていたように幸七は、「お前さんが盗んだのだろう。早く出せば許してやるから出なさい」とその女に言った。彼女は無礼な言いがかりにむっとしたが、荒立てれば嫌疑を増すばかりだと思つて怒りを抑え、しずかに弁解しかけたところ、半ばも言わず、「強情を張るなら裸にしても出させてみせる、それ豊吉改めろ」と命令を下した。

たちまち落花口ウゼキである。白昼の店先で豊吉は必死に抵抗する女を抑えつけ、帯をとき、着物をぬがせ、最後に腰巻まで取つて素っ裸にしてしまった。だが盗らないものが出る筈がない。こうしてストリップを十二分に観賞してから、「あ、旦那、ここにありました」と言つて、店の片隅から無くなった筈の半襟をとりだしてみせた。

さんざん羞かしめられた女は浅草西三筋町のわが家に戻つて、

このことを夫の広川真太郎にうちあげた。真太郎は憤慨して近く of 分署に訴え出たので、事件は公けとなつた。松屋主従は呼出しを受け、取調べの上、この年(明治十一年)一月廿六日に判決が下された。それによると、主人幸七は懲役三十日分の贖罪金二円廿五銭、豊吉は指図を受けたので一等を減じ懲役廿日分の一円五十銭ということになっている。

その後の例などみるとわかるが、万引嫌疑で女を丸裸にすることはよくやつたらしい。そして実際に盗んだのでないことが明白になつた場合でも、ほとんど罪にならなかつた。右の例でも、二円廿五銭と一円五十銭の罰金はあまりに安すぎる。たとえば同年四月に築地明石町に開いた英人ガンプルの女学校の月謝が二円五十銭なのと比較すれば、まるで罰金とは言えない。結局は人権、というより婦權がほとんど認められなかつた(女の角力見物がみとめられたのは明治十年)からで、万引の疑いを掛けられれば裸にされてもやむをえないという、漠然とした氣持があつた。だから後世の白木屋の例のように、抗議してもうやむやに終つてしまひ、結局は泣き寝入りとなる。こうしたことがまた悪習を助長させ、引用例などでは明らかにサディズムが見られる。その外にもわかい女を裸にして罪にならないとすれば、万引嫌疑が口実だつた場合が意外に多かつただろう。

(つづく)

懸賞

告白と手記と体験

入選

ギブスとコルセット

徳

山

始

私のサディズムの最初の萌芽——それを述べるためには、十二才の少年の思い出に遡らなければならない。

当時、私は脚に腫物ができて、京橋にあったN病院に祖母につれられて通っていた。整形外科で有名であったその病院の診察室で、私は私の半生のサディズムに決定的な影響を与えられた奇妙な風景に出会したのであった。

というのは、待合室で私は診察の順番を待っている、やがて看護婦が私の名をよび、私はこんどは衝立の蔭で看護婦から脚の繃帯を解かれはじめたときであった。私の目のまえに年の頃、十八、九と思われる娘が、おず

おずと肌着を脱いで、医師のまえの回転椅子に腰掛けたのであったが、彼女は頸から腰にかけて剣道の胴着のような、白いセルロイド製の鎧のようなものを着ていて、処々に革製のベルトがついており、金属の留金のようなのが彼女のからだを締めていたのであった。それはあとで祖母の説明によってわかったのだが、背椎の弯曲を防ぐための背椎カリエス用のコルセットであったのである。

看護婦がその娘の胴を締めていた皮革のバンドをほどき、胸から腹部にかけて交互に締めてあった紐をほどいて、その亀の甲のようなギブスを外すと、少年の私の眼にも異様にうつくしく見える白蟻のような処女の裸身が

眩しくあらわれたのであった。

医師は、やがて彼女の背骨を二、三箇所指で叩いたり、圧えて、痛むか、どうか訊ねたが、その娘は

——いゝえ、ちつとも、と答えた。

——すっかり快くなりました。この分ならもうギブスを外してもよいでしょう。

とこんどは医師が云った。すると意外にも娘の表情には不満の色がかすかに漂って、

——本当ですの、先生。私、つまらないわ。

私、いつまでもコルセットはめていたいんですの。だってはめていると体がきゆうっと締めつけられてとても気持がいいんですもの。外すと他人のからだみたいに頼りなくて。で

すからまだ当分はめていてもよろしいんでしよう？

あきらかに、その娘は媚態をあらわして、あまい声で医師に云った。

——はめていたければ、結構ですよ。要心深いのに越したことはありませんからね。

★

この娘の言葉はその後、二十年の歳月の流れた日のちまで、妖しい魔女の呪いの言葉のように私の脳裡から離れなかった。

私はその日から背椎カリエス用のギブスに異常な関心を持つようになった。

三十才になって私は親戚の世話で見合結婚をした。ただ一度の見合で私がよしと決めたしまったのは、親戚の家で合わされたその娘の、大きな潤んだような瞳と、襟もとの抜けるような白い肌が、二十年前病院で会ったあのカリエスの娘とどこか似た面影があったからであった。

結婚の翌年、大太平洋戦争がはじまった。臆病な私はすぐに妻の実家の静岡に疎開し、終戦の翌年、東京に帰ってきた。

私の家は運よく焼けず、祖父の代からの土地もあったので、戦後のインフレ時代も、つ

ぎつぎ土地を手離してどうやら生き延びることができた。

ところで焼野原にいつか青い草の芽がふくように、平和な世が訪れると、私の少年時代からねむっていたサディズムが冬眠からめざめた蛇のように頭を抬げてきた。

ある晩、夜のベッドで、私になぜ私がいちどの見合でお前を生涯の伴侶と決めてしまったかの理由をゆっくり話した。そして私はお前のように瘦せた色の白い女に、いちどむかし病院で見たカリエス用のギブスをはめてみたい。それは自分のようになんの才能もない平凡な男の唯ひとつの夢だと告白したのであった。

妻は私の告白に最初はおどろき、衝撃を受けたようであった。しかし私が諄々に話してゆくうちに、私の病的な嗜好を理解してくれたようであった。

私は急に妻に、無理な注文をするのも酷だと思つて、ながい準備期間——訓練期間を設けることにした。そして私のサディスティックな話は、いつも閨房で、妻の性的昂奮をたかめる愛撫と同時に行い、妻のマゾヒズム的傾向を促進させることと時間を合せて行つた。

最初、私は妻に、黒いサテンの布地を買つてこさせて、洋裁のできる妻に、彼女のからだにぴったり合わせて、布製のコルセットをつくらせた。それは背椎カリエス用のギブスの模型を真似て、頸から腰まですっぽり包んでしまうので、乳房のところは、二つまるくくり抜いた窓をつくり、また腹部のへんも円形にくり抜かせた。そして頸から胸、腹部の中央を切り開いて、デルタ地帯にまで、両側に小さい留穴をあけて、皮革の紐で交互に締めるようにした。胴には比較的中広の皮革のバンドをつけさせ、妻が苦痛を訴える程度に締めつけると、乳房のふくらみが、その反動でぐつと突出してくる。

妻は最初は、「窮屈ね」と苦痛を訴えたがなれてくると、自分の方から「今晚はコルセットはめてね」と要求するようになった。そして、昼間でも一日中はめているような日も多くなった。

そこで私は第二段階として、夏の日の夜、文房具屋からボール箱を買ってくると、それを熱湯のなかでドロドロにやわらかくして、それを、風呂場で素裸にした妻のからだびったりとくっつけた。それが乾くとこんどはその上から糊をつけた和紙を何枚も何枚も貼り

つけると、ちょうど洋裁師のつかうマスカンのような妻のからだの模型ができあがった。

和紙の乾いたところを、ハサミで切りとり、型を抜くと、こんどはそのうえにサテンの衣地を張って、また前につくった布地のコルセットと同様に乳房と腹部をくり抜いて窓をあけた。

これでどうやら、本物のカリエス用ギブスに類似したものが、わずかの金でできあがったのだ。

それができあがると、私は残酷にもそれを昼間でも着用するように命じた。

夏のあいだは、発汗のため妻も辛いようであった。第一、汗でボール紙がゴワゴワに崩れてくるおそれがあった。そこでこれは妻の発案で内側に芯を入れ、もう一枚布地を張って、所々、汗のでるような小さな穴をあけた。それでも妻の肌にはあせもができた。ところで夏の薄着、たとえばナイロン・ブラウスのようなものと、コルセットが外部から透けてみえるおそれがあった。そのためコルセットのうえからどうしてもシユミーズを着けていなければならず、薄衣をつけられないのが妻の最大の苦痛であったよ

うだ。

歩くとき妻は、胸を、腰をつんと張って歩かなければならず、近所の人と会っても腰を折って挨拶できなくなった。妻はひそかにその苦情を訴えた。私は、「自分はいまカリエ



ス用のギブスをつけているから」と云えばよいと云っておいたが、事実、しばらくして私は近所の者と会話している際に、「お医者さんにみせたら背椎が悪いというのでギブスをはめているのです」と話している

声を耳にした。

それからまた私は、いかにも善良そうな隣人が、「ほんとうにお気の毒に」とか、「お大事に」とか同情に満ちた声でそう云っているのを耳にしたとき、私は私の罪の深さを感じた。

私はまた妻に対して大へん済まないという気持ちから、コルセットをはめている日には、とりわけ優しくした。その気持ちが妻にも伝わったためであろう、妻も、

「あなたが優しくして下さるから、どんな辛いことでも、我慢するわ、いゝえ、かえって残酷なこととして下さるのが嬉しいの」

妻は、いつのまにかマゾヒストになったのだ。

★

ところで嘘からでたマコト、という言葉がある。

それはいつの日からか妻が腰が痛むといい出した。私はそれをコルセットで腰を締めすぎた

のかと思ったが、あまり苦痛を訴えるので近所の医師に見せると、神経痛かあるいはカリエスかよく判らない。どうもカリエスかも知れないから、万一の場合を願慮して、ギブス

を使った方がいゝでしょう、ということであった。

私は医師から、診断書を作って貰うと、知合にギブスの職人がいるからと嘘をついて、

当時K区にあったギブス製作所へ直接でかけて行って、病院より低廉でつくってくれるように頼んだ。職人は事実、病院より二割方安く引受けてくれた。

「明日、奥さんをおつれして、今日の時刻にいらっして下さい。石膏で型取りをしますので部屋をあたたためて置きますから」

翌日、私はまるで本物の病人のように蒼ざめた顔をした妻をつれて行った。

四畳半位の板敷の部屋は湯気であたためられていた。職人が、木製のベッドを指差して、

「ではそこに着物を脱いで」というと妻は、見知らぬ職人のまえで素裸になることに、羞恥をいっぱい見せて、それでもやっと観念した様に帯や紐を一本一本外して行った。その姐板の様な木製のベッ



ドのうえに、うつむきに寝かされた。

職人はきわめて職業的な、なれた手つきで、石膏のついた布地を妻の頸から腰にかけて一枚一枚重ねて貼りつけて行った。

しばらくすると妻のからだは、パーマメントの髪をちぢらした頭と、両腕、両脚をのこしたまゝ、石膏でかためられて行った。

そのあいだ私はえたいの知れない昂奮に悩まされていたが、妻はじっとつむっていた眼をときどき開き、いかにも悲しそうな、それだけで喜悦に満ちたような表情をして私を見た。

一週間程すると妻のギブスができてきた。それは二十年前、私が病院の診察室で、若い娘がつけていたそれより素晴らしい出来栄えのように思われた。

私はそれを、密閉した洋間で、花嫁に着せる衣裳のように、はだかにした妻のからだにじかにはめ、胸部の空いた窓から、乳房を摘み出した。

——どうだい、いゝ氣持かい？

——えゝ、とても。からだがきゆうと緊締つるようで、とてもいゝ氣持よ！



★

その日から妻は本物かニセ物かわからないカリエス患者になったのだ。彼女は入浴のときとか私の許可を得ないかぎりギブスをはめたまゝお勝手の仕事をする。洗濯だけは外に出す。

夜はギブスをつけた妻と街に散歩にでかけお茶をのむ。

最後に、私と妻との夜の饗宴について告白しよう。私は少年時代から風邪をよくひき、そのため湿布のための油紙となじんできたが、その油紙の匂いに異常な昂奮を感じるようになった。それで私は、サディスチックな嗜好の一つとして、油紙を何枚も重ねて、彼女の顔と合わせて、目と口だけ開けた仮面を作り、それをすっぽりと彼女の顔にかぶせてしまう。それから、洋間の室——それを私たちは愛の部屋とよんでいるが、その部屋には青い電燈がついており、天井の横に紐

を張つて、そこには蚊帳のつり手につかう金属の環がぶらさがっている。

そこに私は両手をあげさせた妻の手頸を環につなぎ、両脚のあいだを開かせる。

油紙でつくった、仮面をかぶり。コルセットにからだをしめつけられた妻の、世にも哀れな姿が、そこに丁度、キリスト教徒受難の絵巻のように現われる。ときには私自ら耐えられないような自己嫌悪におそわたるときもあるが、そのような妻の姿に殉教徒の崇高な天使の姿を想うときもある。

私はこのような残酷なサディズムの犠牲に供せられた妻に自らの罪悪感と同時にたまらない憐憫を感じ、まえにも増して愛情を感じるのだ。天井から垂れるビニール紐に吊られた妻が、コルセットにつけられた金属の留金を、青い燈火に光らせながら、哀歎にみちたうめき声を発するとき、それは私に対する最大の愛の言葉ともとれるのである。

私は自分の妻を、他の誰よりも愛しているつもりである。そして今後も永久に愛してゆくだろう。

(おわり)

きもののシリーズ

『浴衣草紙』

白 金 紅 次

『当分御厄介に成ります。よろしく……』と手廻品を部屋に置くと

『さあさあ、どうぞ、本社の方からは通知が参っておりますから、氣永に御ゆっくりどうぞ』

屈託氣もなく五十がらみのお神さん風の女が挨拶した。実はふとしたはずみに左足をベルトに噛まれ、そのあふりを食って転倒した時、旋盤の坐金の端で大腿骨にひびが入ったらしく、自分でも大した負傷とは思わなかったが幸い会社の寮があるから其処で療養して来いと命ぜられて、三週間の暇を貰い、東京

に程近いとある温泉場——と云っても、ちよつと大尽小尽の行くところとは違つてさゝやかな療養本位の湯の町に到着したのである。

同僚としては会計の田宮さん、発達係の井の倉さんの二人、いずれも胸や手の骨折のために私同様療養中との事で、お蔭で賑やかになったとつまらぬ歓迎会などを開いて呉れたのであるが、独りポツネンと東京の街を離れる事はなにせ辛かった——と云うのは内心係長としての責任もあつたろう、しかしとまれ当分工場を離れて専心療養しなければならぬい、ゴロリと部屋の真ん中に横になって少々

お粗末な天井のふし穴を眺め乍ら、これから先の日程をぼんやり考えていたがこの際、柄にない読書は却つて身体に毒だし、さりとて毎日ぶらぶらするのは袋張りや縫い物をやっている女房の敏江に済まない——ので来て早々杓子定規にきめるのもどうかと思つたが、当分将棋や囲碁で独り楽しんでその内、具合を見て少し宛足ならしに散歩に出掛けることにひとり決めて一服していると、さっきの寮のおばさんがやって来た。

『なんせつまらぬ処でしよ、何んにも観る処もないんですよ。このあたりは昔からの町

で、ええ、でも大分家が建ちました。あの川から向うが新町です。花柳界？ 芸者さんもあるんですよ、こんな町でも、ホホホ、でも皆んな地の人許りですから、顔馴染みで、サア？ 少しはお客さんもあるんでしょうね、そうですね、東京のお客さんと云うよりは商人やこの下の方で草競馬のあるところが一番賑やかですよ、宿屋ですか？ このあたりに四五軒とあちらに二三軒ですが、それっきりですから、まあ湯治場と云うんでしょうね』

そう云えばこの寮の隣りは古めかしいが旅館風な湯治場の造りである、ただ松や常盤木で鬱蒼としているから何処に湯殿があるか判らないが、華やかな温泉場と違って雅趣のあるのもまた今の私に取っては一興となろうから——で取敢えず先ず治療本位に寮の施設を充分活用する傍ら、さき程定めた通りの将棋盤をおばさんに買って貰うように交渉するなど、二三日は何と云う事なく過ぎて了った。

朝起床して食事を済ませて煙草を一服つけて、などと書き出せば小学校の夏休み日記みたいななるが私の性分として最初気にかゝった印象はどうもそのままで放って置けないのでそれとなく心の半分は隣近所辺に配られていた。それは寮に来て二日目の夜、それも

雨が降り出して夏にしては少々涼し過ぎる、こんな晩は早目に便所でも済ませて寝るに限ると部屋を出て曲りくねった廊下の一番隅の便所に行く途中——講談で云う、いわゆる女のすゝり泣きを聴いたのである。

昔、上野の寄席で娘浄瑠璃を聴いたことがあったが、それは勿論言葉の綾を多分に織り込んでの泣き声で、どちらかと云えば三味線にテンポを併せての華やかなものだった。また滅多に見ない芝居にしろ、発声映画になった活動写真の場面だって、俳優やスターの泣き声には自ずと型があるもので、真に迫った声だと思っても芝居気が抜け切らない憾みがある。

処がこの声——今晚聴いた声は一事に斯うだとは云えないが少々違うのである。文学めいた言葉で表現するならさしずめ怨むが如く訴うるが如く、それでいて心の底からこみ上げて来る悲しみを雨に消されて、或は細く或は太く杜絶えてはまた起る——と云った風で片耳をたてて廊下に突立つたまま、雨水のかかるのもかまわず、小半刻を過す緊張した私の頭の中は次第に何か猟奇めいた物が湧いて来た。『おばさん……』と口を切ったのは翌朝掃除に来た時を擱えての声であるが、

『何か変った事、心中でもあったんですかねエ、夕べ妙なうめき声を聴いちやってね、一晚中寝られなかったよ』

この卒直な問は、また頗る卒直な返事を以て、もつともあとで判った事だが、おばさんの顔に半分奇を好む如く、半分困るんですよと云わぬ許りの表情が……

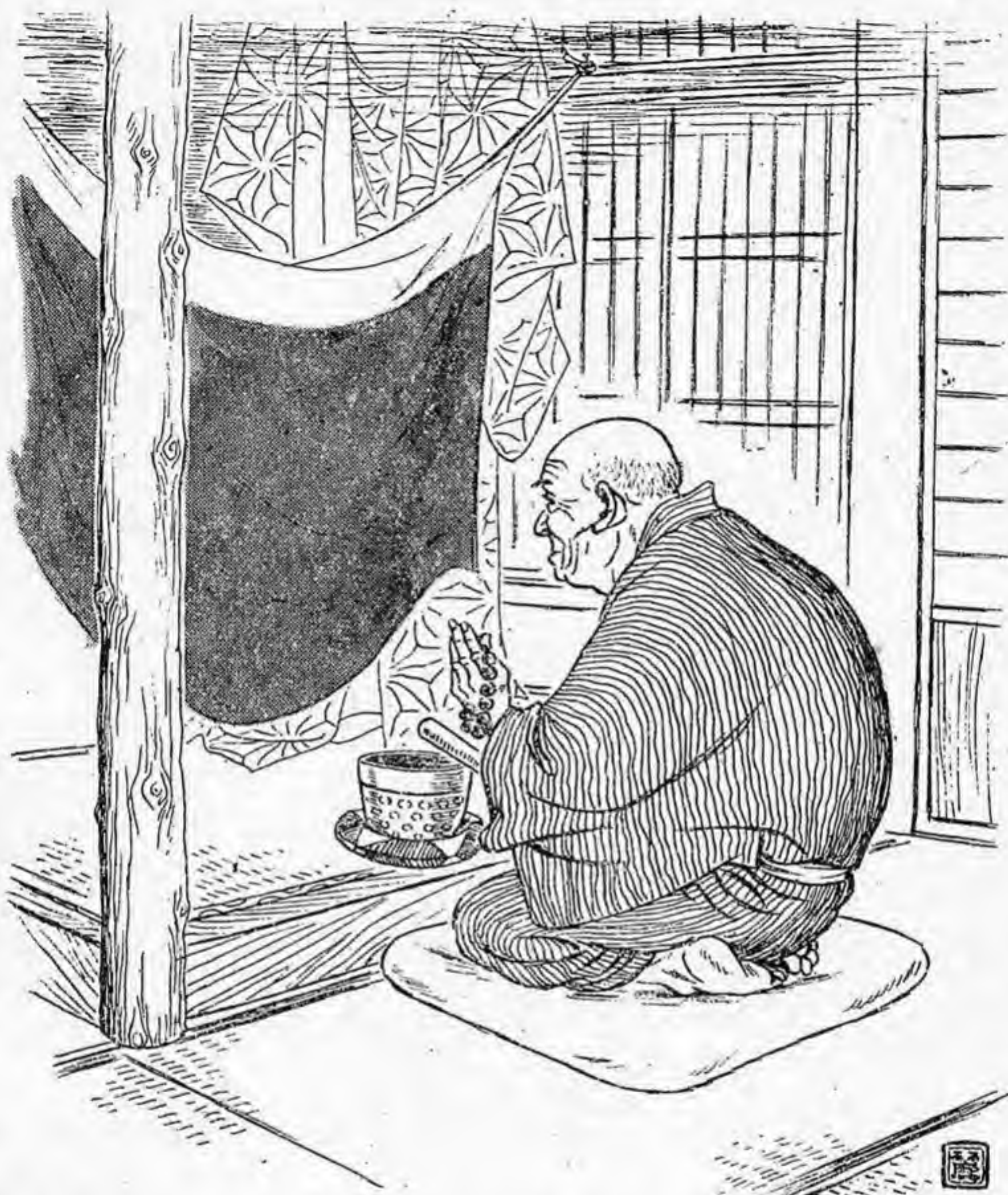
『聞こえましたか、時々なんです、いえね、お化けでもなんでもないんです、女中苛めなんです、あの御隠居さんの仕草でしてね、やっぱり若旦那に委せて置けんのですよ。この間なんぞも……』

『女中苛め……て何んですか？』

『まあ何んと云いましうか、宿で使っている女中が粗相をしたとか何とかで大旦那、つまり御隠居さんが癪癪を起して女中さんをおこごと云うんです、それがまあ度を外すと泣いたりうめいたりするでしょうな』

『じゃ、早い話が嫁苛めみたいなものが他人さんの女中諸君にとばちりが行くと云う事ですか、それにしても、あの声を聴いちや初めての者はびっくりしますよ、それで一体隣の宿屋にや、何人女中さんがいるんです？』

『ええと……お米さんにお留さんに……それ



から最近奉公に来たなんちう名前でしたか、おきんさんかおきぬさんとかいう女中さんの

三人…まだ若い娘さんみたいな人許りで、こちらにもちよくちよく顔を出すんですよ。そ

うですね、別に泣き事も云っていませんでしたよ。ですが、そうそう苛められちゃ困りますね……』

私は何んの為にあんな声を出すのか、出すからには一体何をしているのだろう、などを先ず詮議しなけりやただ話を聴いたって面白くもかいくもないから、

『でねエ、おぼさんなんか古くからここに
いるんだから、それに隣りなんだから十っ
べんに一っぺん位はやってる最中にぶつか
る事があるだろう。毎晩でもなさそうだが
……』

といささか誘い水をかけた。どうせ地の人でもなし、一通りの療養が済めばまた会社の方へ引上げて行くんだからと思っただろう、おぼさんは時々私の顔の色を窺うようにして漸く喋り始めた。その概略は斯うである。――

古い湯の元の掘り返しか何かやって温泉と街道筋の旅籠屋から今の旅館「久の家」にまで盛りあげた大旦那が、潮時を見て伴夫婦に店の経営を譲って自分は専ら後見人となり離れの隠居部屋に起居、毎日かどうかは判らないが店の方には暇に任せて顔を出す由、処がこの御隠居の連れ合い――おぼあ

さんが三、四年前亡くなるやあの歳で、と云つちや聞こえが悪いが奇行が始まったのである。しかしその奇行は不思議と春の木の芽時から夏にかけて起つて秋から冬つまり寒い季節は炬燵に引籠つて頗る好々爺だそうだと。

『ですからこんな噂話があるんですよ、今の若旦那夫婦が店を閉つてお寝みになる頃になるときまつて御隠居さんがいなくなるんですよ。つまり臥戸の穴から覗き見るんですよ、それを後になって今のお嫁さんがもっとも賢い人だから口に出さないが、とても困つておられるとききました。そうそうそんな事より前に、去年でしたか、朝お嫁さんが、よくあるじやありませんか、手拭を姉さん冠りして裾をはしよつて部屋掃除の絵なんぞが、その掃除をやっている間中御隠居さんは、ほこりの中で動かずにじつと一挙手一挙動を見てるんですって、その内、ホホ、まあ嫌やらしいじやありませんか、お嫁さんの脚にかじりついちやったばかりか、赤いお腰し諸共抱え込んで離さないんで、お嫁さんはびっくり仰天するし、本人はそれこそ年寄りの一筋頑固さでお腰しの上から股の中に頭を突込むばかりの氣勢い方、ただそれだけであとはケロリとしているんですって、もう歳ですもん

ねエ。きつと昔のおばあさんと暮した頃でも億い出してあゝするんだらう、って近所で話してるんですよ、そうそう、こんな事も聞きましたよ……』

『床の間に女の浴衣と赤いお腰しを張つてその前でお経を読んでるんですって、おかしいじやありませんか、おばあさんが生きておられたら、気でも狂つたかと打たかれる処ですよ、ホホ、』

そう云えば新聞小説で誰かの作で「旋風時代」と云うのを讀んだ事があるが、この中に出てくる爺さんも確か女の腰巻を無性に蒐めたがつて釈放された一人だ。してみると奇行というのはその事かと思つていたら、どうもそれ丈ではなさそうで、どうやら春から夏にかけての行状記は、可なり進展している模様だ。だからそれから先きの話は突っかかり突っかかりして

『つい二三日前でしたかお米さんが、おばさん腫れてるでしょう、痛くって痛くって。どうしたのよと聞くと云わないんですよ。御隠居さんが変つてゐるからおこごとも貰ったんじゃないかい？ ううん、ただ苛められたの、って手首の処が皮がすれて紫色になつて——随分ひどいことをあんた達にするのねっ

て云つてやつたんですよ』

『じゃ何か特別変つたやり方、それこそ少し氣違ひした事でもするんじゃないかなあ』

『さあ、見てませんから判りませんが、きつとそうなんですよ、そのお米さんの話によると……』

『女中さんでも素裸にしてですか？』

『いいえ、そんなじやなくて、つまり、今だからこいらだつて夏は浴衣でしょう、ちやんとお太鼓帯結んで女中さんは働くんですよ、だからさっきのお嫁さんの話のように——きつと具合が悪くなつて今度は女中さんに手を掛け出したんですよ、お前の今日のしぐさはありや何んだ、そんな事で奉公が勤まるかつて、それこそ隠居部屋でお説教だらだら、これだけ云つて判らなきや性分をたゞき直してやるって、いきなりお米さんの浴衣のきものに飛びかかつて、ハイ、どなたッ、只今、御免なさい、誰か来たようですから、一寸失礼します。』

惜しい処で来客か、魚屋に阻まれてそれからさきは中断されたが、兎も角大体の目星はついた、凡そ人間の心理を解剖すると何もこの御隠居に限った訳でもなく男が女の、女が男の相互に求めるものを何らかの手段に訴

えて満たさんとする欲望の現われがあまねく世相一般でなく、ほんの身近な限られた天地において演じられる、一種の性的遊戯かなどと、判ったような判らないような割り切れなさでいると、また無聊な夜が訪れた。型のように晩めしは田宮さんと井の倉さんの三人で四帖半の茶の間でやったあと、

『如何です？ もうお慣れになったでしょう、えゝ、お蔭様で私の方は大分よくなりました。早く会社の方へ復帰しないと困るんですよ。みんな忙しがっていますからね、えゝ悲鳴？、サア、どうですが、そう云えば、隣りですか、ありや、時々聞えるようですね、まあ何んか喧嘩でもしてるんじゃないですか、私等と違って派手なお客さんが宿泊りしていますからね、気にしないでもいいですよ、それよか花札でもやりましょうか、ハハッハッ……』と屈託もなく笑う。

ふだんなら、うさばらしに土地柄を利用して花札はおろか一杯屋に出掛ける処だが、滞在の理由が理由だけにそうは行かない。さりとてこっちが御隠居さんに化けて女を呼び寄せて悪ふざけをする程老けていないから部屋に戻って所在なく膝小僧でも抱いて寝転がっていると、突然隣りの植込みのあたりから、



『だから、嫌か……』

に交って人の地面を走る音、ドタンと何か倒れる音がしてしばらくの間何も聞えない、その内何か薪でも手折るようなピシッピシッと云う音がしたと思うと、例の女のすすり泣くような声が洩れて来た。私は乱歩の小説じゃないが噂がいよいよ始まったな、これは何んとしてもその現場を確かめなけりや、ひびの入った身体を承知の上で咄嗟に出窓から、はだしのまま下に飛び降りた。だが夜で勝手が判らないのを、大方この見当だろうと手探りでびっしり植木で樹て込んだ垣根に沿って二三間行くと少し疎らな処に出た。身体を入れようとしたら、ひいらぎの葉で顔を刺されたがかまわず、へいつくばって這うようにして中へもぐり込んだ、その途端、ほんの目のさきに私はかすかな部屋から洩れる明りに半分照らされて絢爛たる一幅の絵にぶつかったのである……。

其処は部屋——どうせ隠居部屋だろうが——の真横になっていて十坪許り私のいる処からは正面に見える処に、一本の曲りくねった樹、大方猿すべりの樹だろう、その樹の下部に支え棒の棒を利用して白地のきものの両股を開らかせ両手は樹を抱くようにいずれも細

引で手足を縛りつけ、しかも手の方は後ろ手に吊ってあるようにくくりつけられている、そして奇妙な事に女と判る頭からすっぽり馬穴を冠せてあって、胸から乳房にかけて食い入るようにかけてある細引を通して掃除用の座敷帯が立ってかけてあるのにはびっくりしたが、どう見ても少々エロ味を通り過ぎていささかグロ味がかっている。

成程噂さ通り、いや、噂以上の凄さであった。当の女は勿論三人の女中のうちの一人だろう、均整の取れた中肉中背の、おまけに小股が切れ上っていい女と云い度いが夜だから判らない。ただ唐傘模様の浴衣に朱の筋の通った帯を太鼓に結んでだらりと鹿の子の帯揚げが垂れ下って、白足袋のまま思切り左右に開らかれた両股の間からは真一文字に赤い腰巻が黒と赤の陰影を画いてなまめかしく覗いていた。

私はこの怪気じみた情景が次にどうなるか固唾をのんで処嫌わず刺す蚊に食われ乍らうづく右脚をさすり——陰忍持久戦に入る、探訪子また辛き哉である。その内、黒い影法師を縁側に落し乍ら、『どうじゃなあ』と問題の隠居が降りて来た。背中が曲って横からでは一寸せむしにも見えるが、なかなかどう

して老いて益々盛んな風態、テカテカ坊主の頭で二重になった顎をしゃくり乍ら

『どうじゃ、ちったあ、こりたか、ええ？』お留め、掃除が悪いとこの馬穴と帯がこの通り泣くんだよ、いいな、今晚はこれ丈けにしとくから、このわしの云うのが悪いか、お前の仕草が悪いか、よく考えて見い、サア、判ったらんべんしてやるから早くお帰えり……』

と嚴重に縛った縄目を解いてグロテスクな馬穴を脱がせ、軽くうなずいて衣ずまいを直す女中の手に帯と馬穴を持たせて母屋の方へ顎で行けと命じた？ らしい——前篇を見ないからどんな責め方をしたか判らないが、するとこのお留という女中と入れ替りに別の女中——斯うなればお米さんかおきんさんのうち誰かに違いなからう——が腰縄付で音もなく出て来たのには度胆を抜かれた。

私はこりゃひよつとするとこんな調子で夜が明けるぞと内心想ったが、持って生れた好奇心はそのまゝ這いつくばった私の身体を釘付けにして動かさない、えいままよと私は尺一尺、近づける丈近づいて横に這って庭燈籠の丁度陰になる松の根元の竹笹の中まで移動することが出来たが近づき過ぎて今度は頭も

あげられなくなった。だが声は眼と鼻だから手に取るように聴ける、いくら御隠居さんでもまさか隣の治療人が垣根を越して庭の中まで忍び込んでいるとは考えつくまい、幸い向うが高くして私の処が低いからと云う安心さも手伝って必死と聴き耳を立てたのである。

『おきん、さっきのお留めといいお前といゝ何んちうさまだッ、この間の仕置がまだ足らんというのかい、山田さんと云うこのわしが懇意にしとるお客さんでさえカンカンになつて怒つていらつしやるんだぞッ、有った物は何故跡を追つても届けないんだッ、黙つてりゃ猫ばゝしよと思つてる、けしからん奴だッ』

『いゝえ、違います』

『何んだと、それがこのわしに云う言葉か、わしを何んだと思つてゐるんだッ、仮りにも



奉公人じゃないか、このきものだって帯の一本、足袋、前かけ、たすきに至るまでこのわしのお眼がねであつちえた、早く云や貸衣裳だ、そのお前が締めてゐる、それ……』

と大入道の様な黒い後姿の隠居がさつと右に寄るとまともにおきんさんとやらの中腰の浴衣姿が現われる。

『何んだ、これはッ、こんなさまだから、お前の料簡が直らないんだッ』

『御隠居さま、あんまりです』

何処でどうしたか、何しろ早業でおきんと云う女中は立つ、隠居の黒い手がさつと拳つたかと思うとクルリと浴衣――多分柳に燕をあしらった粋模様だったと思う――の裾が後ろにパツと捲くられて夜目にもそれと判る、赤い腰巻が顔がえった。そのあられもない格好を（ニヤリと笑つたろう）

隠居はおきんさんの後手を掴んで押えつけ四つ足のようにな女の身体を曲げるや後向きにどんと馬乗りに股いだのである。

そして赤いお腰しの上から女の尻をパタパタたたき乍ら前へ、おきんさんにとっては

後ろへ後ろへと、進めッと命じたから後手に掴まれた両手は地面につくわけにも行かず、しかも、縄尻を取られて手綱のようにたぐられるので二三歩歩んだかと思うと隠居諸共横へどたりと倒れて了った。

『馬鹿野郎ッ、だから手前の尻はへなちよこだと云うんだ、洗いもせん腰巻なら脱してしまえッ、このわしを転ろばせやがって……』と隠居は立ち上るや平手で女中の頬をピシヤリと打った、嗜虐が高じて可愛さ余って憎さ百倍とはこの事だろう。

『かんにんして下さい』

と哀願する女の帯を解き、浴衣をバラリと開ろげた隠居は情け容赦もなく女の腰になまめかしく纏いつく真赤な腰巻をひったくつて、その場にたたきつけければ事が済むのを『この阿呆……めッ』



とおきんさんの顔の上から冠せて腰巻の紐でグルグル巻にして了った。女を責めるにしたら年寄だけに念が入っていやがると、私は半ば苦笑したが当人同志は真剣だから何をしでかすか判らない。

そうこうするうちに探訪する私の方が疲労して来たので惜しい処だがまたの時——必らずこの次もあると睨んでその場は引揚げたが、何故隠居が女の腰の物に拘泥し貸衣裳だと説教して、否、床の間に飾ってお経まであげるのか、しかも冬は一切手出しをせず好々爺として収まっている点、このいきさつ——謎を解かないうちにはこの話は残念乍らおさまりはつかないんだが、昔の生活風俗を充分識りつくし、その中に男としての生涯を埋めて、或る時は、裾の乱れに目を奪われ、或る時は数多ある紐の一本に至るまで耽溺すると云

書するものであらう。

『ねエ、男の人って女の薄物、浴衣だっていゝわ、とつてもいゝんだって？ さっぱりしているからなの？ あたしね、この間裏のおばさんと盆踊りに行ったでしよ、あの時、その時は押されていると思ったのよ、そしたら知らない男の人があたしのお尻撫でるの、氣味が悪くて悪くて逃げ出そうと思っても駄目なの、一杯でしよ、その内、お尻のこゝ、こんな処よ、キュッと爪のあとがつくように抓ったわ、口惜しかったからあたしもくると後ろを向いて、いけすかない人ね、って』

『と云ったら年寄りだったらう？』

『ううん、そうね、五十余りの人、へへッヘッと笑って姐さんの腰巻があんまり透けてるからさ、だって』

『まあそんな処だろう、いゝもんだよ、若い』

う、その身は既に青春にあらず、即ちあまねく性の赴く処、氣勢えども力なく、奔流遂に身近かに至ってうら若き夏の女中を責めるに至るか、それは曾って敏江と頃も同じ夏、縁日の帰り途、笑い乍ら話し合った事がその一部を裏

女の方はさ……」

『だって夏ですもの、帯は仕方ないけど浴衣にお腰しはするわよ、じやきつと赤いのが透けていたのがいけなかったのね、気を付ける

わ、家へ帰ってまで抓られちゃ割が合わないから、ホホホ、……』

これは余談ではあるが問題の爺さん——御隠居は八十二の天寿を全うして先年大往生した

そうである。天国に浴衣と腰巻が果して行つたかどうか、筆者は残念乍ら寡聞にして聞き洩らした。

(きものシリーズ第八話 終り)

継子いじめ

大村光子

私は物心ついた頃、戸数三十戸にみたぬ或る寒村の大村という家に養女に貰われて来ました。その家の養父も養母もまるで仏様のようによい人でした。しかし幸福は長く続きませんでした。

私が小学校三年の時に養母はふとした病で亡くなり、養父は私が六年生になった年に後妻を迎えました。その継母というのは、養父より二十二才も年下で未だ十八才でしたが、

仲々したたか者でしたのです。五つ年下の私を目のかたきにして、家事から百姓仕事迄私に押しつけてしまつて、自分はぶらぶら遊んでばかり居りました。人の良い養父は完全におさえられ、口出しさえ出来ませんでした。それをよいことにして、私は継母の「奴隷」にされてしまったのです。

小学六年を卒業すると、もう新制中学校には殆んど通わせて貰えませんでした。卒業式

から帰つた私は継母に呼ばれました。私は恐る恐る茶の間に行くと、継母はいつもの冷たい目でじろりと私を見ると、
「さあさあ、今日からはもうそんな洋服なんか着ているんじゃないんだよ、脱いでおしまい」と、せき立てるように云うのです。
「さあ、これを着るんだよ」と目の前に投げ出されたのは、一枚の筒袖の野良着と赤い腰巻だけでした。私はなんとなく悲しくなつて急に泣きたくなりました。

「脱いでおしまいというのが分らないの、又めそめそしやがつて」

継母は手にした煙管を振り上げました。私は恐さに夢中で洋服を脱いでズロース一枚になりました。

「それもとつてしまふんだよ」

私は初めて腰巻をしめて野良着を着たのですが、野良着はやつとお臍のあたりまでしかなく、腰巻は野良着の下にはみ出して膝迄ありました。その恰好が大変恥しく思われ、特

に学校友達に見られるのが、それはつらうございました。継母には妹があつたのです。それは私と同級生でそれはそれは意地悪い子でした。私が恥しがると余計悪童連をさそっていたずらをしました。

「やあい、赤いもの好きな山猿やーい」

子供達はそうはやし立てながら近づいて来ます。私は醤油の瓶をかくえて逃げました。子供達は追っかけて来ながら、今度は砂や石を投げ始めたのです。その一つが、しっかりと抱えた醤油の瓶に当たって、血のような醤油が地面に流れ出しました。私はあわてゝそれを押えようとしたが、流れ出す醤油は如何ともすることは出来ません。子供達は「わっ」と云って逃げ散ってしまい、私はただ一人、空になった醤油瓶を抱えて呆然と立ち尽くしていました。



割れた瓶を抱えた私は家へ入るなり、激しい継母の怒声と共に、髪をつかまれて土間に引き据えられました。

「このろくでなし、なんや、お使いもろくに出来んのかや、お前は手も二本、足も二本揃つとって、それでもしくじりばかりしやがって」

その怒声と共にそばにあった長火箸で私のお尻、背と容赦なく振りおろすのです。その上、上衣をはがれて腰巻一枚にされ、両手を縛りあげられて裏の柿の木の下に連れて行かれ、ぐるぐる巻きに縛りつけられてしまいました。

「一晩中そうしており」と継母は言う、と、どんどん家の中に入ってばたんと戸を閉めてしまいました。それからしばらくすると、「どこに縛つてあるんや」と、母と妹の声をすると、戸が開けられ妹が近づいて来ました。

「ほう、いゝ恰好やな」そんなことを云い

ながら、側へよって来て、「これ手かいな」「これ足じやな」とわざわざつねるのです。

そしてさんさんつねりまわしておいて、「お母さんはな、今夜一晩中許さんと云ってはるよって、せいぜい風邪引かんようにしいや」と、ばたばた家の中に駆け込んでしまいました。それから何時間経ったでしょう。寒さとひもじさに泣き疲れた頃、養父によって縄を解いて貰いました。

「光子、許してくれな、お前のつらいのはよく分つとる、辛抱してくれや」と、私の冷えきった体を抱きしめて下さったのです。

それから五年、私は「ごくつぶし」「ろくでなし」と罵られつゝ重労働を強いられ、打たれ、蹴られ、牛馬の如く追い使われて十八の年を迎えました。その頃から継母も、その妹も私を虐めることに興味をもつようになったのか、その度は益々激しさを加え、二人は私を虐めることによつて満足をおぼえているのではないかとさえ見受けられるようになりました。それについてはこの次にお話しすることに致しましょう。

(おわり)

マゾヒスト女性の告白

『私の切腹』

不破 和子

女腹切——花をも恥ろう、うら若き処女の身で、雪をも欺く色白の肌を惜し気もなく双肌寛げ、ふくよかな下腹へ氷の刃を突き立てる。パッと飛散る真赤な鮮血、その美しい眉を逆立て、苦痛にゆがむ口元をキッと噛みしめて、左から右へとギリギリと真一文字に刃を引廻し、返す刀で鳩尾から臍下まで縦一文字に切下げる。何と痛ましくも美しい情景でございましょう。此の上もない悲壮美と申しますか、その切腹の主人公が美しい処女であればある程、その美しさは素晴らしいものでございましょう。

私も女の身ながら、この様な女腹切によつてかもし出される悲壮美に、深い関心と興味

を持つ切腹マニアの一人女性です。毎号御誌に載せられます女腹切に関する盛沢山の記事、十一月号でしたかに載って居りました原桐咲代様の素晴らしい切腹の写真、そして切腹通信に寄せられました、同じ「切腹マニア」の人々からのお便り、どんなに嬉しく拝見致して居る事でございましょう。毎月御誌が店頭に出る日が実に待遠しくてたまりません。

かく申します私は、当年二十二才になった一女事務員です。何時の頃からでしょうか、私は切腹に深い興味を持ち始めました。そして今では単なる切腹マニアというより、「切腹によるマゾヒスト」に迄なってしまうました。それ故、御誌に寄稿なさって居られます

瀬川泰子様、信太容子様、川合伊都子様等の切腹記事を真似る迄もなく、今迄に自分自身で色々研究もし、実際に切腹の真似事もやって居ります。馬鹿な女、哀れな女とお笑い下さいませ。

私には先天的なアブノーマルな性癖がある様に存じます。でなければ、私の様に同じ切腹の真似事をするにしても、後程述べます様な度を過した、人が聞いていても馬鹿だなと思うだけではすまされない様な切腹の仕方はしないでしょうから……。

私はそもそも女学校の頃から、このマゾ的な傾向があった様に存じます。他人に自分の肉体を傷つけられ、その苦痛に悶えながらもそれに耐えるアブノーマルな快感——。この性癖は確かにあった様に存じます。勿論女学校時代、こういう事を実際に行つて経験したことはございませぬ。然し、人の話に依つて又は書籍に依つて、この様な快感を間接的に味わつたことはございます。即ち、昔行われていた種々の拷問、そして聞くだけでも身悶えする様な恐ろしい死刑、戦争による婦女子への虐殺等々。それ等は如何に私のアブノーマルな性癖を助長させたことでしょうか。その様な話を聞き、又は読む度にその主人

公と自分をおきかえ、そのアブな空想に浸るのです。そして人知れず三ツ又錐をわざわざ買って来て、夜、家人が寝静まった後、自分の部屋で裸になって柱の前に立ち、そっと錐の先でお臍にあてがって、その苦痛を味ってみる私でした。

私が聞いた話の中に、こんな話がありました。その主人公（即ち空想では私）は戦争に依って敵方に捕えられるのです。そして秘密

を白状しろと、責められるのです。その主人公は重要な秘密を知っているのです。その秘密をばらせば味方は一たまりもなく潰滅してしまいます。味方のために、身は一寸刻みにされようとも白状することは出来ません。女主人公（即ち私）はどんな苦しい責苦を受けても、此の秘密は守り抜こうと決心致します。敵方はこの秘密を白状させようと、次から次へと私を責めるのです。水責め、鞭打ち……そしてとうとう私は次の様な恐しい拷問を受けるのです。

私は真裸にされて十文字に磔



られます。そして錐でお腹に穴を明けられるのです。敵兵は、先が三ツ又になった錐を持って私のお腹に近付き、その鋭い先を私のお臍の中へ刺込みます。そしてギリギリとまるで材木に穴を明ける様に、私のお臍へ三ツ又錐を突込んで行くのです。あゝ、その時の苦痛、女の身で真裸にされるだけでも死ぬ程恥かしいのに、十文字に磔られて三ツ又錐でお臍をえぐられるし、一寸先のとがったので突

くだけでも痛いのに——と思うと、その苦痛の大きさと、そしてその苦痛にじっと耐える女の美しくも痛ましい姿。その主人公が美しい程、痛ましくも美しい情景にたまらぬ興奮を感じるのです。

思わぬ所へ話がそれましたが、こう云う様な私なのです。この様な事を考えたり空想するようになってから、自然と私は切腹に段々興味を覚える様になったのです。

女として成長するに従い、私の乳房も処女を誇るかの様にふっくらと丸味を持ってふくらみ、鳩尾の下から心憎い迄にだらかな曲線でもって、真白いお腹が円形のドームの様にふくれ上り、お臍の頂点から下腹部へスロープを描いています。私は時折、お風呂に入る時等、我ながら自分の肉体の美しさに見ほれる事がございます。殊に私は自分のふっくらとした下腹部に限りない愛着を感じるのです。この白く肥ったお腹へ短刀をブツリと突立てたら、そしてギリギリと十文字に切り割い

たら——、私はこんな事を考えて独りその悦
虐の境地に浸り度い。そうだ切腹しよう、そ
して人知れず私のこのアブノーマルな性癖を
満そう。私はとうとうこうして逃れられざる

「切腹マニア」になってしまったのです。

その方法も初めは玩具の刀から、今では真
刀を用いる様になってしまいました。そして
切り方も一文字、十文字から段々変った切り

方を研究致しました。そして遂に次に述べる
様な私独得の切腹、表題の私の切腹へと変っ
て参りました。私独得と申しても何もそう変
っている訳ではありません。唯、先に一寸申
し述べたように、少し度を過した様な切腹を
行って居るだけでございます。

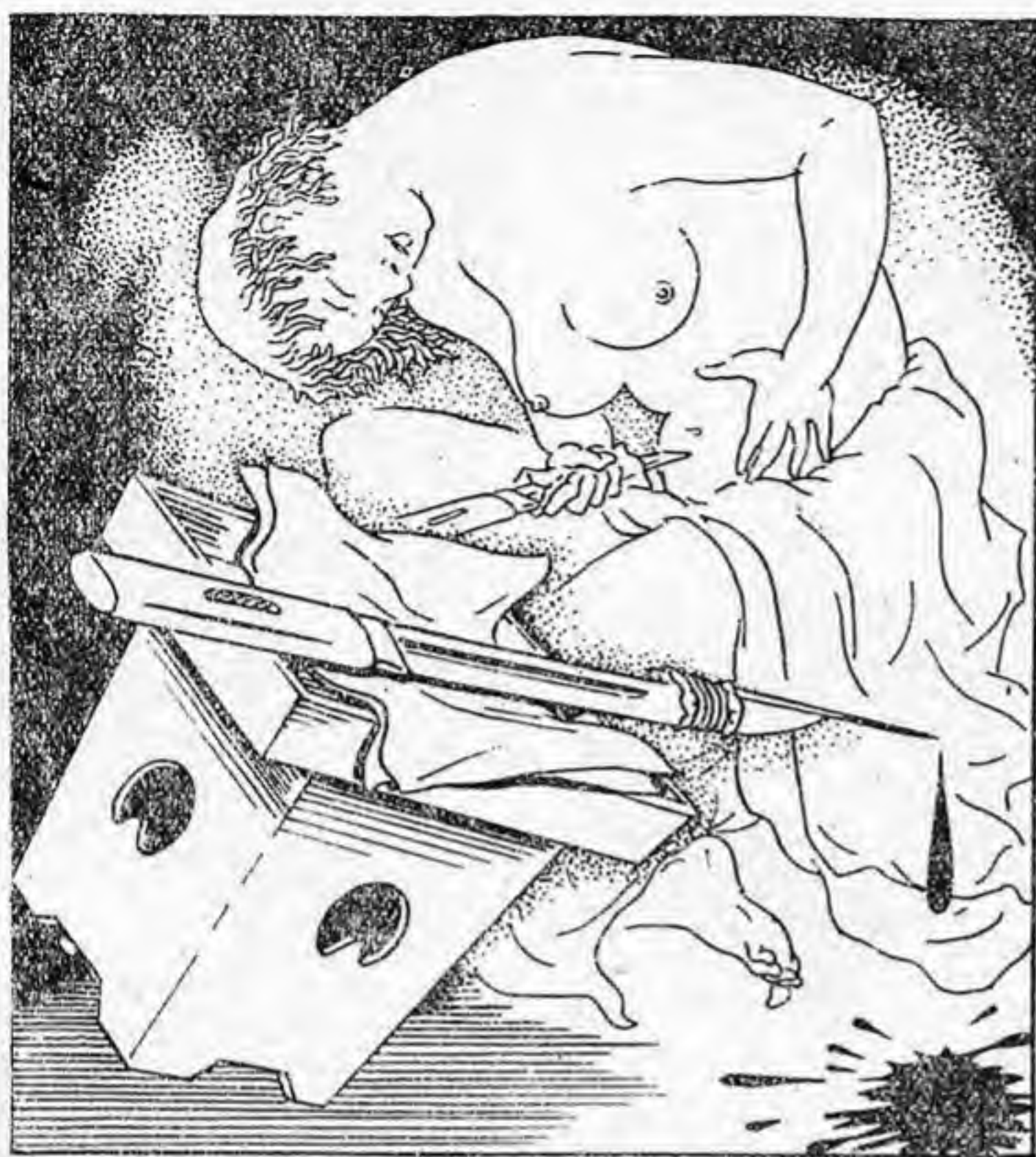
一昨年の四月号でしたかに掲載されて居り
ました信太容子様の「開花の契機」の中にあ

りました切腹方法に、
私の切腹はよく似て居
ります。信太様は短刀
の刃先をすりへらして

しては出来ない事でございます。それ故、私
は仕方なしに短刀の切先に針をつけまして、
その針を突刺す事によって、刀を突刺したと
同じ様な感じを味わい度いのです。でもいく
らマゾな私といっても、初めてのこの方法に
よる切腹をしました時には、流石に胸がドキ
ドキ致しました。だって生れて初めて、たと
えそれが針であるにせよ自分のお腹に深々と
突刺したのですから……。それは忘れも致しま
せぬ。そろそろ暑くなりかけた去年の七月の
末でした。何故かその夜はソワソワとして落
着きませんでした。

切腹をする時間は、家人が皆寝静まった十
一時に決めました。私はその夜は特に念入り
に入浴致しました。死出の旅路に見苦しくな
い様に、殊に切腹するのですからお腹は丹念
に洗い淨めました。そして薄化粧さえもする
私なのでした。着衣は矢張り白装束が好まし
く私は純白の肌襦袢を素肌の上に着るので
す。パンティはわざとはきません。それは双
肌を寛げた時、すぐその下からふくよかな下
腹が露わに現れる様にです。これで切腹の用
意は出来ました。私は用意された切腹の座に
つきました。部屋は無論、私の部屋です。

中央に白い敷布を敷きその正面には大きな



三面鏡が置いてあります。その切腹の座のすぐ前には三宝の上に白紙を敷いて腹切刀が置いてあります。腹切刀は白鞘の短刀ですが、その先には二寸もある太い布団針がつけてあります。私は静かに切腹の時間を待ちました。時間はやがて十一時です。正面の三面鏡に映った今夜の私の死装束、何と美しい姿でしょう。暫らく眼をつむって静かに切腹の時間を待っている私の胸中をお察し下さいませ。やがて十一時になれば私は切腹しなければならぬ。眼の前のドキドキする様な短刀を本当にお腹へ突立てなければならぬ。そう思うと思わず興奮にブルブルと身震い致しました。

やがて時計が十一時を打ちました。愈々切腹です。私は覚悟を定めて眼を開くと、先ず三宝の上の短刀を白紙にしっかりとまとい右手に握りしめました。そして腰紐をぐつとずり下げると、左手で静かに左の肌を寛げました。次いで右の肌も腰の上迄十二分に寛げました。私が静かに双肌を押し寛げて行くにつれ、その下から象牙の碗を伏せた様なムッチリとした乳房が、そしてやがて白くふくよかなお腹が現れました。

私はもう一度右手でしっかり短刀を握り直

すと、左の手でゆっくり右へ左へ何度も下腹を撫で廻しました。やがてこのお腹へ右手に持った短刀を突立てなければならぬ。いやその先についている針をすっかりお腹の中へ刺し込まなければならぬと思うと、思わず興奮のために膝がガタガタふるえるのです。然し、昔、実際に切腹して死んだ女の人もあるんだ、これしきのこと——と無理に思い込んで覚悟を定めると、左の手の親指と人差指とでお臍の辺りを軽く挟むと、静かに眼をつむって右手の短刀をお臍に擬しました。そして静かに短刀の切先、否針の先をお臍の真中にびったりと当てがいました。そしてゆるやかに刺込んで行きました。

チクッチクッと鋭い痛み、それと同時に何にかしらお臍の奥からジーンとしびれる様な感じがしたと思うと、やがて電気にでもうたれた様に、私の全身の官能をしびれさせて行きました。私が段々力を入れて短刀を刺込む度に、その苦痛は次第に大きくなって行きました。可哀想に私のお腹はお臍に針を刺込まれて、まるで瓢箪の様に大きくくびれてしまいました。一分、二分、三分と段々針がお臍の穴深く刺って行くのが自分にもよく分ります。その度に私の乳房は大きく波を打ち、私

のお腹はお臍を中心に大きく身悶えて居ります。何という姿でしょう。何という苦痛でしょう。私は何度途中で止めようと思ったか分りません。それでも切腹を途中で止めるなんて考えられる筈がありません。私は苦痛をキッと唇で噛みしめ、グイグイと右手に力を入れると短刀をお臍の穴深く段々刺込んで行きました。

長い長い苦痛の後、急に右手が軽くなったかと思うと、とうとう針が深々とお臍に突刺りました。その時の私の気持は何と申しましょうか。私は尚も針がすっかり見えなくなる迄深々と突刺して終いました。そしてとうとう私は切腹をしたのです。私のお臍にはまぎれもなく本当の短刀が深々と突刺って居るではありませんか！ 私は尚もお臍に突立った短刀を右手でしっかり押えたまま、三面鏡に映った自分の切腹の姿に見とれるのでした。

「追伸」

号を追って益々発展なさいます御誌の特に異色ともいふべき切腹記事に刺戟され、私も拙い乍らありのまゝの告白を記させて頂きました。馬鹿な女とお笑い下さいませ。恥をしのんで書いたものですから。出来れば御誌に載せて下さい。乱筆乱文御許し下さいませ。

幽 囚 十 ヶ 月

春 田 一 郎

坪 内 篠・画

戦後の刑務所内に於ける囚人の生活を、これほど迄にヴィヴツトに描き出した文章をまだ他に知らない。他にいくつかの囚人生活の記録が、あることはあるが、誇張と歪曲に災されてその真の姿を知るには、余りにも作為の跡が多過ぎた。この一文を読まれた方は、その意味でも、大きな価値を見出してくれるだろうと思う。

リクリエーション

刑務所は催物の多い所である。運動、映画、芸演等実に頻繁にある。私が入所した早々には運動場が完成し、日曜日には運動場開きの行事として、職員チーム対受刑者チームの野球試合が行われた。一般の受刑者は運動場の周囲に敷きつめた蔭座の上に坐って見物するのである。房から運動場へ、運動場から房への往復の規律は厳格であるが、見物中は至極なごやかなものである。ファイン・プレーに対する拍手、エラーに対する喚声、ピンチに対する声援、普通の野球試合と少しも変らない。職員チームは勿論、受刑者のチームもちゃんとユニホームを着ている。私が入所して

僅かに一週間目で刑務所と云うものがまだ分らなかった時分なので、この和氣藹々たる光景を見て、刑務所という言葉が与える観念と現実の刑務所との間に余りにも隔りがあるのに驚いたものだった。

運動は野球試合が度々開催された外、庭球の試合も数度催された。所長は運動に大変熱心で、庭球試合には、いつも親しく出場された。或日、職員と受刑者の対抗試合が開催せられ、所長も出場したが、プレー開始と終了の時の選手同志の挨拶で、相手チームの受刑者に対して丁寧な帽子を取って会釈されたのには、私達受刑者は胸が熱くなるのを覚えたのであった。

春秋に開催される相撲大会も面白い催しで

あった。選手も行司も呼出しも検査役もすべて受刑者がやるのであった。選手は之が長く受刑生活をしている者であろうかと思われる程、筋肉隆々たる身体に本式の褌を締めていた。行司は縞の着物に袴を付け冠をかぶり、本式の軍配を持っていた。呼び出しも着物に袴をつけていた。行司、検査役及び呼び出しは草相撲に経験のある者になるのである。選手の手「しこな」は夫々の舎房や工場によって同じような名前が付けられていた。例えば、二舎の選手は皆、「武蔵川」とか「天の川」というように、すべて「川」の字のつく四股名が付けられていた。力水も清めの塩も、紙も四本柱もすべて本式であった。最後に三役の取組があり、勝った「大関」には御幣が授

けられ、彼はそれを担いで、正面向いてしこをふむのであった。

運動の催しの中で、受刑者が最も楽しむものは春秋の陸上運動会であった。運動場のトラックには鮮やかに白線が引かれ、天幕張の本部にはテーブルが純白の布で蔽われ、柱は色とりどりのモールで飾られていた。私達は朝から運動場へ出て、先ずフィールドに整列し、所長の挨拶があった後、私達は運動場の眞座の上に陣取って見物するのである。運動会の種目は百米、二百米、四百米競走を初めとして、リレー、棒高跳、走高跳、砲丸投、百足競走、綱引、モッコ担ぎ競走、スプーン・レース、計算競走、パン食い競走等、一般の運動会と変る所なく盛沢山で、ラウドスピーカーでアナウンスするのも社会並である。一日をこの様にして楽しむのであるが受刑者の楽しみは運動会そのものと共に運動会当日には必ず出る間食にもあった。春の運動会には汁粉、秋の運動会にはふかし蕎麦と焼するめが出た。焼するめを噛み乍ら運動会を見物している気分は、小学校時代の運動会をしみじみ思い出させるものがあった。受刑者の中の特にチンピラ連中は娑婆に於ては早く大人になり過ぎてしまったために、刑務所へ入る迄は

普通の運動会などは子供っぽいものとして見向きもしないが又は何かの因縁をつけに行く所位にしか心得ていなかったかも知れない。併し、今刑務所では彼等は全くの童心に帰って嬉々として打興じるのである。彼等が心の眞底に持っている天真らんまんさを普通の社会に於ては充分發揮することが出来ず、彼等はひねくれてしまったのであるから、この天真らんまんさを呼び起す刑務所の運動会は行刑上の大きなプラスと云わねばならない。

九月にはプールが完成した。このプールは全部、受刑者の手によって作られたものである。出来上ると同時にプール開きが行われたが、本格的に利用せられ、受刑者を楽ませるのは翌年からであろう。病舎と三舎の間の中庭に瓢箪形の池があつて、プールが出来上る迄は受刑者達はここでよく泳いでいたが、この池の水は換水をしないため汚く、全く非衛生的であつたから、プールの出来たことは受刑者にとって大きな福音である。

運動会に付いては特記しなければならぬことはサマー・タイムの間、夕方の二時間を利用して、受刑者に罷業後の運動を許す制度が今年から実施せられたことであつた。受刑者は之をリクリエーションと称していた。罷業は午後四時、夕食は四時半で、五時から七時

迄の二時間を交替で受刑者に利用せしめたのは所長の英断であつた。この制度の実施に當つては時間外勤務料等の経費の問題や、受刑者に対する戒護上の問題から幾多の難点があつたそうであるが、受刑者の体位向上と云う見地から所長の英断で、実施の運びとなつたのである。夕方のリクリエーションは運動場へ出て、一率の号令で運動するなど云うことはなく、キャッチ・ボール、卓球、排球、庭球など思い思いに運動したり、日蔭に坐り込んで涼を取ったり全くの自由行動であつた。全く夕方の夕涼みには又とない機会であつた。特に入浴のあつた日など、サラリと汗を流した身体を広い運動場の風に当ててみると、ここが刑務所であることを忘れてしまふ程、快よかつた。

免業日の催物の中で、何と云つても受刑者が最も喜ぶものは、映画、浪曲及び歌謡曲であつた。次の日曜日に映画があると云う噂はいち早く受刑者の間に拡まる。どんな映画があるのだということを得々として皆に語る早耳の受刑者もある。当日、講堂は前半分が眞座をしいた座席、後の半分が床几で椅子席となつてゐる。光線の遮蔽は窓一杯にびつたりとはまる雨戸のような物で行われる。映画は

CIEの文化映画や教育映画のこともあるが、大抵の場合は普通の劇映画とニュース映画であった。普通の映画館の観客より、受刑者の方が真剣である。普通の人なら何の気なしに見過すことも受刑者は一々深い感銘を以て見るのである。数年間の刑務所生活を送っている受刑者にとっては、画面に現れる普通の社会の光景を見ることが自体が深い感銘を与えるのである。

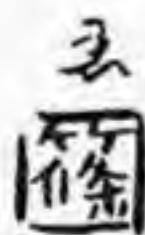
「あゝ、電車が走っている！」

と思わず声を出したのは決して子供ではない。もう六年もこの中で暮している白髪の老囚である。無理もない。二階の窓から普通の人家が見えたり、郊外電車が走っているのを見ると大騒ぎするのが受刑者の心理である。

併し、受刑者にとって何も云えぬショックに似たものを与えるのは、女、食物、酒或は煙草の現れる場面である。画面に御馳走が沢山ならぶ場面などが現れると、受刑者の間に期せずして溜息が洩れ、生つばをのみこむ。酒や煙草

をのむ場面が現われると、自分達の世界とは違った世界に感じられるものの、うまくやってやがるなと云う感じと共に、自分達もいつかはあの様に天下晴れて酒を飲み、煙草を喫うことが出来るのだと云う期待に胸がふくらむ思いがするのである。女の場面に至っては、当然のこと乍ら、受刑者に最も強い刺激を与える。受刑生活は絶対的の禁慾生活である。極めて例外的の場合を除いては、女の顔を見ることさえ出来ない。だから、女特に若い女の姿が画面に現れただけでも受刑者の瞳は食い入る様に画面に注がれるのである。ス

カートが風にあふられて足が見えたとき、アップで腕や乳のふくらみがまざまざと観客に迫った時、それにキッスの場面などは受刑者の間から、溜息とも悲鳴とも分らぬ、一種形容し難いうめき声が洩れるのである。性の本能と受刑生活、実に深刻な問題である。浪曲で印象に残っているのは富士月之栄一行及び三門博の浪曲であった。演芸では旗八郎一座の軽演劇、千鶴美代子一座の軽音楽、土地の大学の演劇等が主なものであった。月ノ栄は派手な着物に袴といういで立ちで現われ、正月に來た千鶴美代子は高島田に裾模様と云う



舞台衣裳であった。映画と違って、生身の女であり、色彩が加っているのも、女と云うものは美しいものだと言ふことをつくづく感じたのであった。

以上述べたように免業日は運動、映画、演芸が交々に催され、免業日の半分は何かしら催物があると云っても過言ではない。

私の知っている限りに於いて、受刑者に最も深い感銘を



与えたのは旗八郎独演の物語りであつた。全く受刑者にとつては身につまされる物語なのであつた。

一人のやくざの青年が罪を犯し、四年の刑期を無事に終え、故郷の町に帰つて来る。彼は故郷の町のカフェーの女給と知り合う。その女給は彼に恋を感じるのである。その女給は、併し町の与太者の兄、自分の情婦なのであつた。そこから事がもつれる。彼は故郷の町でギターを抱く唄の流しをやっていたのだった。或晩のこと、彼はいつものように唄を流していると数人の与太者に呼び止められる。

「おい、流しの兄い、一寸顔を貸してくれ」
与太者達の要件は、彼にその女給と手を切つて、この町から出て行つてくれ、その代りに一万円をやる。若し、いやと云えばその時は……と云うのであつた。

「兄さん達、一寸待ってくれ。俺も浅草じや七首の健と云われた男だ。故郷のこの町を出



てからもう何年になるかなあ。故郷の町にすっかり御無沙汰した俺が久し振に帰つて来てここ暫く足をとめているのは、決して色や恋のためじゃないんだ。ま、ま、兄貴達待ってくれ。そんならすぐにでも出て行けと云いながら、俺がまだこの町におさらば出来ないのはあの女に未練があるからじゃないのだ。若し俺があの女のために、この町にいるのな

ら、兄さん達がその一万両、いや十万両積んでくれたつて、金で女を売る俺じゃないんだ。併し、今俺がこの町から出て行けないのには、ちいっと違う訳があるんだ。兄さん達、お前さん方も人の子だ。定めし大切な親御さんがおあんなさるだろう。俺にもかけがいのない、天にも地にもたった一人の大事なおふくろがあるのだ。今思えば俺は不孝な子だった。やくざを磨くに、なあに親なんかいるものか、とたった一人のおふくろの涙も無下にけとばして、東京へつっぱしたのが、そ

うだ、あれは俺が十七の年よ。エンコで、男だ、度胸だと愚にもつかないことに、切ったはったの生活に明け暮れを送り、二十過ぎには、あゝあれはアイクチの健よと、ちつとあ人にも知られる兄い様になった。さあ、そうなるといけない。見れば兄さん達も若い身空だ。一旦身を持ち崩したおいらが、兄さん達に説教でもなかるうが、それ、何と云ったつ

け、青春再び来らず、さ。ハ、、、。人間やっぱり真面目な生活がほんとうの生活なんだぜ。人様には兄い、兄いと云われ、俺自身も一っぱしの兄いの積りで、肩で風を切って歩く。人間そうなたら仲々足は洗えないぜ。やれ縄張りがどうしたの、男の顔がどうしたのと、浮いた心で泳ぎ廻っている中に、おきまりの刃傷沙汰さ。なあに、原因はどうせ他愛のないことよ。度胸一つを七首にこめて、ずぶりと一突き。相手はそれがもとでとうとうお陀仏さ。その拳句はお上の手を煩わして、ムシ入りさ。傷害致死と云う奴で四年貰ったのよ。ムシでその日その日を送っている中に、おらあ自分の今迄を考えて不図淋しくなった。もういけない。それ迄の俺の生活が一つ一つ俺を責めるんだ。何くそと何べんも思ってみた。けれど之と云って人間らしいことを何一つして来なかった俺にとって、あゝよかったと思う様な思出なんて何一つありやしない。みんな人間の皮を被ってはやれないことばかりだ。俺は恥しくなった。そしてその次には淋しくなった。自分自身に愛想がつきて来た。むつかしい言葉で反省と云うことだろうね。そうなってくると思しように恋しくなってきたのはおふくろのことだ。今頃

はどうしていなさるだろう。たった一人の伴に置き去られて、定めし苦勞のありたけをしていなさるだろう。あゝ、済まない、申訳ない。一日も早くムシを出て、おふくろに堅気になった俺を見せなくちやならない。あゝ俺の小さい時分はこんなこともあったわけ、おふくろにこんな世話をかけたわけ、と子供時分の思出はそれからそれへと湧いてきて、おらあムシに居る間ずっとそのこと許り思い続けて来た。一日も早くムシを出して貰うことだ。真面目につとめを果すことだ、と思っただ。一生懸命な俺の姿がお役人達の目に止ったのか、それからというものは叱られたこと一つなく、三級、二級、一級と、トントン拍子、お蔭であればよくなった、模範囚だと云われて、無事刑務所の正門を天下晴れて出して貰えたのが、先月の、忘れもしない二十日さ。こゝで元の生活にかえっちゃいけない。おふくろだ、おふくろだと思ふ心から、俺はさっぱりとやくざの足を洗って堅気になったのだ。このギター一つを友達に、湯の街エレジーじゃないが旅の鳥さ。風の便りに聞けば、おふくろは故郷のこの町で、賃仕事などをして、一人淋しく暮していなさるものと。矢も楯もたまらず、ギター一つ抱えてこの町へ

来たものの、おふくろは何処に住んでいなさるのか分らない。会いたさ一心に歌を流してこの一月、俺は故郷のこの町に御厄介になっっているという訳だ。兄さん達、聞いてくんないすったか。俺がこの町に長く足をとめているのは、おふくろを探すためなのだ。兄さん達の女をどうしようの、こうしようのという料けんなどはありやしない。兄さん方、お願いだ、おめざわりかもしれないが、おふくろが見付かる迄、俺をこの町へ置いとくんない。お願いだ。

旗八郎の独演は独特の哀調を帯びて、切々と胸を打つものがあつた。受刑者は水を打った様に静まって聞き入っていた。感激の涙を目に一杯浮べている者さえあつた。

この物語の主人公の置かれた境遇は、受刑者にとって決して他人事ではないのである。受刑者に真の反省の心が起きた時、帰って行く心の故郷は必ずその幼い時代であり、父母であるのだ。人は生れ乍らの悪人でどうしてあり得よう。受刑者も亦人の子である。如何に兇悪な囚人であっても、心のノスタルジアに涙を流さない者はあり得ないのである。

あんこ、かっぱ

五月の初めから、二舎の作業は綿糸の整理

になっていた。もつれた太番手の綿糸を二、三人が一組となつてほぐし、之を数本合せて丸く巻いて行くのである。刑務所の仕事には科程というものがある。科程とは一日一人の標準出来高である。科程は賞与金計算の基準となるもので、人に依り之以上の仕事量やれる者もあるし、以下の者もある。二舎の仕事は性質上、一房当りの科程が決められているだけで、各人の共同の仕事となる訳であるが、七房は科程より遙かに少い仕事しか出来なかつた。尤も之は七房に限った訳でなく、大抵の房は科程に達しなかつた。之はこの仕事が手数が掛る割合に科程が多かつたのにも原因したが、多くは受刑者が怠けることが激しかったからである。受刑者と勤勉ということは両立しない場合が多いようである。勤勉の習慣をつける、勤労の価値

を分らせることが行刑の一つの目的であるが、受刑者の多くは確かに能率が低い。之は生来の怠惰ということもあるが、一つには働くということを知らぬからである。七房で糸の整理をやつていても、一時、非常に熱心にやつてゐるかと思うと、すぐにあきてしまふ。孜々として倦まずと云う仕事振は仲々実行出来ない。すぐ手許を留守にして喋る方に夢中になってしまう。ひどいのは仕事をそっちのけにして、将棋をやつたり、雑誌を読んだりする。看守がいくら注意しても直らな

い。遂に二舎の正担は素晴らしい防止策を發明した。幅一尺、長さ二尺余りの木の板に大きく、
「私は作業中将棋をして居りました。誠に申訳ございません」と書いてある。之が三枚あつて、「雑誌を読んでいました」とか「雑談してました」という部分が夫々変えて書かれてある。将棋、雑誌、雑談などで作業を怠けている者があると、外へ連れ出して、この木札を首にかけさせ、八角の中央に二、三十分立たせるのである。八角は看守や受刑者の



往来が多いから、多勢の前にさらし者になる訳で、之には如何な怠け者も大いに弱った様である。

綿糸整理の仕事には二舎の受刑者の中から選ばれて三人の世話役が居った。川本君というのは、朝鮮生れのチンピラの親分であつた。川本君は充分凄みも利かせ、受刑者達に押えがきいていた。岩本君は糸の取扱に経験があるらしく技術の指導をやっていた。もう一人の世話役、土谷君は古い受刑者で、既に三年以上も刑務所で暮しており、三級であつた。三年以上も居ってまだ三級というのは変だが、土谷君は性的の反則で数回懲罰を受けたため未だ三級に止まっていたのである。土谷君はポツテリと肥った皮膚の奇麗な男で、性格的にも多分に女性的のものを持っていた。土谷君の仕事は材料の綿糸を各房に配ったり、出来上ったものを集めたり、出来高を計算したりすることであつた。私達の房にいる田村君はやつと二十才になった少年で、決して美少年という程でないが、小柄で子供々々した可愛い少年であつた。土谷君は仕事で七房に來ると、わざわざ上り込んで話しかけたり、何かの機みを利用して、田村君の顔、肩、腕、太腿等に手を触れさすのであつ

た。時には用事のない時でも七房に上り込んで、びったりと田村君に寄り添い、何となしに田村君の身体を愛撫しながら雑談して行くこともあつた。土谷君の田村君に対する同性愛は七房の者はすぐに気が付いた。注意して見る迄もなく、田村君を見る土谷君の目は妖しく光っていた。房の連中は土谷君は田村君を「あんこ」にしたいのだと噂をした。土谷君の目付は性慾の異常者が道行く女の着物を透して、その下に動く裸の身体にじつと注ぐ様なあの目付きであつた。

刑務所に於ては、「かっぱ」「あんこ」という言葉がある。女体から絶体的に遠ざけられ、性慾のはけ場のない男ばかりの世界である刑務所に於て、必然的に生れるのは性の倒錯、即ち同性愛である。かげまとい男娼と云い普通の社会に於ても男性が男性と性的交渉を持つことはある。併し普通の社会に於ては性の倒錯と同時に、好奇心という要素が多分に含まれている。刑務所に於ける同性愛は女に飽いて男を相手にするというのではない。相手になる男の中に女を感じるのである。男が好きと云うのではなく、男を代用品として「女」に接するのである。「かっぱ」とは男同志の性的關係に於て「男」の側を云

い、「あんこ」とは「女」の側を云うのである。従つて「あんこ」に選ばれるのは必ず女を思わす美少年である。刑務所に於ける「かっぱ、あんこ」の事實は私は実際に見聞したことはない。すべて人の噂ではあるが、受刑者が抑圧された性慾の解決に苦しんでいるのは事實であり、「かっぱ、あんこ」という言葉が存在する以上、或る程度までの事實があり、或は現在はなくとも過去にその様な事實があつたのであろう。

「あゝ、一度女と寝てみたい。たった一度でいゝから女と寝ることさえ出来たら、刑期が一年位延びてもよい」と云う受刑者が少なからずあつた。之を以て見ても、受刑者が如何に性の問題に悩んでいるかがわかるのである。非合法の手段を採らない限り、性の悩みを解決してくれるのは自慰と夢精しかない。一年迄の受刑生活では、異常者でない限り左程性の苦しさはないが、一年を超えると、大抵の受刑者が非常に苦しみ、美少年を見ると性的衝動にかられるそうである。

二舎に居った或る老囚は一人の少年を愛していた。勿論、房が別であるから普段会ふことは出来ない。老囚にとって少年を愛撫する機会は運動の時と教誨の時だけであつた。運

動の時間には老囚はその少年を抱えるようにより添って腰を下し、何かひそひそと楽しそうに話をしていた。教誨の時や催物のある時は、二人は必ず並んで腰をかけていた。その老囚は自分に差入になる石けんを初め給与のちり紙やはみがきなど自分の自由になる物は勿論のこと、時には飯さえそっとかくしてその少年に与え、一心にその少年の歡心を買っていた。この老いた受刑者が全くの孤独で、人間愛の対象としてその少年を選び、せめてもの父性愛をその少年に注いでいたのかも知れない。併し之を傍から見ると「かっぱ、あんこ」の關係に見えたのである。

「かっぱ」は「あんこ」のためにあらゆる便宜を図るのである。力のある「かっぱ」はどこかで工面して来ては「あんこ」に破れの多い「ハクイ」囚衣を着せる。右の老囚の様に手に入る物品を惜しみなく与えて、その歡心を買おうとするのは勿論である。丁度、男が好きな女に全力をあげて貢ぐのと全く同じである。

仕事のすき間を見て、接吻している所を見付かった事件などは一再に止まらない。私が訓練工場で席を並べていた伊丹君などは二十七才であったが、もち肌で、一寸歌舞伎の女

形を思わす青年であつた。伊丹君は其後「營繕係」と云う職場に編入されたが、夕方のリクリエーションの時、私に会うと、

「どうも營繕はいやだ、仕事中でも手を握ったり抱き付いたりする者がいるし、夜寝てからは手や足で身体にさわり、いくら払いのけても、しつこいので、もういやになる」と、よく愚痴をこぼしていた。

露骨なことが實際にあるのかどうかは知らない。併し、受刑生活の長くなった囚人が美少年に女性を感じ、之に性的感情を抱くのは事實であろう。又、「かっぱ」をめぐる三角關係や、「あんこ」をめぐる三角關係もよくあるらしい。嫉妬の渦は男ばかりの刑務所に於ても深刻なものがあるのである。

この男ばかりの世界へ男娼上りの受刑者が入って来ると、丁度男部屋に女が一人入り込んだと同じ様な状態となる。この場合は、男娼上りの受刑者の方から積極的に働きかけて行くから様相は一層露骨になる。私が看病夫をしていた時、患者の中に通称「茂ちゃん」と呼ばれる若い受刑者がいた。彼は男娼上りで、娼婆では女装をしていたそうだが、丸坊主頭にボロボロの青い囚衣では曾っての艶姿を偲ぶすべもなかった。併し、その物腰や言

葉は全く女であつた。彼は商売柄、男に対して魅力を感じる男であつた。顔を少し斜めに向けて、じっと相手を見つめる眼付は女、しかも商売女のそれであつた。内輪の足の運び、一寸した手のしぐさ、すべてが女であつた。之が丸刈り青い囚衣でその様な嬌態を見せるのであるから、グロテスクそのものに外ならないのであるが、女に渴えている受刑者にとっては、彼は「女」らしさをまざまざと見せてくれるので大した人気者であつた。

「茂ちゃん、可愛がつてやろうか」

「あら、ほんとにするわよ」

「茂ちゃん、一人で寝るのは淋しいだろう」

「いやだわ、いけすかないのね」

「茂ちゃんは〇〇さんの世話になっているそうじゃないか」

「ええ、世話になったこともあるけど、今は切れちゃってるの」

「茂ちゃん、そんな所で変なことをするんじゃないよ」

「失礼しちゃうわね。人目があるじゃないの〇〇さんたら」

と云った様な調子であつた。

(以下次号)

晴 雨 私 稿

血 染 の 毛 綱 (四)

伊 藤 晴 雨

断髪時代に、女の日本髪のことを説くという事、それ自体が時代錯誤である事を自覚して居ない訳ではないが、結髪それ自体が歴史の一部であり、国民性のシンボルであるとするれば、好むと好まざるとに拘らず、之を研究して一種の文献とする事は、妨げない事と思うので、私は極端な日本髪礼讃者では無いが、實の研究に伴う範囲の日本髪に就て述べた後に、日本婦人の髪に対する愛着と、これを集めて作った毛綱にまつわる一種の靈感とでもいう可き、目に見えない不思議な事実を説こうとするものである。

断髪には興味を感じるが、日本髪は吾人に何等の性的魅力をも感じないという現代のみを基調にした一部の方々の御説は誠に御尤も千万であるが「人間が結髪をする場合には、実力以上の力が生れてくる」という事を考えなければならぬ。それは彼の国技と称せられる相撲道の力士が現代でも散髪になり得ないという事実である。

明治初年の廃刀令と前後して断髪令の出た時、卒先して断髪したのは旧俳優で頑固爺といわれた中村芝翫と市川団十郎や左団次であったが、角界では断然之に反対して仮令政府の命令でも、力士が散髪になつては角力とは

れないといつて、頑として命令に従わなかったという話である。

現在の写真製版の元祖は新派俳優の水野好美で、此人は中国辺のさる大名の家老の家に生れ、明治の初年、洋画家になろうとして、本多錦吉郎（当時第一流の洋画家）画伯に就いて洋画を修め、号を孤芳といつて明治十七年×月「花籠」という雑誌に「永世不変色写真」という題で、現在のコロタイプを印刷して口絵につけたのが最初であつて、此事は石井研堂氏の「明治事物始原」にも記載されて居ないのであるが、私の蒐集した当時の雑誌の中にあったのを、水野の生前に其製作の動機を書いた事がある。

それは余談であるが、新派の頭領といわれた川上音二郎が、第二回目の洋行から帰朝して、明治座で沙翁のオセロを出した時「日本の旧劇役者の顔の扮装は間違つて居る、目尻がつり上っているのは不自然だ、外国の俳優は目尻を下げて顔をつくつて居る。あれが自然だ」といったのを水野は言下に「君は日本の武士の結髪を知らないからそんな事を云うのだ、昔の武士は髪毛の抜ける程強く元結で髪を縛つたもので、鬘の結び方がゆるいと目尻が下るから「あいつは目尻が下っている

から弱い、といって髪^{かみ}の結い方に依って馬鹿にされた位なもので、外国の役者が目尻を下げたからといって、日本の役者が日本の風俗を見せるのに外国の役者の真似をする必要はあるまい」といって川上劇に参加しなかった事があった。

相撲の結髪は力を生み出す為、武士の結髪も同様な理由が其根底に存在するとしたら、日本婦人の結髪も或る意味に於ては自己の貞操を防禦する為、非常の場合、自力以上の力を必要とする場合、役に立ったのではあるまいかと考えられない事もない様に思われる。

責められる女の結髪の乱れる程度に依って責の程度が強いか弱いかという、精神的方面は別として、肉体に及ぼす影響を研究する事も、日本髪を研究し、其結髪様式を知る事も亦文献の一部分であって、「最早日本髪の如きは過去の産物である」とアッサリ片付けて了うのは余りにも早計では無からうかと私は個人の立場から密かに考えて居るのである。

国に歴史あり、家に歴史あり。歴史あれば風俗の変遷あり、風俗の変遷によって生活様式が変わってくるのは当然であるが、現在のみを見て過去を見ないのは、一種の偏見ともいえるので、過去のみを讚美しろと云うのでは

ない。

論理は暫く別として、扱日本髪に就て私の貧しい見方を少し書いて見たいと思うが、大体に於て近代の日本髪には「根取り」(髻)「前髪」「鬢」「夕ボ」の四種が結髪の基調になって居る。元和慶長時代の髪は現代の結髪様式に共通点があり、奈良朝、平安朝頃の結髪様式も見方に依っては現代の新日本髪と称するものに共通点があると思われる。

徳川期に生れたという勝山(丸鬘)と東海道島田の宿の遊女が結い始めたという、取るに足らざる俗説の島田鬘は現在でも一部では廃って居ないのは、結髪の歴史の上で永世不變のものではないかと、私は考えている。

パーマネントを「電髪」という字にしたのは、大正時代、博文館の文芸倶楽部の編集者が一般から募集した中の新熟字で、活動写真を映画という字に縮めた本家本元は、料理通で有名な本山荻舟である事を知っている人は多い。

閑話休題、日本髪の中で、現在行われ、現在最も美の代表とされて居る高島田という鬘が現在の様な完全(といってもまだ将来性があるが)なものになったかという事を研究してみると、それは、大正期に入ってからであ

るといってもよく、又一方面からいえば「地かつら」の発達に伴って結髪様式に変化を見た事が原因であるとも云い得るのである。

島田という鬘が東海道の島田宿の遊女^{うしろ}恐らくは飯盛であったらう処の女が結い始めて日本全土に拡まったという伝承的な学説には私は何としても承服出来ないのである。何となれば、まだ東海道の往来が盛んでなかった徳川の初期に大井川沿岸の島田の宿が開けて居たとは思われないし、又相当開けて居たとしても、島田鬘を結った処が島田の宿とはとんだ地口(ちぐち)としか思えない、元来長い髪を締めて束ねる(しめたわね)の変化が約言して、しまだになったのではないかと私考する。

嘗て木村鷹太郎という文学博士が読売新聞紙上で「助六の語原は伊太利に在り」という題下に「スケロク」に就て伊太利語を数千言(?)陳列して助六と花川戸に就て、約十五回に亘って人類学上からの学説を発表された事があったが、花川戸の助六や鬘の意久が伊太利に有ったか無かったかという事よりも、鬘の意久が吉原で遊んだ時は、花川戸の助六が生年僅か二才であったから、意久と二人で揚巻花魁を張り合った事なんぞ有りツコは無

かったという研究の方が、吾々日本人にとっては必要な事では無いだろうか。学者という特殊な人間は理科学を除くの外至極鷹揚に出来上って居る人が多い様で、或る日本唯一の伝説学者が八百屋お七の幽霊が出た前例があるなどとヨタを飛ばせて地元の人々を喜ばせた事があったが、読む事の出来ない様な上毛の古碑の文字を實在のものとして居るのは、北海道手宮の古代文字の未解決同様、一般の生活標準から云えば余りにも距離があり過ぎると思う。

女の島田髷は江戸時代の娘が十四五才から十七八才頃まで貴賤上下の別なく結われた髷であって、此髷が何が故にかく計り流行したかといえ、勝山という遊女の結い始めたという彼の丸髷と同じく、一般の嗜好に投じたというよりも、誰の目にも美しく感じる髷である事と、一方には多少の三平二満式な女でも、より以上美しく見える髪形である事、それを結い上げる技巧によって直ちに女の生命とする容貌に影響するという重大関係をもつて居るのだから、燎原の火の如き勢を以て全国に流行したのは「君の名は」どころのものでは無かったかも知れない。

島田髷の美しさは何処にあるかといえ、

髪形の全体が非常に変化に富んで居る事である。結婚式の高島田の扮装の儘、荒縄で縛り上げた女を、ある魔寺の山門に幽閉した変態性慾者が之を強×しようとする、村の青年団が此寺の山門を襲撃して危機一髪の間、女を救助するという「池田亀五郎」という芝居が、出歯亀事件のあった後の大正時代に浅草七軒町の開盛座に於て日吉良太郎一座に依って演ぜられた。

其第一場はケンランを極めた神前結婚式場で、新郎新婦が今や神前に於て三々九度の厳肅な夫婦の固めを仕様とする時、停電で真ッ暗になる、大雷雨に続く大地震、式場は大混亂に陥る、此時突然現れた無気味な大男は雷で気絶した花嫁を小脇に抱えて、神前の酒を悠々と飲み干してニンマリ（こういう形容詞がいゝと思う）笑い乍ら悠々と這入る件で、木なしで幕になると、風の音でツナグ。道具出来次第に幕をあけると、舞台一面豪華を極めた朱塗りの山門である。豪華という文字は此場合当らぬかも知れない、歌舞伎座の石川五右エ門の様な金の掛った棧門ではないのだから、小劇場の舞台相当な豪華である。肩に切り継ぎの布の当って居る大正時代の五右エ門？ が黄色の扱帯で後ろ手に縛られて、角

かくしの布が、ベッコウの簪に垂れ下り、緋縮緬の腰巻と朱の長襦袢が、真白に塗った女の股にまつわって居る。失神して居る女の身体を山門の高欄にドツカと下し、やおら何事かを行わんとする楽し相な池田亀五郎の態度は見物の血を湧かせ、大向う（其当時の立見席、今の一幕見）からは「ヨウ堪らねえぞ」「凄えぞッ」などという声が掛る。

こうなると役者も大変だ、花嫁に扮して居るのは座長日吉の女房、花柳某だからいゝ様なものゝ、女房で無かったら、実際に何か出来たかも知れない程の真剣な芝居で、美しく結い上げた高島田の艶々しい髷はガツクリと横に曲り、男の為すが儘にされて居るのを、亀五郎に扮した座長の日吉が山門の扉の中に抱え込むと山門の扉が仕掛けでコト／＼と動く、見物がワァーッとどよめく、やゝ暫し、舞台静寂になって、やがてアア、ウウーという様な呻き声が聞える。此時、山門の大道具の陰から警察の提灯を持った巡査と××村役場と書いた高張提灯を持った村の青年団（楽屋総出）が山門へ上って来て、首尾よく亀五郎を捕え、花嫁を助けて引揚げる。暗い舞台に朝の光線が輝き、大団円というタイの無いテーマであるが、高島田の花嫁を亀五郎が

抱えて××する動作がリアルであったので、連日満員であったが、当時如何に場末の芝居小屋だといって、よくもこんな表題で、当局が脚本を許可したものだと思ひに思ひて居る。

島田鬻の美しさは、私は髻、即ち鬻の根にあると思う。御殿女中などの高島田の根に掛けた銀の「丈け長」という銀紙と黒い髪の毛の色との対照の妙は、丁度食物ならば含み味という可きもので、口に云えず、其味を知る人丈けが感じる艶である。京阪地方で喰う河豚の味と同様でフグを喰わない者に河豚の味を語ると同様に、島田鬻の美しさを感じない人に之を語るのは、或は無理であるかも知れない。

映画の場合は暫く措く、芝居の舞台で責められる女は「シケ」と「サバキ」の工合が一番六ヶ敷く、其かつらを結う床山も、此女はどの位責められて居る女だろうと考へ乍ら髪を結うのである。「シケ毛」というのは女が責められて、綺麗に結い上げた毛に油気が無くなった毛がバラ／＼になって垂れ下って居るのを人為的にするもので、責められる女が、後れ毛を五月蠅相に喰んで居たり、又口惜し相に喰んで居る場合もある。かつらの場

合はシケ毛は前後の後ろから、役者の目と平均の処あたりを下って来るのと、耳の辺りに下るものと二種があつて、折檻の烈しかった事を端的に見物に示す為に、不自然な「かつら」を写真に見せ様とする、最簡便な方法で、これをシケと呼んでいる。又「サバキ」は責められる女の深刻さと、殺される女などの凄惨さを表現するのに、最効果的な方法として殺し場などで実際には髪の毛の乱れる程の事が無い場合でも、島田の鬻が壊れて「露わ尾花袖」という合方を使つての立廻りなどの場合に此サバキが有効に使用される事は、髪を壊すという事を恥とした風習のあつた時代のみに限られて居た。これは現代の断髪女性の神経と全然違つたものであるから(結髪Ⅱ鬻)という物に対する女の心持ちは現代人とは別な世界に住んで居る様なものであるかも知れない。

新派俳優の最年長者である喜多村録郎の若い頃(或は今でもそうであるかも知れない)は自分の舞台用の髪には決して手を触れさせなかつたものだ。かつらの毛一本乱れても感じが違つてくるといつて居た。鬻の毛一筋の乱れが、自分の女という感じを幻滅させるといつて居た。男が女に扮した場合でさえそう

であるから、況んや真正の女性が髪を掴んで責められ、鬻の壊れる迄打ち叩かれるという事は肉体的にも精神的にも非常な苦痛であるに違いない。

責め場を描いた文学、乃至小説にも余り女の髪に就いて描写したものはない、絶無ではないが、細密描写の表現はない様に思う。「髪の毛を掴んで引廻し」とか「髪は乱れて涙は土をうるおし」とかいう程度である。女を責め殺す場合、女の髪の毛が蛇になるという、山東京伝作の王琴の断末魔の描写の如きも概念的のものであつて、肌に粟を生ぜしむる程の描写は見当らない様に思うのである。

私が或人に向つて、女の責め場を続けて十回描けませんかと言つたら「そんな事が出来るもんじゃあない」と云つて怒られた文士が有つた。大衆小説にしても、芝居の脚本にしても、責める方のセリフと、責められる方のセリフには一定の限度があり、責めを見て居る観客の心理にも一定の限界線があるので、芝居の責め場で一番長いという中将姫の雪責めが一時間未満、浦里の雪責めが三十分以内、最も惨酷を極める「紅血缺血」の缺血の責め場が五十分が一番長い、其外、佐倉宗五郎の夫婦の責め場、児雷也豪傑物語の八釜鹿六の富貴太

郎の水責が十五分程で、其他の女の責場に到っては最近殊に短縮されて居る。

最近、浅草松屋の六階のかたばみ座で、久しく出た事のない「敷島物語」が出るという



「鼻責め」の研究発表

古 田 吉 郎

ので楽しみにして見に行った処、如何に一日二回興行とはいえ、序幕の敷島の部屋から大詰の井の頭池の場迄、僅かに一時間斗りでドシバタ片附けて了ったのは呆れて物が云えな

(未完)

「鼻いじめ」「鼻責め」については、先にその実験の結果を発表しましたが、更にその後の研究成果を発表致します。その前に若干の批評をさせていただきます。

十一月、十二月号の目次、口絵は共に素晴らしいものでした。尚、十一月号の飛田氏の三輪車はイヤリングと組合わせて良く出来て居ます。十二月号の滝氏の「鼻いじめ」も稍実感が出て居ます。新年号の滝氏の責め十態中「紙挟み」にて鼻をつまんで居るのは感心しません。と云うのは紙挟みにて鼻翼をはさむと、キズ跡が残る恐れがあり、中々消えず人

前に出られなくなることが多いからです。そこで鼻障子ならば永久的に穴を貫通させておいても、普通には絶対に見られません故、鼻輪通しの方が実際的です。それから新年号の写真中の「鼻いじめ」も、余り実際的ではありません。折角モデルを使用したのですから、太い(中の鼻環等)鼻輪を鼻障子に貫通した所を写して貰いたかったと思います。つまりくさりを強く引かれるため全く鼻筋が充分に伸び、そして又鼻腔が良く見え、その際鼻障子の貫通した穴もよく出る様に写して貰いたかったと思います。あれでは鼻障子を両側より只単に押えて止めてあるだけであるこ

とが歴然として居るので、少しも興味がありません。

二

先に発表した結果を更に掘り下げて、その成果を発表したいと思います。

(一)、鼻障子に貫通した鼻輪を常に引き廻して責めて居ると、次第に穴も大きくなり、中につける太い環が丁度良くなり、やがて電車の吊り革につけてあるあの太い輪位のものがはまる様になり、又障子の強度も大となります。実験の結果、現在では四貫目位は下げ居られますが、今後益々強くなることと思ひます。それでいて外見的には何等異状が見ら

れませんし、鼻障子の穴も鼻環を通して強く引張って居る時の外は、普通には絶対に見えませんが安心です。此の点でも「鼻いじめ」には鼻環通しを推奨致します。

(二)、鼻輪に通した紐を充分に利用して、あらゆる各種の責めに变化の妙をみせ、又強度を増加させることが出来る。例えば海老責めに利用すると、先ず背後に縛った両腕を充分に強く上方へ引き締めておき、両手首より二本の紐を長く出して両肩に分け、足首を重ねて縛ってある所へ通して締め上げる。更に足首の所よりも二本紐を出しておき、両肩に分けて両手首を通して互に強く締め上げる。此の際、苦しいため強い抵抗を示すのであるが、鼻環の紐を強く下方に引いて行くと、苦痛のため首を強く股間に曲げてゆく。そして遂には頸部に両足首を乗せる迄鼻環の紐を引きつけて行くのである。つまり頭や首は足の下になっってしまうのである。勿論此の際、先に両手首、両足首より取ってある二本の紐を上手に、互に引きしぼって行くのである。そこ迄(アクロバットの様に)締め上げるのには鼻責めを利用しないと中々出来ないものであるが……。

切、此処で足首を通して太い綱で天井より充分に吊り気味にしておく。そして鼻環の紐を鼻柱が引きちぎれる程強く引張っておくか重い石を吊り下げておく。まことに素晴らしい

姿態である。こうしておくと呼吸困難になっても頭が鼻環で引かれて動かせぬため、すぐに苦悶の状を示す。又、顔面は真赤になり汗がしたより落ちる鼻筋は眼もとよりくっきりと浮き出て、鼻柱は長くのびて来る。又、鼻腔よりは涙と透明な美しい液体(鼻腔より分泌する粘液ならん)が止め度なくほとぼり落ちる。

此の際、更に罌丸責めや肛門いじめも附加えると壮観な眺めである。海老責めマニヤは次第に強くなつて来るので、右の方法で極度に責め上げないと利き目がないものである。右のはほんの一例であるが、あらゆる責めに活用されることを望みます。又体験談を発表して下さい。

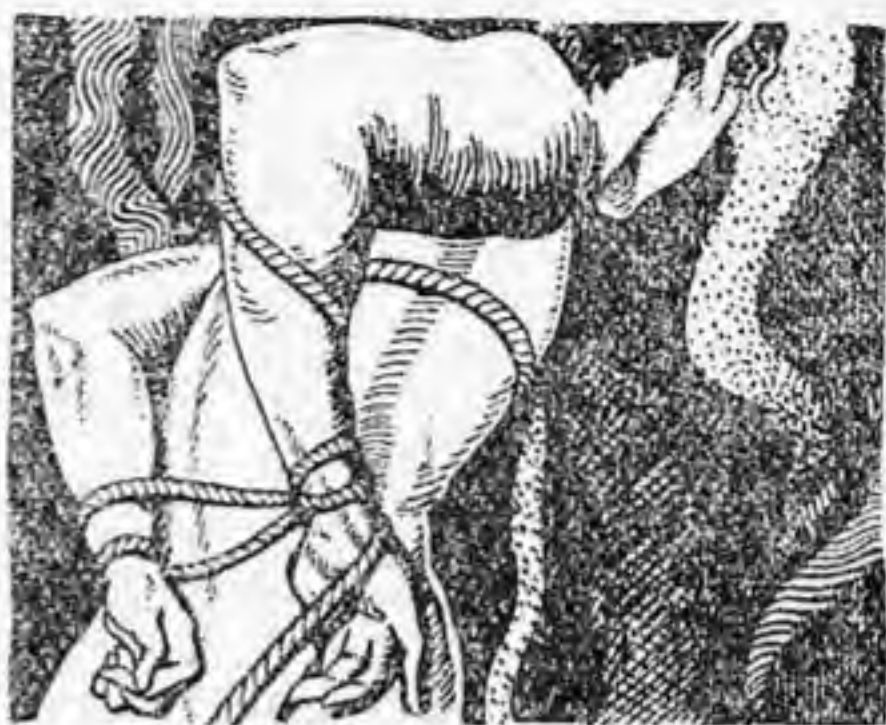
(三)、鼻腔より通して咽喉から口へ紐を出す方法。先ず「こより」を鼻腔より徐々に入れてゆく。クシャミが出るが段々深く入れてゆくと遂には喉の奥に出てくる。そして生理的作用により喉の奥より自然に口へ押し出して来る。此の際こよりに細い糸を結んで引き出すと、糸が鼻腔を通過して口に出て来る。此の様に糸を両側の鼻腔に出して更に太い紐に換えてゆく。そしてどちらかを結んでおいて、その末端を持って引張るとか、宙吊りにしておくのも面白い。

以上は責めとして取り扱ったものですが、此れからはイヤリングと同様に多くの女性が

鼻環を装飾具として装着する様になればと空想して居ります。イヤリングにしても殆ど多くは単に止めてあるだけで、貫通してないのには興味を失います。もっと大胆に平然と、「鼻責め」や鼻環を通した写真を掲載して下さい。三

最後に私の発表は皆実験結果であって空想ではありませんので、その点特にお断りしておきます。先に発表した最初に鼻環を通す際に鼻障子の穴があいた時、少し痛く感ずる方があるかも知れませんが、その際はベニシリン軟膏を小指の先か、綿棒の先に付けてその部に塗布しておけば痛みも止まりますし、その他の点も少しも心配ありませんから、一応は心得ておいて下さい。私の体験では何も処置せず、貫通すると同時にグイグイと引張り廻されて、涙も鼻汁も一緒にクシャクシャになりましたが、それでも何ともなく、今では結構強い鼻障子にさせられてしまいました。

以上で「鼻責め」を終わりますが、要は鼻環を如何に利用して具体的に変化を見せるか問題となります。大いに皆様の御研究を望みます。鼻責め写真等は大寫しにてどしどし御掲載下さる様、尚又、鼻環が女性装飾のアクセサリーとして流行する事を夢見ております。次回から「罌丸責め」の研究成果をお知らせします、御期待下さい。



アブ・ホート一年生

狩 井 麗 作

第一章 アブマニヤの

夢はホート

奇ク愛読者の皆様、今日は、それがしアブマニヤドンキホーテが、皆様方に面白く為になるお話を致しましょう。それがしのたわごとを先ずあてにしないで、ついておいで下さい。小半時の間に皆様は、アブ王国のホート宮殿にたどりつかれるでありますよう。

前口上はさておき、アブと自認されて居られる人々に二種類あるのでございます。一つは、自らの肉体を前へ進めて、抑えがたき情念のおもむくまゝ、亦は反省し、しゅんじゅんちぎしつ縄を用い縛られ且縛り、又は鞭打ったり、切腹を致したり、これらの人々を

実行派と申しましょうか、哀しい宿命を十字架に背負って自らの足で歩みつづける人でございます。その本心たるや実に真摯にして、そこらの凡人のはるかに及ばないものを持っているのでございます。奇ク誌上に於ける古川裕子さん、羽村京子さん等、その代表的な方であります。

第二に、やはりアブニストに違いはありませんが、前者より軽度にして、或いは比重は同じなれど、身分的或いは経済的、家庭の事情的、諸般の理由で、未だ実行に至らない方々。即ち、観念派と申すべき類の人々でございます。奇クを、これ程立派に築きあげて来ましたのは、一つに、前者実行派の真情を吐

露し、文献的貴重な光彩を放ち、之が日本暗黒性史の妄をひらきつつある事と、後者観念派乃至夢想的性欲発露者の、より広範な支持があったればこそでありましょう。この派の人は、それがしの周囲にも無数に居り、一寸肩を叩き、眼をあけてさえやるならば、忽ちにして奇ク支持者になるものであります。本日は、この後者の部に、より近い方々にお話を致すもので、前者の方々には、全く素人臭いお話でございます。それ故、ご怠屈になりました折は、それがしより、数等上に属するアブ也と御自認あって腹をお立て下さるまじくお願い申し上げます。

アブマニヤには概して、コレクシヨン癖が

強度に内在して居ります。種々の下着を集めるフェティシズムから、単純なる雑コレクシヨンに至る迄、大なり少なり、自らの心を慰める糧となるべき実物が欲しいのでございます。当節はやりの実存主義のカテゴリーに入ると考えられましょう。しかし、実際に欲しくて仲々手に入らないのが、自分の性癖に合ったパートナーです。サディスチンはマゾヒストを同性愛の方は、同性の対象を——。夜毎、この胸のうずきを、いやしてくれるパートナー。求めよ。さらば与えられん。と云う言葉通りにいかない所に宗教のギマンと有難さがあります。奇クを読むことによって、この悩みは早天に慈雨となるのは、皆様先刻御承知でございました。わけでも、奇クグラフィヤの変幻夢遊の悩ましくも亦リヤリストイックな写真の数々。これは千万金にも代えがたく。毎日夜、皆様方の心のもだえをなくさめてくれます。

しかし、しかしでございます。人間程ドシ欲なものはなく、奇クの社より販売されているアブホートの数々を求めても尚、その先を求めたくなるのが人情でしょう。殊に奇クは公刊誌である以上、どうしても刑法第七十五条を避けて発刊せざるを得ません。やれ股

に縄目が喰い込んではいかんとか、わずかにシヤムハーレが見えるとか、枝葉末節の隙をうかがっています。ここに、奇ク編集者のお辛い板ばさみと、我々愛読者の昂進的不満が存在するのであります。いきおい奇クグラフィヤの写真では、きわどい一線を劃して、当然あって然るべき場所をかくさねばなりませんし、流腸マニヤの方はアヌスさえ見ることが出来ません。アブマニヤにとっては、隔靴搔痒の感止むを得ない事です。ここに、それがし、アブマニヤドンキホーテが一念発起した理由があるのでございます。それは自分で写真を撮し、赤裸々な姿をアルバムに収めたいと云う悲願でありました。数々のアブホートを奇クより求め、アルバムに貼り今では、疲れた心身をいやすオアシスです。しかし欲を言えば、その先のエロティックなりヤリティが欲しい。自分自らのナルシズムをも、写真に撮して眺める事により満足させたい。写真を撮りたい。之が毎日に強い願望となります。おそらく、皆様方も、このようなお心持を感じられるのではないのでしょうか。殊に自ら鞭打ったり、亦是鞭打たれたり出来る幸運な方は別として、夢みるだけで、チャンスが仲々つかめない人々は、そのあるべき状況を

写真にして持ってみたいものなのです。自分の好みに合ったポーズ、自分の好みに合ったモデル。ここにドンキホーテは出発せざるを得ない状態に追い込まれたのであります。

昨今五人に一人の割合で、日本人大人はカメラを持って居るとか。カメラはもはや特殊品でなく、文化的日用品であります。皆様アブニストの方々も、大体、半数以上は、大なり小なりカメラと名のつくものをお持ちではないでしょうか。そして、何とか、奇クグラフィヤにあるような写真を、ものにしたいものだと狙っていらっしやるのであります。それがアマチュアの本心です。奇クを読む者がカメラ所持者は誰でもが、辻村隆先生をうらやましく思い、あんなになれたらと、夢に描いて居るでありましょう。これ程アブニストの欲望には切ないものがあるのでございます。それがしもその一人であります。

さて、このようなドンキホーテが、カメラを肩に、どこかしらアブがありそうな世界をほろつき初めてもう二年近くもなるのです。この間の体験から、皆様方に直接お役に立ちそうなお話を、それがしがものしたたくさん失敗作品を、かゝげて、御説明致します。う。断って置きますが、全くの素人談議、辻

村隆先生の「緊縛に関する十二章」のような具合には、間違っても、及びもつかないものでございますし、寺小屋の先生と小僧程のひらきがありますことを御承知おき下さい。それがし、そのうちは、と大なる野望を抱いて居り、それだけが唯一のドンキホーテのとりえでございます。尚後章には写真のじご処理を述べますので、全くの初歩の方も、どうか、ついておいでで戴けるやも知れぬと妄想致して居ります。ああ、このドンキホーテ奴うっかり先生ぶって居りますが、あとで赤恥かかねばよろしいが。まずは、おやかましい口上でございました。

第二章 柳の下を狙うわけ

柳の下にはドジョウは居ない、と申しますが、手初めには、やはり柳の下に行くのが何よりも早道です。通ぶることは、いずれの部門でも危険きわまりない事は、皆様も御承知でしょう。さて、柳の下とは何処なりや。ホート求むるからには、カメラ屋ときまって居ります。主にDP屋がいいようです。勿論最初は、普通の写真の現像、焼付を頼む。そのうち知己を得ると云う順序です。が、くれぐれも、初めから野心を出してはいけません。

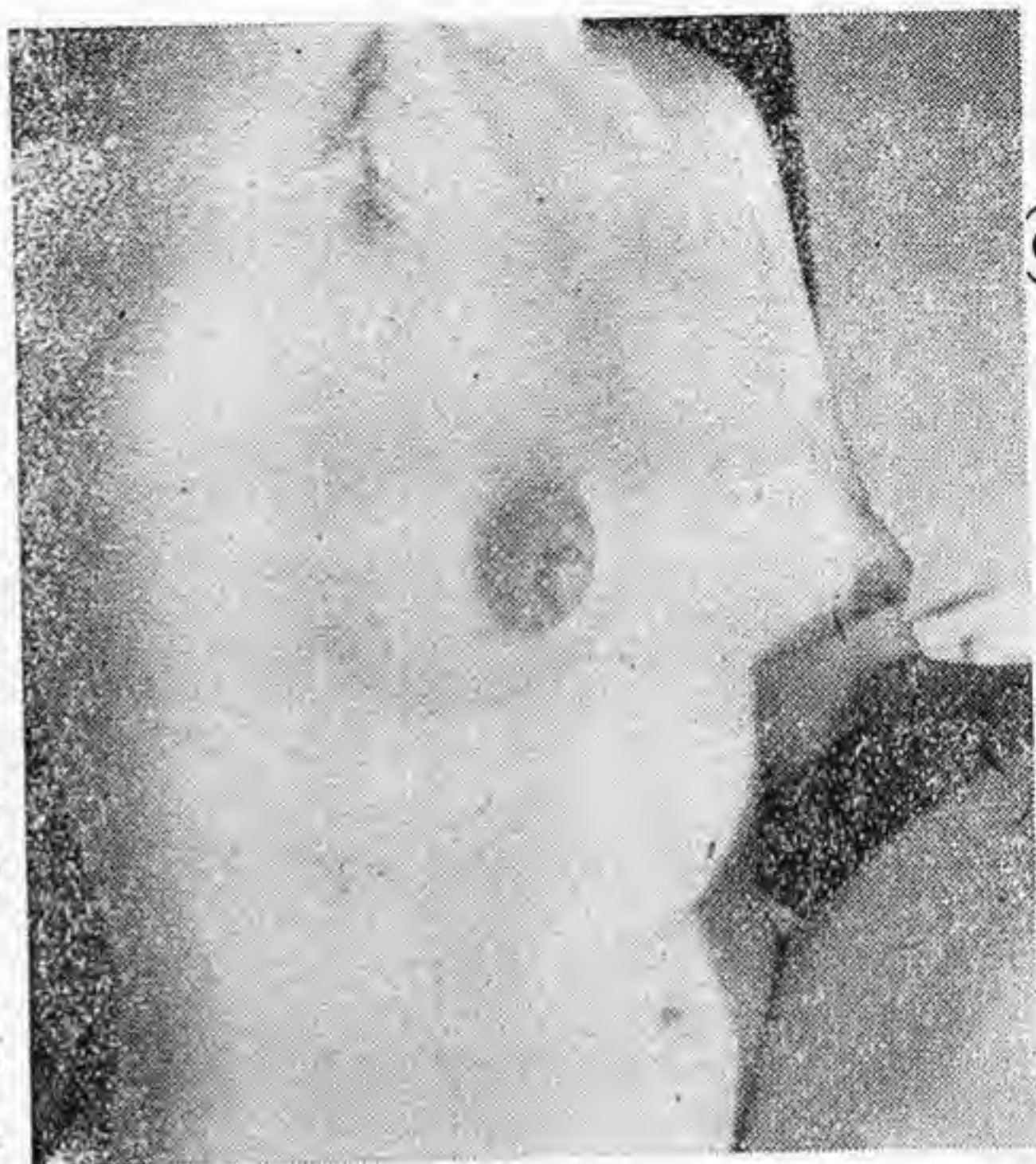
何ごとも、マンマンデーのスロモーがいいのです。

DP屋を何軒も知っておくと好都合ですがそれはこちらの財政が続かない場合があります。しようし、あちらこちらと尻軽く移り廻っては、知り合いになる度合もうすいので、やはり之と思った店を二、三軒ねばることです。知己を得て得をするか？ とまあ焦ってはいけません。十中の七八は駄目です。が一、二に思いがけない拾い物が入手出来たりするのですから、アブニストたる者、柳の下を狙うべきです。それがし、ドンキホーテは、F市の或る新聞広告社に勤めていました。この商売は顔を売る事が第一なので、好むと好まざるとにかかわらず店のあれこれに入りこんで知人以上にならねばなりません。勿論DP屋には進んで入り込みました。F市にも増えたもので百軒以上のDP屋がありますが、物になりそうな所五六軒に集中攻撃致しました。F市の特徴は、朝鮮動乱後、アメリカ帰休兵が集るRRセンターがあり、兵舎がある事です。いきおいオンリー、バタフライ諸嬢がたくさんいます。外国の兵隊は、セックスの面では解放的であり、且軍人で異国にいるのですから求めるなぐさめは、性であり、それ

だからこそ亦真剣なものがあるわけです。この兵隊さん達は、自分の愛人を得ると必らずと云っていい位、カメラに収めるものです。そして卒直大胆に彼女の本体を写して、その赤裸々な写真を胸に抱いて、戦地へと飛立って行ったものです。(勿論現在は戦乱は治まり兵隊も少くはなりましたが)この生フィルムがDP屋に来るわけです。いそいでくれとばかり、不出来であろうが、露出不足であろうがお構いなしです。又流行のヌードスタディオで撮して来たものもあります。こいつを狙うわけです。勿論分ったら彼等は憤激します。で余程DP屋の主人と親しくならねば駄目なわけです。

ここにそれがしが手に入れたのを二葉ごらん下さい。Aの方は彼氏が愛人を膝に抱いているところです。彼女の表情が、苦しそうでも、何だか、くすぐったい切なさに笑っている表情が実に良く実感を出しているではありませんか。これ程大胆卒直に、楽しそうにアタレもない所を撮したのは珍らしいものです。多分、彼の友人が撮したものでしょう。残念乍ら下部をカットせねば誌上に載せられないので、くわしく見て頂けません。Bは、同じ女性の単独写真でこれも亦両足首

(C)



を無理に紐で引っばられて、恥しそうな表情が何とも言えない情緒を出しています。他に何枚ありますが、ことごとく、エロティックすぎるので公表をさしひかえました。(編集部註、AとBの二枚の写真は、如何にカットしても、掲載を許されない性質のものでしたので削除しました。)

御兩人よお許しあれ。このように、明らかに、美しいセックスの遊戯を示された御兩人を立派だと思っています。この種の写真は

大なり小なり、或時期には大分流

れて来たようです。誠にそれがし破廉恥な男ですが、アブのドンキホーテでございますし、ただその一念に執着して居りまして、前後の見境もなく、主人をなだめすかして、貰ったものですし、チャンと代金も払いました。これもやはりアブ気狂のなせる業です。

この例で分りますように。割にアブホートをつかむチャンスに出合う事があるのです。とにかく、柳の下以外には、この種のものであろうたって、どだい無理な話なのですから。皆様、柳の下

を狙うべき理由がお分りの事と思えます。ただ注意したい事は、主人とごく親しくなつて切り出した方が確率が高いと云うことです。スローアンドスタディと云う真理がここでは当てはまるわけです。今では、この種写真(中には純然たる、非売ポルノグラフィイもあります)をアルバムに相当数収録しています。友人からうらやまれる珍品のコレクションでもあるわけです。

(D)



第三章 正々堂々と

ヌードスタジオへ

次には、昨今流行のヌードスタジオが当然浮び上って来ます。カメラをお持ちの皆様方は一度は、ここへ足を運ばれましたでありましょう。カメラ持つ者が一度もこの経験がないとあっては芸術性を疑われますからね。それ程、ヌードは芸術として流行しているのです。それ故に亦、此の場所では、真面目に振舞わねばなりません。少しでもアブ癖を出そうものなら、ヌードモデル嬢は憤然と室外へ出るでしょうし、マネージャーはあなたを戸外へ出すでしょう。だからいきおい紳士になつていなくてはなりません。まあ、焦らな

い事です。初めは裸体の女性と一つ部屋にいただけで、血が頭に昇り、手がふるえたり、二重撮しをしたりなんですから、度胸を作るためにも、先ず最初の二三回は、小手試し、ゼントルマンで充分です。そして女体の神秘的なデリケートさや柔かく美しいニュアンスを、心ゆく迄味う事も亦アブニストとしては、凡々人より一段染しめることです。そして、フエティシユな人でしたら、この場所、ゆっくりと耽溺出来きます。

何しろ、代金を払って堂々と何の恥ずる所なくリクリエート出来るのは、ヌードスタジオだけなのです。こんなに簡単に女性を裸にしようと思っても、普通の家や街頭では一寸無理な話ですからね。腋窩フエティシズムの方には役立つのではないかと思います。次の写真をごらん下さい。CDEの三枚は



(E)

F市の某ヌードスタジオで撮ったものです。この女性には顔立ちもよく、それに乳房が先に尖った恰好に突き出していて、何とも言えずエロティックでした。特にその腋窩の毛が美しく、悩ましい限りなので、このように手をあげさせて、乳房を横から撮してみたのです。しかもこのモデルさんは、丁度私がスタジオを訪ねていた時、新聞広告を見て使って戴きませんか、と言ってやって来た人でした。私がテストをやったわけです。小供を持った事があるらしいのは、この乳首から分りますが、割につつましく初々しいのが何とも魅力的でした。

参考までに申し上げますと、現在F市のスタジオでの料金はモデル一人一時間当たりが六〇〇円と七〇〇円。一時間を越えたと三十分毎に二〇〇円と三〇〇円の割増しになります。この夏東京でドンキホーテが渡り歩いた

時は、三十分三〇〇円からの低廉さから一時間八〇〇円の高級もありましたが、低廉な方は、赤線地帯と同じく、設備が雑で、味わいも雰囲気ありませんでした。

次の写真FとGをごらん下さい。うすい黒のベールをまといて乳房をわずかに出させたものです。前のモデルと違って清純な処女性がよく乳首に表現されています。特にFの方は、下からのライトで、ふくよかな大きいヒップが、くつきりと見える点、ヒップマニヤのドンキホーテを喜ばせてくれたものです。単なるヌードと違った、妖しい雰囲気を感じてくれるのも、アブマニヤの一念が、求めるからこそのでありましょう。軽いフエティシズム及びサディズムを持ってられる方は、堂々とヌードスタジオでモデルに、このようなポーズを取らせる事が出来るのです。Fの場合、手を後に廻らせているので、一寸見ると縛りのように見えるのです。

此処で、本論に入る前に、皆様方に、写真術一年生の心得を話してみましよう。それには先ず、それがしのカメラから紹介しますのが礼儀と思います。それがし、安サラーリの中で二台を求めて居ります。一台はミノルタ35、F二・八のレンズで、この方は三五ミリ

故、速写が効くのと三十六枚写せるので便利
です。がフィルムが小さいので、焼付ける場
合に、引伸さなくてはならぬのが面倒です。
カメラだけで、引伸機等持たぬ人には不便で
すので、あまりおすすめ致しません。何故な
ら、折角写した秘密写真をDP屋に持って行
くのは、少々恥しいし、亦、前述ドンキホー
テみたいな奴が、写真を失敬するかも知れま
せんからです。因果は廻る。之はちと自ら反
省すべき事でした。出来れば、普通のプロニ

(F)



I型、それも、上から全部のぞいて見れる、
二眼レフ型が、初歩の方には適していましよ
う。それがしのはマミヤV型(プロニーの六
×六型と、六×四・五型の二種に兼用出来ま
す)このプロニー型だと、引伸機持たなくて
も素人で密着焼きが出来ますし、フィルム現
像にも割に便利です。ホートマニヤの方は、
その人が初歩であれば、先ずプロトニー型の
カメラを求めるべきでしょう。

さて、カメラは用意出来たとします。その
前につけ加えますと、カメ
ラを持たれない方でしたら
大抵のモードスタジオには
貸カメラを備え付けて、サ
ービスに無料で貸して呉れ
ます。大体、安価な二眼レ
フ(例えばファーストレフ
リコーレフ等)が多いよう
です。だからカメラの用意
のない方でも行けるわけ
であります。

さて次には撮し方といき
ましよう。スタジオには、
大小五個や六個それ以上の
ライトがあります。全部つ

(G)



けると、二千ワット位の明るさになりましよ
う。普通は二燈か亦は一燈でも結構です。五
〇〇ワット一個に三〇〇W一個の場合、その
光源から被写体が三メートル以内でしたら、
カメラの絞りをF五・六位にして二五分の一
位で写せば大体大丈夫です。初めは露出オー
バーの方がいいようです。この場合二五分の

(H)



ボせていたのですから、あまり口幅ったい事は言えないのでございます。

フィルムを選ぶ場合、SSと言つて感光度の速いフィルムがあり（価格は一本一九〇円）ますので之を使用し、ライトを二メートル位に近づければ五十分の一で切つてもいいと思います。あとは、もう馴れること即ち度胸がつけばいいのですから、なるべく低廉なスタジオで何回も試写してみることです。之で一応、初歩の初歩を終り、いよいよアブニストの牙城に、侵入してゆく事に致しましょう。

第四章 ポツポツ

本性を表わす事

一以下のシャッター速度の時は、三脚にカメラを固定させるべきです。三五分の一以上は手持ちで大丈夫です。ピントは良く合せなくてはなりません。あがると、意外にピンボケが多いものです。亦、二重撮影防止装置のないカメラは必らず、捲き忘れないように注意せねばなりません。とはいふものゝ、このドシキホーテは、しよっ中二重うつしばかりやらかしてモデル嬢より注意を受ける程、ノ

さて、一応、モードスタジオで女性モードを、顔赤らめる事なく撮せるようになったと致しましょう。これは基礎工事ですから、サボル事なく、充分に学習してなくては、いざ鎌倉と云う時に役に立ちません。この学習が終る頃は、皆様方も、何となくウズウズと心の中にあやしい欲望が起つて来るであります。

しよう。このモデルを縛ったら、と考えると咽喉が乾くでしょうし、その妄想が次第に大きく頭の中に拡がって来て、モデルを見ると縄や、鞭等の責め具を連想するようになります。アブニストであれば当然です。あなたがサディストならば、縛らずにはおれない気持が昂進するのは生理的必然ですし、マゾなれば踏まれないとか、尻の下に敷かれたいとか考えて来ます。しかし、だからと言って、そのまゝ、モデルに迫るのは早計ですし、失敗致すこと必定。やはり、ゆっくりと責めねばなりません。女を口説くのも、一種の責めと考えれば、楽しき限りです。

先ず、自分の好みに合った、これぞと思うモデルをきめて、この人に通うのです。三四回も、じっくりと通えば、次第に相手の人柄も分つて来ます。極端に、アブに潔癖な女性とか、陰險な女性だったら、あきらめて下さい。失敗だけならいいですけど、若しかしたら、あなたに損害や不名誉をもたらすかも知れませんから。彼女が明朗で気のおけない女性だったら、四五回目に、奇ク発行の「美しき縛め」でも見せる事です。そして軽口を叩き乍ら、あなたの好みや望みを、ちよっぴり出してみます。まあとか何とか言つて、近よ

って見たり、ひどく反対の顔色にならないようだったら、今度は短兵急に、アブの本性を表わし、敵の本陣に切り込みます。しかしあくまでも、やさしさを失わず、礼儀も一応正しくしては駄目です。モデル嬢に信用されない限り、失敗致しましょう。最初から最後迄、ゼントルマンであるべきです。(之もスタジオ内の事だけで、別な場所では、或いは少し違ってきましよう)

本陣に切り込むと云うのは、用意して来た縄や紐を、さっと何気なく取り出して「決して変な事をしないから、一寸だけ、真似事にするんだから」等、相手を安心させ乍ら、手早く縛ってしまうのです。この時、遠慮していたり、思い切り悪く、ぐずぐずしていたら、反ってあやしまれて、失敗します。何事も、自分自らが先ず信じて行い事です。鬼神も又避くとは古の教えにもある事でございますから。とにかく、手際よく軽く縛るのです。相手が無口でおとなしければ、亦駒の進め方も違って来ます。おとなしい女の人はその聲にはまれば、明朗な人より、手取り早く事が運びます。この方は後に実例をあげて詳述しましょう。

とにかく、縛る場合は、最初はいくまで柔

らかく、ゆっくり縛るべきで、決してきつくしては駄目です。

そして、そのモデル自身が妖しく美しい雰囲気を作り出したように言い乍ら、撮影にかかります。先ず言葉で雰囲気を作ってやる事です。こちらが黙ってしまったら、モデルは不安になり嫌いますから、くれぐれも皆様方の努力ある言葉が必要とします。縛り方も、一応ポブエラーなものが適当で、エビ責めとか逆さ吊りの無理なものでなく後手高手小手とか、胴縛りとかがよろしいでしょう。又マスクとか眼帯をつけさせるのは一層やりやすいことであり、この方は、モデルもアブ的行為とは考えないようです。だから、眼帯とかマスクのマニヤの人でしたら、案外容易に目的を達し得るわけです。

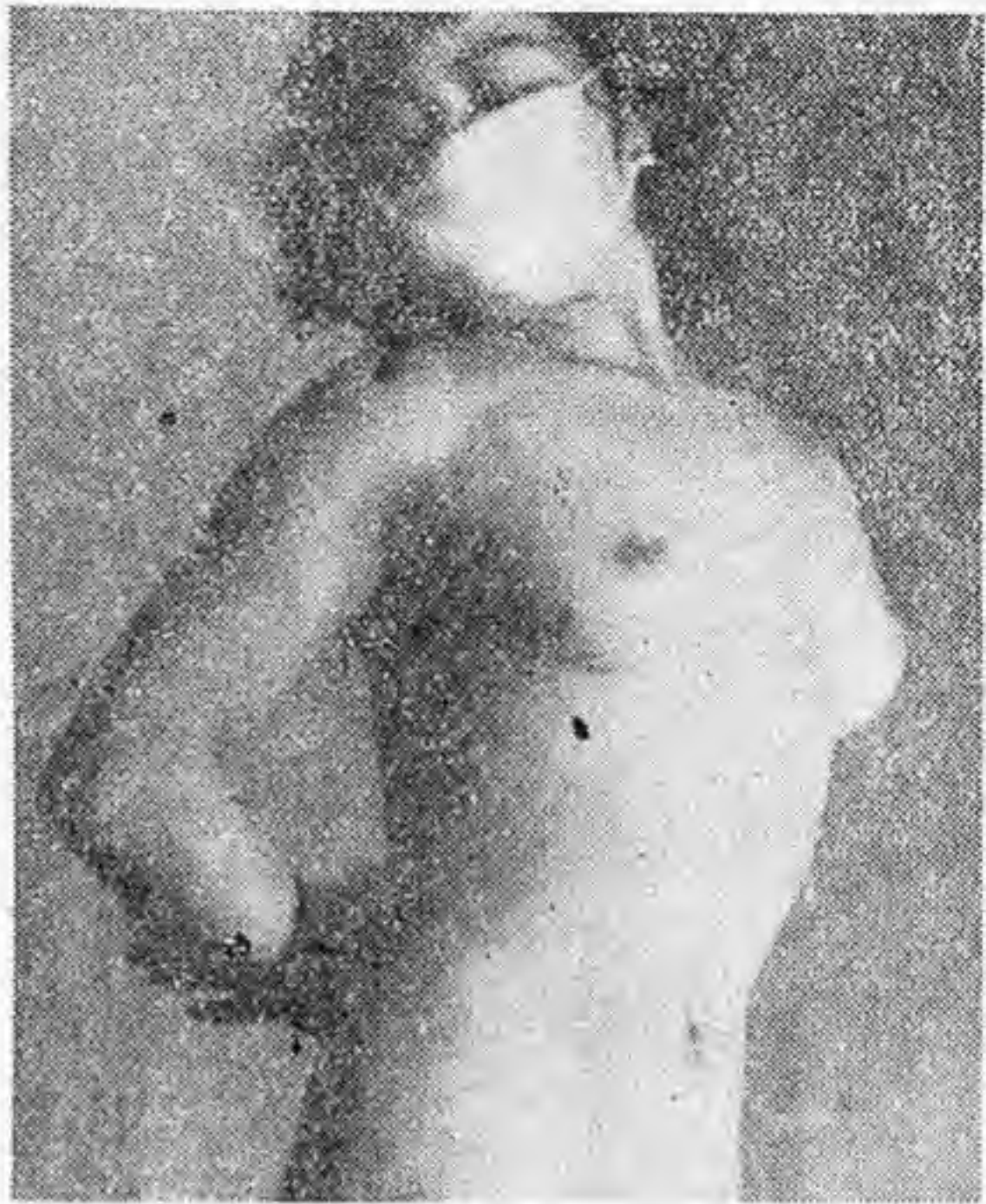
そこで用意が出来ましたら、基礎学習を充分に生かして時間内にバタバタ撮影します。とは言っても、初めて目的がなかった嬉しさ、上ってしまい、どんな人でも二三枚は二重うつしが出来てしまいます。それがしもそ



(I)

の例にもれず、大失敗をやらかすこと数度でした。ここにかかがる写真H及びIをごらん下さればわかります。両方とも御念入りにも三重撮しになつて全くそのあわてぶりを暴露しています。ここにわざわざそれがしの恥をさらけ出しましたのは、このような写真も亦面白いと云うことです。負け惜しみめいて済みませんが、仲々アブストラクツ的モダニズムを表現しているようにお思ひになりません

(J)



か。軽く縛られた彼女の豊かな肉体と曲線のデリカシー。仲々見捨てたものでないようです。いやこれは自画自讃と云うもの。ドンキホーテの道化ぶりをとくと御笑覧下されば、それでよろしいものでございます。

このような失敗は初めの二、三回で終わってしまうのが普通ですが、それがしの如き純情型は何時迄経っても仲々度胸がすわらず、ついワクワク致して、最近も大失敗をやらかしました。この話は亦に致しましょう。次のJなる写真は、後手に彼女を縛り、大きく白

いマスクをかけさせて立たせたものです。マスクが良く似合うと言うと彼女自身まんざらではなさそうで、様々のポーズを致して呉れました。豊満な身体に、この白い猿轡は、仲々セックスアップビルするものです。たくさん撮した中で、之は身体のこなしが自信たっぷり、縛られながらも、自己を誇らしげに示しているポーズは高慢で一種サディステックでさえありました。

以上、スタジオの中で、このような初歩的縛りに成功した場合は、撮影後、必ずモデルに、いくらかの

(二〇〇円と五〇〇円)のチップを、弾んだ方がいいようです。そうすれば、次の機会にも、こちらの希望に協力してくれそうですし、あわよくばです、更に進んで単独に別な場所での撮影に引き入れて行く事にも可能性があるわけです。但し、くれぐれもスタジオのマスターには秘密にして居なくては、チャンスは永久に逃げてしまいます。ここまでこぎつけるのが、ドンキホーテにとつても仲々容易なことではなく、そうです半年もかかりましたでしょうか。しかし希望を抱く者こそ幸なり

で、求める事切なるが故に道は自ら拓けてくれるものです。皆様方もどうか勇気をお出し下さい。くよくよしていても、世界は廻りません。失敗は成功の母です。

これからドンキホーテの話の第一回を終わります。

第二回目には、いよいよ「個別交渉からアブ撮影へ」「或る貴婦人との出合い」等を実物写真で御説明し、且つ、撮影したフィルムの人素人に出来る処理法等お知らせ致したいと思つて居ります。

アブ王国に栄あれ！ アーメン。

(この項終り)

【読者通信】 私は大正八年生れで、昨年夏迄終戦の年より結婚生活を送りましたが、現在独りで暮しております。前戯として妻を縛る事はやりましたが、マゾではありませんでしたのに拒否もせず其点不満はありませんでした。現在の私の夢想は古川裕子さんのような人と離れ屋に住んで楽しく送りたいのが念願です。結婚生活の安定を得てからしたい考えですが、休日が多いので、どなたか連絡出来れば、大阪か京都の静かな旅館で緊縛遊戯に一日過したいのですが、その様な方なれば結婚したらどんなに幸せかと夢見ています。

(京都 I・N 生)

Das Grausame Weib

Dr, Yohannes R, Birlinger

△残虐なる女性達△

—1901年刊行の独文絵入単行本より—

森 本 愛 造・訳

修道院に於けるこうした鞭打について、恰度ウルロ博士(Dr. Wilo.)の論文の一部に例証がある。(著者註||本引用の原著は下記の通りである。Die Fragellomanie, Dresden, 1901||「鞭打狂」ドレスデン市、一九〇一年刊)「マリア・テレジア女王(訳者註||奥太利の女王)」に仕えて有名であったカウニツ公(Kaunitz)の実母は、東フリースランド(Ostfriesland)の生れで伯爵夫人であったが、その少女の時代即ち一六九六年にブラーグのある僧院に行った事がある。彼女は大変活発な性格だったので、その僧院の気風になじめなかった。そこで、次から次へと色々な悪戯をしたり、暴行をさえ働いた。温和しい僧院長も、是には手をやいて彼女に宣告したのだった。「貴方には白樺の笞が一番ふさわしいですね。きっと、貴方は天使達が、空で唄う歌声に合わせて、精一杯の声で叫ばなければ、いられないでしょうよ。」そうして、白樺の笞刑の宣告を他の尼達が知って、嘲けたとき、彼女は、矢庭に二、三人を殴った。実際の刑の判決は翌日行われた。「白樺の笞と傷につける塩水とが、貴方の測り知れぬ傲慢さをきつとなおして呉れます。マリア、笞はイヤというほど、貴方の曲った魂に響くで

しよう。刑には手心は一切加えないのですから、きつとよく利く事でしょう。私は、この私の愛する子供が、笞によって、改心し、ひいては、他の子供達にも警告となる事を希望します。」

当時夫人は十三才であったが、その身長は五ライン尺であったと記録されている。プロンドの少しばかり捲毛のある長い髪を丁度タテガミの様に下げていたし、顔は輝くばかりに白く、頬はやや赤味がさしていた。後に彼女は、その頑丈な肉体力に於て、他に擢んでいたが、この時もその体力に物云わせようとした。つまり、喜んで笞の下に身を投げ出そうとはしなかったのである。立ち上って、彼女は叫んだ。「私はグレーチェルのツイルクセーナですよ。」(Gretzel, Cirkseena)その表情には門地の誇りを漂わせて、そうして、不作法に僧院長に背中をみせて、椅子や長椅子に拠り、近づく者には、一撃を加えるぞという様子をしてみせるのだった。力の強い二人の尼が選ばれて、彼女を取り押えようと近づいた。すると、彼女は、山猫の様に、喰いつき、噛り、ひっかいて抵抗するのだった。併し、漸く二人の尼僧はこのフリースランドの小猫を押えつけ、長椅子の上に平らにし

ばりつけてしまった。十人の尼達が、手に手に白樺の長い枝を編んだ二尺位の笞を持って彼女の上衣がまくられるとすぐ代る代る周囲をまわり乍ら打つのだった。刑の執行の一切は、外科の経験のある一人の尼僧によって、監視されていた。夫人は、この残酷な刑に、一声も嘆かず、喚かなかった。塩水で笞の痕を洗われた時ですら静かにしていた。だが、白樺のとがった、ふくらみで引き裂かれた条痕にしみわたる塩水の苦痛は想像に絶していたので、遂に夫人は失神してしまった。翌日になっても、又それから、三、四日たっても笞の傷痕のカサブタと条痕は、はっきりと残っていた。

アウグスブルグ (Augsburg) の召使女の一種 STEEFEL NONNEN 達 (訳者註) 長靴をはいている保姆の意) はある珍らしい教育法を継続していた。彼女等は、体刑を次の様な方法で行った。つまり、子供達を炉の穴に頭を差込ませて、尻をむき出しにして、手で思い切ってひどく懲しめるのであった。

(著者註) 本引用はクーパー 前出の著作より。(過去の数世紀間は、子供に対する躾けとはこういったものだったのである。以前日常普通の事であったこうした行為は、最早

現代では例外的なものとなってしまう。併し、如何に例外と云っても、児童虐待の告訴と、性的な理由に基いてなされる残酷な懲罰の例とは大變数多いのである。特に、最も興味あることは、最近の其等の諸刑が、大部分女性による加虐行為であるという点である。次にそういった例の幾つかを引例してみようと思う。

「一八九八年夏、ア、ルガウエル報知新聞 (Aargauer-Neuigkeiten) は同地に於ける諸種の児童虐待に言及している。これらはすべて裁判所によって証明されたものである。

或る慈悲心に富んだ姉妹は、他の人々よりも十四才までの男女児童を裸にして、其のお尻に鞭を当てることに非常に熱心だった。姉妹達の内の二人は懲戒をうける子供を押さえて、他の一人が鞭を揮るうのだった。十五才のマルタ (Martha) は、以前の教師からは嘘をつかない良い子と評されていたのに、事件の調査によると、次の様に取り扱われたのである。マルタは、授業中にオシャベリだった科で、頬を平手打にされた挙句、一室に閉じ込められた。耐らなくなったマルタは妹の処へ逃げてしまったが併し、やがて捕まて、学校へ連戻され、烈しい懲戒をうけねば

ならなかった。前に述べた三人の姉妹達は、マルタを朝早く叩き起し、ソファの上にうつ伏せに伸ばして、二人が何時もの様に押えつけ、一人が白樺の枝によって作った笞で、二十回お尻をなぐった。彼女等の一人は、打擲を見守り乍ら笞数を数えるのだった。その後でマルタは地下室に閉じ込められ、夜の九時頃まで帰して貰えなかった。

しかも、翌日も、同じ刑罰が、実施されたのだった。マルタの同級生達は、いつもこういう風に罰されたのだった。中でも、十三才から十五才までの男の子が、素裸にされて一人ずつ部屋の中に呼び込まれ、慈悲心に富む姉妹達の手で鞭をうけなければならなかった事があった。マルタは、その光景を、窓越しに、始めから終りまで見たのであった。子供達の中の一人は、ズボンを脱がされる事を拒んだので、忽ち、五〇回の鞭打を課されたのだった。之等の罰は、一にその決定を、三人の姉妹がつける学課の点数によっていた。

(訳者註) だから、三人姉妹の教師は勝手に児童を鞭打する機会を、思いのままに作る事が出来たのである。(マルタは、地下室に閉じ込められている間中、一杯のスープ以外何も与えられなかった。又、一人の女生徒は

縫物をし乍ら、口をきいたというだけの事で裸にされたお尻を、鞭で懲しめられた。又、フィリアーレ・リッケンバッハ (Filiale Rickenbach) の女生徒達は、夜、粗忽をしてしまった為に、表で、自分の尿を入れた尿瓶を首から吊して立っている事を要求された。同じ過ちを犯した男の子達は、或者は自分の濡らした敷布を拡げ持って、往来に立ってなければならなかったし、或者は、食事を摂る時でも、自分の便器に腰を下ろしていなければならなかった。

更にもう一つの例。コルクの修道尼アンゲリカ (Angelica) は、修道院から脱走したのだが、その暴露した修道院の内情は、信頼すべき且、最も最近の例に属する報告である。(Klosters zu Cork.) (著者註「本項は、『アンゲリカの追想』ライプツィヒ市刊——Memoiren der Schwester Angelica, Leipzig——Uyppse.」)

「大広間には、ここに居る尼達の殆んど全員が集められていました。少くとも、若い尼や何人かの女生徒と見習修道尼、在俗の女の信者達は全部集められていました。十七才位の一人の少女が、殆んど裸で、動けないように長椅子の上にしっかりと革紐でくくりつけ

られていました。長椅子の横に立ちはだかったアダ・ロウランド (Ada Rowland.) 尼が手にした白樺の笞を振り上げました。忽ち、烈しい音と共に、第一撃が、むき出しのお尻の上に狂暴に叩きつけられました。縛りつけられている少女は、その恐ろしい苦痛に身悶えしましたが、やがて、弱い声で呻くだけになってしまいました。勿論、それまでに、少女は声を限りに泣き叫んで疲れ切ってしまうのでした。少女の身体全体が、丁度一つの傷口の様に見えました。身体からは、至る部で血がにじみ、滴り落ちていました。十回目の打撃で少女は失神してしまいました。併しあと二打ちの笞をうけねばならなかったのです。僧院長は、少女に水をかけて意識をはっきりさせた後、改めて、残りの二笞を当てたのでした。」

若し、読者にして、之以上、惨虐な笞刑について知りたいならば、右にあげた原著を参照せられたい。

又、パンカウ (Pankow) (訳者註「この字は或はパンコフと読むのかも知れない。')の近くのシロア (Siloah) に在った救済院の看護婦達が、野蛮な懲罰を好んだという報告がある。暫くの間、ここに居た事のあるパウ

リイネ・ティテル (Pauline Tittel.) が云っている。つまり、ティテルが、其の頃、看護婦長のゾフイ・ヴェーゲネル (Sophie Wegener) によって、懲戒室に押し込まれて衣服を脱がされた後で、鞭で打たれたとき、こんなことなら、牢屋に入った方がもっと況した、と感じたというのである。(著者註「Raw, Die Grausamkeit, Berlin: 1903; P. 298——ラウ著「残忍性」伯林刊、一九〇三年 第二九八頁より引用した。')

猶、この看護婦長が、ティテル虐待の科で後に裁判所に喚問されたときの証言は、注目すべきである。即ち、虐待や懲戒の事実を肯定した後、婦長は誇らしげに付け加えたという。「懲戒の時は私が鞭で打つのですが、それも徹底的にぶちのめしてやるのですわ。」同様な虐待行為についてウイenna (Wien) の看護婦達の間で起った事件についての報告がヨハンネス・グットツァイト著の「学校看護婦」(Yohannes Gutzzeit, Das Prügeln in der Schule.) の中に見られる。

一八八八年の春、ウイennaの「我々の愛すべき、恵まれざる看護婦」という施設で、十三才の娘が、首を吊って死んだ事がある。娘は新しい規律に従う事が出来ず、度々懲戒を



「鞭打狂の鞭の下に」が詳しく述べている。

彼女は、一九二三年に、男女の生徒達を、いかがわしい客の目前で屢々鞭打った事についての判決で、五年間の重禁錮に処せられている。何等つつみかくす事もなく、公判廷で無造作に、卒直な告白をした中で、彼女は、自分自身十三才のときに入れられたグラアツ (Klosters zu Gran) の修道院の教育について、次の様に述べている。

(訳者註) ここで、グラアツという土地の名が出てきたので、一寸カディヴェック女史の職業其の他について、注意を喚起しておきたい。

勿論グラアツは有名な学芸の都である。但し私は、其故にグラアツを覚えているのではない。其の勇敢な魂と、不幸なる生涯の故に

世界に其の名を残しているドクトル・ザッハール・マゾッホが教鞭をとったのがこのグラアツ大学である。マゾッホの被虐方法其の他は既に、古典的なものとなってしまう。併し、他の古典と同様に、氏の被虐の態度や方法は、現代の Ligation 一辺倒の被虐法に較べて、典麗ともいえる程美的要素に富んでいる。そうして、毛皮に対して示した幻想的な被虐愛好の傾向は、正常性生活よりも性行為を高い格調の上に置いたとも思われる。或程、現代に於ても、被虐愛好者の多くが、日夜、夫々の環境の不便と戦い乍ら、其の方法について肝胆を碎いている事は、最近の欧米及我国の諸資料によっても知る事が出来るが未だに其の性的昂奮の質が、マゾッホの考案した、竜騎兵の制服に、毛皮のマントというパレエ的な華やかさをすら交えた衣裳——勿論性的な意味での——を私は知らない。グラアツは其の様な連想を次々と私に起させる。

次に、ガディヴェックの職業について。尤も、職業は教師であるが、其の性的満足と、経済上の満足とを同時に得ようとした方法についてである。賢明なる読者は、既に「いかがわしい男の目前で」という件りで察知せられたであろうが、男性の比較的多数が持つ傾

うけた。そうして、その時も、若し生きていれば、新しい懲戒が彼女を待ち受けていたのだ、其が恐しい為に死を選んだのであった。

二十世紀に入ってから、少年の感化を主とした目的としている僧院では、子供達に対する懲戒が、偶々成年に達した後でも実施される。このことを、エディット・カディヴェック女史 (Edith Kadivec) の自叙伝 Unter der Peitsche der Leidenschaft, Bekenntnisse, Astra Verlag, Wien, Leipzig (ウインナ及ライプツィヒ市所在のアストラ社刊

向、「視虐愛好」を満足させる為に、歐洲で屢々、生徒懲戒又は、みせる為の鞭打が行われた事は、知られている。就中、「ロシア宮廷の踊子の日記」という珍書が、戦後我國で発売されたが、この中に矢張り、みせる為に針子の懲戒をする所があるし、これ以外の書にも、屢々、そういった場面が出てくる。私は、これも、若し、女子又は男子の被虐者が露出症的傾向を持っているとすれば、必らずしもいけないとは思わない。これも、相互の偏向性慾の発散に与って力あることといえようと思う。

屢々、機会ある毎に力説するのであるが、奇巧等の個人的偏愛誌は、相互の発散を満足させる事が出来れば、その目的の大半はつくしていると思う。文獻上の価値云々も、勿論重要ではあるが、其れは、前者が一応成功しからの事。といって、私は、必らずしも、この残虐な女性達の訳文が、その目的に充分であるとは思わない。併し云える事は、本書が拙訳によつても、空想上の加虐、被虐の無数の種子を孕んでいる事である。こうして、例証された事例が、殆んど事実に基づいている事である。私は努めて、訳文の難解をも願わずに、場面描写以外の点では紛飾を一切さけて

いる。其は、之等が事実であるという事が、発散乃至は空想上、甚だしく、強力な拍車となる事を、私自身が感じるからである。妄論多謝、それでは、カドヴェツクの引用に移る。只、前述の事を頭において、カドヴェツクという女の様子を頭の中で描いてみてほしいと思う。」

「些細な不作法に対する、度重なる肉体上の懲戒が、きまつて私に課されるのでした。」

又別の部分で彼女は述べている。

「一人の娘が、ある過失の為に罰せられる事になりました。尼さんは、その娘を懲戒室へ引きずり込みました。私は、これから起る鞭打懲戒の事を考えると昂奮の為に全身がわななくのでした。そこで、私は尼さんに頼みました。「どうか、一緒に居らして下さい。」「いいえ、それは禁ぜられておりますから。」「それでは、私は扉の外で、音をきいていましょう。」そして、娘は、姿を消した。私は、きつと、縛りつけられていたとしても、その綱をひきちぎったでしよう。それ程私は昂奮しておりました。ところが、二、三分たつと娘は帰ってきました。(カドヴェツクの示した行為によつて尼は断念して)懲罰はなく、娘は、戻されたのでした。併し、その娘は、

私に云いました。「私は罰されませんでした。私は気分がよくない。」と。」

同じ著者は、彼女自身十五才の時に、不熱心な態度をつづけた為にうけた鞭打について語っている。

「授業が終つたあと、私はその罰をうけました。私は恐ろしさと共に烈しい昂奮を感じて尼の足にしがみつきました。細い答が、十回シユウツと唸りを上げて、私の体の上に叩きつけられたのでした。」

(訳者註)右の記述は、純粹な「鞭打狂」の性格を示している。被虐、加虐の別なく、彼女は只、鞭打そのものに性的昂奮を感じたのであるうと思われる。こうしたものは、Fragehomonie フラゲロマニア 鞭打狂、と名付けて、加虐性行為や、被虐性行為の方法として用いられる鞭打とわけて考えねばならないと思う。つまり、之は、フェティシスムの一つであつてマゾ・サディスムの純粹な形ではないと思うのである。こういう理論は、漠然たる偏向をしか感じていない読者の中の或る種の人々には、人生の指針上の一つの目安となるのではあるまいかと思つて、附記するわけである。」



女性のお灸十態

絵と文 岩 瀬 祥 一



お灸はいつの時代でも婦人層になか／＼大繁昌である。お灸愛好者及びお灸信者等、お灸を据える人の大部分が女性であり、女性によりお灸と云うものが成立ち、お灸の流行を生み出している程だ。婦人のお灸愛用者の多い事は色々と理由はあろうが、女性特有の体質が好く灸にマッチしており、即効と共に熱い辛さの

中に熱刺激を渴望する快感が得られ、据えた後の快い陶醉感とで、一挙にして二重の効果をとおさめるからである。併し、女性がお灸を据える、或は据えられる場合に於ての理由は大別して大体次の四通りになる。

一、病気を治療する為に据える。

(治療の灸)

二、病気がなくとも、健康維持の意味で据える。

(予防の灸)

三、灸の熱い刺激によって、性的被虐快感を得る。

(マゾヒズムの灸)

四、折檻、即ち戒めの為に据えられる。

ど、以上になり、尚お灸そのものを見ましても、大別して次の三種類に分類されます。

一、据えた跡、膏藥を貼って膿ませるのが特徴で、最も大きな灸。(打膿灸)

二、人体の十四経、いわゆる筋にツボを下するもので、大体豆粒位の灸。(本流灸)

三、健康灸ともいふ、予防の為に米粒程の灸を据える灸。

(まじない灸)

と、以上になります。

従いまして「女性のお灸十態」の絵図は、種々異なる各層の女性を主体にして、右四つの

いずれかの理由により、打膿、本流、まじないの内、どれかを据えているのを描きました。左の文と照合して絵を御覧下さい。

(治療の灸)

令嬢は俯伏せになって花恥しいお尻をまる

出しにめぐり上げ、優美で柔かなお尻に大きな打膿灸を、お妾さんは上半身を肌脱ぎして滑らかな背中中の皮膚に本流灸を、それ／＼病氣治療の為に、据えています。細い煙を立ち昇らせて艾火が、だん／＼燃えて来るにつれて女の美しい真珠の肌がジジジと焼けどしてゆき、淑やかなお嬢さんも、垢抜けのしたお妾さんも、「アッ、アッチチチュ」と悲鳴を挙げ乍ら、必死になって辛抱するのです。

(予防の灸)

令嬢 (治療の灸)
打膿灸



「お灸は一種のヤケドですから、熱くって厭ですわ。それに灸痕が出来るでしょ。なんだか厭ですわね」と言い乍らも、芸者さん達はお灸を据えないと云う訳でもなし、嫌な訳でもない。それどころか、健康を保つ意味から云って

お灸を据える婀娜な年増の芸者の数は圧倒的に多いのである

純情可憐な女学生でさえ

燃えてゆく艾火によりすべ／＼とした真白い背中中の肌を、ジリジリと焼き焦がして灸痕をこしらえ、感傷的な魅惑に溢れた背肌と

飛躍するので、芸者達は尚一層大きな灸を据えて、より以上の悩ましき美人、此の世で最も素晴らしい女性に感受してゆくのです。

(マゾヒズムの灸)

女は概して耐久力も強く、灸で味わされる

芸婦 (治療の灸) 本流灸



刺戟的な行為に云い知れぬ悦びを感じるようである。灸のたまらない熱さ辛さに無上の被虐の悦びを感じるのは、矢張り女性特有の特権であり、本能であろうか。背中中の肌がじわりじわりと容赦なく灼けてくる。その被虐願

芸妓 (予防の灸)

まじない灸



女学生（豫防の灸）

まじない灸



望のために女はお灸を据えるのだ。

統肌といってもよい女の背中の上で、艾火が伊吹山の様に煙を上げて燃え上って来ると丸裸になった未亡人は太い柱にすっかり掴まって、むっちりと肥えたお尻を左右にプリプリ蠢めかし乍ら、その苛酷な被虐の陶醉に浸り、上半身を露わにしたマダムは被虐の歓喜

に打ち震えつゝ、手拭を食いしばって悦虐を味わっている。諸肌脱いだ女給さんも、後手に縛られたまゝやはり豊かなお尻をムチムチと多少交互に揺らし乍ら、恍惚境へと耽溺してゆくのです。女の限りないマゾヒズムの充実感を存分に味あわせてくれるお灸。そしてまた、背中にお灸を据える女の嬌めかしい媚態は、得も云われぬ凄艶さと惚れ／＼するくらいの妖しい悩ましさを漂わせてくれる。

（お仕置の灸）

女の成熟し切った丸いお尻と、肉附のいゝ背中の上でもう／＼たる薄紫色の煙が立ちこめている。燃え広がる艾火が存分に彼女達の

はち切れそうな弾力性のあるお尻を、肌理の細かい綺麗な背中の肌を、ジュージュー

ー、じりじりと焼き焦がしてゆくのだ。「あ、あゝ熱

いお願いよ、お許しになっ

て、あゝ止めて、ひっ、アツチツチツチツチツ

と

かん高い叫び声をあげた淫

売婦は、上半身を波の様に

うねらせて、焼け爛れてく

女給（マゾヒズムの灸）

打腫灸



／＼振り乍ら、あられもない恰好になって、まるでカチカチ山のタヌキの背中の様に火傷されてゆくのだった。職業婦人も辛抱枕に犇と獅咬みついて、随分と大きい打腫灸で責めさいなまれた。そのお尻を、上下にびくびくとうごめかし乍ら、「アッ、あちい！ もう堪忍して、熱くてた

ダム（マゾヒズムの灸）

まじない灸





（お仕置灸）
淫売婦

「まりません、アチ、あちちち……」と、金切声の悲鳴をはり上げ、お灸の折檻を受けている。売笑婦も額に汗を浮かべつゝ目からは涙をこぼして、「あゝ、あゝっ、本当に駄目とても熱い！ お助け、あゝ、あちひーっ」と悲痛な声を上げ、一生懸命になって身悶えしていた。

置の為に存分とお灸を据えられているのも、又、譬やうのない魅力であり、何のお仕置にくらべるものもない、無限の美しさを発散させている。

治療、健保、マゾ、仕置、そのいずれにおきましても、女のお灸を据えられている情景の、如何に魅力的な事か極めて魅惑に富んだ被虐の耽美的な雰囲気をかもし出しています。女性自身も灸の刺戟により、云い知れぬ興奮を感じ、陶酔の渦の中に没たれるのですし、背中の肌の焼けたとれた灸痕も羞恥心を一層デリケートなものにして、より美しい女性となるのですから、灸を据えるのに何の未練や悔がございましょう。女の滑らかな白い背中に点在する赤く血を滲ませた灸痕、これは単なる醜さではなく、その中に醜悪美、即ち破調的な美があるのです。日本の女性よ、大いにお灸を据えて、尚一層立派な魅力を持ち、且つ綺麗で優美になつて下さい。

（お仕置の灸）
打嘆灸
売笑婦



（お仕置灸）
職人



あるマゾヒストの手帖から

沼 正 三

第八十八 荷車犬志願

諸君は私が紹介したルファス卿（本誌昨年二月号「人耶馬耶」参照）という名前を憶えておられるだろう。彼は馬に变身して馬として愛人に奉仕するという類少い幸福な体験をした人であった。

ルファス卿は乗用馬車の轡馬になった。乗用馬として使用されたとは書かれていないので不満の方もあったかも知れない。たしかに私達は我が身を馬と想定する時、先ず「打ち乗られたる」己が姿を想像するのが常である。直接に女騎手の全体重を我が身に支える際の快感はまことに云い難いものがある。その点では轡馬としての奉仕は物足らぬといえる。——然し、その物足らなさが同時に一方で優れた奉仕形態となっていることを看過できない。乗用馬は女騎手の全体重を支えるという直接さにおいて、正に性交の代償物ともいふべき身体の接近を意識しうる。それは素晴らしい御褒美である。轡馬にはこれは与えられない。彼は騎手と馬との一体感を味うことなどは許されず、唯勞働のみを強制せられる。そしてその勞働の度に

おいても、単に女主人の体重のみならず馬車の全重量が皆馬にかゝってくるのだし、勞働の質においても、両側に目隠を付けられ、美観を増すために頭を高く挙げさせられ（これが馬にとってどんなに辛いかは、アンナ・シーウエル「黒馬物語」を見よ。）轡車からめられて車体に繋がれる等、身体的自由喪失の点では乗用馬の比ではない。御褒美なしに仕事だけという点では、「車を轡く」方が「乗られる」より辛いのであり、それ故にマゾヒスト向きともいえるのである。「乗られる」主題についても、いずれ総括えをするが、本項では「車を轡く」主題について書くことにしよう。

ところで、私達は残念にも人間である。人間が単に轡曳の原動力たる肉体として評価される時、それは何と貧弱な動物であらう。

馬のあの巨大な体格と体力とをそっくり身につけたルファス卿のような幸運に恵まれない限り、私達がそのまゝ轡馬の座に着こうなどとは、非力を顧みぬ僥越である。ヤブーはフウイヌムに代る資格がないのである。

空想とはいえ、もっと私達は実感を持ちたい。諸君よ、椅子を離

れて、そこに四這になって見給え。その身体で馬の代りができるか？ その恰好が一体馬に見えるか？ 否。むしろ君は犬に似ている。大型犬には君位の体格のものが珍らしくないのだ。四這になった人間は、馬としては滑稽だ、だが犬としてなら通るだろう。ところで今は「車を轆く」主題を追求してゐるのであった。犬は車を轆くだろうか？

東京辺の子供は「轆かない」と答えるだろう。然し私が子供の頃には東京近郊でも大八車の梶棒の片方から曳綱をつけられて主人の轆くの助けに和犬の姿は珍しいものではなかった。今でも田舎では見かけることがある。機械力の発達しない頃、牛馬の高価と犬の低廉とを考えれば、そういう犬の利用が一層多かつたろうことは疑いを容れぬ。桃太郎は宝物を積んだ車を猿という人間に似た動物をさしおいて犬に轆かせて凱旋している。これは犬だけで車を轆いていたことを示唆するものだ。ハッチンソンの「犬の百科辞典」(全三巻)で、*Draught-Dogs* (轆き犬)の項を見るとスイス、オランダ、殊にベルギーでは、今でも小型車を犬が轆くのが日常生活に完全に取り入れられているようだ。多くマスチーフ種の犬が使われ平均三百ポンド以上を一匹で轆く(*Her mann Léon*の絵 *Relais de Chiens*を引用して五匹を組犬にすることもあると書いてあるが)。犬自体も轆くのを喜ぶし、又、犬の健康にも非常に良いのだということである。ニューファンドランド犬となると、櫓でも車でも船でも何でも引く。犬とマゾヒストは訓練一つで何でも仕込めるのだ。挿絵を見て下さい。これはフックス(安田訳「風俗の歴史」で我が国でも有名になった)の快著「女天下」(本誌昨年二月号一八七頁参照)から取ったものだ。十七世紀の風俗戯画。一見して明らか

なようにマゾヒスチックな轆畜空想の所産である。

ところで、この絵は、例の風俗草紙誌の特別増刊号の口絵にも載せられていたが、その説明の標題が「亭主馬車」となっていた。これは間違いである。同誌の解説者は原著本文の説明を読まなかったらしい。然しそれにしても、この絵を見て四這になった男の背中の高さと立って鞭を揮っている女の背丈とから、馬車と考えることの不自然さに疑問を懐かなかつたのだろうか。轆革も背中^{ドフラット・バック}に当てゝ轆を支持させるのと、肩に掛けて曳かせるためのものと二つ見えてゐる。これだけでもこの男が馬でなく犬に見立てゝあることが分る筈である。荷車用の大型犬の体格は丁度この男位だから、轆車がそのまま利用できるのだ。つまりこの男は女から轆き犬として扱われているのである。原著の説明では *Karrenhund* となっている。 *Karren* というのは一輪の手押車を指すこともある(手押車囚人^{カレンゲラフアンゲネル}といって、手押車に両手を鎖錠され、要塞内で生きたトロツコとして酷使される刑罰もあつた)が、普通大八車のような二輪荷車を指す。小型のものなら犬で轆ける。こういう犬を荷車犬^{カレンランド}というのだ。(先に引いたハッチンソンの犬百科には、轆き犬の例にこの荷車犬の写真が沢山出てゐる他に貴婦人を載せた馬車犬^{クイーン・ホース}の写真もあるが)特に朝の牛乳配達には犬に牛乳車を轆かせるようで、その写真が多い。(日本で見られる本で一例を引くと、シュトラッツの「女体美大系」の邦訳第三巻ベルギーの女の所にブリッセルの牛乳売娘が犬に車を轆かせた写真がある。この絵も牛乳車である。但し配達でなく、農家から搾った牛乳を市に売りに行くところだろう。)

フックスの本文によると、これは夫婦なのだ。女房に完全に支配されてる哀れな亭主の姿を、こんなに見事に描いたものは少いだろ

う。見給え、重い荷物をふり返ってペソをかいだ男の顔を。又きびしい目付で右手に高く鞭をふりかぶった女の姿を。牛乳を売りに行く車に彼女は彼女の夫を犬の代りに繋いだのだ。そしてサッサと轆かないので怒ってるのだ。「何てのろいだよ！遅れてしまうじゃないの！うちの他の犬達よりお前はよっぽど愚図だよ。ちょっと性根を付けてやる！」鞭をかざした彼女の目に写ってるのは、最早夫ではない、怠けている一匹の轆き犬に過ぎない。

絵の中の文句は全部は読めない。標題は、「哀れなでくのぼ
う」とあって、男のことばが韻文になっている。最初の二行は
「あゝ苦しい、あゝ苦しい、哀れな阿呆の私には。この荷車（
に繋がれて）私は何て辛い思いで輓くことだ。……」と辛うじ
て判読できるが、あとは飛び飛びにしか読めない。

輓畜になりたいという心内の止み難い要求と、馬のように立派な身体を持たぬというギャップが、こうして、荷車犬になることによって解決される。空想は現実感を増すことができるわけである。

その実例として、クラフト・エビングの「病的性心理」から一患者を紹介することにしよう。この人は輓畜空想の方では大先達といつてもいい、その症歴——マゾヒストとしての性歴の回顧陳述——と精細な自己解剖の陳述は、エビングのマゾヒズムに関する知見を啓発増大するに与つて力があつたもので、エビングはその紹介に著書の數頁を割くことを惜まなかつた。マゾヒズム学の歴史において、忘れ難い人の一人なのである。

然し、彼の長々しい手記を詳しく紹介することは、もとより本項の目的ではない。端的に彼の空想の枢要部に迫ることにする。



彼の言によると、彼は子供の時から、人間が他の人間を完全に支配するといふ想念に憑かれていた。人間が他の人間を所有し、売ったり買ったり鞭ったりできるといふことに非常に昂奮させられ、奴隸制反対小説「トム爺の小屋」を読んで勃起を覚えた位であった。就

中刺戟を受けたのは、ある人間が車に繋がれ、その車の中に鞭を握った者が坐って、繋がれた者を鞭って駆り立てるといふ想念であつた。そして、二十一才以後には、その繋がれた者が自分であり、駆り立てるのは年長の精力的な女性であることが必要になり、乱暴な女主人が、彼を馬車に繋いで、彼に車を轆かせてドライブに出かけることを空想したという。彼は犬になつて女主人に随いて歩く場面耕馬として犁に繋がれる場面、奴隸として女主人の入浴や化粧に侍る場面等も略述しているが、主たる空想はこの「車を轆く」主題にあつた。

女主人は、他と隔絶した屋敷に住み、下男を相手に農業に従事しています。夜明けの前から仕事が始まります。四時になると彼女は板仕切を開けて呉れます。私は一晩中その中に閉じこめられていたのです。地面に寝ている私を彼女は足で蹴って目を覚まさせて私を小屋から牽き出して、町へ牛乳を運ぶ荷車に繋ぎます。そして牽綱を握って歩みながら私を駆り立てるのですが、街道に出してしまうと、唯さえ重い荷車に彼女も乗って、目的地到着迄一眠りするのです。目的地に着きますと、小さな町の市場の真中で、依然として車に繋がれたまゝ、地べたに身を横たえて休息するので、通行人がうっかりして私に蹴つまずいたり、私を踏んずけたりします。さて持ってきたものが売れてしまうと又帰り途です。……帰って一寸休憩すれば、又新しい仕事で、やはり女主人の監督の下に、綱を握って横に立つ彼女から駆り立てられながら仕事するのです。夜の七時か八時になると、私はやっと解放され、次の朝まで一眠りします。翌朝は又同じことが始まるのです。仕事としては打擲され、打擲されては仕事するのみ、何の楽しみも、何

の慰みもない日が、今日も明日も続いてゆくのです。……これが彼の語る空想場面の一例である。一寸読むと轆馬空想のようであるが、仔細に読むとそうでない。牛乳車に繋がれた「私」は市場の真中で地面に寝て休憩するのであり、その身体に通行人がつまずいたり、踏んだりするといふのである。これは馬の身体の大いさを基準にしての空想ではない。「私」は荷車犬なのだ。だから身体の大いさが一致し、実感のある空想になつてゐるのである。

それにしても、この空想と先の風俗画とは何とよく一致していることだろう。まるでこの空想的記述の挿絵として描かれたのかと思われるこの絵の方が実はずっと以前にかかれ、両者は全く無関係に暗合していること、そして私達がそのいずれにも共通する昂奮を感じること……考えれば考えるほどマゾヒズムは「万世不易」である。

この男の記述からもう少し抄しておこう。彼は仲々のインテリだったから、自分の症状を省察できたし、又娼家における体験（勿論マゾヒストとしての）も非常に豊富だった。その反省と体験に基いて、次のようにいっている。

私の体験では、マゾヒストの数は、殊に大都會においては、非常に多いようです。大抵の娼婦は「奴隸ごっこ」即ち奴隸と呼ばれ、叱られ、叩いたり、蹴ったりされることを喜ぶ人が沢山いることを認めます。その数は想像されるより遙かに多いのです。……

マゾヒストが女との間に普通求めるところは、女の男に対する関係ではありません。主人対奴隸、飼主対家畜の関係です。マゾヒストの窮極の目的を偏見なしに述べるとすれば、犬や馬の地位こそその理想なのだ、といふことを認めざるを得ません。犬も馬も主人に所有されているものです。主人はこれを罰するにあたって何人にも

責任を負いません。このような、奴隷や家畜に対して行使される生殺与奪の権力に曝されることこそがあらゆるマゾヒズム観念の目的なのです。……………

私は前に(第二十一項で)、「真のマゾヒストはヴェヌスに抱擁されるよりも、並の女に足蹴される方を喜ぶ」という言葉を引用したが、あれも実はこの男の見解なのである。これは一面実に正しい真理(抱擁よりも足蹴)を道破しているが、さればとて、女主人は美しくなくてよいという一般的持論は軽々に引出せぬ。この男は先の荷車犬空想の場面でも女主人を四五十才の粗野ながっしりとした体格の農婦として空想しており、一貫して粗野な中年婦人に魅力を感じていたらしく、女主人に若さと美しさを要求しないためこんなことをいうのだが、マゾヒスト全部がそうでないことは勿論で、むしろ美と若さを要求する方が、マゾヒストとしてノーマルである。然し右の文中の「マゾヒストの理想は犬や馬の地位を占めるに在る」という主張はまことに正しく、全面的に同意してよいと思う。

唯この男は輓畜となることにだけ興味を見出していたようで、例えば乗用馬になることは少しも空想に描かなかつたらしい。冒頭に述べたように馬という乗用馬志願がむしろマゾヒストの常態だし、私などのように殆んどあらゆる畜生への転身と、畜生としてのあらゆる屈辱場面や劣形形態を楽しく味おうとする者にとっては、偏狭さは殆んど不可解であるが、この点、読者中のマゾヒスト諸君の体験にもとずく意見を聞かせて欲しいと思う。

なお、この症例は初期の版になく、七版以後の各版に出てくるが右に訳出した輓畜空想の部分を含む前後の条りは十一、二版になると省略されている(右の訳は七版による)。そして十六、七版にな

ると、この症例自体がオミットされている。「病的性心理」の旧版を読む必要がある一例としてあげていいたろう。

附記 挿絵の主題である「荷車犬になった夫」については、前記の本文でフックスも引用しているマゾッホの作品がある。然し、この作品は、絵の場合と異って、妻自身の手による夫の家畜化でなく、妻が自分を愛している夫を裏切り欺いて奴隷商人の手に奴隷として売り渡し、自分は後宮の栄耀の生活に入ったが、ある日不図窓の外を眺めると、前の夫が輓き犬として、荷車に繋がれ、新しい主人の鞭を浴びつつ、泥濘の中に車を輓き悩んでいる姿が目に入って、おかしさに笑いこける、という筋で、むしろ「芦刈」^{アサリ}主題の一変型といふべきものだから、芦刈主題を詳述する時に譲ることにし、本項では取り上げなかった。

第八十九 「狂った人々」

香山滋の作品は前に手帖第九項でも取上げたが、その後もマゾヒストとして逸し得ぬものが多い。本項ではその中荷車犬の主題に係あるものとして宝石誌九巻六号所載「狂った人々」を紹介する。

女主人公マリはある邸で小間使をしていた時自分が可愛がっていた飼犬が奥様の方に愛情を寄せたといつて、玄翁でその犬の頭を叩き割ったほど気性の激しい美貌の少女、その犬殺しの記憶を人殺しのことのように思い語っている。

ここに四郎という浮浪児がいる。自分で自分のことを捨てられた野良犬と信じこんで、空いた犬小屋にもぐりこんで暮らしていた。工場の寮の人達が面白半分にシロ、シロ、と呼んで皿で飯を食わせた

り、「お前は狂犬なんだぞ」とおどしたり「もうじき犬殺しに捕っ



てぶち殺されるんだぞ」とからかったりした。それでますます犬見たいな気持になり、脅えて犬小屋を焼いて逃げ、パロンとよばれる老人の所に厄介になっている。そして、海岸でマリに逢い、彼女を

老人の所に連れてゆく。

彼は自分が犬ではないかという心配があるのだ、

「おれの顔、犬みたいじゃない？ 狂犬みたいじゃない？」

とマリにきく。マリは彼をいじめるため、

「言ったら、あんた。そのとたんに呼吸が、塞って死んでしまうわよ」

「構うもんか

！ さあ、言ってくれ」

「言うわよ」

にっ、と薄笑いに唇をゆがめて、マリは近づけた眼を四郎から離さず、非情な声で言い放った。

「あんたは人間じゃないもの」

「……………」

「犬よ、真っ白な、大きな犬だわ」

これで四郎はすっかり参ってしまっただいづくばる。

「すこし可哀想だったかな」

とマリが立ち上っても、四郎は虚脱して白ちゃけた顔をし、口がきけなくなってしまう。マリは慌わてて打消すが、効果はなく、四郎は、犬のように、マリの胸のふくらみに鼻先を押しつけ、平和な顔をしている。老人の所に帰るマリの後を、腕を垂れ、背を丸めておとなしくついてゆく。かってマリを老人の許に導いた彼だが、今は彼女の犬になってしまったわけだ。

マリの方でも、もう彼を犬として扱いだす。老人とマリとシロは他に安息の地を求めて去るのだが、老人とマリを乗せた大八車を轆くのはシロである。疲れたろう、休め、といわれても、汗びっしょりになりながら、轆の横木にしがみついて、とぼんとした眼で見上げるばかり、犬の仕事を忠実に守って、決して他の人に車を轆かせようとしなない。

マリは大八車に載せた密柑箱を馭者台にして老人に坐らせ、自分は後ろの蒲団荷の席に掛けて、タバコを吸いながら、自分の夢想する薔薇園の話をする。彼女はもう「おらんだ園」の女主人なのだ。

「おじさま、あたし、とってもたのしみだわ。陽のよくあたる広い

広いお庭で、あたし、男の子みたいなズボンをはいて、百も千もの薔薇の木に如露で水をやって廻るの。おじさまは藤椅子に長々と寝そべってタバコをふかしていればいいのよ。若し薔薇盗人がやってきたら、シロが吠えて追っばらってくれるもの」

そのシロは、舌を垂れ、涎れを流し、はっはっとな喘ぎながら、重い車をひきつづけていく……………

× × ×

香山滋作品としては決して上乘の部類に属するものではないが、このシロこと四郎少年を平然として犬として扱うマリが、市井の少女からは通常私のような貴婦人^{バヤスト}好みが決して感じないような魅力を備えているのは、やはり貴婦人を扱うのを得意とする氏の筆が、市井の少女を描いてもこれにマゾヒズム的靈活を注入することを知っているからであろうかと思われる。

手帖速報欄

二八 海音寺潮五郎「女賊記」

(探偵実話二月号) 今昔物語に

ある鞭撻^{フラグランテイ}女性の記事を素材に空想を馳せた作品。原話は日本文学史上異質である(手帖第二十九参照)のみでなく、自分の主体的欲求から(即ち男の性欲のためにでなく自分のために)男を鞭つ女性の記録としては成立年代からいって世界的価値あるもの。別に古今著聞集に強盗団の頭目が実は美貌の貴婦人だったという話があり、本作品はこれと連絡させてあるので、マゾヒストには楽しい読物となった。但し再録物である。

二九 小島信夫「残酷日記」(新潮二月号) 医者之家に忍び込ん

で、奥さんの汚れ物を洗濯する場面がある。尤もそれだけのことで大してマゾ的に重要な作ではない。

三〇 楠田匡介「ニムフォマニー・マアダー」(あまとりあ二月号) 女がセッター種の愛犬にクニリングスを仕込んで舐めさせる条りがある。それ丈。なおこの欄の一一で示した『暗い欲望』の月号分では美少年のペニスに対するマゾ的なフェラチオが書かれている。

三一 山田風太郎『妖異金瓶梅』宝石その他の各誌分載されてる探偵短篇の第一集。女主人公落金蓮を流血を好むサディスティンとして描く。この作者は「虚像淫楽」のアルゴラグニー、「奇蹟屋」の貴婦人崇拜、「天国莊綺談」「うんこ殺人」のスカトロジックな執着等、手帖に取上げるべき幾多の面を示す才人であるが、その面でもこの連作は一つの絶頂である。

「お坐り」…「お寝」ぼうきのように横わった来旺の、不安にひきつる顔の上に、金蓮はじぶんの靴をのせた、のせたというように、ふんずけたのである。「それじゃあたしの靴もあげよう、そうら」…(このあと鼻血の出るまで残忍にふむ場面になる。)

「韓道国、ひざまずいて、手を前に出して口をあけるのよ」小さな身体の手代が、きよときよとしながら、命じられたとおりの姿勢をしたのを見て、応伯爵はふき出した。まるでちんちんをした犬である。「そうら」金蓮は笑いながら、肉を噛んで、うつむいて、韓道国の口に吐きおとした。肉と唾液と薫るような息が、手代の口に吸いとまれて、彼はばくばくと金魚のような口つきをした。

こんな場面がまだまだある。真物の「金瓶梅」よりマゾヒストには楽しい。挿絵も良い(右の二場面共ある)。

三二 丹下キヨ子「男はすべて男房にせよ！」（小説倶楽部増刊）

（女が女房になって男性に仕えるのではなく、男共を男房にして女性に仕えさせよという趣旨（挿絵は腰を掛けてる奥様に亭主がエプロンをつけてお茶を給仕するところ。）の戯文に過ぎぬが、文化放送の素人ジャズ大会の司会者としての恐れ入った力量を考えると男房的生活の実践者である私などには身に泌みる文である。

三三 武田泰淳「白色婦人と有色男子」（近代文学新年号）映画「狂熱の孤独」を例に引き、メキシコ土人達の中に一人ぼっちになった白色婦人の戦慄という主題からいえば、日本人はむしろメキシコ土人の側に属する有色人なのだが、滑稽にも我々は白色婦人と同じ側に立つ者なるかのように錯覚して鑑賞していると指摘する。これを楔子として文化論、文芸評論について発想したエッセイであるが、右の部分は面白い。

三四 舟橋聖一「絵島生島」新聞連載から本になった。マゾヒストとしては取上げる所もないが、お尻拭きの中藹の記事はコブログニストとしては面白い。京都の公卿の邸では虎子おとこを使うが、江戸大奥では豎穴を掘ったこと、京都から来た御台様近衛夫人や鷹司夫人は羞恥を知らず、用便も月のものの時もすべて人手で拭わせること等……。

三五 谷屋一步「江戸パノラマ島奇談」（でかめろん二月号）

江戸の地下歓楽境に文字通り人間馬として飼われる男達、その人間馬の騎手になってこれを訓練し乗廻すのを仕事とする美女達、地下の大広間の奇妙な競馬、五色の馬の色に賭けて楽しむ富豪達……女騎手達は良い成績をあげるため馬を酷使し、走らせながら足で責めて男の肋骨を蹴折って殺してしまうことさえある……マゾヒストの

ために書かれた作品。再録である。前に同誌に出た時はマゾ小説の少なかった頃で嬉しかった。同じ作者の大奥ものでは、男を等身大の人形の中に入れて自由を奪い、生人形として勝手に可愛がって、飽きると自分用の圓の豎穴にひそかに投げ捨ててしまいう貴婦人を扱った作品もあった。

三六 オルダス・ハックスレー『すばらしい新世界』（三笠版現代世界文学全集）未来小説であるが、専制的指導者による人民の家畜化の有様などマゾヒストとしても読むに耐える（武田泰淳「第一のボタン」なども同系列の作品）。幼児の条件反射による訓練などマゾ的空想に対し示唆的だ。終りの方には乗馬ズボンの女と野蛮人（旧世界の自由人）との鞭打場面がある。（尤も鞭撻はここでは快楽のアンチテーゼとしてであるが。）

三七 『Marguis de Sade, THE 120 DAYS OF SODOM. 2 vols.』（鎌倉市啓明社発行）欧文の作品は原則として挙げない方針だが、日本で翻刻されたものだし、内容が内容なので特に取上げておく。「ソドムの百二十日」として従来名前のみで知られていたサド侯爵の代表作の英訳本である。原仏文は知らぬが、全訳と認められ、一応信用できる訳と思われる。ボーヴォワール女史（『サドは有罪か』室淳介訳新潮一時間文庫）が、サドはマゾヒストを軽蔑していたといっているが、たしかに彼はマゾヒズムを理解していなかった。だから、本書は一部の人のいうようなクラフト・エビングに先立つ性の百科全書であるわけでは決していない。少くとも男性のマゾヒズムについては本書は何事も教えない。一見マゾ的な姿態（例えば第二部八七番では男が女達に馬乗りされる。同八八番では男は六人の少女の前に跪き、次々に行を命ぜられ、拒めば各々百

「笑」創刊号所載、小川哲男の漫画「ノローマの休日」
 原画は二色オフセット印刷。



の鞭を受けねばならない。その行とは、第一の女は彼の口中に大便する、第二の女は床に唾を吐いて彼はそれを舐め取る、第三の

女は *menses* でその *cunt* を舐めて綺麗にする、第四の女は足を洗っていないが彼はその足指を舐め上げる、第五の女の鼻くそを舌でほじり取る……等）があっても、すべて男の性慾のために女性が手段として使われてる点で、マゾヒストの心情からは遠いものである。にも拘らずここに取上げるのは、コプロラゲニストとしての立場からである。第一日第一話少女の尿を飲む話から始まって篇中の事例の八割は排泄物を口にする場合を含む。人間便所の話（第九日第五話、壁に寄せて椅子便所あり、壁の向うに隣の部屋で仰向けになった男の首丈が壁の穴から椅子の下の本來便器のある位置に出る。この椅子で用便すると男の口に入る仕掛）なども、直接男の口に美女が排泄する話に溢れた中で読むと刺戟の少い方に属する位で、一言でいえば「糞の大饗宴」（ポーヴォワール前掲）を書いた本なのだ。コプロ完の人には必読。この本屋からは *Justine*（英訳）も出ている。

号外「あるハントレスの日記」（婦人画報二月号）「私のハンチング」を書いている楠田喜代子夫人等をモデルにした写真。ズボンを通き鉄砲を持ち獺犬を連れたマダム。良いね。尚、同誌には麻生和子さんの文章と写真もあったが、私一人の好みに偏するので、ここには略する。

号外 小川哲男の漫画「ノローマの休日」（笑創刊号）挿絵にあるとおりのもの。各々その所を得て上も下も楽しそうだ。尚、読物娯楽版誌二月号の口絵漫画「男の夢」「女の夢」の中、「女の夢」の項には四這の裸男二人を犬にして鎖で引いてる女性が出ているが、誌面節約のため略する。

男色者の地域性

滋賀雄 二

(一)

戦後、男子の同性愛が増加し、その推定数は百万人以上と云われ、大きく社会の問題として浮び上って来た。

男色者というのは同性愛 (Homogeneous Love) の中の男性の場合を指し、その行為をソドミー (Sodomy) と云い、その人達をソドマイト (Sodomite) と云っている。しかし一般や雑誌では、男色者のことをソドマイトと云わずにソドミアと呼んでいる。

私は、男色者の我が国に於ける分布を、地理学的に観察して地域性を明らかにし、環境と如何なる関連を持っているか、その一端を究明して、皆さんの参考に供したいと思う。

資料として、東京や大阪等の大都市にいる男娼は、大体確実な数の把握が出来るが、この数だけでは問題にならず、又地域性の解釈

にも不充分である。そこで今回は、一九五二年に「人間探究」誌のアドニス会が調査した三七六名と、一九五四年に「風俗科学」誌の風俗科学研究会が調査した四一八名の、男色者名簿を資料にして、地域性を研究してみた次第である。尤も推定百万以上と云われる男色者を、この資料だけで論ずることは、非常に危険なことであるかも知れないが、現在の状態では、全国的に完全な数の調査は、殆んど不可能と見てよい。それは次の様な理由によるからである。

(一)、男色行為が、アブノーマルな変態行為と見なされているので、男色者が自分の名前の出ることを嫌がり、務めて秘密にすること。

(二)、男色者の決定が困難であること。即ち一口に男色者と云っても、ソドミーに興味を有したり、調査する程度の浅い者から、

お互に同棲して肉体的交渉を持つ、程度の深い者迄あって、どこからが男色者であるか、その限界線を定めるのに難しいからである。

右の様な訳で、全体的の数の調査は、思想や社会道徳が変化して、男色者の調査に容易な社会状態にならない限り、到底完全なものとは描み得ない。

尚二つの名簿は次の様に編集されている。

(一)、名簿に記載を希望した男色者や、男色に興味を有する者や、文通や交際を欲する者等、種々雑多な人達で構成されている。

(二)、職業的な男娼は含まれていない。

(三)、A会とF会は別個のもので、無関係であるが、少数の人員が重複して記載されている。

兎に角七九四名の僅かな人員ではあるが、各階層の男色者を含んでいるし、又時間的に

も一九五二年と一九五四年の兩年度に亘っているもので、私はこれを大きな歟脈の露頭とみなしている。したがってこれを科学的に研究してゆけば、大略の傾向に就いては、大きな誤りはないと信ずる。

(二)

地域性を観察する為に前記の資料によって作製したのが、別掲のⅠとⅡの都道府県別の分布図である。

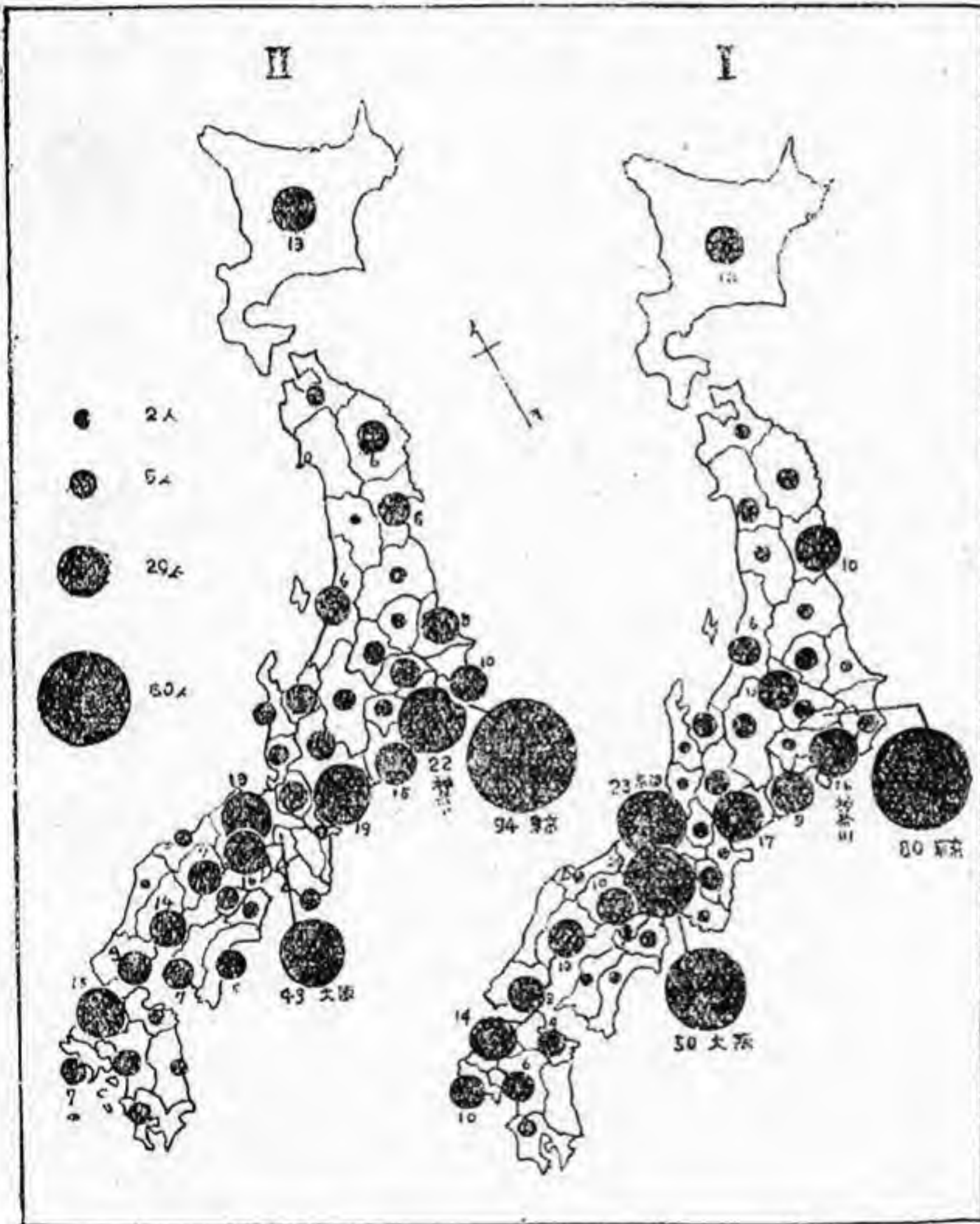
先ず、両方の分布図を見て観察される特徴は、總体的に著しく類似した型 (Type) を示していることである。この同じ型を示していることは、調査機関や時期が異なっていることと照合して、興味のある問題と思われる。

次に、内部の特徴を述べてみよう。まずⅠとⅡの共通したものから書くと、

(一)、両方とも、京浜地域と、阪神地域 (京都

を含む) の、二大中心地があること。
(二)、東海地方から近畿、山陽地方を通じて、北九州地方に至る細長いベルト地帯に密集した地域のあること。
(三)、昔から男色の本場と云われた南四国や南九州地域に、分布の少ないこと。
(四)、都市以外では、少数ではあるが全国的

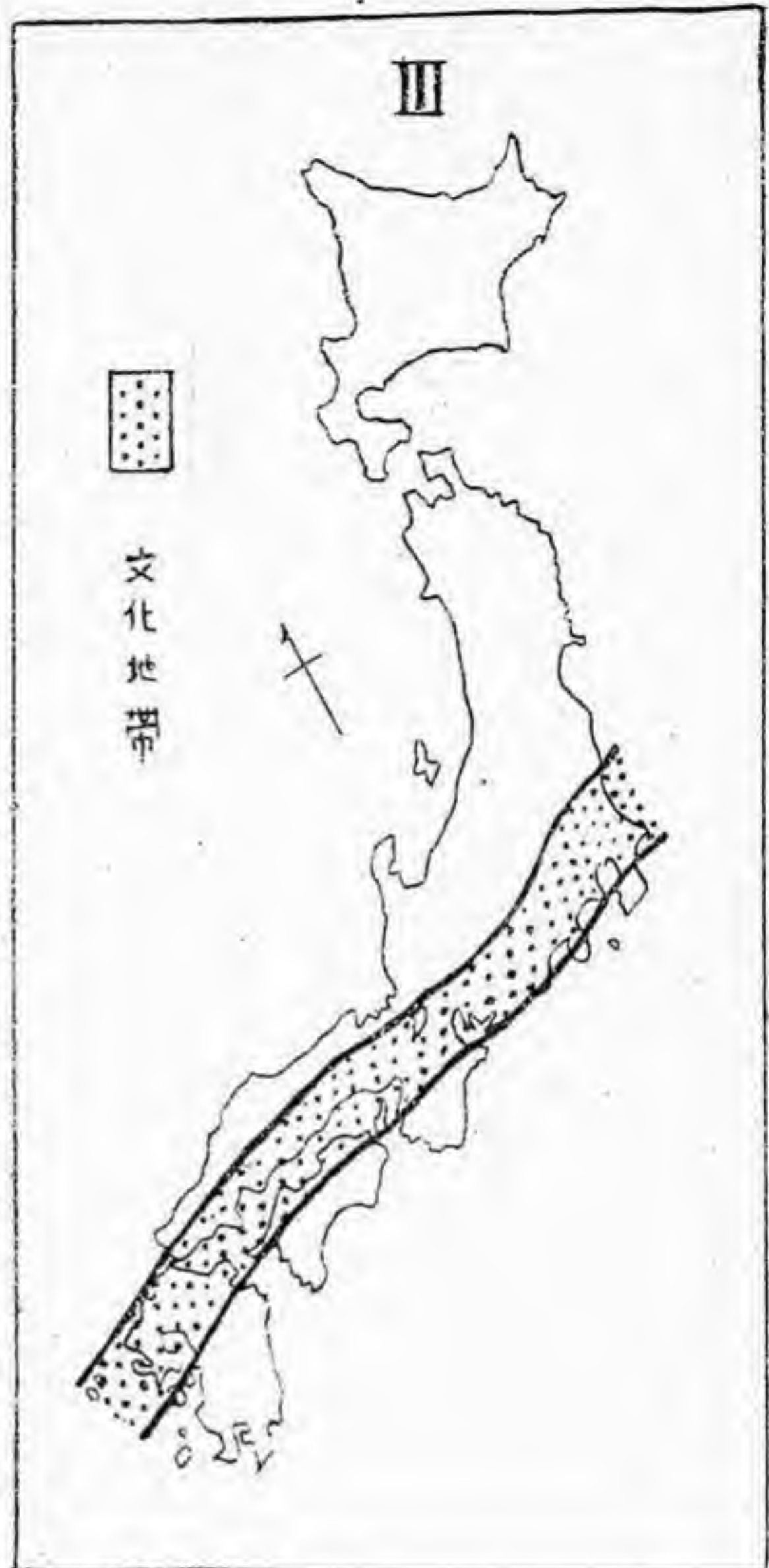
に散在分布していることである。
即ち、東京と大阪の二大中心地域と、東西の細長いベルト地帯に、男色者の半数以上が集中している点は、特に注意しなければならぬ。
以上を地域別に、人数とその百分比を、左に示す。



Ⅰ 1952 調査 376名

Ⅱ 1954 調査 418名

次にⅠとⅡの相違点を挙げると、
(一)、京浜地域ではⅠは九六名、Ⅱは一一六名でⅡが二〇名多いが、阪神地域ではⅠは一〇名、Ⅱは七八名で、逆にⅡが二四名減っている。
(二)、其の他の地域では、著しい相違はないが、四国地方でⅠが五名、Ⅱが十七名と、Ⅱが一二名多くなっているのが眼につく。
しかしこの相違も、地域的に総計すると、大した変化はない。即ち京浜地域と阪神地域を合計すると、Ⅰは一九八名、Ⅱは一九四名となり、差は僅



を分類すると、次の通りになる。

- (一) 地点性…ドット (Dot)
広く農村に散在分布して農村性を示す
- (二) 地線性…ライン (Line)
文化地帯に細長く分布して中間性を示す
- (三) 地域性…リジョン (Rigion)
都市に密集して都会性を示す。

(四)

男色者の地域性を明らかにするために、彼等がどんな気候地域に住んでいるかを調べ、その気候性の一端について少し述べてみたい。

元来人間の活動は、気候に左右されることが大きい。又、人間の性愛活動も、温度や湿度や風雨等に大きな影響を受ける。結婚や妊娠が、春秋の季節に多いのもその一例である。アメリカのハンチントン氏 (Ellsworth Huntington 1876-) は、男女工員の仕事の能率と天候との関係を調査して、統計的にその影響を挙げている。

(気候と文明 ハンチントン著 間崎万里 訳 岩波文庫)

同性愛が、精神的と肉体的を含めた人間活動である以上、気候に左右されることは当然で、男色者にも彼等の気候性が存在する。

然る条件や人為的条件の良いことが必須要件となる。我が国の都市も、この二つの条件のもとに、歴史的に政治経済的に影響を受けながら発達して来た。人間の生活が向上して文化が開花発達すると、都市を中心として同性愛が流行し始める。やがて文化が爛熟すると同性愛は政治家や資産家等の一部特権階級の間に根を下し、ついで文化的頽廃時代になると、広く国民の間にまで拡がってしまう。

(西条道夫著、男色に関する十二章 風俗科学 十月号 二二頁参照)

男色の発達と文化の発展とは平行して行われるが、その場所を提供するのは、いつの時

代に於いても殆んどが都市に限られていた。これは洋の東西の間わず一致している。都市以外の場所では、中世に於ける高野山や比叡山等の僧院が有名である。

やがて近世から現代に到ると、都市に於ける男色者の集まる場所は、「蔭間茶屋」から「男色茶房」や「男色酒場」へと変遷する。

以上都市と男色者とは密接な関係にあることがわかったが、IとIIの分布図ではこれによく表現していて、「都市は男色者の最適の環境である」ということを十分にうなづかれたことと思う。

尚、地理学的に分布図中の男色者の地域性

IとIIの分布図の、京浜、阪神の著しい密集地域は、気候上より観ると我が国の温暖帯と一致する。従って男色者の大部分（六〇%）は、温暖帯の気候に適していると云える。これに対して、東北日本の冷涼性温帯や、南四国や南九州地方の亜熱帯への漸移型温暖帯は、彼等には不適當と云えるのである。

地方別に見ると、九州地方では、北部に分布が多いが、これは北九州の温暖海洋性気候が、南九州の温暖多雨性気候よりも適していることを示す。同様にして、山陽地方と山陰地方では、瀬戸内気候が、冬季多風気候の山陰地方より適している。又東海地方と北陸や東北地方と比較すると、東海地方の冬期快晴温暖気候（表日本型）が、北陸や東北地方の冬期多雪寒冷気候（裏日本型）より、はるかに適していることを示す。

(五)

男色者の分布図を通じて、都会性、文化性気候性を述べたが、結論として彼等の最適の環境である都会について、若干話を進めてこの小論を終りたい。

男色に関する小説や報告の中で、都会の場合が非常に多い。ここでは具体的に例を挙げ

ると長くなるので省略するが、機会を得た場所としては、銭湯、共同便所、映画館等があり、交際の場所としては、喫茶店、酒場、旅館等がある。ここでは同性の裸体や性器を観察したり、接触する機会が多く、又交友するのに便利である。東京や大阪におけるこの様な場所は、既に多くの雑誌に紹介されているので、読者も御承知の事と思う。（いずれ都市に於ける男色地域の地理学的考察は、後日に稿を改めて発表したい。）

都市を職業別の地域に分類して、そこにある男色に関係のある場所を列記すると次の通りになる。

教育地域	学校、寄宿舎、プール
公務地域	諸官庁、警察署、刑務所
工業地域	兵営、キャンプ、公会堂
商業地域	工場、寄宿舎
	デパート、喫茶店、酒場
住宅地域	パチンコ、旅館
娯楽地域	アパート、銭湯
	映画館、演劇場、野球場
	競輪場、競馬場、プール
	スケート場、共同便所

次に男色に関係あるものに、都市の人口移動がある。これは毎日の朝夕に行われる官庁

や商店や学校や娯楽街への人口移動であり、春秋の季節的に行われる、学校の卒入学や工場や会社の就職や観光客による人口移動である。こうして都市の人口は絶えず変動し移動して、これに複雑性の要素を与えている。

次に関連のあるのは、職業による都市の持つ複雑性であり、隔絶性である。

「秋深し隣は何をする人ぞ」

の句があるように、昔から都市には、種々雑多の居住者が雑居して、隣近所の人に、容易に職業や私生活が知られないですむ。これは都市の持つ移動性や複雑性が、逆に孤立性と隔離性を与えていることになる。そして都市に住む男色者の私生活の秘密保持に役立っているのである。

以上男色者の地域性を纏めると次の通り。

(一)、我が国の男色者の分布は、二大都市附近（京浜、阪神）と、東西に走る文化地帯に大部分が集中している。

(二)、文化地帯（Culture Belt）と男色者の分布図が一致して、彼等に高い教養と文化のあることがわかる。

(三)、男色者の気候性は温暖帯である。

(四)、男色者の地域性としては、都会性が最も強く、都会には、人口の移動性や住居の複雑性や生活の隔絶性と秘密性とがあって最適の環境である。

(終)

ボクの責め方

(美智子、みさ子連れ責めの巻)

宝塚 二二三 夫

四 馬 孝・画

こゝで、前回で述べたアプレ美智子と相互性のあるみさ子という現役レヴェューガールとの意地の出会いの責め。連れ責めを挿入してみるのは決して無駄ではないと思う。

何しろこのみさ子は十九の年に似合わぬ落付いた姿、肌は赤味ある小麦色でブリツと張り切って、それでいて太くて柔らかい肌。ボク達も「京マチ」と呼んでいるし、みさ子自身も楽屋では京マチ子さんの後釜だ、と云われていると自惚れている。実際、顔は少し落ちるが、すべて体つきまでよく似ているが、背丈は少し低い。ボクの会社の横S銀行で龍

×一郎と共演ロケしていた真物の京マチを見たが、このみさ子よりは年配の差と、完成職域の疲労から、筋肉のしまりはボクにとってこのニセ京マチの方が魅力である。(尤も、御本人もボクを相手にせぬが)

このみさ子をどうして知ったか、とわずらわしいながら、やはり一通り答えぬと亦諸賢の疑問が残るだろう。それは文子というTS Kアナウンサーの紹介であり(その間のいきさつは省略してもらおうが)、そして美智子とは当然、見知って期生年次の違いだけ。そもそもがさやあてへの進展は、ボクの考え方

では判断出来ぬ女の性根である。そして美智子の方がボクとの関係も深く、ぬきさしならぬ搦手責めでいるのと、すでに美智子にはマゾ性が芽出しているのに対し、このみさ子ニセ京マチは、陰性色気(この種の女にはありがちのもの)の発散と処理に安全弁となっているのがボク。

かすれた低いうちに底力のある声で「マア」と大きい目をギョロリッ、とむいて、色気を全身から発散させる絶品の一つ。

梅雨上りの夏。真赤なドレス、と云ってもワンピースの化物的であるが、太く大きい両

腕丸出し、何というのか知らないが、肩の上で黒いリボン紐を結んで服を止めてあるだけの、アクセントの恐ろしく強烈な服装。組紐のやはり黒いバンドを長くだらりと前に垂れ……、赤いパンプスのヒールも、この娘の重みには苦しそう。白いレースのカチーフを胸にさして、黒いバッグを振って颯爽と現れる京マチ、みさ子。そして美智子との刺戟多い出合いは初まったのである。

美智子とは違って、このみさ子は逢う途端から責め始めるわけには未だ達成してない。そして、かねがねこの顔合せを秘かに期待していたボクであるから、このみさ子の突然の訪問によって来る約束の美智子との絶好の機会を、次の計画によって実行して行ったのである。

美智子の約束時間を待ち、その場合マゾ化している近頃の彼女とはいえ、相手に京マチがとなると、到底最初からの責め一本も不当であるので、これ亦別の部屋で一通り難くせつけて責め立てる。そして二人の連縛という考えで、更に秋子を手伝わしと、愈々実行に移った。

打水した小庭に面した、私宅の奥座敷。
「社長さん、今日は……」

この京マチさん、つけ睫毛こそつけてないが、アイシャドーも程よく薄くつけ、よくこんな色が売っていたなあと思う紫と赤黒い口紅、いや口紫？ をべったりとなすくり塗った口元、そして、これ又黄色いお白粉。青い珠のイヤリング、エキゾチックというか、化粧は超アブレ型である。

「イヨー、今日はみさちゃん、お得意のおめかしで、どこ行きだ？」

「マァー、とたんに皮肉ッ？」

「じゃ、ボクとこへだけか？」

「モチよ」

正座したのは挨拶の時だけで、早くも膝をくずして来る。チャブ台のない対座。

「じゃ、マァー、ボクのごあいさつをさしてもらおう」

アツと云う間に彼女の片手を引くと、前くずれで横倒しにして、上から抱きかゝえる。「マァー」と得意の声で首を振って大きな目でボクを見る。既に何物か求めているではないか。しめ、しめ、とボクの唇はすぐ覆いかぶさっている。

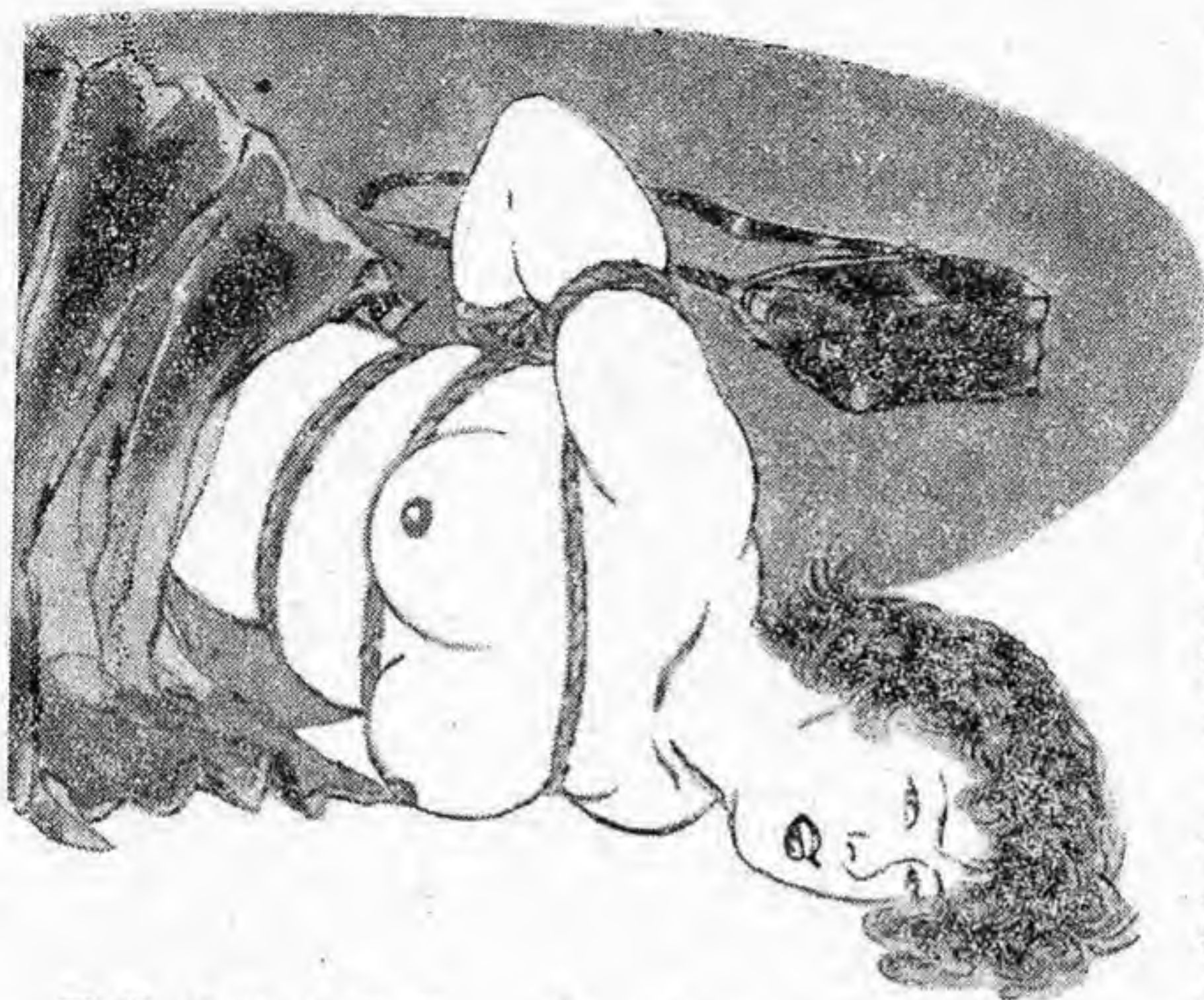
ヌルヌルと蛇のようにみさ子の片手がボクの首に巻きついて来る。ボクは唇を離さぬまゝ、胴の下側にある彼女の片手を掴んでいるボク

クの片手は、抱え上げる手と共にすでに片手後手に高々と捩廻している縛り責めの序曲である。一しきり強まるキッスの序曲と共に、既に彼女の片手は高々と振上げられて、五指はぎゅっと握りしめられている。

彼女は片手でしがみついているので、丁度ボクの余った片手は早くも、くの字に振じれたみさ子のスカートを捲り上げて、太ももの皮下止めを二度が一度程の早さでめくり脱がす。彼女の足はそれに協力する如く、蛸のように器用にくねくねと脱いで行く。

「ウムムッ！」と、唇と唇の中で何かうめくように云ったまゝ、両膝揃えてクイツと両足を膝折って縮める。

扇風機の音が部屋を打つのが聞える静寂さは、ほんの少しの間だけで、彼女の精神はまだピンピンしている証拠に、横に座ったボクの手が手足首のあたりに掴み残ったストッキングを爪先から取り除くと、ピクツと顔が動く。そして黒味のナイロンエビ茶のガーターと脱がし始めると、お得意の台詞、「マァー」とあきれたと云わんばかりのデイトリツヒ張りのしわがれ低音で一声。そして「マァー」「マァー」と四、五度の繰返えしで、組板の緋鯉よろしく、ペタリ、ゲニヤッ、



ズルッ！と汗ばんで、みさ子京マチの素足の俯伏せ投出し姿が出来上る。休つきまでエキゾチックに出来ていて、ヌードに対する感覚はたしかに麻痺している。細い麻縄で二重掛けの高手小手、首縄、散々両腕をひねくら

れる間黙っていて、ぐいっと最後のとどめ結びに、

「マァー、すごい罪人扱い……」

バスであるが、下腹にこたえる声である。

そして握った両手の十指を小せわしく、いら立たしく摺り合やす。意地ぎたなく叩きつけられた様子に開けた臀から二つに割れた両脚も、既に何かを待つ様子に見える。尻を持ち上げて後がかり縄掛けで一回……。幾らかしまりが出来たようである。

「しめ上げたので締りがよいヨ」

「マァー、スゴイ、あきれた！」

と捨台詞ぶりも、高手小手、首縄の不自由さに、さすがあくめの最後に「ヒーッ」と一息抜く。そして背中で握りしめていたマニキュア一の十指は、意地ぎたなく力を抜いて空を掴むと帆っ立て尻をどすんと落して、再び俯伏にのびてしまう。

扱、縄のかゝってない両足首

を同じく麻縄で一束に縛り上げた。その間も一言もなく、

「負けたか？」

「エ、」と消えいる様な返事。

次へのテストとしてベルで秋子と呼ぶ。客の気配に……。「御主人、お呼び？」と声をかける。「ウン」の返事に襖を開けて出た秋子、エプロンで手を拭きながら入って来て、この様子を見るとガサガサのおしゃべりの秋子。これ亦バカのかすれ声で、

「ハハハッ、、何や京マチちゃんがやられてんの？ 誰かと思った」

別に驚かぬ秋子。少々不味い女でも、ボクとしては、あらゆる点によく馴れたものとして必要である。女二人とも言葉交わさぬが、ボクの心配していたみさ子の嫌悪と拒否がないので、ボクのこの瞬間の目的は達せられたわけである。

「お水を持って来い」

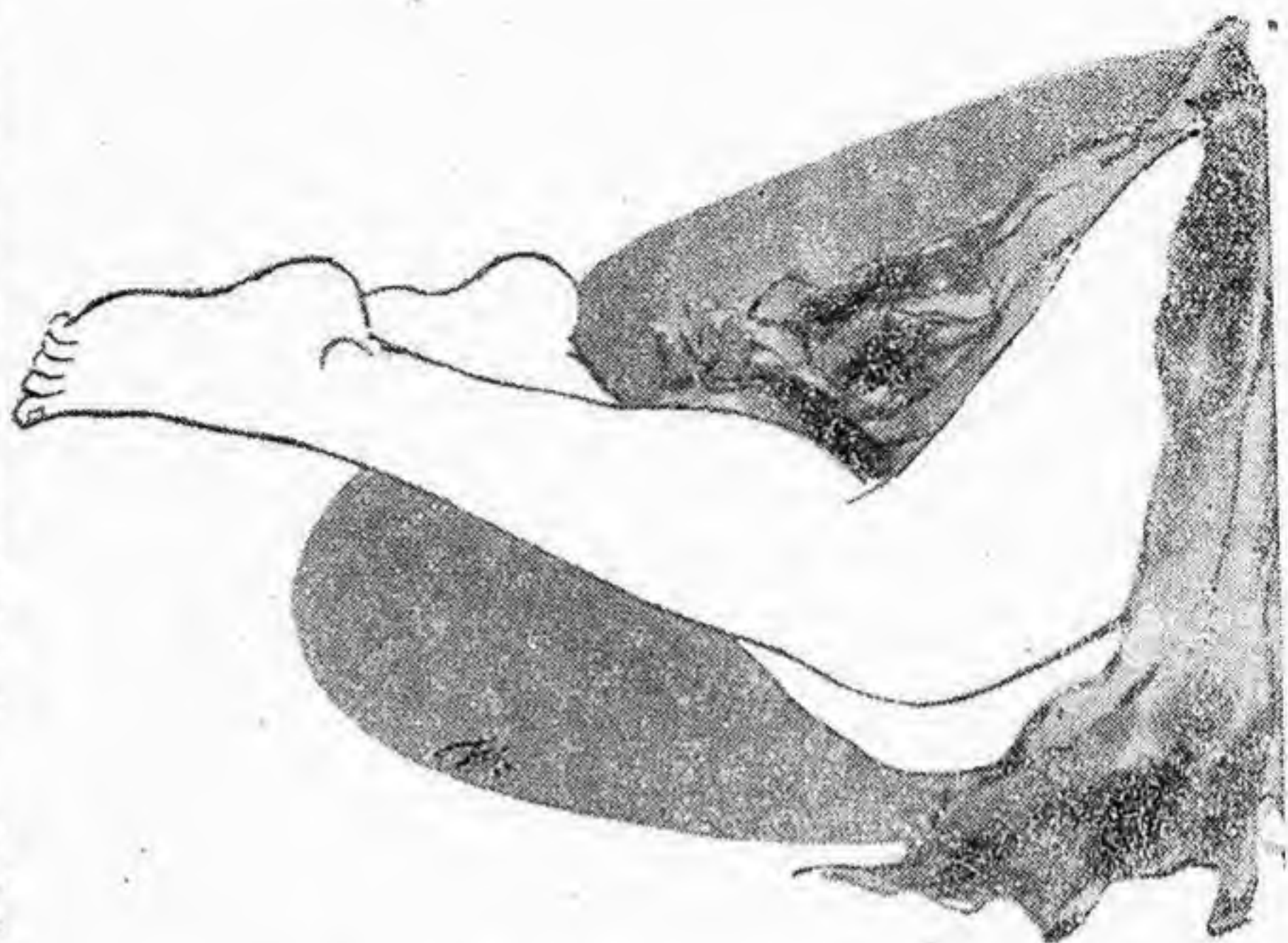
「ハイ、ハイ」

「一つ返事でよろしい！」

「ハイ」

と句切って出る秋子。女特有の無意味なわけのわからぬやきもち心理。

その間、じっとこのみさ子の責め姿をブラ



ツクの画調ではないが、裏まで鑑賞していたが、これから起こる美智子との責めの張り試合の外、世間的に至極華やかで派手でモダンな一流のレヴェューガールを責めるといふ異常な心理が楽しいのと、この京マチのエキゾチックな所がなかったら、ボクとしては全く凡中の凡である。

扱、水を持って来た秋子に長居無用と目で知らすと、それでも気をきかして、

「京マチ、あとで」と出て行くそして水入れの飲み口をみさ子の口へ持って行くと、

「誰？ 秋ちゃん？」と云いつつ、グググッとうまそうに水をのんで一息入ると、

「マア、スゴイ恰好にしてエ」

今更の様に横面のまゝ目をむいてボクをじっと見る。横転、膝をくの字にしたみさ子。

予定していた時間より遅れて、玄関の方よりガヤガヤ女の声二、三。即ち美智子と秋子の声、ボクの心臓は妙に高鳴って来る。新しい責への期待からであろうか。

「やかましい奴等だ！」

と態をそらして、彼女に、

「うるさいから怒ってくるが、今日はこのまゝでは許さんよ！」とダンゴ理窟をつける。

京マチの方でも「ウン」と、わけのわからぬ納得返事。

玄関から通り庭、勝手元へと入り込んだ美智子、

「アッ、御主人、おそくなって……」

これ又、いつもながら超モダンアプレ服装で立っている。

「又、コソコソ遊びして来たナ」

この山かけが当たったとは、しめたもの。秋子はそばから、

「ソーレ、バチャ……」

舟の三角帆型のブラウスから、肩を丸出しの横段赤、青の派手なもの。スカートは又裾まわりに印度サラサかエジプト風かの模様入りというスタイル。赤いサンダルで、たしかにお洒落外出姿。

「ウン、お秋のバカ……」

いらん事にけしかけてとばかりに、頬を叩きに行く。

「御主人ッ、怒ってエー」とガラガラ声で逃げる秋子。そしてその美智子の手を掴むボクは、腰縄ながら後手縛りは秋子の出す細引でスムーズに進んで行く。

「来る早々からこれや、だから皆がイヤがるのよ」と毒付きながら何の抵抗もない。

「秋ちゃん、ごちそうするんだよ」

「ハイ、ハイ」

「又二つ返事」

「ハイ」と秋子の声を残して、ボクは美智子をそれとなく玄關脇の京マチとは全く別の部屋ベッドルームへ引立てる。

「御主人、靴ぬがしてや」

もう甘えている。素足にして頬摺るような足ではないが、ともかく靴をぬがして押上げる部屋の中、目の前にある文弥柱に目もくれず、気の乗った瞬間とあとを急ぐ気持から、全く平凡ながら、後手の縄目を掴み上げてのナヴァロキッス一発。

「ウムウムウ、」

いやがっているのか喜んでいいのか、先ず両方ともホントであって、真実は本能的に湧き出ずる文弥節の一つである。わけなく高手小手、首縄の美智子は文弥柱に立縛り、

「御主人、苦しい、ハアーツ」

ボクの顔を悩しく眺め、犬のように舌まで出しかねない、所謂寝惚け顔になる。

「よがるのはまだ早いよ、今にいゝものを見せてやる」

「わかってる、あの子来てるのやろ」

「秋子がシャベツたナ」

「ウン」とうなずく、

「仕方ないガラガラ娘だ、一ぺん逆さ吊りして叩き上げてやろう」

「勘忍してやって……、わたしが身代りになる、あの子、気のえゝ子やから、わたしなんか御主人にはもう何されても仕方ないようになってるもの……」

「いやにあきらめたナ、覚悟してるんやネ」

とボクは柱の縄尻を解いて引立てる気配。

「エ、わたし此頃ちよっとヤンチャがひどい、と自分でもわかってるもの、御主人が甘やかし過ぎるからよ、フフフ、」

泣き笑い声でボクの目を長い睫毛の下から黒い瞳で射込んで来る。

「だから、一寸は折檻された方が……、と云うわけか？ 今日はいやに可愛いナ、余程弱点をこさえたナ、ハハ、まあいゝや」

「あたし、御主人の心には負けた」

と捨身になってボクにからだをぶっ付けて来る。縄尻を掴んでクルリと背向にして、突き出して引立てる。こ



のアブレに似合わぬ古式なよほよほ歩きである。

「早く歩かんと、足首括って引摺るゾ！」

「でも腰がだるいし、行くの嫌なんだけど……もういゝわ」

さすが思い切りのよいアブレ、素裸の腹を突き出すようにサッサと歩き出す、奥の部屋へ。そして襖の前、サッと開けた瞬間、同じ運命を前に、同じ無惨姿のみさ子京マチとこの美智子、ギョツと立止って動かぬ。京マチは見たか見ぬか、知ったは、たしか。

「サア、入らんか？」と小突く肩先の一端から、ボクはサジストに通ずる肉感に身がふるえる。物凄い静寂。三人共息をのむ瞬間。転っているみさ子京マチが顔をボク等の反対側に振り向きかえたのが動いたものゝ一つだけ

しかし、気を取り直したか美智子、瞬間、やゝ蒼くなった顔色を堅くして、

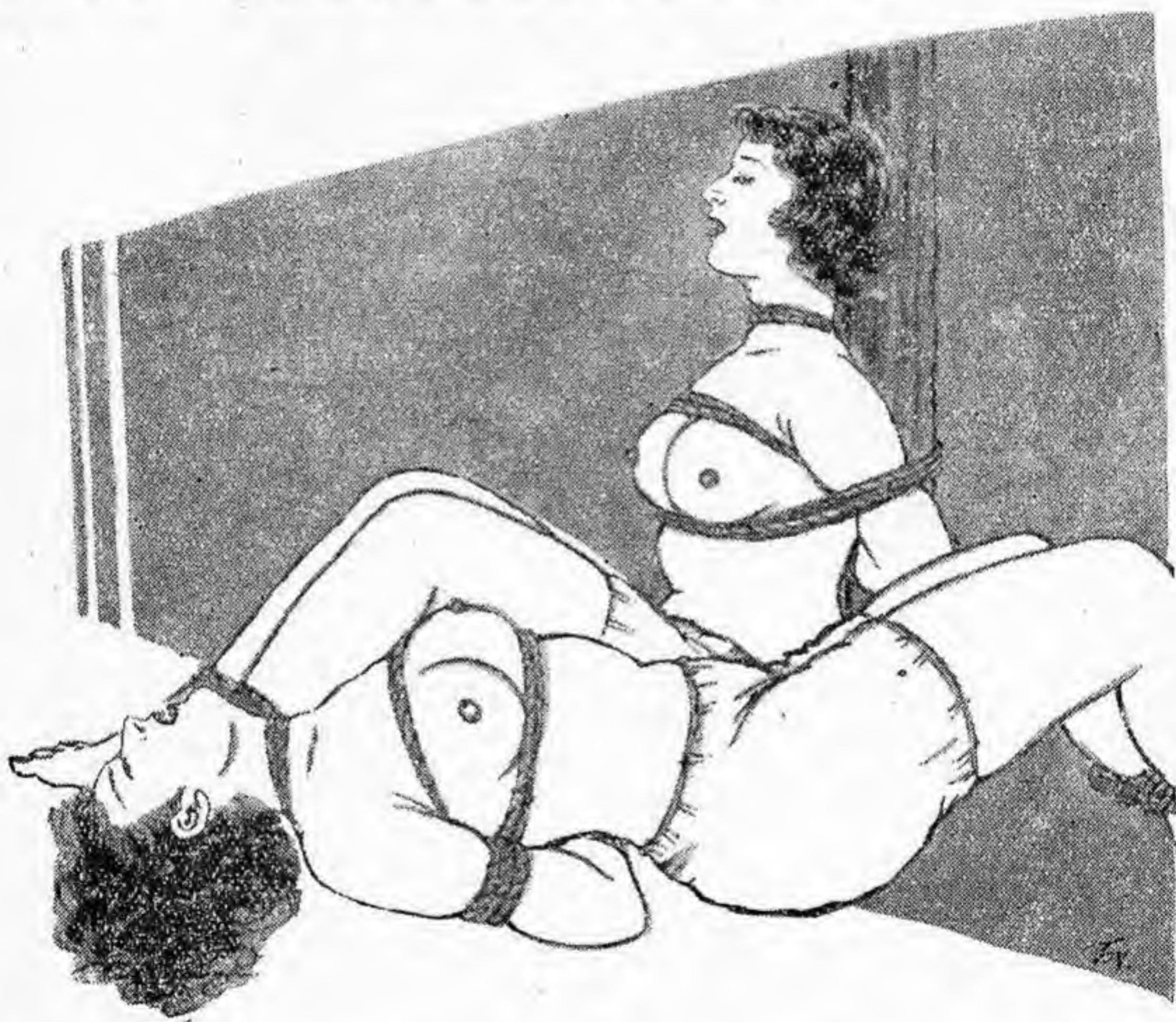
「ごきげんさん、平井さん」

と第一発をブツ。京マチ返事なし。ツンと肩を張っても素裸で縄目では一向見栄のせぬ美智子、ボクのいるのを今更思い出した様に、

「御主人、みさ子さんでしよ
う？」と硬直した顔を振り返
える。ボクが「ウン」とうな
ずくのと、「中川さん？」と
動かぬまゝ返事する京マチ。
「そうよ」

振り返えりもせずピクツと
も体を動かさぬが、今しがた
部屋の中に小突き入れた瞬
間、美智子の姿は必ず見たで
あらう京マチ。突っ立ったま
ゝの美智子を後から抱きしめ
ると、背中で空を掴んでいた
縄目の十指が、ボクの夕方着
の上から胸をまさぐる様にし
て、又自分の胸をバレリーナ
よろしくウンと張り反らし
て、ボクに頬摺りするように
天井向く頸に巻付く一筋縄が
クツキリとボクの目に映えて
来る。

偶然か、二人共アブレ型の
似たもの同志、肌色までよく
似たもので、京マチもう一こ
ろがしで縁側へころげ出たの



仰向けにしたが、すぐ横向に
ねじり向く、二人はどうして
も顔を見合わさぬが、ねた
み、そねみ、ひがみ、そして
屈辱、意地、とハリ、疼痛と
本能への刺戟、全く複雑怪奇
な心理合戦は始つたのであ
る。

そしてそれら二人を向い合
わして、先ず晒し柱を背負っ
た美智子の未だ括つていない
両足首を掴んで膝立てに前を
開けて引出して、臀をベタツ
と縁板につける。と、足首を
衣紋竿の端に片足首ずつ開け
て縛りつけての晒し責め。例
によりマニキュアした足の
十指はガバツと縁板をいぎた
なく爪先踏付けているのも印
象的である。そして今度は京
マチも同じ赤いウルシ塗の衣
紋竿に、これは仰向けに寝姿
で同じく晒し責めに縛りされ
る。その間じつと俯向いてい
るようでも、美智子の目がピ

クピク動いて見ているのであろう。

「イヤーン！」

マァーというセリフは初めてイヤーン！と

拒否とも甘受ともつかぬ一声を出す京マチ。

そして、両膝を宙に浮立たした本能羞恥態で

美智子の反対側へ首をねじ向けてしまう。ボ



クは仰向けになった誰もがの乳房のペチャンコ、へたり型が気に入らず、胸にかゝった縄を利用して挟み盛り上げにつまみ上げて、そして両頬を掴んでグイッと美智子の方を振り向けて、暫らく動かさぬようにじっと抑えつけている。勿論、今度は「イヤ、もう！」と低い拒否声一つで、唇をかみしめて目をかたく閉じたまま、二人共、足の指間が浅間しく開いて、マニキュアの赤い爪が散っている外に自由を許されていないのである。

美智子は前屈みで顎を突出して仰向いて喘えぎ、京マチは同じ仰向でも転されているので、胸を張り股さき型の両膝をガクガク浮き立てゝ震わし、ヒイヒイと唄う。ボクのサジスト振りはこゝで又一段と高潮して来るのである。ボクの片手はすでに呼びリンを押していた。

「ハイ、ハイ」と例の如く軽薄な句調で入って来た秋子、

「イヤッ！ エゲツナイ！」と驚く。然し未だ二人共心で知っても体は動かぬ人形の如し、

「水を沢山持って来てヤレ」

「ハイ」

とあわてるように出て行く。すぐ水入れを二つ持って来る。秋子は美智子に、ボクは京マチの首を起こして、ともかく水を飲ましてやる。

「首縄だけほどこいてやり……」

と秋子に云いつけて、ボクは京マチの首縄をほどこく。いつもの美智子なら「お秋、いらん、御主人ッ!」と、ボクにいたわれとばかりにすねる美智子も、黙って秋子にさしている。

「足も許してやるか?」

「いらん事しな!」

このあたり京マチへの意地がアリアリと読みとれる愉快なシーン。

「勝手にし!」とアホ秋は仏頂面をする。その頃、二人の全裸身は首縄解放の気のゆるみと、飲んだ水とで一入汗ばんで来る。夏責めのキタナサである。

近頃の美智子、何のかのと文句をつけながらも、責められるようにとそれとなく仕向けて来るのであるが、京マチを前にしては一向気が乗って来ぬ姿。秋子は引くに引かれずモジモジしている。それがボクの二人に対する心理責めの一つである。

さて、「ヒイヒイ」と低音でうめき散らす

ポリユームのある京マチ。フフンさま見ろ!とばかり再び首縄こそ掛けぬが高手小手に麻縄で縛り上げて、床の脇の低い棚の泣き柱に立ちも得ず、座りもならず、片膝立て尻も宙にギリギリ調に縛りつけてしまう。

秋子の姿はいつの間にか消え、責め姿の美智子は唯じっとウツロな目つきになってこちらを見ているのか、見えているのか。違い棚の中間の角材への宙縛りの詳解は抜くとして、仲々味のある縛り方で「泣き柱」とは名である。腰を落せば背中の中手は振じちぎれる吊り下げになり、立つは不可能。よくて両膝立てが精一杯で、ヌードの恥をかくすには片膝掻き立てが最後というもの。

京マチはそのまゝに捨て置いて、美智子の前に立ちはだかったボク、
「ボツボツおくれたわけを聞こうか?」
「聞く相手が違わない?」

仲々のヤキモチである。

責められ姿こそ異なれ、二人の対立的な感情の発散は室内の空気が異様に緊張の静寂さをみなぎらせる無気味さ。然し、ボくらしく強引と慎重さで簾椅子にドツカとかけると、そのガサッギューツと大きくキシム音で室内の陰惨無風は打破られて、更にその音に二人

の胸詰る呼吸も一息吐く如く、申し合わせたように顔を上げてチラッとボクの方を見たのを見てとったボクは、一服吸うのも忘れて間一髪の利用で、

「どちらから先に片付けてやろう、美智子からか、それともみさ子か? 返事せぬと又二人共一緒に合唱するのか? ウン……」

と、初めてスバリと一服輪を吐くと、又ガサッギューツと威圧的な椅子のキシム音と共にボクも一休み。然し、乱れかけたボクの目は、ギリギリと二人を見比べて目の玩味である。先ず、縄目に肩を突張らし、その縄目のため殊更に大きく握み出された両乳房、宙腰で駆け出す恰好よろしく踏張った片膝立ての京マチ。

次にアメ誌「フィルムファン」表紙絵、初心者スケート転倒よろしい姿の美智子。そして又静寂と二人の沈黙の対立と意気地。しかしそれは、

「御主人、御食事!」と秋子の出現で一瞬、空気は柔らぐと、実のところポリユームの高いもの二人相手では、責めの本調子にしてもボクはいささか御疲労体であらせられている時とて、時の氏神でもあった。

「まだやられてるの、続きはあとで、サ、御

主人かまへんやろ」

と口と一緒に、やはり秋子は美智子から先に縄目をほどく、ボクは京マチ。縄目を解くが早いか京マチ、黙って散乱した衣類を拾って化粧室の方へ走るようにして出て行く。あとに残った美智子、あわてるように身づくろいして「フン」とイケズ面すると京マチの後を追わず、その場で秋子に手伝わして化粧直し、四人予定の食卓も、京マチみさ子の無断退出が分って三人水入らず？ ボクの気がかりらしい態度に、やきもち句調で、

「だまって帰るなんて失礼ネエ、自分だけが辱かしめられたわけでなし！ フン、後輩のくせに……」

「いそぐ時間があるんと違うか？」

「ウソ！ 夏のおどりも一昨日は楽日だし、今年の八月は臨休よ、御主人！」

と、正面切って開き直る事もようせず、愚痴りつつパクつく美智子。

「しかし、黙って帰る奴は失礼だ」

「ほんとよ、わたしなんか御主人に心を任せているんだもの、あの子は体だけ打込んで来るのネエ」

「どうやら、そうらしい」

「御主人の助平！ 秋ちゃんまでシャーシャ

歡義先生醫學相談欄

◎御遠慮なく御相談下さい◎

一、相談文は出来るだけ詳細にデータ御記入の上、読者係宛御送り下さい。質問者の秘密は厳守し、絶対他へ洩らすような事はありません。

一、相談文及び回答は漸次本誌上に掲載いたします。用紙はどんなものでも結構です。都合悪き時は住所氏名を明記されなくとも構いません。

ーとして、バカにしてるワ」

「フン、か？ ハハハッ！」

「知らない、散々ばら恥をかかせて置いて一人だけ消えるなんて、だからあたしあの社会からサヨナラしたの！」

益々ばやき乍ら、パクつく事は二人前？

「ごちそうさまっ」と

足を投げ出して足首さする完全アブレの準マゾ美智子の独断場に、さすがの秋子もバアーと口を開いたまま。

「今度出喰わしたら、真剣勝負するか？」

「イヤ、もうあんな肉体派のネチネチはごめん、わたしは江戸ッ子よ」

「何を今更……」アンタア——」

「御主人のオタンチン！」

然しボクの心の内では京マチにも未練はあった。その問題の京マチみさ子も、八月臨休と公演なしのためか、案ずることもなく、その翌日の夜、ボクの湯上りと共に、

「中川さん来てるッ？」と大きい黒目をむいて、ボクの又一姿を見ると、「マァー失礼」と、一応顔を引込める。

このところ美智子は「イヤァッ、ホホホッ……、ものすごい恰好」と、いたずらでも仕かねないが、

「どうした、入って来いよ、コレッ、入らんか」

京マチは余程の事でないと「ハイ」と云わぬ娘だが、その日はやはりかすれた声で「ハイ」とノツソリと入って来ると、堅くなって座る。それから、

「昨日はどうした？」

「すみません、でも中川さんの前だけはもうごめん、ホント」

とあやまるのをキツカゲで、又責め初めたが、やはり調子は同じ、それから来る度に「中川さん来てない？」と一度は覗き込んでからでない不入らない京マチも亦、快哉。

(以下次号)

懸賞

告白と手記と体験 入選

モデルになりたい男

——露出狂の告白——

小沢 一 夫

長い間、自分の奇妙な性癖を一人で悩み、且つ多分に世間への劣等感に苦しめられて来た私は、奇クを手にして、そこに私と同様な慾望、即ち自分のあさましい赤裸々な姿を他人、それも多くの異性の眼にさらしたいというゆがめられた慾望を持つ「露出狂」の人達の手記を発見し、どんなに嬉しく又心強くさえ思った事でしよう。特に女性の中にも露出癖の方がある事を知って、身内が熱くなる様な激しい興奮に襲われた位です。

私が自分の裸体を人目にさらし快感を覚える様になった経歴とでも申しましょうか、之

迄の経験の連鎖を赤らさまに奇クの読者の皆様に告白しようとするのも、やはり皆様の前に偽わらざる自己を横たえて、皆様の軽侮と好奇の視光で撫でまわされる事により自虐めいた喜びにひたりたいという、露出症のあらわれでしようか。

幼い時の記憶からは、私は別にそう変わった情景を思い出す事は出来ません。只小学校一年の時でした。母が腹膜炎の為半年程入院した事がありました。その間、家事の手伝に來たのが「ひで」と呼ばれる十六位の娘でした。私共の住んでいたN市からずっと離れた山間

の部落から出て來た彼女は遅しい身体つきの良く幼く女中さんでした。それは秀が來てから二月程たった或夏の日の事です。

折柄父は会社の出張で家を留守にし私と秀だけが残って居りました。久しぶりに主人の束縛から離れて秀は隣家の丁度彼女と同年輩の女中と二人、縁先で何やらはずんで話をしています。私は座敷の中で、そんな彼女達をぼんやり見ていました。その中、隣家の女中が何の話の続きか

「本当かね——、おら、見た事ねえからわからんけど」

と大袈裟に眼をみはると秀は
「そんならおめに教えたろ」

と言っているいきなり私の方を振りむき

「坊ちゃん、一寸こゝへ来て御覽」

と声をかけるのです。退屈していた私は、ふと何気なく縁へ出て行きますと、秀は

「坊ちゃんの良い子だに秀の言う事聞いてくれるな、その代り秀がお父に頼んで大きな甲虫を沢山とって来てやるからな」

と云い私が何もわからぬ儘にうんと返事をすると、ちらと隣の女中と顔を見合せてから

「じや坊、そこに寝て御覽」。

云われる通り私が縁にあおむけに寝ると秀は素早く手を伸ばして私のパンツをずり下してしまいました。風がすうすうと裸になった御尻を通り縁がひんやり冷たくて良い気持ちでした。何をされるのかと、私が不思議に思乍ら秀を見上げていると、彼女は傍にあった小型の赤い表紙の

本を手にして、それから三十分近くも、彼女は私を玩具にしたでしようか！ 漸く
「お父さんに言っではいけんよ」



と言いつつ私を裸にしてはこの遊びをしました。私は別に悪い事をして
いるとは思わず却ってその様な行為をされるのを楽しみにしていた様な気がします。この時、
秀から受けた異常な感覚は幼い乍ら私の頭にやきついて後年の露出症への傾向に大きく響いて居る様です。

小学校上級になってからの私は内気な勉強好きの生徒として過しました。只お定まりの子供同志の悪ふざけの中、特に御医者ごっこだの泥棒ごっこだのはよく裸にされたり縛られたりする方を志願したものです。又父の書棚から谷譲次訳の「バッドガール」をこっそり持出して読みふけったりしたのですから相当早熟だったのでしょう。此の小説の中でもヒロインのエディ、が婦人科病院へ行き医師の前で次々と衣類をとり全裸になっ

て診察をうける場面の描写は夢中になって何回も読みかえたものです。

而し何と言っても私をして露出狂たらしめる最大の影響を与えたのは、中学（旧制の）での生活でした。中学三年の二学期の事です。後五分で六時間目の体操が始まるという時、私は体操用の運動パンツを家に置き忘れて来た事を発見し蒼くなっていました。それと云うのも体操教師のTは、まだ三十そこそこの張りきり屋で三年程戦地にも行って来た一年志願の予備将校だったのです。彼はいわゆる「国の御楯となる健児」を養成すると称して激しい軍隊式訓練を行い、私達生徒一同から恐れられていました。彼の体操時間には、黒い木綿の布地に両脇に二本の白線の入った規定の運動パンツ一枚の半裸で行うのが常だったのです。今さらどうする事も出来ず級全員が校庭に集合した時、おそろおそろTに運動パンツを忘れたと申し出ますと、案の定彼は

「何、忘れた？ 貴様、その長ズボンでたらだらと体操をするつもりか。罰だ、ズボンも猿又もとれッ」

とどなり出しました。あ、どうしましょうか、私は必死になってTにズボンをはいた儘

体操をさせてくれと願いました。せめて猿又だけと懇願しましたが、彼は聞き入れる所か「早く脱がなか、こらッ」

と今にもなぐらんばかりの勢いなのです。ずらりと並んだ級全員が面白そうに眺めています。そして遂に私は四十人の視先の前でズボンと猿又を取られてしまったのです。Tはそんなみじめな私をニヤリと見て

「日本男子だ。くよくよするな」

と言いつち、何事もなかった様に号令をかけ体操を始めました。

秋晴れのすがすがしい十月、まぶしい程の太陽を裸身にうけて私は体操どころではありません。周囲の誰彼の全てがじろじろと私を見ている様に思えて、かっかっかと全身がほてり恥かしさと口惜しさに目がくらみそうでした。私は

「畜生、畜生、Tの奴め！ あいつを殺して俺も死んでやる」

とそんな事を夢中で考えていました。その中状況は愈々悪くなりました。Tは一同を卒いて校庭の隅にある鉄棒の所へ行きました。其処は低い生垣を境に道路に面して居り多勢の通行人が道を往来しています。その中にはすぐ近くの県立高女の生徒のセーラー服姿も

まじっています。素っ裸のあさましい姿を級友の前にさらすのさえ堪え難いのに、まして同じ年頃の女学生にそんな自分を見られる事は死ぬ程苦痛です。Tはきっとそんな私の氣持を或程度察していたのか、意地の悪い薄笑いを浮べ

「小沢、前へ出ろ」と

どなりつけました。そして更に「俺がよしと言う迄その鉄棒に上っておれ」と命ずるのです。いやと云えば彼の鉄拳がとぶでしょう。洩々私は鉄棒へつかまりました。両手が真っすぐに上へ伸びて私は完全に無抵抗な姿勢でぶらさがりました。どっどっどと心臓が破れんばかり鳴り、羞恥とくやしさと涙があふれて来ました。往来の方から「おや、生徒さんが裸になって、可哀想にまあ……」

と何処かの小母さんの声が聞えます。腕が次第に痛み出して来ました。色々な思いが断片となってぐるぐると頭の中を駆けめぐります。あゝ今頃、女学生達があの道を通って行く、この光景にぶっかつて彼女達はどうするだろう？ きっとちらりと横目で見て笑いをこらえて足早に去って行くのだろうか？ それとも眉をひそめ「いやねえ」とつぶやく



かしら？ それとも——等と考えて居る中に何時しか腕の痛みも忘れて、私は異様な陶醉にひたって行きました。自分が今異性の前に「なぶりもの」になっている。彼女等の惨酷な視光は私の顔を、胸を、腹を、脚を、めらめらとはって行く、彼女達の顔には嘲けりと好奇の微笑が浮んで——そんな奇様な空想が

身体の全ゆる官能を酔わす様に熱い血流となつて私を恍惚たる世界へ導いて行くのです。私は何時かこんな状態がもっと長く続く様に祈っているのです。

この事件以来、私の露出症は全く決定づけられてしまいました。私は想像の世界の中で自分を主人公に、思いきった卑猥な情景を描

いては楽しむ事を覚えました。谷崎潤一郎氏のマゾ作品を乱読し大きな影響を受けたのもこの頃でした。空想の中での私は、或時は敵の城内に忍びこみ武運つたなく捕えられた隠密でした。彼は敵の領主とその愛妾以下多数の御殿女中の面前で全裸にされ桜の木に逆さ吊りにされます。女中の一人が弓の折れを鞭に激しく彼を責める。白い膚に鞭の痕が赤く走り、さんばらになった髪に一片二片花びらが無心に散りかゝり鞭をふるう女も居並ぶ女達の面にも、残忍な微笑が何時しか浮んで：そんな妄想にふけり乍ら私は自分を汚してしまふのでした。

而し空想はやはり空想でなかなか現実に露出症を満足させてくれる機会は無く、私は只悶々としているのみでした。やがて中学を卒業しC大予科に入つた年に戦争も終り、世の中はガラリと変ってしまった。

書店にも所謂カストリ雑誌と呼ばれるあくどい表紙の粗末な体裁の雑誌が並びヌード写真が氾濫しました。而しそれは厳密な意味での真の性文化の解放ではなかった様です。もっと露骨なそして幼稚な性の表現の時期でした。勿論只今の奇巧の様な高い水準の物は一冊もありませんでしたが、以前には全く見ら

れなかった口絵や、写真を手に入れる事も出来、中には私の慾望と合致する類の物もありました。

そして終戦の翌年の事でした。

私は、信州のK温泉へ一月程滞在しました。が、はからずも、こゝに自分の露出慾を満喫させてくれる絶好な機会に遭遇したのです。

普段仕事をしている時、如何に謹厳な人でも疲労をいやす為温泉へ来た際は、自然のびのびと解放的になります。女の方もやはり同じ事なのでしょう。K温泉の大湯（一種の共同浴場）には多勢の男の浴客と共に美しい娘さん達も平気で混浴していました。私は浴室へ一歩入るなりこの光景に接してどきどきしました。無論彼女達は温泉の気分を楽しんでいるのであって、私の方なぞ見むきもしません。而し、あゝすぐ真近に美しい異性達をひかえて、私は真裸で誰にもとがめられる事なく歩きまわれるのです。私は手拭を前にあてようとせずわざと浴室内をあちこち歩き廻りました。室内の女性全部の目が私の裸身に注がれている様な楽しい空想にふけり乍ら。

そんな或日の事でした。何時もの様に大分長湯をした私が浴槽から洗い場へ上った途端いきなり目の前がくらくらと真暗になりそれきり意識がわからなくなってしまいました。余り長く浴室に居てのぼせてしまったのです。それからどの位にたったでしょう。漸く気がついて見ると私は大湯の前の脱衣場の隅に置かれた長椅子にあお向けに寝かされ風にあてられていました。多勢の浴客が周りをとりまいてざわめて居ます。そして何と私は浴場で倒れた儘の姿で寝かされていたのです。周りの人垣の中には先程の娘さん達の顔も見えます。彼女達は何やら互にさゝやきあつてクツクツと笑っています。あゝ私の長い間の夢は今完全に実現している。彼女達はこの情景を見て何を感じているだろう？ 何時しか空想と現実の入り混じった陶酔の世界の中で私は自分を第三者の位置において、つまり自分の事を三人称にし彼女達の事を考えていました。

「彼女達は、じっとそこに横たわっている青年の裸身に目をこらした。苦しうに目をとじて青年は少し体をよじる様にしたその拍子に少し股が開きかげんになり、彼女は一度はあわてゝ目をそらしたが、又そつと青年の其処に好奇の瞳をこらした……」

狂おしいばかりの恍惚たる戦慄がうずく様に全身にかけめぐり、あゝ此の一時こそ露出

狂のみが知る歓喜の絶頂でありました。

突然私はハッとしました。快感のあまり身体が異常な状態を呈してしまったのです。それは、私の心の中をあからさまに外部へ告白してしまふ結果になりました。この醜態に周囲から笑声が起ったのは当然です。

「あらあら」

とかん高い娘の声に笑いの波は愈々拡がって行きました。その中で私は依然じっと横たわって居ました。「もつと見てくれ、笑ってくれ、そしてもつとはずかしめてくれ」と心の中で繰返し乍ら。やきつく様な快感が一層高まって行くのを覚えました。

読者の皆様は、こんな私を軽蔑されるでしょうか？ C大法科卒の一人のまじめなサラリーマンでとおっている男が、実は、女子美術学校の裸体モデルになり度いと言った奇妙な夢に真面目にうなされて居る事を嘲笑されるでしょうか。うんと笑って下さい。私を軽侮して下さい。それが私にとって堪え難い快樂となつて返つて来るのです。それにのみ、私は生き甲斐を感じている露出狂なのですから。

(完)



告白

古川裕子

孤

こどく

獨

古川裕子——いまこの目の前の三面鏡に奇怪な姿を写してうなだれて座っている女。これこそ、まごうかたなき「古川裕子」なのです。真紅のゴム引のレインコート、魔法使のようなそのフード、顔の半面を、——目のふちからすっぽりと顎の下まで蔽うてしまっているゴム布のマスク。後手錠。じっとうなだれ、時々フードの顔をあげて、こわごわ目を開いて鏡にうつる自らの虚像を盗み見しているこの女。これこそが、昭和二十七年十二月以来、皆様の前に現れ

て、皆様のお心を乱してきた古川裕子という女なのです。これは私の半身。影法師がその人についてはなれないように、私には古川裕子がつきまといて離れないのです。

私は自らの半身に「古川裕子」なる名を与えました。そして身内に荒れ狂う狂熱の数々を、思いきってあからさまに書きつづり、私自身を救ってきました。本当の私は——現在の私は、一人の年をとりすぎた、さる病院の実験室助手にすぎない。口数の少ない、人目

にたたない、いつも白衣をきて、真白なマスクをつけ、人間の組織を千分の三ミリメートルの薄さに切り、赤や青や黄に染めわけ——それが、この私なのです。職場では、おっとりとした、愛嬌に乏しいわけではないが高い声で華やかに笑うこともない一人の未亡人あがりの、ごく平凡な女——これが私への評価だと思っても間違いではありませんまい。

この控え目の、虫も殺さぬ白い顔の女が、実は、古川裕子の筆名で、奇譚クラブという特殊な雑誌に、狂乱の告白文を書きつづけているとは誰が想像するでしょうか。いえいえ、あの病理検査官のミクロトーム（薄切器）で人間の内臓を、うすく切っていたのは、つい二時間前なのです。そして今、自室の鍵を嚴重に閉め、自らゴムレインコートをまとい、ゴムのくつわを自らの手ではめ、そして、いつか、人手をかりず、鍵の開閉が出来るようになった手錠を、うしろ手にはめ、鏡の前で身悶えて妄想に耽っている！ この姿を、職場の誰が想像しているでしょうか。

私は自分の異常な性癖をもてあました。そして「奇譚クラブ」なる雑誌に相遇し、魚が水の中に投ぜられたように、生き生きとして、自らの中に鬱屈していた異常性欲を思うさま吐き出した。奇譚クラブを通じて、私は更に多くの同じ世界に身悶える人々があることを知り、そしてその若干のかたがたと文通した。加之、そのうちの数人の人々のもとに出掛けていって、お互いの「性欲」をいやし合った。このような云いかたは、不愉快ではあるけれども、真実はそれ以外にはない。

しかし私は傷き倒れた。私の不明のため、至らなさのため或は私の不運のため、私自身のリビドーを合法的に満足させ得る境界を擱

むことは出来なかった。いつのときも、それは前よりも一層惨めな自分を、そこに発見したにすぎなかった。たゞ自分が、どんなに浅ましい人間か、私の性欲がどんなに歪んだものかを、いやという程思い知らされたにすぎなかった。

それと同時に、甘美な思い出として、私の中に花咲いていた、あの亡夫との生活、亡夫とのむすびつきが、そのような惨めな結末に出合うたびに、闇の中に遠ざかってゆくあの夜行列車の赤いテールランプのように、私から離れ、うすれていった。この感覚は、私を徹底的に叩きのめしてしまった。私には、もう何もない。生きているのは、——現実には、「私」の存在だけ。思い出も、希望も何もありません！

最近私は、読者の皆様から、いくつかのお手紙をいただいた。それは日本各地から私によせられたものだったけれど、内容は不思議なくらい、似かよったものだった。つまり、

「お前は、選りにも選って妙なところへばかり出掛けてゆくから、哀れなことになるのだ。私のところへこい。お前を誓って満足させてみせる。勿論結婚もしよう。いゝかお前がかいたあの条件、私はよくそれを知っている。さあ早く来い。失望するにはまだ早すぎる」

せんじつめれば、こういう文面なのだ。しかし私はもう何も希望しない。いつものような美辞麗句も書くとは思わない。御親切に手紙をおよせ下さった皆様には、感謝のほかはないけれど、今の古川裕子は再び皆様のお心にすがる意欲と勇気を持ち合っていない。うつろに目を開いてたゞそれらのお手紙の文面を見ているだけ。お赦し下さい。でも、この北国の雪空のように、私の心は今重く重く沈んで、何も考えたくない、何もしたくない！

しかし、だからといって性欲が——私のあの歪んだ性欲が消えさ

ってしまったわけではない。皮肉なことに、私の心とは反対に、胸をしめつける身悶えとともに、時々あのいまわしい異常性欲が目醒してくる。それでなければ、誰がいまこの鏡にうつっている奇怪な姿になって孤独の中で、うめいているものですか。私は「美しい五月に」に於て、生意気にも「人間の孤独」についてのべたてた。しかし今私が身に泌みて味っているのは——亡夫の死後、あの恥ずべき「生殖器の旅遍歴」（私はあえて、こんな言葉をえらび用いるのだ）を味ったのちの私が、皮膚の感覚のように鮮かに思い知らされてゐるのは、「異常性欲者の孤独」なのです。

おそらく奇譚クラブの読者の皆様には、私のこの痛切な思いが解ってくださるにちがいない。ある高名の提琴家は、自らの芸術を顧みて「芸術は孤独だ」とつぶやいたという。それと同じ意味で、私は不逞にも「異常性欲は永遠に孤独だ」といいたい。マソヒストと一言に云っても、それは個人によって千差万別なのです。名を挙げた非礼を許していただけるなら、川端多奈子さんのマソヒズムは彼女自身独得のものであって、私のそれとは全くちがう。羽村京子さんの充足の手段は、他の人々のそれでは代用は出来ない。サディズムにしても吾妻新様のそれは、誌上の誰とも類似しない個性的なものなのです。吾妻様の女性のズボンに対する感覚は、あのかた自身のものであって、氏と全く同様に感ずる人々が、奇譚クラブの読者中にも多くあろうとは思えない。

これは余計なことですけど、このごろ吾妻新様「夜光島」に唐沢登枝なる人物が現れ、吾妻様の筆先のまゝに盛に活躍しています。この「唐沢登枝」は、私の思いあがりでなければ——私のカンちがいでなければ、おそらくは、古川裕子のかいたものから、吾妻

様が、刺戟を受けられて創造された人物のようです。それは充分に吾妻様の趣味のまゝにこなされて「夜光島」なる小説は、私にも充分たのしく、充分面白く拝見しています。

けれども、これは私の勝手に感ずることなので、吾妻様には何の責任もないことなのですけど、なまじ古川裕子の亡霊のようなものが、そこにあるだけに、本ものの古川裕子は全く途まどいてしまっているのです。そして私のかく「告白文」から読みとれる人間像は、他人の目を通すとこんな風になってしまうのか、という、至って見当ちがいな嘆きを感じてゐるのです。吾妻様は、別に古川裕子を出来るだけ忠実に、御自分の小説の中にとり入れようなどとは夢にも思っていないらしいやらないでしょう。御自分の奔放な御夢を、古川裕子めいた女のうちに見出して、そこに全く別の人物を創造なさったにすぎないのでしよう。それはよく解っています。でも裕子はもう一度つぶやかざるを得ない。

「異常性欲者とは何と孤独な寂しいものなのだろう」と。

このことは吾妻様に対する羽村京子様の御手紙にもよく読みとれます。羽村様は（私の思いちがいではない）身悶えして、自らの性感と他の人とのちがいを歯がゆがり嘆いていらっしやる。「異常性欲者は永遠に孤独なもの」私はこの確信を深めないではいられないのです。

だから私と亡夫との生活も、冷静に見れば今となつては、要するに私自身の幻想の甘美さにすぎなかったのかも知れない。夫の死がもし、あんなに早くおこらなかつたならば、私と夫との感覚のちがいが、もっともっと目について、今の私が考える程、調和したものにはならなかつたのではないか。この考えは、このごろの私を恐怖

させます。その上、札幌のS氏、あのまだ生々しい名古屋のT氏への感覚——そんなものが、亡夫の幻影を、私の心からだんだんと消し去ろうとしている。私はこのごろ反動的に自らの中の亡夫のまぼろしに、しがみついて生きている。それ以外、今の私には何もたよるものがない。しかもそのまぼろしも、結局は私自身の幻想にすぎない。実在の夫とはかなりちがったものなのだ。丁度吾妻様の中の古川裕子の幻影が、本ものの裕子からみると驚く程、ちがった人物に感じられるように。ともあれ私は私自身の幻想によってのみ、自分の性慾を充足させましょう。それ以上何を望み、そして何が出来ましょうか。異常性欲とは本質的に孤独なものなのです！ それは異常性欲者の宿命であり、異常性欲者の永遠のかなしみなのです。変態性欲は自分自身にも、対社会的にも、暗いさびしいさびしい一筋の道なのです。どこにも横にそれてゆきようもない荒野の果て、遠い遠い暗い地平線に没するまでつづいている一筋の道なのです。

裕子は、裕子のユニホームであり、裕子の宿命の囚衣であるゴム引のレインコートをきて、フードをまぶかにかぶり、ゴムのマスクを嵌められ、後手に縛られ大きな黒い異常性欲の手に縄尻をとられて、とぼとぼとこの道をゆくのです。誰もいない、暗い暗いこの道を。ときどき、かたかくくくくられた身を悶えて、ゴムのくつわの下から呻き声をあげ、わめき突きとばされ、突きとばされ、マソヒムムの刑場に曳かれてゆくのです。御覧なさい。鏡の中のレインコートの女は、括られた胸をあえぎ、うごき出したではありませんか。ゴムレインコートは、がさがさと鳴り、あえぎにつれて、口鼻をふさぐゴムマスクが、鼻にすいついたり、ふくらんだり、苦しそうにフードの頭をふって、ほら立ちあがったではありませんか。

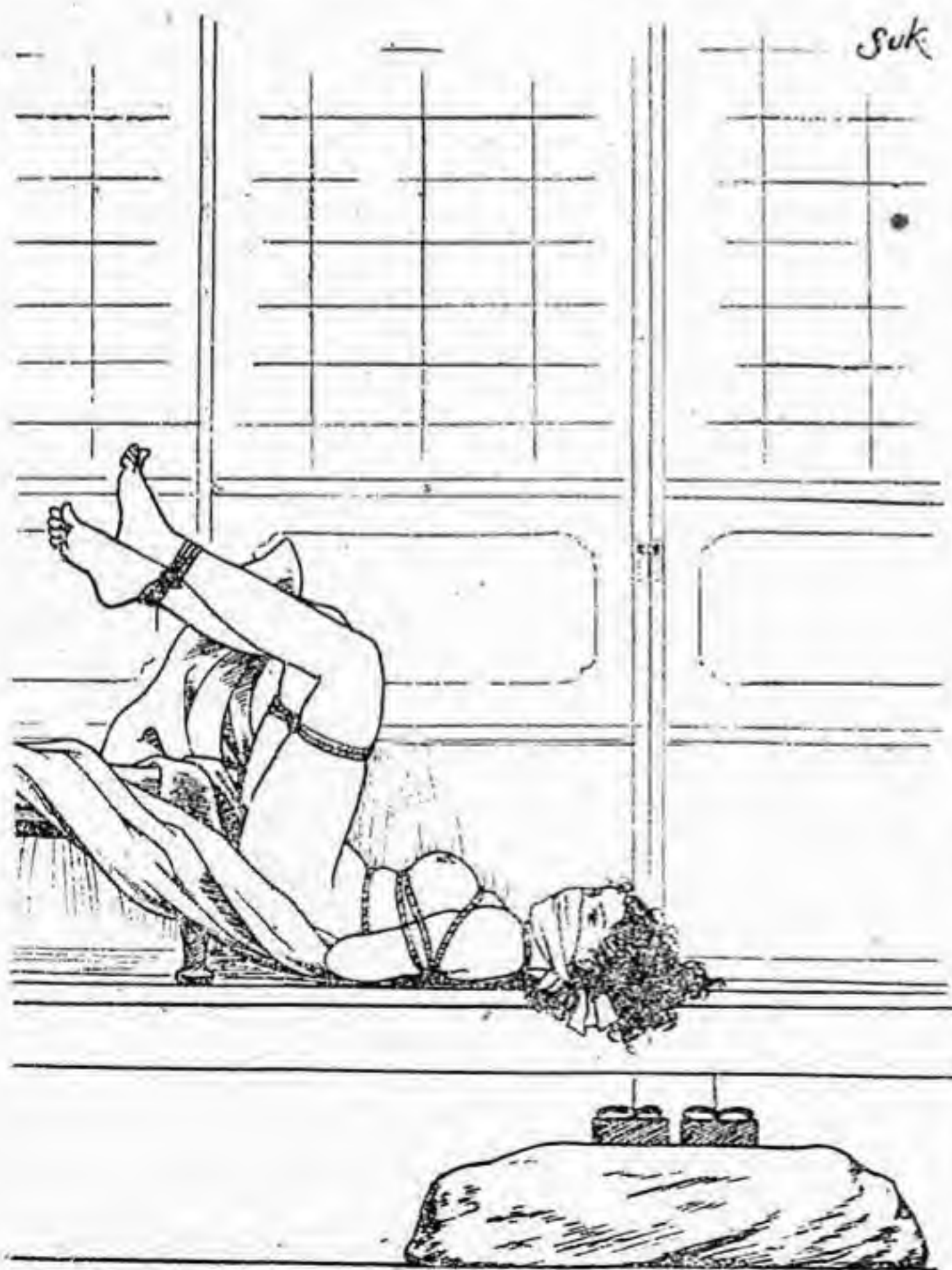
手錠のはまった白い柔かい手首を赤いレインコートの背中に、異様に極立たせながら、後ろむきに雨戸をほそめにあげ、暗い濡れ縁から、冷たい氷雨の中に出ていったではありませんか。誰にも見えないう、誰も来ない、庭の茂みの中で、この囚衣の女は幻想の夫から、折檻をうけることによって、自らの罪の意識をしずめ、異常な性欲を満足させようとしているのです。その背後に——この悪魔めいた女の縄尻をとって、夜の苦行にあえがせ、浅間しい狂態を演じさせ満足の笑いをわらっているのは、疑もなくこの女の性欲なのです。

（ほら皆様のうしろにも、あなたの異常性欲があなたの背に鞭をふるおうとしています！）女はびくりと身をふるわせると、篠つく雨の中で身悶え始め、木下闇の中で異様な踊りを踊り始めたではありませんか。あれが古川裕子の真の姿です。そして読者の皆様、あれが、あなたがた御自身の姿なのです。夫々の囚衣がちがっていて、刑の重さに軽重があっても、奇譚クラブの読者の皆様、そして古川裕子にお手紙を下さった、もろもろの皆様、あなたがたの真の姿は、あれ以外ではないのです。しかも一人一人服役の場所がちがいて、永遠に独房に閉じこめられて責められる囚人以外ではないのです。

奇譚クラブの誌上で、多くのかたがたが明るい異常性欲の存在を主張なさった。いいえ、そう申すより、異常性欲の暗さを嫌って、これを明るい健康なものに近づける努力を強調なさった。又異常性欲の悖徳性についても、入念な反証をあげて、ともすると罪の意識に落ちこみ、暗く沈みがちな人々を救おうと努力された。その主張される限りに於て、その強調される趣旨に於て、私も賛成です。でも、それだけで、この根強い暗さや罪悪感が、拭い去られ、春の

水が四沢をうるおすような、まどかな満足感が充足されようとは、私にはどうしても思えない。現実社会に生きている「我れらの仲間」は、どんなに肩身をせまく、自らを恥じ、暗い罪の意識の中で、しかし耐え難い本能の要求に苦しみ悶えていることでしょう。いや、それをよく知ればこそ、まえのような主張が、くりかえし誌面に現れて、少しでも、この泥沼から救出しようとなさるのでしよう。あのお話にあるお釈迦様が地獄の囚人を救おうと、極楽からたらしたという一本の細い細い蜘蛛の糸のように。でもあのお話そのままに、異常性欲の地獄にうごめく人々を救いあげるには、それは余りに弱く細すぎるのです。これは裕子のように、重症の異常性欲者だけが、そう思うのでしうか。いいえ、私にはそうは思えません。裕子のくだらぬ「告白文」に対して、お手紙を下さった百人に近い皆様も、多かれ少なかれ裕子と同じ意識に悩んでいらっしやる。それはあのかたがたのお手紙の文面の上に、痛い程感じられるのです。そして敏感で、繊細な、鋭い知性と、ゆたかな感性とをもっていらっしやるかたほど、その苦しみは目を覆うように悲惨なのです。異常性欲というものは、知識や知性や情感とは全く縁のない別ものなのです。なまじ、そのようなものを持ち合せておられるかたほど、悩みはいよいよ深く、罪の意識はいよいよ深い。素朴で、すこし粗野なかたは割合に明るいのです。これは宿命の刑罰です。前のようなかたは「前世」の宿業が深いのでしよう。これは理屈で解決され、すっきりするには、余り本能に根ざしすぎています。何のくったくもなく、これを昇華し、遊戯化出来るかたは、余程すぐれた人物が、そうでなか

Suk



ったら、異常性欲の度合がさまで深くない幸福なかたなのです。私はこのことについて皆様と議論をする気はございません。裕子はたゞ、自分が心からそう思うことだけを、自分が、どうしてもそう信じられることだけを素直に述べただけなのですから。でも悩み深いかたがたのため、私はあえてこれを誌上に記しておきたいと思う。現在の奇譚クラブに現われているあの雰囲気以上、一人一人の読者の気持は暗いものなのだ、と。

誤解をふせぐために、もう一言つけ加えておきます。裕子は、今裕子が申した方が良くて、これを明るく取り扱うのは間違いなのだ

などと主張しているのではございません。むしろ誌上では、出来るだけ明朗に、たのしく扱われる方が賛成です。でも、異常性欲者古川裕子は、読者の中のどなたかの代弁として、いいえ裕子自身の心の奥底に巣喰う抜き難い観念が、きっと皆様の心の一番底にもひそんでいると信じるが故に、あえてこう申さずにはいられないのです。

暗い庭に絶え間なく雨が降っています。私のフードを、肩を、背を、手錠のはまった手首を、容赦なく雨が流れていきます。フードの縁から流れおちる雨は、ゴム布のマスクをも、びっしりと濡らし、雨の底に裕子はお仕置を受けているのです。生れてから私はこうやって何度雨の中で折檻を受けたでしょう。少女の頃には厳しい父母から、そして一人の女としては夫から、最後に今自分自身の異常性欲から、縛られ雨の中に晒され一夜を明かす——この折檻を受けているのです。寒さが身体中に沁み通って来ます。しかし裕子の中には、むかしの思い出が生き生きとよみがえっているのです。

フードの首をたれ、立木によりかかって顔を見えませんが、びっしりと濡れたフードに手をかけて、裕子を仰うむかせる人が若しあるならば、そこには苦痛の表情はなくて、むかしの幻を追う夢みる女の白い顔を見出すでしょう。異常性欲が良いことか悪いことか、今の私には、そんなことは瑣末な問題です。ゴムの囚衣にくるまった女囚は、恍惚として追想に酔いしれているのです。そこに現れる夫の姿も、人間の姿というより異常な性欲が、かりに人間の姿をとって、このマソヒストの女囚の前に立ち現れているのだといった方が、より真実に近い道徳も詩も、今のこの女には無縁です。被



虐の想いは、熱い胸のうずきの中に燃え立っているのです。読者の皆さんは、マソヒズムの運動会というのを御存じですか。それは多くの種目があり、それぞれ正確な記録がとられ、その最高記録をいち／＼記されているのです。馬鹿々々しい話です。でも今の女は、それをまざまざと思い出しているのです。今日はそれをお話致しましょう。

障碍競技

これは私たちが一番よく行ったものでした。まずは全裸にさせられる。身体中文字通り一糸もまとわぬ姿にさせ

られ、全身の写る姿見の前に立たされ、身体検査を受けます。そして、麻縄で後手に縛られます。この縛りかたにも、いろいろなヴァリエーションがあるわけですが、普通は、高手小手にして首縄を締めあげて括られるのです。この首縄を咽喉に、なるべくかたく締めあげることが、この遊戯の際には、かなりの重要な要素となります。でもこの際、首縄は出来るだけ、首の下の方にかけて、決して「のどぼとけ」より上、又はその附近にかけぬようにしませんが、遊戯中に不慮の事故が起きないとも限りません。

実際首縄を締められてみれば、すぐおわかりのように、前述の位置に致しますと、背中の手首を吊りあげただけで窒息しそうになるものなのです。お話が少し横道にそれました。

こうして鏡の前で嚴重に括りあげられてしまいましたら、次は猿ぐつわです。この競技には猿ぐつわは不要なようにも思われますけど、やはり呼吸の自由も大部分奪われていた方が、ずっと被虐の喜びが倍加致します。この点、加虐の立場になる男のかたにとっても猿ぐつわは必要でございましょう。即ち、男のかたは審判員として競技者の一挙一動を、始めから終りまで、まじろぎもせず見ている役目があるからです。従って猿ぐつわは、なるべく嚴重に嵌められるのです。口の中の布片の量も多く、歯と歯の間には手拭を噛ませられ、更に幅広い布で、口と鼻とをすっぽりと覆うて、うなじで括られます。

第三番目には足首と膝です。足首は両方を重ねられ縛られます。そして膝の上の部分、ものの白いやわらかい肉にも、細引が蛇のように喰い入り、下肢の自由といったら、膝の関節を屈げたり伸したりすることだけが、わずかにゆるさされている状態にさせられるわけ

です。勿論この時は、すでに競技者は立っていません。畳の上にくつぶせにころがされ、審判者の視線に思う存分さらされているわけです。そしてその際には、姿見をかたむけて、そのような自身の姿を競技者にも強く強く意識させることを忘れてはなりません。

これで準備が終了しました。この競技は要するに、このように括りあげられた女が、ゆるされた自由の範囲内で、全身で努力をし、スタートの部屋からもがき出て、廊下をすすみ、襖をあけ、次の部屋に転りこみ、その部屋の定められた決勝点に達するまでの時間をはかるのです。審判者たる男性は（私の場合には亡き夫が）終始競技者のそばに立ち、ストップウォッチを片手に時間を計測する一方原則の有無、競技中の危険などに注意を払うのです。

そして日をおいて何回もくりかえしタイムの向上を強制します。それと同時に、最低時間を定めそれに達しない時には、競技者が最も苦痛とするお仕置が与えられるのです。従って競技者たる女性には、その折檻を受けないばかりに、もがき、ころがり、うめき、這えずり必死に努力して、決勝点までの多くの障碍を最小限度の自由を必死に活用して、何とか時間内に到達するのです。そして審判者はそのもがき廻る括られた全裸の女体の一部始終をこまかく観察するのです。

私の場合をお話致しましょう。私の肌は割合肉付は良い方なので最初の緊縛も、充分に締めあげられますと、細引などの場合は肉に喰い込んで縄が見えなくなる位です。但しこの場合手首を縛り合せするには、夫はいつもやや幅広のしごきを用いてくれました。これは私へのいたわりでもありましようか。でも麻縄は、括られた手首を思い切り背中に締めあげられ、ももと足首も嚴重に括られて、スタ

トの線に仰向けにねかされます。お仕置には馴れているとは云え、敏感な心には、何一つおとうものもない全裸の身体を、あかるい電



燈のもとにさらして、仰う向けに転がされるのは、云いようのない恥しいことです。いつも一番奥の三畳がスタートで、まずその部屋の閉め切った襖までが第一のコースです。

私の身体を充分に検べた夫は、片手のストップウォッチを押しながら、出発の合図を致します。同時に私はもがき始めます。まず仰向けにされた身体を、横にころがして、コースの方をむいて横むきにならなければなりません。これからして、かなりの努力なのです。一本に括り合わされた下肢と、うしろに廻され高手小手に縛られた上半身とを、のびちぢみさせ、弓のようにそって、横むきになろうとすれば、夫の目が、またたきもせず見つめています。苦しい猿ぐつわの下の呼吸はあえぎ、音をたてて転がると、今度は後手を見せて、うつ伏せになってしまふ。二十分の制限時間が気にかかります。やっと横むきになると、身体をくねらせ、のびちぢみし畳の上をすこしづつすこしづつ重い身体を移動させる。漸く襖までゆきつけば、もはや額には汗のたまが浮び呼吸は荒くなり、乳房は激して上下して無惨に喰いこんだ縄目が、その中に見えかくれするのです。襖をあけるにはうしろむきに身体を襖にもたせかけ、何とかして立ちあがり、背中で括られた手の指をかけてすこしでも開かなくてはなりません。だから次の仕事は丸太のように縛られた身体を壁にずらせ括り合された足に力を入れて上半身を無理矢理に、じりじりあげてゆくことです。夫は襖を背にした私の前に廻っ

て殊更に正面から私をみつめています。

「八分！」夫の聲がひびきます。私は身をふるわせて立ち上ろうとしますが、何度か横ざまに倒れてしまう。また立ちあがろうとする。今度が足がすべって尻もちをついてしまう。猿ぐつわが苦しく、肩が痛む。大きく息をついて休んで力を貯えようとする。

「十分！、もうあと十分だよ」

私はあわてて再び苦しい努力を開始する。時間はすでに半分すぎたのに、コースはまだ三分の一も来ていない。今度は襖の方に足をむけて転がり、一本に縛り合せられた足先を、わずかにひらいている襖の間にかけて、とうとう十糎ほど襖をあけることに成功した。

そのまゝ下半身から、少しづつ少しづつ身体をずらして、もがきもがき廊下に出る。冷たい板の間の感覚が身体中に走り、下になった手首が痛む。身体の方角を逆転し、頭を進行方向にむけ、あうむけに寝て、肩と足首とを伸縮して、逆にした尺取虫の方法で前進する。

夫は、その私の苦悶を冷たい目で、しかし満足そうにみつめているのです。廊下は約十米、そして直角にめられた襖につきあたり、これをあけてその部屋に転りこめば、決勝点なのです。しかし廊下の途中には、低いけれども、ゴム裏を上にしたレインコートをかけた机があって、私の行手をふさいでいます。机の高さは約三十糎。襖によりかかって要領で上半身を机にもたせかけ、思い切って下肢に力を入れると、うまい具合に肩が机の上ののって、反動で向う側に頭の方から転りおちる。レインコートのゴムが、一瞬うつぶせになった私のももに、腹に、乳房になやましくあたる。猿ぐつわが頬にくいこんで頭が痛み、机からおちる拍子に、口の中の布片が、咽喉の方に押しこまれ、窒息しそうになる。もう前進どころで

はない。あわててもがき廻ってやっと、わずかに舌で布片を押し出し、大きく息をつく。乳房がせわしく上下し、肩があえぐ。涙が出て来て猿ぐつわに吸われる。

「十五分！」

廊下はあと五米。そしてあの襖をあけて、部屋に転りこめば、私の一番辛いあの折檻——排泄物を飲ませられなくてもすむのだ。あと五分！頭ががんがする。殆ど思考がなくなって、たゞもがき、ただあえいで前進。

「十八分！ あと二分」

やって最後のフスマに達した。前の要領でフスマを開けようとするが、そうは間屋がおろさない。今度は足の指をかけるすきまさえないのだ。やっぱり後むきになって、後手の指で少しづつ開かなくては。気があせる。廻りの壁に足をかけて身体を廻転さす。しかし仲々後手の手首が、フスマのところにはゆかない。あせってくる。

「十九分！ あと一分！」

夫の聲は容赦なくひびく。私はすっかり慌ててしまう。がむしやらにもがいてわずかに指がかかる。三糎ほど開いた！ すぐに再び身体を廻して足の指でこれをあげようとする。仲々思うようにゆかない。身体を廻すと首繩が締まって息がくるしい。猿ぐつわの下から思わず呻き声が洩れる。

「あと三十秒！」

足指がフスマにかかった。下半身を振ってフスマをあける。十糎ほど！ まだ身体が入らない！ もう一度。目がくらむ。全身油汗にまみれて、うめき声が絶え間ない。

フスマが開いた！ 下半身をにじり入れる！

「二十分！　とうとう入れなかったね。さあ、僕の折檻を受けなければならなかった」

夫はむしろ満足そうに、わらいながら、そういう。

「いや、いや、いや、いや……」

猿ぐつわの下で激しくうめいて、私は首をふる、半身は決勝点に入っているではないか。あの刑を——あの辛い刑を受けるのはいや、

「ゆるして。何でもするから。お願い、御慈悲だからゆるして！」

眼にせい一杯の哀願をこめて、私は、夫に向かってさけぶ。猿ぐつわは、いたずらに、その声を、わけのわからぬ、うめきにしてしまふ。

「さあ、約束だからこれから折檻を執行する。まず命令を果せなかったお詫びをするのだよ」

夫は私のすそに廻って足首と膝の縄を解く。

「刑執行前のひき廻しだ」

縄尻をとって家中をひき廻し、出発点の姿見の前まで来て、正座さす。ゆっくりと猿ぐつわをとる。もはや猿ぐつわをとられても歯と歯の間に喰わせられて、硬く頬に喰い入っていた手拭をとられても、口の中につめられた布片を自分で吐き出す力もない。ぼんやりと夫が掴み出してくれるのをまっている。

のども、舌も、唇も、カラカラに乾き、今まで感じなかった寒さを全身に感じ出す。

「さあ云え、私は御命令のように二十分以内に決勝点までゆけませんでした。だからお約束通り、どんな折檻でもお受けします。さあこう云うんだ。」

私は正座の頭を、えびのように畳につけて、

「……どんな折檻でも、どんな折檻でも、……お受けいたします」

やっとの思いで幸い復讐を終える。そして観念の目をとじる。やがて、私の口には、あたたかい液が流しこまれる。私は必死の思いで、ゴクゴクとそれをのみ下す、そしてのみ終れば、

「ゆるして。もうこれでゆるして。あなた、後生だからゆるして。何でも——何でも云うことをききます。お願い。ゆるして。ねえ、ゆるして。」私は泣き出してしまふ。

これがこの競技の最初の模様でした。その後私は何回もこれをやらされました。そして三度に一度は折檻を受けなければならなかった。しかし時には十八分でこのコースをゆきつき得たこともあった。こんなことも、もう昔の夢。私は泣きながら思う存分被虐の喜びにひたっていたのだ。こんなことが何で面白いのであろう。何で「遊び」になるのであろう。それが私の運命なのではないか。

このほかに、私たちは無数の競技を考え出し、実行した。ことのついでに、もう一つ二つお話をしておきましょう。読者の皆様の何かのお慰さみになるかも知れないから。

耐久競技

これは簡単です。後手に縛られ、足首と背中の手首とを、出来るだけ近づけて括られます。勿論首縄がしまっていますから、首を楽にしようと思えば、おりまげられた膝が痛み、足を楽にしようと思えば首がしまる。そしてそのどちらを動かしても手首が痛むという具合です。私はいつか中本たか子さんの獄中の生活を書いた小説を読んだことがあります。その中に、同囚の人たちと、ちり紙にかいて通信したことを発見され、重謹慎を受け、後革手錠の刑に処せられたことが記してあったのでした。それは私に強い刺激を与えまし

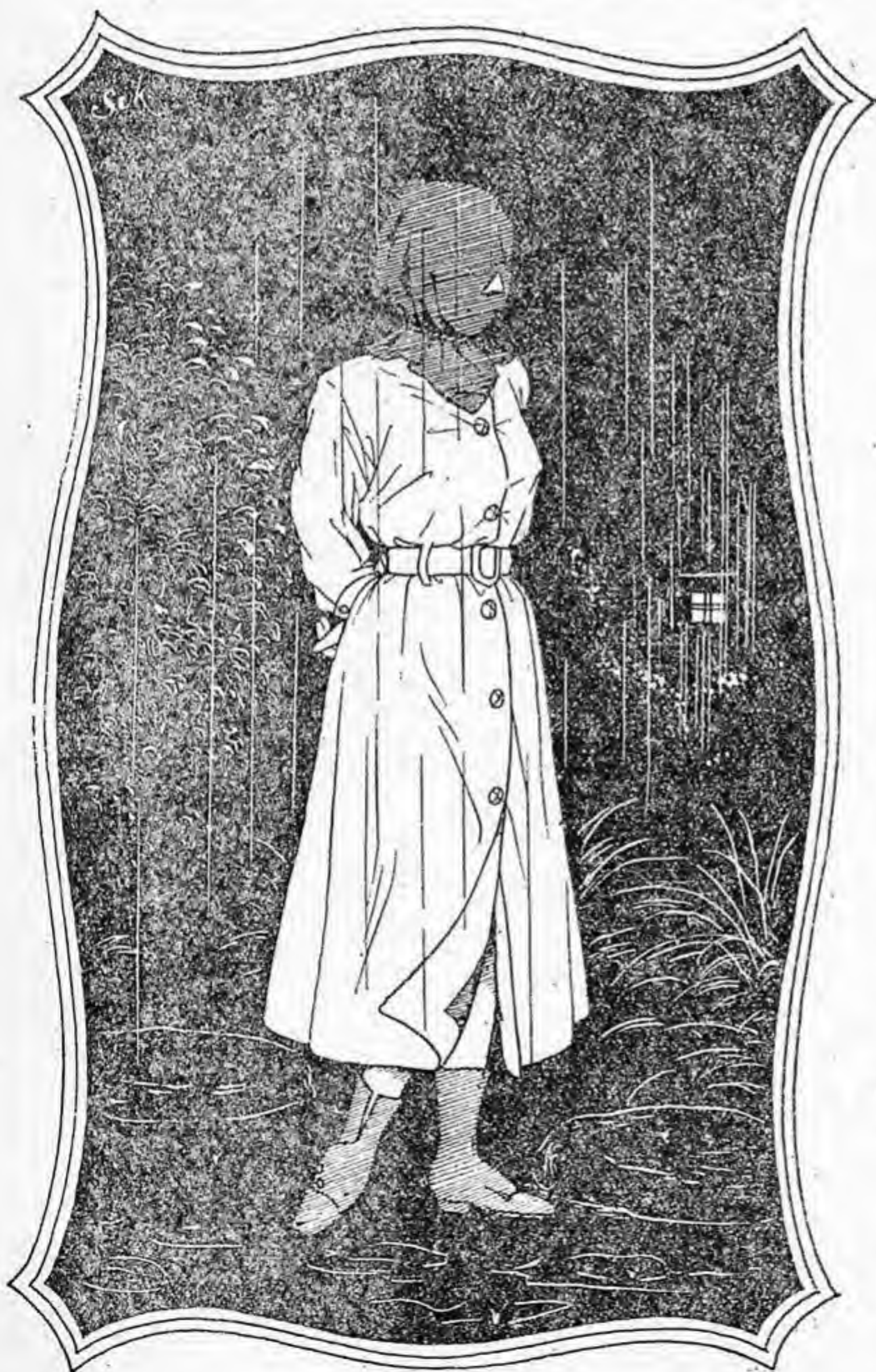
た。小説の題名も、筋も忘れてしまったのですけれど、この場面だけは不思議にあざやかに記憶しています。おそらく中本さんは苦笑し、又迷惑がられることでしょう。「自分の芸術を、そんな風にうけとられては困る」と。御免なさい。しかしこれも私の哀れな性質なのです。この小説を御存知ないかたのために、この部分の情景だけを簡単に記しております。中本さんは、男の看守に始めて後革手錠をはめられます。それは幅三厘ほどの革製であって、それをもった男の看守の舌なめずりをせんばかりの卑しい顔を私は一生忘れないと彼女は怒りをこめて書いています。彼女は勿論、それまで刑務所に後革手錠の刑があることを御存じなかったのです。だから革手錠の実物などは見たこともなかったのは当然です。しかも中本さんは、入獄される動機となった高井戸の家で、病気で臥床されてるところを警官隊に踏みこまれて、捕縄で後手に括られて曳かれてゆくまで、人から縛られた御経験などはなかったのです。従って後革手錠を締めあげられる際も、ひじを張ったり、手首に力を入れて加減したりする智慧は全くお持ち合せにはありませんでした。看守は、それこそ我が生涯の最良の日とばかり、遠慮会釈もなく、この共産党の女——當時はそれが「国賊」であったのです——を縛りあげました。中本さんは始めはそれ程でもなかったのですが、時がたつにつれて、胸をしめつける革のため呼吸は苦しくなり、額に油汗が浮び、あさましく髪は乱れ、もがくまいとしても手首の痛さ、肩の苦しさに、思わず知らず獄の床の上を悶え廻り転はひろがり遂にこの刑に屈伏してしまわれたのです。何しろ小説の題も筋も忘れてしまっているのですから、こゝに記しましたことも、いくらか違っているかも知れませんが。又作中の一人称で書いてある人物が、その

まゝ著者としてしまうのは非礼でもあると存じます。でも、おゝむね間違いない、これは中本さん自身の自伝的な小説のようでした。もしこの中に著者のお気にさわるものがありませんたら、私は卒直にお詫び致します。しかし私と夫とが、この競技を思いついたのは、中本さんのこの小説のこの場面からだったことは間違いありません。これは耐久競技です。一分でも一秒でも長く、この責苦に耐えることが必要だったのです。競技の終了は、縛られた女——私の眼から涙がこぼれて頬に流れるまでとなっていました。苦しさに両眼に涙を一杯ためても、それが一粒でも頬に流れ出さない限りは、競技は終わらないのです。即ちタイムをとられ、縄を解いてはもらえないのです。これは苦しい競技です。こうやって括られる辛さは、あえて中本さんの麗筆にまつまでもなく想像以上くるしいことなのです。これは殆ど身動きも出来ません。足でも、首でも、とにかく身体中のどこかの苦痛となるのです。最初に括られたまゝの格好で三十分と我慢出来るようになったのは、縛られるのになれた裕子でさえも、長い長い訓練が必要でした。この際にも勿論猿ぐつわなしではありません。額にうかぶ油汗が目に見えるようでした。最後には、わめき、猿ぐつわの下から夫に懇願し、涙をながしてやと競技をやめさせてもらうのでした。そのもがき廻る姿は、夫とのあの悦唐のアルバムに幾枚もの写真となって、鮮かに、今でも残っています。これを書いてある眼の前にひろげられたそのアルバムに浅ましい写真をみていると、すぎさっていった昔の、夫との生活の全貌が生き生きとよみがえってきます。「どんな浅ましい姿を御想像になってもかまいません」と私はかつて、自らの亡夫との生活の告白に、こう書きました。狡猾な私は、この言葉の後にかくれ

て、余りに恥しい動物的な遊戯の実態をおし隠したのでした。しかしこの頃は露わに何でも話してしまふ。年をとって図々しくなったのでしようが、又は読者の皆様に甘え始めたのでしようか。

盲目競技

これも別に珍らしいものではありません。ゴムレインコートの上から、例によって後手にしばられて、鼻だけが出るゴム布製の袋をすっぽりと頭から被せられ、首でしっかり括られます。鼻を出す穴はかなり小さいので、鼻のつけ根、二つの鼻腔を出すのがやっとなのです。このゴム袋は真紅なのです。競技は主に夜間に行なわれました。それも好んで雨の深夜を選んで行なわれたのでした。夫にとつては本来は白昼の方が面白いのでしようけれど、多く庭の物置小屋までそのまゝの姿でゆかせられ、往復させられるので、茂みの多かった私たちの家とは云え、流石に人目をはばかったものでした。昼に行う時は、同じことを屋内でやりました。私にとっては全く目が見えませんが、夜でも昼でも同じことでした。最も多く



は激しい雨の夜、レインコート、ゴム袋、そして手首のゴム手袋、それに大きなゴム長靴という全くのゴムづくめで、本当に怪奇な姿にさせられました。うそとお思になるなら、皆様のお知り合いの女のかたを、こういう姿にしてごらん下さい。その上、後手に括られているのです。このような姿の女が、どしやぶりの雨の中を、首を振り振り、足もともあやうげに暗い庭を歩いているのは、想像す

るだけでもこの世のものとは思えない不思議な情景です。家の周囲を一周させられたり、指定の場所を往復させられたりしてタイムをとりましたが、よく知っている筈のところも、眼がみえない上に、高手小手に縛られ、しかも雨の中だと、とんでもない方向に行ってしまうたりします。そばに夫がついていて、余りにひどいときは方向を規正してくれます。

でもこれは面白い遊びで、私は好きでした。これにいろいろなヴァリエーションが加わって、複雑になるのですが、この奇怪な姿こそ、マソヒスト古川裕子の象徴なのです。

そのほかにも私たちはいろいろな競技を発案しました。しかしさまではと、これは省略致しましょう。今私の目の前のアルバムに、中判の大ききで、ゴム布袋をかぶせられゴムレインコート後手、ゴム長靴という私の写真が貼ってあります。袋の真中の白い鼻は、何とも形容のようもない奇怪さで、きわだっています。この後姿の写真には、背中に縦横に縄がかかって、手首が痛々しく吊られています。

マソヒスト古川裕子よ。お前はこの姿で、かつて暗い夜の中を、はげしい雨の中を、危うげな足どりで、トボトボとうなだれて歩いたように、これから生涯、暗い暗い一筋の道を、たった一人で歩いてゆくのだ。それがお前の宿命なのだ。お前はいくたびかこの荒野から逃れ出ようとしたが、強い宿命の力は結局、地平へつづくこのさむさむとした道に、お前をひきもどした。さびしい。本当にさびしい。誰もいない、孤独に耐えかねて、お前は幾度か友を呼んだ。しかし友だと信じたのはお前の愚かさだった。異常性欲者の道は一人一人異っている。誰もたゞ一人でわが道を往くのだ。道ずれなど

はありはしない。全く同じ道をゆくものなどありはしないのだ。古川裕子よ。孤独はお前の運命だ。骨の髄まで沁みいる寂しさを感じずるとは云え、お前は再び友を呼ぶな。それは無駄なことだ。亡夫との生活も、結局はお前の思い出の美しさにすぎない。あの生活の実態はいよいよ薄れ、それとはうらはらに美化されたお前の思い出のみが残る。お前は夫でさえも、自分とはちがった道をゆく人であったことを、此頃漸く覚り始めたではないか。それはお前の智恵だ。かなしい智恵！ そうさ智恵とは、いつも寂しいものだ。間もなく夜明けがくる。夜をこめて書き始めたこの「我が慰さめの書」も、ようやく終ろうとしている。孤独がお前をさいなむ時は、ゴムレインコート、フード姿のお前を思い出せ。異常な性欲がお前を狂おしくも駆りたてる時は、唇をゆがめて、他の人には何の価値もない所謂お前の「告白」を書きしるせ。告白はつもって巻をなすであらう。そうしてお前の生涯の最後の日に――お前が死の迎えをうける前日に、ふらふらと立ちあがって、この告白とアルバムとを火にくべてしまうのだ。ホトホトと、ホトホトとそれは夜をこめてもえるだろう。人には笑えと口ぐせにいつているけれど、裕子よお前は青い焰に顔ををらしつつ笑うだろうか。異常性欲者は危険な動物だそうだ。自分たちの仲間ではない「狂人」だそうだ。人間性の高貴さを、どぶどろに投げすて踏みしめる罪人だそうだ。健全な人々は裕子のような女に対して、こういう言葉を口汚く投げつける。そこには一片の同情も、一片の思いやりもありはしない。一度異常性欲者の名を冠せられたら、一度胸にマソヒストの緋文字をあざやかに縫いつけられたら、正常の社会生活も、職業も、名誉も、喜びも何もかも容赦なく奪いとられ、むかし部落民と云われた人々が非人と称

され不当にも人間扱いを受けなかったように、現代の「非人」におとされてしまふ、癪にかかった人は、自らの何の罪もなく「かったい」(片居)として健康な人間とは別な世界に追いやられるように、異常性欲者も、一度それが暴露すれば「片居」となってしまうのだ。でも裕子はそれに抗議しようとは思わない。その元氣と勇氣とを持ち合わない。それが故に、そしらぬ顔をして口をぬぐい、高貴な精神と、幸福な微笑と健全な知性をよそほって職場に居る。狂いまわるような、異常性欲の「告白」などは、どこの誰が書くのか。職場にいる裕子に、もしそうきく人があったら、彼女は「そんなことは知りませんわ」と怒ったような顔つきで答えるだろう。それで宜しい。お前がこの世で無事に生きてゆくには、それが必要なのだ。健全な人々の世界では、変態性欲者は害悪なのだ。彼らが如何に異常性欲は悖徳ではないと云い張っても、お前たちを視る、あの「健全な」人々の眼をみるがいい。

あの眼に君たちは抵抗出来るのか。すくなくとも裕子は心の底まで凍るような思いを感じないではあの眼を見返すことが出来ない。変態性欲者はこの社会の孤児だ。そして異常性欲者の一人一人は、みなひとりづつ孤独なのだ。さびしい。実にさびしい、孤独が裕子の胸をむしばんでいる。

もう夜明けが近い。でも、暗い窓からみれば冬の空には燦爛たる星々が輝いている。銀河がゆったりと中空を横ぎっている。地球はあの銀河宇宙の一つの星なのだそうだ。同じ銀河宇宙の一つの星はこの地球から何万光年というトテツもない距離にあるという。

しかも銀河宇宙のほかにも、いくつもの別の宇宙があるという。あゝ何と気が遠くなる程遠大な事実! その中で、はかないマソヒ

ストの女の嘆きが一体何であろう。異常性欲の宿命の悲しみが、いったい何であろう。間もなく夜があける。そしてこの星空では、今日も冬晴れのよい朝となるであろう。私は立ちあがってターンテーブルにLPレコードをのせる。音をひそめて夜明けの冷たい空気の中でそれを聴く。アルトの歌声が寂寞の中に、ひそやかにひびいてくる。

日はまた晴れやかに昇ろうとしている
夜中に何の不幸も起きなかったように

悲しみは私だけに起ったのだ
日はなべての上に遍く輝やいている
暗い夜、心を悲しみにゆだねてはならぬ

永遠の光の中に、夜の悲しさを沈めねばならぬ
小さなランプが私の心で消えた。

幸あれ、世の喜びの光に、世の喜びの光に

(終)

お断り

本誌三月号の口絵、伊藤晴雨画「血染の毛綱」は、氏の御病

お知らせしておきます。本月号掲載予定の笠置俊郎作「倒錯の英雄、織田信長」は原稿の到着が遅れましたため、休載となりました。

——私の少年時代の告白——

昆布と少年

森

太一

太一は時計が一時を打つのを寢床の中で辛抱強く待った。ともすれば昼の疲れでウトウトしそうなものを、股間の感触で睡気を取り戻した。その時太一は奇妙な禪をしていた。

あの丁稚小僧がする白い文字が染め抜いてある紺の前垂である。太一は昼間、父の新しい前垂を盗み出すと素肌の上から前に当て、紐をぐるぐると腰に巻きつけ、垂れ下った部分を股をくぐらせて後にさし挟んで禪にした。その上から寝巻を着けて眠っていたのだ。木綿のゴツゴツした感触が太一にとって、はたまらない魅力で、表は赤褐色と黒、裏は白と黒の縞の紐で締めつけられた下腹に力が満ち満ちるような気持であつたし、白い文字

が下腹から臀部へとまたがる様子も又強く太一に喜びを味わせた。その前垂の上から手で撫でては独りその恍惚感にひたっていた。

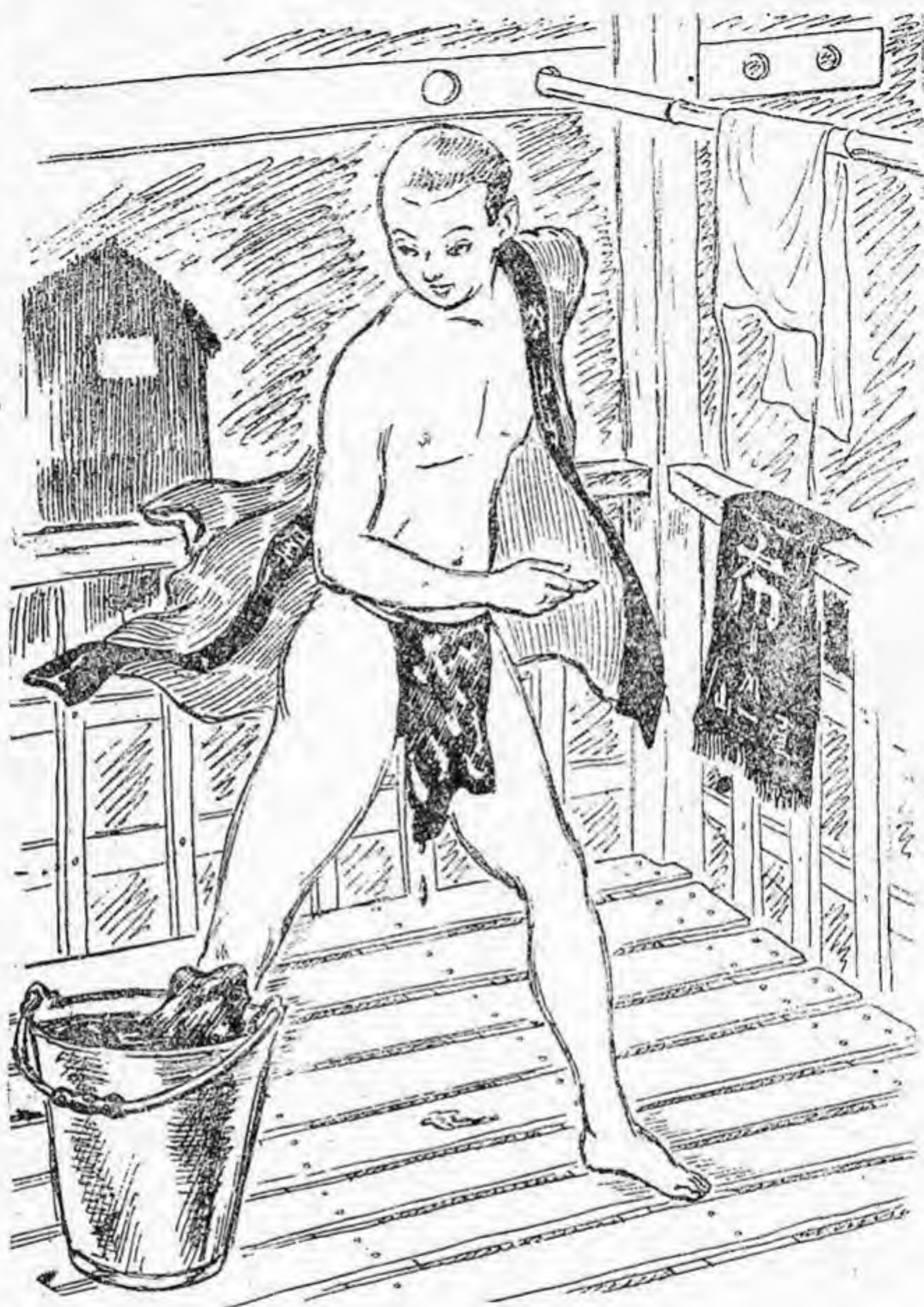
太一はそれ迄二三度、この前垂を手に入れ締めた事があつたが、その日程、スリルを覚えて、強く前垂に心が惹きつけられている自分の姿をはっきりと知った事はなかつた。何気なく、物置の戸を開けた時、パツと太一の目に飛び込んだのは、真新しい紺の前垂であつた。二枚が折り畳んできちんと棚の上に乗せてあつた。その時、太一は自分の体の中にゴクツとするものを感じワナワナとその場にへたり込みそうになつた。若し辺りに誰もいなかったら、きつとその前垂を手にしたであ

ろう。

太一は夜、勉強中何回となし、物置をうかがい、それを盗み出すチャンスを重ねた。机の下で絶えず、前垂の白い文字が目につく。チラチラとして心が落着かず、やっと目的を果たすと、ズボン脱いで肌にあてて見た。始めて経験したゴツゴツした厚地の木綿の感触にどれ程心をワクワクさせた事であらう。ぐつと締めつける圧迫感、太一はもう勉強どころではなかつた。やがて寝る時間となり、禪のまま寢床にもぐり込んでいたのだ。太一はその日の興奮を一層効果的にしようと、昆布の実演を計画した。太一は、頭の中で計画の順序を組み立てた。そして寢床で実行に移すべ

き時の来るのを待って居たのであった。
 やっと一時になって、太一が倉庫の入口の
 前まで来る間は無我夢中であつた。しかし前
 垂の禪が太一をして大胆にさした。しんしん
 と静まりかえった真夜中の事なので少しの物

音にも気を配りながら体をどうやら入り込ま
 せる位、戸を開けた。太一は、心の中で無事
 を念じつゝ、真暗い倉庫の中に身体をすべり
 込ませた。パツと照し出す懐中電灯の光に出
 し昆布の山が浮き上って見えた。ブーンと昆



布特有の酸っぱい臭気が鼻をついた。
 太一は、抜き取れそうな出し昆布をあ
 れやこれやと物色した。丁度恰好なも
 のがあると、あいにく頑丈に結えられ
 た縄で容易に抜き取れそうにもなかつ
 た。やっとのことで後でその痕跡を残
 さぬように、二三枚下の昆布、それも
 なるべく厚くて、巾の広いものを選ん
 だ。カサカサと音がした。

太一がそうして手に入れたのは、艶
 のある上質の長昆布であつた。それを
 くるくると巻くと、ホクホクした氣持
 で何食わぬ顔をして二階の自分の部屋
 に戻った。予め用意をして置いた満水
 した手提バケツの中に昆布をつけた。

太一は禪一丁になって鏡台の前に立っ
 た。そして自分の姿を鑑賞した。素肌
 をとおして前垂から或る特有の力がし
 み込むような氣がした。太一は、同じ
 禪の仕方ではつまらなくなり、越中禪

のようにして見た。白い文字が今度は逆で
 はなく嬉しかった。電灯を消して、物干台に
 上った。そして、上半身を動かす徒手体操を
 した。そうしている自分が、とても雄々しい
 ものに思え、形容出来ない喜びがこみ上げて

来た。幸いにも月のない晩で、深く戸を閉ざして睡っている家々の誰からも気付かれそうではなく、物干台の板にベッタリと仰向いて空を見上げた。

いよいよ太一が待望の実演に取り掛った。

手さげバケツの中の出し昆布は、水を吸い込んでヌラヌラした茶褐色の体をのたうち廻わして大きくなっていった。引き上げて見ると、以外にも早く、柔らかくなっていて、ズルズルした雫が垂れ下がって太一を喜ばせた。前垂の褌をとると、一旦、下腹に当てがい、他の一端を股をくぐらせて六尺褌のように廻した。余り柔らか過ぎたのか、いくら締めても直ぐ緩んでしまい不恰好な褌となった。それに六月の半ばとは言え、肌冷たく少し気味が悪かったが、股間にまつわる昆布の感触は絶妙と云うべく、素晴らしさにどんなに胸を躍らせた事であろう。

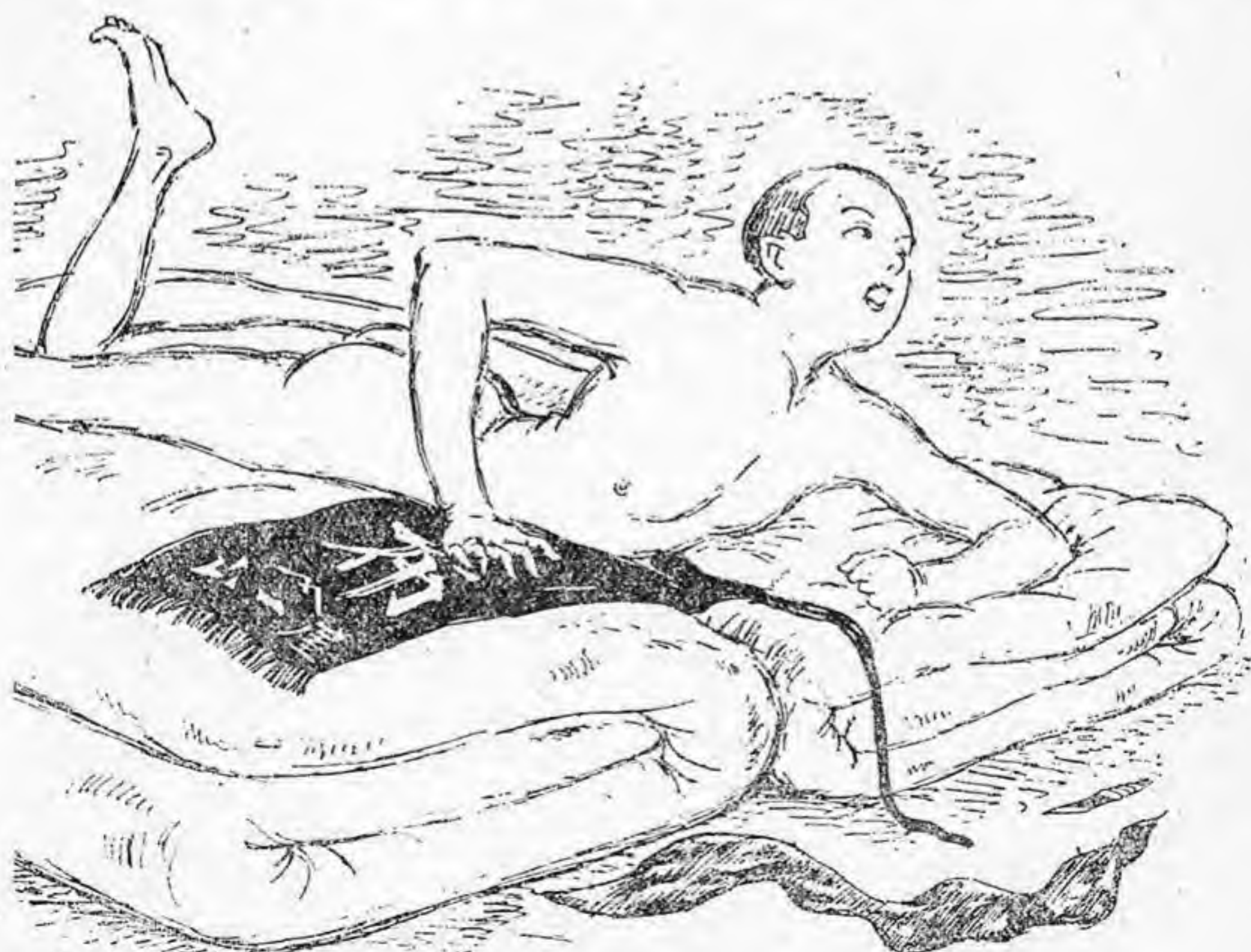
鏡に映じた世にも奇怪な褌姿。太一は、今までより一層、昆布の持つ不思議な力に蕩然となってしまった。

——どうだ。世の中で昆布の褌をするなんて僕一人だろう——

心の中で得意になりながら、太一は再び、体操をした。その裡にこんな狭い場所ではな

く、何処か広い野原でも思いきり駆け廻わり度くなって来た。せめてもの慰みとして、物干台に上ってみた。しばらく体操を続けた上で、仰向いてねた。前に垂れ下がった昆布でベタベタと腹を打った。その度毎に肌がヒヤリとした。やがて少し乾いてきた昆布は皮膚にへばり付いたように感じたので、一旦はずと、きちんと六尺褌に締め直した。そして前よりも劇しく手を振り足を折げ上体を前後左右にと、褌体操を満喫した。

こうしているうちが無上の楽しみだった。太一はその夜、



昆布褌の上から、前垂の褌を二重にして眠った。翌朝、昆布を取って見るとほのかに湯気が立ち上っていた。

太一は、更に秘密を続けようと思い、昆布の褌を締め上げるとそのまま学校に行った。その日は、体操のない日でズボン脱ぐような事はなかったので、誰にも発見されないと思った。所が困ったのは、小便をする時だった。それで始めて大便所の中に入って用を足した。二回目の時、こんな素晴らしい褌を自分一人で独占するのは勿体ないような気がして、同志を募る気持になり、鉛筆と紙を持って入った。

……誰も知らないよいことを教えてやろう。それは昆布で褌をすることだ。僕は自分で発明した昆布の褌を愛用している。ここに僕のして来た褌をおいておくから、君もし給え、素晴らしいぞ……

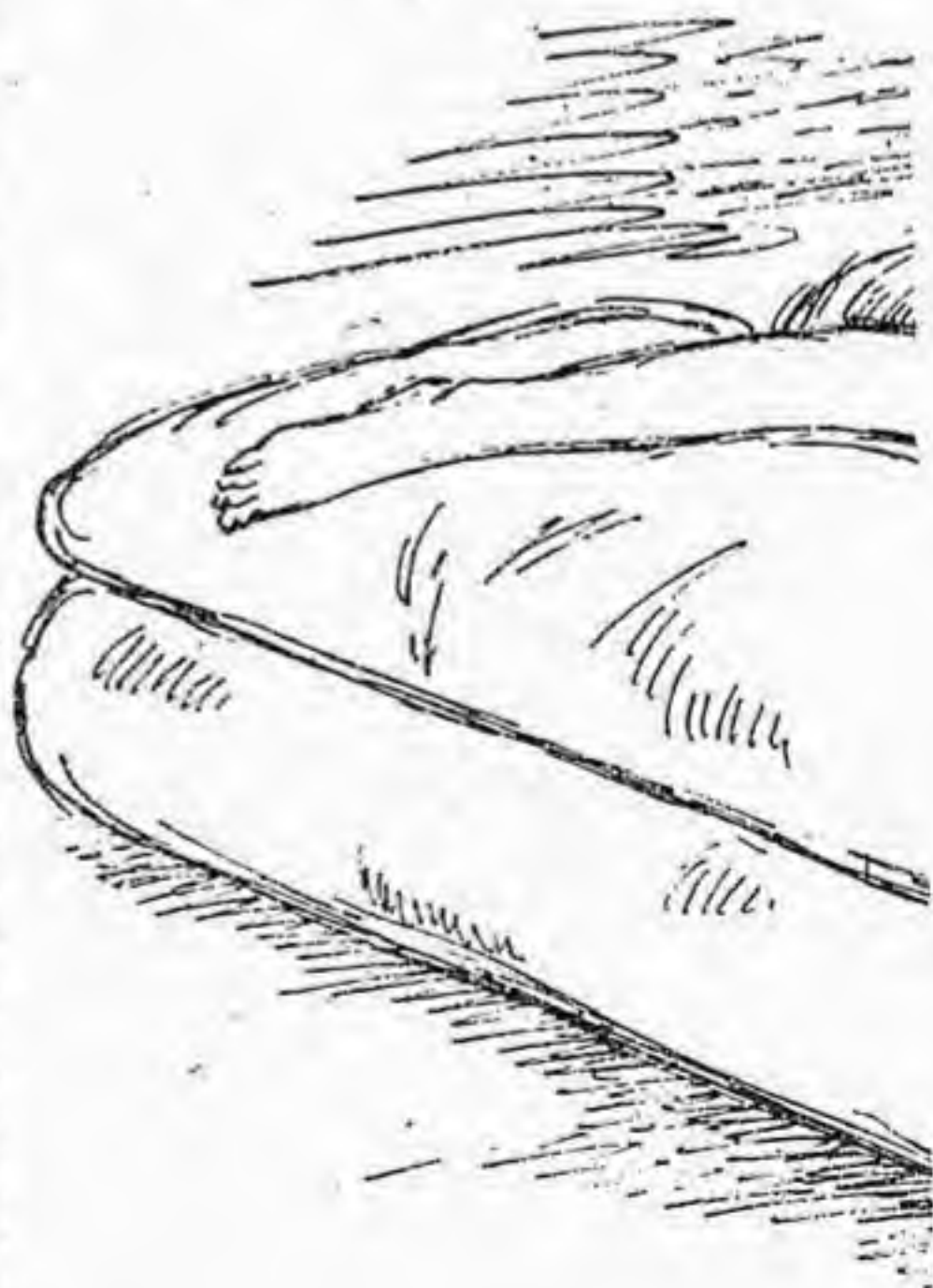
太一は、前垂だけは其の儘にして置いた。出てから、果して誰がその中に入るかが、関心を持った。いつも便所を監視しているわけにはゆかず、つい忘れてしまつて授業を続けたが、勿論授業中、そこに入つてあの手紙と昆布を見ている生徒を想像していた。若し下級生であればよいと思つた。

その時は既に午後二時間の前の事とて、誰も入らなかつたのかも知れない。発見した者もなく、話題にも上らなかつた。太一はなんだか惜しかつた。翌日、同じ便所に入つて見るともう昆布はなかつた。小使が掃除で捨てたかも知れなかつた。

太一がこうして昆布を弄

ぶようになつたのは誠に皮肉な運命であつた。生れつきどうした事か家の商売の昆布が大嫌いだつた。それがどうしたはずみか、或る日、物干台に落ちてあつた一片の水ぶくれになつた出し昆布を見て、ふと休の一部に當て、ひどく欲情した事があつた。それが病みつきなり、度々昆布を手に入れては水につけヌラヌラした感触を味わひ続けた。それ迄の手ずさびが、昆布によつて代用されると、昆布なしには、物足りなくなり、中学三年時分には絶対に必要な道具となつていた。

如何に太一が昆布屋の件とは言え、昆布嫌いの彼が昆布を持つとは家族の者には考えられない事で、若し現場を発見されてもしたら



それこそ太一は死んでしまひ度位だつた。そんな太一であるのに、このように昆布に取りつかれたのは、自分でも全然わけのわからぬことだつた。

太一がこの昆布を弄ぶのは、多くは昆布巻にすることだ。昆布は水に浸けると柔くなり表面がヌラヌラしてくる。それをもつて昆布巻にする。昆布から一種の精力剤が肌をとおして体内に浸み込むようで、体にいやが上にも力が充満するように思えた。

太一が、このように使用した昆布の数はおびただしいものになつたのであろう。幸い商売物で、毎日、一本二本と抜き取るので、父にも気が付かれなかつた。

太一は、昆布の粘液性の研究には、いろいろ考えた。最初、昆布を水に浸ける時、昆布の周囲を少し切って置くか、ナイフで昆布の各所に割れ目を入れると、その切口から、粘液が出ることを知った。この粘液性如何が重要な要素で凡べての動作に影響するのであった又、湯を使用するのも格別であった。

太一はこのようにして昆布にぐんぐんとりつかれて日夜倦むところがなかった。

後 書

私は自分が生れつき、異常な早熟に育った

私をおしめへの執着を抱かせ、結ばせたのは、病院生活をした時に同室の女性がおしめをさせられて居た事が、最大の原因とも云えるのです。おしめは赤ちやんばかりと思って居たのが、大人でも用いる事があるのだと始めて意識させられたのです。それ以来、女性とおしめの結び付きが私の心を奪う様になったのです。看護の本にも往々眼にする活字でもあるのです。綺麗な美しい女性におしめを当ててやったら、豊満な女性の臀部にあの恥しいおしめで覆ってやったら、美しい女性はどうな表情をするだろう。何と云うだろう。

人間であることを不幸とも幸福とも思っていない。唯、世の中には想像もつかない経験を持つ数多くの人々の中の唯一人として自分を告白した迄の事だ。「美少年の秘密」が、私をして異常にまで興奮させたように、私の少年記が若し或る者に関心を持って頂ければとほのかに期待を抱いている。経験はあくまで真実であるべきだ。今まで幾つもの少年時代の告白を見たが、私にはどうも誇大誇張しているように読まれた。しかし、自分が告白して見て、他人も又、私の告白を誇張したと思うであろうと考え、同様だと氣附いた。「真実は小説よりも奇なり」と云う如く、始めて今

消え入らんばかりに、否、死ぬ程恥しがることだろう、私にはこんな幻想が今日も今夜も又、明日も明後日も、限りなく続いて行くのです。

近所に小学校四年生になる絢子ちゃんと云う可愛い子が「おねしよ」すると云う事は衆知の事ですが、先日、絢子ちゃんの末の妹で待子ちゃん(六才)が遊びに来たので、

「待ちやん、おねしよするの」と聞くと、「毎日しないの、お姉ちゃんね毎日するの、お母さんにオムツしてもらうの、待子はオムツしないの」と無邪気に話してくれました。

までの人々の告白を真実なものとして受け取れるようになった。私は以上の第六篇にわたる告白では言い尽くせない更に多くの経験をした。しかしそれは、今まで多くの人々によって告白された事であるし、重複するのを避けた。若し望まれれば、いくらでも書き度い。小学生時代の高学年は勿論の事、幼年時代にさかのぼっても見たい。私は、恐らく如何なる本にでも発表されざることだけを選んだつもりである。しかし中には、私の運命を知って貰う為に又、少年時代の全貌を認めて頂く為に、同じ経験を書いた所もあらうと思う。(おわり)

私は、あの可愛い絢子ちゃんがオムツをされる、どんな表情でオムツをされるだろうか今頃は赤ちやんの様にオムツに包まれて居るのだろうかと想像すると、ムクムクと五体に湧き起って来る興奮を押える事が出来なくなってきたのです。朝にはズクズクに漏れたオムツを美しい絢子ちゃんのお母様に、「大きな赤ちやんには困るワ、ズクズクじゃないの」とか云われて、赤ちやんの様に両足を持ち上げられて処置されるのだろうかと思いは次から次と浮び上って来るのです。先日、一番上の姉に可愛い赤ん坊が生まれたの

で、お祝にと思ってデパートでおしめカバーを買ったのです。若い綺麗な女店員の応待で、恥しい様なくすぐったい思いでしたが、意を決して、

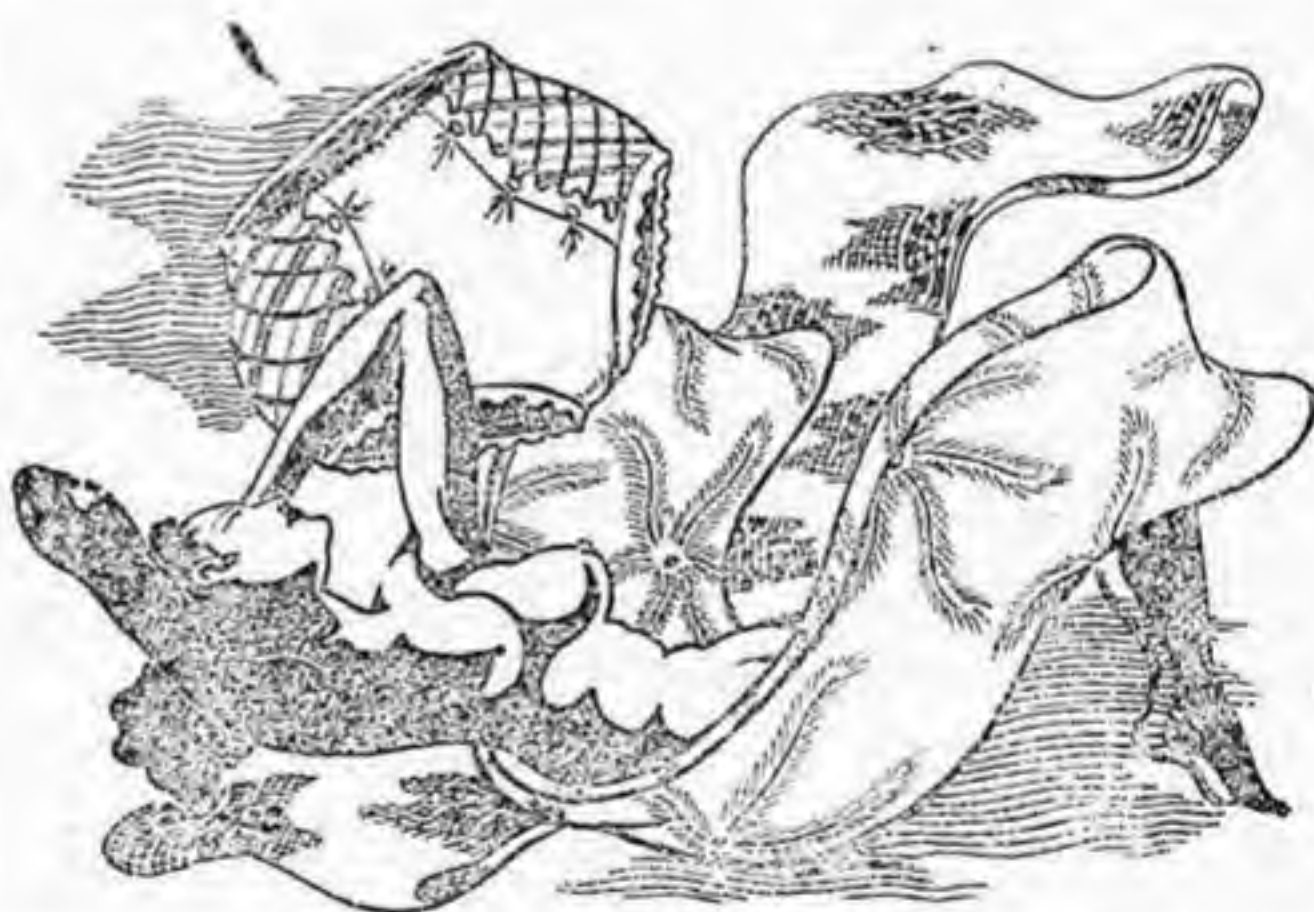
「おしめカバーを見せて下さい」と口を切りました。

「あの、おしめカバーで御座居ますか、どんなのがよろしいでしょうか」と。色取り取りのを三、四枚持ってきて来て、

「これが今よく売れる物ですが、スナップが上等品ですから脱れる事は絶対になく、お尻からズレる事もありませんし、肌ざわりが良く」少々顔を赤らめて「汚れましても絶対に安心ですし、ゴムも上質品ですから」と、スナップを脱して開き、ゴムを引張って見せてくれました。その中の二枚を買ってデパートを出たのですが、あの時の店員の表情、説明振りと言、美しい店員ただけに少なからず興奮に浸るのでした。彼女も又、幼き頃あの様なおしめカバーを臂にまもって育てて来たのだと想像すると、楽しい様な面白い気持になるのでした。街で行き交う女性にも、スクリーンに現れる若い女優にも、こんな空想が走り、次から次へと私の脳裡には奇

襁褓への幻想

赤井 茂



画館でトイレへ行く事の出来ない位の人波で、側に居る二、三の女性、

「こんなに混んだんじや、御不浄にも行けやしないわね」

「えゝ本当よ、その点、赤ちゃんなんかはオムツしていて、いいわね」

「だって、私達はオムツなんか用はないわ」

と云っている会話を聞いたことがあります、大変面白く興味ありました。

今の私は、絶えずこんな破廉恥なるイメージを描きつつ、人知れぬ苦悩に描き切れぬ異常な悩みの沼からはい上る術も知らず、悶々として居るのです。この苦悩を忘れさせ、慰めてくれるのは「奇ク」であり、同好の志の話題であります。

奇妙な、そして他に余りその類を見ない私のこの性癖が幾分でも慰められる「奇ク」に感謝しつつも、更に、理解のある友を得たいという大それた自分の望みを、唯一の理解誌である「奇ク」に発表するという事に心苦しさを感じつつ筆をおきます。

(終)

抜な夢が描かれるのです。

淡い冬の陽差しに竿一杯満艦色のおしめ、一滴、二滴と凍り切った地面に吸われ行く雫にさえ愛執を覚えるのです。

花村さんの「乳棒と月経帯」の手記の一文に、流腸してメンスバンドを嵌めて映画に行かれたくんだり、私はバンドをおしめに結び付けたのです。これは正に願ってもない楽しい夢なのです。正月のこと、殺人的混雑の映

悪魔の遊戯

二 俣 志 津 子

一

志津子は、兄の松葉杖が以前から気になっていた。べつにどこと云って変っているわけではない。が淫らな匂いをする。それが兄の杖に限ってである。心にかゝるので、街で松葉杖をついた人を見ると、近寄っては杖を見るのだが、何の変哲もない。

——兄貴は陰性だ。どこか、私の見えない

ところで、淫慾の沼に陥込んでいるのかもしれない。

彼女は、兄の家を訪ねる度に、家中を点検するように、注意深く見る。しかしべつに変わったこともない。彼の手先の器用さは、志津子も敬服していた。それと、口の固さは無類である。それだけに、ひよっと、自分にかくれて何かやっているのではないかと、疑う。志津子自身がそうであるからだ。彼女などは

秘密だらけだ。ちよっとしたブルジョワの清純な令嬢にも見える。あけっ放して朗らかで、もののかげなど微塵にも見えぬ。ところが彼女と交際した者は、彼女

二俣志津子はわからぬ。と言う。どこに家があるのか……いや、どこが本当の彼女の家——巢なのか見当もつかぬ。と言う。兄の家へ行けばそこを自分の家のように振舞う。戦後、種々な世相が目に見えぬところで変ってきた。たとえば、戦前戦時は、大方の人は収入の道が明瞭であった。あれは会社員、あの人は何商売で生計をたてていると、ところが戦後になると、焼トタンのバラックから、ハイヒールを履いた令嬢が出てくる。乞食みたいな風体の男が札ピラをきっている——たとえば、戦前はチンピラ、不良とやくざ、とははっきり分れていた。よく、やくざ人が不良に刺されたりなどしたものである。ところが戦後はチンピラもやくざもけじめがつかなくなつた——。





いや、こんなことを喋る筈ではなかった。二俣志津子の正体だ。いや、志津子の正体などどうでも宜しい。その兄の松葉杖に淫らな匂いがある。と志津子を感じていることが主眼だ。

そうだ。兄だ。

兄を捉えなくちやあ話にならない。で、兄はどうかと云うと。志津子はあれは陰性でわからぬ。と言う。志津坊はぼけたのだ。それで「Mへの手紙」だなんて奇譚クラブとか云う雑誌へ素肌を露しやがった。誠に持ってだらしない

ムスメだ。春でもないのにすっかりイカレたらしい。何に？　って、Mによ。Mって、まあM氏とでも、moneyとでも membrumでも……

はっはっは、わっはっはっは、

そうか、志津子の頭脳はちっとも乱れちゃあいなかった。明晰だ。狸犬のような臭覚を持っている。兄の松葉杖が臭い！　成るほど。志坊。志津的。お前は奇想天外のアイデアを生み出す天邪鬼だ。兄の杖なんか何んでもない。ちやあんと、身体傷害者手帳を示して福祉事務所を通じ正規に入手した松葉杖だ。よく見るがいい。何でもありやしない。ただ、志津坊、お前は奇譚クラブのM氏にちっとばかりハッパをかけられ、一寸ばかりコーンさせられ、一寸ばかり……もうよい！　早く先へペンを進めるがよい。

二俣志津子は杖を持っている男が好きだ。

杖も、根杖コンジヤと言う杖だ。いや、男根杖だ。どなたか持っておられないか。持っておられる方が居たら「奇ク」編集部を通じて彼女に贈呈してやってほしい。全国の男性諸君、誰か男根杖を持っておられぬか！　男根杖とはどんな杖か？　それは二俣志津子に聞くがいい。

彼女はよく知っている。彼女が考えついた杖だからだ。素晴らしい責具であり、女の玩具である。大小様々ある。彼女はそれを今兄に造らせている。責具としてはちよっと変って非情だ。彼女の兄の細工場を一寸覗いてみよう。いや、その前に、試作品を持ってどこかへ消えた、二俣志津子を探し出さねばならぬ。どんなにかよわい少女を責め苦しめているかわからぬからだ。全く、あんなものでやられてはやり切れぬ。じかに、ぐい、とやられてしまう。畜生、あの、お品のいい天ン邪鬼はどこへ行きやがったのだろう。

一一

上野駅の各線最終が発っても、まだ、夜の女は、凍った歩道に立ちつくし、また何となく歩いていた。しかし、省線の最終がなくなる頃には、流石に数えるほどこしか女達は居なくなつていた。上野百貨店の入口で藁や紙を身体中にまきつけて転っている人々は別として省線入口（公衆電話ボックスのあるところだ）の鉄の扉が閉ると、最終の電車だか汽車だかに乗りそこなつた数人、時には十人近くも、あの鉄の扉によりかかったり、そばに蹲んだりする。どう言うわけで冬でもあの風通

しのいい所に居並ぶのだからね。一種の心理があるに違いない。たとえば、おれは汽車に乗りおくれた者で、浮浪者じゃあないんだぞ。（そして、旅館に泊る金もないんだぞ。旅館に泊る金があったって、泊るのが勿体なくて仕方がねえほど客ん坊なんだぞ）と言うように——。夜の女は、こう言う人々は目もくれない。尤も、ドーレ鳥は、はねている蝗しか食物であると認識しない。ユックスキユルはそう言っている。彼は偉い学者であつて、多くの学者達が彼に影響を受けていると言うほどだから、彼の言うことは間違いない。それで、ふらふら歩いている男共は、忽ち女達に捉えられてしまうのだ。上野駅と言うところは決つて、毎晩誰かが焚火をはじめめる。人々は焚火に集る。二、三軒の合法的、また非合法的売店にも、何となく集る。そして、小便をしたい者や慾情している者がふらふら女に捉れに行く。女が獲物をねらつたタカのように、さーっと車道を横切つて男をとらえる姿勢は見事である。充実して一分の隙もない。

——どちらへ？

——いや、夜の東京を見物しているんだ。（嘘をつけ。）

——あら、東京の方ではないの。
——千葉だ。

飢えたるタカと小隊の会話の一節だ。ところが、その飢えたるタカもとびつかない者が居た。彼は不器用に松葉杖をついて、上野百貨店の前から京成入口の前を通り、巡査派出所の前までくると、派出所の中へ入つて行つた。可成り美青年である。画家かもしれない。長い髪がツヤツヤに光っている。彼はソフトな明朗な言葉で丁寧に言つた。
「その空いている椅子に、少し休ませていただけませんか。」

巡査は当惑そのものの顔を横に振つた。それ切りである。青年は喰い下る。

「どこか休むところはないでしょうか。」

「ないな。」

「旅館はどこもダメなのです。待合室はどうして閉鎖されているんでしょうか？」

「浮浪者を取締り切れなからだ。」

「は、そうですか。どうも失礼しました。こうやって歩いているうちに夜も明けるでしょう。」

青年は派出所を出た。彼の松葉杖は音がしない。足音は更にかすかだ。彼はゆっくりと上野の森へ行つて行く。処々に小さな火が赤

く光る。男か女か煙草をすっているのだ。この星も凍る夜にロケだ。ほの白く見える肌はざらざらと鳥肌だっているのではないかと思うが、欲情と欲心とはすさまじいものである。

尤も、寒い。と、一寸でも思ったら負けだ。完全に風邪を引いてしまう。

しかし青年はそうないとなみには目もくれない。彼は、西郷さんの銅像のところからまた歩道へ降りる。女達は彼に目もくれない。懐は文無し。と、にらんでいるのだ。まじゅう屋は再三彼を呼止めたが、彼は見向きもしない。とすると、ロケ一回程度の金しか握っていないのかもしれない。彼は、地下鉄入口の辺りまで行くと、くるり、と引返す。彼が目をつけているのは京成入口の歩道の街路樹の下で煙草をすっている背の高い女らしい。ところが、この女は男を呼び止めたり、色目を使ったり遊動したりしない。青年も亦女に顔さえ向けない。女は時々乾いた咳をした。女と言っても男娼である。青年がその女の顔を三回程往復しているうちに、女は居なくなってしまった。が、青年はがっかりした様子もない。彼はソバ屋のノレンの前に立った。三人客が居るので、腰掛ける余地がない

のだ。松葉杖をついているので、立喰など出来る筈がない。席が空くまでおとなしく待っているつもりらしい。

と彼の肩にふれるばかりに女が彼の横に並んだ。彼女は青年に囁いた。

「おごってくれない？」

「……………」

「ロケで……………」

「ロケって、何だい。」

「知らないの？ふふ、白らばっくれてるね。」

「いや、ほんとだ。」

「あんた、一寸いいマスクね。」

「いや、ぼくは、マスクはきらいだ。」

「ふざけてんの。」

「いや。」

「とに角、頼むね。お腹空いちやった。」

席が空くと女は青年にぎゅっと押しついて腰を下した。女はソバ屋の親父に言った。

「ソバ二つ。」

「へい。」

青年は顔に手をあてて俯向いている。ものを考えているようでもある。ソバが来ても、彼はそのままの姿勢で食べる。女のように形のととのった赤い唇だ。彼は半分ほど食べると、二つ分の金を出し、松葉杖をとって立つ

た。女はあわてた。

「一寸、あんた、どうしたの。」

「どうもしない。」

「もう一寸ここに居てて。」

青年はおとなしく女の傍に腰を下して女の

食べ終るのを待っている。

「あなた。どこ。」

「何が。」

「おうち。」

「ないよ。」

「嘘。」

「されど、人の子には枕するところなし。そう言う言葉がある。」

「へー。どこに。」

「バイブル。」

「あんた、クリスチャン？」

「ちがう。」

「画家ね。」

「ちがう。」

「じゃ、なに？」

「悪魔。」

「お小姓みたいな悪魔ね。おつとめ？」

「うるさいな。早く食い給え。」

女は黙った。

ソバ屋から出ると、女は青年の腕を抱えて

森の方へ歩きかけた。
「商売気抜きよ。私、あんた好きになっちゃった。」
「ロケって何だい。」
「今に教えてあげる。」

「どこへ行くんだ。」
「いいところへいいことをしに。」
「いやだ。ぼくは悪魔だ。いいところへも行くのはごめんだし、いいこともしたくない。もう一度言う。ぼくは悪魔だ。」

「可愛い悪魔さん。じゃ、悪魔の住むところへ行って、悪魔の遊戯をしましょう。」
「君に悪魔の住むところがわかってたまるか。」
「じゃ、教えて。」

「よし。」

青年は女の手を振り放した。何としても杖がつかにくいのである。女は彼の肩に手をやった。青年はそのまゝ車道へ出て、タクシーに手をあげた。

「君。本当に悪魔の遊戯をするか。」

「えゝ。」

タクシーが、ギーッと二人の前に止った。二人は車の中に吸込まれ、夜の街をつっ走った。

三

「もう、カンニンして下さい。」

「おや？。どうして。悪魔の遊戯は、これからなんだ。」



よ。」

「でも、ひどい、こんな、こんな。」

「こんな何だね。これは、君が一晩に何回もやる、これで金をもらっている商売じゃないのかね。」

「でも、杖でなんて。」

「同じだよ。君、そっくりなんだぜ。本物とちがうのは……。」

「そんなものより、やっぱり、ほんものの方がいい。」

「本音らしいね。しかし君、こいつはしなびたりなんかしないし、ほら、ほら、くるくる廻すことだって。」

「やめて、やめて。」

「だめだよ。」

「やめて、私を抱いて下さい。ほんものだったら、どんなにつらくても、こらえます。私はあなたが好きです。だから、ソバ一杯で口ケしてもいいって言ったんです。」

「冗談じゃあない。ぼくには、その、ほんものがないんだよ。」

「え?。」

「何て言う顔をするんだ。誤解するなよ。切ったりとったりしたんじゃない。だから最初から言ったじゃないか。ぼくは悪魔だって

そしたら。君は何と言った。可愛い悪魔さん。悪魔の住むところへ行って、悪魔の遊戯をしましょう。って言ったじゃないか。ぼくは、君の望みを適えてやるために一生懸命なんだよ。どう?。ロケって、こう云うことをするんですか?。」

「あ、あ、悪魔。」

「はっはっは、その通り。どうやら満足したらしいね。少し悪魔の掌で撫でてやろう。」

「もう、帰して下さい。」

「おや?。君はさっき、家もなければ、親兄弟もない。って言ったぜ。ぼくは、てっきり木の股とかキヤベツの中からとび出した悪魔の仲間かと思っていたんだ。」

「もう、沢山です。家は、あります。」

「どこだ。送ってあげよう。」

「一人でいきます。」

「だめだめ。ここには、性悪の病氣を持った青い目の悪魔が沢山居るんだ。」

「いいです。その方がずーっといい。跛でもめっかちでも、人間に抱かれた方が、ずーっといい。」

「人間じゃあない。悪魔ばかりだ。と言うのだ。それが人間面をして、尤らしいことを言っているだけで、ぼくのように、はっきり悪

魔だ。と云ってないだけだ。」

「もう、縄を解いて下さい。」

「いやだ。折角とらえた小羊を悪魔の神に捧げもしないうちに放つことは出来ない。ほら七輪には炭火が火照り、鍋には湯がたぎっている。神に捧げてから、ぼくがお前をたべてしまうのだ。コーモンからお前のゾーモツを引出して、すっかりたべてしまおう。お前のお腹には何もなくなる。お前の胸はガラン洞になる。ゾーモツは、一番栄養があっとうまい。」

「あなたは、本当に、私を……たべ、たべちやうんですか。」

「安心しろ。ゾーモツだけだ。あとには何かつめておいてやろう。」

「助けてー。」

「喚け。叫べ。ここは谷間の水車小屋だ。ほら、水の音が聞えるだろう。」

「助けて下さい。」

「これから遊戯をしようと言うのに、何を言うんだ。そりや、楽しいんだぞ。」

「神様。お母さん。」

「何でも呼べ。」

「お願いです。私をたべないで下さい。」

「これから、胃や腸に溜っている汚物を出さ

せる。」

「お願いです。年とった母がおります、母が
あ、あ、何を……。」

「腸を洗う。でないと、臭くて、食えないか
らね。」

「どうぞ、何でもします。どんな言いつけで
も守ります。あなたのために付きまします。食べ
ないで下さい。」

「腸は洗わねばならない。ほら見ろ。こんな
にふき出すじやあないか。臭い臭い。やり切
れん。悪魔はこれが好きでない。」

「はあ、はあ、」

「どうだ、気分は。」

「どうしても食べるのですか。」

「考えている。」

「お願い。あなたに、何でもあげます。」

「その前に、お前は、お前の望んだ悪魔の遊
戯をしなければならぬ。」

「それをして、食べませんか。」

「考えよう。」

「有難うございます。有難うございます。ど
うぞ、たべないで下さい。悪魔の遊戯を致し
ます。悪魔さん。さ、どうぞ。」

「まで。まだ腸を洗い切っていない。」

「じや、やっぱり。」

「考えている。」

「悪魔さん。お願い。」

「朝だな。陽が差込んできた。」

「陽は恐いですか。」

「恐くない。ぼくは、人間の姿をしているか
ら、平気だ。」

「じや、人間のお名前も」

「ある。」

「何と申しますんですか。」

「二俣志津子。」

「女の方?。」

「悪魔に男女はない。」

「二俣志津子さん。これからそう呼びして
も宜しいですか?。」

「さ、はじめよう。」

「はい。あの……縄が……。」

「いま解く。今日は松葉杖の責めだ。」

「あなたは、足がお悪くはなかったのですか
?」

「足が?。馬鹿な。さあ、始めるか。」

四

女は疲れ切って、縛られたまま水車小屋の
中で寝ていた。水車はゆっくりゆっくりまわ
り、冬の日ざしが暖い。志津子は心が楽しま

ぬままに、日向ぼっこをしながら、古い水車
をぼんやり眺めていた。孤独であった。心か
ら打とけて話合う友どころか、表面だけの友
さえ居ない。結婚する気もなかった。そして
自分が次第にサディズムになっていくのを見
つめていた。おかしい。これはまとも
じやあない。自分はこんな方向に進むべきで
はない。と意識する。確かに、女に男性的要
素が多くなり、同時に男に女性的要素が多く
なる傾向の時代がある。そのような時に婦人
解放運動や共産思想がたかまり、世相があわ
ただしくなる。乱れる。現在がそうだ。志津
子は、自分にも、何か社会的な使命がある様
に莫然と思う。それが何かわからない。今、
彼女に潜在意識としてあるものは、マゾ的男
性を虐待したい欲求、すべての男性をマゾ的
にすること、しかも、それは、全く苛借なく
行うこと——。

——男——。志津子は松葉杖を取上げた。

杖の先は、太さから形まで、男根にそっくり
である。それに彼女は、無造作にゴムのサツ
クをはめる。彼女は、先刻、夜の女に対して
行った松葉杖の責めを思い出した。そして、
それはどうしても男にやってみたくものであ
った。女ほど残忍非情な動物は居ない。と、

志津子は時々思う。這いつくばってぺこぺこしてくる男を叩きのめしたのでは、面白くない。後腐れがあっても困る——。

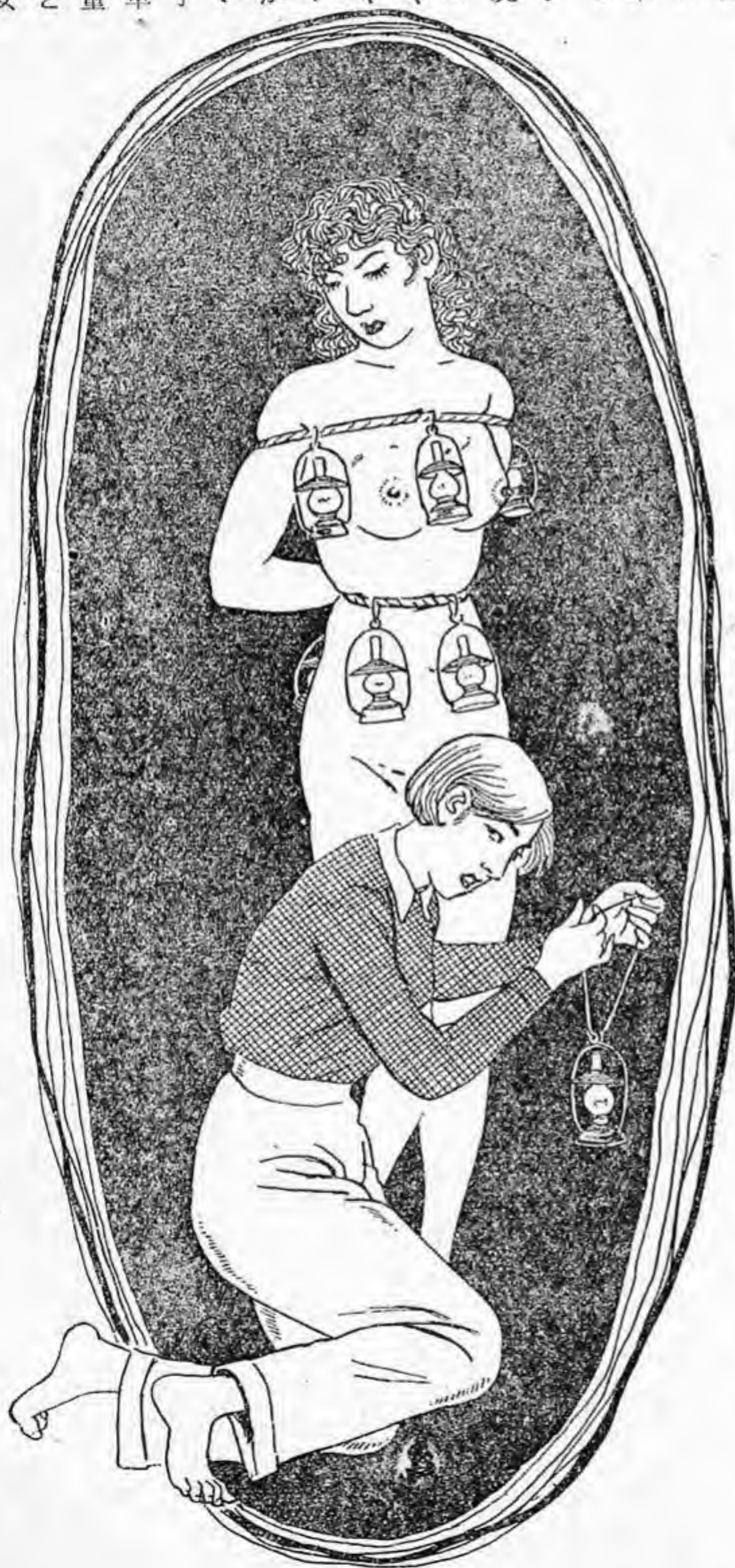
彼女は、枯草に腰を下して、あの水車に女を縛りつけてみようか。などと思っているうちに、いつの間にか、まどろんでしまった。

——冬陽は、弱々しいけれど、おだやかである。松籟は耳に快く鳴っていたが、風は水車小屋まで渡って来ない。志津子はあおい空を眺めていた。木々の葉は落ちつくし、枝々は鋭く天を突いている。雲は、動かない。動いているのは志津子だ。古びた水車は、彼女の重量で、更に遅々としている。彼女

の素足は身を切るような水から出て、水玉を光らせている。素裸の彼女は、大の字なりに水車にからめられている。彼女の髪が片側に垂れて、彼女の視野に兄の姿が入った。兄の嘲笑うような眼つきが、カチンと彼女の胸に響いた。

「そんなんじや面白くないよ。が、今に泣くような目にあわしてやろう。お前もそれを望

んでいるんだろう？きつと」と
と忽ち彼女の視野から兄が消えた。氷のような水が頭から耳を洗った。彼女は目と口を閉じた。肩、顔、が水に浸る。ぶっぷりと顔が沈んで、彼女は見事な逆立ちになった。彼女は、目をあけて太陽を見た。若し兄の言うように太陽が蒼いものなら、私は悪魔になれよう。と。彼女は、齒にしみる水を



少しずつ飲んだ。そして、肉体に打撃が加えられていたのを、夢の中の事のように意識した。息苦しさは増した。が、水車は相変わらず遅鈍だ。胸も肚も波打つ。彼女は、遂に息苦しさにたえられずに、がぼがぼと水を飲んだ。太陽があおく見えて彼女は氣を失った。

陽が沈んだ。が山頂の樹々にはまだ太陽の光りが当たっている。谷は夕暮だ。空気は凍った肌になって流れている。志津子は、がたがたふるえながらめざめた。枯草に散っている服を取って着ようとして自分がまどろんだままの姿勢であるのに気付くと、苦笑した。それでも思わず水車を振返ってみたが、何事もない。彼女は飛起きて水車小屋へ入って行った。薄暗い中で、女は縛られたまま、泣泣いている。それを見ると、彼女は自分を取りもどして、しやんとなった。

「今、焚火をしてやるわ。」

「帰して下さい。」

「え、明日の朝ね。焚火で炊事でもしよう。とお腹空いちやった。あんたは？」

「帰して下さい。」

「わからない子ねえ。夜は悪魔のものよ。それとも喰べられたいの？」

「帰して。」

志津子はアガニヨークを喰いながら炊事を始めた。豆ランプをとぼした。

「いい唄ね。あんた今夜一晩で覚えちゃいなさい。こう云うの、

やさしき 乙女の

清き想い

海山遙かに へだつとも

二つの心に 赤く燃ゆる

黄金の灯 永遠に消えず。

草原に。もいいわよ。お嫁に行くのはどこよ、って言うの。どこでもいいけれど、じじのところへだけはいいやだっていうの。」

「唄なんかどうでもいいです。」

「この豆ランプ、可愛いでしょ？。掌の下に入っちゃうの。ここに全部で十二個あるから、これをお前の身体に全部ぶら下げてやるわ。そして、又、ゆうべみたいな遊戯しましょうね。」

「助けて下さい。」

「あら、いやなの？。喰べなければしてもいいって言ったじゃないの？」

「でも。」

「デモ、ピケ、スト、それはあんたのもの

ね。つまり、あんたはプロだから。わからないの？。鈍ね。プロレタリア。と、プロステイテユート、つまり淫売婦とに引っかけた洒落よ。」

女は黙り込んでしまった。何を言ってもダメだと観念してしまったのだ。彼女は縛られたまま、おとなしく食事をした。

食事が終わると志津子は、女を立たして、彼女のまわりをぐるぐるまわり歩いた。十二の豆ランプは女の身体の各所に吊られた。乳、首、股間、等々、

「これで街へ出て行ったらどうかしら？。精神病院行きね。しかし、ストリップ・ショウで、どうして、肉体にランプを飾らないのかしら。面白いじゃあないの。舞台を暗黒にする。裸形に豆ランプをつけた女の踊りねえ、いいじゃないの。熱い？」

女はかすかに首を振った。が、志津子が松葉杖を拾いに行くと、その表情は恐怖の色に満ちていった。

「さあ、これからが、本当の悪魔の遊戯よ。ランプが毀れたら、あんた、火傷するわよ。それは、あんたの責任よ。」

志津子は浮々とした明るい声で言った。

告白と手記と体験

懸賞募集

優作	秀作	佳作
一篇につき 三千円 若干篇	一篇につき 二千円 若干篇	一篇につき 一千円 若干篇

★賞金★

規定

- 一、枚数は一篇十枚から三十枚程度まで。
- 一、必ず未発表のものたること。
- 一、原稿第一頁に懸賞告白と朱記のこと、原稿の返却は致しかねます。
- 一、締切は定めませんが入選作品は最近号に発表します。
- 一、賞金は入賞作品発表後一カ月以内に御送りします。

◆告白記の募集◆

- 一、上記の懸賞とは別に月例通り皆様の真実あふれた告白記を募っておりますから、どしどしお寄せ下さい。
- 一、文章の長短、用紙、書き方等一切御自由です。
- 一、投稿者の本名や其の他一切の個人的秘密に関する事項は厳重に秘匿いたします。誌上への発表は匿名で結構です。御安心してお寄せ下さい。
- 一、誌上へ掲載した分は掲載後相当謝礼を差し上げます。
- 一、原稿は一切御返戻申し上げかねますが、係よりの連絡は出来る限り差し上げます。
- 一、原稿の御送付には開封の上第五種郵便百瓦迄八円にて御願います。

(編集部)

五

全く、志津子の顔には、ロシヤの何とかと云う淫僧におとらぬ色がただよっている。ノーマルな人間にはそれはわからない。だからあいつは、澄し込んでいられるんだ。

おや、杖をついた痩せた男が来た。あの杖も男根杖かな。いやこれは失礼。

「もしもし、失礼ですが……。」

とに角、杖の太さがアレと同じだなんて気付くようじゃ、やりきれない。ろくな死に方をしないだろう。

「ぼくですか?。」

「はあ、あの……。」

「何でしょう。」

「その杖、一寸見せていただけないでしょうか。」

「はあ。しかし、」

「いえ、私の家にも、急に松葉杖の必要な者が出来てしまったんで……これは、どこでお買いになったんですか?。」

「世田ヶ谷の太子堂です。」

「はあ、そうですか、どうも失礼しました。」

「ごめん下さい。」

畜生め、二俣志津子のおかげで、作者もすっかり、杖を見ると、男根杖に見えてきて仕方がない。彼女に少し用があるのだが、どこに居やがるか見当もつかない。今度会ったらいきなりものも言わずにビンタをくれて、へへ、と、笑ってやろう。それから、関節でも外されないうちに逃げちやうんだ。両腕両脚の関節を外されたんじやあ、やり切れないかな。要は思い切りあの天邪鬼をひっぱたくことなんだ。思いっきりね。

續・半公刑

大 和 撫 子

篠 原 咲 惠

四 馬 孝・画

赤札の囚衣に身を包んで羞恥の姿を晒し、女看守の無情の鞭に追われながらも、私は冷たい獄舎に二度目のお正月を迎える事が出来ました。型許りのお雑煮を食べ終った私達には直ぐに厳しい作業命令が待って居ました。

「今日の作業は再生部品の洗滌です。防水半袴衣を着て営倉前に整列なさい。」

お正月早々の辛い作業の割当に内心絶望しながらも、一分一秒の遅刻が点数に響く事を思うと、作業衣を附ける手ももどかしく、お姉様と先頭を争う様にして営倉前に駆けつけ

ました。早い遅いと言ってもホシノ数秒の差でしかありません。しかし、遅れた赤札囚人は、女看守の眼が光り、赤い樫の棒が生き物の様に威嚇するのです。

「二十二号、三十一号、お前達は作業を何と思って居るの、作業を少しでも多くして、作業を通して精神の入れ替えをしようと言う気持が起る迄、そこに立って居なさい」

可哀そうに、二十二号と三十一号はお正月の寒空の下に、防水半袴衣という哀れる姿で立たされる事になってしまいました。防水半

袴衣と言うのはゴム引き布で作られたブルーマで、モンペを膝の上までまくり上げて、その上から此のブルーマをはくのですが、その無様な恰好は全く何とも言い様がありません。普通の女工さん達でも水仕事をする時には、貸与される事になって居りましたが、あまり無様な恰好が恥しく、衣料品の乏しい当時でも誰も附ける者がなく、自然廃止同様になつて居りましたのを、意地の悪い女看守が私達赤札女囚を恥しめる手段として強制的に着せる様になつて居りました。

「二十二号、三十一号は、呼びに来る迄、そのまゝ、その他の者、右向ケ右、駆足進メ」

私達は腰に手を当て、文数の合わないゴム靴をバクバクさせながら再生工場に着きました。此の工場の作業は女工さんに最も嫌れて居る仕事で、特に冬季は定った女工はなく、各工場から手のすいた女工を集めては仕事をさせて居りました位で、私達に対する懲戒作業としては絶好な仕事でしたので、もう何回となく此の工場には来た事があり、作業にはすっかり慣れて居るのですが、山の様に積まれたボールト・ナット、ターンバックル、ギヤー、ベアリング、チェイン等を冷い軽油で洗うのは、決して好ましい仕事ではありません。手は凍え、足は冷え、やがて指先から感覚が無くなって、流れる血を見て始めて怪我に気が附く有様です。

「こんな洗い方があるの！」

看守の声と同時にバシッと言う大きな音がしました。「誰かがやられたらしいわ」と思いついたが、作業の手を止めず夢中で仿いて居ると言う態度を少しも崩さないで居るのが古参の赤札の要領です。

「何処を向いて仕事をするの！」

続いて、バシッと音を立てて新米の赤札が

側杖を喰いました。

「お前はちっとも能率が上がらないじやないの、さっさと仕事をしなさい」

もう一つ軽くお尻を叩かれて、夢中で作業を始める新米の赤札を横目で盗み見しながらも、私の手は忙しく動いて居るのです。作業に対する女看守達の気持には二通りあるのです。即ち作業を能率よくやらせなければならぬ時と、私達の懲戒、所謂精神の入れ替えの時とは全く別なのです。ですから私の様に古参になりますと、作業は作業、精神の入れ替えは入れ替えで、所詮逃れられぬ運命と諦めて、要領よく打たれる時には打たれてしまふのです。

「百五号、百二十七号、前に出なさい。二人は午前中非常に能率を上げましたから、午後には首輪を取って上げます。」

「はい。有難うございます。」

お姉様と私は感激に眼を輝かしながら首輪をクルリと廻して、首輪にぶら下って居る錠を背中を廻し、廻れ右をしてコンクリートの床に両膝をつき、彼女達に背中を向けて座り両手を後に廻して右手首を左手で握り首を垂れます。褒められて居るのか、懲罰を受けて居るのか、数十名の女工さんの眼が集中され

ます。悲しい儀式、屈辱のお作法を歓喜の表情で行わせるのです。何と言う残忍さでしょう。やがて女看守の手が首筋を掴み、錠がはずされ、ギチ／＼とベルトをきしませながら首輪がはずされます。

「さあ、首輪をはずして上げたから、昼前に負けない様に一生懸命働いて下さいよ。」

「はい有難うございました。此の気持を忘れないで一生懸命働きます。」

「では、仕事に掛りなさい」

作業へ歩き去るお姉様の眼に一滴たった涙を私は見逃しませんでした。学歴、教養共にはるかに劣った彼女達のお説教を土下座しながら黙って聞かなければならぬ口惜しさ、しかし、哀れな赤札女囚の手は心とは逆に冷い軽油の中で忙しく動いてしまふのでした。

心で泣き、そして反抗しながらも、肉体には鞭を、心には屈辱を、欲しいまゝに与え得る女看守達の絶対の権力の前には、全すべてをあきらめた機械的服従がある許りでした。

どんなに仿いた所で、私達には月に一度や二度は必ずお仕置が廻って参ります。看護婦上りや小学校の女教師上りのオールドミスが大部分という女看守達がどんなにヒステリックで、多少なりとも美しい若い娘にどんな気

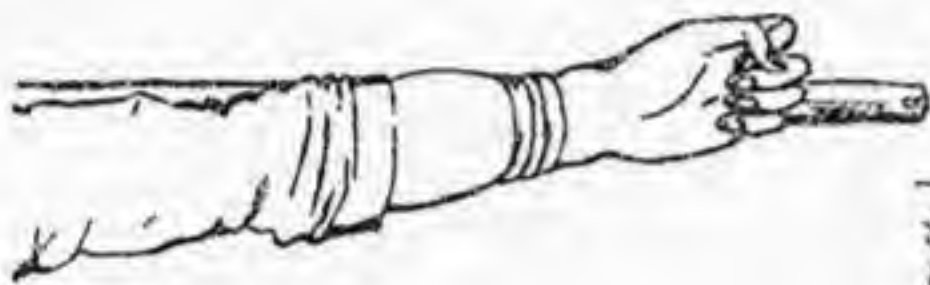
持を持って居るものか、次々と恐しい懲罰を
発明しては泣き叫ぶ同性の姿にサディズム
の満足を求めるのでした。そして意地悪く私
達を看視して居れば、必ずその懲罰を実行出
来る位の難くせは附けられるものです。十日
目毎の点数発表を恐怖する私達と反対に、彼
女達は運動会を待つ小学生の様に楽しいブラ
ンを練りに練って居るものでした。

「こうして、何時も何時も点数の足りない者
が出るのは、私達の努力が足りないのだと思
うと、私達は職務に対しても、又国家に対し
ても本当に申し訳ないと言う気持ち一杯にな
って、夜も眠れない位です。点数の足りなか
った者にはお仕置をすると言うだけでは、本
当に職務を全うしたとは言え
ないと思うのです。」

「指をもっと延して！」

「姿勢が崩れて居る！」

床板に、二本の細い角材を
並べた上にモンペを膝迄捲く
り上げてきちんと正坐し、両
手を真直に延してお説教を聞
かされる口惜しさ、しかしそ
の口惜しさもだん／＼激しく
なる苦痛と疲労の為に一刻も



早く、如何な屈辱を受けても良いから許して
貰いたくなるのでした。

「機械的に、只、貴女達のお尻を打つだけな
らば私達にとって、こんな楽な事はありませ
ん。どうしたら皆合格点を取ってくれる様
になるか、毎日心を痛めて居る班長（女看守）
達の苦勞を少しは判って貰いたいものです」

こんな白々しいキザな科白が良くも言えた
ものです。此の愛国婦人会か何かの支部長と
いう経歴を持った女看守長は、つい最近入っ
た許りですが、そのねちねちとした責め方は
赤札女囚の恐怖の的となって居りました。

「お許し下さい」

「かんにんして下さい」

「もうよく判りました」



苦痛に耐えかねた哀願の言葉、泣きむせん
で崩れる背中を極の棒でぐりぐりと小突き廻
され、首輪に指が掛けられてぐっと上体を引
き起されます。しかも未だお説教は続くので
した。

「もうお仕置は沢山です。私達に此れ以上苦
勞をかけないで下さい。お仕置は今日限りで
今度からは皆、合格点を取る様に誓って下さ
い。今度こそきつと精神を入れ替え、立派な
大和撫子になって見せると言う自信のある者
は返事をなさい」

「はい」「はい」「はい」

これで許されるかも知れないと言う一縷の
希望に勢い込んで返事をした私達の喜びも、
一瞬の後には、嬉喜びであったことを思い知
らされるのでした。

「皆よく判って貰えて結構だと思ひ
ます。それではこうすれば私は完全
に精神が入替ると言うお仕置の方法
を今から考えなさい。その考えの通
りに精神の入れ替えをして上げます
から、覚悟の決った者から前に出な
さい。」

あゝ、とうとう本性を現しました。
自分の肉体に何んな方法で苦痛を与

えたらよいか、適当な方法を
考え出す迄は此の苦しい姿勢
からは開放されないのです。

彼女達は私達の苦痛の程度を
充分計算して、その為にモン
ペを脱がさず、膝の上迄捲っ
ただけで正坐の苦痛を倍加さ
せて居るのでした。更に激し
い苦痛を身に受けねばならぬ
と知りつゝも、その間、一時
の開放があります。

「お願い致します。」

「百二十七号はどんなお仕置
を受けたいの」

「棒を背負わせて、叩き直し
て頂きたいと思ひます。」

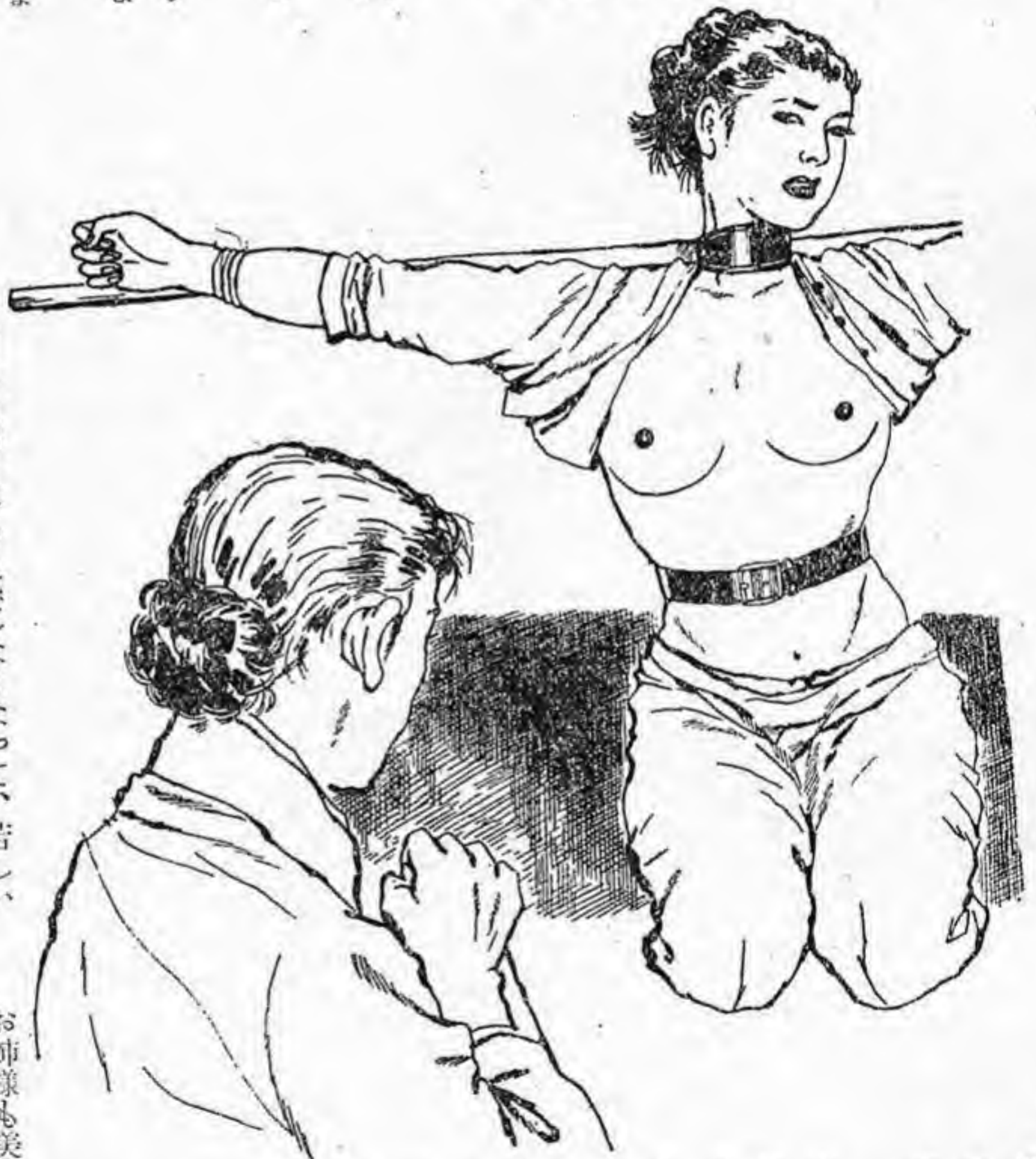
「それで、精神が入るといふ
んでしたら、そうして上げま
す」

「臂の水打ちを…お願いしま
す」

「尻打台でお願いします。」

「油抜きをお願いします。」

「きつく縛って頂いて、充分反省したいと思
います。」



両足の痛さはもう感じなくなって、苦しい
姿勢の為に涙に濡れた顔に脂汗をにじませな
がら、思い思いに悲痛な決意を申し出るの
でした。

「百二十七号と百五号の反省はなかなかよ※

※いい方法だと思ひます。二人
の方法でお仕置をして上げま
すから前に出なさい」

立てと言われても立つ事の
出来ない私は、女看守に引き
起されながらよろよろと前に
出ます。二米程の棒が持ち出
され、その中央部を首筋に当
て首輪に紐を通して固定され
ると、左右に両手を開いて手
首と棒が固定されます。モン
ペが逆に引き摺り下され、後
前のセーラー服は全く都合よ
く背部のボタンがはずされて
背中を押し拡げ安全ピンで止
められてしまいました。腰の
バンドがむき出された背に直
かに当り、捲くられた上衣を
両側で噛む様に押えてしま
いました。

お姉様も美代子も、友子に晴美、皆同じ様
に縛られて並びました。

「さあ、奴隷が出来た、皆よく働いた者にそ
の泣き顔を見て頂きなさい。」

「廻レ右ッ」

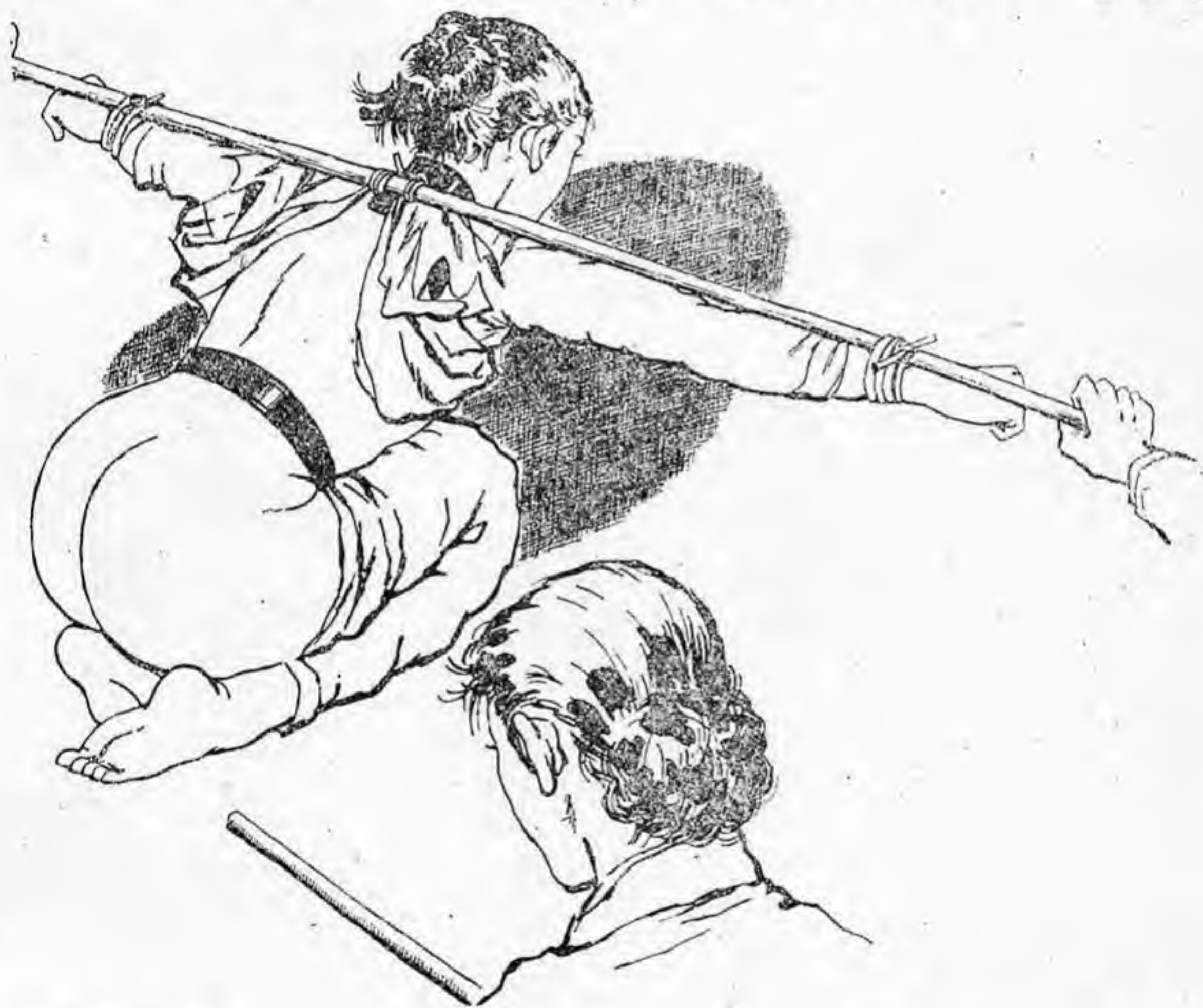
奴隷が五匹、クルリと廻ると、棒と棒が摺れ合い、バンドと首輪の錠が冷い金属音を発しました。

「上体を半ば倒せ」

私達の首輪は棒で固定されどうしても、首を引かれ気味で、首を垂れると息苦しく、自然、顔だけは見物の赤札たちに晒し物にされます。革鞭が大きく空振りされ、「ひゅうーバシッ」と大きな音をたてました。

「助けてえ」思わず知らず眼を閉じ、逃げ腰になりました。途端にどっと笑声が起りました。再び見開いた私の眼に未だ笑い止まない新入りの顔がはっきりと写りました。

「畜生」思わず知らずそんな呪わしい言葉が脳裏をひらめきました。しかし次の瞬間、焼け附く様な痛さが背筋を走り、やがて全身が、かっと燃えるように熱くなりました。



「うわあー」うめきとも喚めきとも附かない声が口を突いて飛び出しました。

「廻れ右ッ」やっと聞えた看守の号令に又も皆に背を向け直し、今受けた背中の鞭跡を見せます。

「上体を深く倒して」

言われた通り直角に曲げてお尻を突き出します。左右の棒の端を二人の女看守に握られた姿勢が出来上ると、今度は精神棒が唸りました。こうして裏表から惨めな姿を見せて、見せしめにすると共に新入りに対する古参の権威を失墜させるのが、彼女達の今日のプランだったのでしよう。

「さあ水をお飲み」

やっと開放された私はからからに乾いた喉に冷い水を一気に走らせました。お姉様の喚き声が響きました。お仕置の済んだ安堵感から見物の赤札達を眺めると、異様な好奇

心に眼を輝かし、対岸の火の手を見る様に嘲笑さえも口元に浮べて居るではありませんか、〃今に見ておいで〃職権をかさに着る女看守に対して



は一言半句の抗議すら出来ず、全ゆる苦痛と屈辱を易々として受け、反抗の素振りさえ表し得ない私の抑圧された憤怒の気持が、見物の新入りに向って爆発するのでした。

「では百五号と百二十七号を除いて、後は許して上げます。二度とお手数を掛けるんじやありませんよ」

「はい」

異口同音に答えて喜び勇んで自席に戻る三人の赤札を見送りながら、又も新たな恐怖が襲って来ました。

「百五号は、さっき充分に反省したいと言いましたね。」

「はい」

「お前達には幾らでも反省の材料がある筈です。今から本当に反省し、大和撫子としての精神が入る様充分に時間を与えて上げますから、そのつもりで無駄に時間を過さぬ様、これを精神入れ替えの総仕上げになさい」

「はい、これを精神入れ替えの総仕上げと致

します。」

訓練の行き届いた立流な赤札囚は、必ず女看守の言葉を復誦して、絶対の服従を誓わねばなりません。

「此の頃二人は非常に良くなったと看守長も褒めて居られるから、立派に反省の実を挙げなさい」

「はい、有難うございます」女看守の一人がフと手を延して、パンツに手を掛けると、あっと言う間も無く引きずり下され、今一人の看守が隠し持って居た縋縋布を差し出しました。

「これを着けなさい」

何の事やら判らぬまゝに大急ぎで前を隠しました。

「何にも判らないらしいね、そんなら着せて上げるからそのまゝ其処に寝て見なさい」

不安に駆られながらも言われる通り、おずおずと寝転んだ私の手を邪慳に振りほどくと此の縋縋着せが始まりました、あゝ判りました。



オシメ！ オムツを着けて羞恥にもたえる姿を楽しもうと言うのです。〃死にたい、殺して〃そんな言葉が脳裏に浮びました。両手を左右に床に

押しつけながら、彼女達は此の愉快的遊戯を心ゆく迄楽しむのでした。

「さあ、出来たから起きて防水半袴衣を持って来なさい」

縋縋布のオシメの姿で私は、見物の赤札囚をかき分けながら自分の防水半袴を取って来ました。丁度お姉様が羞恥に、真赤になりました。から自分でオシメを着けて居る所でした。

「もっと深く、そうその位にはかないとせ」

かくのオムツカバーが役に立たないよ」

股の浅いブルーマをぐっと深くたくし上げると、立派なオムツカバーになりました。

「さあ、これなら何時間でも静かに反省出来ますね、坐っても寝てもかまいませんから、よく雑念を去って反省なさい」

「はい」

この時許りは声がつまって復誦もお礼の言葉も出ませんでした。手錠が合掌した両手首に掛けられ首輪から鎖で連結され、どうしても下腹部には手が届かない恰好です。長い鎖



を首輪に付け、その端を床に釘で固定して看

守達は出て行きました。美代子や同房の赤札

囚が敷いてくれた布団にもぐり込むと、おいおい泣き出しました。お姉様もきっと泣いて居る事でしょう。泣いて泣いて、泣き疲れ、やがて子供の様にぐっすり寝込んでしまいました。

翌朝、私とお姉様とは昨夜のまゝの恰好で只二人営倉に取り残されていました。やがて入って来た女看守が手錠をはずし、朝食が与えられました。あゝ彼女は私達の拳動をじっと見守って居るのです。『まだまだ』こう見破ったのでしよう、昨日かけたわなには、まだ二人ともかゝって居ない。もう暫くだ。彼女の考えは決まりました。食事の終わった私達には、又、手錠が掛けられました。

「お互に話の出来ない方が雑念が入らないだろうね」

「はい」

「では口を大きく開けなさい」

又例の轡が嵌められるのです。カチカチと歯に当るぞっとする様な悪寒、酸味のある鉄棒を口に噛まされ、自然に垂れる唾をどうする事も出来ません。

「ゆっくり充分に反省なさい」

朝眼をさました時から、昨夜お仕置の後で

飲まされた水が下腹部で暴れて居ります。そして考えれば考える程、だんだん激しい苦痛になって来ました。西と東に引き離されたまゝ鎖に繋がれたお姉様と私は、同じ苦痛に顔をゆがめ身をよじって苦斗するのです。

夕方皆帰って来ました。その後から女看守が昨夜の様に鞭や精神棒を手にして入って来ました。「くさいわ」おどけた新入赤札の声にどっと笑いが起りました。看守の姿を発見したお姉様と私は、きちんと正坐し直しました。「じゅっ」と音を立てゝオムツカバーに貯って居た液体が流れ出しました。羞恥に真赤にした顔を上げる事も出来ない二人の前につかつかと寄って来た看守長は素知らぬ顔で「どうですか、充分反省出来ましたか」

「はい」

今はもう苦痛は去りました。羞恥の姿を如何に隠すか、只それだけしかありません。

「では許して上げます」

手錠がはずされ首輪の鎖が取られました。

「お立ちなさい」

起ち上りながらも、オムツカバーから内股を伝わる一筋の液体の感触に、又も全身が熱くなりました。

「着替えなさい」

とうとう最後が来ました。もう嫌でも濡れたオシメを全員の前に晒さねばなりません。

「どうして此んな粗相をしたの」

「この布は誰のお蔭で着ける事が出来たか言ってみなさい」

「はい、陛下のお蔭、国家のお蔭です。」

「それだけ判って居るんでしたら、申しわけない、きれいに元の通りにしたいと思いますね」

「はい、早く洗濯したいと思います」

「では早速洗濯なさい。用意が出来る迄、防水半袴衣と、その布を目の上に捧げて皆に見て頂きなさい。」

二、三人の赤札が動員され、やがて洗濯の準備が出来ました。濡れたオシメとゴム布ブルーマを目八分に捧げ、直立不動の姿勢で待機して居たお姉様と私に、最後の命令が下りました。

「洗濯始めっ」

衆人環視の中でオシメの洗濯が始まりました「未だ未だ、もっと良く洗って」

「自分の後始末は立派にやり遂げなさい」

半畳とも、気合ともつかない嘲罵の中で、泪で顔をくしゃくしゃにしたがらやっとオシメの洗濯が終了しました。

「では明日からは立派に仿くのですよ。今度のお仕置は非常に素直に受けましたね。言われた通り、命令を完全に仕遂げる。従順と言う事が大和撫子となる第一の要諦です。今日は命ぜられたお仕置を素直に受けてさっぱりしたでしょう。」

「はい嬉しく思います」

「これで立派な特別班員（赤札の正式名称）になれたのですから、今後は、一歩進んで日本女性として、大和撫子となるよう努力なさい」

「はい、有難うございます。」

こうして二日に渡る苦痛と屈辱に耐え抜いて、始めて一片のお褒めの言葉を頂ける様になりました。

(完)

【訂正】二月号、小論（倒錯趣味は果して背徳か）中の与謝野晶子女史の短歌を誤記しましたから、左記の通り訂正します。
 // やは肌のあつき血潮にふれもみでさびしからずや道を説く君 //

「恋衣」より――

(成瀬 亮)

奇譚クラブ旧号総目次

昭和三十年

〇三月特大号【百四十円】

口絵 川柳アイディア十題 滝 麗子・画

「火の車」 伊藤晴雨・画

「娘相撲」 伊藤晴雨・画

「都察子面集」 可愛いお客様 外

「残虐なる女性達」 画集(ヘエゲ

「マン特集」 森本愛造提供、解説

「売られゆく女奴隷」 達磨れい子画

「縛り絵の奇抜アイディア」 朝の出

「夕食後のひととき」 杉原 虹児・画

「裏切者」 四馬 孝・画

「外国文庫紹介、手袋の囚人」 顔

「椅子に後手しはり外、春日、

「伊吹二嬢名コンビ」 縛り上げるま

「で」 野外撮影、外国雑誌にみるア

「ブノーマル」(女レスリング)フラ

「ンス雑誌より、米国家庭における

「夫の座、春日、伊吹二嬢の悦遊

「戯」お隣のいじめムチを振り上げ

「る」お尻へビシリとー

「緊縛アルバム」くびれ(中富綾子) 膝頭

「夜光島(六)」 吾妻 新

「奇抜写真」寒夜の庭の槍 大庭 高

「残虐なる女性達」 森本愛造・訳

「私のイメージ」手術室 白谷 三

「潮来波」 伊藤晴雨・画

「欲殺先生医学相談欄」 回答者、

「血染の毛綱」 伊藤晴雨・画

「天狗鼻由来記」 緑 比古

「汗について」 みずし まもる

「トウキョウの一夜」 R・G・S

「マゾへの胎動」 三根 耕二

「絵物語」百合子の冒険 村崎明・作

「ア追求め二十年の回顧」 或る読者から

「(口絵解説)火の車」 伊藤晴雨・画

「懸賞入選第二席「陰の花」」 片矢 正

「秋千恵子論」 沼 海矢

「あるマゾヒストの手帖から」 読者通信の

「奇妙な便り」 読者通信の

「腰巻専門の窃盗男捕まる」 春木 俊

「緊縛モデルの素顔」 辻村 正

「マゾヒストの手帖」速報欄 白石 千

「最近の映画から」 鈴木 千

「縛り映画落穂集」 津島 比

「我が愛の記」について 津島 比

「「ヴィナスの重石」」 中津 直

「女性願望の青年の手紙」 二俣 志

「Mへの手紙」第一信 二俣 志

「「残虐なる女性達」画集解説」 森本 愛

「編集者への公開状」 青原 春

「わが半生の記」 青原 春

「幽囚十ヶ月」 依田 義賢

「責めたいアイディア」 堀 八郎

「倒錯の英雄」織田信長 等 置 俊

「縛り絵を描いて」 嶋山 能平

「洗腸マニヤの日記」 花村 恵子

「巨根崇拜」 森太 一

「自腹を切る」 小田 原

「私の体験記」 長瀬 昭子

「倒錯の英雄」織田信長 等 置 俊

「縛り絵を描いて」 嶋山 能平

三月 寄宿舎での体験 緑川 純子

〇二月特大号【百四十円】

口絵 川柳アイディア十題 滝 麗子・画

「縛られた花嫁御寮」 伊藤晴雨・画

「四馬孝傑作集「悦虐の部屋」」 伊藤晴雨・画

「腰巻の女」 伊藤晴雨・画

「新草双紙血染の毛綱」 伊藤晴雨・画

「敗戦日本の悲劇(三題)」 伊藤晴雨・画

「新人責絵集「鉄路」」 外 依田 義賢

「奇抜アイディア選」 杉原 虹児・画

「「嫉妬」」 四馬 孝・画

「外国文庫紹介、風変わりな拘束具」 外

「二葉伊吹真佐子嬢」 緊縛写真「昇

「つまみ」外一葉緊縛フォトのアル

「バム」(「懸念」)中富綾子嬢海老し

「り」(「秋千恵子嬢」)クリップ責め

「川辺砂登子嬢」秋千恵子嬢緊縛表

「情集女性体の荷造り、足枷、春日、

「伊吹名コンビ写真(本誌写真部特

「写)」

「まぞひすちつく・ふおと・せくしよん

「奴隷の誓いと浴室での奉仕、海老

「外国雑誌にみるフェティシズム」

「ストッキングを穿いた足を愛撫す

「る、ハイヒールと半長靴、外

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

「「姑婆来了」」 長谷川 紅次

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

「倒錯趣味は果して背徳か」 成瀬 亮

〇新年特大号【百四十円】

口絵 川柳アイディア十題 滝 麗子・画

「倒錯の英雄」織田信長 等 置 俊

「縛り絵を描いて」 嶋山 能平

「洗腸マニヤの日記」 花村 恵子

「巨根崇拜」 森太 一

「自腹を切る」 小田 原

「私の体験記」 長瀬 昭子

「倒錯の英雄」織田信長 等 置 俊

「縛り絵を描いて」 嶋山 能平

「洗腸マニヤの日記」 花村 恵子

「巨根崇拜」 森太 一

「自腹を切る」 小田 原

「私の体験記」 長瀬 昭子

「倒錯の英雄」織田信長 等 置 俊

「縛り絵を描いて」 嶋山 能平

「洗腸マニヤの日記」 花村 恵子

「巨根崇拜」 森太 一

「自腹を切る」 小田 原

「私の体験記」 長瀬 昭子

「倒錯の英雄」織田信長 等 置 俊

「縛り絵を描いて」 嶋山 能平

写真	残虐なる女性達 画面集 森本愛造解説	滝子画面集 アクロバット、外	新人責絵集、リンチ外 依田精二	地獄交相図(針之山)(火中虫)	(畏怖処)	杉原虹児・画	外国文庫フォト、衣装化した拘束	具、百万ドルのお宝、外国誌に見	た女性の肌着、薄着をまといて	モデル、秋千恵子嬢 縛りフォト	(辻村隆実演) 秋千恵子嬢姿 美	二態、くさりしより、嗜虐フォト	磯(伊吹真佐子嬢) 洗腸(坂口利	子嬢) 春日、伊吹、名コンビ写真	「池畔」於・甘山古戦場	まぞひすちつく・ふおと・せくしよん	女の尻に敷かれる男、女に痛めつ	けられる男、トイレと浴室での奉	仕「踏台」腰掛おみ足を洗せて	頂くおみ足の匂をかきせて頂く	フエチシストのページ	鼻いじめ、おみ足弄見	罪 戒具の図 刑事博物図鑑より	破壊本能の文化的理由 林弓志雄	非小説 性液 伊藤晴雨	「腹部に依る悦び」 兵頭庫一	畸型への愛着 津久井愛造	残虐なる女性達 森本愛造	A感覚の秘密 羽村京子	「遺稿」悪の広場 角田祥子	お灸二題 岩瀬雄二	人工女性會員記 滋賀幸二	「子供山笠」 山口耕二	ソドミの祭壇 三根幸一	草双紙に見る女腹切 川合伊都子	縛られた女優 井上紅次	「質草夜話」 白金正三	あるマゾヒストの手帖から 沼田正三	緊縛に関する十二章 辻村保隆	ラブ・レター 魔像	絵物語「百合子の冒険」 村崎明・作	告白文、体験談の書き方 編集部
----	--------------------	----------------	-----------------	-----------------	-------	--------	-----------------	-----------------	----------------	-----------------	------------------	-----------------	------------------	------------------	-------------	-------------------	-----------------	-----------------	----------------	----------------	------------	------------	-----------------	-----------------	-------------	----------------	--------------	--------------	-------------	---------------	-----------	--------------	-------------	-------------	-----------------	-------------	-------------	-------------------	----------------	-----------	-------------------	-----------------

昭和二十九年	〇十二月特大号「百四十円」	口絵 縛り方教室「責十態」 滝子・画	寒牡丹 伊藤晴雨・画	都築紫子画面集、くの子線線小僧	戯文戯画くすり責め、嗜虐数久	残虐なる女性達画面集 森本愛造・提供・解説	昭和二十九年	〇十二月特大号「百四十円」	口絵 縛り方教室「責十態」 滝子・画	寒牡丹 伊藤晴雨・画	都築紫子画面集、くの子線線小僧	戯文戯画くすり責め、嗜虐数久	残虐なる女性達画面集 森本愛造・提供・解説	昭和二十九年	〇十二月特大号「百四十円」	口絵 縛り方教室「責十態」 滝子・画	寒牡丹 伊藤晴雨・画	都築紫子画面集、くの子線線小僧	戯文戯画くすり責め、嗜虐数久	残虐なる女性達画面集 森本愛造・提供・解説
--------	---------------	--------------------	------------	-----------------	----------------	-----------------------	--------	---------------	--------------------	------------	-----------------	----------------	-----------------------	--------	---------------	--------------------	------------	-----------------	----------------	-----------------------

写真	滝子画面集 新妻遊戯冬姿二態	四馬画面集 新らしい装い―浴室の	遊戯―新人責絵集、処刑台(依	田精二)ワイヤー縛り、ローソク	責め(尾崎實)	畔亭数久画面集 蜘蛛・河童	地獄交相図―集獄地獄―玻璃鏡―	杉原虹児・画	外国文庫フォト マスク・手と足	の緊縛・編上平長靴、春日、伊吹	名コンビ写真(打撃、ひき倒す・	竿でこじる) ゴムマリを用いた野	外縛りの出来上るまで、春日ルミ	川端多恵子嬢「長編洋」くさりを	まどう「秋千恵子嬢「腰巻二題」	まぞひすちつく・ふおと・せくしよん	洗面とアブ・プレイ、お仕置(二)	海老(二) 肩車、春日ルミ	フエチシストのページ	裸をした少年、脱がされる	罪 シヤンス・ダークの処刑	新連載絵物語、百合子の冒険 村崎明・作	続・洗腸マニヤの手記 花村恵美子	妓嬢の女 杜純之助	「柳のプレイ」への誘導 辻村隆	川柳に見るお賄の功罪 須藤新一	夜光島(三) 吾妻冷生	夜中男の教訓 中谷敬人	続・女性切腹断想 田谷紅次	消えたホーセ 白金久恵	縛り(続・羊公刑) 兵頭庫一	悲壮美女性切腹への幻想 原正	現代マゾヒズム芸術時評 春田一郎	幽囚十ヶ月 伊藤晴雨	非小説 性液 羽村京子	洗腸遊戯について 角田祥子	遺稿、悪の広場 岩瀬雄二	欲求先生性愛相談欄 回答者、欲求先生	私の雑感より 中川房夫	女闘美考現 土俵四股平
----	----------------	------------------	----------------	-----------------	---------	---------------	-----------------	--------	-----------------	-----------------	-----------------	------------------	-----------------	-----------------	-----------------	-------------------	------------------	---------------	------------	--------------	---------------	---------------------	------------------	-----------	-----------------	-----------------	-------------	-------------	---------------	-------------	----------------	----------------	------------------	------------	-------------	---------------	--------------	--------------------	-------------	-------------

特集・告白	「女の首」狂案 加佐和天恩	脱衣症患者 青葉楓一	赤い腹巻の女 佐次浩介	私のマゾ・スクラップ 春木俊野	腹への加虐 レスポスの記 大島一	変装写真マニヤ 鈴木三三	炎マニヤ回想 保田三	羞恥責め 赤井茂	洗腸遊戯 大木喬	脱腸帯の回想 森太一	〇十一月特大号「百四十円」	口絵 読者アイデア集 滝子・画	結婚の奇態 伊藤晴雨・画	新人責絵集「暗夜の訪問者」 畔亭数久	一悲しき道化役者 四馬孝・画	滝子画面集(お仕置百態の中) 飛田良二	歩行器―置土座― 飛田良二	絵物語 キャンプの思い出 畔亭数久	組写真 襲撃(野外撮影縛りフォト) 原桐映代	運送写真 さるくつわをかけるまで	極端と矛盾への倒錯 北島利根吉	お灸を据える女達と灸療 岩瀬雄二	草双草に見る女腹切 川合伊都子	残虐なる女性達 森本愛造・訳	気遣いにされた令嬢(二) 飛田良二	栄吉の半生 日本文庫	「倒錯」の考察に反駁する 滋賀雄二	美しい女性の鼻について 北谷英二	美人花 中川房夫	女人花 伊吹真佐子嬢へ 佐田生より	伊吹真佐子嬢へ 升岡金吉	縛られた女優達 森卓志	女性美としての「腕」に就て 沼田正三	あるマゾヒストの手帖から 沼田正三	倒錯の英雄、織田信長 等 濱俊郎・作	愛恋の日に 古川裕子
-------	---------------	------------	-------------	-----------------	------------------	--------------	------------	----------	----------	------------	---------------	-----------------	--------------	--------------------	----------------	---------------------	---------------	-------------------	------------------------	------------------	-----------------	------------------	-----------------	----------------	-------------------	------------	-------------------	------------------	----------	-------------------	--------------	-------------	--------------------	-------------------	--------------------	------------

外国文献フォト、見くし・くさ

りのついた靴 着て、伊吹名三
 ビ写真「緊縛」くさりを纏つた
 女（高瀬忍嬢）ベッドの上に縛ら
 れる・床柱（川端多奈子嬢）
 男性ヌード（笛を拾う男）
 まぞひすちつく・ふおと 踏みつけ・人
 間馬・鞭打ち・さあーどうだ？
 フェチシストの眞 脱がされる（いやい
 や）アクロバット・ダンサー
 罪 馬敬礼・ドイツのグロテスク誌より
 集団心理に現れる倒錯の考察・成瀬
 忘年会奇談 白金・紅次
 浣腸マニヤの手記 花村恵子
 鉾山の少年思春期録 二木 尚雄
 あるマゾヒストの手帖から 沼 正三
 川柳に見るサジズム 清原 文世
 愛は被虐とともに 真木不二夫
 非小説 性液 伊藤 晴雨
 一揆の花 片失 晴雨
 残虐なる女性達 森本愛造・沢口 幸一
 「学童相撲教練」 山口 幸一
 第七天国の夢想家 麻生 和夫
 女關美考現 土俵四段平
 病める花びら 須賀 綴代
 現代マゾヒズム芸術時評 原 忠正
 クリスターフェティシズム 江沼 了
 遺稿三つのシークレット 角 嚙子
 新聞に現れた切腹の種々相 須藤 律夫
 幽囚十ヶ月 春田 一郎
 欲義先生性愛相談欄・回答者、欲義先生
 氣遣いにされた令嬢（一） 飛田 良二
 夜光島（一） 吾妻 新
 倒錯の英雄・織田信長 等置俊郎・作
 統・変の字夜になし 澤家 三
 嚙子抄（妹について） 中川 房夫
 金色七変化（女腹切） 川合 伊都子
 【狂言】内沙汰 沼正三・解説
 裏返しの人感覚 吾妻 新
 性愛警句哲学 北谷 英二
 一被虐の果て」後日譚 細川美也子

写真に就ての二つの意見……中谷冷一	切腹と自害への希求……兵頭庫一	コレクシヨン……佐次浩介	灸点三昧……長谷川清	縛られた八人の女……岸本青柳	あぶのたわこと……幾山疑迷	一フエチシストの見た鼻……春山唯一	鉄窓の青春……三根耕二
-------------------	-----------------	--------------	------------	----------------	---------------	-------------------	-------------

奇譚クラブ・サロン（寄稿家と読者と編集者のペーシ・編集問答・アブ・ラブ・レター・名作のアブ描写・女優の縛られ映画速報・アブ放言集・外）

絵 飛田良二 アイデア集 飛田良二

都峯峯子艶美画集「怪異図」
蒲團子画集「新妻遊戯秋姿」
戲文戲画「舞妓」
女性専門のお灸室（読者投書）
れい子縛り方教室

女性切腹画二題（朝和仁古画）
 繪物語の一場面「悪夢」杉原虹児
 語 彼女をめぐる三人の女畔亭数久
 眞 水際散花（モデル、萩千恵子）
 写真 お姉さまなら、いじめられて

厚狭、村田、中富、川端の諸嬢
 猿ぐつわ遊戯（春日、伊吹両嬢）

口具・新しハ型方婦人靴(外国志)

より）変形後手縛り（伊吹嬢）浴
後（川端嬢）切腹擬態写真、壓倒
と屈伏（春日嬢の得意のポーズ）
男性ヌード【山頂】男性被縛「或
る被虐マニアのポーズ」
まぞひすちつく・ふおと 女王様の日課
（洗面・朝の挨拶・沓脱台・外）

い足と手と・足をよく
硬と曲の幻具……………杉原工児画

藤人間 二侯志津子
 あるマゾヒストの手帖から 沼正三
 初見世バイト 白金紅次
 妖虫記 芳野眞美
 吾妻先生への公開状 羽村京子
 少年の極美に就いて 山口幸一
 非小説 性液 伊藤晴雨
 悲風刺青春談 森本愛造・沢田志
 殘虐なる女性達 森本愛造・沢田志
 続・被虐哀欲 眞金鍛次郎
 雄花の微笑（我れ開われ記） 眞金鍛次郎
 女性の鼻の美 眞金鍛次郎
 たのしきかな時代劇 藤本木仙治
 和装女性緊縛と女装の緊縛 岸本青柳
 夏子抄 桜井京一郎
 草双紙に見る女腹切（一） 川合伊都子
 人生の虹 竹谷十三
 女關美考現 十條四股平
 夕暮の窓辺にて 古川裕子
 給物語 悪夢 杉原虹児
 マリー・マドレーヌ 寒川緑
 被虐の果て 細川美也子
 変の字夜ばなし 浮家鷹三
 鐵術の責め発見 津久井毅
 女腹切、雪模樣鮎川おせん 瀨川泰子
 欲義先生性愛相談欄 回答者、欲義先生
 夜光島（一） 吾妻新
 女相撲音頭 加茂三千彦
 談話欄のマゾの構想 田村実
 モデル女のまぞひすむ 辻村隆
 長靴愛好辭に就いて 天泥盛英
 コレクション 佐次浩介
 女性の腕狂樂について 森卓志
 愛と憎しみの彷徨 三根耕二
 体操教師 青葉模一
 中国女性のサディズム 一丸恵
 浣腸通信に寄せて 羽村京子

耳かきとガラスの棒……角 皓子
私のマゾヒズム断片……河真田子路
九月号【百田】

口絵	図解「相責め」	滝 麗子・画
野分(のわき)	滝麗子画集	伊藤晴雨・画
新妻初秋姿二態	新妻初秋姿二態	伊藤晴雨・画
牧場物語	吾妻新作	数久画
野外縛りの記録	辻村隆・構成	成
お姉様いじめないで	ネ春日ルミ嬢	嬢
後手に締め上げる	春日ルミ嬢	嬢
こうして吊られたら	伊吹・杉嬢	嬢
緊縛アルバム	観念(村田那美子)	後手
しばり(中富綾子)	片足吊り(坂	口利子)
海老しばり(萩千恵子)	ワン公に對す	るお仕置・嘲笑・春日ルミ嬢構成
ヒロポン禍の幻想	杉原虹児画	数久
戯画「どうしよう」	畔亭	数久
文獻……(アメリカ雑誌の一部より)	吾妻	新
私は訴える	村田	誠一
現代文芸に現れた責め	白金	紅次
デパート人形	青葉	模一
機殺願望	篠原	咲恵
赤札囚(続・半公刑)	森本愛造	・詠
残虐なる女性達	春日	ルミ
私という女	松井	蓮子
身を灼く女	沼	正三
あるマゾヒストの手帖から	大島	一
自刃(日本軍人の切腹)	原	忠正
現代マゾヒズム芸術時評	須藤	律夫
隨筆 奇ク隨想	山口	幸一
美少年の秘密(二)	真金鍛次郎	新
被虐哀歌	吾妻	新
感情教育(最終回)	才	昭吾
読者通信から見たアブ種々相	川合伊都子	子
サジズムの女性	伊藤	晴雨
草双紙に見る女腹切	伊藤	晴雨
非小説 性液	伊藤	晴雨
女体美と特に臀部に就て	伊藤	晴雨

懸賞入選作品 第四席 (賞金五千円)

——汗についで——

責　　め　　衣

(せめぎ)

みずしま・まもる

妙子は、夫と共にそう呼んでいる此の「責め衣」で全身を包んだその時から、あらゆる「責」と「凌辱」の期待があるのです。それは灰色の羽二重にゴム引をした生地で妙子自身が夫の指図で作らされたもので、職工の作業衣の様にズボンと上衣が縫がったものでした。只作業衣（見方を変えればこれも作業衣の一種とも云えるが）と違っているのは、着たり脱いだりする割れ目が後ろ側の背中にあること、袖もズボンも、全体が体にぴったりと作られていることです。そして首の廻りと両の手首、それに両の足首とに丈夫なゴム紐

がぬい込まれていて少しの隙間もなく身体を密閉してしまします。更にウエストに同じゴム紐が二廻り縫い込まれて、その「責め衣」に微妙なしわを寄せながら、妙子の豊満な肉体をくびれる程にしめつけるようになっていくのです。

何もかも脱いで、最後の白いパンティーまでも脱がされ「責め衣」のその割れ目から体を滑らせて縫いぐるみを着るようにすっぽりと全身を包んでしまうと、三平の手で背中中のチヤックがズズツと引上げられて首の後ろでピチンと小さな南京錠が下されてしまします。

そうするともはや妙子の手では永久に脱ぐすべもない「責め衣」となってしまうのです。

ヒヤリと冷たいゴムの感触は、妙子の若い熱した肉体をくまなく襲い尽して、灰色のその「責め衣」は異様に、鈍く光るのでした。そして又、尻の丸みと乳房のふくらみが極端に膨脹されて痛ましくも又滑稽な姿でもあったのです。

「どうだい、久し振りの着心地は。」
夫の三平は一本のビールの最後をコップに注ぎ終ると声をかけました。

「——」

妙子は只テラと上目で三平を見るだけが精一杯でした。無上の恥しさに紅潮した面は、夫の前に引き据えられた世にも無惨な自分の姿に、そのあわれさをじっと噛みしめている風でもありました。

ゴム引の「責め衣」をきせられた妙子の手



と足は、三平の好みの風に全く自由を拘束されていたのです。

ゴム紐でしめつけられた悲しくも白い首には、更に光った紙のうってある赤い皮の犬の首輪がはめられて、その首輪から後ろ手にやはり皮の手かせをはめられた白いふくよかな

両の手が、痛々しいばかりに高々と細い銀の鎖でつるされておりました。

そして両脚は、丁度座禪を組んだように、両すねを平行に並べて片方の足首を一方の脚のふくらはぎに、一方の足首を片方の脚のふくらはぎにそれぞれきっちり皮のベルトで二ヶ所を緊縛してありました。従って妙子は普通に座することも出来ず、浅ましいあぐら姿で夫の前に正座していなければならなかったのです。

「どう一杯やる？」

なみなみとコップを満しているビールを取上げると三平は一寸悪戯らそうな笑顔を見せます。妙子は二度ばかり赤ん坊の様にいやいやをしました。辛うじて自由になるのはもはや首から上だけなのです。

「まあいゝだろう、大丈夫だよ。」

三平は妙子のわきにより添うと上体を横から抱く様にし、左手で髪のを掴むと右手のコップを受け口の唇に押しつけました。

冷いほろ苦い液体がすっと乾いた舌を刺戟します。中世紀の宗教裁判のように、妙子は眼をしっかりとつむるともはや観念してしまいました。ゴクッゴクッと三口ばかり喉を過ぎると、三平はコップを唇から離して一息入れ

させてくれます。

「あゝ」

「責め衣」の上を奇妙に縛り上げられた妙子の口元からつぶやきが漏れました。

コップのビールが空になるのを見届けて、

三平はていねいに妙子の口元をタオルで拭いてやりま
す。妙子は赤ん坊の様に全
てを夫に委せてしまいました
た。夫の体が「責め衣」を
通して触れている、背中の
方から、脇の下から、だら
だらと汗が吹き出て流れる
のを感じました。そうする
とゴム布は、まるで冷たい
生き物のようにペタペタと
全身に吸いつき始めるので
す。それは全身に蛭を吸い
つけたような嫌らしさでも
あり、又愉しさでもありま
した。

ビールを飲むといつもの
癖で、三平はその場に横に
なると眠ってしまいます。



手足の自由が許されて、その間にお勝手の始
末と、寢室の準備をしなければなりませんで
した。

此の頃になると「責め衣」の内側はすでに
すっかり汗でビチョビチョに濡れ切っていま

います。もはやゴム布は膚に吸い付くのをや
めてヌラヌラと皮膚を滑っていました。「責
め衣」の外にあるわずかの部分である顔を、
今や妙子は必死に手の甲でこすります。然し
こすってもこすっても汗は眼から額から頬か

らだらだと噴き出して流
れ落ちました。ポタポタと
たれ落ちて後から後から床
を濡らしました。

三平は此の妙子の汗を愛
しました。その匂いがたま
らなく好きでした。甘酢っ
ぱいその香りは如何なる香
水、香油にもまさるものと
考えていました。確かに妙
子の汗は他の人達とちがっ
た特有の香気を秘めておっ
たようです。そして一方又
その匂いは健康な三平の肉
体を一種の興奮に引きずり
込まずにはおかぬ力を持
ってましたのです。

一時のうたたねの眼を覚
した三平は、敷きのべられ
た寢床の上で妙子を抱きか

かえました。グチャグチャとゴム引の「責め衣」の中で汗が音を立てます。三平は唇を妙子の唇に重ねます。ぬらぬらと口辺の汗が三平の唇をぬらしました。そのまま二人は夜のしじまに溶けてゆくようでした。

「もっとよく、強く抱いて。」

妙子はあえぐ様に云います。三平は力強く妙子を抱きしめるとその両の乳房を自分の厚い胸におしつけました。「責め衣」を通して触れて来る乳房はスポンジの様に跳ね揺れて三平の胸毛をくすぐりました。三平の腕でゆるめられてはしめつけられる妙子の肉体は、汗で濡れた「責め衣」のゴムの中でキュッキュツと音を立て、躍動しました。

三平の唇は今度は妙子の首筋から、耳たばから、頬から、顔中くまなく、その吹き出る汗を吸い取るように這い廻ります。妙子は三平の膝の上で赤ん坊のように両脚をばたばたさせました。バサバサと、「責め衣」がゴム引特有の音を立てました。

「もう脱いじやいけない?」

「まだまだこれからだよ。」

「だって御不浄ゆきたいのよ、もう二時間も前から我慢してるの。」

「もう少しの辛抱だ。」

三平には新しい計画がありました。「じや一寸の間、脱がして。御不浄ゆく間だけ。」

ほんとうに妙子にはもう我慢が出来なくなっていました。少しでも緊張をゆるめると、その度に、ジャツと漏れそうになって、慌てて、手で押えました。

然し三平は妙子の申入れを許そうとはしませんでした。そればかりでなく最初の様に、又しても犬の首輪と皮の手錠とで妙子を高手小手にしめ上げて両手の自由を奪ってしまうと、そのまま布団の上に仰むけにねかしてしまいます。そして茶の間の方から厚さ八寸の碁盤（三平は素人初段でありました）を運んで来ると、裏返しにして妙子の足下に置きましました。皮のベルトで妙子の足首を一本ずつ、たんねんに碁盤の足に縛りつけてしまいました。灰色の「責め衣」からわずかに顔を出しているふくらと白い足首は、喰い込む様にゴム紐でしめつけられ、更にその上を細いなめし皮でピッタリとはめられて、これからの「責め」の期待と怖れで、その固定された足先はピクピクと幽かに戦えます。それとも、もう全く限度を通り越した尿意がその固定された足先に伝って来ているのでしょうか。

三平の手には未だ使用されていない油絵の絵筆が握られています。その絵筆は碁盤の足にくくりつけられた妙子の足の裏を静かに撫で始めるのでした。

「あッあッあッアッアッ」

「責め衣」の妙子の体は悲鳴と共にのたうち廻り始めました。膝から下は動かす術もなく、太股が、腰が、腹が、盛り上った胸が、その灰色のゴム引「責め衣」でしめつけられている妙子の肉体が、まるで波の様に上下にうねります。

「アッアッ」

もがく度に全身を余す所なくしめつけているゴムが汗の膜を通してぬるぬると皮膚を摩擦しました。

三平は手を休めるとじっと妙子の全身を見守りました。赤い犬の首輪は首を痛々しくしめつけて。真赤に充血した顔は水から上ったようにびっしりと汗で覆われています。

ハッ　ハッ　妙子の吐く熱い息は胸から肩の大きな動きと一緒に無惨な音を立てました。

「やめないで、続けて、続けて」

しっかりと両の眼をつむって妙子は切なく小さく、然し性急に三平を促します。



「あーッあッアーッ」
「ね、止めないで、続けてッアーッ」

を濡しました。

「あッ出るわ、出る、おしっこ、もう、あ

「あッあーッあッア
ッ」

「もっと、もっと、ア
ーッアーッ」

とぎれとぎれに妙子
の小さな叫びがのたう
ち廻る全身から発せら
れます。

妙子の叫び、「責め
衣」のすれ合う音、吹
き出る汗の臭、ゴム引
布の臭気。三平の官能
のうずきは頂点に達し
ました。

妙子はもはや泣き出
してしまった様です。
休むことなく上下左右
にくねり廻っている妙
子の肉体は「責め衣」
にしめつけられた全身
が鳴咽にむせびまし
た。あふれる涙が汗と
共にハラハラとシーッ

ーッ」

ジョーッと意外に大きな音が「責め衣」の
中間に聞えました。ジョッ、ジョーッとその
音はとぎれては又長く異様な響を伝えます。
腰から上をねじ曲げて面を伏せた妙子の体は
もはや力尽きたものの様に動かなくなりまし
た。首輪から両手を吊った銀の鎖がチカチカ
と痛ましく光っていました。

「ああ」

小さなため息をもらすと、妙子は静かに顔
を起します。恍惚としたには笑みが、此の世
の人とも見えす美しく上気したその面を包み
ました。

嗚呼、とそのバラの様な唇からもう一度た
め息をもらすと妙子は夫の三平に微笑みかけ
ます。三平は筆を捨てて豊かな妙子の頬に唇
を近寄せたのでありました。

時計は十一時を打ったようです。外は時雨
が降り始めた様でパラパラと軒を打つ雨音
が、秋を告げて鳴き止まぬ虫の声と共に此の
二人の寝室に忍び込んで来ていました。

(未完)

責 絵 の 回 想 (第二回)

依 田 精 二 文並絵

私の責絵への執着は、それからもずっと続き丁度私が徴兵検査の翌年五月に、セーラー服姿の海兵として入団する時まで、気の向くまゝに絵筆を走らせ、初歩的な画を描きまくって満足していました。

入団してからは、ラッパと共に明け暮れる海軍生活の毎日は、目まぐるしく、とても其の中から自分の姿を見出す余裕とでもなくしたがって私の脳裡からは責絵に感じたあの魅力は、すっかり影をひそめてしまい、軍務に専心する日が続きました。

ところが、だん／＼と等級も進み、海軍生活の中にも若干の余裕を見出すことが出来るようになり其の上配置の関係で一人になる機会が多くなるようになると、すっかり影をひそめてしまったかの様に見えた責絵への執着は更に強くその鎌首を持ち上げて来ました。

そして、上陸の際に手頃なスケッチブックを買求めると、軍務の余暇に人目を避けながら、又画き続けたのです。

それは味気ない生活の中に、一種の光明に似たものを私に与えて呉れました。そして此の頃の絵は、単なる「女の縛り絵」即ち「女性から自由を奪う拘束の場面」だけで一種の興奮を覚えた、入団以前頃のものでは到底満



挿 画 (1) 梁 の 女

足が出来ず、(第一回到記載)現実の罰と言うものと「縛りの拘束」との二つの要素を交錯させたものを多く画きました。

この事は、敵機の空襲下に高角砲の引金を引いて応戦した時のスリルや、遙かにかすむ水平線の敵艦へ奇襲作戦を行った時の緊張感、又は激しい訓練や、毎夜の如く行われる私的制裁……などの体験が心を大人にさせ、夢多い青春からリアルな現実へと変化したものかも知れません。

ですから、この頃の画は、責絵を階段にたとえるならば、二段目に属していたといっているかも知れないのです。

次に当時の作品の一部を掲げて見ます。

——梁の女——

数人の手で、女はブラウスもスカウトも無理矢理にはがされて、白い弾力のある裸身の上にキツチリと肌に喰い込むようなコルセット姿のまゝ床の上に転がされた。そして必死にあがく上半身を両腕と一緒に太いロープで



挿 画 (2) 水 浸 し の ロ ー プ

ぐるぐると巻かれ、そのロープの一端を梁にかけられてグイグイと吊り上げられてしまった。

全身の重みで縄目が肌に喰いこみ、圧迫される胸―苦痛にゆがむ女体―それでも、さすがに羞恥の心は本能的に両腿をキュツと固く合わせていた。「おい、そいつも取れ!」とコルセットの腰から下がビリビリと破りとられると、ゆったりと横に張った腰の豊かさが男達の眼の前に大きく浮んだ。「ヨ―シ、い

いか」その背後から、風を切って三尺余りの棒が女の二つの盛り上った丘陵の上に炸裂する。みるみるその肌は赤く充血し幾筋もの蚯蚓脹れが膨れ上る。身をかわすにもかかわされない苦痛に「ヒエーッ」と、棒のあたる度に、声にならない声を張り上げて、グツと身体を反けぞらせる女――。

(之は、海軍生活の中で自ら体験した鍛棒から取材したもので、新兵が罰を受ける時に両腕を上挙げ、両足を少し開き、上体を前に傾けた姿勢で、その臀部に丁度野球のバット位の長さの棒で先任者から力一杯に叩かれ罰を受けたものです。これは、そこが痛いと言うより、熱いと言った感じの方が強く、その後、其処がみみず腫れからアザとなって、一週間近くもその跡が消えないものです。そして之を十数本も受ける時など……未だ年若い志願兵の中には、痛さに耐え兼ねて思わず崩れるように其の場に膝をつくこ

とがあります。ですから特別の場合に数多い鍛棒を背負わされる時は、前記の如く、上半身をグルグルとロープで巻かれ、それをハンモック用の鉤に吊られて、失神する迄叩かれたのでした。

——水浸しのロープ——

頑丈な倉庫の中は薄暗かった。「此処へ来るんだ」女は裾にレースの刺繍のある令嬢風のシュミーズ姿で、両手を両方から取られたままヨロヨロと引かれて来た。そして梁から下げられた麻縄で両腕を高く、くくられて、又グーッと引き上げられた。「アアッ」引き上がるその肉体の重みが両手に加わって痛さに女の肉体は、大きく左右に揺れる様にもがいた。そして肢を伸びるだけ伸ばしてその爪先で辛うじて立つと、両手首の麻縄が肌に喰い込む痛さから少しでも、逃れようと努力して居る。「さあ行くぞ」——その声と一緒に水に浸された、ロープの先が、ピシッと音を立て、薄いシュミーズの上から肉体にまき



責 上 の 氷 (3) 挿 画

の如く、皮膚の一面にしか当らない痛さよりは、遙かに度が強いものでした。」

——氷上の責——

柱の前に、若い三人の女が引きずられる様に連れられてこられると、その柱に鎖でつながれた。丁度、腰位の高さにある金属製の手錠を、セーターのまゝ両手を後に振じられて、両手首を合わされる様にされると、カチツカチツとかけられてしまった。「おい逃げられるといけない。こいつをはめて置け」男の手からガチャリと冷たい音を立て、投げ出された鉄製の足枷が今度は女のスキリと伸びた両脚のズボンを二折り三折りめくられて、素足の上から両足を揃える様にされてかけられた。女は、無残に乱れた髪の毛の下で臉をじっと閉じて、グッタリと今にも崩れ落ちそうに、一面に凍りついた雪の上を素足のまゝで立っていた。

(東北地方の冬の夜などに、降り止んだ雪の表面がコチコチに固く凍りついた事を覚えていますが、私も砲台勤務当時の或る夜に、上

官から、氷の様になった雪の上で、素足のまゝ起たされ、十五分以上もお説教を聞かされた事がありました。この時は、足の裏が冷たさを通り越して痛さを感じましたが、心の緊張のためか、さ程苦痛はなかった様に覚えてあります。この種の責絵では、他に形を変えたもので、捕手の拷問に合った娘が、着衣の縄付姿で氷の屋外に転がされたもの——とか、衣服をはがされ、一条まといめ全裸の美女がその白い肉体を後手に両足とも一つに結ばれて、氷上に苦しむ様のもので描きました。

——水責め——

「よーし、言わない気だな！　じや言わなきゃいけないようにしてやろう。此方へ来るんだ」

女は倉庫の中から下着一枚の姿で、数人の男達に、道一つを隔てた岸壁から、更に水の上へ突き出た桟橋の上へ連れ出された。パツと眼一杯の青い水が拡がって映つる。広い海その海の水がヒタヒタと音を立て、足下に揺れている。「覚悟は良いんだナ」……女は固く口を閉じたまま無言で男達をにらみ返していた。「よーし、やっちまえ」——女の抵抗は到底ものの比ではなかった。必死にもがく身体を、其場に仰向けに倒され、馬乗りを押

えつけられて、他の男から両足に太いロープで足首の方から腿の上までグルグルと両股を揃えられて、縛り上げられてしまっ



挿 画 (4) 水 責 め

た。そして、更に別の麻縄で、足の自由を奪われて芋虫のように転がされた女体の上半身にも、胸からお腹の上へと、ギリギリとまかれ、背のところで、両方の縄を一緒にして大きく結ばれた。女は、もう声も立てずに彼等のなすがまゝに身をまかして縛り上げられてしまったのだ。

「さあ、これで下へ吊り下げるんだ」更にロープが背中のキツチリと肌に喰い込んだ縄目の間に二、三本に通されて結ばれた。女の顔に恐怖に似た感情が走っている。ゴロゴロと

二、三回桟橋の上を転がされた、女の体は一瞬、水しぶきと共に海中に落ちた。それと共にスルスルと、女の体に結ばれた長いロープもはねるように延びる。

(之は、昔海賊船などが、劫掠して来た女達が、自分達の意に従わないようなものを、錨とか、碇綱で縛って、海中に沈め、又引上げ又沈めると言うように、苦しみを与えたことなどの責め方に相通するものでありますが、私も海軍の水泳練習の時、アップアップと水を呑み、腹に縛った綱で引っ張り上げられた

り、又下されたりした経験があります。この水を呑むと言うより、空気の代りに吸い込んだ時の苦痛は言語に絶するものがあります。

——うつつ責め——

女は、ピッタリと豊かな臀部を床につけた形で柱を背に、ブラジャーとパンツ一つの姿で首、それからフックリとした胸のふくらみ



挿 画 (5) う つ つ 責

柔かい白い腹等を、身体をよじらすことも出来ない位に麻縄でしばられていた。そして前に合わされて一緒に縛られた両腕には、もう一本の縄がピンと張られて、女の手を前方に引張っていた。引くことも、横にも動かさない両手は、つかれて来ると、自然の形で、下がり気味に、垂れ下った。ビ、熱い震動が

血の流れを逆流させたかの如く、全身がケイレンし一瞬、眼の先が真暗になって行った。電線が彼女の垂れた手に触れたのだ。横に投げ出された足先の鉄枷と、この線とに電気がかけられていたのである。

「アッ助けて」女は咄嗟に両手を上にあげて線から離れた。暫らくの間でも、あの心臓が止まるようなシヨックを避けて、歯を喰いしばって、両手を真直ぐに延ばして、疲れに對抗して頑張る姿は哀れである。

(人間の心臓に、何ミリアンペアかの電流が通じると死に到るものであるが、之以下であれば一種の苦痛を与える責に使用出来ないこともないと思った。しかし、シヨックによる生命の危険もあり、この方法は知識のないものには、禁物でしょう。私が、矢張り海兵の当時に、電気にかゝった事を覚えていますが、その時は、全神経が麻痺してしまったのか、人を呼ぶことも、体を動かすことも出来ずに只全身にブルブルと電気の流れるのを感じたままでした。)

【読者通信】奇譚クラブにはいつも感激している者ですが二十八年の十一月号からずっと読んでいます。それというのはマゾヒストの事が書いてあるからです。最近には春日様の出演で、益々我々マゾヒストを喜ばせています。今度のもっと強烈なマゾヒストの事やら写真をのせて下さい。お願いします。三月号を読んだら伝言板に出演希望で全身を撮影されても構わない方は申込んで下さいと書いてありました。僕はこれを読んで本当にうれしく思いました。僕は強烈なマゾヒストです。両手両足を強く縛って人相が変わるまで叩くやら蹴るやらしてほしいのです。僕は手ぬるい事は嫌いです。春日様、どうぞお願いします。(福井 K・Y生)

——お天狗松、昔噺——

「木曾の野^の封^{だい}間^こ」

緑 猛 比 古

三 条 春 彦・画

——兄貴、久し振りだなあ、もう湯島天神の白梅が、そろ／＼
綻ろびかけたと云うじやないか。そう云や、先達ってこの松吉の、
天狗鼻の由来をお聞かせ申してから、はや一と月近くにもなるわけ
だ。

有難うよ、それじや兄貴——。お言葉に甘えて一杯御馳走になり
乍ら、この前の続きでも喋べるとしようか——。

いかさま賽でトチツて、散々な眼にあつてから、あっしは江戸の
土地が厭になつて、気分を変える気で旅に出た。

中仙道を西へ／＼と足の向く儘、氣のむく儘に、洗馬、奈良井、
藪原と、泊りどまりの宿場で、相も交らぬケチな商売で路金を繋ぎ
乍ら、木曾路に足を踏み入れて、寝覚の床の上松についたのが申の

刻に近かった。

右に御岳、左に駒ヶ岳を眺めて、木曾川の激しい流れが、あっし
につかず離れず白い沫をあげて躍る木曾谷界限。かねて噂にきいて
いた中筋の弥六親分の許に草鞋を脱いで、一宿一飯の世話になつた
が、丁度その宵は、木曾御嶽神社の御祭礼の宵祭だった。弥六親分
の縄張りでも、派手な鉄火場の開帳があつて、勿論あっしもこの
道、覗いたと思ひなせえ。木曾材を一手に送り出す大問屋、兼半の
旦那が、綺麗どころや幫間まで引き連れての、賑々しい御入来だ。
何しろ土地柄の荒っぽい処で、お上のお取締りも上っ面だけのもの
ときているところへ今夜のこの祭りだ。まるっきりお目こぼしで、
障子をすっかり明けはなして大っぴらでの丁半だ。

素人衆や祭りの鴨が多くて、あっしも大層に目がついてトントントンと勝ち進んだ。

兼平の旦那は大分負けがコンだが、そこは太ッ腹らしく、さして顔色も交えず笑って立上ったはいが、盆の半ばからヒヨイと手を出した、お附きの幫間の狸狂って半間な野郎が、よせばいいのに虎の子の財布の口を開いて、眼の色を変えてのって来た。なんでも元は、可成りの旦那であったのが、好きがもとでのバクチに凝りに凝って、すっかり身上をすった挙句、今の稼業に落ちぶれたとの事だが、こうなってもバクチだけは止められねえと見えて、始めのうちは膝をさすって辛抱していたのが、いつしか旦那そっちのけで、片肌脱いで派手な縮緬縹緋の、袖を肩までまくり上げての力瘤の入れ様だ。

旦那も苦笑して、

「狸狂、いい加減によしな。相手は玄人さんだ。下手に深入りすれば素ッ裸にされちまうぜ——」

と、忠言するのも聞かばこそ、

「へへへ、旦那、拙も伊達に身代すったんじや御座んせん。それに今夜は、年に一度の御嶽さんでがす。一つお目こぼしに預かって、一晩だけ気儘に遊ばせておくんなさいまし」

もうこうなっちゃ、旦那もくそもねえんだな。酉の下刻頃まで血眼になって争ったが、とどのつまり案の定、スツテンテンのお手上げさ——。

「ようし、こうなりや狸狂一生一代、この身体をはった！百両でどうだ——」

「なんだと、この頓間野郎、てめえの体が百両じや、勝ったところ

で漬物の重しにもなりやしねえ。悪いこたあ云わねえから、やめとけやめとけ」

盆の若いのが横からそう云ったが、カーツと血の上った奴さんの耳にはテンで入りっこねえ。

「さあ、百両でどうだ。やらないか哥兄さん、頼む。男一匹が百両だ。万一負けた時にや、命をとられたって文句を云うもんじやねえ。誰かハルものはねえのか——」

と、えらい啖呵——。あっしは氣の毒にも思ったが、チョイト面白くなったね。フト思いつくことがあって、よしッ、こいつを相手に一番派手に渡り合ってやろうと考えた。

「よしッ、お手前さんとの盆、あっしがやろう。幸い今夜は目がついて、勝ち抜いて出来た金が丁度ここに百両ある。一番勝負と行こう。お手前さんが勝てば、眼の前の山はそっくり黙って持って行けばいいが、万一あっしが勝ったその時は、文句は云わずに体はくれるんだな——」

「くどいね哥兄さん。一度云い出したら、たいこ持ちでも男は男、ズタズタに贈にされたって笑っているよ。さあ……」

よせばいいのに、と云った盆莫座の視線を一齊にうけて、あっしは今夜勝ち続けの目の丁に迷わずはった。

素ッ裸にされた狸狂は、赤禪一本の白い体をぶるぶる震わせて半にはった。

白けて凍りついた様な一座の者の目つきの中で、ガラガラと壺振りの賽がなって、

「はいッ！やーッ」

ぱっと壺をあけると、これが丁——



春彦

素裸の上から着古した借着の半纏一枚羽織って、しよげてあっしについてくる狸狂が、遂にあっしに媚びるような口振りで、

「哥兄さん、今夜の事は悪い虫がさせた仕業と、腹をさすって勘弁しては戴けないでげしうか。拙にも女房もあり子供もあるんでやして、今夜という今夜、はっきり眼がさめやした。今後は金輪際バクテはやらねえから、何分こんどの処お目こぼしを……」

いかさま、こいつは泣きの一手だ。

「ちえッ、莫迦にするな。大枚百両をかけての丁半がそう易々と勘弁出来るかい。この俺が負けた時にや、まさかてめえ、その金を返せと云ったって返しやしねえだろう。泣言を云わずに黙ってついてくるんだ」

あっしは何も狸狂の命なんぞ欲しいとは毛程思いもなかった。行きずりの仇も恨みもねえ坊主一匹絞め殺して見たって始まらねえ。唯、この頓間な野だいこを、旅のつれづれの玩具に、散々騒って見てえと思っただけで、別におもわくはなかったんだ。

土地の色街も、今宵は祭り気分で馬鹿陽気に浮立っていたね。

「おいッ、俺らはこれからパツと派手に女を挙げて遊ぶんだが、今の処てめえは俺らに買われた体だ。もともと野だいこが商売だから、多少の無理はハイ左様でと我慢もするだろうが、今夜はこのおいらが、どんな

無理を云ったって、云いつけに背くんじゃねえぞ。わかったな。俺らが気のすむ迄てめえを慰さんで、黷んで、飽いたところで百兩は勘弁して放免してやらあな。いいか——」

狸狂の奴は情ない顔で、無言の儘頷ずきやがった。

さあ面白いぞ——。あっしはあれこれと、妙チキリンな遊び方を胸算用して、色街でも一流どころの、ひづめ屋と云うのに登楼って早速に妓を四人程呼んだ。

「あら狸狂さん一体如何して？ お祭りだって云うのに……」

顔馴染らしく、顔を揃えた妓達は呆れた様に、狸狂とあっしの顔を見較べていた。

「おい、狸狂——、半纏を脱いで背中を妓共に見せてやれ」

くすばった面で背を向けた奴さんの、首筋から尻股にかけてあっしは、

——したい放題、あっしは畜生です——

と書いておいたんだ。

「どうだいみんな、今夜はこの狸狂を、祭の酒の肴にして、したい放題で遊ぼうじゃねえか。目先の変わった趣向を考えついた妓には、あっしが一兩ずつ褒美を出すでしょう。こいつには百兩って大金がかかっているんだ。相手を畜生だと思って、何も遠慮することあねえから、さあ始めた始めた」

それからあっしは、掻いつまんで話のあらましを妓共にした後、狸狂の奴を座敷のド最中へ突っ立たせた。赤禪一本きりで青々した坊主頭の狸狂の姿に、四人の妓、小さん、花奴、メ吉、とんぼは眼と眼を見合せ、ひそひそと笑い合っていたが、ガラガラ声ですれっからしらしい年増の花奴が、一兩の餌につられたのか、それともこ

の狸狂を黷るのに興味を抱いたのか、勇敢に初名乗をあげて口を切ったね

「それじゃ旦那の折角の御親切だから、妾が皮切りをやるとしますわよ。いつもいつも男に虐められ通しの弱い稼業だから、一度ぐらいうんと男を虐めて見たいとかねがね思っていた処なんだ。丁度いいよ、狸狂さん。お前さん畜生なんだそうだから、一ぺん妾の馬になつておくれよ。この座敷中をヒヒーンと啼いて、妾を乗せて五回堂々廻りをするのさ。ねえ旦那いいでしょう。ホラ、旦那の御命令だよ。なれッ、なれッって云うのに——」

狸狂の奴、泣き出しそうな顔であっしの顔を見ていたが、駄目だと観念したのか、淡々その場に四ツ這いになった。花奴は扱帯を解くと奴の首に巻きつけ、それを口にかませて両端を握り、恥かしげもなく、さっと裾をたくし上げて、狸狂の素肌の背に打乗ると

——ハイハイ、坂はてるてる……——と、喉に青筋を立てて唄い出した。ハイハイと云う処でビシャビシャ奴の尻っぱたを棒切れでひっぱたいて、ヨクヨクする狸狂を手綱で調子をとり乍ら座敷を一廻りした。

「馬に尻尾がなくちや可怪しいよ」

花奴は、若いとんぼに塵払いの古いのを持ってこさせると、そいつをいきなり奴の尻にさしこんだものだ。股間に塵払いをくっつけて、ビシャビシャ尻を叩かれ乍ら、狸狂は残る四回を時にはヒヒーンといななかされて廻り終った。調子にのった花奴は腰で尻をとり、腰を浮かせたり振ったりして、あっしの目を愉しませて呉れた。「さあ、御褒美だ。これをお喰べ」花奴はいつ用意したのか、太い人參を奴の口にくわえさせ、ガリガリと噛ませて喜んでいた。流石

に草臥れたか、肩で息をし乍ら、花奴は、あっしの差出した一両を、多少照れ臭げに、わざと恭々しく受取った。

見ていた妓達は、それに刺激されたんだろうが、待ち兼ねた様に続いてメ吉が奴に馬になれと云った。

「駄目だ。一度やった趣向を真似たんじや興がねえ。一人々々変ったのをやろうじやねえか——」

あっしはその時フト、ちらし紅葉のお吟の事を思い浮べ、女の心の内に潜む、嗜虐のどきついものを求めていたんだね。

「それじや鬼くくらしよう。狸狂さん、眼隠しして、誰でもいいから掴まえたら赦してやるよ。でも唯の眼隠しじや解かぬとも限らないから、これで両手を縛っておくからね。体で掴まえるんだよ」

メ吉は下紐をとくと、狸狂を後手に縛り眼かくしした上、ボンと座敷の中央に突きやった。

「よし、そいつを棒切れで引っぱたくんだ。遠慮会釈はいらねえぞ——」

あっしも一枚加わって、妓共と一緒に声を嘶しては、あちらからピシリ、こちらからピシリと殴った。

——鬼さん、こちら……——と妓の声に、奴はうろろと座敷の中央を右に左によろめいては百叩きの様に、なぐられ続けていた。妓達の悪戯は段々に非道くなって、果ては腋をくすぐったり、股の附根をついたり、赤禪の合間に物差しをさしこんでくじったり、足を搔っ払ってひっくり返したりした。引っ張られて外れた越中の赤禪が、尻っぺたでフラフラ風にゆれていても、誰一人直してやらなかった。奴は全身を汗にしてフラフラになっていたが、こいつは何時まで経っても掴まりっこありやしない。

赤彦



「もうよからう。奴はその儘でいいから、次の番だ——」

妓共はピタリとやめ、小さんが多少恥らい顔であっしに云った。

「旦那、あたしや狸狂さんに猿廻しの猿になって貰おうと思うんですけれど……」

「フンそいつはおもしれえだろう。太夫が小さんで、猿が奴ときまれば、他の連中はお喃子をやるんだ」

狸狂の奴は、早速、弁柄で猿の顔に限取られ、赤禪の腰に一本の引縄をつけた姿で合図と共に猿芝居よろしく躍り出した。幫間だからこいつは芸のうちだろうか良く出来ている。奴が進んでやった猿の発情期だと云う腰の振り様、雌猿にさかる仕ぐさが滅法面白くて、あっしも妓一同もゲラゲラと笑い通しだった。その後がもう無茶苦茶だった。あっしの許したのをいいことに、調子に乗った妓達は、段々と露骨になって、あっしの目の前もいつしか平気で、日頃男に圧迫された反感も手伝ってか、いじめるわく——。

やっと一人前になった許りのとんぼと云う女までが同じように一緒になって、奴の鼻から酒を注ぐ、坊主頭にあやしげな墨絵を書いてピシヤピシヤ叩

く、両手足を縛って前後から、のしかになる程綱引きをする。三味線に合わせて、奴の腹を太鼓代りに撥でたたき、いやもう落花狼藉とはこの事だろう。これが一枚皮をぬいだ女の、赤裸々な嗜虐の群衆心理と云う奴なんだろうか——。



誰が云い出したのか、最後に狸狂を床の間の柱に身動きの出来ぬ様縛りつけて、その臍を中心に墨でくろくろと五重丸を書き、表通りの揚弓場の小さな弓を借りて来て、矢尻に綿を巻きつけた奴で、二間程離れたところから、臍を射的のまゝにして射ち始めた。

相当酔いの廻った妓共の手許は、故意にそこを狙うのか、殆んどが臍から下へ下へと矢が流れ、その都度狸狂の奴は、赤褌の外れた個所に当る痛さに、腰をくねらせて悶えていた。

わあわあ云う派手な騒ぎに、襖や唐紙、障子の隙間から、幾十となく視線が覗いていた。

「見たい奴は這入ってこい——」

と、あっしの怒鳴った声に、遠慮しいしい、祭りの遊客や相方の妓が、尻込みし乍ら一人二人と這入って来たが、衆をたのんで見る見る部屋は一杯につきまり、中に物好きな奴は、弓を借りて、狸狂の臍をねらう始末だった。

狸狂の奴は最早心身共の苦痛に耐えかねたのか、まるで死んだ様にぐったりと坊主頭を垂れて、成すが儘に縛りつけられて、うんともすんとも云わなくなっていた。

あっしも流石に少しは可愛想になって来たんだね。

「よし、今夜はこれでお仕舞だ。皆な帰れ帰れ」

と一同を追っ払って奴の縄を解いてやった。もう許してやってもいいがと考えていた矢先、狸狂の奴が

「旦那、もうこれだけ虐めりゃ沢山でがしよう。いくら人前に恥を曝す商売でもチトあんまりだ。これで勘弁しておくんなさい。」とぬかしやがったから、カチンと来た。

「なんだと冗談じゃねえ。斬りさいなまれても笑っていると、大き

な唖呵で、生半可なバクチを打ったのはどこのどいつだったっけ」あっしは一言の許にボンと蹴ったが、幾分は先刻の遊びで飽きが来ていた事は事実だ。

百両のかたをこの儘おめおめ帰すのが、何だか惜しい様なそれだけの気持に惹かれて、ここでもう一ふんばり何か変ったことをやらかすか、胸のすく程奴を虐めたあとで放免してやる腹だった。

ひづめ屋を出てからも、そろ／＼ついてくる弥次馬をやっと追っ払ったが、奴を連れてのこ／＼弥六親分の処へ帰るのも気がさしたから、上松宿の街道外れ、寢覚めの床の古ぼけた木賃宿へと一旦落付いた。

夜も更けて祭囃子も遠く、予の刻に近かった。妙な顔をする木賃宿の亭主にはお構いなく、人気のない物置を借りて狸狂をそこへ引き入れた。縛るのにお誂らえ向きの、荷馬の太縄や荒縄が山と積んである。

あっしはものも云わず、狸狂をそれで雁字搦目にふん縛って土間に転がした。

「おい、妙な奴だと思うだろう。ところがおいらは江戸は下谷の車坂の賭場で、口にも云えねえ非道い目に逢わされて来たんだ。これがその名残りだ、よく見ておけ——」

とあっしは鈍い裸ローソクを手許に引きよせると、狸狂の眼前に、バツと前をまくって天狗鼻を拝ませてやった。

「江戸の仇を長崎で討つ程の腹でもねえが、相手は誰奴だっているんだ。おいらがやられた様な事を、相手にして、もや／＼したこの胸のつかえを下したかったのさ。三日三晩、縛られ通しの虐められ通しの責折檻だったよ。こいつが百両のかたの裏話さ——」

あっしはそこで綿々と、ちらし紅葉のお吟に責められた模様を話してやった。ところが人間には相性って云うか、奇妙に話が合う事があるもんだな。狸狂の奴はまじく／＼とあっしの顔を見凝めてこう云いやがるんだ。

「羨やましい様な話ですよ旦那。わたしやいつかは一度、その様に思うさま縛られて、虐められ責められて見たいと思っていたんですよ。好きでなつた幫間ではないが、毎夜々々人に莫迦にされて暮して来たわたしにや、いつの頃からか、人に踏みつけられ、虐められてもヘラ／＼と笑って通る様な人間になり果てましたんで……。あせいと云われりやヘイ。こうしろと云われりやヘイという、幫間の弱さが、いつしか天性になって、反って強い男に無理を云われ、恥かしい事を人前でやらされりや、それが嬉しくなると云った変テコな性分に変り果てましたんでさあ。一層の事、思いきりわたしを虐めてくれたらどんなに嬉しいだろうって、そんな事をいつも／＼考えるうち、時には女房にも知れぬ様、夜中独りで手足を縛って転がって見たり、己れで己れの首に縄を巻きつけて締め上げ、苦しみにのたうち乍ら悦んだり……。それが旦那、今この人気のないところでものも云わずあたしを縛ってひん転がしてくれました時、旦那こそわたしの願っていた夢を叶えてくれる方だと、実はわく／＼する程嬉しくなりやした。先刻も妓共に散々痛めつけられ乍ら、こんなふざけ半分じやなしに、一層思い切って身動きの出来ねえ程海老責めにでもふん縛られて、ヒイ／＼泣く程に虐めて／＼責め倒されりや、どんなに満足するだろうと思っただかしれやしません。わたしや逃げずに何処迄もついて来たのも、いつかは旦那が気の済む程虐めなさるだろうと思っただからだ。責め殺されたって毛頭恨みつらみ

はしねえ、旦那、責めて責めて、お気のゆくまでやっておくんない——」

変なもんだよ全く。狂狂の奴にそう云われて責めるのを急がされると、急にあっしは張合い抜けがしてしまったね。覚悟の上はおろか、反って悦ぶ奴をふん縛って打擲した処で一向に面白可笑しくもなくなった。厭がる奴を無理矢理、責めてみてこそ面白いのじやなからうかね。

そこであっしは又考え直した。

「よし、てめの望み通り、ぐうの音も出ねえ程責め上げてやろうじやねえか。それでおいちも満足だ。だが、てめえこの儘の恰好じや帰れねえだろうから、着物をもって一っ走り女房にここへ来る様手紙を書け。女房の来る迄の間、てめえのその希みは思う存分果してやるぜ——」

狸狂は喜んで、宿の筆と紙を借りて、人伝々に女房の許へ走って貰った。どの位かかるかと聞くと一刻もあればやってくるだろうと云う話だ。

さして気も乗らねえが、約束の手前、あっしは禪一丁の素ッ裸の上から雁字搦目にして転がした奴を、その上から太縄をかけ直して、埃のパラ／＼落ちる太い棟木に縄をかけて、宙に吊り上げた。

立てかけてあった熊手箒で、ガリ／＼と掻いてやったら、みみず腫れの赤い筋がスーッと浮んで、繰り返すうち、体中に桃色の縞目が出来た。奴は呻いてはいるが勘弁してくれとは云わねえ。ようしそれならと、あっしは吊り下げた奴の体をぐるぐるとひねって、棟木にかけた縄がよれてよれて、これ以上よれねえところまで奴の体をひねり終ると、パツと手を離したんだ。

空間で奴の体は、クルクルと激しく独楽の様に廻って静止もせず、左に又右に逆転して、数度するうちやっと止まった。

「苦、苦しい、水をくれ——」

と奴は呻き叫んだ。表を流れる笥の水を手桶に汲んで、ザブリと奴の面に浴びせた上、腹に両手を廻してかけると、足を浮かして奴



参考

にぶら下ってやった。ミシリと棟木のしなる音と共に、全身に喰い込む縄目、奴はウーツと悶絶した様だった。縄が深々と肌に喰い入って骨がメリメリと音を立てた様に思えた。フーツと喘ぐ声が、あっしに車坂の地獄の責苦をまざまざと思い出させた。

物置の戸ががたりとなって人の気配がしたので、あっしは飛び降りて、内側を覗かせぬ様体で蔽って、そっと戸を開けたところ、宿の亭主が狸狂の女房らしき女を連れて立っていた。立竦む女房をぐいと引き入れると、再び戸をピシャリと立て、

「狸狂のお内儀さんだね。亭主はホレそこにいゝ気持にふん縛られて吊り下っているぞ」

「えっ！」

と女房はそれを見て、動顯せん許りに驚いた様子だった。

「あんたあー」と駈けようとするのを、おっとどっこい、そうはさせねえとあっしは後ろから内儀さんを羽搔締めにした。

二十四五だろうか、世帯やつれは見えるものゝ、元は色街育ちらしく、紅白粉の刷かめ顔が抜ける様に白く、きめも細かい下ぶくれのいゝ器

量が、奴の配偶には勿体ない程の別嬪だった。

「うちの人を一体どうしようと云うんです。離して下して下さい——」

懸命にもがくの姿、実は斯々しかじかと事のあらましを話してや
って、

「……で、亭主は百両のかたなんだ。亭主の奴さんの望みで虐めてくれと云うんで、あっしは心ならずも非道え目に逢わせたが、お内儀さんが来たとなりや話が早え。百両のかたに最後のあっしの希いだ。一度っきりで、二度とは云わねえが、どうだい、このだらしねえ亭主の眼の前であっしとしっぽり濡れるところを見せてやるか——。それとも、このあっしの眼の前で、亭主と二人素ッ裸になっ——て一刻許りしっぽりと絡みついて見せるか——。それが厭なら、お前さんも亭主と同様素ッ裸になつて虐められて、百両のかたにするか。三つに一つの返事だ、どうだい——」

あっしは年増の別嬪を見て、もう見境もなく色と嗜虐に眼がくらんで、どれ一つとっても女にしちゃ難題許りを、お内儀さんに申し渡して、さあどうだと詰め寄ったんだ。

お内儀さんは顔を真蒼にして、あっしをじっとにらみつけて立竦んでいたね。咄嗟にどうしていゝんだか考えもつかなかったのだから。それでもやっとな腹をきめたのか、いゝ声で、

「あたしの大事な亭主が、いくら身から出た錆とは云え、こんな非道い眼にあわされているのを、わたしや黙って見ちやいられない。哥兄さんに体を許しちゃ亭主にすまないし、亭主と二人の濡事をする様の前で見る程の莫迦でもないからね。とる道は一つだよ。一層あたしも亭主同様、裸になり好きな様にして、縛るなり虐めるなり

して貰おうじゃないか。それで百両のかたがつくなら易いことさ。さあいゝ様にしておくれ——」

女房は腹の据わった女だったよ。口惜し涙をじっとためて、自分から帯を解き出した。

「お仲、すまねえ……」

狸狂の奴は、のどにつまった声をかけやがった。

「フン、夫婦揃っていゝさまだよ。こうなるのもみんなお前さんのバクチからきているんだよ——。と、この場になって今更愚痴っても始まらないけど。お前さん、これに懲りて、バクチだけは止めておくれよ。お前さんが、金輪際バクチはやらないってこの場で誓ってくれるんだしたら、あたしやどんなに責められ、折檻されたって反って嬉しい位だよ——」

「もう一切やらねえ、おいら判っきり眼がさめたよ。女房にまでこんな目に逢わすとは今が今まで思いもかけなかったんだ。許してくれよお仲——」

「そう云ってくれるかい。嬉しいねえ——。さあ哥兄さん。さっばりと早いとこ、好きな様に縛るなり、吊り下げるなり、叩くなりして帰らせておくれよ。家じや二つになる児が、何んにも知らずにスヤスヤと寝ているんだからね——」

あっしの意馬心猿の猛りきった心は、二人の話のやりとりをきくうちに、いつしか砕けてシユンとなつて来やがった。夫婦の強い結び付きに負けたとでも云うんだろうか。

腰巻一枚になったお仲の白い両手をとって後ろに廻し、餅肌ギリギリと荒縄を喰い込ませて、一応後手に縛り上げては見たが、自若として観念している女にかゝちや、頓と心が弾まねえ。

あっしは狸狂だけじや面白くねえので、女房を呼び寄せた上、二人を散々に責めさいなみ、猥らな色模様を描かせて、拳句には背中合せにピッタリと縛りつけ、男に土間の土を舐めさめ乍ら女を玩具にしてやる気でいたんだが、そんな夢想はスーッと頭から素ッ飛んで、白々と味気なく、あっし自身棒立ちの儘で、おこりの落ちた様な気で二人をぼんやり見つめていたんだ。

あっしは糞落付いた女房の心意気に呑まれたとでも云うんだろうか——。

「てめえはいゝ女房をもったよ。こいつはあっしの負けだ。おい、お仲さんとやら、早く帰って子供の添乳でもしてやり乍ら、しっかりと亭主を可愛がってやるんだなあ——」

あっしは果されなかった名残りをこめて、後手のお仲の白い両手をぐっと握りしめると、素直に縄を解いてやった。

「名の通り、カチカチ山の狸見てえに、長い間ブラ下っていたからテッとは伸びてるだろうよ。早く降して介抱してやりねえ」

女房は顔にフト赤味をさして、素ッ裸の奴を手早く降して縄をとき、衣物をきせかけてやっていた。手足の縄のあとが痛々しく、深くくびれ込んでいた。

あの強気の女房が一旦許されたとなると、急に消えも入りたげに悩ましい姿で素肌に着物を纏うのが、逃げた大魚を眼の前にした気持で、あっしは男らしく齒を喰い縛って見ていた。その癖、車坂でたかだか二三十両のインチキ賽がばれた許っかりに、死に損なった我が身を考えると、百両のかたにこれくらいは未だ未だ安い方だと云う未練も走りやがるのさ。どうせあっしは根っからの悪にはなりきれねえ弱い男なんだな。

支度を整え終って揃って物置を出ようとした時、ドンドンと戸を激しく叩く音だ。狸狂が急いで開けると、兼半の旦那と弥六親分が数人の乾分を引き連れてドヤドヤと這入って来た。

「客人、てめえ狸狂をどうしようって云うんだ。先刻ひづめ屋で相当非道い悪戯をしたって噂だ。宿の亭主の知らせで飛んで来たが、おめえまさかこのお内儀さんまで……」

弥六親分は大層な権幕で詰めよった。それを女房のお仲がうけとって

「親分、とんだ御心配かけてすみません。いえね、こちらの哥兄さんが、うちの碌でなしの根性を叩き直したいばかりに、あゝした心にならない事して、大金迄使って、今こゝで意見して戴いたことなんです。幫間は幫間らしく旦那衆の御機嫌をとり結びやいゝのに、大切な兼半の旦那まで忘れて、バクチに凝ったこの人が悪いんですよ。金輪際バクチは止めたと云う誓いをきかされて、わたしや泣々哥兄さんの気持を有難く喜んでたとこなんですよ——」

「フーン、そんなものかねえ——」

弥六親分と兼半の旦那は、顔を見合せて符に落ちぬ様子で、狸狂の顔の傷や、手首の縄の跡を見ていたが、

「まあ何にしろそいつはよかった。こんな物置におると云うから、唯事じゃねえと飛んで来んだが……、客人は客人らしく、あっしの奥の間でもゆっくり休んでいてくれりやいゝのに」

あっしはそっと冷汗をふいた。猛り切って狸狂とお仲を吊り下げ、散々に責めている時だったら、危うくあっし自身、又車坂での二の舞になるところだった。

それにしてもよく出来た女房だったよ。岡惚れと云う奴か、あっ

しは未だにお仲とか云った女房の、あの自若として素裸で縛られていた姿が、臉にちらついていけねえ。

表へ出ると朝の冷氣がすーっと身に沁みて、悪夢の様な一夜の出来事をすっかり吹き飛ばしてくれた。暁を告げる鶏の声。御嶽から赤みのさして来た朝の光が、あっし自身の卑しい気持を居耐まらなくさせて、あっしはその場から、皆に別れを告げて木曾谷を一目

散、妻籠に向けて走っていった。

尾張名古屋の居心地よさに、つい二た月許りも長逗留したが、中庭でぼったり出逢ったのが、前に話したちらし紅葉のお吟、それから又一悶着が起るんだが、話も大分長くなった様だ。今夜のところはこれでおくとしようか——。兄貴、どうも御馳走になりっ放しですまねえな。有難うさんよ。じゃあ、またあばよ。(第二話 終)

現代マゾヒズム芸術時評

映画に見るマゾヒズム

原 忠 正

年末から余り興味のある映画もないまま、
につい休んでしまった事をお詫びしておく

一、米パラマウント映画

(ヴィスタ・ヴィジョン)

「底抜け最大のショウ」

＝Three Ring Circus＝

主演

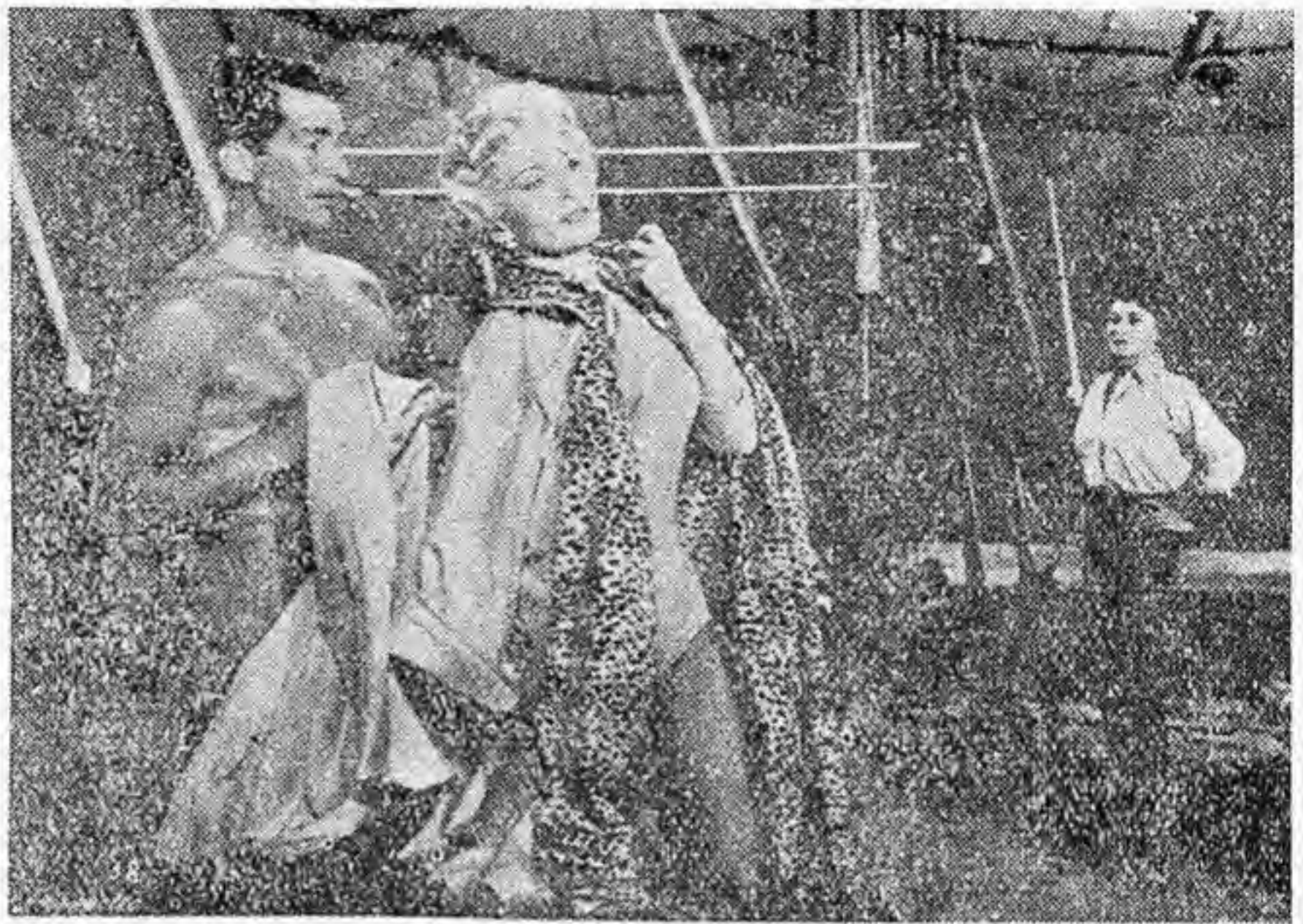
ディーン・マルティン
ジェリー・ルイス

○ジョアンヌ・ドリユ

ザ・ザ・ガボール

未封切の洋画でも面白いものとして、先

に題名だけを紹介したものである。ヴィスタ・ビジョン方式はシネラマやシネマスコープ等に対抗して考案されたもので、前記二者よりは遙かに画面が小さいが、それでも頭を動かさずに見得る最大の広さを持っており、従来の映画よりはずっと広くなっ



ている。そして、映画のオリジナルの一騎が、従来のものゝ倍になっており、それを映写するので、画面の清新さと、明確さは到底シネマスコープ等の及ぶ処ではない。

こうした新方式によって、新らしく米国のサーカスが伝えられる事は誠によろこばしい事であるが、私がこゝにこの映画を採り上げたのは、単にサーカスというだけの理由ではない。ジョアンヌ・ドリユ（米国ではジョーン・ドルウと読むのかも知れないが綴字に従った。）という女優は、私達にはっきりした印象を残している人であることである。「黄色いリボン」というジョン・ウェイン主演の名作西部劇——騎兵隊ものであるが——に上官の娘として出演、インディアンの中を突破して旅に出るという勇敢な娘役を演じたが騎兵隊の軍服を着た印象は生々しいその上容姿が都会的というよりはショウ的なので私は其の時も、サーカスの女団長をやらせたらと考えたのであったが、計らずも此の度、その雄姿に接する事が出来た訳である。真紅の燕尾服と薄黄色のズボン、真黒なトップハットと長い乗馬靴、調教用の長鞭を持ったドリユの服装は、それだけでも、私達の血を逆流さ

せるに充分である。私は手を尽してこの映画のスタイルを探したがこゝに揚げるものしか手に入らない。肝腎のドリユは右側の側で然も、黒服でよく判らないが、参考の為に揚げておく。猶、雑誌よりの一枚をも御紹介しておくが、構図としてはこの方がずっとよい。服装から来る感じの他にも、前半に十頭の馬を調教する場面、象に命令する場面等があって甚だ興味深い、調教師という職業に就く女性が大いにサディステイックな傾向を持っていることは疑えないので、私達は一種の憧憬に似た気持をこのドリユに寄せるのである、私は沼氏の様に麻生和子氏に対して性的な愛好を感じる事は考えられないが、白人崇拜者としてはドリユなどに烈しい憧れを感じる。そうしてこういったサーカスが、白人女性による調教と非白人男性による芸によって行われるという突飛な空想を描かせる確実な一拠点となることは確かである。華麗な雰囲気、賑かな音楽と昂奮した場内の空気が、これらはマゾヒスト全般の希望する雰囲気である。この二時間半に渉る映画が、私達をして、そうした空想の世界に遊ばせるとした

ら、他の観客達に比して何という高価な報償であろうか。東京、大阪の方々は恐らく簡単に見られると思うが、前述の様にヴィスタ・ヴィジョン方式による為に地方では公開が疑われている事は残念である。

二、ロシア、モスフィルム

作品、ゲバ、カラー

「サーカスの王者」

ソ聯邦の映画は輸入が少いのであるが、この映画は充分に楽しめる幾つかの部分を持っている。珍らしい事に、かつて沼氏が手帖に紹介された様に「熊」になりたい方にはうってつけの場面がある。これは女性

調教師による熊の曲芸であって、従順に女主人の意に従って道化る熊の様子は興味深く感じられた。その他コザックの女性による馬の曲乗りの部分では、長い鞭をたくみに扱う女性の様子が、生き生きとした印象を与えた。因みにロシアのサーカスには女調教師が多いので、機会をみて写真でもこれらの女性達について、詳しくお知らせ



致したいと思っている。

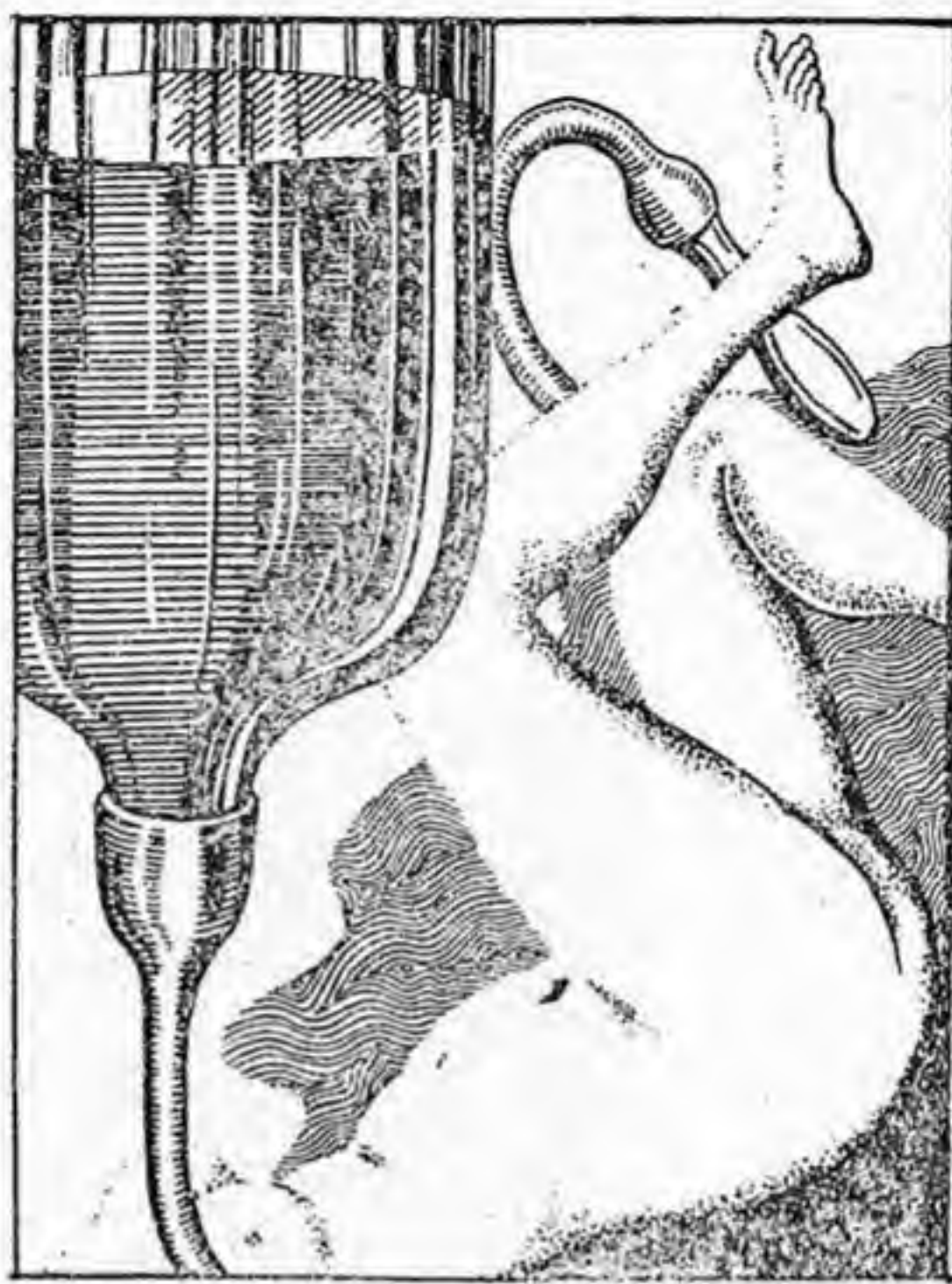
「お断り」

小生の多忙のため一部の方々に誤解をうけたかも知れないので、一言此の欄を拝借して申添えておきたい。本誌三月号誌上で沼氏より御報告下さっている内外タイムス紙上のマゾ・クラブ潜入記の実相は、実は潜入でも何でもなく、昨年本誌上で有志を

募ったマゾヒストの会の有志二名と小生とが、内外タイムズ紙記者、H氏と会って話をしたものであって、紙上にある如き実演を金を取ってみせる様なものではない。念の為に断りしておくが私達の会は決して営業的なものではなく、むしろ現在まで、私自身は経済上は支出の大過重で悩まされている位である。当日は小生宅にて前記四人での茶飲み話であって大部分は小生と会員(奇ク読者)N氏との発言であり、当日、女性会員の来訪もない。只同紙掲載の写真は小生撮影のものであるが廿八年暮に撮影のもので、モデルとして、奇ク誌上にも二、三度出ている人である。申訳をする訳ではないが、小生の報告の遅れた事と、実相をお知らせする為に附記しておく訳である。

(以上)

浣腸に関するお便り



花 村 恵 美 子

御誌二月号に「浣腸の往復文書」を発表させて戴きましたところ、読者の方から寄せられたお手紙により、その反響の意外にも大きいのに驚く一方、編集部の新企画に、愛読者の一人と致しまして大いなる喜びを感じたのですが、二月号の浣腸通信の欄で久里須

照雄さんが「読者より寄せられる浣腸通信等」を発表して頂けたら」と編集部宛に希望を述べられており、又私の許に便りを寄せられた浣腸愛好家の多くの人達からも、若し出来ることなら、それらの通信文を発表して欲しいというお便りを戴き、私自身と致しましても

赤裸々な、しかも、貴重な通信文を一人私の胸に秘めておくより、多くの方達にも読んで戴いた方が更に有意義ではないかと考え、そのうちの一部を御紹介致したいと思います。

私宛の私信ですので、浣腸に関する動機、心理、願望等が極く詳細に綴られてあり、虚偽のない人間性の深部からの叫びだけに、私のつまらない作品よりも、遙かに高い価値と啓蒙とを有するものと信じております。

しかし公刊誌の関係上、全文を御紹介し出すことは不可能ですので、発表不能と思われまます箇所は省略致し、氏名も仮名を用いたことを御諒承下さいませ。

一 N氏のお手紙

— 僕の浣腸に対する執着は何が原因か分りません。天性かも知れませんが。兎に角、小学一年生位の時から「お医者ごっこ」が好きで人の来ない二階の座敷や押入れの中等で近所の男の子と浣腸の真似をしました。ズボンやパンツを脱がせて仰臥、開股、挙足させて（中略）いたり、後には目薬の注入器を（中略）又、一度は向いの家の女の子（同年の）（中略）もあります。いずれも僕は施行者になるのが好きでした。そのうちある日、二階で三つ年上の従兄弟が、良い事を教えてやるから仰臥せよと言うので、足を揃えて伸した姿勢で仰臥したら、着物の前を捻げ（中略）それが病

みつきで(中略)ましたが浣腸に対する興味は増す一方でした。未だ男女間に sexual intercourse の行われることを知らず、友達がどんな話をしても、そんな事は犬や猫のこと、しか信じられませんでした。叔母に質問して初めてそれが夫婦間にも行われることを知りました。叔母は懇切丁寧に(中略)説明してくれましたので、僕は(中略)なくなりましたが、機会がありませんでした。

現在、僕が美しい女が仰臥、又は側臥位でレース飾のついた純白のシユミーズとスカートを捲くられ、羞恥に赤面しつつ浣腸を受けているところ、或は婦人科内診台上で内診されているところを覗き見たい。或は自分がその施術者になりたいという願望を強く抱いている遠因は、こんなところにあるのではなからうかと思えます。

僕はMよりもSの要素をやや多く有すると見えて、願望は常に施術者になりたい、そして被術者は美しい女性に限ります。男性は嫌です。併し、浣腸される時にも矢張り興奮致します。小学校六年位の時、病気で医者に診察され「気持が悪いでしょうが浣腸しましょう」と云われ、医者が二〇〇C位のガラスの浣腸器にリスリンを吸い上げている時、僕は「いやだ」と駄々をこねながら、内心では喜んでパンツの紐を解きました。お医者が布団をはぐった時、僕はそれ迄度々その医者に

されたように仰臥、挙足位にされると期待してパンツを下迄脱いで膝を立てようとすると「そのまま、そのまま」と云いながら側臥させ、寝巻の裾をはぐって、上側になった足の膝を腹につく位曲げさせてから、するっと挿入されました。冷くなったと思うと「もうすみしましたよ、出来るだけ辛抱してから便所へ行きなさい」と云われ、我慢出来なくなっても便所へ入ると、先ずリスリンが流れ出して来ました。僕は排便しながら今の状況とお医者言葉の言葉を反芻して楽しみました。

この時以来、医者に浣腸されたことはありませんので、僕は貴女のお薦めのエネマシリシジも、羽村さんが書かれているイルリガートルも無経験で、大量浣腸の感じもわかりませんし、専らガラスのものに愛着を感じ、注入量も一五〇CC位のものです。唯、色々な体位をとることと、噴管及び液が入る時の感じとを好みますので、四つんばいになったり仰臥したり、鏡に写るのを眺めながら何回もします。貴女の所謂ブレリコウドの範囲を出ませんが、今度はエネマシリシジを使用したと思っています。(中略)貴女の浣腸を受けた時の体位、現在自分でなさる時の体位等、詳しくお知らせ下さいませんか。殊に十一月号誌上のB先生のアパートでのこと(下着はどんなにして脱がされたか、どんな姿勢か、注入液の種類は)をお知らせ下さいればど

んなに嬉しいでしょう。(中略)僕はクスコイ氏子宮鏡を持っており。(後略) (N生)

この方は三十五才の方で大学を卒業されております。結婚しておられるのに奥様が浣腸を嫌いなので楽しむことが出来ないとしておられますが、私でしたら大いに浣腸プレイを楽しみたいと思いますし、最初のうちは恥しがって女性には厭がるものですけど、浣腸教育を気永にゆっくりなされたら、女性の方もきっと好むようになるのではないかしら。大抵の方がそうであるように、N氏も動機は「お医者遊び」で、施術者になりたいという願望は男性の特性でしょう。

イルリガートルよりもガラス製浣腸器に愛着を覚えるとありますが、実際ガラス製浣腸器の形は何んとも云えないものです。でも現在ではN氏もイルリガートルを愛好されていると思えますけれど。

(二) Aさんからの手紙

Aさんは二十七才の独身の青年で公務員をなさっており、胸の病気で入院中に見聞されたことを非常に詳しく知らせて下さいましたので、御紹介致します。

次に貴女様より排尿の時のことについて書いてありましたが、男性でも厭な事は厭です。それが若い女の看護婦に処置されると全

く意志通りになりません。浣腸の際はじめての時、仰臥のままうんと膝を立てて股を開いていると、美人の看護婦が入って来て「ああ、この方ですね、浣腸するのは」と、私の膝に顔をつけるようにして覗きこみ、アルコールを含ませた脱脂綿で肛門のまわりを五、六度ぐいぐいと消毒するのです。丁度あのあたりは刺戟の強いところで、私も始めは氣をつけていたのですが、そうされると自然に神経の反射で長い禁慾生活でもありましたし、私は本当に困ってしまつて附添婦の年とったお婆さんにタオルでかくして貰い、浣腸されている間（中略）貰いました。別に自分の心にいやらしい感情が起きたのではありませんが、これには弱りました。それから浣腸される前には自分で少し（中略）工夫しています。女性の方と違つて男性にはこんなとんでもない生理的作用があるわけです。（浣腸されることによって興奮を覚えるのはと申すよりも、そうであるからこそ愛好するようになるのでしょうけど、女性と異つて男性の方では外面的にはっきり現れるらしいので、愛好者の方が医者から浣腸される時等、本當に困ることゝ思います。その点、女性の私等は医者を利用して楽しむことが出来るのですから、しかも外面的には厭だ厭だというような態度で。その点、楽しみが多いわけです）

浣腸も左側臥位になりますと膝をうんとお腹の方に曲げ、膝小僧を抱き込むようにしてやつて貰います。いつかは丁度、（中略）近くに浣腸され知らず知らずのうちに浣腸中（中略）ものらしく、（中略）笑われたこともありました。

（女性には夢精はないらしく、そんな経験は私にはありませんけど、入院中厭なことに月経中に浣腸されたことです。病氣中は月経をほとんどみませんが、長い期間になりますと来潮があり、その時は全く恥しくて厭ですわ。これは別の機会に書き度いと思います）

それに加えて浣腸後便器で用便するのですが尿意を催します。こんな時女性の方はどうされるのですか、男ですとそのまま排尿すると尿は便器に落ちず、看護婦にあの筒のついた尿器につかんで入れてもらうのです。排尿も排便も全部看護婦に見られるわけで、それだけは厭だと頼んで、以後は浣腸前に排尿しておくことにしたのです。大きな病院ですと、午前八時から九時迄は浣腸される患者も多く、時には私の隣のベッドの人と一緒にされるのでした。浣腸器も足らず、子供用の浣腸器で何回も挿し込まれたりします。

次に手術前、療養所で知り合った若い女の人に「君、便秘しているのだけど、いゝ方法はないだろうか」と云いますと、すかさず十二才の彼女は「浣腸よりスリンはないけど

石鹼浣腸ならしてあげてもよくってよ、こゝでしましうか、浣腸しなさいよ、浣腸って知っているでしょう、お尻からチューツとするあれ、すぐにお通じがつくのよ」と云ってさかんに私にさせようとしたことがありました。隣の女達も「Aさん恥しがることなんてないわよ、しておもらいなさいよ、手伝ってあげるからネエ、しなくちゃ駄目」と、まるで怒ったように私に云います。私は、こんな女性ばかりの部屋でとんでもないと逃げて帰つたのですが、その晩、彼女は私の部屋に来て小声で「これ」と云ってハンチカ包みを私にくれたのです。開けて見ますとイチジク浣腸が三ヶあったのです。「これ私が使っているのだけど貴方にあげるから浣腸して見なさいこゝのところは穴を開けてお便所の中でお尻にさし込み、ゆっくりこゝを押えるのよ、いい、二個程一度に使ってね。そして出来るだけ我慢するのよ、もし出来なければ私もってあげるから」と、さゝやくように云ってくれました。丁度困っている時でもあり、私はその親切が忘れられません。

その人が私より二ヶ月おくれて手術を受けましたが、手術前に浣腸されたそうですが、人から浣腸されたのは始めてらしく、その附添婦のお婆さんが私にこう云っていました。「Nさん、浣腸を厭だといってどうしても聞き入れないのを無理にさせられて、始めから

しまい迄泣いてはりました。それに便器ではいやと云いはるもんだから、看護婦さんがまだ出ませんかといって二度目の浣腸の途中で、とうとう声をあげてやめてやめてと泣いてしまつて可哀想でしたわ」と云つてました。私はあのNさんが浣腸されるのが始めてと聞いて、びっくりしてしまいました。(後略)

A生

この外にAさんは村祭りの時、ふうせん屋さんのおばさんがふうせんをふくらます道具に、ゴム製の浣腸器を用いているのを見て、大衆の面前で浣腸器を平気で使用している度胸のよさの事を書いてありましたが、これはよく見ることで、私も子供の時、縁日などでふうせん屋さんが出ていますと、浣腸器ばかりを見ていた覚えがあります。

(三) S氏のお手紙

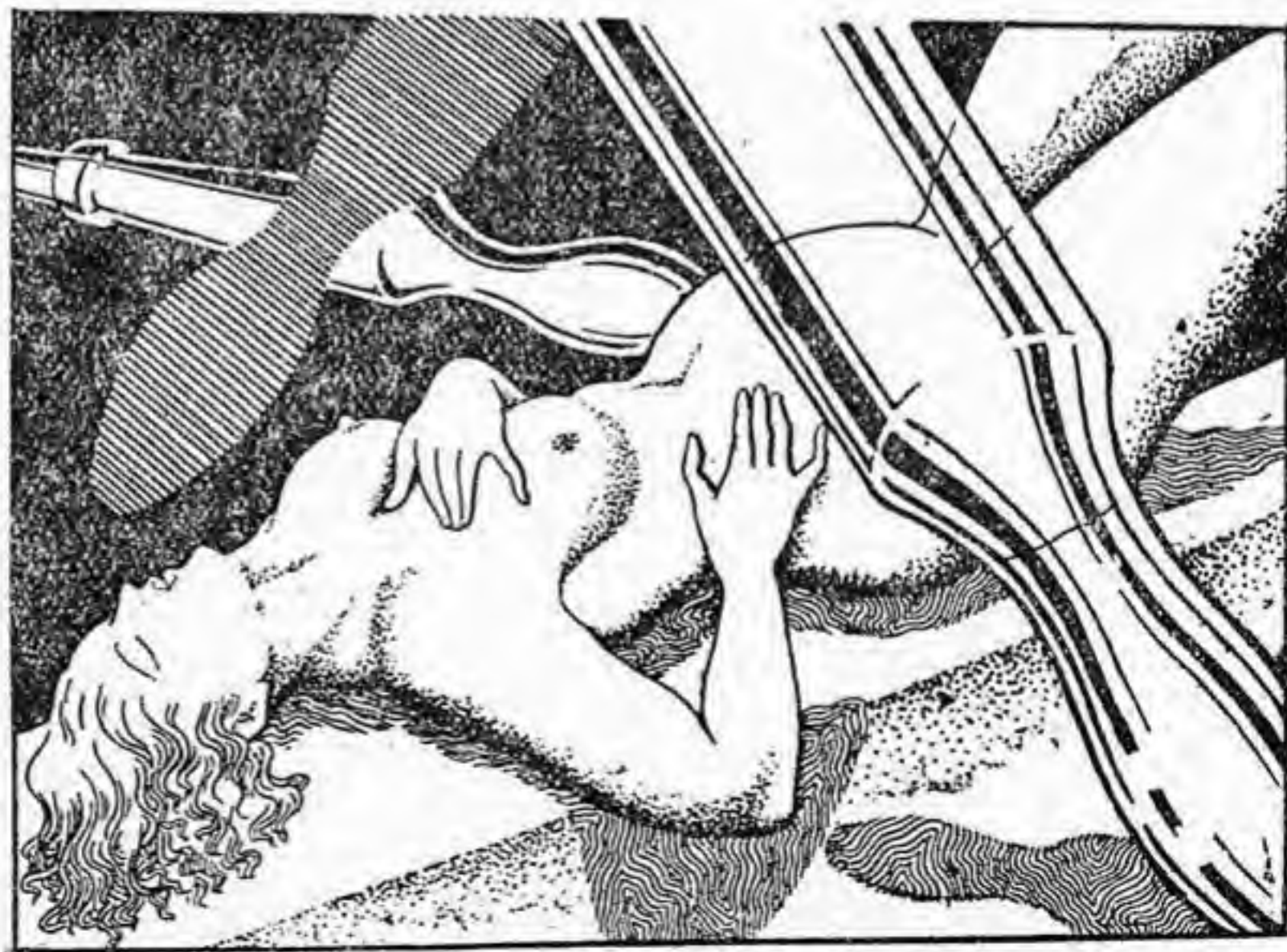
——私も盲腸手術を受けて浣腸を数度されましたが、同室した若い女性が恥も外聞もなく浣腸されたり、又オシメ迄されたことを思うと、私には浣腸とオシメとをこんな幻想へと結びつけてしまうのです。

十五、六才から三十才前後のもっとも恥しい年頃の美しい人に、赤ちゃんのようにオシメカバーを当てる。消え入らんばかりに恥らう女性の顔、ヒップにびったり当てられたオシメカバー、歩きたびにキュツキュツときしむオシメカバー。又、無理やりに浣腸してオシメを当て処置してやる。どんなに楽しいことでしょうか。生理現象にて濡れたオシメを当て、真赤になっている女性。その汚れたオシメを取り換えてやる——。いかゞでしょうか。(後略)

このオシメと浣腸とのイメージは全く興味深いもので、S氏から云われます前に、レスボスの浣腸プレイの時に実行して素晴らしいものでした。オシメでなくて月経帯を利用した方がもっと面白いと思いますけど

(四) Y氏の手紙

——憲兵や特高の浣腸というより拷問なのですが、一糸まとわぬ裸のまま大の字に縛られるのです。そして三人か五人位並べておいて、丁度自転車の空気入れのような(浣腸器ではありません)スポイド、それに空気入れ位の太さのゴムをAnusに二十纏位も挿入して浣腸するのです。秘密文書等を呑みこんでいないか調べる意味もあるのでしょうかが注入する液はヒマシ油です。どんなに我慢強い人間でも、ひとたまりもなく排泄してしまふようです。でも私等にしてみれば、もう少し時間的に排泄を堪えている苦しみの様子に歓びを感じるので、あまりあっけなく排泄



させてしまうのでは興味がうすらぎます。排泄物の出そうになるのを恥しさのために必死に堪えている、そしてとうとう我慢しきれずに排泄してしまふような姿に興味を感じるのです。(後略)

Y生

尚Yさんは恋人の方と「お医者さん遊び」を楽しんでおられ、浣腸と導尿でも恋人同志

で、このYさんのように浣腸、導尿、膣洗滌といったお医者遊びをしたら、別な意味で面白いものだと思います。

この他、温泉に入りながら浣腸をする医療のことを書いて下さった方もありますが、余り長くなりますので省略します。大部分の男の方は女性の恥しがる姿態に最も興味を抱く点サド的であり、マゾ的な私達とは区別出来るようです。女性の排泄する姿態や、排泄物

に迄興味のあるのも、羞恥する女性に刺戟されるからでしょう。このように男性も女性も興奮と欲びを感じる「浣腸」ということが、もっと一般にブレイクとして利用されてもよいのではないのでしょうか。

婦人科の医者になりたいというような願望の多くみられますのも不思議でないと考えられ、誰しも「浣腸」に対して何らかの心理的变化や興味を抱くという事実について、心理学者が深く追求して分析する価値があるので

はないのでしょうか。私のところに寄せられます手紙は、ほとんどが男性の方なのですが、女性の方とも積極的に文通したいと思ひますし、「奇ク」で浣腸特集号のような企画をされたら嬉しいのですけれど……。

最後にお手紙公開を心良くお許し下さいました方に、厚く御礼申しますと同時に、「奇ク」をよりよい本に育てるよう努力致しますよう。

(終)

「挿絵の爲の禪美解説」

山口 幸一

禪美愛好は既に独立した一分野として、奇譚クラブを通じて多数の読者に支持されている事は、既に疑無き事実であると思う。読者が最も深い関心を持っているものは、記事と調和した挿絵であると考える。それで此度は挿絵を主とし、記事を従として挿絵の爲の解

説の記事を二、三御紹介して、皆様の御批判を仰ぎたいと思う。

第一の挿絵

奇ク二月号六六頁、母親に禪を締めて貰っている少年の絵は、背景としての室内調度がよく整って居り、又文度の状景からこの少年

が六尺禪を常用していると云う事を読者にはっきり想像させる、非常に細心の筆で描かれた良い挿絵である。

今回はあのまゝの構図にて、少年を背向にして前方に大きな姿見を配し、少年の顔は姿見によって表現し、禪の後の部分をはっきり画面に現わす様にする。

少年が母親の肩に手をかけている姿は色々の事を想像させて、極めて魅力的なポーズである。少年の容貌をもう少し優しく描けば、更に美しい挿絵となろう。此の絵についての解説は不要で、禪美愛好者は直にこの絵の良さを認識出来るであらう。

第二の挿絵

身体検査場の少年群像。体重測定、身長、胸囲の測定を行っている少年三人、順番を待って後方に立っている少年数人、計十数人の少年群像を様々の角度より描写する事は、最も美的感覚を高揚する絵となるであろう。



少年は中学校の一年又は二年生位の年齢にて、服装は、晒の越中褌を着用する者五人、腹巻付の六尺褌を着用する者五人、白いパンツを着用する者二人位にする。この下着の種類による人数は重要な事である。測定する人は髭のピンとはねた軍服の体操の先生を配して、時代をはっきり現わす事が必要である。

この挿絵はマゾ的特色を持つ事は、軍人教師の厳めしい顔で表現されようし、少年の締めている各種の褌が、更に内向的效果を挙げる極めて稀なる効果構成を有する挿絵である。読者の方々は各少年の姿体と服装、及び表情に充分関心を持たれる事であろうと思う。

第三の挿絵

奇ク二月号百二十二頁のカットの挿絵の如き相撲褌を着けた少年の群像を要望する。背景は中学校の校庭。教師に投げられていた少年を大勢の少年が土俵を取り巻いて眺めている。少年達は好むと好まざるにかゝわらず、全員この様な激しい訓練を行わねばならない。背後にある軍国調が、マゾ的效果を強める。少年の表情、褌の緊縛感が息詰る様な美的感覚を強調するであろう。

第四の挿絵

布団にうつ伏に寝ている少年。お尻をまくられて、下半身は晒の越中褌がお尻にくい込んでいる。お医者さんが浣腸の支度をしている。お母さんが心配相に傍で眺めている。この絵は一見何でもない様な絵であるが、禪美裸体被視、浣腸、ソドミーの四要素により構成されている複雑な効果を持った絵である。

第五の挿絵

室内、少年が浴室から出て、茶の間に入ってくる。茶の間には母親が坐っている。少年は越中褌一枚の姿。少年は洗濯した自分の越中褌を室内の針金の物干しにかけて乾かそうとしている。その姿を母が裁縫しながら見ている。

この絵の有する効果は、少年が新しい褌をとりかえて、今迄着用していたものを洗濯した事を示し、少年が常日頃褌を常用している事を暗示するのである。この場合、母が膝の上で縫って居るものは、相撲褌にし度く、少年の名前を黒糸にて刺しゅうしていると尚更連想は広範囲に進展する。この際室内背景として少年の机、制服、学帽等を配する事も良いと思う。又少年が乾している手拭の字に○

○中学相撲部と云う名を入れると良い。

簡単な解説による、この五つの挿絵が誌上に発表されたら、全国の禪美愛好者からの讚美と感嘆の声が、更に更に高まるであろう事を疑わない。

(おわり)

懸賞入選作品 第二席 (賞金貳萬圓)

牛乳風呂の饗宴

馬 族 保

作者の言葉

強烈なまでに女性の優美にあこがれ、あまりに神秘化した性への思慕は、羞恥心のつよい私をマゾヒストにしましたが、その限りでは別に私は勧善懲惡思想をもっているわけではありません。にも拘らずこの小説のヒロインは同性のビストルに斃されるのです。このエピソードはもとより私のこのみではありません。それというのも、この小説は実話に取材したからで、物語の肉附としての多少の潤色を施したとはいえストーリーまで変更するわけに行かなかったからです。おかげで、物語を發展させる上によけいな苦勞もありました。古沼博士と閑子夫人の結びつきも一応伏線に引いておかねばなるまいと考え、うっかり十七枚も書いたところで省略をおもいついたり、そんな徒勞もあえて試みました。ヒロイン阿南彌生子の生涯を主題とし、配するに幾人かの男を登場せしめて、だいたい取材に忠実な構成でまとめてみましたが、阿南彌生子の少女期から思春

期にかけての重要な骨組みは、実際に現地まで出かけて行き、めんな調査を下に資料を蒐めました。

ノーマルな人々は、マゾヒストを「悲劇の道化役」という。はたしてそうでしょうか。下書のストーリーを肉附していくうちに強く感じたことですが、男性マゾの本当の不幸はこの世の中で美しい暴君に出会わなかったときにあるようです。いや、理想の婦人に行き会いながら、何かの事情で離ればなれになって、これに代る婦人にめぐり会わぬときが、更に不幸のようです。男性マゾの一生に、幾人かの代用婦人は現われても、理想の婦人は中々現われるものではありません。これは、もっと不幸でしょう。男性マゾの理想は空の星のように高いところにあるからです。その意味で、阿南彌生子の価値が読者諸兄の鑑定にかけられているわけですが、私は空の星の部に属する貴婦人として推すにやぶさかではありません。

幸いに何かのお役に立てば望外の喜びです。

プロローグ

西班牙セヴィラの王ビエール・ル・クリエルの愛妾、パディラ夫人は、絶世の美女であった。彼女の肉体はその国のどんな高貴な宝石よりも美しかったので、ビエール王は彼女のために新らしい礼式を設けた。総理大臣以下重臣顯官達は彼女が豪華な大理石の湯殿にゆあみするときは、礼服を身に纏い、浴槽の周囲にひざまづいて彼女の体を洗った風呂の水を珍奇な美酒でも飲むように飲んだというのである。

この話をしてくれたのは、一昨年の五月死亡した知友丸木喬介君であった。

彼の妹の閑子夫人の良人である古沼博士から、丸木の死後この小説の事件を聴かされるまでは、私は西洋の一婦人の話にも、格別意味があるとはすこしも考えなかった。私と同じ性向をもつ男の話を理解出来なかったとは実にうかつであるが、他人はノーマルであると決めてしまいくせが私にあったからでもある。丸木はそのとき国王や愛妾の名前までたしかに聴かしてくれた筈であった。今から思い出してみると、なるほど、丸木喬介の双頬は赤味を差し、多分に熱していたように思う。私が会ったのは、小平島の療養所の病室で、呼吸器患者の特徴である皮膚の美しさを寓意的に解釈したりする臆測など、その時の私には及びもつかぬことであった。私の不祥さに反って頬が熱くなるのである。

そうだ。丸木はたしかに恋の古跡をたどっていたのにちがいない。一つの比喻が彼をして無限の追憶の世界にみちびいていたのであった。こうして結果から書き出してみると判断もつくようなもの

だ。丸木喬介の幻想は一人の妖艶な婦人の肉体によって恋の殿堂の華麗さや厳かさまで築きあげられていたのだらうと惻隱の情が切々とせまってくる。彼の幻想を、せめてもの友情のために、なぜもつとふかく聞いてやらなかったのだろうか。私はそれをさびしくおもう。

いつか閑子夫人が、私にしみじみと述懐したことがあった。「私が弥生子さんを殺したのは、あくまで、兄妹という血液の仕業でせっぱ詰った私の感情からでした。私の身を犠牲にしてまで兄を救うというような第三者的解釈でなくて、弥生子さんを殺さねばならぬ、という感情からですわ。それがいゝとか悪いとかじゃないのです。弥生子さんを殺さねばならぬ宿命を私は持っていたのです。たしかにそうですわ。今になってみると、反って兄が可哀想です。兄はあれでよかったのではないかしら。その方が兄には幸福だったかもしれません。いらぬお節介したものだと思います。兄はそのことについては格別感謝していなかったようですし、悲しんでもいなかったようです。どちらにしろ、兄はこの世に長く生きる希望をつないでいなかったのですから」

「いや。義兄さんが死んでからそういう考え方は、少し当たらないと僕は思うね。それはお前の小さな愚痴だよ。義兄さんは義兄さんの思うとおりを生きたし、お前はお前の思うとおりを行動したままだよ。義兄さんは、お前のいうように不幸ではなかったよ。義兄さんは平凡を何よりいみ嫌う性分だったのだからね」

古沼博士はそんなふうに閑子夫人をたしなめた。そのときの話であるが、私は話題の中心をわざと反らして博士にきいて見た。

「古沼さん、だいたい牛乳風呂を立てゝ入浴するなんて、一種の宗

教じやないですかね。実際に皮膚が綺麗になるものですかね」

「それや、綺麗になりますよ。しかし宗教的な意味も多分にありましようね。だから美しくて自信のある婦人には効果はありますよ。

阿南弥生子のような悪徳を身につけた女には一層の美化作用はあるですよ。それと異性の側にもう一つの心理作用が起るのです。牛乳風呂に這入る妖艶な女だという意味ですね」

古沼博士はニヤニヤ笑っていたが、夫人が紅茶の替りを淹れるために中座したあとで、私にこんなことを云った。

「阿南弥生子は実際すばらしく美しい体をしていましたよ。僕は幸いにして彼女の誘惑に落ちなかったわけですが、本当をいうと危かったのです。これと思う男はヒマにあかして物色していたんですね。阿南の手管は才気煥発で、しかも彼女の武器は最後に男を征服する側に立つ勝気と驕慢を持っていました。直感の鋭い女でしたね。この男なら、と決めると阿南は湯殿に呼込んで体を洗わせるのです。そこまでは普通の女ですが、男が一旦彼女に参ったとなると半ば命令的に『あなたが、本当にわたくしを愛している証拠が見たい。わたくしを愛しているならこの風呂の牛乳を飲んでみせて頂戴な。飲まなけりゃ、これっきりよ』というんですね。実に残酷ですよ。しかもその残酷さには艶笑的意味がある。僕も危く飲まされるところでしたよ」

「僕ならよこんで飲んだでしょうね。馬鹿保趣味ですからね」

「そう。あなたなら垂涎ものですよ。でも、僕はいやですね。第一僕には閑子という恋人が決っていたから。……桑原、桑原！」

古沼博士は悪戯っぽく首をちちめて見せた。

「阿南は自分の体は誰にも汚れさまいという宗教を持っていたよう

です。男から奪るものだけは余すところなく奪ってやろう、というのが彼女の男性観の全部だったらしいのです。しかしこんな女は男に取っては魅力はありますね」

「じゃ、立花中將もやはり阿南弥生子の奉仕者の一人だったわけですね。アハハハこいつはおかしい。あの澄し屋の背の低いカイゼル髭の男が、やはり阿南の這入った風呂の牛乳を飲んでいたのですかね。フ、フ、こいつは面白い。僕は立花中將と一、二度会ったことがありますが知っていますんですが、いやに尊大振った男で、いつも両腕を背ろに廻して胸を反らすような恰好をする男でしてね。あの男がね、アハ、ハ、ハ、こいつは初耳だ」

そこへ閑子夫人が紅茶を捧げて這入って来た。

「おやおや、何ですの。大変賑やかですのね」

「いやね、新しい女について話していたんですよ。フ、フ、こいつはおかしい。こいつは面白い」

私は腰を曲げて笑いくずれた。あとから、あとからと笑いがこみあげて来てとまらなかった。

ほんとうに古沼博士夫妻は私の仮装に気付かないのだろうか。冷汗三斗の思いだった。私の過去の体験には、細川百合子という傲慢な一人の婦人の肉体の擒となりはて彼女の沐浴した牛乳を幾らも飲んでい。いや、もっとひどい醜行をも、彼女の歓心を求めて演じているのである。私は仮面をかぶっていた。私は仮面の下からこの事件の真相をつかもうとして興奮していた。ゲラゲラ笑をしながら、古沼博士夫妻のノーマルな精神にもどかしくさえなっていた。私の幻覚は、阿南弥生子の豊麗な肉体の足下に平伏して身もたえる丸木喬介の姿態を捕えようと執拗なまでに思念を凝らしていたので

ある。

薔薇と肥料

神社の鳥居の前から上り勾配になっている坂を登り切ると、すぐ眼の前に炭鉱ホテルのサロンの灯がまぶしく燦やいている。西公園町である。そこからはダラダラの下り坂で、いわゆる高級住宅や富豪の別荘が薔を^{いぢ}つらねて建ちならぶ丘陵地帯、永安大街であった。『阿南寓』は、そこを右へ折れたところの左がわに、蕨をいっぱい絡ませた蕪洒な一構えだった。

三月——春の気配は、曆の上ではもうふんだんに腹郁と動いている筈なのに、大陸の気節はようやく庭の木々の樹皮が青み、新陳代謝の呼吸を活気づけているだけで、薔はまだ石のように硬かった。

「あーア！」

阿南弥生子の肉感に濡れた唇がものうく欠伸に割れて花びらのようであった。

あらゆる調度品が豪奢を極め贅沢の限りを尽していた。支那製の真紅の絨氈、マンテルピースや本棚の上に置かれた藍、朱、黄などの極端な色彩をもつ陶器類にも見られるとおり、一目で支那趣味に凝っていることがわかる。

女主人、阿南弥生子は桃色の地に黒の縞子で縁どった派手なガウンを着て、革張の長椅子に半分寝そべりながら、香の高い細巻をゆるく燻らしている。湯上りの化粧が済んだところであろう。彼女は、真白い羽毛の飾りのついたフェルトの上靴を爪さきにひっかけたり落したりして、その恰好を前の鏡に写しみながら、何がおかしいのか独りくすくす思い出し笑いなんかしている。

棚の上から、洋酒の瓶とグラスを取るとおいしそうにチビチビ舐め始める。弥生子のぬけるように白い双頬が次第に赤味を帯びて来た。適度な温度に暖められた部屋の空気に体中がとろけるばかり陶然として来る。

彼女は呼鈴を押した。

間もなく一人の青年が現われた。眉目秀麗だった。その眉字にはいんうつな翳を宿していたが、眼はあきらかに興奮のために燃えていた。

弥生子の眼は青年の挙動をじっと見据えている。

青年——丸木喬介は床の絨氈に土下座するとそこに両手をつかえて恭々しく額づいた。その瞬間、弥生子の体中に快い戦慄が走った。丸木喬介の彼女への祈りが伝達されたのであろう。

弥生子は履いている上靴を、ある距離まで放った。

「ムク、唧えておいで！」

ムク犬の美青年、丸木喬介は掌と膝でヨタヨタと這って行き、上履を口に唧えて、すんなり差し伸べた弥生子の足に捧げ穿かせるのである。

「馬鹿っ……」

弥生子は足をあげて男の頬を蹴った。喬介の体がもろくも横倒しになる。が、すぐ座り直して両の掌を上に向けて組み、額の高きまで捧げて待った。何かを押しいただく恰好である。雲の上に乗る太陽のように弥生子は足を掌の上に載せた。彼は額の上まで足を押しただき恭々しく接吻した。白蠟の肉づきに血を通わせ、艶々とあぶらの載ったヌメのように滑らかな美しい足であった。五本の指の爪先に一つずつ祈りをこめて接吻する。爪には無色のエナメルが透

明に輝やいていた。

ガウンの裾が崩れて豊満な腿のつけ根まで露出した。弥生子の蹠が喬介の頭を押えて絨氈の上にふみにじった。

「奴隷！ 頭をあげるんだよ」

頭をあげると脚の力を集めて再び勢いよく踏みつける。コッソン！

床に額の鳴る音！

「弥生子さま！ お許し下さい」

「——」

コッソン！コッソン！ 美しい暴君の足は遠慮会釈なくふみにじる。

「弥生子さま！ 何卒お許し下さい。お願いです。お許し下さい」

「フ、フ、フ、あゝ面白い。いゝ気持！」

弥生子はしっこく遊戯をやめない。喬介の額は熟柿のように充血し、脚の重みに圧しつぶされる額の痛みにも、もはや堪え切れなくなっていた。オロオロ声を出し、哀願した。それが弥生子の快感を一層刺戟するのである。

「あゝ、いゝ気持だわ。奴隷、私のおみ足にお礼お云い」

彼の頭をふみにじった驕慢な女王の脚——その足の爪先を両の掌に受けてあがめ祭る奴隷のキスを阿南弥生子は如何にも満足そうに眼を細めて享樂した。

快く酔が廻っていた。

「喬介！ 今夜は私の犬にしてあげる。光栄かい？ そのペンと便箋をもっておいで。私の口述をそのまま書くのよ。分ったわね」

「はい！」

弥生子は鷹揚に脚を組み、眼差を天井に向けて考えていた



が、暫くすると白い頬に快心の笑が浮んだ。娛しい計画を立てるときの時間をゆっくり堪能する表情だった。一語、一語歯切のいゝ声音は、口述する彼女の唇の周りを、妖しい残忍さと愉悅の弾みとが擦くるのであらう、ともすれば笑い出しそうな抑揚があった。

「奴隷！ さあ、弥生子さまの足下に跪いて誓約おし」

「はい！」

喬介の額に青さが増したようであった。書き取った口述をそのまま誓約する不安と期待の交錯した戦きであった。弥生子のために、そこまで支配されるといふ切なさで震えながら、しかしその切なさが反ってよろこびとなって全身をしびらせるのだった。

「お前は私の生きた道具。お前が絶望に打ちひしがれて、自己卑下の中でもだえ苦しむ触感はきつと堪らないだろうね。あゝ、楽しい！」

弥生子は眼をうすく閉じて朱唇をキューツと結ぶ。ながい睫毛がピクピク動く。

「さあ！」

「は、はい」

喬介は意を決したようだ。衝動的に緋色の絨氈に跪いて音読し始めた。

誓約書

丸木喬介は今宵弥生子さまの犬となる光榮を天地の神々に感謝申し上げます。喬介ごとき卑しい、価値のない人間が、弥生子さまのように気高いお方の腿の下敷となり精魂こめて御奉仕申上げるよろこびは唯ありがたき極みでございます。弥生子さま！丸木喬介は貴女さまの奴隷でございます。生きた道具でございます。私奴を卑しめて快美を享樂遊ばされたいときは、いつ如何なる場所をも問わず意の赴くまゝお申しつけ下さるよう、喬介謹しみて御願ひ申上げ奉ります。

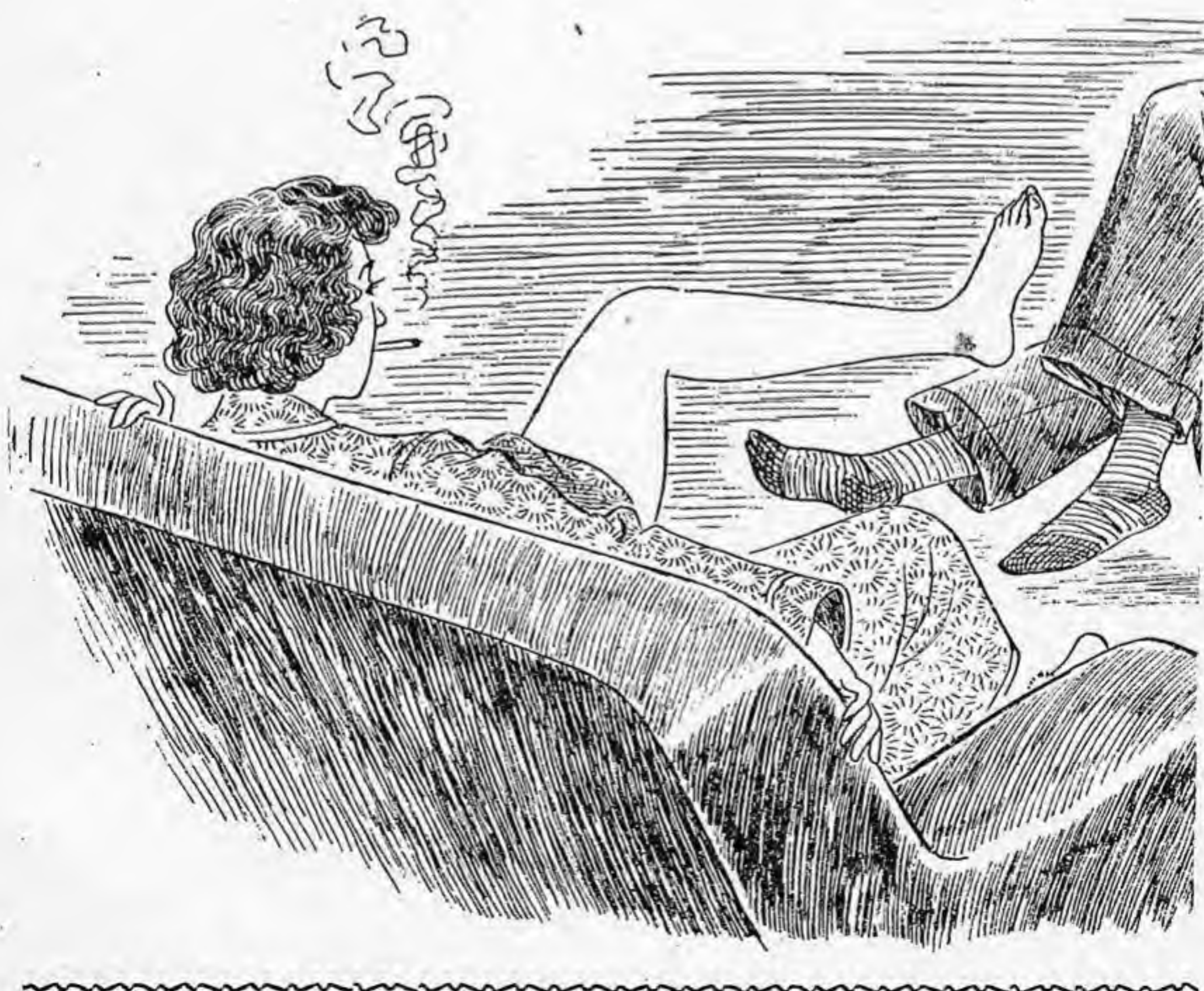
右のとおり誓約いたします。

丸木喬介

弥生子さま足下に捧ぐ

「うん。いゝわ。奴隷！舌を出して見せて御覧」

——ウンと長くして見せて御覧。



——舌の尖を丸めて動かしてみせて御覧。

——フ、フン。この指を柔かく舐めてみせて御覧。

あれこれと矢継早の注文を出し、一応テスト済にした上で弥生子は喬介に命じてガウンを彼女の体から脱がせた。ブラジャーとパンティだけの姿態——雪のように白く滑っこい光沢のある四肢であった。

「寝台にお上り。仰向けに寝るんだよ」

弥生子はウキウキと喬介の首を跨いだ。

そのときである。

「奥さま！」

扉の向うで女中の咲江の声が出た。

「何よ、咲江」

忌々しそうに舌打ちすると弥生子は小さな声で（下郎、消えておしまい）と喬介を足蹴にした。喬介は畏まって寝台の下にもぐり込む。落着き払って弥生子は応じた。

「お這入り」

咲江は一揖した。

「あのう、実は毎夜お邸の中を覗きに來る者がいますので、お耳に入れておきたいと思ひまして。咲江が氣附きました、もう、一週間位になりますから。いつ頃からお邸を覗きはじめたのか咲江も氣附きませんでした、硝子越しにあちこちの部屋を覗いている模様です。今も咲江が部屋で編物をしておりますと顔を硝子にペタンコに押しつけるようにして瞬き一つしないで覗いているのですもの。咲江はもう氣が遠くなるほど恐ろしくなつて、ぜひ一度奥さまのお耳に入れておかなくてはいいけないと存じましたものですから」

「まあ。いやアね。それで、どんな男なの？」

「いゝえ。女でございますの」

「あら。女なの？」

「はあ。若い女で、凄じように綺麗な人です。顔色が蒼白くて化粧していないせいか、特にそんな感じがするのかもしれないけど」

「女なら大したこともないだろうけど、氣をつけておくれ。物盗りか何かじゃないの」

「さあ。咲江にはよく解りません。だけど何だか物盗りではなさそうですわ」

「へえ。いったい何だろうね」

「咲江が思いますには、若い女の好奇心ではないかしら。だって奥さまはそんなにお美しいのですもの。美しい同性の贅沢な生活を羨望するのは、婦人の共通性ですもの。奥さまの崇拜者の一人ではございせん？　きっと奥さまの生活の參觀者ですわ」

「煽てるわね、こいつ！」

弥生子が手を振り上げると咲江はひらりと身を躲した。すると、主従二人の女性は見合せてホ、ホ、ホと笑い出した。

薔薇成長

阿南弥生子が六年生の時だった。

彼女の小学校は尋常科だけで高等科がなかったもので、六年生になると五年生以下の下級生はすべて六年生が掌握した。六年生が下級生を保護指導するという規則であったが、事實は下級生は六年生の家来になるのであった。

この小学校には、元來頑な蛮風が繼承されていた。校長の校風昂

揚の方針が意外な方面に発展していたのである。

四年生以上は、寒中ズボン、足袋、手袋をはくことを許されない。生徒の罰には、パンツ一つで理科室の冷たい板張に坐らされた。放免になるときは背の低い無髭の校長が、校長室に呼びつけて教訓を与えた上で長い朱羅の雁首で一つ宛頭をなぐった。それは殆んどお定りといってもいいくらいであった。

校長は独学で身を立てたいいわゆる苦学力行の人で、漢詩が最も得意である。彼は正義を愛し、柔弱をいみきらった。しかしこの校風昂揚の躰が意外な方向に乱脈化していたことを校長自身は少しもご存知なかった。

弥生子が四年の時、唱歌の時間であったが、楽譜の読み方をしきりに教えていた小島先生が、ふと窓外に眼をやると……校舎と農園の中間に沼があったが……その沼を五年の男の生徒達が顔をしかめて渡歩しているのである。しかも寒中だった。

薄氷が張りつめている。生徒達は膝までぬかり込む沼の中に立往生の態で、向う岸まで渡れないで弱り切っているらしかった。それを受持の重松先生がニヤニヤ笑いながら眺めているのである。

小島先生はブツと噴き出した。弥生子達は一齊に窓口に蜷集していったが、この光景をみるとゲラゲラ笑い出した。小島先生はあわて、皆をたしなめたが、この時間はとうとう唱歌どころの騒ぎではなかった。

またこんなことがあった。若山千代という三年の女の子は低脳だったのでよく罰をもらった。ある時あまり帰りが遅いので、千代の母親が学校に尋ねていくと、千代は東原という女の先生の私用を果していることが分った。千代にいわせると、教室にいて難しい算数

の答案を書くよりこの方がまだマシだと云うのである。では千代はどんな仕事を手伝わされていたかというところ、東原先生の赤ちゃんのおしめの洗濯を命ぜられていたのもであった。

六年に小田一郎という男の生徒がいた。彼は一日の中で午休みの一時間が最も愉しいのである。彼の部落の三年生以上を集めて馬に上り乗廻したり、ひょうたん鬼というのをやる。地面に瓢箪形の印をつけてその印の上を皆で取巻き、小田に指名された一人が手拭で眼隠しをして中央に立たされるとこれを四方から突きのめするのである。この遊戯は泣くまではやめない。

それから百足攻めというのがある。先頭は三年生で次々に帯やバンドに両掌の指を差入れて長い列をつくる。それを六年生が誘導して掛声をかけながら走らせる。ある距離まで隋力をつけたところでふいに先頭の方角を急回転させると後方にいるものはその回転速度について行けなくなり肉体の重みに抗し切れなくなって列の半分がブツンと切れる。すると切断された列の半身はそのまゝ大きな円を描いて将棋倒しに転がるのである。五年生の生徒の膝小僧にはいつも生傷の絶え間がなかった。

その日も小田一郎は、いわゆる彼の愉しい遊戯にふけていた。午休みの運動場の肋木の下に下級生を並べてうつ向けに伏させ、その体の上を足の方から腿、背中、頭という順に踏んで通る遊びである。四人の六年生が体の上をふんで通るのだから下級生は一生懸命だった。首から耳のつけ根まで真赤にしながら力んでいた。

三回目を渡り始めたときである。小田の眼に弥生子の姿が映った。小田は下級生の背中から降りるとニヤリと笑った。

「おい。お前達は弥生子さんを一周して来い」

さすがに下級生達がためらっているのを見ると彼は更に云った。「一周して来た者には三番まで放免してやる。四番以下は百足攻めだぞ」

これを聞くと一同は脱兎のように駆け出していった。十三人もの男の子に包囲されて弥生子の体は独楽のようにキリキリ舞った。それを見ると、小田は罰則も何も忘れたかのように手を打ってよろこんだ。が、そのあと、たいへんな事態が惹起した。

「小田！ お前でしょう。いま、私を一周させたのはお前でしょう」

柳眉を逆立て、双頬を紙のように蒼白にしながら弥生子が突っ立っていたのだ。瞬間、小田の腕白らしい頬からもさっと血の気が引いた。

「生意気だわ、学校の帰りに私の家においで。来ないときはお父さまに言付けてやるから」

弥生子の気魄にのまれてしまった小田は、一言も発し得なかった。怒りのために弥生子の唇はわなないていた。小田の両親は阿南家の小作人だった。大変なことになった。小田はもう生きた心地もない。腕白にかけては校内随一の豪の者だが、根が善良で、学校の成績もよくない彼は、このように真正面から抗議されると歯の根も合わぬくらいに震え上ってしまった。

しかも県下屈指の素封家のお嬢さまだ。彼の脳裏は恐怖と困惑のために混乱した。貧農の子、小田一郎は目上の弥生子に対して謝罪する言葉さえ知らなかったのだ。

午後の授業の一時間は、小田に取って嘗てないゆううつな時間だった。授業が終ると真先に校門を出る彼が、その日は雑のうを肩に

かけてノロクサとテニスコードの審判台に登り、元気よく帰って行く下級生達をさも羨ましそうにボンヤリ見送った。

三丁ばかりの道程を相当の時間を費やして歩いた。

阿南邸は、村社の山王神社の前を通過して約小一丁あった。白壁の塀をお城のようにめぐらせた阿南邸の表門をくぐると玉砂利が敷き詰められ、玄関脇まで花壇がつづいていった。美しい花々だった。表門をくぐり玉砂利をふみ花壇のある庭を見ただけで彼の貧しい小さな魂は息苦しいほど圧倒された。何度引返そうと思ったか知れない。玉砂利の径を中程まで歩いたとき本当に引返したくなってひょいと前方をみると、お下げの弥生子が純白の洋服の姿で、こちらをジッと眺めている視線とぶつ突かり合った。すると急に彼のこゝろの隅に捨鉢な気持が動いた。

弥生子は黙って先に立った。冷たい表情だった。小田は弥生子に従った。さながら屠所の羊である。彼の身内に新たな恐怖が湧いた。しかしもうどうすることも出来なかった。弥生子は彼を母屋の裏手にある土蔵の中に連れていった。蔵の中はジメジメと湿気があって暗かった。

「ここで待っておいで」

弥生子はそう云い遺して、ガラガラと車戸を閉めた。かんぬきを閉めた。かんぬきを下すらしい音がしたあとは完全に外廊との交渉を遮断された。三十分経ち一時間経った。どうなるのだろうか？ という心細さがはじめて小田の頭を領した。と、不意に悲しみが胸をつきあげた。彼は土間に坐ったなりすゝり泣いた。

随分長い時間だった。短い時間のようにも思われた。というのは、彼はいつの間にか土間の筵の上に眠ってしまったからである。

彼の頭の上で人の話声がしたので、ふと睡眠を破られた。眼を開くと蔵の中はガス燈が青白い炎を燃やしていてこうこうと明るかった。

小田はむっくり起き上った。

弥生子と阿南家の書生で、のちにわかったのだが伊東という男が彼をのぞき込んでいたのだった。

「起きたわ」と弥生子が云った。

「なるほど。こいつは図々しい。——おい。お前は、下級生にお嬢さまを一周させたそうだが、何でそんなことをしたんだ？」

「——」

「お嬢様を、お前は馬鹿にしていたんだろう」

「違うよ」

「じゃ、どうなんだ。お前は手を打って喜んでいたそうじゃないか。お嬢様をなぶるのが面白かったのだから」

「違うよ」

「じゃ、どういうわけでお嬢様を一周させたんだ？」

小田は返答に窮した。こう問詰められてみると、重々こちらが悪いのである。しかしその時はそのような悪意があってやったことではないのだ。それをどう説明していいのか彼は言葉を知らないのだった。

「返辞をしろ。お前はだいたい生意気だぞ。小作人の小作のくせに阿南家のお嬢さまに悪戯をしかけるなんて太いやつだ。さあ、正直に云え。お嬢さまを一周させた上で自慢したかったんだろう。そうだろう」

「違うよ」

「それなら、嗤ってやるつもりだったのか？」

「インヤ。——もうわからないよ」

「何っ？ わからない？ 馬鹿っ！」

一喝とともに伊東の平掌が小田の頬げたをなぐりつけていた。大人の激怒した顔を見ると彼はもう生きた心地がしなかった。顔がカッとはてった。続けざま、左右から平掌が飛んだ。視野が真暗くなった。絶望を感じた。彼は突如、けもののように車戸に向って体をぶっ突けていった。

「こらッ！」伊東は素早く小田の襟首をつかんで強引にひき戻した。後頭部に三つ拳が来た。もう駄目だ！ 小田は絶望のためめまいを覚えた。彼はベタベタと地べたに坐ると両手を綺麗に揃えてペコペコお辞儀した。

「もうしません。勘忍して下さい」

あまりに意外だったので、今度はお辞儀された伊東があわてた。「おれじゃないよ。お嬢様にお詫しろ。お嬢様に、もう決していたしませんからって、お詫しろ」

弥生子は土蔵の壁に背をもたせかけて冷たい眼付でその光景を眺めている。彼女の眸は異様な光さえ帯びていた。城主のお姫さまのような威厳と残酷さを湛えた表情であった。

小田に対する弥生子の感情は憤りから憎しみに変わっていたのだった。もう一つの言葉でいえば異性に対する敵意である。弥生子の学校では三大節の式典の前日に御真影を礼拝する下稽古を行う習慣であったが、女教師達がオルガンをたゝいてこの合図をするのである。最後の仕上げを全員講堂でやる。その前には受持教師が各々教室で稽古をつけるのである。弥生子は副級長であったが、担任教師の小

島先生は必ず弥生子を御真影に擬して教壇に立たしめ、六年生の生徒は彼女に向って最敬礼するのが恒例であった。一代の驕婦、阿南弥生子の多感な生長期は、あとに書くように阿南家の没落の時代が彼女の思春期であり、孤独と傲慢、不屈の人間を作りあげる素地が既にこの頃からきざしていたのである。

さすがに小田は、同年の弥生子の前に土下座するのがくやしかったと見えてなかなか応じなかった。

「お詫しろ。……おい。おかしくて謝れないというなら、こうしてやる」

書生の伊東は着物の襟首をつかみ、ズルズルと弥生子の前に引き擦って来た。そして小田の頭を上からグイグイ押えつけて土間に額をつけさせた。

「こうやって謝るんだ。こら、わかったか？」

「——」

「謝れないの。フン。じゃ、こうしてあげるわ」

それまで黙って見ていた弥生子が、履いている靴さきで小田の肩を蹴った。ハツとするほど、それは生々しい感覚だった。優柔不断な小田の態度がムカムカしはじめた。弥生子の荒々しい感情は一個の物質にむかって殺倒した。狂暴な精神作用であった。弥生子の稚い肉体は、同時に一人の異性である小田一郎の肉体に向って飛びかゝって行った。

「馬鹿っ！ 馬鹿っ！ 生意気なくせに、お前は本当に意気地なしね。意気地なしなんかこうしてやるわ」

小田の体の上では、弥生子の激しい舞踏が始まった。それは二つの肉体の革命を意味するものであった。

シヤクテイの蜜

三十代以上の読者の中には昭和××年九月下旬、ピストル自殺した阿南伴之助の名前をまだ記憶される人もあるだろうと思う。嘗ては農民から推されて代議士に出馬当選したこともあったが、それよりも彼が北九州の肥沃、筑後平野の過半を所有する素封家であったこと、県下屈指の多額納税者であったことなどが著名だったからである。阿南家の崩壊は世間の耳目を聳動させるに充分であった。それほど阿南家没落の症状は早く実に一瞬の崩壊であった。金解禁時代を前後して深刻化した株式界の不況は、私鉄株、製鉄株に動産の全部を投資していた阿南家の不動産にまで波及したのである。最初に、六百年も経っていると云われた山林二十町歩が人手に渡った。弥生子が十七歳であった。彼女は伴之助の一人娘で、長男の伴之は正妻であったが四男、一女のうち弟妹は妾腹の子であった。弥生子の母は彼女が五つの時に死亡している。二男の槌衛は南方に渡り、三男の城之は在学中左翼に走った。四男の弥二郎は北支にいるという噂はあったが、事実は消息不明だった。

阿南家の内部崩壊の中にあつて、その圧力に苦悩しながら成長をみた弥生子の肉体と精神の歴史に小田一郎の名前は大きく記録されねばならぬだろう。

小田が阿南家に下男奉公したのは十六の歳、白米十三俵であった。十六の歳から二十三の歳まで、恰度阿南家没落までの八年間を勤めあげているのである。崩壊する門閥の虚栄の中に閉じ籠められた阿南弥生子という女性の性愛の神秘を啓いてくれたのがこの小田だった。

小田は弥生子の最初の男性であった。小田が死んだのは二十四の歳である。暮春、強烈な花の香が部屋いっぱいに充満して昏れなずむ西の空がいつまでも明るい夕暮だった。烈しい声で弥生子の名を呼びつづけていたが、その声は次第に細まっていったという。

弥生子は、奉公した当座、小田が無口であるのは装っているのだと思っていた。事実、彼はつとめて弥生子を避けている素振が見えた。そんなとき彼の色白い顔はくれないに染った。一見、彼の腕白は想像出来ないほど色が白く、小田は優男だった。人間というものは、一度恐しい目に遭遇すると、こうもおとなしくなるものかと思うほどに、小田の豹変振りは他人の眼にも不思議なくらいであった。特に弥生子からの用を言付かったときの彼の物腰の鄭重さは、いんぎんを極めた。

阿南家は終焉期に入り呻吟していたところで、家庭の中は暴風が吹きあれていた。自然、弥生子の身辺にも浸蝕していた。兄の伴之夫婦に親しみをもたない彼女は、父伴之助が唯一人の味方だったが、その父も殆ど家にいなかった。夜遅く、酒気を帯びて自動車で帰るのが常であった。のちには、棲さばきも鮮やかな美しい妓達、三人五人というように離室を占領してしまい三絃にあわせて下品な歌をうたいながら徹夜するようになった。

美しい悪魔達にふみあらされたような憤りを弥生子はいつも感じていた。こんなとき弥生子が一番たよりにしたのは、小田である。女中は五人もいたがどれも事務的で小田のように細かいところまで届かなかった。小田は何かにつけて細かく、近來目に見えて気難かしくなる弥生子の用事を巧みに果してくれた。

面白いのは、他の者の用事を務めると、小田はいつもトンチンカ

ンばかり演じたことである。使用人達が蔭で「あいつは、やっぱり馬鹿だよ。お嬢さまのお気に入りなのは、あいつが馬鹿だからさ」と悪口を云ったものだが、弥生子に対する小田の奉仕の中には厳肅な真剣さがひそめられていたのである。丁度それは祈りに似たものであった。

弥生子は、小田さえ傍にいれば、いつも機嫌がよかった。そういえば、弥生子は非常に潔癖な性分で顔や手以外には他人に彼女の皮膚を見せたことがなく、洋服を着ればかならず絹の靴下をはいた。それは真夏の盛りでも同じであった。そのくせ弥生子はいつも小田を浴場に呼んで彼女の体を洗わせた。休中、足の爪先まで洗わせるのであった。

生花、茶の湯、作法、琴、ピアノというように一通りの身嗜みは勉強していたのであるが、そのどれもが彼女には愚劣な形式であった。弥生子は形式を軽蔑した。弥生子は貪るように小説本を耽読した。そこにも、形式がウンザリするほど出ていた。女という女はみんな愚劣で、男の附属物であった。

彼女は怒りを感じた。時たま、女が男を統御する場面につき当たると彼女は気をよくした。小説に飽きると、今度はピアノをポンポンたゝいた。ピアノにも飽きると庭下駄をつっかけて土蔵の裏の畑にブラブラ歩いていった。そこは野菜畑になっていて、小田の受持だったのである。

裏の畑に出るのは、日課の一つであった。小田はいつもせつせと小まめに仿っていたが、弥生子の姿を認めると畑の土の上に土下座して、額を土につけて迎えるのが習わしであった。そうされることは弥生子に取って愉しいばかりでなく、小田に最も近い親味を感じ

るのであった。

ある時、柿の木に登って柿の実をもぎとり、美味しそうに食べているところへ弥生子が来あわせたことがある。バツが悪かったものか、小田は柿の木の上ですくんでしまい、顔をあからめながら、「お嬢さま、ちぎって差上げましょうか?」

とおずおず云った。弥生子は不機嫌な表情をハッキリ現わして



「いらないわ」

ブンとして白菜畑の方へ行ってしまった。

小作人の地所と畑の境界には、椿や柃の生垣がめぐらせてあったが、鶏が四羽、畑の中に這入りこんで白菜をつまんでいるのが眼敏く弥生子の視野に触れた。

「小田、あの鶏、殺しておしまい!」

鋭い語気であった。鶏は一羽だけが捕まった。小田は素早く鶏の頸を締めた。もがいていた鶏はすぐ彼の掌の中でグッタリとなった。それを弥生子の足下に置いてかきこまると彼女はようやく機嫌をなおした。

しかし、その夕方、事件が起きた。鶏のもち主から嚴重な抗議が来たのである。安達遼というのは、自作農安達久造の二男坊であったが、阿南家の仕打に大きな怒りを感じた。彼はお嬢さまにお会いしたいと玄關から悪びれずに面会を求めた。弥生子が出てみると、遼はベコリともしないで彼女の顔をにらみつけた。

「何か御用?」

その高圧的な物の云い方が遼のカンにグツと来たらしかった。

「はい。実はお嬢さまにお尋ねしたいことがございまして」

「そう……。何よ」

「鶏はたしかに一郎君より頂戴いたしました。しか



しあれは死んでおりました。何故殺されたのでしょうか」

「お前の家には鶏舎もないの？」

「あります」

「あるなら、鶏舎に入れて置けばいいじゃないの。放し飼いはいけな
いわ。他所の屋敷に無断で這入るじゃないの。県令では殺されても
文句は云えないわよ」

「その感情的な貴方の冷酷さが、僕はいやなんです。……それなら
云いますが、竹越山の西側に僕の家の畑がありますが、あそこは、
しよっちゅう陽の目を見ません。貴方のお家の山林があるからで
す。あれはどうなるんです」

「つまらないことというのね。どうもならないわよ。お前の畑と私の
家の山林とどんな関係があるの。おかしいわ」

「ちっともおかしくありませんよ」

遊は昂然と云い放った。

「失礼ですが、貴女は人間の最も危険な感情をもっていらっしゃる
ようですね。物事をすべて法律的な利害関係で解決されるのでした
ら、もはや何をか云わんやです。お嬢さま！ それでは人間の世界
は冷たいものではありませんか。愛情など、何処にもなくていいわ
けです。なるほど僕の家は鶏がお宅の屋敷に這入りこんだのは、重
々こちらが悪いに違いありません。しかし鶏は人間ではないので
す。いや、ちよっとおどかしてやれば、すぐ逃げていく家畜にすぎ
ません。なぜ追って下さらないのですか。いいえ、僕達の不注意を
なぜ怒って下さらないのですか。僕はそれが口惜しいのです」

「おやおや。家畜に愛情論が成立するかしら」

「成立しますよ。僕が云うのは、人間社会の一般論です」

「お黙りっ！ 何で私はお前に説教されねばならないの。云いたい
のは私の方じゃないかしら。失礼な！ お帰りっ！」

安達遊はたじろがなかった。いゝ機会である。この際云いたいこ
とは余すところなく云ってやろうと思った。弥生子が聰明であるな
らば、わからないことはないとおもった。家柄という虚栄の中に閉
じこもり、あたかも権政者のような態度を示して君臨する女性には
んとうのことを聴かしてやろうとおもった。

「思いあがった人間というものは自分の足下に気付かないもので
す。これは大変危険なことです。女性の美しさには、必ずもう一つ
の要素があります。それは同様にその人の優しさが大切であるとい
うことです。お嬢さま！ 物の例えがですよ、貴方は阿南家の令嬢
でしょうが、これが逆に安達の娘でしたら、どうなりますか。失礼
ですが、僕は貴女を特別な眼で見たくないのです。貴女は唯の人間

ですよ。いゝですか。阿南という家柄を除けば、僕を無礼者よばわりする資格がどこにありましょう。人間はですね、生きるためにももっと大切な愛情の学問を忘れてはいけませんよ。では失礼します」

還はサッサと出ていった。

その夜、弥生子は黙り込んでしまい小田とも口を利かなかった。入浴の流しに行っても、そうであった。いつもだと、一日の疲れをこの入浴の時間に回復させるのだといって、小田に体を委せたきりウキウキと談笑するのが常であったが、その夜は、別人か何かのようにならぬ表情に押し黙っていた。田舎の就寝は早い。八時過ぎ、離室の彼女の部屋に寢床の準備に伺候してみると、弥生子は眩椅子にかけたまゝ額を支えて眼をつむっていた。

「お嬢さま、おやすみ下さい」

床を取ったあとで、小田が彼女の足下にかしこまると、始めて弥生子は眼を見開き、彼を見た。その眼は珍しいものでも見るように小田の上に注がれた。

「小田、本当のことを云っておくれ、私は知りたいの。お前は、私がいづつもわが儘ばかり云うのが、本当はおいやではないの。いゝえお腹の中では、私を軽蔑しているのではないの、本当のことを教えておくれな」

小田には、その意味がわからなかったとみえて、唯ボカンとしていた。それが習慣になっている最大の謙譲さをもって床に額づいていた。

「小田、顔をあげて私を見ておくれ。私をぶっっておくれ。へり下ってばかりいないで、堂々と私をぶっっておくれ。私はお前と同じ人間

なのよ。私はつまらない女よ。ね、小田！ 私をおもいきりぶっっておくれ！」

弥生子は小田の前にペタリと坐り込み、彼の顔を両手ですくいあげた。と、いきなり小田の唇に彼女の熱い唇を重ねた。

「私はお前が好きなのよ。さあ、男らしく私をぶっっておくれな。私はお前になぐってもらいたいよ。私は唯の人間なのよ。私はお前と同じ人間なのよ」

「お嬢さま！」小田は感激で唇をワナワナふるわせながら云った。「勿体ないことです。小田は、お嬢さまのためなら、何でもいたします。死んでも構いません。でも、お嬢さまをぶつなんて、どうしても出来ません。これだけはご勘弁下さい」

「どうしても、おいやなの？」

「はい。こればかりはお許しのほどを……」

「そう……」

弥生子は立上った。

「じゃ、お前は私がどんなことをしても、お前は私を許してくれるのね。腹を立てたりしないわね」

「小田は、その方がうれしいのです。お嬢さまのためなら死んでもいゝと思っています」

弥生子は、やにわに足をあげて小田の肩をグイグイ踏みじった「こんなにされても、お前は怒らないの？」

「いゝえ」

「そう。じゃ、私がわが儘なのは、お前にはうれしいのね。わかっただわ」

弥生子の眉間にはじめて晴々とした美しさが蘇えった。弥生子は

寝台の上から細紐をもって来た。黙って小田の口にくわえさせると背中に跨った。

「お前は、今日から私の馬にしてやるわ。お歩き！」

馬の小田一郎はグルグル這い廻り出した。弥生子は面白がって、かがとで馬の横腹をけり、ハイシ、ハイシと急がせた。寝巻が腿まではだけて二つの艶やかな脚が裸になった。

その歳の二百十日は風速三〇米の暴風が徹宵吹きあれた。なまり色に激んで西の空合にあやしい雲が蜩集して次第にその版図を拡張していったが、夕刻から雷雨を交えたので一層凄みを加えた。青白い閃光が青インクを筆にふくませて撒きちらすようにタラタラッと不気味に流れた。

弥生子は、雷鳴を添える夜色にすっかり気をよくし、爽快な気分を満喫していた。彼女の性格の底には抵抗を好む一面があった。

「あゝ、私は雷が鳴るとウキウキするの」

タイル張の湯殿だった。弥生子は小田に体を揉ませていた。

「小田は嫌いです」

「ホ、ホ、ホ。お前は弱虫ね」

「でも、お嬢さまと一緒にだともありません」

「お前は私が好きだからよ」

「そうでしょうね」

そんな会話を交した。流しが終わると弥生子は寢室に帰り小田に全身マッサージを命じた。背から腰、腿、足という順で乳液を掌に移し取って揉んでいくうちに小田の呼吸が急に乱れ始めた。

「お嬢さま！」

突如、小田は弥生子の両脚を胸に抱き締めて荒い息使いをした。その眼は妖しく燃え立っている。

「何？」

「お嬢さま！ 貴方のおみ足で小田を踏んづけて下さい。もう、小田はたまらなくなりました」

「ホ、ホ、ホ。私の足にキスさせてあげるわ」

「はい」

「足の裏にキスおし」

近くの山林に落雷したらしい大きな地響きがした。が、二人の聴覚には、はるかに遠い距離の物音でしかなかったようだ。

「いやン！ 擦ぐったいわ」

弥生子は思わず身震いした。はげしいよろこびであった。彼女の方までその感覚でしびれて来た。弥生子の快楽の中で、いつかの夜の小田に対する憎しみが蝨のように鎌首を上げた。顔をふみにじった。すると快感を刺戟した。彼女は神様になったような気がした。足の指で小田の鼻をつまみあげた。小田は苦しそうに顔をふつた。その恰好がおかしかったので思わずクスリと笑った。笑いも快楽の一部である。

「お嬢さま！ 小田にお情を——」

小田は眼をトロトロと燃やしながら、足の甲に口づけした。唇は少しずつ上に登っていった。脛から膝、腿へと移動した。

「お嬢さま、小田にお情を——」

狂気の情熱だった。ふるえる小田の指さきがスーッとパンティに伸びてくる。

「いやン！ 小田、およし！ およしったら！」 弥生子も本気になって小田の頬をパンパン打ち始めた。切迫した小田の息使いはとても鎮まりそうにもない。暫く興奮の格闘が続いた。と、弥生子はす

うっと立上り、

「じゃ、お取り！」

と云った。まぶしいまでに蒸たけた裸身だった。小田は油を注がれたように新に燃えあがりながら、二本の円柱を抱え、頬をこすりつけて熱い息を吐いた。

「お嬢さま、小田にお情を——」

無言の弥生子の眼にキラキラと光るものがあつた。勝ち誇った恋の女神の傲慢さがいみじくも彼女の頬に刻まれていたのである。

ゴーツと雷鳴、ザ、ザーツと樹木の梢を撓める風の声、瓦の落下する音。

孔雀羽ばたく

撫順駅前の、土産物を売る商店が軒をつらねる中に、閑古堂というのがある。丸木喬介の店である。石炭、天然琥珀の細工物の類を商品に出している店であつたが、ある夏の午下り、洋車に乗った婦人客が店に這入って来た。パイプ、帶止、カフス釦など七種類もの琥珀の高級品ばかりを選んで届けるように云い残して立ち去った。



「何者かしら」

妹の閑子が審かったほどその婦人は妖しい美しさを持っていた。阿南弥生子と丸木喬介の結びつきはこのときからであったが、一年後には喬介の狂気に等しい弥生子の崇拜から閑古堂は破産し、妹の閑子は満鉄病院の一附添婦にまで零落したのだった。

読者諸君の中には、満洲國の日本人高官の大半が満洲妻を抱えていたことをご存知の方もあらうと思う。新京には満洲妻専用のアパートが建ったくらいである。嘘でも誇張でもない、実際にあった。この種族は高官のそれではなかったのだから、いかに満洲妻の魅力が流行をきわめたかは容易に想像つくだろうとおもう。

阿南弥生子の豪奢な生活経済に、この満洲妻の収入があったことは世間にもあまり知られていない。関東軍経理部長陸軍中將という肩書の秘密事項でもあったのだろう。美しい一羽の孔雀の拡げた羽根の羽搏きに、打ち摧かれた愛難者は幾人もあった。円城寺一等兵もその一人だった。

やはり夏の直射光線の強い暑い日だった。円城寺一等兵は公用で奉天から撫順線に乗り換えた。彼は立花閣下の当番兵であったが、応召前は協和会の広報写真の仕事をしていた。『満洲建国写真年鑑』という豪華な写真画帖は彼の丹精の編纂の成るもので、なかなか立派な仕事だった。

列車が動き出して彼は二等車に這入っていった。ガラ空きだった。左側の座席に腰を降して、ふと前を見ると、三つばかり先のそこからはずかしくなる右側の座席に一人の婦人が乗っているのが眼にとまった。車中が一遍に明るくなるように綺麗な女性だった。ツバの狭い白い帽子、白いレースの夏服、これも白の皮のハイヒール、

ル、万事白づくめであるが、赤色のハンドバックだけが妙に印象的であったことと膝に組んだ絹靴下の脚の線の素晴らしさに彼は眼を奪われてしまった。その脚は彼の方へなだらかに伸びている。円城寺はわれに返った。と忽ち氣持の上でカメラの焦点を合せ出した。背景には窓の一部を入れよう。靴の爪先まで入れるとなるとこの位置からすこし無理かな。シャツターを切る。ハイ一枚。次は半身像で行こうか、プロフィールで行こうかな。

円城寺一等兵はすっかりうれしくなった。

「失礼します」

汽車の旅は人懐っこくする。彼はサツサと婦人の前の席にかわると勢よくクッションに腰を下した。

「自分は撫順は始めてで地理を知らないのですが、失礼ですが、貴女は撫順を知っていらっしゃるでしょうか」

「——」

ジロリと一瞥を与えた眸の冷たさに彼はハツとした。無礼な、と云わぬばかりに横向いた婦人の耳に、水晶の耳輪がユラユラと揺れた。「失礼しました」彼は立上って拳手の礼をした。「撫順の永安大街というのは駅から遠いのですか。撫順新報という新聞社のある通りでありますか——」

婦人の視線は元に戻った。円城寺の二つ星の肩章を確かめるようにジロジロ見た。それから頭のとっぺんから軍靴の爪先まで眺め降した。形のよい唇の端に嘲笑するような笑いがかすかに浮んだ。が、やはり彼女は黙殺した。

相手が美人であり、好意をもっていただけに円城寺はムツとした。激しい屈辱感にカッと熱くなった。だからといって今更席を替

えるのも癪である。

長い沈黙であった。やがて列車は撫順駅に着いた。

婦人が先に立った。円城寺が立ったのはそのあとであったから、アミ巾袋の片方が通路に落ちたのに気付かない婦人に、つい声をか



けてしまった。

「手袋が落ちましたよ」

二等車の降口まで歩いていった婦人はこちらを見た。気持を悪くしたものの根は善良な円城寺である。彼の方から手袋を拾いあげて持ってゆくことにした。するとこちらに向き直っていた婦人はくると姿勢をかえてホームに降りてしまった。

「手袋です」

後を追って円城寺は婦人のために手袋を届けた。が、彼女は受取ろうともしないのだった。けがらわしい、とでも云いかねない表情がアリアリと見えた。円城寺は思わず大きな声を出してしまった。

「受取って下さい。困るのです」

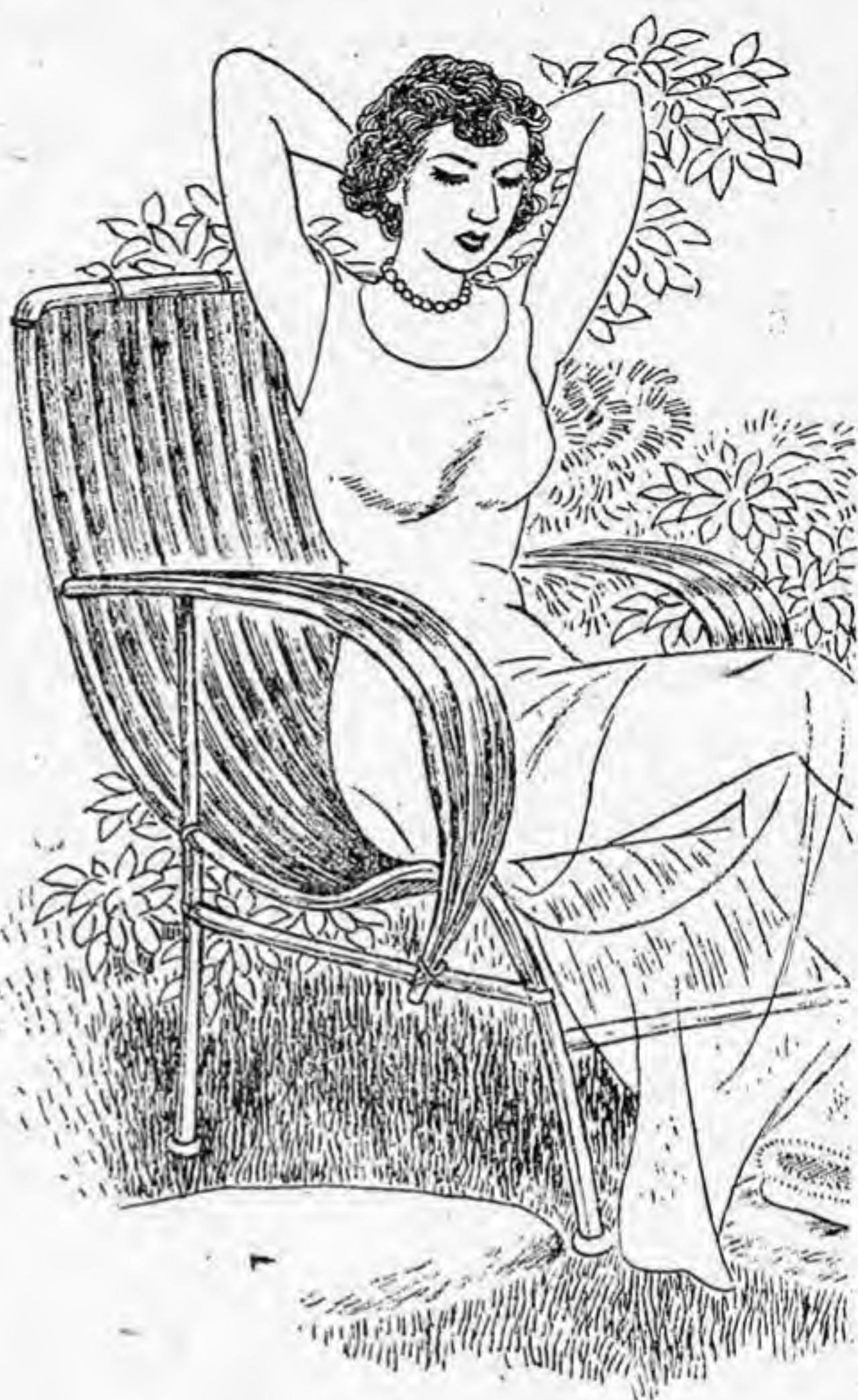
婦人はヒラリと身を躲した。ホームに降り立った乗客達が物珍らしそうにふたりの挙動を眺める風景が、興奮している円城寺の視野に映った。

「貴女は、どうして自分を馬鹿にするんですか。自分分は兵隊です。貴女なんか、馬鹿にされる理由はないですよ、お取りなさい」

婦人の前に立ちほだかり、手袋を突き出すようにして受取らせようという姿勢を取った。と、婦人は左によけた。円城寺がそちらに寄ると右によけた。

「軍人を馬鹿にするな！」

勘忍の緒が切れた。円城寺の平掌が婦人の左頬に飛んだ。直に婦人の顔は怒りのため、少し蒼白に変



ったが、やはり無言であった。

完全に円城寺の敗北である。散々だった。彼は胸の塞がるような重い気持で出札口を出た。

円城寺一等兵が駅員に教わった道順をたどって『阿南寓』を探しあてたのは、それから小一時間も経ってからのことである。

呼鈴を押した。

出て来たのは綺麗な顔だちの小間使だった。

「自分は部長閣下の当番兵、円城寺一等兵であります。部長閣下の命令で奥さまにお使いに参りました」

小間使は彼の身分を信用したのであろう、奥にも取次がずに応接

間に通した。いつも彼の受けている当番兵の待遇とおよそかけ離れた感じがしたが、閣下からのことづかり物を渡すまで、やはり大切な使者に違いなかった。

ほまれを続けて三本吸った。十二、三分の時間が過ぎた。

人の気配がした。円城寺は機械的に服の釦などを確かめると立上って不動の姿勢を取った。阿南弥生子は落着いた上品な物腰で這入って来た。

「あっ、貴女は——」

「——」

二つの視線は途中で火華のように組み合ったまま動かなかった。

階級意識の強かった時代である。兵隊だと葉書一枚で召集出来るが、馬となるとそうは簡単に行かぬ、そんな言葉が平然と使われた時代である。兵隊が、用紙や鉛筆のように消耗品と同じく見做された時代である。

「さっきは、本当にありがとう」

弥生子は勝ちほこったように笑った。

「はっ！ 自分が悪かったであります」

どう詫びたらいいのだろう。円城寺はその言葉に詰った。本当は何にも悪いことした覚えはないのである。が、彼のこゝろは陸軍中将の肩書の前におそれ戦いた。最大級の謝罪をしなければならなかった。と思った。が、それにはどうしたらいいのか彼にはわからなかった。

突如、円城寺進は、床に身を投げた。床に這いつくばり額をすり

つけんばかりにして詫を入れたのである。それが彼の部長閣下夫人に対する最大級の謝罪の表現であった。

「その位の謝りかたで、私が許すとも思ってた？」

弥生子は安楽椅子のクッションにフワリと身を投げた。

「こゝへおいで！ 私の足もとに」

上履の爪さきを軽く立てトントン床を鳴らしての催促である。

職業、容貌、性格の異った男達をその足下に跪かせ、踏みにじる
ときの激しいよろこびを、彼女は幾つも体験している。彼女を最も
興奮させるのは、男が足もとに屈伏した瞬間である。これから彼女
の魅惑を試みる冒険が待ち構えているという期待で胸は切なくうず
くのだ。どんな身振りでこの男は私に抵抗するだろう。ヒイヒイ悲
鳴をあげながら私の足の爪さきに接吻し、どんな憐れみを乞うだろ
う。

今日の円城寺は、まさに拾いものであった。あの野蠻で、身分の
卑しい兵隊がこの円城寺であったとは——全く神様の思召に違いな
かった。どうしてくれよう。弥生子はゾクゾクした。

何だか様子がヘンである。でも、円城寺はその形式の表現につい
て疑わなかった。いわれた通り弥生子の足もとに蹲まっけていねい
に頭を下げた。

「頭が高い。もっと額を床につけて」

千姫の声音を連想する場面であった。円城寺は始めていぶかしさ
を感じた。彼の卑下するポーズを強制して楽しむような閣下夫人の
態度に軽い反撥を感じた。

「お謝り！」

「はっ。円城寺が悪かったですであります」

「お前は私の顔をぶったわね」

「どうぞ、どうぞ許して下さい」

「お前は、閣下を殴ったのと同じなのよ。もう一度殴ってごらん！
さあ、もう一度、軍人を馬鹿にするなって、殴って御覧たら！」

「この通り謝ります。どうぞ許して下さい」

「馬鹿っ！」弥生子の上履が彼の首すじをグンとふみつけた。

「この蛆虫め！」

意外な重罰に彼は逆上した。ムラムラと湧き立つ怒りが心頭に発
した。彼はムックリ顔をあげた。

「頭をふむとは何です。女のくせに」

「何よ。お前なんか軍法会議につき出して禁錮刑に服したらいいの
よ。閣下に報告しようか。どう？」

彼は青ざめた。可哀想に、彼は一兵士であった。阿南弥生子の本
当の正体のわかるはずがなかった。閣下夫人の怒りを買ったそれ
こそどうなるであろう。彼の脳裏に父母の顔、姉弟の顔がクローズ
アップし、監房の鉄格子がオーバーラップした。

「閣下には、閣下にはどうぞ御内密に、そのかわり奥さまのお云い
つけにはどんなことにも服従します。円城寺一等兵、嘘は云いませ
ん。お願いであります」

円城寺は弥生子の両脚に縋りついて哀願した。

「ウフ、フン。そうかい。私にピンタ取られてもいいとお云いなん
だね」

「はっ。いゝです」

「そう。じゃ、私の奴隷になり下るがいゝわ。お前、奴隷という意
味知ってるかい？ 教えてあげるわ。私のおみ足をお前が押しいた

だいて舐めるんだよ」

「そんな……」

「出来ないっていうのかい。私の命令なら何でも聞くと今いったばかりじゃないか。今いった言葉は嘘なんだね。そう。お前は私に嘘をお云いなんだね」

「いゝえ。違います」

「どう違うんだい。私にあんな暴力を揮って置きながら、すみません位で済むとも思うの。お前に軍人精神が充実しているなら、のめのめ生きていられないはずなんだよ。眼をおつぶり！」

彼女の白い手首が蝶の舞うように躍って円城寺の頬をパンパンとぶった。

「そのまゝ不動の姿勢を取っているんだよ。いゝわね」

「はっ」

弥生子はドアに鍵をかけた。洋服簞笥の抽斗からガチャガチャいわせて手錠を持ち出した。

「腕をうしろにお廻し」

円城寺の双の手首に手錠が食い込んだ。次は足首に。

「ホ、ホ、ホ。もうお前は煮て食おうと焼いて食おうと私の思うまゝよ。私の指一本でお前の体は転がせるのよ。ほら、この通りにね」
弥生子は円城寺の背中を突いた。彼の体は膝を折りまげてあっけなくうつ伏せにぶっ倒れた。こめかみを痛めて軽い脳震蕩を起したくらいである。

「どう。これから面白い遊びが始まるのよ。お前に天国の夢を見せてあげようね」

弥生子の姿は衝立の蔭にかくれた。軽い衣ずれ——円城寺の早鐘

のように鳴りやまぬ鼓動は破れそうであった。

「どう？」

現れた弥生子は、ブラジャーとパンティだけの裸体だった。五尺三寸、十五貫の堂々とした重量感のある体である。眩しいばかりの白い滑らかな皮膚であった。足には室内靴を穿いている。

「これから天女さまが、雲の上を渡るのよ。お前は雲よ」

脚の上に彼女の靴が乗った。円城寺はかんねんした。息を殺して耐えた。重みは腰まで渡り、背中に来た。彼は直感的に顔の位置を横へ倒した。十五貫の重量の下に堪えられそうにもなかったからである。後頭部をグッと踏まれた。

「ウーン」

円城寺は歯をくいしばっておもわずうめいた。

円城寺の体の上を弥生子は往復三回歩いた。肉体的、精神的に受けた拷問のためであらう、弥生子に手錠を解いてもらったあとも、彼の顔は土気色に蒼ざめてうつろだった。

「ウフ、フ、フ」

エム・シイシイを啣えて一服つけると、弥生子はさも気持よさそうに笑った。

「どう？ 天国の夢は、はじめは苦しいだろう。でも、間もなく阿片のようにむらさき色のよろこびがたなびいて来るわよ。私の足もとにおいで。痛むかい。お前をふみにじった私のおみ足にキスするんだよ。掌を重ねて……。ばかっ、恭々しく押しただくんだよ。初めに足の甲。もう少し強く吸うの。それから指先の一本、一本にキスおし。いゝかい。私を生神さまとしてあがめ祭る気持ですのよ」

「とても難かしくて自分は出来ません」

「お黙り！」弥生子は柳眉をつり上げた。白い足首がヒラリと躍っていた。割れるような音をたて、円城寺の額は蛙のように床に踏んづけられていた。

堪え忍んでいた円城寺の咽喉の奥から、ククという嗚咽の聲が迸り出た。肩が大波のようにゆれる。すると弥生子の顔色がバツと輝やき出した。

「おうお、可哀想に、感激のあまり泣き出したのかい。無理ないわねえ」

残忍な眼の光も恍惚感にしっかりと湿っていった。弥生子はドアの鍵を外し呼鈴を押した。

取次へ出た先刻の小間使が顔を見せると上機嫌な弥生子の声は歌うように命じるのだった。

「美枝、お風呂の湯加減を見ておくれ。お客様を御案内するのだから」

牛乳風呂の饗宴にあずかった円城寺一等兵はその日の夕刻許されて阿南寓を出たが、ウツウツとして愉しまなかった。

彼は続けて立花中将の公用を持って撫順に出た。もとより阿南弥生子の指金であった。弥生子の履いた靴を磨かされたり、舐めさせられたり、あるときはその靴を叩いて庭の芝生をグルグル這い廻されたりした。しかも二人の小間使も弥生子の傍にいてキヤッキヤツと笑いながら見物しているのである。眼から火が出るほど羞しかつたけれど、そうさせられることが妙におどけた快感となって彼の胸の中をかけめぐり出すのを禁じ得ないのだった。ある時は美枝が彼

の背に馬乗りとなり細紐を口にくわえさせて調教したこともあった。大粒の汗の玉が彼の首筋をつたって流れる。ハアハア息を切らせる頃、弥生子の前でストップを命じ、今度は弥生子が足をつき出して

「よし、と云うまで」と命令で舐めさせられた。弥生子は竹製の椅子にユツタリ掛けて「擦りたい」とか「いい気持」とか云った。そんなあとで

「咽喉が乾いたろう、お茶あげよう」

円城寺は本当に水が欲しかったので、咲江が出したコップのお茶を一気に飲み干したこともあった。ジツと息を吞んで視つめていた六つの眼が、飲み終ると同時にワツと華やかに笑い崩れた。

「おいしかったろう？」

「ホルモ

ン葡萄酒

だから、

肥るわ

よ」

弥生子

は澄して

いる。複

雑なモナ

・リザの

微笑を頬



にうかべて円城寺の顔を見降していた。

「どう？ 一等兵どの。お茶のお味は？」

「はっ。おいしかったであります」

「おいしくなかったら罰が当るわよ」

又ワツと笑った。弥生子は静かに

「今のは私のおしっこよ」

「はアッ！」

おどろく彼の顔がおかしいと云って美しい小間使達は腹を抱えて笑いころげた。

公用が三回四回と回を重ねる頃は円城寺一等兵も弥生子の訓練を受けて、理想的なマゾヒストと化していた。

円城寺に興味を失った弥生子が最後に彼に贈ったものは彼女の履き古した一足の絹の長靴下であった。

「私の履き古した靴下をお前にあげよう。宮内の生活は寂しいだろうから私だと思って大切にするんだよ」

「はっ。ありがとうございます」

もう、ふたたび公用もないであろう。それと知るよしもない円城寺は、玄関先で不動の姿勢を取り挙手の礼をした。あゝ顔見るのも汚らわしい！ 弥生子はくると踵を返すなりサッサと自分の部屋の方へ歩きながら素晴らしい男はいないかなあ、とクサクサしたように次の獲物について想像をめぐらせていた。

彼女の頭の中には、すでに円城寺のカケラも残っていなかった。



地獄天国

リ、リ、リーンとベルの鳴る音。

三日に一度、牛乳風呂のたつ日である。美枝と咲江は顔を見合せ

た。

「奥さま、喬介さんをお呼びなのよ。咲江さん行ってみてよ」

「いやアだなあ」

「喬介さんに頼まれたのは貴女でしょう」

「ウン。それや、そうだけど、こんなに時間がかゝるとは云わなかったもの」

「とにかく、たのむから行ってみてよ」

咲江は洩々弥生子の居間に伺候した。はたして

「喬介は？」

「はあ。唯今外出でございますわ。もうお帰りになる時分ですけど」

「御用は何なの」

「はい。――」

「何にも云わなかったの」

「いゝえ。駅前の食堂まで出かけるんだとかおっしゃってでございました。カルピスの売行き状況を見て来るとのこととでございましたわ」

「カルピスって、どういう意味かしら」

「あら。奥様はご存じございませんか。喬介さんは以前から、分離機というのを買って来てバターとカルピスを製造していますわ。何でも牛乳からバターを採ればあとは脱脂乳だから、砂糖で甘味を加えて沸騰させるとカルピスになるんだとおっしゃってでございましたわ。お金儲けしたら咲江や美枝にも、欲しいもの買ってあげるんですって」

「フウーン。知らなかったわ。じゃ、原料は私の這入った牛乳なのね」

「はい。廃物利用ですって」

「フ、フン。面白い男ね。喬介が帰ったらすぐこちらに来るように云っておくれ。私は何にも聞かなかったことにして置くのよ」

「はい」

咲江は下っていった。弥生子は居間を出て湯殿に這入った。香ばしい乳液の中に身を沈めると得もいわれぬ快さがしみ込んでくる。

コツ、コツとノック。

「喬介かい？」

「はい」

「お這入り」

弥生子は水色のリボンでボブの髪を束ねて胸まで乳の中に浸っていた。喬介はタイル張の床に深く腰を折ってうやうやしく頭を下げた。それは如何なる場所においても、彼女の前に出た場合に行わねばならぬ礼儀であった。

「お流ししましょうか」

「うゝん。いゝの。もう一度這入るからその時に流しておくれ。すぐ上るから私のお部屋でお待ち！」

「はい」

廿分もすると、弥生子は牛乳の栄養の香のブンブン匂う肉体をガウンに包んで部屋に帰った。

「ペディキュア」

「はい」

喬介は化粧台に凭れた弥生子の足もとにうづくまった。絨氈の上には必要な道具が揃っている。スーツと弥生子の片足が膝の上に乗っている。三日に明けず手入を怠らぬので爪は僅かに伸びているだ

けである。鉄を使うまでもない。ヤスリを取って丹念に形を整える。爪の生え際は甘皮押しとニッパを使って仕上げコールドをつけてマッサ！ジして拭き取る。自然の光沢を出すにはパッファで爪の根元から隅々まで磨いて行き、最後に無色のエナメルを塗るのであるが、喬介は爪の一つ一つにフーフー息を吹きかけて乾かすのだった。

「全身美容はあとでなさいますか」

「あとにする。それより踵を触って御覧。硬くなってるだろう」

「いいえ。柔かいです」

「嘘お云い。このズル奴隷！　すぐ、おやり！」

喬介はかしこまって仰向けに寝ころぶ。桃色の裸のくるぶしが彼の口へ割って入ると、喬介は軽く歯を立てて静に徐かに踵を削り出した。

大陸の陽は赤い。血の燃ゆるような残光が夕なづむ空を焼いたかと思ふ間に夜のとぼりは、もう翼を一ぱいひろげて掩いかぶさってくる。

ツバキがコンコンと湧きあがる。最後のツバキをゴクンと飲みほして、くるぶしをアルコールで拭き清めたあととクリームをのばしてマッサ！ジした。たっぷり一時間はかかった。

坐り直して改めてうやうやしく足の甲にキスした。と、弥生子の足がいきなり彼の頬を、いやというほど蹴りあげた。

「喬介！」

「はい」

「お前は私に恥掻かせようとたくらんだわね」

「は？　何でしょう」

「お前は私の浴びた牛乳でカルピスを造り、売り出してるだろう。もし、出所が私だと分ったとき、どうおしだい。罰してやるわ」

「いいえ。僕は何もそんな悪意があつてやったものではありません。勿体ないと思つたのですから、つい……」

「勿体ないだって。フン。この人間糞巾め。私の罰を逃れられるとでも思っているのかい」

「女王様！　お許し下さい。私が悪かったら謝ります」

「悪かったら？　こいつ、まだあんなこと云ってるわ。ひどい目に会わしてやるから」

長椅子の肘に細く、長い竹の筥が立てかけてあつた。それを手に取ると空にヒューッと唸りを生じて、威力を示した。二回、筥は空を切った。三回目は喬介の背に音を立てて跳びついた。ヒューッ！　喬介は中腰となりオロオロして掌を合せながら逃げ廻る。それが更に弥生子の気分を害した。筥は最大限の振幅を発揮した。喬介の異様な悲鳴が部屋中を登音とともに入り乱れた。ドアにも逃げたが、そこには、鍵が下してあつた。喬介の必死の眼には、恐怖の色がアリアリと浮んだ。両掌を合せてふし拌み、哀訴した。ヒューン！　ヒューン！　背中肉に、尖った音を発して筥がとんで来る。そのたびに悲鳴とうめきの声が上がった。筥の連打にたえ切れなくなると喬介はまた猛然として部屋中を逃げ廻った。が、今度は絨氈に足を取られた。また一しきり筥の雨――。

ふたりの肩先は大きくあえいだ。

喬介は俯伏せにぐったり伸びてしまった。それを蹴返して、顔を足でグツと踏んずけた。その姿勢でガウンの前をはだけて喬介の首を跨ぐと二本の円柱は顔の上にドスンとくずれ落ちた。

喬介の荒い息使いはまだやまない。おごりたかぶった弥生子の感情は興奮の絶頂に達した。虐げられたひとりの哀れな男が彼女の身体の下敷となって横たわっている。

「奴隷！」

「貴方は生神様！」

「そうよ。お前は犬」

「はい」

かすかな声だった。と電撃にうたれたように弥生子の体はしびれた。はげしいよろこびであった。

「奥さま！ 奥さま！ こゝを開けて下さい」

美枝の勢いこむノックで眼が覚めた。幾時だろう。睡眠に入っただけの気分は重かった。

「何よ、美枝」

「あのう、ちよっと」

弥生子は美枝の唯ならぬ気配を感じ取った。いそいで上履を突っかけると扉をあけた。美枝は弥生子の耳へ何か囁やいた。すると彼女は顔色をさっと変えて美枝より先にあたふたと廊下を走り去った。

間もなく、弥生子の誰かを罵るらしい甲高い声が筒抜けで聴えた。五分も経ったであろうか。にわかになれた聲音が起った。喬介の腕をムズとつかんで曳き摺るようにして荒々しく弥生子が這入って来た。喬介は床の絨氈にペタペタと崩折れた。ふと入口に目をやるとそこには、喬介の妹、丸木閑子の眉一つ動かさぬ姿が石のようにながら骨をきしませて絡み合っていた。

敵意を填めた四つの眸が無言のまゝ相對峙していた。と、一蹴するように弥生子から口を切った。

「閑子さん、貴女は卑怯ね。これじゃ犬猫も同然よ」

「——」

「そんなに喬介さんが欲しいのでしたら、いつでも差上げるわ。だから、堂々と真正面からいらっしたらどうなの。女の意地ってそんなものよ。なぜ貴女は私の前に跪いて哀願なならないの。ちゃんと額を床に摺りつけて私を枉げる礼儀をつくさないの」

「——」

「喬介さんを取戻すために、貴女は何十遍私の屋敷を野良犬のようにグルグルほっつき廻ったことでしょう」

「当り前ですわ。もともと兄を奪ったのは貴女なんですもの」

「フン。云いがかりはよして頂戴。なにも私は喬介さんに頼んだつもりはないんですからね。私はこのひとの身勝手な恋愛に責任を負いたくないんです」

「それなら、私が負うわ。私は妹なんですもの。それを貴女ったら眼の色変えていきまいてるんだわ。私達兄妹のことは私達でします。貴女なんか干渉して頂きたくないわ、そこ退いて頂戴！」

凜といふ放つと体ごとぶっ突かっていた。虚を衝かれて弥生子はひと堪りもなくころがった。閑子が喬介を促して二、三步引いたくするように歩いたのと弥生子の起上ったのが同時だった。

「巫山戯た真似おしでないよ」

右の掌が閑子の頬へ風を切って飛んだ。と、視る見る閑子の青白い頬に血が昇った。次の瞬間、ふたつの肉塊が焰のような息を吐きながら骨をきしませて絡み合っていた。



美枝も咲江もハラハラしているだけで、手も足も出ない始末であった。すると、まるで降って湧いたように長身の青年が這入って来た。

「あゝ古沼先生！ よかったわ。早く鎮めて下すって」

満鉄病院内科医の古沼午郎医学士だった「おふたりとも、見っともないからおやめなさい！ やめないと僕が喧嘩相手になりますよ」

びっくりするほど大きな声である。女性の格闘には近代的匂いが無い。いわゆる原始的なつかみ合いだから醜くさえみえる場合がある。弥生子は淑女の体面を知っていた。弾かれたように起上った。堰を切ったような号泣——その肩を古沼は優しく愛撫した。

「閑子さん、ごめんよ。僕は貴女の秘密を知ってしまった。でも、僕の目的は貴女不幸の原因がさぐりたかったからで、秘密を知りたくてこゝまで尾行したわけではないのです。それは誤解しないで下さい。貴女が夜更けて、病人が寝入るのを待ってソツと病院をぬけ出す噂は以前から知っていました。原因は兄さんだったんですね」

閑子はキリキリ身を揉み、古沼の胸板に顔をこすりつけて泣いた。永い間貯めていた涙の量を一遍におし流すように。泣くだけ泣いてしまうとキツとなって弥生子を見た。

「阿南さん！ 豊永秀人を貴女は存じていらっしやるわね。その豊永さんから私は手紙をたのまれましたの。阿南弥生子に叩きつけてくれて。私のついてる患者ですの。可哀想に、そのひとは胸をやられて、もう駄目ですの。貴女は何とも思わないの」

「おや。私が何とか思わなくちゃ、いけないかしら」

「悪魔！」

「ホ、ホ、ホ。自信のある女は、平凡な人間から見れば悪魔とも呼ばれるわ。閑子さん、恋愛感情なんてものは、一方だけでは成立しないのよ。五分、五分だわ」

「汚らわしい！」

閑子は白い封筒を弥生子の膝に投げつけた。

「兄さん、お願いだから、閑子と一緒に帰って頂戴！」

喬介は床にうづくまっただまゝ身動きもしない。が、やがてつぶやくようにボソリと云った。

「閑子、兄さんはもう駄目なんだ。兄さんのことは忘れてくれ」

「いや。いや。閑子、どんな努力をしても、もとの兄さんに返してみせるから、閑子と一緒に帰って頂戴」

「喬介さん！」 弥生子の唇にナイフのような蒼白い凄みが走った。

「さあ、行けるものなら行って御覧なさいな。私の肉体を離れて、あなたの生活があるかどうか試して御覧なさい。あなたを支配するものは、私以外にはどこにもないのよ。さあ、喬介さん——」

「奥さん！ 呪文でもって丸木さんを縛るのは卑怯です。本人の意

志を尊重しようじやありませんか」

古沼が妥協案を提出した。

「お黙りなさい。あなたの知ったことじやないわ。あなたはせいぜい閑子さんを愛して上げなさいな。フ、フ。……喬介さん？ どうなのよ。行けるものなら行ってごらんなさい」

「兄さん！ 兄さんったら。兄さん！」

閑子は気も狂わんばかりに叫号した。だが愛慾の繁殖菌にたかられている喬介の魂をゆすぶるものは弥生子の甘美な肉体の暴風だけであった。

ポーオ、ポーオ、鳩時計の十二時を鳴く声。

エピソード

阿南弥生子の丸木喬介に対する苛酷な処刑は、それ以来毎夜のようにつづいた。

その夜も、弥生子は牛乳風呂に浸っていた。

彼女の皮膚は白い乳液の中に没し、盛りあがった胸の上から湯気に蒸されて艶々と桃色を帯びている。素晴らしい顔だった。唇の周りを時々ムズムズと蠱惑な笑いがくすぐる。その豪華な肉体の浴槽の外には丸木喬介が小さくちぢこまって控えていた。

男性のあらゆる呪いも憎しみも、弥生子に取っては、彼女への讚美歌である。そんな男性のわがまゝを許して置けないと思う。豊永秀人の呪いと憎みの手紙の字句の一節を想い出した。死際まで独りの婦人への思慕のミイラと化した男の生涯を、弥生子は冷やかに眺めおろしていた。むしろ、喉もとにとどめを刺したいくらいだ。次に古沼午郎の顔が現われた。古沼さん！ 彼女は口の中でつぶや

く。今のうちにせい／＼あなたの愛人を大切にすることがいいわ。犬のように這いつくばって私の踵をクンクン嗅がせてみせるから。フ、フ。

「さあ、と弥生子の体が湯水を截った。」

「喬介、お前、体は洗い清めてるだろうね」

「はい」

「許すから、こゝへおいで」

「勿体ない。一緒に這入るなんて。でも、御命令なら」

「命令！ 奴隷、弥生子さまのお傍においで」

喬介はパンツを取って湯槽の中に這入った。

「お前、泳げるかい」

「はい。少しは」

「じゃ、もぐって私の股をおくぐり」

「はい」

「お待ち。私が許すまで何回もくぐるんだよ。分ったかい。そのかわり呼吸は一息だけ……」

言葉の終らぬうちに腕の先端は早くも喬介の頸筋を圧えこんだ。

喬介の顔は牛乳の中へブクブクと泡を立てながら沈んでいった。弥生子は早速、両脚を開いて通路を作ってやる。温湯の中ではたちまち顔がほてってしまう。呼吸しに浮上ってくる喬介を幾度も押沈め、ては面白くてたまらぬ、というように弥生子は高らかに笑った。例によって意地の悪い遊戯がはじまったのである。

息切れが險しくなると喬介の喉がゼイゼイかすれて来た。最後の押えこみ——沈んだ喬介の首根っこを太腿の間に挟み込んだ。喬介の必死の身もだえをたのしむ弥生子の笑い声が浴室いっぱいに響き

わたる。

と、その時である。湯殿の硝子戸が音もなくきしり、其処から不気味なピストルの銃先がそろそろとはみ出した。むろん誰も知らな。弥生子は遊戯の興味に夢中である。

果然、ずどうんと銃声が一発、凄じい音響と共に火を噴いた。

弥生子は牛乳の中をうしろにしろめいた。浴槽の壁に背を凭せかけている弥生子——唇から血の気が失せてゆく。眸は凝っと見開かれたまゝである。彼女の胸の真中に喬介のあたまがポカンと浮きあがった。牛乳が鮮血にどすろく濁り出した。すると弥生子の体が湯槽の中をずりこけるように沈んでゆく。

その時刻に、古沼医学士は阿南寓の玄関に立っていた。閑子のあとを尾けて来たのであったが、通用門をくぐり中庭に出たところで姿を見うしなったのである。こうなれば玄関から這入るほかすべがない。ちようど、呼鈴を押して取次の言葉を考えているとピストルのつんざくような音響を聞いたのだった。

古沼が閑子を発見したのは湯殿だった。古沼はそこへ棒立ちになつてしまった。何故といって、兄を失って以来、笑いを忘れていたあの丸木閑子が開いた窓の外でゲラゲラ笑い転げていたのだから。牛乳風呂には丸木喬介が阿南弥生子の血を浴びていつまでも動かなかった。

(完)

伝言板

○戸破貞子さん、貴女のお便りは長瀬昭子さんに転送しました。貴女に対する読者の方からのお便りが沢山参っておりますが、貴女の書いておられた御住所で連絡がつくのかどうか不明ですので一応読者係にて預っております。

緊縛モデルの素顔

(その二)

辻 村 隆

——川辺砂登子——

私と編集長の箕田氏は大阪ミナミのアルサロスで、ジャズと騒音に包まれ乍ら疲れた体を休めていた。丁度その日は、朝から伊吹さんの撮影で相当に手のこんだものを作って六時過ぎまでかゝり、やっと終って彼女を天王寺までタクシーで送った後だったのだ。

別段指名する程親しい娘のおるアルサロスでもなし、ふと通りがかりに這入っただけで、係りの娘も手持無沙汰にビールの酌を強いる程度だった。

私達のひそく話も自然耳に入るのか、その係番の娘は何気なく耳をそばだてゝいる様子だった。

伊吹さんに浣腸シリーズを敢行した日だっただけに、ともすれば二人の話は緊縛や浣腸の話へと弾み、第三者にとってはそれが、甚だ異様にも聞えるアブの世界の内輪話だったに違いない。

「変なお話許りして一体何なの貴方達？ 二人だけでお話なさらないで、私にも聞かせて頂戴よ——」

その娘に横合から話を割られて、思わずハッ和我に返った。夢中になって、アヌスがどうの、エネマシリンジでどうのと、しらずしらず声高になっっている事に気付いたからだ。

「なーにヌードの話さ。よかったら君に一度頼んでもいいよ。どう、やってくれるかい」
私は冗談まじりでその娘に云って、改めて

彼女の顔をまじまじと見つめたが、フト彼女が誰かに似ている事に気付いた。思いは同じなのか、箕田氏が思い出した様に

「この娘、坂口さんに似てると思わないかい、体付と云い、顔の造作と云いそっくりだよ。

坂口さんより少々眼に陰があって断髪にしているけど、彼女よりは綺麗だね。どうだい一度試しに当って見ようか」

そうして二人で口説き落したのが、外ならぬ川辺砂登子さんである。

アルサロス娘の彼女は仲々に打算的だった。私達の話をおれこれきいた挙句、

「——で、モデル料って、一体どれ程貰けるの？」と、顔も赤らめずに正面から訊ねた。
箕田氏がこれこれだと説明すると、

「へえ、案外安いのねえ。でもいいわ、近頃デフレと秋頃ですっかり暇だし、昼なら身体もあいてるから、思いついてやって見ようかしら。だけど裸じゃ、もう随分、寒いでしょうね。それに貴方達の他にも、いろんな人が来るんでしょう？ 男の方と一緒に歩いていて、若し、知ってる人にもあった時困るから、矢ッ張りよそうかしら——」

本気か冗談か、仲々乗りそうに乗ってこない。それを場所は私の家の二階でやる事にきめ、モデル料も少しはり込む事にして、単なるヌードと云う約束で、どうやら成立まで漕ぎつけた。少し眼に陰はあるがピツチリ引き緊った肉体と、鼻筋の通った彫の深い顔立ちや程よく似合うヘップバーン・スタイルの近代的な品のよさが気に入ったからである。多少私達のお道楽めいた気分でもないではなかったが、うまく彼女がものになり、我々のよき協力者となってくれる事を秘かに希ってのもいたのである。年をきくと二十一才だと本人は云うが、しっかりした口ぶりや、どっしりとした肉体の成熟ぶりから見て、或いはもう二つ三つとっているのではなからうか——。

本名と住所を訊ねたら見事に蹴られた。それを云うのだったら止しますと云う腰の強さ

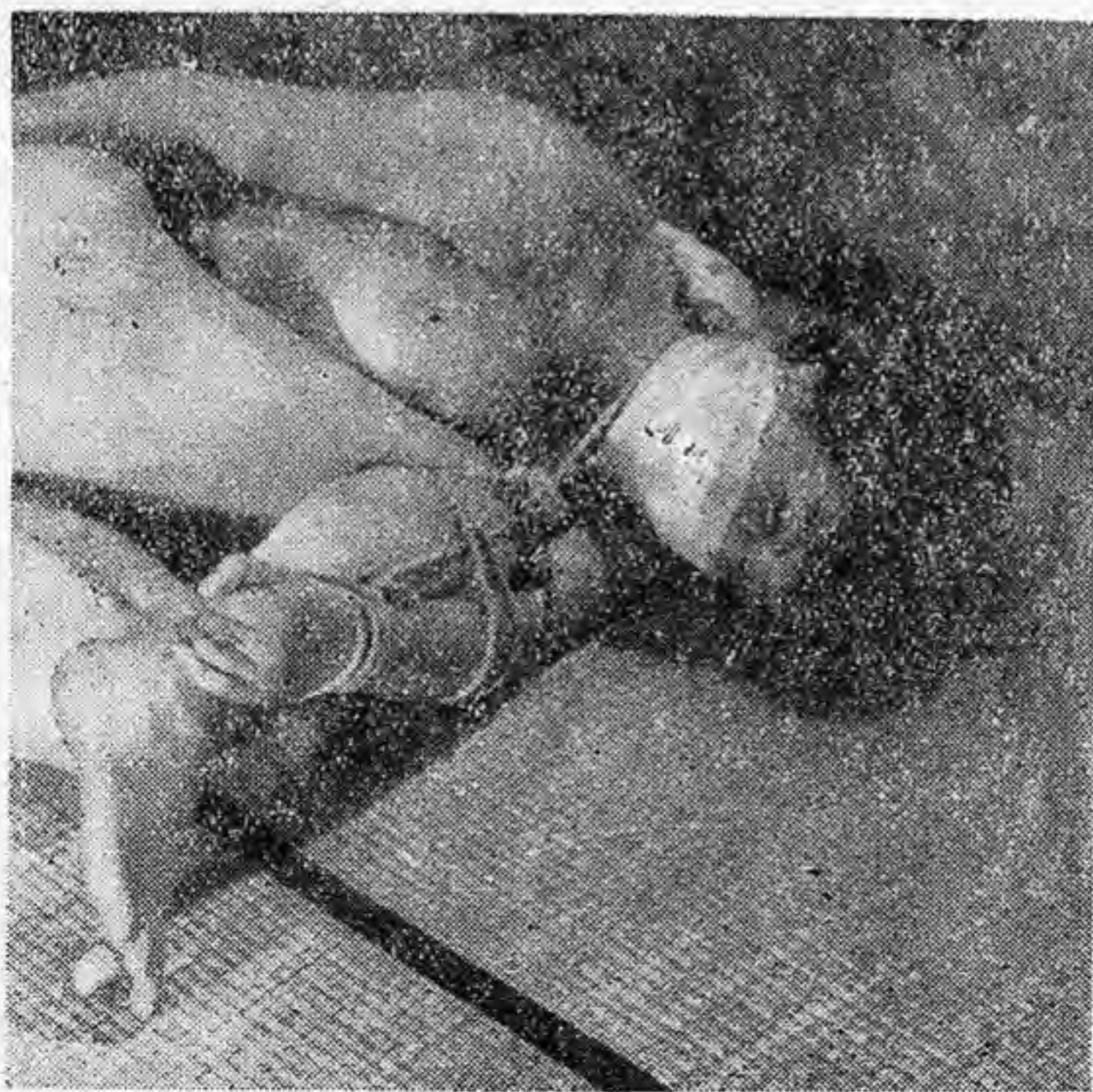
で、若しやの後難を懼れる気持があつての事かも知れない。だから川辺砂登子は勿論、私と箕田氏との合作名で、アルサロスではひとみと呼ばれていた。

兎に角、十一月の五日の朝十時、彼女の希望した郊外電車のターミナルで逢う約束をして別れたのだった。

或いはあゝ云つたものの、一時の気まぐれで、ひよっとすると来ないのではなからうかとの半信半疑の杞憂は見事に外れて約束の十時きっかり、赤と青のチエックのスカートも颯爽たるスタイルで現われたのでやれやれの思いだった。大きな金の輪のイヤリングがきらきら光っているのが印象的だった。彼女は逢うなり開口一番、

「私ね、貴方達の事、全然知らないで信用してるんだけど、裸になってから変なことしないでしようね。それからモデル料は裸になった時戴けるわね」と釘をさす様に駄目を押した。チャッカリしたものだ。だが、こう

いった表面、強がりの娘に案外、情の深いのがあるものだ。箕田氏は内ポケットから白い角封筒を出して彼女の口を封じてしまった。彼女の変なこと云うのは、恐らくはセックスの面を意味しているのであるが、若し、緊縛や浣腸や責めも変なことこの範疇に入るとなると、ちよっと厄介であるが、先ず先ず半



白布の猿ぐつわで見上げる川辺砂登子嬢

結髪用の部分品をくつわにする川辺砂登子嬢



メイキ
ヤップ
は流石
アルサ
ロ仕込
みで美
事なも
ので、
カメラ
マンの
塚本君
が差出
した附
眉毛も
手際よ
く自分
でつけ

えて入れた電気ストープが、南向きのガラス窓からさし込む陽で反ってムーンとしたのぼせる程の温い雰囲気を作って、私の差出した浴衣を素肌に纏った彼女は、上気した様な顔付きでもじもと立ちすくんでいた。

どういふふう私達の意図を説明すればよからうかと、私は度胸をきめて書架の奇ク最近号数冊をとり出し、グラビヤをめくって黙って彼女に示して見せた。

「僕等を信じてくれるだろう。貴女のいう変な事は誓ってしないけど、これが僕達の所謂ヌードなんだ。判ってくれるかな」

彼女は顔を赤らめそれをにらむ様にして見つめていたが、そんなことなら構わないわ、と云った風で「いゝわ。だけど」と一言云って口をつぐんでしまった。

私はまるで緊縛の初心者のような気持で、彼女の逡巡に対して一寸、魅力を感じた。始めからの強度の緊縛は、相手を怖がらせるから、なるべく簡単なもので部分的な責めを行った。

鼻責め、足枷、乳責め——偉大なるオッパイにクリップを挟んだ時の、彼女のウーンと云った表情は実によかった（本誌二月号）——鼻責めには結髪用の部分品に鎖を通して、

ば成功の今、彼女の云うがまゝになって、私達は折柄、入ってきた急行の席におさまった。

私が既に妻子があり、しかも家内も今日の撮影を知ってるらしい素振りに、彼女は稍々安心したらしかったが、何処か未だ、心に鎧をきていて、敵地に乗り込んだ様なぎこちなさが目に見えず纏わりついている様だった。

て「O・S・Kで少し踊ったことあるのよ。わけがあって二ヶ月許りで止したけど……」と誰にもなくつぶやいていた。

急造の控え間、四帖半の襖の向うで裸になって現われたが、乳房の盛り上り、腰の締まり工合、癍痕一つない白い肌、誠にいゝ体である。

十一月初旬とは云え、寒いと気の毒だと考

それを彼女の小さな鼻に嵌めたが、この時は恐ろしくていやな怒った顔をした。(本誌一月号に出ているが怒った表情がまざまざ表われている)

一人用蚊帳を引張り出して、荷物にした幻想的ポーズ(本誌二月号)は、犇々と縛った緊縛と又異ったいゝ味を出した。

眼の凄艶さが現われているのは、私が背後から皮手袋で、彼女のオッパイをグツと掴んだものが最もよく出ていた。(一月号手袋)

次第に彼女も緊縛とカメラの雰囲気馴れて来たのか、次々と私の指図通り動いてくれて、油が乗って来た。強盗に襲われるシーンを連続的に撮ったが、最後に、これは恐らく非公開ものであるが、私の扮する強盗の前でタンスの上部の横環に縛り上げられた彼女が事実諦めていたのでもあろうか、片足を高く吊り上げられた儘、余情を溢えて観念したポーズは、今迄にない素晴らしい切実感を持って印画として仕上ったのであるが、諸氏に公開出来ぬのが残念である。

浣腸だけは流石に拒否した。(今から考えると最初からそれを希んだ私達が間違っていたのだが……。相当馴れた者でも浣腸は厭がるからだ)私は先日伊吹さんに易々として

行えた為、その時になれば何とかなるだろうと、イチヂク浣腸やらガラス浣腸器、果てはイルリガートルまで持出して準備を終り、私自身白衣に額帯鏡をかけた医師に扮した時、先刻から異様げに眺めていた彼女は、浣腸だけは、どうしてもいや、と駄々をこね始めたので慌てた。

色々説明したがどうしても納得しない。(子供の頃のお医者ごっこか、又はギネの寝台を想起するのだろうか――)

「じゃあ、よそう。その代り残ったフィルム八枚許りを縛ったポーズでとるからね――」私は浣る彼女をシユミーズの上から後手に縛り上げて、塚本君に素早く眼で合図した。

彼の敷いた布団の上へつれて行って押し倒すと、あっ云う間もない浣腸ポーズで、早いところ、あれこれと五六枚撮り終った。余りの早業に、彼女はもう仕方がないといった眼つきで、言われる通りのポーズをつけたのは、流石にモデル志願の娘だけはあった。

縄を解いても放心した様に布団に座った儘だったので、そこを又一枚(一月号の口絵、浣腸)

そんな訳で、浣腸のポーズはシユミーズをつけた半裸のものに終ってしまった。

「もういゝんでしよう。私、お店に遅れますわ」

浴衣を羽織ったまゝで中腰になって、彼女は切長な瞳で箕田氏の顔を見上げた。そんな何気ない身体のかなしのときに思わぬよい線が出るので、私は一寸見とれていた。

「なんだ、もう里心が起きたのかい? それとも彼氏と逢う約束でもあるの?」

箕田氏がからかうように云うと、

「彼氏なんてありませんわ、でも、もう終ったんだったら、早く帰して頂きたいの」

入れ替えないと、もうカメラの中にフィルムがないことを見越しているらしい彼女の口ぶりである。

「まあ、そう急がなくなっただけでいゝだろう、僕が車で店まで送ってあげるじゃないか」

君子は豹変する、というが、この箕田氏の言葉で彼女も思い直した体で、バタフライ一枚で、廊下の手摺に、雨戸をバックに、命ぜられたポーズをとった。これが、彼女が「痛い、痛い」と悲鳴を上げて許しを乞うた折檻の序曲であろうとは、神ならぬ身の彼女は知らなかっただろう。

数日後、会社からの帰途、アルサロスに立寄って、ひとみを指名すると、和服姿で髪に

リボンをつけて、あでやかな微笑で迎えてくれた。

「この間はどうかだった？」

と、いさゝか不安な気持で尋ねたが、あの日あれ程、大騒ぎをして泣き喚いたのに、そんなことはケロリと忘れた顔つきで「私のお写真、いつ雑誌に出るの、出たら一冊頂戴ね」と、しやあしやあしているのには、安心もしたが驚きもした。よし、今度は凄いのを撮ってやろうと心にきめて、彼女の和服姿をもう一度見直したのであった。

——伊吹真佐子——

この処毎号誌上を賑わしている彼女の事については、余りにも書きたい事が多すぎて、扱どの辺りから話を始めてよいか迷うくらいである。兎に角ピックアップして見ると、現住所は奈良県磯城郡S町で材木の集散地であると云えば大体見当がつく事と思われる。

本名は○原○代（註、伊吹嬢の希望もあって誌上では特に伏字しました。編集部）

故郷は長野県諏訪とかで、唯今のところ、お母さんと妹さんと三人でさゝやかな人形造りの手芸を営んでいる。週に三回、わざわざ洋裁の勉強に大阪の梅田の近くにあるK洋裁

学園に出掛ける。金銭的にはさして不自由もないらしく、お友達と映画や買物だと云っては、度々大阪へ出てくるが、これが実はカラクリで、その大半は、編集部の依頼で出頭する口実に外ならないのである。

始めて箕田氏に紹介された時、彼女は既に全裸になって縛られていた処だった。可愛いゝえくぼの浮く頬を恥かしげに歪めて縛られた不自由な姿勢で私に会釈し、心持ち膝を合せて体を斜めにずらせた。私の来るのが遅かったからであるが、突然現われた身も知らぬ男に、彼女はさぞかし驚怖を感じた事であろう。

その時の第一印象は、彼女の肉体がすべて大作りで、ポリウムもあり顔立ちもよく、何処といった缺点もない理想的なモデルであるにも拘わらず、何故か一口に云えばドタリとした鈍重さにマゾ的要素を感じた。

余り都会的に洗練されていない肉体、と云っても分り難いかも知れないが、さして運動もせず、唯食べて眠ってのんびりと大きく云ったと云った、如何にも健康的な鈍重さが、そこはかとなく彼女の肉体から汲取れるのであって、謂わばキリリと引緊っ

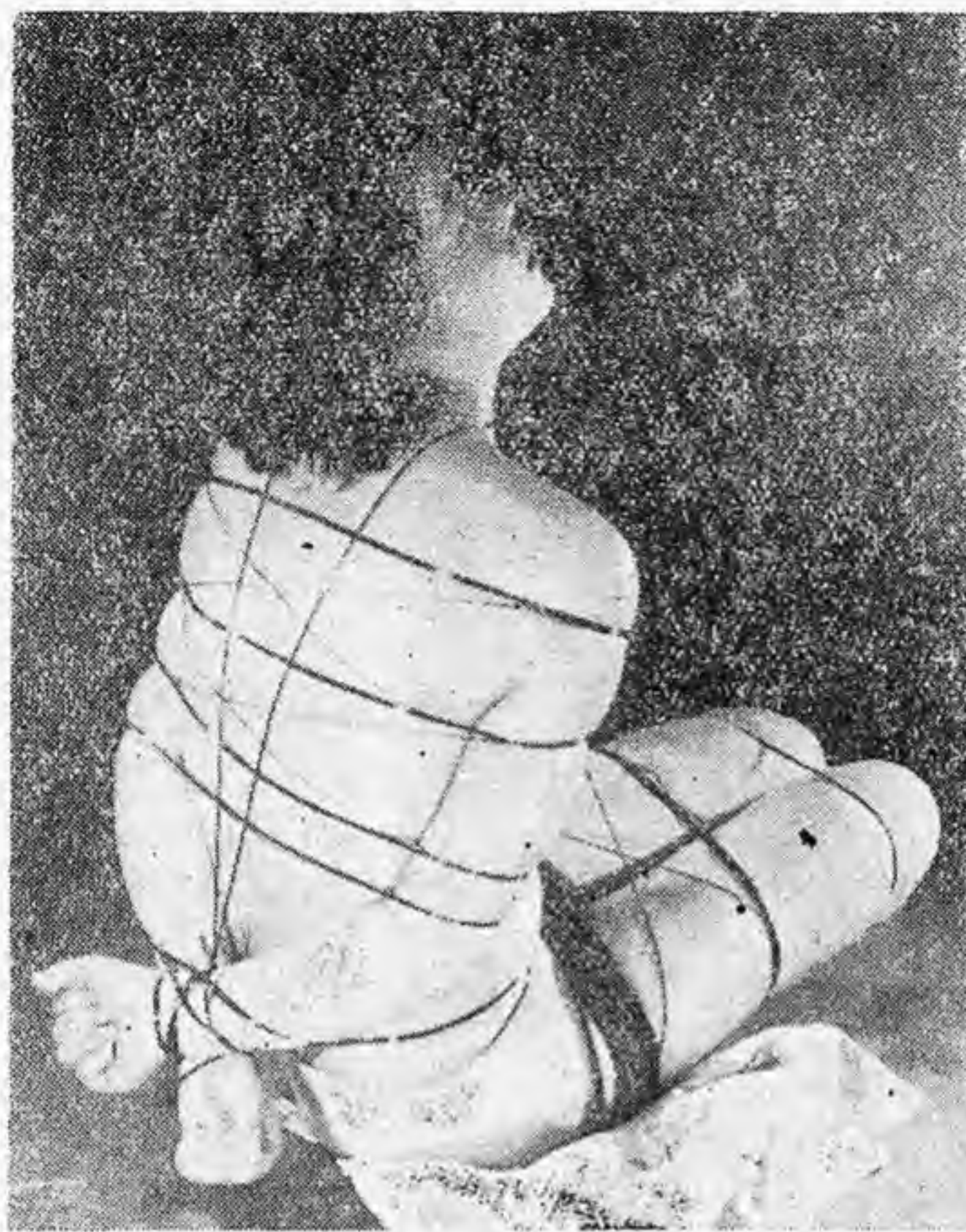


足首が痛い痛い悲鳴を上げる川辺砂登子嬢

たピチピチした肉体のセンスとは凡そ反対な感じであった。

川端さんは牝鹿を思わせたが、伊吹さんからは甚だ失礼だが牝豚を感じたのである。

この牝豚の感じは、彼女が磨かれざる宝石なるが故であって、時と共に私はこの第一印象を訂正せざるを得なくなったが、それについて追々と述べよう。



ビニールの紐で全身を縛られた伊吹真佐子嬢

扱、その時の日程は、梯子を使用しての責めを構想していたので、躊躇せずそれを行うことにした。アイデアにあった、梯子に蛇が絡む様に、脚から頭まで縄をなう式でやるつもりだったが、ドッコイ絵ではなくても、実際に到底出来得なかった。大人しい伊吹さんは云うが儘になってはくれたが、遂には汗をびっしょりかいて何てひどい事をする人だろうと云いたげな

眼付で私を見た。上から梯子を吊して、これにはりつけに縛ったのは出来たが、ヌーボー的なあっけらかんとした表情と、ドタリとした重たげな体の感じで、さっぱり意図する構図にはならない。クローズアップでもやろうと、化粧する術すら知らぬ彼女に、私と塚本君と二人がかりで

画墨や紅をつけたが、これが又失敗で、縄の四十八手のクローズアップの出来上った写真を見てゲッソリした。まるで女レスラーを縛った見たいで、堂々と胸をはっていて、色も艶もあったものじゃない。

彼女の取柄は全然無抵抗である事だ。私のなすがまゝ云うがまゝに、相当強烈な逆吊りやアクロバチックな緊縛にも、よくよく肌の肉が縄に挟まったとか、手が捻れたと云う様な時以外は痛いというようなことは、ついそ言ったことがなく黙々とやってくれる。時々想い出した様にニヤリとして私達を交互に見つめるだけだった。それでいて彼女は、そうした強烈な縛りであればあるだけ、殆んど恍惚とした表情、状態にあった。潜在的マゾでもあろうか、強烈なものになればなる程、それに比例して、そういった傾向が強いようであった。

「今日は何時にお友達と待合せる約束なの——」と、来れば必ず云うこれも彼女の口癖だった。その癖、今迄一度たりとも、待合せ時間に間に合う様帰ったことはなかった。私達に興がのれば易々として何時までも続行させ、振り切って帰った事は殆んどないと云ってよい。

「彼女マゾじゃなからうか——」と、私達は屢々、彼女の性癖について論議するのである。連絡すれば雨が降ろうが風が吹こうが必ず来る。そして犇々と縛られ、数時間に亘って私達の構成通りに動いて、縄跡のどれぬ手首をさすり、首筋の縄目の跡も気にかげず、白いブラウスに黒のスカートの地味な服装で、ニヤリと笑って黙った儘頭を下げると、々と帰って行く——。

アンデリケートな性質が、ものにこだわらぬ楽天的な気持と相俟って、些かお人好しにも見える程の童女振りである。

春日ルミ嬢の登場と共に、春日、伊吹二嬢名コンビ写真の撮影で彼女は益々重要な存在となって多忙らしかった。女同志で撮ったものは、そこでも彼女は屢々不自然なポーズを強要され乍ら、ときとしてニヤリと笑ったものが数葉瞥見されるのである。

悪く云えば図太く、よく云

えば天衣無縫のたちが、女の羞恥心をも時としては忘却させるのか、女レスラーもどきに春日嬢に押しつぶされ、馬乗りになって虐められ、未発表のものに、砂のついた春日嬢の足を舐めらされている様なひどいのもあったが、それでいて案外、彼女は平気らしいのである。

女の緻密さで、春日嬢の縛り方は、度々ポーズを変えると云うやり方でなく、一つの緊縛を念入りにして、自分の夢を実現させようと、異常な迄の緊縛を創意工夫しているが、伊吹さんを息も切なくなる程にひしひしと海老責めに縛っておいて、彼女の頭に自分の股を挟んで馬乗りになり、その儘のポーズでコンパクトを出して化粧を仕直すと云った事は如何にも春日嬢らしいサチスチツクな一面がよく現われていると思っ

た。

そんな本格的な責めに近い場合でも伊吹さんは、フーン、フーンと肩で喘ぎ乍らも、もう止めてくれとは云わなかった。

去年の六月頃、私はKK通信を通じての友人のR氏が自家用車を所有しているのをいゝ機会に、一日、彼女と共に箕田氏、塚本君を加えてR氏の運転する車で一行五人、磐船に向って野外縛りの撮影を敢行した事があった。

既に初夏とはいえ、山峡の水は未だ冷たかったが、小瀑布の下で、或いは溪流に添って、又奇岩の流れの激みに水を入れての撮影は、一応成功したと



彼女は縛られたまま、入ってきた私の方をふりむいた（伊吹真佐子嬢）

云ってもよかった。

R氏も御自慢のミノルタレフを御持参に及んで、この撮影に加わり、構成の邪魔にならぬ様控え目に、二本程フィルムに納めた様子だった。

車中で私と並んだ彼女が、何気なくR氏の事を聞いたのに、私は正直に答えてやったのが、彼女の人生の一転機になろうとは、まさかその時予測もしなかった。

これが所謂一眼惚れと云う奴だろうか、伊吹さんはR氏にどうやら恋をしたらしいのである。(野外撮影行についての詳細は昨年の九月号に発表済のことゆえこゝで省略する)

あれ以来、彼女は逢う度毎に服装が華美になり、化粧も急にうまくなって、最新流行の透明化粧を使って、美しくピチピチとして来だした。

恋をするところも女は変わるものか——。私達は始め、彼女のその急変ぶりに驚かされたが、R氏と逢った一タ、四通程の彼女から出した平凡向ミーチャン的ラブレターを拝見するに及んで、さこそとうなずいたのである。

「これで弱っているんですよ。僕は唯君に頼まれて自動車を走らせただけで、撮影自体には好奇心もあったけど、別段彼女になんて云

う事もなし、僕からチョッカイ出した覚えは絶対ないんだ。ところがこれを女房が読んじやってうるさい事になりにつけりなんだ。何とかしてくれよ」と云うR氏の話——。

彼が恋愛結婚一年そこそこの新婚ホヤホヤであっただけに、これは所詮高嶺の花のほかない彼女の片想いであつたろう。返事は一度も出さないそうだが、彼女の文面から察すると、彼女は二度程自分の指定した時間の待合せに待ち呆けをくっているらしい。

いじらしい彼女の片想いも所詮、美貌の新婚と、新婚の夢さめやらぬR氏にとっては、甚だ迷惑であつたに違いない。

私はやむなく伊吹さんに婉曲にその旨を記めた手紙を出しておいた。

それかあらぬか、折返し彼女から、暫くは洋裁に専心するとの短かい便りが届いたとき、三カ月許り彼女を撮る機会に恵まれなかった。「来年の二月辺り、ひよっとすると結婚するかも知れません。それまで少し体があきますから、もし撮影なさるのでしたら、いつでも参ります。云々……」

この便りをうけた箕田氏は、早速彼女に連絡して、当時読者より希望の多かった浣腸シリーズを春日嬢相手に実施するよう企画し

た。

箕田氏からその連絡を受けとった時、彼女が失恋の痛手から脱したらしい様子に、私は内心ホッとした。

そして十月末の、丁度アルサロスで川辺砂登子さんに逢った日の事だったが、その日の伊吹さんのスタイルは、暫く見ない内に素晴らしく成長して、髪はヘップバーンヘアースバリと短かくして耳許で内巻きにし、ウル地の洒落たデザインのワンピースを形よく着こなして、濃い目の透明化粧で颯爽と現われた時には、これが嘗って牝豚だと心秘かに思ったあの伊吹さんだろうか、思わず、瞳目する程の変貌振りだった。

鼻輪や木刀で責めた、一連の着物シリーズによるクローズアップや浣腸はこの時に撮ったものである。

読者の方も、以前の彼女の写真と、本誌二月号より掲載されたものとを比較して眺められたならば、その変貌振りに成程とうなずかれるに違いあるまい。しかも彼女は表面的な変貌だけでなく、内面の性格にも変調を来していた。以前のヌーボー的な感覚は影を潜めハキハキした態度なり、潑刺とした動作によってそれが端的に現われていたのである。

すべてを肯定するが故に、或いはマゾかとも思っていた彼女の性癖が、こうした変調によって、あきらかにマゾ性を帯びている事も露呈した感があった。

事実、形だけの浣腸ではなく、注入器やエネマシリンジをアーマスに実際に挿入しても平然としていたし、月経帯のストリップを自から手で剥がしていった。

私達の指導次第で、彼女はアーマストとしても導入して行けるだろう。

この日は私の家の二階で行ったのであるが、彼女はまるでそれを意に介せぬ如く、附眉毛の濃化粧に、バタフライ一つの全裸の上から長襦袢をひっかけて、階下のトイレに行こうとしたので、私は驚いて慌てゝ止めた。妻は知っていても、同居者や子供達に変に思うからである。

「じゃあ我慢するわ。もう四日もお通じがないので、お腹がこんなにポンポンに張ってる

木刀で首を責める辻村氏（モデル、伊吹真佐子嬢）



彼女は軽く拒否したが、さして強くも云わなかった。で、箕田氏は私に眼で合図して、彼女の後ろからイチジク浣腸を振って見せた。

今一度、後手に緊縛の浣腸ポーズをとらし、俯向けにして臀部を盛り上げさせた処で私は素早くイチジク浣腸を針で穴をあけ、尖端を湿らすとグット一気に浣腸した。

「浣腸してあげたから、暫くすると溜まっていた奴が全部出てしまうよ。少しお腹が痛くなるかも知れないがねー」「とうとう本当に入れてしまったのね。仕様のない人ね。あゝら本当——、少し下腹が

痛んで来た様だわ——。どうでしょう……」

一流石に顔を赤らめて、彼女は両手で顔を蔽った。

「もう少しの辛抱だ。さ、早いところ、早いところ」

私達も少々慌て気味になって、後は一滴千里で、残りの七八枚を簡単な縛り方の儘、責

でしよう。少し苦しいの——」

下腹をさすって見せて、笑って云うと、彼女はそれでもあと少しの時間を我慢した。

「それなら丁度いゝや。これで浣腸してやろうか」

「いやだわ。だってお腹が痛くなるんでしょ？」

めの極端なアクロバットで、急いで撮り終った。

我慢出来ぬ様に、性急に附眉毛をむしり、青黛と口紅を拭いただけで、彼女はスルスルワンピースをかぶると、飛ぶ様に階段を降りていった。

「やったねー。どんな気持ちだった？」

箕田氏も好奇心に満ちた口調で聞いた。

「なーに、別段変わった事もなかったさ。いつもはあてがっているだけのを押えただけの話さ。だけどこのフィルム一枚に、実際に流暢しているシーンが一枚混ってあったとしても、恐らく写真を見た人は、流暢シーンのどれであるかは多分気がつくまいと思うよ。凹んだイチジクを握っているところまで観察する人は先ずあるまいからねー」

「グリセリンが腸内に入っていくのを、恐らく彼女は意識していながら、身動きすらしなかったんじゃないか。羽村京子式にやっただけ、彼女OKかも知れないね」

こんな話をしていると、

「あゝ、すっとしちやった。出たわよすっかり……。あら御免なさい。汚ない話しちゃって、ホホ……」

「よかったよ。じゃあ辻村さんに御礼を云っ

てもいゝ位だね」

箕田氏は愉快そうに大笑した。

これが伊吹さんを昨年最後に撮った時の、ラストシーンである。

その後、彼女とは逢っていない。ヌード撮影がシーズンオフに入ったせいもあるが、彼女の言によれば、この一文の誌上に出る頃、結婚している筈であるが、さてどんなものであろうか……。願わくば、いゝ花嫁さんになってくれ給えー。或いは又ー。彼女が本年も相変わらず、本誌のグラビヤを賑わせば、伊吹真佐子さんは未だ結婚していないと考えてもよさそうであるー。

(この項終り)

絵と写真のアイデアを募集

本誌に発表する口絵に關してのサジ、マゾ、切腹、流暢等の内容や代理部の分譲写真、或はアルバム、画帖、等について、こういった構図やポーズ、又は趣向で作成してほしいといった御希望がございましたら、何卒御遠慮なく編集部宛御申越し下さい。口絵について特に画家に名差して御希望がありましたら転送いたします。

KK通信

の旧号在庫(乞御申込)

本誌愛読者の機関誌として発行しておりますKK通信の旧号が左記の通り在庫しておりますので御入用の方は、直接発行所宛お申込み下さるようお願いいたします。尚、第十四号以前は全部品切ですので御諒承下さい。

◎KK通信◎ 第十五号より第二十三号まで各号在庫、一部送共二十円、六冊分送共百円(B6版十六頁)尚、KK通信は第二十三号までにて廃刊になっております。

◎御申込は、堺局区内、曙書房KK通信係へ

貴方の考案されたアイデアによって誌上を飾り、又は、分譲品中に加えたいと思います。アイデアは出来るだけ詳細の説明と共に、なるべく略図の添付をお願いいたします。但し、場合によっては文章だけでも結構です。

採用の分、並に優秀なる企画に對しましては、写真又は画稿を差し上げます。

(企画係)

女性の下着写真マニア

花^{はな}房^{ふさ}亜^{つぐ}夫^お

小さい時からカメラをいつもぶらさげている位、写真好きだったので、一流のカメラ雑誌にも三枚に一枚の割で当選する位の腕を持つようになっていました。未だ二十二になっただけですが、座談会記事にも二、三回出て、学生フォト作家として、私の名もその方面では少しは知られていますが、恥しいのでこゝでは申せません。しかし写真をやっているのも、私の写したフィルムの数も数えきれぬ位あり、ヌードこそは写しませんが、特に私の好きな風景ではアルバムが十何冊と出来てしまいました。

これらのアルバムは人に見せても何らやま

しいものではなく、私も人に見て貰うのを秘かに得意としています。けれどもこの十何冊かのアルバムの外に、私には誰にも見せられない三冊のアルバムがあります。今日はこの中の一冊についてお話ししましょう。

それは私が十七の春、又とない嗜虐の経験を織り込んで、にがいなながらもほろ甘い思い出をのこしてくれているものです。その一冊のアルバムの中には私は何を写し込んでいるのでしょうか。写真雑誌で「線の切れ味」をほめられている私が、その鋭いカメラの焦点へ私がとらえているのが女の下着だと云ったら私の写真をほめてくれている人はどんな顔を

することでしょう。けれどもそれは事実なのです。

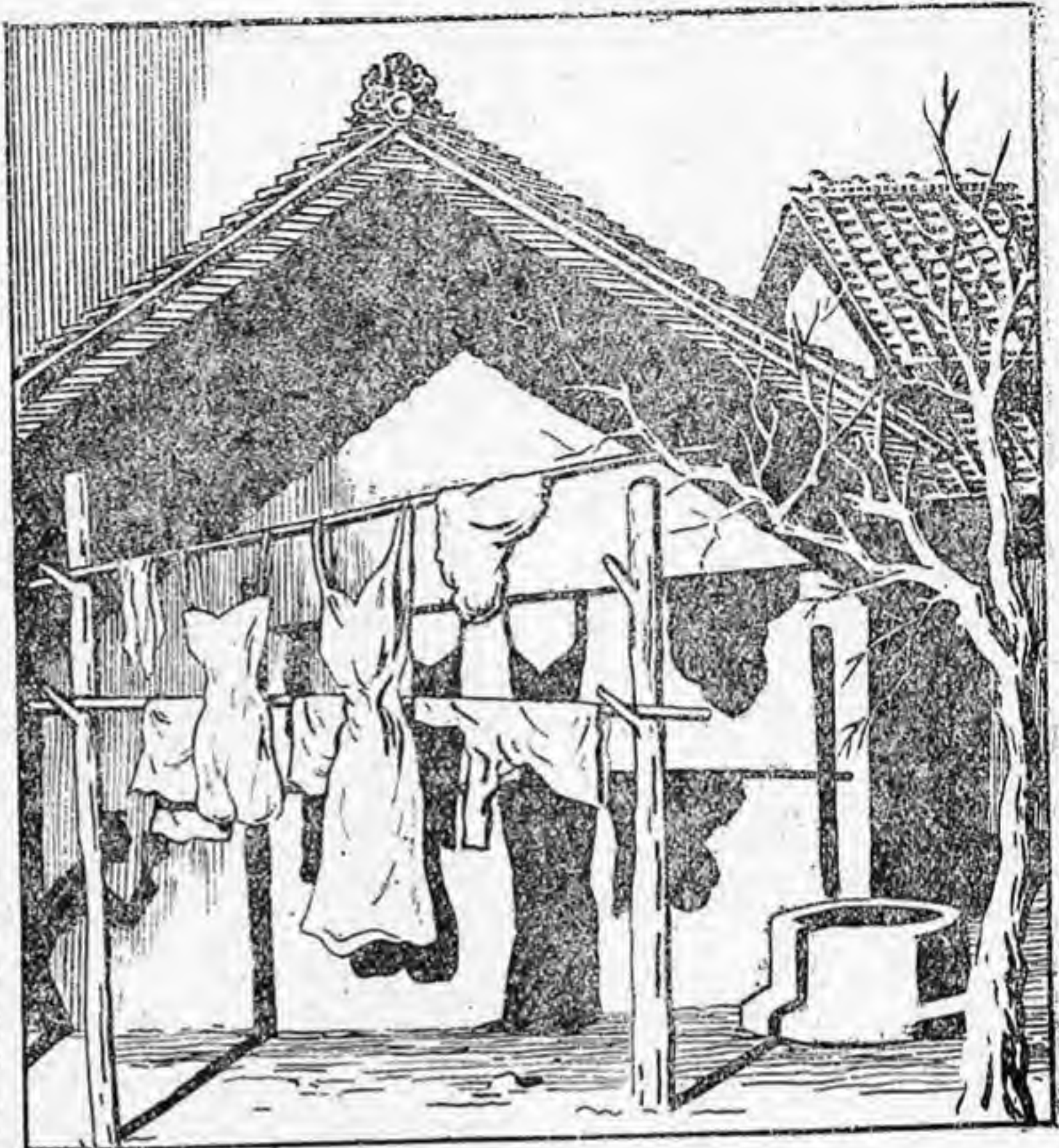
私は風景を撮るかたわら、物干竿にゆれる柔い布をみると途端にたまらなくなってレンズをその方に向けてしまうのです。私が一番はじめそれにひかれたのは十四の秋でした。

K山に見える田圃道を歩きながら、一軒の薬葺の屋根の線が青空の雲にとっても美しいコントラストとなっているのを見て、夢中でそれにレンズを向けたのです。この時写した写真はSカメラ雑誌の一等になっていますが、余計なことは省きましょう。

それを写し終って薬葺の百姓家をまわって裏へ出たとたん、私の顔にぶつかったのはふわとしたナイロンの感触なのです。石鹼についている柔い香料の匂いが風にのって私の鼻先へ漂って来たのです。その時は咄嗟に女のものとは気がつきましたが、よく見ると真黒いレースのスリッパだったので、思わず手でそれを払いのけると、ピンクのパンティがブラジャーが、クリーム色のシュミーズが、万籐飾（私にはそう見えたのです）の様に干してあるのです。

私は、こんな古ぼけた百姓家にこんな艶めかしいものがかゝっているのを見て吃驚しま

した。薄いメリヤスの女の下着が、初秋の柔らかな風と夕陽を受けて清潔な女の体のようにふくらんでいました。目の前にあるピンクのパンティの股の所が皺が寄っているせいか濃い線を描いているのが妙に私の頭にのこっています。私はぼーっとしてしばらく其処に立ちすくんでいましたが、若い女の声とガタ



写真は私の秘密のアルバムの第一頁を飾っています。

私が女の下着を追うようになったのはそれからの事です。金持の家の裏庭に干してあるズロースが妙に薄汚れたタブーの物であったり、バラック建のこんなと思うような家に股のところを上にした真白なショーツパン

ビシする戸を開けにかゝったのが耳に入りました。私は慌てゝ其処を飛びのきました。そして百姓家を振向く帰り道をとりましたが真白いシユミーズ一枚の女がその下着を腕一杯に取り片付けているのが目に入りました。若い美しい女だったのです。私は反射ファイ

ンダーを覗き乍ら、二枚、三枚とシャツターをきりました。手がふるえていたせいか、太倍率の引伸しにはたえませんでした。その

私は色あせた腰巻には関心がありませんが、洋装のものなら何んなに薄汚れていても反って気をそゝられ、思わずシャツターをきってしまうのです。メンスのついたものなども遠くからでは分りませんが、何んなズロースにもついていないものはないという事も知りませんでした。しかし残念な事にはフィルムには感じません。レンズを女の下着に向ける事についての苦心はこゝでは云わないでおきましょう。人影がなくなる迄カメラをしのばせて二時間も立ちつくしている中に日がかげって、干物が取り入れられた事も数え切れない位で

す。私のアルバムにはこうした苦心の結晶がギッシリ一杯はってあるのです。

こうしているうちに多くの女の下着を撮っている中に私はふとコルセット類が洗濯して干してあることに一つもぶっかった事のないのに気がつきました。何故だろう？ 私はスタイルブックを秘かに買ったり、洋裁独習書を買って来たりして調べました。それによるとコルセットは肌につけるものなのです。少くともシェミーズの上につけるのです。もしパンティの上につけると生理的要求のさいに一々コルセットのホックを外さなくてはならないのです。幾ら何んでも女は便所に入る度にコルセットを取ったりはしてないでしょう。そうすれば汚れるので少くともスリッパと同じ位洗濯しなくてはならない筈です。でも一向に干してないのです。

私はそれからカメラを抱えてコルセットを探して歩き廻りました。そのかたわら、私は



コルセットについての研究もしたのです。物干台に見つからねば見つからぬ程、それに対するあこがれはつりました。百貨店の女の下着の売場を何回も往復しました。そして秘かに横目でコルセットをはいたボディを眺めて、大急ぎでコルセットに対する知識を整理するのです。だが百貨店通いもすぐにあきました。ボディがはいっているコルセットは何時も同じものなのです。アメリカのカatalogに

は何十という種類があります。股付きコルセットというのもあります。股にピタリ喰い込むコルセット、腹をしめる前が二重になったコルセット、後で編み上げてウエストをしめるコルセット、ガードルといって長いガーターのついた申しわけみtainなコルセット、ブラジャーと一緒になった体にまといつくようなコルセット、はては妊婦用のコルセット、又太もも迄しめるコルセット等があります。

それらのコルセットが全然物干しにないというのは、日本の女性にコルセットが未だ普及していないからでしょうか？ よく物かげでずり下るストッキングを太ももも露わにひき上げている女を見ることがあります。コルセットをしていたらそんな事にはならないでしょう。けれども百貨店で売られているコルセットが一つも見当たらないということはあり得ないことです。私は風景写真を撮るかたわ

ら、せっせと、コルセットを探し求めたので
す。

私が十八になった春のある夕方、とうとう
それを見つけたのです。一年余りも探してい
てやっとそれを見つけた時の喜びは、筆舌に
つくしがたいものでした。しかもそれが私の
家から一丁もへだたってはいないO女子大の
寄宿舎にあったとは。途端に私はそれが欲し
くなりました。こんな気持ちになったことは今
迄になかったことです。

その夜、私は寄宿舎へしのびこみました。
便所の扉がやゝ低くて、飛びつけば易々と中
へ入れるのです。私はしばらく様子を見るた
めに大便所の中にかぐんでいました。甘ずっ
ぱい若い女の尿の匂い、私は思わず妙な気分
になってくるのをおぼえました。ふと気がつ
くと、普通の便所に見られぬ妙なものがあ
るのです、それは紫色の法ろうを敷いた籬なの
です。私はそっと蓋をとって見ました。何か
白い綿が一杯入っています。女は小用の後
に綿を使うのかなあと、妙に思った私はその
一つをつまみ上げました。つまみ上げた途端
私は胸がどきっとしました。真赤な血がべっ
とりと綿にしみ込んでいます。それは、
つい今傷口からふきとられたようにじっとり

ぬれて光っています。私は頭がカーツとしま
した。メンス！それは若い健康な女のメン
スだったのです。

私は籬の中をかき廻しました。いくつもい
くつも血のついた綿が出て来ましたが、はじ
めのその様に真赤な血のついたのは少く、
皆じっとりとして湿って黒ずんで、妙にすえた匂
を出していました。その香をかぐと、私は
思わず全身がぞくぞくするのを覚え、頭がく
らくとして気が遠くなりそうでした。

その時です。バタ／＼という足音が聞えて
くると、ノックもせずにドアが開きました。
女です。女学生はスカートを半ば捲り上げな
がら中へ駆け込もうとした途端、中にいる私
を見つけて「キャア」と一声絶叫したかと
みるまに、「大変よ、誰かきてえ」と叫びつ
ゝ廊下を走ってゆきました。

私は吃驚しました。けれどももうふぬけの
ようになって、足ががく／＼ふるえ出し、尻
をそこへべたんとついてしまいました。バタ
バタと五、六人の足音がします。私は便所の
隅に立ちすくんだまゝ、五、六人の女学生と
睨み合っていました。

「あんた、そこで何してるんさ」
黙ってふるえている私を見ながら、女の中

の気丈そうなのががすれた声で云いました。

「許して下さい」

私はどもりながらそう云いました。

「泥棒？」睨み合ったまゝです。

「違う、違う」私は居ても立ってもいらぬ
気持ちでそう答えるのが、やっとでした。

「どうしてそんなところにいるのよ？ どこ
からしのび込んだのさ」

さっきの女が、ふるえている私に、やっと
安心したまゝのように、次ぎ次ぎと問を發しま
す。外の女も、

「いやらしい」「すけべえ」とか何とか言葉
を投げつけて来ます。私はやっと自分の心を
取り戻し、逃げる方法を考えました。こゝか
ら逃げ出すには便所を出て、便所横の扉を乗
り越すしかないのです。

「こゝへ出といでよ」

「どこの誰さ、名前を云いなさい」

「何故こんな処へしのび込んだのさ」

次々と言葉の攻撃です。私はしおしおと便
所を出ました。見ると、女学生といえ、もう
二十を過ぎた堂々としたポリュムの女ばかり
です。相手が「女」だと思いましたが、悪い
事をしたという弱味が私を一層ぢぢみ上らせ
ました。いきなり私は駆け出して扉に飛びつ

きました。

「逃げる気？」と、忽ち女達が私の足に飛びついて引きずり下すと、私をそこへ押えつけてしまいました。私は力の限りあばれましたが、女の力とは云え、五人がかりで押えつけられてはどうすることも出来ません。

「誰かくるもの」

「縄は」と云う叫びと一緒に、私の両腕は背中できりきりと思いきり締め上げられました。

しばらくして女達は私の体からはなれました。けれども私は身動きも出来ません。足首も何も体中雁字搦目に縛られていました。女達は私のまわりに集って来ました。全部で十二、三人います。

「何よ」

「どうしたの、この男」と、あとから来た女

私は元来、女の人の腰巻に強く惹きつけられる性向を持ち（男性共通の傾向かも知れない）、小学五年の頃から既に女の人の着物の裾からこぼれる緋の蹴出に、随分惹きつけられていたものである。

(一)

昭和十年といえは今からふた昔、どちらか

達がそう聞いているのが聞えます。

「泥棒よ、便所の中にかくれていたのさ」

「まあ、こわい」と、がや／＼云っておりま

す。皆から寮長さんと呼ばれている女に、

「何のために便所の中にしのび込んだのか」ときかれました。私は「コルセット」と、とうとう私の性癖を告白させられてしまいました。云わなければ警察に突き出されていたことでしょう。

私の下着趣味が分ると女達は私の縛しめを解いてくれました。その時、私は窓の外に例のコルセットがぶら下っているのを見出しました。私は二度とこの寮に出来ない事、そして今晚の出来事は決して他言しないことを誓わされて、許されたのでした。

私はほうほうの態で家に帰りついたのは九時前でしたから、一時間近くも責められていた

といえは中世紀的な静かな地方都市の街はすれにある小学校に私は通っていたが、丁度、その年の春のうら／＼かな暖い日であった。

私はその頃、中学校受験の為に余課で普通の生徒よりは帰りが何時も遅かった訳だが、その日も何時ものようにたゞ一人で校門を出て、右側に大きな湖を望む一本の田舎道を急いでいた。すると三十米ぐらい離れた平屋建

たことになります。それっきり女の下着を追い廻すことはふ／＼と止め、写真に撮影することに専念するようになりましたが、まるでそれは私にとゞめを刺すかのように、色々な下着、即ちズロース、パンティ、フレンチパンティ、ブルマー、コルセット、ガートルブラジャー、シュミーズ、スラックス、ブラウス、スカート、ペティコート、それにメンズバンド、ストッキング等をよくもこれだけのものをと思う程の数々の写真がはられてあります。

私は其の後、あの寄宿舎の方へは足も向けません。もし彼女等の一人にでも会ったら、私はいても立ってもいられないでしょうから……。

(一九五五、一、五)

家の前庭附近から、急に吃驚する程かん高い若い女の嬌声が聞えて来たので、ふと面を上げて生垣越しにその方を見ると、そこには小学校六年生の私にとっては、思いがけない光景が展開されていた。私は固唾を呑んで顔を赤くそめながら、その道を通ったのを今も尚、忘れ去ることが出来ない。

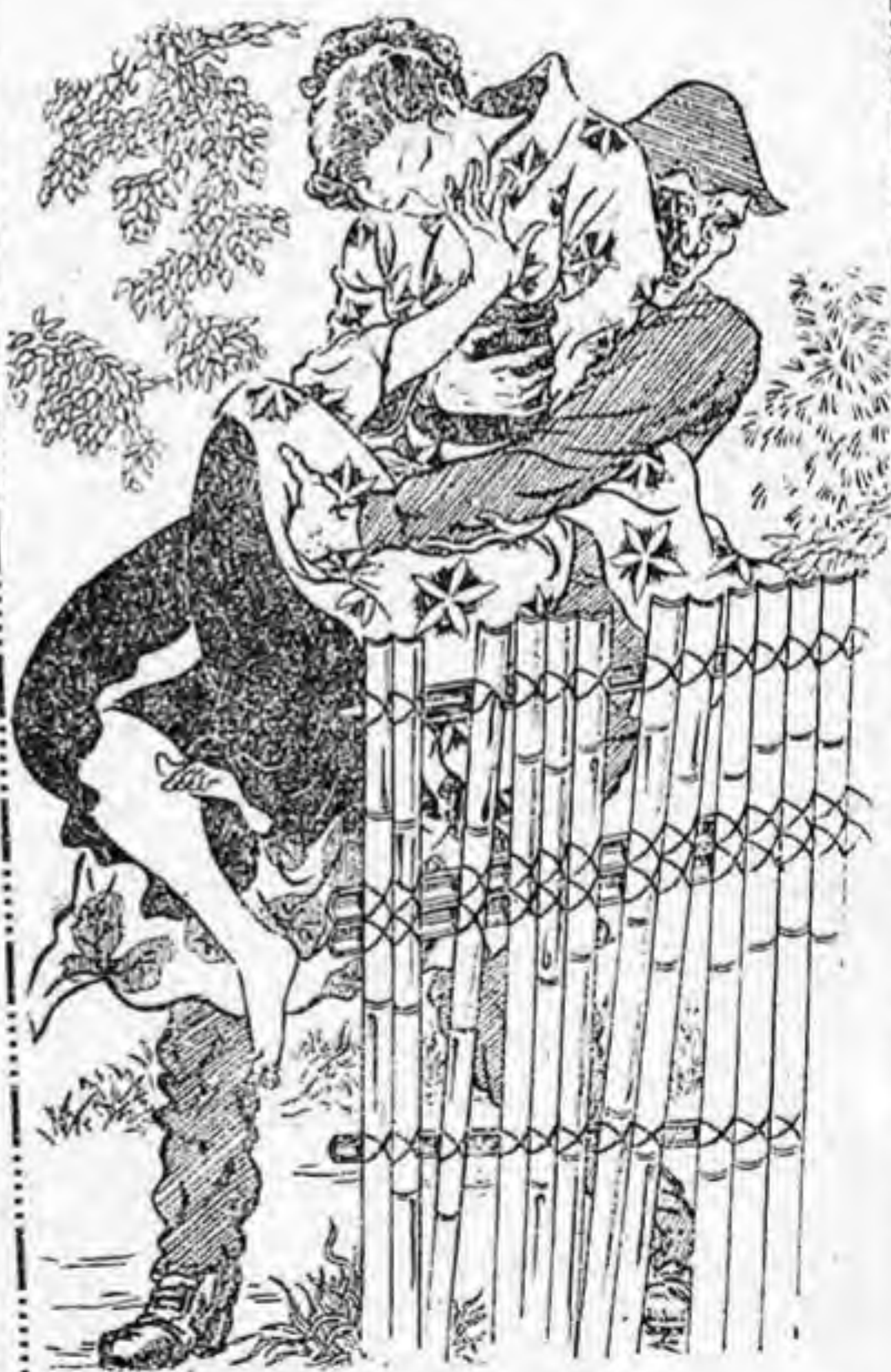
それは私が何時も鉛筆やノートを買う文房

具店の若い奥様で、どちらかといえば太りじしで中背の、肉体的な感じの人であったが、それでも中流の上品な奥様の印象は決して拭い去ることは出来なかった。その和服姿の奥様が私の目の前で見も知らぬ若い労働者風の男の大きな両手の中に背後から赤ちやんにオシッコさせるときのように高く抱え上げられていたのだ。奥様は恥しそうに男の手をはずそうと、懸命に足をすこしめにバタつかせるような恰好で悶えてはいたが、さっきの嬌声は、彼女の脚が地上を離れるその直前に思わず発せられた声であった。

それならまだしも、胸をそらせたまゝ身体が宙に浮いた恰好で、男の腕をはずそうと脚をすこしめに開いて遠慮深くバタつかせるので、その度に少しずつ着物の前が上にずれて花のように開いて中から燃え立つような真赤な腰巻が、膝のあたりまで露わになり、私はその妖しい魅力に全く圧倒されてしまった。

今にして思えば、若い人妻が野卑な労働者相手にうまい具合に楽しむ、かくれたるイテ

腰巻フェチリストとしての
私の見たチャーミングな
二人の女性
伊曾田 選



ヤツキであったとしても、あまりにも悩ましい光景として、私の脳裏に焼きついたまゝ、永久に離れることはないであろう。

(二)

このような事柄のあった一ヶ月目に、これは幾度となく見ることの出来る女の人のポーズかも知れないが、その中でも特に男の心を惹きつける程の場面にぶつかったのである。それは私のよく知っている中年のお金持の奥様で、何時も端麗な和服姿で家事に励むノブルな人だった。丁度私が学校からの帰り、私の家のほど近い小川のほとりにさしかかった時、その女の人が一生涯懸命に洗濯をして居

から真赤な蹴出しをチラツカせて、その緋色の布の内面には白い絹の腰巻を短か目にしっかりと覗かせていた。

腰から下に流れる豊かな女の下着の赤と白との美しいコントラストがエロチックなポーズとして、何とも云えず幼い私の眼に映じたのだった。

その河面の反対側の岸から、五十がらみの男が立ちどまって、その奥様の美しくも悩ましい姿態に焼きつくような目をそそいでいた。光景を、今もって忘れることが出来ない。

(おわり)

る最中だった。

徒然草の中に、仙人が洗濯女の白いフクラハギを見て神通力を失ったという昔話が出てくるが、平常は白いフクラハギ等、人の前では滅多に見せたことのない様な奥様が、洗濯するので余儀なく脚を大きく左右に開いて、前かゞみになったため丁度、着物の前が大きく八文字に開いて、中

懸賞入選作品第三席（賞金壹万円）

調ちよう教きよう師し

淡 美 一 郎

調 教 師

(一)

私のペンネームを云ったら知っている人もあるだろう。もっぱら風俗雑誌と呼ばれる種類のものに猟奇異端の読物を提供している。

偶に気が向けば、本格物と自称する探偵小説を書いたりするが、此の方は、さっぱり売行きが良くない。

「何しろ、書き飛ばすだけで、ろくに準備もいらなし、楽なものさ。あく迄も片手間の積りだからね」

こんな言を吐きながら、その実、ありもしない資料をあさって、うんうん云いながら、アブ小説に取組んでいる。大して金になる仕事でもない。

勤め先の商事会社で貰う給料と、とんとんと云った按配である。それなのに、夜遅く迄、偽き疲れた頭を無理に廻転させ、消え行く情熱をかき立て、筆を取るのは、畢竟、そんな世界が好きだからに外ならない。

黄昏の空にも似た異端の魅力を感じるからであった。だからと云って私自身が、精神異常者や変態性慾者だと云うのではない。

寧ろ、私が健康であり正常であるからこそ、そうした猟奇の世界を夢想するのである。

しかし、私の書いたものを見た人は、そう思わない。

私が不用意にもらしたペンネームが会社中に知れ渡ると、どえらい反響が起った。

男達は——へー、彼奴がね、見かけによらず——と云った程度でしかなかったが、女達が大変だった。

一人が、書店から、彼女にして見れば、死ぬ程の思いをして買って来た風俗雑誌は、ボロボロになる迄回覧された。

忽ちにして私は、変態者の烙印を押されてしまった。

部課長の間でも可成り問題になったらしいが、唯、書くだけと云うのでは罰し様がなかった。

私は昼間は人一倍働いていたから、家に帰ってから趣味でやるのなら、しようがないじゃないかと云う事だったらしい。

「そんなに書くのが好きなのなら、もっと方向を変えて見たらどうだね。大衆小説なんかどうかね」

課長は、こんな事を云ってくれたが、私は笑っただけだった。

そして一段と馬力をかけて、アブ小説を書き続けた。

一ヶ月に約十篇。

一篇二〇枚平均として二〇〇枚。

その中で、良さそうなのを選んで出版社に送る。

月に、二、三冊の雑誌に私の掲載された。

同僚達は、私が、とんでもなく稼いでいると信じた。

稿料の安いのを知らないのだ。

女の社員達は、私に寄りつかなくなった。

私の小説に出て来る女のように、笞で打たれたり、縄で縛られたりするのが恐わかったのかも知れない。

そのくせ、彼女達は毎月かゝらず私の小説を読んでいるらしかった。

友人の一人が秘かに告げてくれた処だったが、彼女達の間では、

私のファンが相当に居ると云う事だった。

全く、おかしい話だったが、まんざら悪い気持ではなかった。

(二)

私が良く行く本屋の、おやじが、こんな事を云った。

「いや驚きですね。おたくの会社の女の人が凄く雑誌を買いに来るんですよ。変だ変だと思っていたら、どうです、おたくの書いたのが載っている奴でね」

「おやじ、ホクホクって訳だな。どんな女の人だい」

「そうですね。十人位居ますからね、毎月。だがもうかゝらず来るのは、それ、あの人ですよ。秘書をしている……」

「田中マリ子かい？」

「そうですよ。女優さんの様に綺麗だと噂のある人ですよ」

私は意外に思った。

田中マリ子と云うのは社長の秘書。

二十三才の美人。

既に数人もの男が彼女に熱を上げ、そして失恋している。

女王の如くに輝やける存在の彼女が秘かに私の小説を愛読しているらしいのを知って、私の心は妖しくたかぶった。

私の彼女を見る眼が変わってきた。

脂切った初老の社長と、アブフォトそっくりの痴戯を繰り返しているのかと、想像するだけで妙な気持になってくる。

「よし、いつかとちめてやろう」

私は一かどの変態者になった積りでニヤリと笑って見た。

田中マリ子はマゾヒストに違いない。

私は、風俗雑誌に告白を載せるある女性を思い出した。

マリ子に、被虐の喜びを思い切って与えてやるのだ。そう考えただけで興奮した。

雑誌に載っていた、ありとあらゆるサジステイックな場面が生々しく目の先でちらついた。

私はまず何んとかして彼女に近づこうとした。

ある日、私は残業をして九時近く迄会社にいた。

基準外の手当は一時間単位になっていたから、仕事はなくなっても九時迄は居なくてはならなかった。

所在ないまゝに、ふと私は、秘書課の部屋を覗いて見る気になった。

マリ子のふくよかな尻をのせる椅子に腰掛けて見たいと思った。

秘書課のガラスのドアに電燈の光が透いて見えた。

今頃、誰がいるのだろう。

好奇心にかられて私は音のしない様にドアを開けて中に入った。

学生服を着た給仕の後姿が見えた。

此の春、新制中学を卒業したばかりの、確か岡野とか云う少年だった。

少年は、マリ子の机の前にうづくまっていた。

人の気配に驚いて、少年は、ふり返った。

「アッ」

と軽い叫び声を上げて立ち上った。

手には赤いサンダル靴の片方が、握られていた。

「おい、何をしていたのだね」

私は、意地悪く聞いた。

「何もしてません。残業してたんです」

少年は、しどろもどろだった。

「その靴は」

「田中さんのです。そろえていたんです」

「ふーん、そろえてね」

私は、横の椅子に腰を据えた。

此の純真そうな少年を弄ぶ悪魔的な喜び、私の心を意味もなくワ



グワクさせた。

私は少年の手からサンダルを取った。

マリ子が上履に使っているものだろう。

小さく可愛い靴だった。

もう相当に使い古しているらしく、足の指の形が、黒く、はっきりと窪んでいた。

プーンと汗っぽい臭がした。

「君は、こんな物が好きなんだね」

私は、おずおずした少年のつぶらな眼を、じっと覗き込んでやった。

「嘘です。嘘です」

「嘘ではない。見たんだよ。君は、此の靴を胸に抱いたり、接吻したり、果ては腹の辺りに、押しつけて、けしからぬ行為をしていたではないか」

勿論、実際に見ていたのではない。

靴フェティシストのやりそうな事を言ったのに過ぎない。

だが少年は、気の毒な位い、しよげてしまった。

「どうだい。間違いないだろう。君は完全なフェティシストだよ。

変態性慾者さ」

私の空想は、此の少年をめぐって果しなく拡がっていった。

(三)

岡野少年には、私の云うフェティシズムの意味は分らなかった。

だが変態性慾者だと云われた時には、身をふるわせて哀願する様な目附きをした。



私は、此の少年を本格的なマゾヒストに調教してやろうと思った。

美しい妖花マリ子と組合せて、二人を思う存分、弄んでやるのだ。

マリ子の見ている前で、少年に、彼女の靴を舐めさせる。

白い柔らかな足の指をしゃぶらせるのである。

恐らくマリ子は、くすぐったがるだろう。

恥かしがって応じないかも知れない。

その時は、彼女を全裸にして縛ってしまう。

そして少年に舐めさせるのだ。

犬になった少年が、べろべろと女の体を舐め廻す図を想像して、私はメフイストの歎氣に暫く身をゆだねた。

私は、案外こいつは、すらすらと事がはこぶかも知れぬと思った。

風俗雑誌の愛読者である位だから、マリ子は、直きに、私の良き生徒になるだろう。

可愛らしい岡野少年を見て、加虐の限りをつくして見たい気持ちになるかも知れない。

そうなれば、しめたものだ。

美しい女王は、彼女の犬に、あくなき鞭を振うだろう。

形の良い足の先を、少年の口一杯に、押し込んで、息も絶え絶えにするだろう。

無理に口を開けさせて、その上を跨り、生温い液体を注ぐかも知れない。

細い少年を馬にして、豊満な肉体を、ずっしりと乗せ、部屋中を這い廻らす事だろう。

そんな情景を、私は長い鞭を手にして、心ゆく迄眺めるのだ。

哀れな俳優達が、少しでも演技をおこたる様な事があれば、私は容赦なく鞭で打ち据えるのだ。

疲れ切った二人は素裸にされて、同じ部屋に寝かされる。

折を見て私は、その部屋に忍び込む。一寸、いじった位では目を覚さぬ位い、二人は疲れている。

先ずマリ子の体を抱いて、思い切り淫らな恰好にする。

次いで少年の、すんなりした体に手を延す。

ぶるぶると身体全体を震わせて悶える少年の顔に、得も云われぬ満足そうな表情が浮ぶのを見て、私は興奮する。

更に私は愛用のカメラを手にして、ありとあらゆる角度から彼等のヌードを写すのだ。

私は、岡野少年を見つめながら、頭の中では、こんな妄想を、しきりに描いていた。

「淡さん。お願いです。内緒にしておいて下さい。僕は、田中さんが好きなんです。だから靴を……」

少年は、すがる様に呟いていた。

「馬鹿だな。田中さんは、君の様な変態性慾者は好かんだろう。君は今迄、自分が変だと思った事はないかね」

「ありません」

「ますますいけない。生来の変質者なんだね。女の靴に狂的な性慾を感じる。だが、心配するんじゃないよ。世の中には、そんな奴はザラにあるんだよ。そうそう、僕の雑誌を貸してあげよう。自信を得るだろうから」

私は、靴の中から、風俗雑誌の新刊を取り出した。

この雑誌は、謂わば、こうした種類の本のパイオニアとも云える物で、終始一貫、異常風俗の文献的な研究に没頭していた。

私は無理に、雑誌を少年に渡すと、赤いサンダルを下に置き、静かに部屋を出て行った。

少年の煩悶を充分に計算に入れて、頬が一人でに綻ろびるのを感じていた。

徐々に彼を本格的な変態性慾者に育て、いくと云うプランに自から酔い痴れていたのであった。

(四)

翌朝、私が出勤すると、会社は大騒ぎだった。

岡野少年が秘書課の部屋で自殺していた。田中マリ子の机の下で電線のコードを首に巻いていた。

机の上の書置きには、

「お父さん、お母さん、お許し下さい。僕は変態です」

と、走り書きで書いてあった。

うっすらと半眼を開いた、いたましい死顔のすぐ横に、赤いサンダル靴の片方が、転っていた。

部屋の隅の屑入れには、風俗雑誌の新らしいのが、ずたずたに裂かれて捨てられてあった。

私は人垣の後から、ちらりと、それだけを見た。

暗然たる気持で、此の少年の死は、自分のせいではないかと恐れた。

人間誰でも心の奥には、異常な感覚を持っているものだが、少年は、私の貸した雑誌を見て、いよいよ自分が変態者だと信じ込んだものに違いなかった。

中に書かれている様なアブノーマルな性癖を自分も持っているかと判断したものであろう。

「岡野さんが変態ですって」

「どうしたのでしょうかね」

ガヤガヤと云う囁きと共に、皆んなの視線が私に集っていた。

私なら少年の秘密を解く事が出来るのではないかと思ったのであろう。

私は、おもむろに前へ出た。

「つまり、これはマゾヒストの典型的なタイプだよ。美しい女の人此の場合は田中さんだが、その人に虐められ足げにされたいと云う願望が嵩じた結果なんだ。靴に対するフェティシズム。しかもなおそうした慕情を打ち明けられぬ悩みが内攻し遂に、自ら首を縊ったのさ。しかも此のマゾヒストは、愛する女の机の下で小さくなって死んでいった」

云いながら私は、机の横で、じっとうなだれている田中マリ子を見た。

彼女は最前から、つかれた様な目で、少年の可憐な死体を眺めていた。

何を考えているのか。

私の暗示に富んだ言葉を、どう聞いていたのか。

「淡君、本当かい、その話は」

同僚達は半ば疑わしそうな顔で云った。

川崎君が皮肉そうに尋ねた。

「淡君。殺人事件じゃないのかい」

「他殺だって。そんな事はない」

私は、思わず声を大にして否定した。

「厭に確信があるんだな。その遺言の字、誰かのに似ていないかい
なんとなく、筋書がある様だな」

私は、川崎君を嫌いだ。

探偵小説狂と自称するが、妙に陰険で、ねちねちしている。

エロ作家の私を軽蔑して自らは、純文学とやらの小説を営々として書いているらしかったが、さっぱり芽が出ない。



の態度を示すのだ。

「何故そんな事を云うんだ。そんな事を云い出す方こそ変だね」

私も負けていない。

川崎君は血相を変えて、私に
つかみかゝろうとした。

その時、ドヤドヤと警察の係
官達が入って来たので私達の対
立はそのまゝになった。

「あの、淡さん。お話があるん
ですが」

私が部屋を出て歩き出すと、
先廻りしていた田中マリ子が、
異様に目を輝かせて私に云っ
た。

(五)

その日の夕方、私に云われた
通りマリ子は会社の前の喫茶店
で待っていた。

「どうでした。大分、警察に聞

此の男に怨まれる筋合は一寸もないのだが、どうした訳か、何か

につけて私に楯つくのである。

川崎君は、今も、私が岡野少年を殺したのだろうと云わんばかり

かれたらしいですね」

私は、無遠慮に、じろりとマリ子を見て横の椅子に腰掛けた。

「さて、何の用ですか」

マリ子は、周りを見廻して人気のないのを確かめると、それでも暫くは云い渡った後で呟く様に云った。

「本当ですか。岡野さんは、私を好きだったんでしょか。私、少しも知りませんでした。私に責任があるでしようか」

「そうです。間違いありません。岡野君は現に僕にそう云っていました」

私は、わざと冷酷そうに顔を歪めて云った。

「どうしましょう。お氣毒に。でも、私も困りますわ。何も私の机の下で死ななくたって」

「いや、一寸も困らないですよ。益々貴方は近寄り難い神秘的な存在になるんですから。男の生血を吸って更に更に美しくなるでしょう。寧ろ貴方は、あの哀れな奴隷の死を喜ぶべきでしうね」

マリ子はヒステリックに叫んだ。

「よして下さい。私はそんな女じゃありません。貴方は人を虐めて喜ぶのですか」

「そして貴女は、人に虐められて喜ぶのじゃありませんか」
すかさず私は反撃した。

「知っていますよ。貴女が、変な雑誌を買う事を」

見る見るマリ子の顔が蒼白になっていった。

「どうです、当たったでしょう。貴女は生来のマゾヒストなんだ。そうでもなければ、仮令あのデブの社長が変な事をしたからって、そう易々とマゾヒストになるもんじゃない。貴女は、もう社長がやる程度のサドじゃ満足出来ないのじゃありませんか。そこで僅かに、風俗雑誌を買ったりして自らをなぐさめていたのでしょうか。僕の小説も読んでくれましたね。貴女の夢の中に、僕が現われて鞭を振う

のじゃありませんか」

マリ子は、聞いていて途中で、耳を覆ってしまった。

「嘘です。嘘です」

「いゝ本当だ。僕は、貴女が岡野君の死体を放心した様に眺めているのを見た時に、貴女の一切が分かった様な気がした。あの目は、決して少年の死を、いたましがっている目ではない。憧れにも似た陶酔の、物憂気な目だった。貴女はあの時、自分の病癖をもうどうする事も出来なくなったのだ。僕に声を掛けたのはその為ですね」
暫くじっと私の目をのぞき込んでいたマリ子は、やがて、大きくコックリと頷いた。

続けて二回、三回と頷いたマリ子の顔には妙に安堵した様な、なごやかな表情があった。

「幸い、誰も人はいない。一っそ心にわだかまっている事を喋ってしまったら。話によっては相談に乗らない事もないですよ。先ず社長が、どの程度のサディストか話してもらいまじようか」

マリ子は長く美しい脚を組み直した。

「社長さんは、私が他の若い男と変な事をしているだろうと云って責めるんです。私にはそんな人など居ませんから知らないと言うと怒って私を打つんです」

「鞭で」

「いゝえ、平手です。私は鞭で打ってもらいたいのですが、社長さんは、私の体に傷がつくと云うのです」

「生ぬるい爺さんだな」

「仕方がないから、私は、仮空の人を作って、その人との話を社長さんに話すのです」

「ははん……。つまり心理的なサディズムだね。そして貴女の話す姦通の情景で興奮する。そうでもしなければ体が思う様に行かないのでしよう。年ですからね」

「初めは、私、厭で厭でしようがなかったのですが、その内、ありもしない冒険を話すのが面白くなり、聞いている社長さんが、むきになってくやしがるのが楽しみになったんです。しかし、それも一時。すぐあきてしまって、自分自身をどうする事も出来ない気持ちになって来たのです。こんな時、よく貴方のお書きになる風俗雑誌を見つけたのです。淡美一郎と云うのが貴方だと分かる前から好きでした。淡美一郎のものは、片端から読んでいます。その作者が、貴方だと会社の噂で分かった時は驚きました。嬉しい驚きなのです。淡さんなら、私の押え様のない悶えを解決して下さると思ったからです。だが、どうやって話し掛けていゝのか分かりませんでした。雑誌の編集部に頼んで見ましたが、断られました。何んでも貴方がいらなとかおっしやったそうで」

「そうですか、めんどろですから、一切、そんな読者からの便りは遠慮していたのですが」

私は意外なマリ子の告白を聞いて、身の内が、カッカッと燃え上るのを感じた。

「分かりました。一つ、貴女を存分に楽しませてあげましょう。私のアパートがいゝでしょう。少し位悲鳴を上げても大丈夫ですから」

私は美しいマリ子の肢体を思い切り責めさいなむ自分を想像した

(六)

こうして私とマリ子の異常な交渉が始まった。

私は、私の書く小説の主人公になった。

妖しくも美しい被虐の花を得て、私は、兼ねて空想していた拷問を現実に行う事が出来る。

だが最初から酷い仕打は出来ない。

まだ充分に訓練されていなかったからである。

私は慎重な調教師だった。

先ず私の部屋に入ったら素裸になる事から始めた。

そしてきつい月経バンドを、メンス時であると否とを問わず付けさせた。

股間を、ぴちっと締められた感じが、彼女のマゾヒスティックな性癖に合うと思ったからだ。

又、見ている方も、全然の素裸より、股の辺りに黒い覆いがあった方が、刺戟的だった。

此の考案は可成り素晴らしいと思えた。

ありとあらゆるサディスティックな方法を紹介したり発表したりする例の雑誌でも余り、お目に掛かった事がない様に思った。

無論、される方は厭がった。

メンスの時でも、鬱陶しがらる婦人が多い位だから、何んでもない時に、しかも、肌に喰い込む程、きつく、はめられるのだから、無理もない。

だが私は容赦ない。穢くなっても替えさせない。

異様な臭がすればするほどよかった。

こんな準備期間を相当に費して始めて、私は本格的な責めに入って行った。

旧幕時代に行われた拷問の方式を出来るだけ踏む積りだった。先ず月経バンド一つの裸にして、両手を後に廻して太縄で縛り上げる。

座敷の真中に正座させる。

革で縫んだ鞭で、マリ子のむっちりした肩を叩いた。

「アッ」

とうめいて身をそらす恰好が艶かしかった。

私の部屋は閉め切ってしまったえば、一寸した物音を立てゝも他には聞こえない仕組みになっている。

だが無論、大声を出せば、隣りも聞こえるだろう。

マリ子も、その辺の事情はよく知っているから、仮令、どんなに痛くても、思い切り悲鳴を上げる事は出来ない。

私は、そんな事も計算に入れている。

続けて、力を込めて打つ。

肉が裂けて血が出ると、打つのを停める。その代り、傷口にサロメチールを塗り込む。

飛び上る様に痛い。

私は、側に、ごろりと横になって、縛られて自由にならない体をくねらして悶えるマリ子を眺めている。

数日おいて今後は石抱きにかゝる。

本物の石を使う訳にはいかないから、本で代用する。柱にマリ子を縛りつけて昔のそろばん板に似た手製の三角台を体の下におく。二つ、きちんと揃えた膝の上に厚い板をのせ、その上に、部厚い本を徐々に重ねる。

三角にとがった台が足にめり込むのは想像以上に苦痛らしい。

更に、本の重み加わるので、後で、重なった可愛い足が自然に紫色に変わっていた。

「ハアハア」

と苦しそうに大きな息をしている内に、真赤な唇の間から白い泡が出て来、鼻水が流れる。

「苦しいか、苦しいか」

そう呟きながら、私は、彼女の苦悶の表情をカメラにおさめる。暫くその儘にしておく。

「許して、許して」

と、細い声で、うめく様に云うが、不思議に、その表情は恍惚たる状態を示す様になる。

腰の辺りまで肉の色が変わり、後に廻って足の裏をくすぐっても、つゝいても感じなくなる。

こうなると危険である。

私は、拷問を中止する。

足の関節が曲ったまゝになり、殆んど失神しているマリ子の体を柔らかい布団の上に横たえ、熱いタオルで包んでマッサージをしてやる。

それが亦、気持の良いものらしい。

薄っすらと半眼を開いたまゝ、マリ子は私の成すが儘になっていた。

(七)

マリ子を調教する一方、私は、それに基いた小説を書き、写真を撮って、雑誌社に送った。

今迄の小説は、全部が全部、空想の所産だったから、今度こそ迫
真力のある作品が出来たと思った。
だが、作品の評判はよくなかった。



曰く、作り物の感が強い。迫力がない。等々。
私は啞然とした。
よし、それならと、一段と酷い拷問を課す事に決めた。

海老責。

よく現われる言葉だが、とことん迄やって、観察してやろ
うと思った。

両手を後へ廻し、両足を組ませたまゝ、顔に密着する迄に
くゞらせる。

真に奇妙な個体が出来上った。

不安定で、ちよっと触ると、ごろりと、ひっくりかえり、
元に戻れない。

丸くなったマリ子を、抱いて膝の上にのせた。

下向きになった顔が、私の下腹の辺りにぶつかかった。

「苦しい。苦しい」

と叫ぶので、猿轡をはめた。

ごろごろと部屋中を転がして歩いた。

その内、裸の儘でいたので冷えたのだろう。

しきりに身悶えて苦しかった。

私は、後から、抱き上げて、部屋の隅に行き、ある形をと
らした。

さすがに恥かしがって、うんうんと、だぶをこねていたが
遂に耐え切れなくなった。

私は、その勢の良い音を聞いてサディスティックな慾望を
満足させた。

そこで、マリ子の伏合伏が真赤になって冷汗が流れ出てい

たからでもあったが拷問を止め、優しく私の忠実な教え子をいたわってやった。

「どうですかね、御感想は」

私が尋ねるとマリ子は、

「ひどい人。本当のサディストなのね。淡さんは」

と、恐ろしそうに小さく云った。

「本当のサディストなら、貴女にとっては幸いでしよう」

「それはそうですが、ですが何か空恐ろしい感じがします。貴方には私に対する愛情が全然ありませんから」

「サディストに愛が必要だろうか」

「必要ですとも。私は罪人ではありません。マゾヒストではありませんが、どんなに虐い仕打ちをする相手にも愛を求めます。あく迄もそう云った信頼の上に立ったプレーを望むからです」

「成程。大分、貴女も例の雑誌の告白物に中毒しているらしい。愛するが故の加虐、被虐。だが僕には、そんな事は問題じゃない。僕のは実験なんだ。好奇心だけからだ」

瞬間、マリ子が悲しそうな目をしたのを見て、僕はしめたと思

た。

彼女は僕を恋し始めたらしいのだ。昔から、そうだったが僕は相手の女が、のぼせればのぼせる程、冷静にする傾向がある。

(八)

私は、私の実験を、証立立てるために、克明な日記風の物

語りを書くのを思い立った。

鞭打、石抱、海老責と筆は進んでいった。残るのは、釣しだけである。

徳川幕府が用いた拷問は以上の四つである。

私は愈々、マリ子を釣しに掛ける事にした。

両手を後に廻して縛り、更にその上から縄を掛けて胴体にくっつけ、その一端を梁にかゝった環に通して、下から引っ張るのである。

マリ子は完全に宙ぶらりんとなった。

縄は肉に喰い込み、マリ子は顔をしかめて苦しかった。

ダラリと垂れた二本の脚が、私の心を揺すぶった。

足の裏を、手でくすぐってやると、足をばたばたさせた。

動くで一層、縄がめり込むので、唇を噛んで苦痛を耐えた。

太い縄が体重で伸びて、ぐっぐくと下ってくる。

爪先が畳につきそうになったので私は一計を案じて、両脚を縛ると、その縄も、梁にくっつけた。

マリ子は下向きになって逆ハンモック型に吊られた事になる。畳

から一米位上で宙に横になっているのだ。

私は加減しながら、彼女の尻の上に腰かけた。

「ウッウッ」

と悲痛なうめき声がした。

「それだけはよして。体が折れそうだわ」

脂汗を流して哀願した。

「それだけはか。じゃ元通りにしてやろう」足首の縄を解いて下半身が畳につく所を、再びぐぐぐと吊り上げた。

両脚が赤く充血した。

ポトポトと血が爪の間から流れ出した。

びっくりした私は、直ぐマリ子を降した。

私のノートは、こうした無残な拷問の記録で埋められて行った。

マリ子に対する第一期の調教は終わった。

私は、亦、色々な文献や資料をあさって、新しい責めの研究に没頭した。

相変らず彼女は、夜になると私の部屋にやって来たが、私は暫く休む気だった。

「随分疲れたろうから、体が回復する迄待とう。あんまり、引きりなしにやっていると、会社の連中だって怪しむよ」

とは云うものの、実を云えば私自身の方が疲れていた。

今度こそはと、気負って書いた手記は、散々の酷評がついて送り返された。総てがデタラメで、曾って書いた物程の真実感がないと云うのだった。

余りの多作、濫作がたふって、すっかりネタ切れになった自分のスランプを脱し様として、試みに貴重な実験がフイになった様な気がした。

がした。

変質者ぶって得々たる自分が厭になった。あっぱれのサディストだと自惚れていたが、結構マリ子に引廻されていたのではないか。御丁寧に、うんこ云いながら、彼女を叩いたり吊したり、全く馬鹿氣にしていると思った。

臭い月経バンドもあきれた物である。私は、無理に、剥ぎ取ってやった。

マリ子は寂しそうに、自分の裸身を見下していた。接吻すると、

「首をしめて、首をしめて」と、上わづった声を出す。

飛んでもない変態だ。

私は、自分の事を棚に上げて、マリ子を呪った。

「いゝ加減で変な遊戯はよそう。お互の為だから」

私は、意を決してこう云った。

やはり私は、私なりの空想を、勝手気儘に怪奇小説に走らせる方がむいてる。

大してありもしない精力をふりしぼって、此んな女のお相手は御免だと思った。

「私を、こんな女にしてしまった。もうあきてしまったんですね。いゝわ、そっちが、その気なら、こっちだって……」

狂女の様な恐ろしい顔で、マリ子は荒々しく部屋を出て行った。「変態め、死んでしまえ」

私は口の中で、噛んで捨てる様に呟いた。

(九)

数日の後。

田中マリ子の凄惨な死体が彼女のいる会社の寮で発見された。

最初に見つけたのが、あの厭な川崎君だったから、事は面倒になった。

その時の状況を詳しく説明する。

朝になっても彼女の部屋が開かないので不審に思った川崎君が、窓から覗いて見た。

布団の横から真白な脛が見えた。だがどうも皮膚の色が尋常でないので、枕の方を見ると、驚天した。

首に縮緬の帯が巻きつけてあった。

「殺人だ」

そう直感した川崎君は、直ぐ警察に届け出た。

そして、彼は私が怪しいと申し出たのである。

早速、私は現場に呼ばれた。マリ子の死体は、上の布団が剥がれただけでその儘にしてあった。

腰から足首にかけて太い縄で、ぐるぐると縛られていた。

両手は自由だったが一方はだらりと横



に、そして他方は胸の上に乗っていた。

顔は、一面に腫脹し、紫色に変色しており、口唇は軽く開き、歯と歯の間に、舌の端が赤く覗いていた。

首には、帯が二重に巻きつけてあった。一見して他殺の様に思え

た。

川崎君は、私とマリ子の間柄を薄々知っていたものか、意地悪く密告したのである。

だが警官は、次の点に疑問を持っていた。マリ子の部屋が完全な密室である点、マリ子が、月経時の痕跡もないのに、真新しい月経バンドをしていた点であった。

無論、下半身が縛られている事や、首が二重に巻かれている点是他殺と断定する有力な証拠と思えた。

首を絞めて自殺する場合は、必ずと云っても良い位一重結節である。

二重に巻いて締める内に意識を失ってしまうのが普通だったからである。

だが、僅かではあるが、二重結節でもって自殺した例もある事はある。

弱り切った係官は私の意見を求めた。川崎君の射す様な目を感じた。

私は、マリ子に復讐されようとしていた。密室である事を強調するのは、まずい。

私が、巧みに密室殺人をやったのではないかと疑がわしめる心配がある。

現に川崎君は、そう信じているのだ。

しかし、此処で、思わぬ幸運を掴んだ。

月経バンドである。

そのマゾヒスチックな感覚が忘れられず、私が取除いた後に、自ら新らしいのをはめていくれたのだ。

「田中さんは自殺だと思います。先刻、貴方がたは、何故、田中さんが、メンスでもないのにバンドをしているか不審がられたが、それが何よりの証拠です。覚悟の死だからです。死後恥を晒すまいと云う考えからでしょう。下半身の縄もその為でしょう。淫らがましく開かれるのを恐れたからです。死の原因ですか。それは、先の岡野少年の自殺です。あの時のショックのせいです」

警官達は大きく頷いてくれた。ぐるぐると自らを縛り、月経バンドをつけ、そして首を絞めて、マゾヒスチックな歓気の内に死んでいったとは、云えたものではない。

目をむいて、くやしがっている川崎君の、深刻そうな、そのくせひどく無意味にも思える表情を、せうら笑って、私は引き上げて行った。

だが、そのしてやったと云う勝利感のすぐ裏に、岡野少年と田中マリ子を、結局自由に出来なかった、腑甲斐なさが苦々しく、くっついていった。

つまりは、調教師としての愛が、私には欠けていたのかも知れない。

(完)

◎奇譚クラブの旧号(バックナンバー) 在庫

お買い洩れの方々の為に、左

(一部送共九十円) 昭和二十八

記の通り在庫しておりますから

年新年号より昭和二十九年九月

直接発行所へ御申込み下されば

号迄(一部送共百円) 昭和二十

急送いたします。最近号の総目

九年十月特大号より昭和三十年

次は本号に掲載してあります。

三月特大号迄(一部送共百四十

昭和二十七年十月号、十一月号

円)

懸賞入選作 佳作第一席



耽^{たん}美^びの果^はて

中 谷 冷 一

〔一〕

朝からもう、篠つく様な大雨でした。

私は午前中の仕事を終えてほっと一息、煙草に火をつけて、真黒な雨雲が後から後から流れていく北空を眺めていましたが、ふとその時、私の背に冷く走った戦慄に、「ぞっ」と肩をふるわせました。

「こんな日こそ、きっと何か事件があるに違いない。」

此の仕事に入ってからやっと一年、初めてえた私の第六感でした。

案の定、程なく「事件発生——若い女の変死体」の報を得た私は、それから三十分後にはY教授と共にA町の住宅街に向う車上の人となっていました。

次々に起ってくる幻想、女体と緊縛、自殺か、他殺か、年令は、之等の事がとりとめもなく走馬燈の様に私の頭を駆けめぐり、又かすめ通りました。

間もなく現場到着。此の割に大きい邸宅の立ち並んだA町住宅街では、比較的小さい洋風の建物でした。

真昼間に起った事件とはいふながら、この

大雨にも拘らず門前でひしめき合っている野次馬達を押し分け、

「当家主は竹内滋^{しき}、独身者で一人住い、某会社課長、被害者の身元は現在の所不明、二十才前後と推定、発見者は右隣某氏。」

右記の説明を聞きながら、一步現場に踏みこんだ私は、何時ものことゝは言い条、「はっ」と唾をのみこみました。

重苦しい、首ねっこでも圧する様な沈黙の中に、誰一人物一つ言うでなく、ため息一つくでなく、皆、つかれた様に立っている中に、若いやゝ大柄の洋装の女が、しかも——



眼、口、をゆがめ、迫って来た死の恐怖を如実に物語ってはいるが——相当の美人が、見るも無残に麻縄で固く後手に縛られ、階段の手摺に吊り下げられていたのです。

美しくパーマされた洋髪、濃い眉、長くのびた睫毛、苦悶にゆがんではいないが切長の澄んだ瞳、毒々しいまでに真赤にぬられた唇、

きれいに通った鼻すじ、その上、色が白いときている。申分のない顔立ちである。

着衣は当地流行のナイロンブラウス、襟の前を合わせる為につけられた銀色のブローチが、首縄にかゝって「ぐっ」と上に引きあげられている。すくて見えるブラジャーに包まれて程よく盛上った乳房が、甘く私の心をゆ

すぶる。

だが一つ、俯におちない事がある。家の中で縛られているというのに、襪の多い紺のスカートから、すんなりと延びた脚の先には、真新しい白色のハイヒールをつけている。しかも土の附着のない全くの新品である。

しかし、次いで変死体を手摺からはずしにかかった私達は、更に奇妙な事に出くわしたのです。

どんなに体の小さい人でも、死体となると非常に重くなるものです。三人がかりで床の上にだき降しかけた私達の前に、死体の頭髪が束になって落ちたのでした。——

髪——そこに露出された「G・Iガリ」の頭を見て教授の顔色が「さっ」と変りました。すぐに調べられる胸部。胸のふくらみは巧につめられた綿の所業であって、うら若い女性特有の象徴は全く無い。

この考えは陰部を検せられるに及んで決定的のものとなりました。

——女装狂変態性慾者の死——

更に別組の調査に依って、この変死体は当家の主「竹内滋」その人である事がわかりました。

私は胸の高鳴りを覚え、全身に、「しびれ感」を味うと共に、何か物悲しい思いにさそわれました。

いま私の前に横たわる男、体中ナイロンづくめの洋装をしたうえで、身動き一つ出来ない程固く縛られて床の上に転がされている。後手から続く首縄、二の腕に喰い込む二巻き、腰部にまかれた二巻き、ナイロン・ストッキングに包まれた足首を揃えて縛られ、膝から後へ折り曲げられて、その縄の先は背中で腰部の縄に連結してある。

下肢、太腿、に喰い入る縄目、彼を吊り下げていた後手、腰部、及び足首、から出た三条の束ねられた縄の先は、なおも執念深く手摺に巻きついている。

やがて、綿密な現場調査も終了し、死体は大学法医学教室所属の解剖室へと移されました。身長一米六五、体重五八瓩、健康そうな肢体を包んだナイロン・ブラジャー、死の直前に排出されたであろうと思われる粘液でよごれたナイロンのズロース、ナイロンストッキングスの中から現われた刺り跡も新しい、

つやつやした脚、きれいに手入された爪。この異様なまでに異常な、といって一方、言いもやれぬ甘美な情景は、今もなお私の頭に深くこびりついて離れません。

かくして最後の——女装狂変態性慾者の過失死。直接の原因は首縄の緊締による窒息死。——と判定されました。

この判定には解剖所見の他、現場の状態、即ち階段、手摺に残された男の靴跡、傷跡、指斑、男を緊縛した麻縄の結び方等も関係し更に彼の洋服ダンスから見出された、おびただしい数のブラウス、ストッキングス、それにシユミーズ、ズロース等の女性の下着類、本箱から探し出されたアブノーマルな本、写真（この中には洋装して縛り上げられた彼自身を撮した写真が何枚もありました。）手記、日記等によって明かにされたものです。

〔二〕

彼「竹内滋」は、昭和七年三月、五人兄弟の末っ子として大阪に生まれました。五人兄弟

と言っても四人の姉を持つ彼は、唯一人の男の子でした。それだけに彼は、両親からも異常なまでの愛撫をうけ、何一つとして彼のする事に叱責されることもなく、すべて彼の言うがままに育てられました。

彼の父親は祖父時代からの実業界の仕事をはきついで順調な流れに乗り、加うるに相当な財産もあって、大阪の本宅は勿論のこと、東京にも大きな邸宅を持つ程で、彼はその庇護下にあつて何一つ不自由のない生活を送りました。

かてゝ加えて、父を除いては（この唯一の男性たる父親も、仕事が忙しくて、あまり家に居る事はなかったが）美しい母や四人の姉達、それに女中と、家の中これ女性一色といった家庭にあって、母からは彼が近所の悪たれ小僧共と遊ぶことを固く禁じられていましたし、それだけでなく何かにつけて気が弱く、友人を自分から持つこと等とても出来ない彼にとって、時々遊びに来る極く少数の学友、親戚の男の子等を除いては、幼年期から少年期にかけての遊び相手は、彼の姉達か、又は姉の



友達がそのすべてでした。

金銭的に不自由のない生活、親の溺愛、女のみ遊び友達、と三拍子揃った彼の環境は極めて当然に彼を、その態度、言葉使い等、すべてにわたって「女らしく」させ、更に生れつきの小心に輪をかけて、女性的に細いこととにまで気を使わずにはいられない神経質な性格に仕立てゝいったのです。

しかもその傾向は、彼が大きくなってから彼自身、先天的に持っていたのではないかと考えさせた所謂、「マゾヒスチック」な雰囲気に対する憧れによって、更に拍車をかけられました。

彼の学校より帰ってからの遊びも、初めのうちこそ普通の子供と変りない「鬼ごっこ」「かくれんぼ」等でしたが、やはり此の頃から既に「まゝごと」等の女性的な遊びに人一倍の興味を持ち、又「学校ごっこ」をして、自分が出来ない生徒になり、先生になった姉達から立たされたりすることを好んでいた事は、彼の心の中にひそんでいた「マゾヒスチック」な性格の、早や目覚め始めていた証拠だったと思います。

しかし、これ等の遊びも、次第／＼に「馬車ごっこ」「泥棒ごっこ」等の遊びに変わって

いきました。

「馬車ごっこ」とは、部屋のあちこちに蒲団を置いてそれを駅とし、馬になった者が、お客様になった者を背中に乗せて這って運ぶのです。彼はこの遊びをする度に、何時も皆の一番いやがる馬の役目を自分から進んでやりました。美しい姉やその女友達を背中に乗せて、流れる汗をぬぐえもせず、唯のろのろと進む憐れな馬になり切って、満足だったのでしよう。やがて、馬の背中には蒲団の鞍が置かれ、口には手綱や轡のかわりに姉の赤い帯が噛まれ遂には姉達の手持たれた「はたき」の鞭で臀をたゞかれるまでになりました。

「泥棒ごっこ」では、彼は常に泥棒になる事を望みました。この遊びに於てもやはり、「馬車ごっこ」におけると同様、始めの中はただ、美しい姉達に「きゃあきゃあ」言っただけで、いかけられる事のみで充分彼を満足させていましたが、段々とその遊びに慣れてくるに従い、いま／＼での事に物足りなくなり、更に強烈な刺激を求めてその遊びは深められて行つたのです。

普通の「おまわりさんと泥棒に分れての追いかけあい」から次第に進み、この前の時には泥棒になった者は軽く後手に縛られること

にきめたとすると、その次の時には、更に首縄をかけ、足まで縛るといふ風に、彼の、美しい女の人に縛られたい、いじめられたい、という欲望は、ぐんぐんと大きくなっていったのです。

彼はいろ／＼のすじ書きを考えましたが、そのどれもが、最後は「彼が姉達に追いつめられ、組伏せられて、「ひしひし」と後手に麻縄をかけられる。やがて首縄高手小手に縛り上げられて庭の木につながれ、皆の前にひきすえられる。そして姉達の手によって「くすぐり責め」にあう。」といった、場面でした。

そして或る日、姉達から例の「くすぐり責め」を受けている最中に、何時の遊びに於ても最も残忍な二番目の姉の手が、いたずらそうに彼の露出された腹部をつねった時、彼はなにかしらいま／＼でない、しびれる様な興奮を覚えました。

その翌日から早速彼が行い始めたのは「お医者様ごっこ」なる遊びでした。この遊びは医者と看護婦になる者と、患者になる者とに分れてする遊びで、患者になったものが医者を訪れ、診察をうけるといったもので、その山になる部分は、何といっても診察の場面で

した。そして当然の事、彼はあまり、なり手のない患者の役にまわったのです。彼には過日、姉に腹部をつねられた時に覚えた快感を忘れることが出来ませんでした。彼は医者になった姉に、「どこが痛い」などと聞かれると、きまって「お腹」と答えました。そしてこの遊びに於て、将来、彼が「女装」という事を最も懂れる様になった一つの契機があとずれたのです。

何時もの様に腹痛をうったえる彼に、医者になった姉が真面目な顔をして、「それはお腹が冷えるからです。坊ちゃんがはいっているその猿又は裾が開いているから、そこから風が入っていきません。このズロースをおはきなさい。」と言って、彼女のメリヤスのズロースを彼がはかされたことに始まります。

彼はその時、腹部と大腿部とが「きゅっ」と気持よく締る恍惚感に、暫くは物もいえませんでした。彼には、彼が今迄、何を求めていたのか、わかった様な気がしました。

——ズロース——

それを誰にはばかることなく、自由に、は

く事の出来る姉達が、うらやましくてたまりませんでした。それからというものは、姉達にかくれては、そっと彼女のズロースを持出してそれをはき、その快感に酔いしれました。しかし、彼にとって実際は、美しい女の人に無理強いにズロースをはかされるという事に本当の喜びがあったのですが、そんなことまでを姉達に度々させる事は、彼には出来ませんでした。

そんな中にも、そろ／＼彼自身中学校に進む年頃となり、何時のうちに、今迄、實際的にその遊びをして自分の慾望を満していた彼も、その昇華の対象は、次第に内的な幻想、自分一人の遊びにと一転しました。

すっかり年頃になった姉達も、最早や、いままでの様に彼とそんな遊びにふける事に、見向きもしないようになりました。

(三)

彼が中学校に通う頃から、太平洋戦争も、とみにはげしくなり、平時とは異った緊張した気風は、彼からも甘美なブレイに対する心

の余裕を奪っていきました。

言い換れば、この頃から——やがて戦争も終って世の中が次第に落着きを取り戻し、彼の家も昔の様な生活を再び送る事が出来るようになる頃、即ち彼が大学に入学するまでの間は、彼の一生にとって唯一のノルマールな時期であったと言えるでしょう。

高等学校在学中の大学入試のための苦しい勉強から解放された彼にとって、加うるに彼の家の経済的裏付けが確立されるにともない彼の生来の——あの忘れる事の出来ないズロースへの憧れが、更に女装への憧れとなって——彼の心をゆすぶり始めました。

大学に通う年頃になったとはいえ、ただ勉強だけは、人に負けない様にするが、さて社交的な方面のこととなると、子供の頃からの小心の為に、気持だけは神経質に強がってはおるが、一向に友人も作る事の出来ない彼にとって、「女装」に気を打ちこむことは、一つの救いでもありました。

いまや、彼から「女装」する楽しみを奪う事は、それ即ち彼を滅ぼす事になる程、それ



が彼の生活の中に占める位置は、大きなものとなっていました。

彼は学校から帰ると、きまってる錠を取りつけた自分の部屋に閉じこもり、姉の部屋から秘かに持出した彼女の下着や洋服をまとい、鏡にその姿をうつして楽しみにふけるのでした。そして彼の女装は、一日、一日、綿密になり、大胆になっていきました。

始めの中こそ、下にはズロースだけをつけ洋服も姉の小さいワンピース位で結構楽しめました。それを繰返すうちには、次第にブラジャーをつけ、中に綿を入れて胸をふくらます事を覚え、更にシュミーズの「ひやり」とした感触を楽しむ様になっていきました。

洋服にしても、いままでの寸法の合わないただ女の洋服というだけのものには見向きもしなくなり、又姉の服を着るといふこと自体にも嫌気がさして来ました。

「何とかして自分の体に合った女の下着や洋服が欲しいものだ」と、そればかりに頭をなやました。男である彼には、それをどうしたら得る事が出来るか等、全くわかりませんでした。

しかし、或時、何気なく姉の持っていたスタイル・ブックに目を通していた彼は、その

中に、現在八頭身美人といわれて日本で有名なモデルのK嬢の身体表と称して、その人のあらゆる部分にわたって細くサイズを示した頁を見出しました。その人は均整のとれた体と皆から騒がれているだけあって、なかなかの良い体付をしていましたが、最も彼を喜ばせたことは、その人の身長が、彼の身長と略等しいことでした。彼は、身長が同一だから胴まわり、肩幅、位を除いて他の部分は、彼の体と大体同じ寸法だろうと思ったからです。

彼は前々から、あの「ひやり」とする絹のブラウス、それも長袖の裾に多くの「襷」と「たるみ」のあるものを着て見たくて仕方がなかったのです。それはズロースへの愛着と似通ったものでした。太腿をしめるズロースの、きついゴム紐によって出来る裾の襷、たるみ、に憧れた彼にとって、絹のブラウスの袖が、ひらひらと風になびいて作る手首の「たるみ」に同様の快感を感じたことは事実でした。

彼は今迄、何度も注文して作ってみようと思っていました。だが、ひよっとしたら、男の寸法はやっぱり女の寸法とは、どこか違うのではないか。洋服店でそれがばれやしない

だろうか。とその都度躊躇していたのでした。

でも今は、この寸法表通りに作ってもらえば何もおかしい事はない。

彼は早速、そのスタイルブックから必要な寸法を書きとると、肩幅と胴まわりを少し大きい目にして、彼が、かねてから目星をつけていた洋服店へと歩を運びました。

「田舎の妹に送ってやるのですが、寸法はここに書いてありますから。」このセリフはこれまで彼が、百万遍も繰返して言ってみたものでした。

それが出来上った日の彼は、全く有頂天でした。暗くなるのを待ちかねてそのブラウスを着て女装し、夜の街を歩きまわりました。風をふくんでブラウスの裾がふくれ上り、それがきちっと締った手首に伝わる感触は、すばらしいものでした。これまでも女装して夜の街を歩いた事は度々ありましたが、その夜ほど彼をふるわせ、しびれさせた日はありませんでした。

柔い絹に包まれた彼は、身体全体が女性のように「なよなよ」と頼りなくなった錯覚に陥り、もしこのまゝ永遠に女として、力強い男の腕にすがって、夜の巷を歩き続けられたら

どんなに幸福だろうと、幻想は、はてしなく拡っていきました。彼は何遍もブラウスの裾にキスをして見ました。それを軽く口にくんで見ました。

そして時々、思い出した様に、スカートの下から手を入れて、はいているズロースの裾ゴムや、その「たるみ」に触れて見ては、満足な笑みをもらすのでした。

彼の女装への試みは、一日、一日、休みなく進歩していきました。

かくして彼が大学を卒業する頃には、彼の部屋の錠のかゝった戸棚には、数多くの女性の下着類、靴下類、洋服類から、はては、種々のハイヒール、首飾り、耳飾り、腕輪、指輪、ハンドバッグ、口紅に至るまで、何一つ女性の持ち物として不足するものは無い程、ぎっしりつまるようになっていました。

〔四〕

彼は大学を卒業すると直ぐに、京都にある父親配下の某会社の中堅ポストにおさまりました。それから暫くして彼は、父親に、A町

住宅街に一軒の家を持たせてくれとたのみました。金に不自由がなく、又、会社の仕事も次第に慣れて来た彼は、早く自分一人の家を持つて、そこで誰に掣肘される事もなく、彼の唯一つの楽しみである女装に全身を打ちこみたかったからでした。

父親にとって唯一人の息子を、自分の膝元から離しておく事は、とても出来ない相談でしたが、彼の勤務先が京都である事と、彼自身が主張した所謂「修養の為」という事を理由に、それでも月に一度は必ず本宅に顔を出すという条件だけで、彼の希望を入れてくれた時には、さすがにその嬉しさを隠すことが出来ませんでした。

かくして彼の一層条件の整った女装生活が始ったわけです。

しかし何時の頃からか、彼の心も唯、女装をするということだけに、満足しない様になっていきました。昔のあの緊縛される事への願望が、次第に頭をもたげて来たのです。

彼は暇さえあると、麻縄や革紐を買い求めました。犬の鎖も、ビニールの紐も、ゴム紐

も、一寸でも緊縛に関係のあるものはすべて買いあさりしました。

中でも彼を喜ばした新しい発見は、夜毎に女装して、これらの物を買に出ることでした。彼は、その頃彼が新しく愛用し始めていたナイロン・ブラウスにナイロンのズロース等々といったナイロンづくめの洋装に、口紅を濃いめにひき、洋装の髪をつけて、店から店へと歩きました。もともと女性の様な顔立ちの彼のことでもあり、加うるに、その女性的な言葉によって、誰が見ても彼は、完全なる女性、しかも美人でした。

買い求められた緊縛用具は、その都度、彼の下げたショールダー・バッグの中に、おさまっていきました。幸福に打ちふるえて、腰つきもあざやかにハイヒールで活歩する彼の姿は、女性の中の女性でした。

而し彼にとって、どうにも満足の出来ない事が一つありました。それは適当な「パートナー」、詳しくは、サチスチックな女性が居ないという事でした。

「美しい女性の為に、無理に彼女の汚れた下



着をつけさせられ、女の服装をさされて後手に緊縛され、転がされて恥しめられる。」といった情景が、彼の見はてぬ夢でした。

彼は色々考えた末、彼の好みの顔をし、好みの服装をしている相手女性を、写真に求めました。写真雑誌、映画雑誌、あらゆるものから暇にまかせて探し出し、適当なものであると、額に入れてそれを保存しました。

彼の最も好んだものは、映画雑誌から探し出した「ヴァージニア・メイヨ」の写真で、ピカピカ光ったブラウスを着て、腕を前で組み、口紅を厚くぬっているスチールでした。

毎日、家に帰ると部屋に閉じこもり、半身大の鏡とそのスチールを壁にたてかけ、その前で、ナイロンづくめの洋装をして、自責自縛の演技にふけるのが、彼の日課となりました。

彼のナイロン製女性着に対する執着は、はげしいもので、特にナイロンのズロース等は必需品となっていました。彼はあのナイロンの、いつも濡れた様に、どんよりと濁る光輝から、女性の分泌物を想像し、ナイロンのズロースをはいている事は、とりもなおさず、汚れた加虐者のズロースを無理にはかされている感を強めるものでした。

彼は、ありとあらゆる自縛の方法を考え出しました。アブノーマルな内容を扱った雑誌に投稿されている自縛法にも、すべて目を通しました。麻縄による後手、高手小手、に満足出来なくなると、更に首縄で後手の手首をつりあげ、又足首を縛って「えび」の様に体を丸めたりしました。

始めの中は、なかなか一人では、思うように結べなかった縄も、次第に非常な巧妙さをもって結べる様になり、遂には、彼自身で縛り上げたにも拘らず、実際にパートナーがいて、彼女の意志のまゝに「ひしひし」と縛りあげられたかの如くにまで、緊縛出来る様になりました。勿論、そこまでなる間には、一たん結んだ結び目が、どうしても後ではどけなくなり、青くなったり一度や二度ではありませんでした。その事も結局は、彼の自縛に対する器用さと熟練さを倍加する以外の何物でもありませんでした。

そして又、この頃には、洋装して緊縛された彼自身を撮した写真の数も、おびただしいものになっていました。

やがて麻縄の縛りも頼りなくなると、次には鎖による自縛にふけりました。素肌にといつくナイロン・ブラウスが、その上から圧

緊縛女体のアルバム

『美しき縛しめ』 (第三集)

愈々撮影開始 三月号にてアイデアを募集しましたところ、熱心なマニアの方々から貴重な参考資料の提供や進言を受けました。こゝに厚く御礼申し上げます。愈々、新しい構想の上に着々と準備を進め、近日、第一回の撮影を開始することになりました。なにしろ、各種の趣向のものを一応手がけて数百枚のネガを作成しなければなりませんので、短時日に完成はむづかしいと思いますが、第一集、第二集に劣らぬ優秀作品を網羅しようと張りきっておりますから、何卒御期待下さい。

(企画係)

迫してくる鎖のために皮膚に喰いこみ、その上下に多くの髪を作るのを眺めるのは、この上もない楽しみでした。柔かなナイロンに素肌を包むことは、彼の女にされたいという願望の唯一つの実現でもありました。

彼は苦心して種々の形の、首枷、手枷、足枷を作りあげ、そしてそれをはめる時の、び

ちっという一つの音にも、大きな胸騒ぎを覚えるのでした。更に、それ等を太い鎖で連結し、がちやがちやと金属の響をたてながら、仮想の女性の鞭の下に、鏡の前をよちよち歩きまわって、一人で呻いてみたり、或は、不自由な体で鏡の前にきちんと正座し、写真に向って何回となく頭を床にすりつけては、許しを乞うのでした。

だが、この鎖による自責自縛のプレイにも遂には満足出来なくなり、更にはげしい刺戟を求め始めたということが、彼の運命を左右する事になるうとは、彼自身、神でない身の知るよしもありませんでした。

彼の興味は次第に吊り責めへと移っていったのです。或る時は庭の木枝で、或る時は茶の間の梁で、又或る時は階段の手摺で、とあらゆる可能な場所に彼自身を吊り下げてはその幻想を楽しみました。

そして、とうとう魔の日とも言ふべき最後の日が来たのです。その日は日曜日でしたので、彼は朝から一人プレイを楽しみました。

「彼は経済的な負債のため、或るバーのマダ

ムに身を売る。マダムは彼の女性的な美しさを見て、彼を女装させ、女給として使つて見ようと思う。しかし彼がそれを拒むため、彼

に対するマダムの折檻が始まる。何せ、彼は金で買われた身故、反抗する事は許されない。マダムや大勢の女給達によってたかつて真裸にむかれた彼は、まず体中の毛を剃られた後、汚れたナイロンのズロースから無理矢理にはかさせる。始めはあばれるが、マダムの手に持たれた鞭の一撃にあつてはどうする事も出来ない。多くの女給達に囲まれて恥しさのあまり、顔もあげられず下を向いている。彼女達は面白そうに、ブラジャー、ブラウスと彼に着せていく。ストッキングス、更にハイヒールもはかされる。

口紅を厚くぬられ、頭髮にはパーマをかけられた彼は、皆への見せしめの為に細引で後手に高手小手に縛り上げられ、更に、首縄でしめ上げられる。足も揃えて背部へ曲げ固定される。全くの無抵抗、そのまゝ床に転がされ、顔や体を、マダムや女給達に革靴で踏みにじられる。やがて後手の縄の先を階段の

手摺に連結された彼は、マダムの一蹴りによって階段の横に宙吊りにされる。そして又新しい責めが始まる。」と。

ところが此処に、彼は非常な誤りをしていたので。いままで何回も同じ事をやっていたるくせに、その日に限って首縄の後部の結び目がゆるんでいたのに気付かなかったことが彼の生死を決したのでした。(結び方が悪く力を入れてひっぱれば締る様になっていた)

彼はマダムの足蹴を幻想して、体を宙に浮かせました。とたんに締る首縄、直ちに事態を察した彼は、力一杯もがきましたが、呼吸は苦しくなるばかり。結んだ後手はそう簡単にはほどけない。一声二声、大声で呻くが言葉にはならない。顔はまたゝく間に苦悶にゆがむ。やがて手足はしびれ、意識は朦朧としてくる。もう呻き声も出ない。「しまった、だが、何という快い心持であろう。」

その直後、ただならぬ人の呻き声を聞いた隣家の人が、ドアを破って飛びこんで来た時には、彼はもう、此の世の人ではなかったのです。

(終り)



夜 光 島

〔完結篇〕

吾 妻 新

栗 原 伸・画

追いつめられる

「なにも君、権利だの義務だの云うことはないじゃないか。べつに職権で訊問してるわけじゃないんだから」

「職権でなければ何だね？ げんに君の態度は訊問じゃないか。また訊問でなければ答える必要もないはずだ」

「まあそう、興奮したまうなよ」

明石警部補はむりに微笑をうかべた。その歪んだ筋肉は怒りを抑えている。この土地でこんな口のきき方をするものはないのだ。

健次郎もじぶんが興奮していることに気づいた。でっぶり肥って手の甲にまで毛の生えている警部補の姿は、中学卒業のころ引張られたK署の司法主任を思い出させた。大杉の訊したクロボトキンの「青年に訴う」というパンフレットの伏字を埋めたのが祟って原書

の出所を追求されたときだ。健次郎はどうしても白状できなかったというのはロンドンのフリーダム社から他の書物と一緒に禁を冒して取り寄せたからだ。苦しまぎれに神楽坂で買ったと云ったら、刑事付き添いで神楽坂を歩かされた。結局無駄骨を折らして戻ってくると、「なめるかこの野郎！」と若い刑事が襲いかかってきた。そのとき熊のような司法主任が大声で笑いだした……。新憲法の世の中で明石警部補は襲いかかってきはしない。だがあの暗黒時代の苛酷な追求に、少年の健次郎はもっと冷静に耐えることができた。なぜなら、そうだ、なぜなら、それは高潔な思想のためだったからだ。眼に見えぬ共感者が至るところにいた。いざといえば殉教者になるという信念が支えてくれた。いまは反対だ。いい年をして冷静を装いながら、心では脂汗を流している。なぜだろうか？ 同志がないからだ。孤独の秘密を支えてくれる美しい名目は一つもない。

汚辱、嘲笑、不自然、あらゆる烙印がしみついている。社会全体が彼の敵なのだ。

彼は気を鎮めるために、テーブルの冷めかけた茶碗をとった。が指先が震えるのに気付くと、すぐ置いて、タバコを取り出した。

明石警部補はそしらぬ振りでその一挙一動を観察していた。

「君も教育のある人なんだから、僕らの立場もわかって貰えると思うんだがね」と、しずかに切り出した。「僕はなにも君をどうこう疑ってるんじゃないんだ。しかしだよ、世間が評判を立てているものを、警察としてほっておくわけにはいかない。事実無根にせよ、一応調査するのは、こりやあ義務だ」

調査という言葉に相手は力を入れた。

「それもこの町の中ならすぐ分ることだが、あんな離れ小島にわざわざ住んでいるんだからね。好奇心と云っちゃわるいが、まあ、噂の立つのも仕方がない。いったい、奥さんを椅子に縛りつけたというのは本当ですか？」

健次郎はかすかに肯いた。

「その上、猿轡もね」

部屋の中はしんとした。彼はうしろの巡査が手を休めて耳を傾けているのを痛いほど感じた。

「君に云わせると、それは折檻ということになるんだが、一体、どういう理由です？」

「それは説明したくない、私事だから」

「成程ね。……どうも、すこし乱暴すぎるようだが、それはともかくとして、合意の結婚でしような」

「もちろんです」

「いや、実はそこなんだよ君、怒っちゃこまるが、その点でいろんな噂が立ってるんだ。たとえば、いちばんひどいのは、誘拐したんだろうなんてね。あんな不自由な島に閉じこもったのもそのためだろうというものもある。なぜなら、奥さんは一度も姿を見せたことがないし、会いたがった新聞記者は君になぐられた……」

「それは……」

「うん、それは？」

警部補は椅子に反って彼をみつめた。

「だれだって無遠慮に家の中を覗きこまれるのは厭だろうと思う。ましてあんな場合はね。だが僕は会わせないと云ったんじゃない。待てと云ったのに約束を破ったから怒った。撲ったのはよくないかもしれないが、窓からのぞきこむのはもっとよくない行為だ」

「しかも、時もあるうに折檻の真っ最中じゃあね」と意味有りげに笑いながら、すぐつぶけた。

「じゃあこうしたらどうです、その誤解を解くために改めて奥さんに会わせたら？ それがいちばんいい方法だ。ね、そうすれば妙な噂も立たないし、僕も気にする必要がない。まさに一挙兩得じゃないですか。君だって世間と多少変わった生活をしている以上、その位の妥協はしてもいいと思うが」

「しないと云ったらどうします？」

「困るねえ、そう頑固に出られちゃ」と、警部補ははじめて声をあらためた。

「どうしても君が碎けてくれないのなら仕方がない。噂を信ずるわけじゃないが、白紙の立場で調査するしかない」

「調査？ ほほう、警察が家庭の私事を調査すると云うのだね」

「私事かどうかは調べた上でわかることだ」
その語調はまさに威嚇的だった。

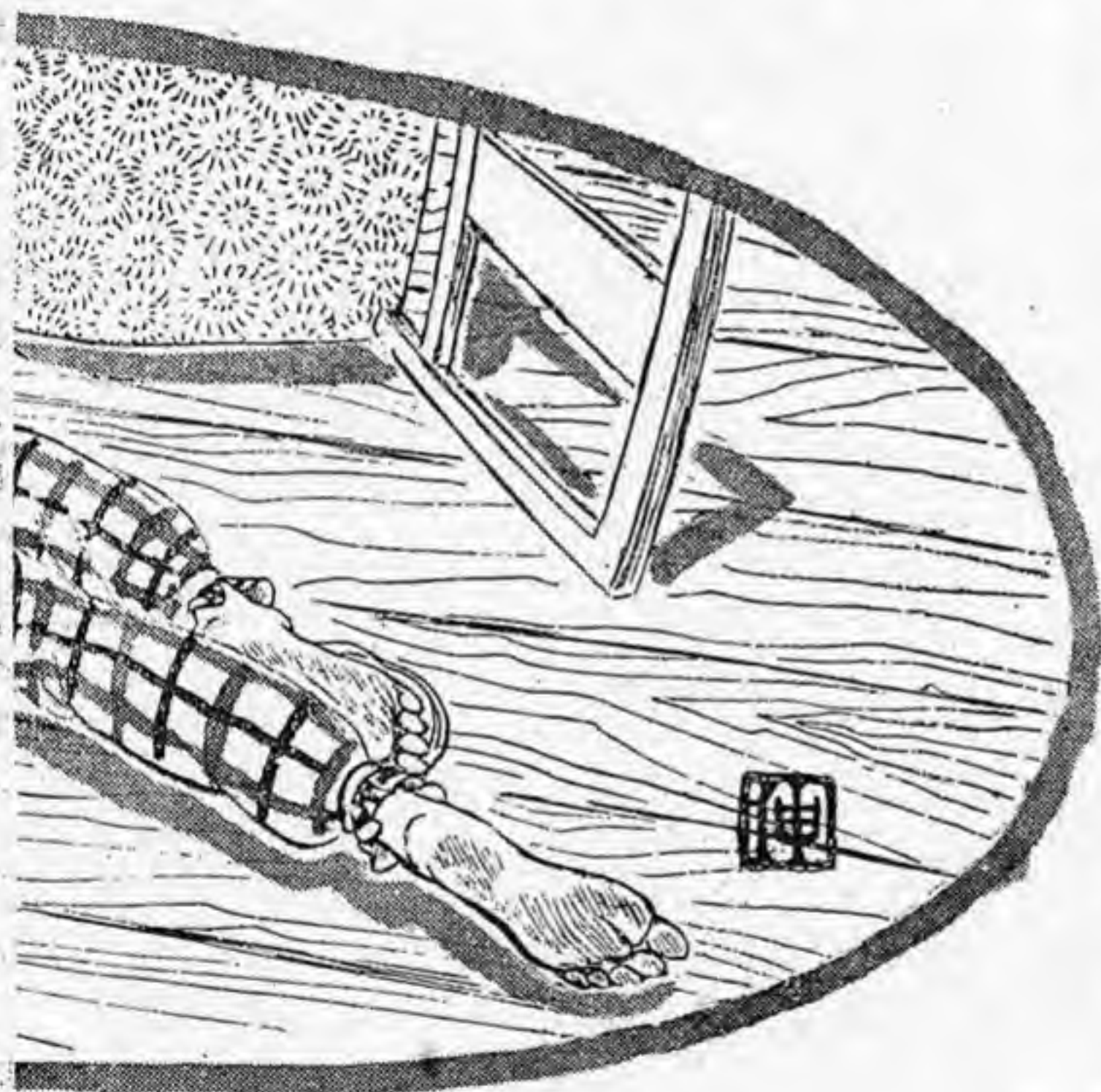
「君の奥さんと称する人がほんとうに結婚を承諾し、あれが君の云うように単なる折檻だったら、警察は手を引きします。夫婦の問題まで立ち入れないからね。だがそれがわかるまでは調査したからって人権侵害にはならない筈だ」

「というところ？」

「一度奥さんにお会いしたい。来て頂けば結構だが、こちらからお伺いしてもいい」

健次郎は怒りの塊りを呑みこんだ。
「ちよっとお話したいというので、かるい気持ちで署に寄ったのが、いけなかった。ずるずると深味にはまりこんだ心地がする。しかもいけないことに、理窟は警察の側にある。」

しかし、たとえ署に寄らなくても結果はおなじことだろう。彼の知らぬ間に、おそろしい疑惑がひろがり、輿論のようなものが出来上っていた。彼はれっきとした被疑者なのだ。いつも寄る食料品店、米の配給所、肉屋、郵便局の局員までが、不安と好奇心にみちた表情で、額越しに彼を見た。どこへ行っても気付かずにはいられない、不吉な、陰鬱な顔があった。



（巡査は来るだろう。そして遅かれ早かれ登枝は曝し物になるだろう）

海岸は冷たい風が吹いていた。健次郎は買物包みをボートに入れ逃れるようにボートに乗った。できればこのまま永久に去ってしまいたかった。だがポケットに突っこんだAからのハガキを思い出すと、また読み返さないわけにいかなくなった。——十三日にゆくことにきめた。相川館という旅館があるそうだから、そこで待つことにする。万々拝眉の上にて……。金の話に触れていないのはたぶん

ダメなのだろう。いずれにしてもまた出て来なければならぬ。

登枝の告白

登枝は風呂を焚いて待っていた。

「疲れたでしよ。背中、流しましょうか」

「いや、いらぬい」

ランプの灯影に隠れるようにして、健次郎は熱い湯に身を沈めた。口をきくのが物憂かった。湯槽の縁に二つ折にした手拭をのせ、首を当てて眼をつむると山奥の温泉宿にいるような心地だった。しずかな夜気を破るのは登枝の歩きまわる足音と食器の音だけだ。

食卓に向うと、登枝の探るような眼

にぶつかって、彼はうろたえた。

「なにかあったのね」

「なにかって？」

「白ばっくれてもだめよ。様子がへんだわ」

「疲れてるんだよ。帰りは向い風だったからね」

「口がきけないほど疲れたの？」

健次郎は苦笑して箸をとりあげた。

だまって見ていた登枝は、席を立って近づいてきた。いつものように抱きあうと、キスするかわりに彼女は男の頬を両手にはさんで、じっと見つめた。

「話してちょうだい」

「……………」

「お互いに秘密は持たない約束よ。こないだの事件のあと、はじめて町へ行ったあなたはなにか経験した筈だわ」

「まあ、飯をすませてからにしよう」

「いや！ いま話して！」

真剣な眼だった。避けようがなかった。

「町じや探偵小説がはやってるんだよ。いつかふざけて話した筋書どおりの奴がね。君がヒロインで、僕が敵役さ」



「それを云い出したのは、例の新聞記者でしょう」

「そんなところだ。なにしろ小さな土地の輿論製造業者とケンカしてしまっただからな。今日はまた警察署で、警部補閣下とお話をしてきたよ。いや、僕も一躍して名士になったらいい」

笑いかけたが、相手がだまっているので声が途切れた。登枝は首に巻いた手に力を入れた。その眼は暗く、夜の海のように深くなった。

「それで？」

「それだけさ」

「警部補とはなにを話したの？」

「くだらないことだよ。近いうちに調査を寄越すそうさ。どうしてもヒロインの顔を見たいんだってさ。見たって減るもんじやないから、拝ませて、好奇心を満足させてやるんだな」

「顔だけ見に警察からわざわざ来るなんてことない筈よ」

「それはだね、つまり、探偵小説の筋書を確かめたいんだよ。僕等が合意の上で結婚したかどうかということ。奴

等は僕が誘拐してこの島に閉じ込めてるんじゃないかと空想してるんだ。愉快的空想じゃないか」

「ちっとも愉快じゃないわ」

「ご尤も、だから君はその空想をぶちこわしてくれたらいい。……それからもう一つ、なぜ君が縛られていたかという疑問だ。これも答は簡単だ。僕が封建思想の持主で、腹が立つと折檻されるんだと云えばいい。正常な夫婦であることさえ証明されれば、妻が訴えなにかぎり、この種のことに第三者が干渉する権利はないんだからこれで万事円満に落着する」

「いやよ」

低い声だがハッキリ云った。

「そんなバカなこと、云えるもんですか」

「いや、是非ともそう云ってくれなくちゃいけない。こないだの新聞記者にも、今日の警部補にも、僕はそう断言しているんだ」

登枝は息をつめて彼の顔をみた。

「じゃ、あなたはまるで専制的な、獣みたいな男になってしまいうじやないの」

「そう思わせるのが目的なんだ」

「わかった。それで私を救おうというのね」

「……………」

「いけないわ。どんな誤解よりも許せないわ。あなたが町へ出るたびに非難されたり軽蔑されたりするなんて、思っただけでも私、がまんができない。それに、そうなればあなたの今まで世間に発表した意見はどうなるの？ みんな嘘になるじゃありませんか。いま資料を整理している研究だって、まるっきり矛盾したものに见られて

しまう。あなたの著書はみんな人を欺いたことになるのよ」

「Aの返事だと、従来の本の版權は売れないらしい。ちょうどいいから絶版にするんだ。いまの研究だって、もう本にしようとは思わない」

「いけない、いけない！」

登枝は絶叫して男の胸にしがみついた。そして子供のように哭きだした。

「わからないのかい、登枝」と、あやすように健次郎は云った。

「それしか道がないんだ。世間に誤解させるかわりに、僕たちは幸福になるのだ」

「あなたを羞かしめて、なにが幸福になるのよ？ しかもそれは私のためにギセイになることじゃないの。絶対にいやよ。そんなことしたら、私は死んじゃうから」

「じゃあ、どうするというのだ？」

「私はマゾヒストだと告白するわ」

「裏返しのギセイか。僕はことわる」

「いいえ、これはもっと現実的な問題よ。いいこと、私はこの島から一步も離れないつもりよ。よその土地でなんと噂したって眼をつぶってればそれでいいの。あなたはちがうわ。町とは往き来しなればならないし、人とも絶えず接する機会がある。それを耐えることができたとしても、思想や仕事の誤解はどうにもなりやしないわ。いくらあなたが叫んだって、世間はあなたを偽善者だと思わ。私たちの世界をほんとに理解し、偏見を持たない人なんて、幾人いると思うの？ 私は信じない。理解させられるということさえ信じられない。そんなことは夢よ。だから、あなたの本をよんで共鳴した

人たちがもしこの生活を知ったら、きっと裏切られたと感じて憤激するわよ。そして正しい思想そのものにまで疑いを持ち感動を棄ててしまうわ。あなたはじぶんの生涯を亡ぼすだけでなくそういう人たちをも傷つけて亡ぼしてしまうのよ。これは重大な問題じゃないかしら？ ……お願いだから私の云うことをきいて！ 私は病人、そうされることの好きな人間。だから私はあなたにたのんで、あんなことをしてもらったの、ね。もしも警察から来たら私がしゃべるから、あなたは決して口出ししないで……」

来るものがきた。夜光島の自由と平和の破れるときがきた。地上のどんな片隅にも自由はなかった。

貝殻追放の古代が懐しい。いまでは異端者は追われるのではなく、すっ裸にされて、満座の嘲笑のなかに生きつづけねばならない。近代社会は生きるために必要な人と人との関係を八提供Vするだけでなく、多数者のなかに根をおろした判断や信仰を八強要Vする。それは当然のものだから絶対至上であり、恩恵だから拒むことを許されないのだ。健次郎はいままで、じぶんの変わった性癖をやましいとは思わなかった。罪だとは信じなかった。だがそう云い切れるのは自分に対してだけである。ひとたび眼を外界にむけると絶望が襲った。異国の体験を異国の言葉で告げようとする旅人のようなものだった。たったひとりのかぼそい声が、どうして輿論の交響楽のなかで響こう！ 汚辱にみちた猿轡、なんたる象徴！ 呻くだけだ。言葉にならず、聞えもしない。

中一日おいて、三人の男が土間に入ってきた。巡査部長と尾崎と館岡だった。尾崎はオーバーの襟を立てて不安そうに巡査部長の背中にへばりついてしたが、館岡は相変らず挑むような眼付でじっと

こちらを睨んでいた。

ちょうど朝飯がすんで二人が書斎に入ろうとしたところだった。健次郎と登枝は板の間に、彼等は土間に突っ立ったまま、化石のように向い合った。

沈黙を破ったのは三十五六の巡査部長だった。

「突然お伺いして申訳ありませんが、こないだうちの主任とお話になった件について……」

一生懸命に固くなった空気をほぐそうとして、彼はしゃべった。

「いやそれに、戸口調査も兼ねているわけですよ。何しろこんなところじゃ、なにか序での用がないと上れんものですからなあ、ハハハ。……ときに、奥さんでしような」

登枝はかすかにうなずいた。

「大正九年のお生れでしたね。ここへいらっしゃる前は山形県……」

手帳を出して、役場で写してきたメモを指で追いながら、

「婚姻届は去年の十一月に出ておりますが、もちろん……」

「ええ、役場に届けましたとおりです。うちに持っていてもらいましたけど」

「なるほど」

部長はなにか書きこんだ。その間、二人の新聞記者は穴のあくほど登枝をみつめていた。特に健次郎の感じたのは館岡の眼だった。それは彼女の全身を甜めるように、顔から、胸、腹、爪先までさがって、ふたたび顔まで戻ると釘付けになったまま動こうとはしなかった。

「それから」と巡査部長は視線を落したまま口吃った。

「これはどうも、まことにぶしつけな質問でお気を悪くされると思

うんですが、実は主任に確かめるように命令されてまいったんで、それにはまたいろいろの事情があるんですが……」

「わかっております」と登枝がさえぎった。

「この前そこにいる新聞社の方がびっくりしたということなんでしよう。とんでもないところを覗かれたものね。でも、見られたら百年目ということがあるわ。隠したって怪しまれるばかりだから、私思いきって云ってしまいます。それこそおどろかないでよ。私があるとき縛られていたのはね……」

「やめろ！」

と健次郎が叫んだ。一齊にふりむいた視線に、彼はまた吼えた。

「バカヤロウ！ それが戸口調査か？ きさまらは……」

「あなた」と登枝が腕をつかんだ。

「私の話には口を出さないで。このひとたちは私に訊いてるんですから。こうなればもう隠したって駄目、しかたないのよ。ね、だから、話がすむまであっちへ行ってて」

落ちついた声で、わざと命令口調で云うその顔には必死の色がうかんでいた。（約束よ）（約束したのよ）と眼で訴えていた。

健次郎の咽喉はつまり、膝はがくがく震えた。これ以上居ればなにか自分で抑え切れない事件が起りそうだった。彼はドアにぶつかり、書齋にとびこんだ。なにか言葉が追って来た。寝室に駆けこむと、思いきり強くドアをしめた。両手で耳をふさいでベッドに身を投げだした。彼は憤怒と屈辱で息が詰まりそうになった。それは今まで経験したことのないほど激しいものだった。いま愛する妻は裸になって心の秘密を告白している。それを在るがままの人間の姿として受け取る男はひとりもないのだ。おそらく三人の男は驚き、次

の瞬間には舌なめずりして、あの肢体の隅々まで猫奇の眼をくぐらせながら、刺戟的なシーンを想像しているだろう。そしていろんな質問を浴びせて羞かしめることによるこびを感じているだろう。それを許したのは誰だ？ この俺ではないか。

彼はいくどか飛び起きようとした。が、できなかった。意気地なく枕を抱きしめ、涙をながした。世間と斗うなどと大きな口をききながら、いざとなれば牙を折られた獣みたいなものだった。どうだったらいいか分らないうちに、常識は一步步彼を屈伏させていったのだ。なぜ俺は妻にあんな約束をしてしまったのだろう？

しずかにドアがあいて、登枝が入ってきた。

「やっと帰ったわ」

耳元でささやく声したが、健次郎は返事しなかった。

ふたつの夜

相川館は町でもいちばん大きな旅館で、夏場は観光バスが門のすぐ前に着くからおそろしく混雑するが、冬の間はあまり泊り客がない。だから健次郎がAの名前をきくと、「ひるごろ着いたお客さんですわ」と言って、すぐ案内してくれた。

Aは風呂に入っていた。見晴しのいい二階の八畳だった。床の間には旅行カバンが置かれ、時間表や新聞が散らばり、机の上には呑みさしの茶碗があった。

健次郎は縁側に出て、ガラス戸越しに北国の町の屋根を眺めた。杉皮葺きに石を乗せた屋根の、押しつぶされた、汚れた家並のはてに、燦し銀のような冷たい日本海が横たわり、どんよりした空が垂れている。亡くなった妻の故郷で、これからの一生を託そうと思っ

たのもこの自然だった。だがいまは意味がちがっていた。彼が懐かしいのはここから見える海岸線の影にかくれた豆粒ほどの島だけだ。彼を裏切り苦しめたこの土地にはなんの愛着も持てないのだ。

旅館の少し手前で館岡記者に会ったことを思いだした。殉教者気取りのその青年は彼を見ると、奇妙な薄笑いをうかべて立ちどまった。じぶんの思惑ちがいをテレたようにもみえるし、マゾヒストの女を妻にした感想を伺いたいと言わんばかりの怪蔑とも取れる笑いだ。だが健次郎は知らんふりをして通りすぎた——もう一度撲りつきたい衝動を抑えながら。

「やあ、お待たせした」

太い声を響かせて丹前姿のAが入ってきた。

「一週間まえに着くように手紙を出したんだが、なんとも不自由な話だね。島のそのまた出先の島だからな。一々ボートで往復するのかい？」

「そうだ」と、部屋に戻りながら、健次郎は答えた。「ヘリコプターを持つほど金持じゃないからな」

「金持でもヘリコプターを買っちゃいけないよ、君という野蛮人は」

「といって、泳いで渡るほど野蛮人にもなりきれないんだ、配給米は食うしね」

二人は顔を見合せて笑いだした。久方ぶりで聞く親友の笑い声に健次郎はよみがえった心地がした。まるで十年も離れていたように懐しかった。

「どうだい、まあ一杯やりながら、ゆっくり話そうじゃないか。積る話も数々ありぬだからね」

と、Aも火鉢を引きよせながら、泌々した声で言った。

酒と料理が運ばれた。……久方ぶりの日本酒と寒鰯の刺身は旨かった。白い障子に明るい電燈の灯がながれ、青畳にあぐらをかいて盃を傾けていると、たちまち酔いが廻ってきた。

「たまにはこういう気分もいいもんだな。君と銀座で飲んだ頃を思い出すね」

「とうとう本音を吐いたな。どうだ、文明に降参したか？」

「偶だからいいんだよ。毎日だったら又逃げ出さなきゃならない」「強情な奴だ」

Aはからから笑った。

版權を売る話は、予想したように失敗だった。デフレの出版界では、版權譲渡などということはほとんど行われない。そんな長期投資ははやらないのだ。まして速見健次郎の小説や女性論などはジャーナリズムの傍流だから、到底見込みがないというのである。

「それよりも、古い奴を文庫にする話ならあるんだ。但し小説じゃなくて、女性論だよ」

「考えさしてもらおう」

さっきから健次郎は、友人が一度も登校のことに解れないのに気付いていた。東京にいたときから妻をもらえとしつこくすすめていた男が、孤島の生活に降って湧いたような女に興味をもたないのはどうしたことか。

彼は立てつづけに盃を乾した。それから口を切った。

「僕の家へ来るかい？」

「そりやあ、はるばる東京から来たんだから、そのつもりではいたんだがね」

「何だ、都合がわるいのか」



※しようと思つていた。女房もそのつもりでいるんだ」

「ありがとう。………ときに君は、新聞をよんでるか？」

「残念ながら、郵便物の来ないところには新聞も来ないんだ。ここへ来たときに見る位のものだ。ラジオはあるがね」

「いや、僕の言つてゐるのは、この土地の新聞のことだ」

「絶対に見ない」

「そうだろうな。だからあんなことを書くんだ」

健次郎はどきんとした。が、つとめて冷静を装った。

「なにか出ているのかい？」

「君たちのことだよ」と相手も落ちついて答えた。「奇怪な孤島の生活という見出しで、君が奥さんを虐待していることが書いてある。しかもそれは奥さんがマゾヒストのためで、君は世にも恵まれた看護卒なんだそうだ」

「その新聞を見せてくれたまえ」

「いや、見ないほうがいい」

健次郎は床の間に眼をやると、立ち上ろうとした。Aはその手を

「こっちで訊きたいんだよ」笑いながらAは顔をあげた。
「カンヅメとウイスキーしかないが、君が来ればできるだけ歓待※

つかんだ。

「よせ」

「僕は自分のことについて知る権利がある」

「まあ速見、座って俺の言うことをきくがいい」とAはむりに元の席へ坐らせた。

「結論からさきに言うが、僕は今日、偶然ここでその新聞記事をもても大しておどろかなかったよ。ずっと前、君が手紙をくれたときそうじやないかという感じがしたんだ」

意外な言葉に健次郎は口がきけなかった。

「なぜだか分るかい？」と友人はつぶけた。

「僕はある雑誌である小説をよんだんだ。それがどんな変名を使っているかというと、文章をよめば君だということがわかる。文章は君の顔だよ。ね、そこへ君の手紙だ。結婚はした、しかもこの僕が不意に訪れたら岸から追い帰すかもしれないと書いてある。なんのために君が都落ちして、あんなところで暮す気になったかの謎がいっぺんに解けた気がしたんだ。しかし僕は言っとくが、それで君を軽蔑しはしないよ。絶対にそんなことは思ってくれるなよ。……君は依然として昔のままの君だ、人間に変わりはないんだ」

二人はだまって、しばらく向い合ったままだった。

Aは徳利を持って促しながら、またつぶけた。

「ただ……そう言えるのは僕たちだけだ。あるいは少数の人間だけだ。大部分の人間はそうじやない。君は世間の眼から逃れようとして離れ島の生活を選んだが、じつはいちばん注目を惹くことをやっただ。そして世間の好奇心は、君の思想や自然生活じゃなくて、君たち夫婦の性生活に集中するんだ。その位のことに分らなければ

君はよっぽどどうかしている。新聞がヨタ記事を書きたがるのは、君、あたりまえなんだよ。それに憤慨したってしかたないんだ」

「じゃ、どうすればいいんだ？」と健次郎はつぶやいた。

「島を棄てるんだ。いちばん注目を惹きやすい舞台を去るんだよ。そして、東京に戻るんだ。都会のジャングルこそ、君ら夫婦の私生活がだれにも気附かれずに成り立ってゆく唯一の場所なんだ」

「僕の計画はまちがっていたというわけだな」

「君は失敗してみなければ眼の覚めない男だ」とAは笑った。「その代り、なんどでもやり直す男だよ」

健次郎は考えに沈んだ。

まさにAの言うとおりだ。たった一組の男女が孤島に住むということがどんな印象を与えるかを、なぜ今日の今日まで考えなかったのだろう？ 選りに選って人の注目をひく場所を求めたようなものだった。それも男一人ならまだしもいい。登枝の加わったことが致命的だったのだ。

夜光島の生活を切り上げて、都会のジャングルに戻ろう。

彼は友人の手を握りしめた。

「よし、わかった！」

「そうか」

「だが君は、一度島へ来てくれるね。女房に会ってくれるね？」

「ここまで話したんだ。ぜひ和製タヒチと、最愛の奥さんを拝見させてもらうよ」

酒はすっかり冷えていた。Aは手をのばして呼鈴を押した。

「だが今夜じやないよ。君も泊ってゆくしかない。今夜はひどい雪だからね」

「雪だって！」

友人はまた笑った。

「新聞をよまないだけじゃなく、ラジオも聞かないんだな。今日は夕方から雪で、一晚中降るといふ予報だよ」

健次郎は立ち上って障子をあげた。いつのまにかガラス戸の外は一面の雪だった。風も出ている。片々と舞う鷺毛はときどき大きな塊りとなって揺れ動き、飛び散った。

女中が入ってきた。健次郎は背を向けたまま、聞くともしにAとの会話を聞いていた。

「盛に降り出したじゃないか」

「ほんとに。コタツでもつくりましたよ」

「それよりも、熱いのをもっとたのむ」

「かしこまりました。……全くこんな大降りじゃあ、舟で行った人は帰れませんわね」

「そりや、なんの話だい？」

「いえね、ご存知ないでしょうけど、このさきに夜光島って小さな島があるんです。そこへ昼間、ボートで渡った人があるんですよ」

あとは何を言ったかわからない。女中の愛想笑い、立ち去る足音襖をしめる音。次の瞬間に部屋は墓場の沈黙が落ちた。健次郎はのろろと振りむいた。

「おい、君と行き違った客があるらしいぜ誰だね？」

「さあ、わからん」

彼は部屋を横切って襖に手をかけた。

「どこへ行くんだ？」

「便所だ」

うしろ手に襖をしめて、階段を下りた。怪しまれないために静かに歩いたが、胸は鼓動で破れんばかりだった。

便所の前を通りすぎて玄関に出た。靴を穿いていると、さっきの女中が顔を出した。

「あら、おかえりですか？」

「うん、Aにはね、明日、改めて迎えに来ると云ってくれ」

「いま傘をお出ししますから」

「要らん、すぐ近くだから」
オーバーの襟を立て、道路に出た。それから海岸に向かって大股に歩きたした。

八時頃だったが、人通りはなかった。この土地へ来てはじめて迎えた雪の夜だ。狭い道の両側にならんだ軒から灯が洩れて、そこだけ切り取られた空間に吸いこまれる雪は銀粉のように美しく輝いていた。それはときどき真向から吹きつけ、顔や襟にぶつかった。だが彼は何も見ず、何も感じなかった。ただ頭のなかで一つの考えだけが燃えていた。

——館岡だ、館岡以外にない！ 奴は俺があつた旅館に入るところをみた。夕方から雪になること、それを俺が知らないことを、あいつは知っている。つまり、俺が島に戻れないことを知っている。

では、なんのために留守をねらって島へ渡ったのか？ その疑問は火のように頭に灼きつき、解答を得られぬままに彼を苦しめた。

あの浅薄な人道主義者は妻の告白を信じないのだろうか？ やはり狂暴な男の犠牲者だと思ひこみ、救い出すつもりなのだろうか？

「真実をお言いなさい。僕が力を貸してあげる」といったようなキザなせりふで妻を当惑させているのではなからうか？

いずれにしても許せない——これだけは疑問の余地のない健次郎の気持だった。絶対に許せない。どんな危険を冒してもすぐ家に戻ってあの青年を叩き出さねばならぬ。抵抗すれば半殺しにしても、海に投げ込んでもいい。どうせ島を去るのだ。もはや新聞社も、輿論も、嘲笑も怖くない。

殺気に近いものが胸にこみあげ歩いているのがもどかしかった。一分一秒も早く家に着きたい。そして登枝の顔を見、声を聞くまでは安心できない。

いつか町の灯は遠去かり、健次郎は海岸を走らんばかりに歩いていた。一里の道は凄まじい自然の咆哮にみちていた。浪の音だ。汀から視界のきくたった五十メートルばかりの海面はどす黒く泡立ち煮え返っていた。周囲は白い壁がたちこめていた。それが風とともに崩れ、盛り上り、押しよせてたちまち彼を包んでしまう。粘る雪は払っても払っても全身にこびりつき襟から背中まで落ちこんだ。彼はほとんど眼が開けられなかった。しかし歩きつづけた。引返そうという気持は全く起きなかった。

雪をかぶったボートは激しく揺れていた。健次郎はわまわず綱を解いて乗りこんだ。すると……どんなに海が荒れているかがわかった。ほんの瞬間、恐怖のようなものが頭をかすめた。だが、ボートはもう浚われるように沖に流されていた。

沖に出るにつれて、うねりはしだいに大きくなり、オールが宙に浮いた。健次郎は必死になった。全身の力をこめて浪を叩いた。顔の雪を払うことができず、方角を見定めることもできなかった。激しい動揺、なにか急流に押し流されている気持。やがて両手が痺れてきた。寒さで感覚を失ったのだ。

(島はどこだ?)——彼は悲鳴をあげた。吹雪に撲られ、前屈みになったとき、突然、横波を食ってボートは傾いた。次の瞬間、健次郎のからだは海中に投げこまれた。

暗い暗い氷の水のなかで彼はオーバーと靴を脱ごうともがいた。靴は脱げたがオーバーは外せなかった。彼はいそいで浮び上った。すると、たった今そこにあったボートはコルクのように軽々と浪間を走り、吹雪のなかに消えかかっていた。

もしも彼の生涯に正しい意味で後悔と名づけるものがあるとしたら、それはこのときだったと云えよう。狂気じみた、骨を噛む鋭い感覚が「後悔」という形で全身を貫いた。彼は泳いだ。方角もわからぬ海の中を動きまわった。だが自分のしていることがいかに無益かを意識せずにはいられなかった。

「登枝、登枝……」

遠去かってゆく知覚にしがみついて、彼はかすかに叫んだ。とたんに水が咽喉にながれこんだ。

X

寝室の高窓からは光り一つささなかった。雪と闇と風がこの建物を取り囲んでいるのだ。この部屋の陰惨な光景を照し出しているのは黄色い置きランプの灯だけだった。

手足を縛り上げられた登枝は、大きな眼に怒りをこめて男を見上げながら、空しくベッドにころがされていた。

館岡はいまひとつのベッドにあぐらをかき、ゆっくりタバコに火をつけた。それから登枝の顔を押しさえて、煙を吹きつけた。彼女はむせんで眼を閉じた。

「どうだ、もう往生するかね?」

返事がなかった。

館岡は腹を立てて平手打を食わせた。

「返事したらどうだ」

「じぶんのしていることが分らないのね」と登枝は憎々しげに云った。

「明日になったら殺されるわよ」

「明日になったらね」と男はせせら笑った。

「ところが、お前がいろんな眼に会うのは今夜だよ」

「一晩だけの生命なの？ ああひとは新聞社でもどこへでも乗り込んでゆくわ。そのとき弁解したって後の祭よ」

「安心するがいい。そのころ俺は東北線の汽車に乗ってるから。とくに新聞社はやめたんだ」と、面白そうにしゃべった。「だから今日という日はまたとないチャンスさ。かわいそうに、あいつは今ごろ宿屋で呑気な夢でも見てるだろう」

「卑怯もの！」

「おっと、猿轡を忘れていたっけ」

登枝は起き上ろうともがいた。だが男が悠々と布をさがしだして近付くのをどうしようもなかった。口をつぐみ、首を振り、抵抗の限りをつくした。だが男は焦る必要がなかった。一晩かかって邪魔の入るおそれがないのだ。叩いたり抓ったりして彼はゆっくりと目的を果たした。

「いまお前は卑怯者と云ったね。なるほど、一時はお前をここから助け出そうというつもりだった。それはウソじゃない。だからあの男は俺をなぐりやがったのさ。だが、そいつはどうやら、あいつの暴力にかき立てられた気味があ

ったようだ。誰だってあんな眼に会えば女を引き離して復讐してやりたくなるもんだよ。ところが、お前の告白ときた！ あっけに取られたね。燃え上った気持もいっぺんにオシャンになってしまったんだ」

云いながら館岡は、夕方便った鞭をまた取り上げて、力まかせに尻をたたいた。

「まあお聞きよ。それで俺は奇妙に唆られちゃったんだ。いったい女を縛ってどんな気持がするもんだろうかってね。そう思うとふしぎに興奮してくるじゃないか。こりゃあ一体、どういうわけなんだろうな。お前の旦那さんに一度聞いてみたいところだった」

こんどは下腹に打ちおろした。登枝はうめいて身をよじった。「だから俺をこんな気持にしたのはお前だよ。外ならぬお前だよ。マゾヒストって言う言葉が誘惑したんだ。そうじゃないか。……だがそうだとしたら、なぜそんなに苦しそうな顔をするんだい？ お前はほんとにマゾヒストなのかね？」



この獣になにが分ろう！ 登枝は健次郎を思い浮べた。鞭打一つにこれほど歓喜と苦痛のへだたりがあるのは奇蹟だった。私はあのひとに愛されている！ その愛が私の眼を開いたのだ。告白は愚かだった。いまはただひとりの男にのみ私はマゾヒストなのだ。

彼女はいそいで首をふった。すると、男の表情は意外にも歓びにかわった。

「そうかい、マゾヒストじゃないというんだな。そいつあなたお理想的だ。じゃ、ほんとにお前を苛めることができるってわけだ」

彼は鞭を棄てて近付くと、遠慮なく腰を抱きこんだ。それからの仕草は語り尽くせない。愛の巢が絶対に窺い知れない孤島の建物であるのはなんたる皮肉だろう！ 悪魔はなんの不安もなしに残忍さを發揮することができた。登枝は間断なく身をくねらせ悶え、息も詰まらんばかりだった。感ずるものは刺すような苦痛と、嫌悪と、はてしない屈辱だけだった。

「いいからだしてんじゃないか。ねえ、たった一晩で手離すのは惜しい位のものだ。そのかわり、一生の記念になるような思いをさせてくれよ」

熱っぽい眼を輝かせて、男は笑った。登枝は男の意図を顔からよみとると、電気に打たれたようにからだを反らせた。だが一切が無駄なのだ。館岡は向きを変えると、登枝の顔を両脚で挟み、腕をの



ぼして足の紐をといた。それからズボンのバンドに手をかけた。登枝の眼からはじめて滝のような涙が吹きだした。嗚咽すら洩れなかった。無法に大きな布を詰めこまれたからだ。これが告白の酬

いだ。雪が降りやむまで、明日まではどうしようもないのだ。彼女は声にならない声で夫の名を呼びつづけた。

——やがてあのひとは帰ってくる。はたして許してくれるだろう

か。きっと許してくれるにちがいない、そして力強く、あたたかくいつものように抱いてくれるだろうという夢に、必死にすがりついていた……。

(完)



アブ追求三十年の回顧

女武者

山田正実

女武者

筆者は自分の性癖を変態性慾の一種だとは気がついてしたが、一応それ以上は判らないまゝで済まし込んでいるうちに、全く偶然な機会から明らかにマゾヒスチックな性質を呼

び覚まされる事になった。

会社の同僚とT市郊外のKと云う桜の名所へ花見に出かけた事がある。たしか十九歳の春であった。

当時はまだ余り酒も飲めぬ頃だったから唯一人草原に仰向けに寝ころんで、青天井と花

の色のコントラストにぼんやりと視線を投げていた。恰度その時私達の一団から直ぐ近くに席を設けていた男女混成の連中が早くも酔いが廻ったらしく、至極にぎやかに騒いでいたが、突然その中の若い女が一人、此れが又大変な酔い方で、フラ／＼の腰や脚の代りに

眼だけが据っている、と云う大虎振りで、いきなり私の身体の上へ馬乗りに跨がって両手で咽喉を締めて来た。驚いた私の叫び声で双方のグループから人が駆けつけ、急に暴れ出した女を手取り足取りと云う恰好で仲間の位置に連れ戻した。その際先方の中の一入の男——此れがS(T市の有名な盛り場)のカフェーのマスターだったが、——何度も頭を下げて『何分ちよっと酒ぐせの悪い女の子で、何ともハヤ、何処にも御怪我は、どうか一つ御勘弁を……』と詫びるのである。馬鹿らしい話だが別に被害と云う程のものもなかったの、それなりになってしまった。それなりにならなかったのは私のマゾヒスティックな神経で、若い女の肉体にやんわりズッシリと押さえつけられる快感は、不思議にも三日程経った頃から却って生々しく甦えて来て、当時まだ童貞であった私を此の上なく悩ませた。

此の出来事以来、私が女の鼻や覆面以外に女に組み敷かれる男と云う状況にも興味を持ち出した訳である。元々覆面の女が男を斬り殺すと云う筋書きを好んでいた私だから、その男女の剣戟が組打ちに進化したとしても、別に驚ろく程の飛躍ではない。

切れ長の妖麗な目もと。女にしては嶮の強過ぎる吊り上った眉、ツーンと誇らかに空を向いた高い鼻。さぞ大きかろうと思われる鼻

腔の辺りへムザとばかりに引っかけられた盗人被りの手拭。そればかりか此の女はその上に覆面頭巾を被るのだ。目深かに巻きしめられた頭巾の間に、圧迫された鼻筋の変化と残忍な光りをたゞえた瞳がじっと相手の男を見つめる。覆面の下の女の顔は齒をむき出し鼻腔を拡張した猛獣の如き表情である。きゃしやな腰をひねって日本刀を抜き放った覆面の女は、冷酷無残に男を斬り倒す。身体をのけぞらせてのた打ち廻る断末魔の男の姿、女は覆面の下で快心の笑を洩らす、やがて力尽きて

読者座談会

出席希望者を募る

本誌愛読者でしたら、どのような傾向の方でも結構ですが、原稿用紙一枚位に大体の傾向を書いてお申込下さい。出席して頂く方には、日時、場所等詳細、御連絡いたします。本誌側出席者は、箕田編集長、辻村隆、杉原虹児、並にモデル嬢、モデル氏の中の希望者、日時は日曜日の午後、場所は大阪市内、座談内容は出席希望者の色別により、総合的にするか、サド、マゾ、ホモ等、別個に行うかきめます。

お申込みは

座談会係へ

ぐったりと地上にのびた男の胸の上へ悠々と女は跨がって、男の両腕を容赦なく膝の下へ組み敷き、さか手に持った短刀でグサリと止めを刺す、そして次に首を掻き斬る。さて最後に立ち上って哀れな屍体を片足で踏みつけ乍ら、左手に下げた男の首の無念そうな表情をながめ『フン』と嘲笑する。いゝ筋書だなあ……と一人ひそかに悦に入る。さりとて殺されて首を斬られるのが私自身であっては困ると思う。

私が子供の頃、たしか三年生時分だったと思うが、博文館から譚海と云う少年少女の雑誌が出ていた。此の雑誌の当時(大正十二、三年頃)の編集者はきつと倒錯マニアだったに違いない。何しろ大昔しの合戦で男女の鎧武者が一騎打ちをするような筋の物語りばかりを選んで掲載していた。『さあ男が勝つか女が勝つか?。此の勝負の結果は次号のおたのしみ……』と云った字句を今でも覚えていたのであって、歴史に有名な巴御前の事などは勿論持って来いの題材で、毎号連載されていたものだ。

文献に見る巴御前は大層美貌であつたらしい。その上大女でもあつた訳だから見るからに派手な感じの美婦人で、此れが又目も綾な緋おどしの大鎧を着込んだ姿はたしかに勇壮美の極みであつたろうと思う。鎧通しの短刀を腰にたばさみ、黄金造りの陣太刀を横た

え、木曾の駿馬の太く
遅しきにゆりりガッジ
と打ち跨がり、柄も太
く長くと重た気なる
薙刀をも軽々と手頃の
得物と馬上に打ち振り
廻す有様。鎧の金具を
きらめかせ豊かなる黒
髪を風になびかせ、陣
頭に紅唇を開けて部下
を叱咤する女將軍巴の
様子は、想像するだけ
でも、私の血を湧かせ
る。古今の合戦史に巴
御前若しなかりせば、
嗚呼、日本国の歴史と
はなんと味気ないもの
になり果てる事か。

巴御前の征くところ
立ち向う敵武者も、そ

の輝やくばかりの美貌に魂を宙に飛ばし、驚
ろきの余り口も聞けなくなつた処を『あっ』
と云う間に、首を斬り落とされたものに違
ない。

栗津で義仲が討死する直前、名だゝる坂東
武者を馬上で組み伏せ、兜の前底を握って仰
向けにねじ落とし、少しも仿らかせず苦もな
く首を斬りとって仕舞う辺り、人間の首を斬

虹



るなんて事は昔の合戦ではそれが習慣だとは
云え、今から考えると実に残虐行為の最たる
ものだが、此の時の巴御前などは勿論現代人
が食パンを切る位無難作にやつてのけたらう
と思うが、いずれにせよ替玉に巧妙な人形を
使つてもいゝから、此の組打ち場面を京マチ
子か体格のいゝ藤田泰子辺りを巴にして再現
して見たい。それを天然色映画で再現すれば

倒錯マニアに受けるは勿論、カ
ンヌもベニスも一等賞無い無し
だが、ヘナチよろ揃いの日本映
画の企画者連には何一つ期待し
得ないのは情ない話だ。

話は変わるが、昨年の京都の時
代祭り(平安神宮の祭礼で毎年
十月二十二日)に、祇園花街の
芸妓の一人が巴御前に扮して行
列に参加し、馬上鎧姿で都大路
を練り歩いて、見物をうならせ
た。今年の京都新聞の報ずる処
では、此の昨年の巴御前の人気
たるや大したもの、その後花
街の景気にまで影響した点が認
められたと云うから、程度の強
弱は別としてもアブ党人種たの
もしい限りである。

昨年の時代祭の行列がいざ出
発と云う際、平安朝時代の髪型

化粧にフランス物の香水の香りなんかをただ
よわせた此の芸妓さん(惜しい事に筆者は此
の姐さんの名前を忘れてしまった)が、重い
鎧に身を固め、脛当ても嚴重な御座敷鍛えの
脚を踏ん張って、アルバイト学生君扮する処
の雑兵に馬の轡をとらせて置いて、さておも
むろに腰なる太刀をガチャつかせ乍ら、『ち
よっと。おにいさん、あんたしっかり持って

とくれやっしや。たのみまっせ」と、衆人環視の中でふるえる左足を鎧にかけ『どっこいしよ。あゝヤレヤレ』と鞍上に跨がる風景は全く面白い、そして中々の見ものであった。今年は巴御前が出ないと云う話なので私は遂に見に行く気も起らなかった。

義仲は討死を覚悟し、『女を連れていたとあつては後代迄の名折れ、そちは此処から合戦を止めて落ちのびよ』と命じた。巴は素直に敵の首を投げすて、東国に逃がれ、後に再嫁して朝日奈なにがしと云う豪傑を生んだとある。巴は義仲の本妻ではないし、その上義仲は上洛後京都でも情婦をこしらえている。巴との交わりも此の頃にはもはや薄くなっていたのではあるまいか。いずれにせよ義仲の死に殉じようとしなかった処が巴のサディストらしい匂いの発する点で、古来の女豪中巴を第一に注目する私の感覚も又此の辺りに刺激されるのである。

女武者の奮戦談では甲越軍記に長尾為景の妾松江と云う美人がある。為景は戦い破れて一旦佐渡へ逃れていたが、間もなく能登へ渡って再挙を企図した。敵は為景の勇猛性を知り抜いていたので、草原に無数の小孔を掘って其処へ長尾の騎馬勢を誘導する戦術にでたが、猛將為景まんと敵の策略におちいり、自ら陣頭に立って馳突進撃の最中敵の掘った小孔に馬脚をさらわれて転倒落馬、遂に敢え

なく首をとられてしまった。大将討たれて崩れ立つ長尾勢の中より、此の時、何んでも銀の飾りのある兜を被った徒歩武者が一人現われて、槍を振って当るを幸い必死の奮闘をするのだが、その容顔は誠に美麗で又槍技も鋭く名のある敵武者の突き殺される者その数を知らずと云う。此れが松江である。どうも強い女もあったもので敵軍では男色流行の時代だから最初は為景の愛童の一人かと思っていた。そのうちに兜の緒が解けて丈なす緑の黒髪がバラリと流れ流れたゝめに女だと判明した。遂に敵の為に松江は捕われるがその夜敵將に口説かれ、『貞婦二夫に見えず』と咽喉を突いて自害する。此れが乱戦場裡に切腹でもして呉れゝば又読者諸兄弟の中に好話題を提供するのだがその点誠に残念である。

女の禪

さて最後に禪の領分を若干侵す事になる。そも／＼日本の鎧はその構造が複雑で美術的にも秀れ、殊に美しい女が此れを着けた姿は、そのまゝ装飾的な人形ともなつて人の眼を楽しませて呉れる。

然し此処で筆者なる私は、又一つの嬉しい疑問を感じるのである。

と云うのは、巴御前を始め史実伝記に数多く見受けられる女武者達が、その素肌にきり

りと凛々しく禪を締めていてくれたか、どうか、と云う問題である。

元よりズロースのない時代の事だから女姿の場合は、いかな女豪傑と云えども矢張り腰巻状の肌着を用いたであろうが、さて武者姿となると腰巻では全然都合が悪い。矢張り男武者と同様に禪の御厄介になったものと考えねば、それ以外にどうとも考えようがないではないか。然らばどんな禪を締めたか、と云う事になると、あの興味の薄い越中禪と云う奴は徳川時代に発明されたと云う事だから、それより以前の巴御前なんかは木曾駒の調教で発達した豊満な臀部の深溪に、六尺では足らず十数尺もあると云う長布をキリ／＼シヤンと、噛み込ませていた事は大体揺がぬ事実とせねばなるまい。若し何んの変てつもない猿又類似の代物があつたとしたら、それは私の楽しい夢を無残に破って仕舞う事になる訳だ。

(未完)

告知板 ○羽村京子さん、お送りする資料が入手出来ましたので、連絡方法お知らせ下さい。尚、『A感覚の秘密』の続篇がでない。○手紙の転送を依頼される方々の中で、切手の封入のないものや、郵税不足のものが沢山ありましたので御注意下さい。尚、文通幹旋についての御問合せに關しては一切お答えいたしません。



飛行服姿の 女切腹

—私の理想の女性—

藤山秀緒

古川裕子、亀岡絃七郎、吾妻新等の先生方のお説を毎号楽しみに読ませていたといっております。古川様のゴム引レインコートの表現のすばらしさ、亀岡様の女性の切腹、ことに「散紅葉」の哀艶、吾妻様のズボンの心理など、本当にお美事で私の心を妖しくかきたてます。私はこれまでの女腹切の表現が、どうも傷の描写にかたよりすぎて、たとえば白い素肌を見せた切腹人が刃を突き立て、引廻して腸がはみ出した、というような、なまなましい惨酷さだけに終わっているように思っていましたので、「散紅葉」の志津が、家のため夫のため、健気に腹切って死んでゆく筋が、

いやみがなくて立派だと思いました。私も人目をしのんで腹切りの姿を鏡に写し、自ら慰めることもございます。しかし素肌のなまなましさは好みません。私は、ズボンをはき、ジャンパーを着け、ズボンの下端をレインシューズの立衿の中へ入れ込みます。そして、レインコートを着け、ベルトを締め、フードをかぶります。レインコートは、ゴム引きか厚地のギャバ、手首の尾錠もしっかりとしめきりと身拵えをします。

この姿は私の大好きな姿です。じっと鏡の中で完全武装のレインコート姿を見つめているうちに情感が昂まってまいります。私は女

の飛行将校の気持です。処は戦地。時は日本の敗戦当時。私の夫は将校でしたが、不幸、病に侵され、申訳ないと口走り乍ら野戦病院で世を去った。そのうちに日本は敗戦。私の扮する彼女はもう生きる望みはありません。死のう。そうだ。病死した夫に替って、女ながらも深く切腹しよう。こう決心した彼女は飛行将校の軍装を身にまとい腹を切り、祖国の安泰をいのろうと、こゝに健気な覚悟をいたします。夫の上官にこのことを打ちあけますが、上官は思いとどまるよう、切に自刃を思いとどまるように重ねて意見しますが、彼女は涙乍らに夫への慕情を打ちあけ、且つは、女乍ら腹を割き、苦しみで祖国の救いになりたい旨をのべます。こゝは私の最も好きな場面です。

上官も、いまは止めがたくその死をたゞえ進んで介錯を引受ける。いよいよ切腹です。場所は人目を憚って司令部の地下室、ゴム布をしきつめ、飛行服、長靴と、男姿の彼女は敵地で腹を切る心ですから正坐しません。

レインコートを着てフードをまぶかにかぶります。苦痛にゆがむ顔を上官に見られたいからです。上官は、介錯をどうするべきかと訊ねます。彼女は永々の恩を謝し、首を斬ることはいよいよ死にきれず、見苦しい姿となった時だけにしてくれよう、またその際は彼女自身がフードをはね、介錯を！と頼

むことにきめます。すでに彼女は介錯なしで死ぬ心です。東方を拝し、国のため、夫のために彼女は自ら死を選ぶのです。

刃は守刀の九寸五分で、白布を巻いてあります。彼女は静かに右のヒザをつき、左ヒザを立て、飛行服、レインコートの前を僅かに寛げ、この縦にひらかれた衣類の合わせ目から刃を突込むのです。上官に一礼すると、九寸五分に諸手をかけ左ヒザを内へ曲げて、大きく息を吸込んだ。ぐっと九寸五分がレインコートの中へ引き込まれます。「ううッ」前かゞみになりながら、刃をきりきりと引廻しますが、顔は振り仰いでフードに包んだ蒼白の顔色にかみしめた唇がかすかにふるえる。

「あ、あッ、くくくくッ」傷は深く、刃も遅々としてすすみません。苦痛を憶える彼女の悲壮な呻きが地下室に低くひびきます。

この苦しみこそ、祖国を救う祈りの言葉です。彼女は力のつくかぎり苦しみたいのです。「ううッ」臓腑をかき切ったらしく、腰を落して泳えています。左ヒザを立て、右ヒザをついているのは、右ヒザの張りで、腹の皮膚が突張り、切りよいとの昔の訓えです。ズボンから長靴、血潮がしぶきます。「うッ」九寸五分を抜取る。顔は引きつって、脂汗がにじんで居ます。今度は九寸五分を鳩尾に押しあて、大きく息をつぎます。上官は見かねてそのまゝ介錯をうけよと、耳に口をあて

ますが、彼女はきゝいれませんが。「うッ」と突込む。やがて「ううむッ、うッ」。

刃は縦に腹を裂いて行く。

（このあたりで情感は頂点に達します。それを泳えて、思のかぎり身悶えしつゝ、なおも彼女の幻を追うのです）

「ウッ」

体を硬直させて棒のようにゴム布の上に倒れ、はげしく体をくねらせ、飛行ズボンの両肢を揉みあわせてもがきます。「あ、あッううむ、ううむッ」

上官は、もうこれまでと、彼女の顔をあげさせ、フードをはね、首を討とうとします。

しかし彼女はフードの顔を伏せ、もがきながらも刃を下へ切り下げて行きます。

臍下一寸に達したとき、はじめて彼女は刃から手をはなし、一瞬呻きを泳えます。

彼女は手について体を起こそうともがきます。行儀を正して死にたいのです。もうこうなっては介錯を待つばかりです。しかし彼女はフードを取る様子はありません。

彼女は九寸五分を泳えかねたうめきと共に抜取り、あせり気味にレインコートの上から胸へ差そうと苦しみます。厚手のレインコートと飛行服を通るには力がいらいます。

彼女は「ううむ」、と呻き乍ら飛行ズボンの両肢をふん張り、ぐッと刃を胸へ突き通します。遂にフードを取らず、壮烈な呻きと共に

にうつぶせに息絶えることになるのです。

しかし此の筋だけでなく、或る時は苦痛にたえかねてフードをはね、上官の介錯をうけるようなやり方も出来ますし、又は、胸へ刃を突き立てようとして果さず、苦悶の態になりもはや是迄と上官が九寸五分を持添えて急処を断つこともできます。そのためにこのフードが役立つわけでございます。

（たゞ、今日一般に普及しているレインコートのフードはかぶっても恰好がわるく、従ってこれを男物のようにアゴの処に短いベルトをつけて締めるようにすればきりとした姿になります。）

尚、あと二つの筋は、腹から抜取った九寸五分を胸へ差そうとして喘ぎ乍ら、遂に是を果たさず、苦しみのあまり、やむなく、介錯を頼むことになりましたが、こゝで、ふるえる手先でフードを後へはね、「か、か、介錯を！」と舌をこわばらせて申します。上官はこの首を討ち落して終わりますが、そうでなければ、もっと苦しませて、足許も飛行服のズボン姿で、両肢をあられもなくふん張り、ゴム布の上をのたうち廻ります。泳えくは居ても、悲壮な呻き声が唇を割って哀艶な女腹切の終りをしませます。上官は、是迄と、軍刀を抜き放ち、敬礼すると、彼女の胸元へ刃を擬します。「ウッ！ ううムッ」

これも押し泳えた呻き。刃は心臓を貫いて彼女は散って行きます。これが私の理想の女腹切りでございます。（おわり）

「映画・雑誌」通信

『雑誌に見たサジズム』

柳 一郎

二月号では、この欄で映画に就いて述べて見ましたが、今度は雑誌の中で私のアブノーマルな心に映った個所を書抜いて御紹介しようと思います。

第一に「週刊タイムス」廿八年十一月廿二日号の『小谷喜美と云う名の女、生き神様の生体』という読物であり、その中の一節『お尻をまくって四ツん這い、素裸にして変態リンチ』と云う見出しの個所であります。その個所を書抜いて見ますと……

『氣にくわぬ事をし出かした女中をパパンと平手打ちをくわしたあと、「お尻をおまくり」逆うと大変だから、いわれた通りクルリとお尻をまくる。勿論ズロースなど全部とってしまったのである。「四ツん這いになるんだよ」と次なる御命令。』

お尻を丸出しにして四ツん這いになってじっとしているさまを想像して御覧なさい。エロチックにも又グロテスクな風景ではないか。浅間しくも女の恥しいお尻、それ

も、足を開いての四ツん這いで更にお恥しい「ありさま」になっているのを後ろから眺めて、アッハッハ、と笑うというのだから、この方が余程グロである。』
又そこには、次の様な事も書いてある。

『喜美は冬の最中、女中に着物をさせた儘、頭から水をぶっかけて暁方まで立たせておくという暁に祈る式の制裁をして、凍った体でついに病気にさせたり、氣絶する迄皆に殴らせたり、サディスティックな制裁を自分でしたり、女中にやらせたりしていたが、そのために、女中達もいつか変態的になっていったのだろう。』

栗田さんや桑島さん達は、他の女中達にラクビーのタマ同様に次々とつきとばされたり水責め、鉄拳制裁などをされた挙句、「これでもさんげしないんなら、最後のやつよ」いうが早いか、クルクルと着物をハギとって丸裸にして放り出す。ズロース一枚で放り出されてぐったり倒れている栗田さん

や桑島さんは、次の瞬間、そのズロースまでも引きずり降ろされるのを氣付いて「そればかりは……」と、悲鳴をあげて、再び呻き始める。だが多勢に無勢、忽ち文字通りの素裸にされて、責め折かんが加えられる。』

その折かんの模様を、岩楯みつさんはこう語る。『逃げようとすゐるのを引きずり戻して、毛を引っばったり、指をつっこんだり、ひきずり倒して肛門に変なものを入し込んだり、女同志のやる事は陰惨ですね。みんな変態性慾になつてるといふより考えられないやうな方です。奥座敷の庭で、全裸の年増女が、数人の女達に虐められ、ヒール悲鳴をあげて喘いでいる姿は悲惨とも何ともいふやうがな』

この様な記事は、大分誇張しているように思われるが、若し本当だとしたら、女中に水をぶっかけて病気にさせたりする小谷喜美という女は、サジストではなく、それは行き過ぎた非人間的な狂人である。しかしこの様な点を抜きにして読んで見ると興味を唆らせる文章である。

第二は「週刊読売」廿九年九月廿六日号に於ける「屠殺された箱

入娘」という例の埼玉の娘バラバラ事件の時の記事で、その中では死体の散乱状況という表があり、腿の肉は、どこそこにある、足の肉はあそこにあつた等と書いてあるが、被害者のズロースという項に於ては『炬の中にズロースが捨てられており布地の一部は切り裂かれ肛門及び下腹部の穴に詰め込まれていた。』と書かれていた。この事は被害者に対してはお気の毒に思うが、私の性癖（即ちズロース、ANUSに対しての執着）にピッタリと当てはまっているのでこの雑誌を残しておいたのであるが、いくら、私の性癖がそうであるからといって、犯人古屋の様に殺人を犯す事は出来ない。

第三は何月頃のものであつたか記録を残して置かなかつたが、何しろ去年の「文芸春秋」の別冊に、河合譲という人の書いた、人さらい団「村岡日記」と云う読物である。この読物は、村岡という男が戦時中だか戦前であつたか忘れたが、東北の娘を九州の果までさらってきて売春を強要し、又それを拒んで逃亡を計った娘に対してはリンチを行ったのである。そのリンチの模様の一節だけを書き残しておいたので書いて見る。

「……つかまえて連れ戻すと主人は女を丸裸にして街の四つ辻に縛り上げ〇〇に薪を押し込み、尻に生々しい牛の尾を突き差し、数日晒しものにして無慚にも殺してしまつたそうである。」

こゝでお尻に生々しい牛の尾を突き差し……と云うのは肛門に牛の尾を突き差し……と云う事と思うが

最近の映画から 白石 稔

○隼の魔王（三月号予告）

波島進扮するプロ野球選手新田英彦は恋人ゆう子（田代百合子）の存在を知りながら、邪な好意をよせるダンサー（日高澄子）とのもつれから、不良に脅され格闘の末、相手を殺したと思ひ込み、それを種に賭博団から選手権試合には八百長を強要され、恋人は人質に連れ去られる。さて賭れの試合の当日、ゆう子は製材工場事務所の二階で白布の猿轡をかませられ後手姿で椅子に縛りつけられている。嫉妬にもえるダンサーの監視を受けながら、恐怖におののく姿は、胸や股の縄目を見せて痛々しい。一方新田は賭博団の強要に背いて、殊勲の一撃を放ち味方を勝利に導く

若い女がその様に嗜虐的な私刑を受ける……と云う事は第二と同じく私刑の性癖に当てはまるものである。以上大体に於てANUSに対する嗜虐的な個所を書き抜いて見たが、この他、読者諸兄弟姉の中でこの様な場面の書いてあった雑誌があったら発表して下さい。

（おわり）

が、そのために試合直後自動車で誘拐され、工場へ連れて来られた新田は直ちに後手に縛り上げられる。そして事務所から後手姿のまゝ引き立てられて来たゆう子と対面、両者は思わず縄目を忘れてかけ寄ろうとするが引き戻される。首領らしい男はダンサーに「何か言いたいだろうから猿轡をとってやれ」と命じるが、外されたゆう子の唇から出る声は、恋人の名のみ……後は胸が一ぱいで何も言えない。ダンサーは憎々しげに「お別れの言葉にしては、あっさりしてるわね」と言いながら、ゆう子の口へ再び布をあて、後で結ぶ。首領らしい男は二人に向って、「お前たちは約束を破った為に

こゝで死刑になるのだ」と製材用の回転鋸を指す。「執行だ」との声に後手猿轡姿の二人は、子分達にかつぎ上げられて板にそれぞれぐるぐる巻に縛りつけられる。二人は互に眼をみつめ何かを言おうとするが、猿轡の下で唇の動くので認められるのみで、声とはならない（この猿轡は口の中に詰め物をしないので、一寸矛盾を感じるが）間もなく轟然たる音と共に鋸の回転が始まり、二人の身体は縛られた板ごと、鋸の刃へじりじりと近づく。必死に悶える二人の胸の縄目、猿轡をはめられた顔、鋸の刃の交互のクローズ・アップでスリルは最高潮に達する。画面一ぱいに大寫しされた顔から溢れる様な汗、近づく鋸……これらの一部始終を、ダンサーは冷やかな笑を浮べて傍で見守っている。あわやと言ふ所で、千恵蔵扮する探偵が現われ、二人を処刑台から救い出す。この後、お定まりの警官隊出動、拳銃戦の結果、賭博団は逮捕となり大団円となる。以上、この映画は相当なスリルを味わせる点において最近の映画のうち屈指のもので、未見の方には是非とおすすめしたい。

○紅孔雀（三月号予告）

高千穂ひづるは第二部の巻頭で海賊船に連れ込まれ、黒い細紐で帆柱に縛りつけられる。あまり明るい場面ではないが、黒紐で三回ほど胸に廻してあるので、縛りの表情は充分である。

○恋天狗（本月号予告）

月丘千秋は、悪者達の為に誘拐される。縛りのシーンは、空家の中に運び込まれた駕籠の中で後手姿に黒布の猿轡の一カット。

○近松物語（二月号予告）

有名な近松門左エ門の「おさん茂兵衛」の物語。ラストシーンで不義密通の罪により、はりつけの刑場へと引き廻される、おさんを香川京子が演ずる。裸馬へ茂兵衛（長谷川一夫）と荒縄で背中合せに縛り合されて揺られて行く。これとは別に、このシーンの伏線として同様な引き廻しのシーンと磔柱に縛られた男女（新人）を描き出している。ので附記しておきます。

○鉄仮面（一月号予告）

この映画については三月号で、鈴木氏から紹介されましたが、女優は由美あづさ、後手白布の猿轡姿で杭に縛られていたが時間的にほんの一カットであったのが物足りない。

『残虐なる女性達』画集、解説

ルドルフ・ヘエゲマン特集(第二回)

(Rudolf Hugemann.)

森 本 愛 造

繰り返し申上げる様であるが、此の画集は全く珍しいものである。こうして、読者諸君が、之まで一部の金持達の好事家によって独占され、且つ又秘かに保管されて居た画集や珍奇本を手軽に見る事が出来るのは、本誌の編集者の小生に示した限りない好意と熱心さとに拠る処が多いのである。他の類似誌の如くエロティックな要素を採り入れて販売面を拡大する様な事もなく、只管にアノルマル・セクシユエル専門誌として地歩を固めて来た事は、驚嘆すべき事の一つである。この様な雑誌によって、私達の惜愛するマグヌス・ヒルシユフェルト博士等が、非難と弾圧の中に築き上げた偉業がこの極東の一角に漸くその土地を得て、ひろく、益すべき人々に頌たれる事は、私達にとって、独占の破壊による失望以上に、感動を以って迫るものがある。

包括力を披瀝する予定で、目下その整理に当りつゝあるので、今回に限り勘弁して頂きたい。猶、小生の私事に渉るが、今回の不幸に際しての丁寧な御挨拶を頂いた方々には、厚く御礼を申上げ、以後は、専心、紹介記事に私の努力を傾注する事をお約束致します。

(1)「ピアノの練習」—Klavierstunde.

小説の挿絵として描かれたものである旨の断り書がある。昔ピアノの練習のみでなく、音楽の修業が特に厳格で、時として管によって教え込まれるものであったことは、モーツアルトやベートオヴェンの故事に照しても広汎に渉って実行されていたものと考えてよいと思う。そこで、ヘエゲマンは日常生活の中に、彼の天分を解放してこの作品を作り上げた。これまでの十数葉の作品に於て読者諸君がすでに看破したと思うが、ヘエゲマンの作品は二つの系統を持っている。即ち、一にエロティックなものを始め、空想的、仮定的な場所や時代に題材を求めたもの、他の一つは、日常生活の中に起る一つの瞬間等のあり

ふれた題材に拠ったものである。前者には十九世紀末葉からの香り高い腐臭たゞようネオ・ロマンティスムが、後者には、プツティニやレオンカヴァルロ等に代表されるヴェリズモ【Verismo. 現実派と訳されている。近くは映画の「戦火の彼方」—PAISAN—「無防備都市」—Roma, Citta Aparta.—等に代表されて過激な内容を持つてゐるが、古くは、「道化師」—I Pagliacci.—(ムッデロ・レオンカヴァルロ=Ruggiero Leoncavallo—の代表作オペラ)「カヴァレリア・ルステイカナ」—Cavalleria Rusticana.—(マントロ・マスカーロ=Pietro Mascagni—の代表作オペラ)等の如き傾向のものであった」が感じられるのであって、この(1)は後者、ヴェリズモ(伊太利語であつて、共通に用いられているが、ロマンティスムの様に云えば、ヴェリスム—Verisme.)風の作の代表的なものといえよう。

特に女の子が尻を裸にされて、終始誤ちのある度に咎をうける用意をさせられている点や、女教師の表情、左側の男の子の情ない顔等である。そうして、ピアノの上の楽聖ベートオヴェンは不可解な驚愕の表情を示している。

(2)「小学校での懲罰」

—Strafstunde in der Volksschule.—

或る鞭打愛好者の委託によって描かれたものである。私は左側の女性に異様な刺激をう

ける。このコムポジションの適確なること、この力量感に正しくヘゲマンのものである。この作は、時として、ヘゲマンの筆か否かを疑われるのであるが、私は、単に資料からのみでなく、この緊迫した画面と、シュトラウスの作り出すクライマックスに似た複雑な抒情と巨大な精神上の圧迫とによって、ヘゲマンを感じるのである。正しく、日常の生活に範を取って、この様な深い感動と異様な迫力にみちた作を未だ見た事がない。

(3) 「学校での懲罰」…一週間の精算…

—Wochenabrechnung in der Schule.—

「一週間の精算」とは、罰を誤ちの起った時に直ちに行う事なく、一週間の間蓄えて、善行があれば、その中から精算、相殺して、残高に対して答打が行われるのであって、この事については、本月の「残虐なる女性達」の本文に実例が挙げてある。

原画は、三色版オフセットで印刷されており甚だ淡彩なもので、ヘゲマンの異色作である。同じ鞭打でも、被虐者が数多いこと、そうして、全般に流れる和やかな空気が、ヘゲマンの筆力の衰退を示しているが、こゝに形式美への憧れと、整然とした枯淡が現われて、メンデルゾンの作品に似た感銘を僅か乍ら与えている。私達の座右に持すべきとも思えないが、この原書では、相当に丁重且重要な取扱いを示している。

(4) 「輸入された女」—Weib als Mare.

ヘゲマンの作であるが故にのみ、こゝに御紹介するものであるが、傾向はむしろ逆である。併し、コレクションは常に網羅しなればならぬ。私は、些かの不満の念を持ちつゝもこの作を御紹介する訳である。この作からマゾヒスティックな感を受ける為には、神業に近い想像力を必要とする。ネオ・ロマンティスムに属する作である。

(5) 「厳しい女教師」Strenge Lehrerin.

再び、ヘゲマンはその力強い作品を示して呉れる。(2)と同一の傾向の作であるが、このデリケートな線、エロティック—といつても児童姦的な—な匂いを漂わせつゝも、その得意とする編上長靴の美しさは、比類ない魅力を発散している。

こうして、私の随喜するルドルフ・ヘゲマンの作品集は終るのであるが、何卒マゾヒストの諸氏にして、他のヘゲマンの作を知っておられるなら、早速御一報願いたい。こうした蒐集が、一個人の手によってなされる事は不可能に近い。仮令一枚の画でも、特定の人々には万金に価する事をよく諒として、御紹介下さる事を切に希望する次第である。猶、前回予告にはパウル・カムの補遺を紹介すると御約束したが、実はその二葉はあまりマゾヒスティックでないもので、その代り次回予告として、欧米及現代日本の素人

画やアマチュア・フォトを御紹介しよう。

号外、予告(一)

或る巴里の素人写真家によって作られたもの、着想や、小道具の古さはとにかくとしてこの重要なポイントをついた作法に注意されたい。一つの模範として御紹介する。製作日は、一九二〇年代である。革のソファのアイディアは、豪華さを秘めて荘大である。それと、マゾ・フォトは必らずしも男女一組の必要はなく、女主人一人のもので、一組のものより以上の効果をあげる事があるという点も私の強調したいことである。

号外、予告(二)

製作年代は、最新である。即ち、本年一月の作、英国系の娘の書いたもの、着想は、映画「底抜け最大のシヨウ」のジオン・ドルウの配役に黄色人種を配したものである。これが、ドミナの側からの欲望の発散の現われとして提供せられた事も、珍しい実例となると思う。この一葉は、私が、自信を以てお贈りすることの出来る資料である。勿論画家が、金の為にする作には技術的に劣るかも知れない。併し、この一枚には、ドミナの血が通っている。私はこの一枚のパステル画を、ジエウル・マスネエの手紙と共に、深く愛蔵したいと思う。

(以上)

私のアイデア

KK倶楽部新設案内

東京
霞人

悦慮同好者間の親睦を計り且之が実演道場として大阪府堺局区内にKK倶楽部を設ける。道場は約三〇坪で一部を一坪半乃至二坪宛に仕切ったもの六室とし残りは大広間とする。大広間はコミになるがダンスの場合同様他人のプレーも見られる特典がある。小部屋にするか大広間にするかは会員の撰択による。

建物はKKに近接した有志の別宅の庭の一隅を借用し庭園も希望により使用することが出来る、普通午前十時より午後六後迄とし臨時夜間開場は割増料付とし其都度受付がKK社から出張する。

プレーの種類は受付にカタログを備えてあるから之を見て凡そ指定し特別の希望条件を附すること出来る、例えば叩くこと、なぐることはやめてほしい、身体に傷の付かない様にしてほしい、合図をしたら中止してほしい、相手は中年の女性にしてほしい又は若い青年にしてほしい等々。

会員はM種(マッ)、S種(サド)

の二種としM会員は入場料普通、S会員は倍額とする。(説明省略) 対手となる者(以下プレーヤーと称す)はクラブに於て責任を以て供給することとするも性別年齢等に就き希望がある時は予め連絡を要する。但しS会員に就ては最初の内はクラブ員が立会い危険の防止を計る。(興奮して危険を伴うと困るから)が、プレーヤーには一応手錠をかけ足鎖をつけて会員に供給する、そのあとは会員の自由である。M会員に対しては矢張り手錠をかけ足鎖をつけてプレーヤーに渡す、之はプレーヤーの力が及ばず会員が逆にプレーヤーを征服することを防ぐためである。会員は受付でロッカーを借り(料金一回五〇円)脱衣し供付けのパンツを穿くこと、原則として半マスクをしナイトキャップを被る(何れも供付けあり)之は秘密を尊び且年令をカムフラージするためである。

用具は各種クラブにて取揃えてあるが会員が持参した物でもクラ

ブが承認すれば使用して宜しい。時間は貸ボートの如く受付子が時間を通知して終局とする。

経費及経営の概略を述べれば、入会金一人五千円、最初四百人と見て二百万円を予定し、建物坪当り五万円で三十坪として百五〇万円、什器施設用具等を五〇万円とする。会員は激増すること請合

い。入場料(三時間以内)五百円 会員は一回

ビジターは千円とする。此会費で燃料代、人件費等を賄い尙簡単な茶菓を用意し実費で求めに依じる、酒類は取計われないし酒気を帯びた者の入場は謝絶する。

ビジターは必ず会員の責任ある紹介又はクラブで厳選承認した者に限る。

尙クラブは秘密を厳守し責任と監督の責に任ずる、会員はクラブ員(腕章を附す)の命令に従う義務がある。

プレーヤーの出張制度に就ては別に定めるところによる。

一二月号? 口絵写真に春日嬢の出張実演の写真が出て居たがポイズ及写真は極めて平凡不鮮明で何等面白味を感じなかったが春日嬢の出張縛りと云う点で異常の興

奮を覚えた、之で一新生面が開けた様に思います。是非申込手続きとか出張規定とか云うものを発表して下さい

連縛希望の時は割増料付で応じる、プレーヤーを一人余分に必要とするから割増料をとるのですが連縛プレーヤー同伴の場合は割増料は不要です。

プレーヤーを同伴する場合はクラブの承認を要し大広間使用のと、会員はM会員一人分並とす。追而東京方面にも出張所を設けます。

× × 皆さんこんな倶楽部が出来たらどんなにスバラしい事でしようか企画部の奮起を望みます。

【企画係より】このアイデアのようなKK倶楽部が出来たら楽しいですね、僕も早速会員にさせて貰います。どなたか発起人となって設立して下さいませんか。入会金五千円というのは大衆的ではないから数人の発起人が一人数十万円宛出し合って設立準備委員会でも作るのですね。会費は無料ということにして。僕は勿論無料の会員の方を希望します。

奇クへの進言十項

柴山秋夫

貴誌の編集方針に関して申し述べたく存じます。以下は一読者の希望であると共に、極めて有益な助言であると信じます。

一、真実を追求する事は、もとより必要なが、夢と明るさを失ってはならない。

二、例えば口絵、写真は必ず美少年、美少女（満十五、六才位の）でありたい。年令に関しては、種々の好みがあるに有るが、この年頃の者に対しては誰しも嫌らしさを感じないだろうから。

三、モデルを求めるのが難しければ、写真は廃して有能なる画家により絵画として表現すべきだ。第一、或る意味で言えば、平然カメラの前に立ってモデルとなる女なんか興覚めだ。到底そのような事に耐えられぬ可憐なる乙女を対象とするのこそサディズムの真髄ではなからうか。

四、肌着は着けて居る方が夢があとよい。フェチシストをも満足させる。色は絶対に白色。腋毛は

省略してはいけない。

五、記事も健康を旨とし、（所謂アブを私は決して不健康とは思わない。）血腥さを感じさせないようにする。

六、高級なる性心理雑誌として進むべきで、これにより当局の弾圧に対抗すべし。

七、即ち娯楽雑誌に陥ってはならない。

八、例えば赤線地域探訪記や名士遊興伝等を希望する向もあるが、断乎かような「遊び」の気分を排すべし。従って記事は真実を基とした告白、体験、感想等に重きを置き創作等はなるべく少いのがよい。

九、「遊び」の気分には富む中老の人の記事より真実を赤裸々に表現する若い世代の者の投稿を歓迎すべきだ。かような編集方針で進むなら、「奇ク」は後世にも特殊性心理の文獻として貴重なものとなるであらう。

十、読者の交際の仲介・印刷物以

外の物の販売等は邪道である。かゝる面を口実として当局より弾圧の手の伸びる事を恐れるものである。仮りにそういう事はないとしても「奇ク」は芸術性・学術性の香り高い雑誌として一路邁進して頂きたい。

進言への回答

一、明るさを失ってはいけないという意見には賛成だ。よし題材は暗いものを扱っても、明るく表現するのがいゝ、編集担任者の性格にもよるだろうが、明るさに過ぎたる方が、むしろ暗さに過ぎたるよりはいいだろう。

二、明るさや美しさは、必ずしも年少の人と限らないが、被虐女性モデルは許される範囲で若い方がいいゝかもしれない。

三、絵画、写真に限らず女学生とか未成年の女性を対象にすることは、つとめて遠慮することにしては、モデル嬢はむしろ平然とカメラの前に立って、可憐な乙女としての真に迫った演技をしてほしい、例えばスターの如くに。

四、肌着の巧妙な利用については研究している。色は一定のものにこだわる必要はない。腋毛は殊更省略することもないが、誇張する

理由もない。

五、一、で回答した通り、賛成である。

六、当局の忌避するが如き描写は必要でなく又する考えもない。従って弾圧、といったイヤな言葉は考えたくもない。

七、単なる娯楽雑誌は他に沢山ある。他誌が本誌の真似をしても、本誌は他誌の真似をしたくない。八、赤線地域探訪は他誌にいいものがある。告白や体験は勿論重視するが、創作も又本誌の内容に適したものは、これも又重要視するのが当然である。

九、生理的な年令は問わず、精神年令の若き人を対象として進んでいる。

十、貴下をはじめとして、読者の交際文通斡旋について、雑誌発行本来の使命を忘れて、一部の限られた者に奉仕するのは怪しからんという反対意見が非常に多かったが、これは飽くまで読者係のサイドワークとして許される範囲内でのサービスであり、勿論報酬は貰うわけでもなく弊害を認めれば、いつでも中止する。印刷物以外の物の販売については、拡張する意図はない。

（編集事務担当者）



一、小生奇譚クラブ二月特大号を初めて拝見、その魅力に圧倒されました。最も惹きつけられたのは「きものシリーズ「姑娘来了」」及び「ボクの責め方（令嬢浜江の巻）」です。絵も六二頁の柱にくくりつけられた姿は上品なエロでとても惹きつけられました。二、特に編集者にお願ひしますが、この様な作をもっと豊富に載せて戴きたい。尙着物姿で男のアンマさんにアンマをさせ、次第にセンジュアルになって行く女性のエロティックな描写等を折りまぜた挿絵の、すばらしい魅力的なポーズを入れた作を是非載せて欲しい。腰巻が黒色でぬられてあるものはとてもエロチックです。尙、きものシリーズで上品な人妻が下級な出入商人の巧みな誘惑に負けて姦通する……と云った、濃艶な場面等を描写した

作品が欲しい。奮発努力して願ひを開いて戴きたい。三、絵及びフォトでは都築峯子画の縛られた花嫁御寮（腰巻の女二題）がよい。腰巻は模様より真紅の表現がセンジュアルではないでしょうか。男性に抱きかゝえられている、或は誘惑されている等の面を煽情的に描いて欲しい。四、マゾフォトでは「三助にアンマさせる女王様」が魅力的である。今度はシユミーズ姿でアンマさせている図だとか、腰巻一枚で股のあたりをもまかせているフォトなど、充分意を用いて欲しい。五、これは特別にお願いするのですが、若い洋装の女の人が不用意な姿で河端あたりでつくばんで洗濯しているポーズ、特にシユミーズが乱れ、密着したブリーフ等がちらり覗かれるポーズ等を載せて欲しい。六、これは実際に見たポーズで今も忘れがたいが、二十六、七位の人妻が着物姿で、どこかアンチヤン風の逞ましい男が丁度女の腰部あたりを抱いて、高く子供を差し上げる様に差し上げ、女の背後から抱きあげているので女の前面は私にはまる見えの恰好だが、ひどく着物の前がはだけて緋色の腰巻が膝のあたりまで覗いて、仲々男も意地悪く下

へ降ろそうとはしない、そんな惱ましいポーズを見た事があるが、これが絵等に依って再現出来ないだろうか。七、次に和服姿で女の人自転車に乗っている図、必ず着物の前がはだけて赤い蹴出しがちらりとして見える。こんなポーズの絵をなやまして再現して戴けないものでしょうか。（S・Y生）

○ 謹啓、早速私の「鼻責めについての実験」を載せて戴き嬉しく思いました。鼻責めの写真や絵をどしどし載せて下さい。モデル嬢も致し方ないとおきらめて牛の鼻環をつけて貰って下さい、そうでないと実感が出ません。何分にも私の実験したことなので危険ではありませんが、あの太い鼻環をつけてやって下さい。もっとも太いのにする迄には一ヶ月はかかりますけれども……。近い中に「丸責め」の実験を発表させて戴きます。サジストの女性達は異性の大切なものを責める珍奇な方法なので喜ばれることと思えます。その様な女性の集いにも発表されれば効果は大きいと思えます。では貴誌の発展を祈ります。（古田吉郎）

二月特大号のマゾヒスチックフ

○ オトの「三助にアンマさせる女王様」は、ほのかとした感じの写真で大変良かったです。春日嬢伊吹嬢のコンビ写真も今迄のよりもずっと実感のある、そして見応えのあるものになって来ました。又、被虐者が抵抗している時は凄艶な意思表示も良いのですが、被虐者が完全に屈伏しましたら、顔を卒直にカメラに向けず、艶な笑顔で愛読者にその表情の有様が判るようにするとかどうですか？責められる方もマゾで苦痛が楽しくとも、抵抗、苦痛、観念、此の三つを生かして下さい。芝居気じみずね。それから伊吹さん緊縛集の右頁下の木刀責め写真、加虐者の足が伊吹さんの胸の細い所へかゝっていたら、尙一層効果的だったと思われましたが、狩井さんが縛って浣腸するとありましたが、十分もてあそんで疲れさせ、抵抗出来ないところを浣腸するのも楽しいと思えます。人によって好みが違うと思いますが、私は私としての感じたことを書いた迄で、今後、此のような情態を取り入れてフォトを作成して戴き度々お願い致します。（千葉、千原弘）

先日ふと書店に立寄りました処

貴誌二月号を発見致し、其の内容に大変啓蒙され早速購入拝読した次第であります。元来、キンゼイ報告男性篇等を読み、学問的にはソドミア、マゾ、サジ等、種々研究して居りましたが、情的に解決を与えてくれるものは貴誌のみと大変感謝して居ります。私自身の傾向としては、ソドミア、マゾ、サジ、浣腸と、尤も対象は少年に限定されますが、各方面に大変刺激を受けるものでありまして、愚考するにソドミアの方は程度の差はあれ、同一傾向ではないかと思えます。生れて以来二十八年、種々の精神的経過を経て参りました、体験は後便に譲りまして、二月号の読者通信の広島T・K様と文通の上、お互の体験を交換したいと思ひますので、何卒お手数ながら同封の書を御回送下さる様お願い申し上げます。尚読者通信による同好の方の連絡を計って下さる貴誌の御好意は、吾々にとって大変な福音であると同時に、貴誌発展の一助になるもの信じて疑いません。

(大分 M・I生)

○ 三月号有難うございました。私の送りました写真が大変よく出て居りました。そして奇クの写真頁

にちょっと異彩ある効果をあげているのを見て嬉しく思いました。今後心掛けて変った奇ク向きの写真を送ります。女レスリングの写真は既にもう珍しいものではなく、もっとよく撮れたポーズも構図も奇ク向きの写真が至る処に出て居りますが、考えようによつては奇クの扱う題材が時の動きについて次第に一般化して来たわけであり、面白いものです。本文で「Mへの手紙」(二俣志津子作)は実に面白いものでした。他の創作、非創作を問わず、この一文はまさに傑作の一語に尽きます。へたなフィクション顔色なしです。しかし、二俣志津子という人は全く何んと云うか、不思議な人ですね。私もゴウマンであり自惚れも強い方ですが、この人だけにはかなわないような気がします。文章も恐らく一番達者でしょう。殊に短い文章のうちに適格で明彩な描写をするのには全く感心してしまします。奇クの執筆陣の中では卓越した才筆です。全く奇クは不思議な人を見つけたものです。編集長は雑誌のためにも、彼女(どうやら本当に女性らしい)のためにも、彼女に立派な作品を書かせるべきです。長いものでも結構、無理にア

ブを挿入させないで彼女の書いたテーマを思う存分書かせるのです。奇クの作品の中から芥川賞が出たなんて、考えただけでも痛快ではありませんか。編集長としてはそれは一寸した道楽で、そんな暇はないと云われるかも知れませんが。大分二俣志津子さんを賞めてしまいましたが、こういう人を見つけたという事も私は奇クの一つの業績の一つであり、強味があると思うのです。やはり奇クの方針が人間性の真実というものに立脚しているからなので、ここから一步墮落したら生真面目な支持者は離れてしまします。と

○読者通信をお寄せ下さい
読者通信欄は孤独に悩む方々のこよなき慰めの場として、広く同好の士のため誌面を開放しております。本名其の他の秘密は固く守りますから、御安心の上、御遠慮なく、ドシドシとお寄せ下さい。

それから一つ提案。思いつき程度ですが、恐らく絵を送って来られる方が沢山あり、その殆んどが使用のものにならないでしようが、どうやら見られるという程度の絵をうんと縮尺して掲載し、それを晴雨氏までとはいかなくとも、滝れい子氏か栗原伸氏あたりに評をさせるのです。二頁ぐらいにギッシリ詰めたらポリウムのある面白い頁が出来るとは思いません。素人の描く絵はどうせ見られ

たものではないかもしれませんが、こういう絵を描く時は馬鹿に熱を入れて描くもので下手なりに妙に熱気のある絵が多いものです。例えば三月号を例にとれば色ペー

ジの(一八一頁)島田卓郎氏のよう。評は短評でよいのですから、例えば手のデッサンが狂っているとか表情が不自然だとか、足の形が良いとか、そんな程度でよいと思います。これにより読者と奇クが尙一層親密になると思ひます。このデフレ下に、堂々と堅実な歩み続ける奇クの方々に敬意を表します。(真木不二夫)

読者と共に歩む奇巧は、他誌を
 圧して斯界唯一の王座を確保され
 た事を読者の一人としておよろこ
 び申し上げます。一月号よりの目
 次裏川柳は大変結構です。今後も
 つづけて下さい。奇巧三月号は私
 にとって何よりも素晴らしいプレゼ
 ントです。一月、二月号は私には
 少し物足りなかった。三月号には
 片矢薫さん緑猛比古さんの力作有
 難う。みずしま・まもる、宝塚二
 三夫両氏の、今後の作品の発展が
 楽しみです。沖野美恵子さんの作
 品は尻切れトンボですが連絡つき
 ませんか、二十八年六月号の読者
 通信で沼津I生が、小坂多美枝さ
 んに特飲街に於ける私刑体験記執
 筆を希望されて居ましたが、これ
 は是非発表して下さい。又「女囚
 体験記」も続を執筆出来ますれば
 お願いします。沼田扶二世氏の作
 品も併せてお願い致します。長瀬
 昭子、四馬孝、飛田良二以上三氏
 の責面を誌上に発表して下さい。
 三月号菅原春夫氏の「悦虐ダイジ
 エスト」の設定提案に賛成致しま
 す。四月号の続・半公刑「大和撫
 子」に期待を抱き、奇巧今後の発
 展並に内容の充実を祈り筆をおき
 ます。
 (大阪、T・A生)

戸破貞子様。私宛の三月号の御
 通信はほんとに素適、嬉しくて嬉
 しくて、「わっ! すごいっ!」と
 大声で叫びましたわ。貴女の様
 方が居らっしゃるとは想像も出来
 ませんでしたの。ほんとに飛んで
 行ってでもお逢いしたい。そして
 二人だけで取組み合いましたよう
 ね。電気を暗くして真裸がよくな
 いかしら、私が負けて組み敷かれ
 た時は何んなひどいことをなすっ
 てもいいことよ。それこそK子み
 たいに顔の上に跨って太ももで首
 締められたってかまわない。でも
 私だって時には貴女に勝つことが
 あると思うわ。其の時はうんとい
 じめて上げるわね。こんなこと想
 像している、何だか体中がむず
 むずしてくるみたい。でもそれが
 出来ないのが残念だわ。あまり遠
 すぎてだめね。それにしても貴女
 は年に一度位って少ないね。もっ
 と思い切りジャンジャンおやりに
 なっちゃどう?友人は後から後か
 らドシドシ製造なすたらいいの
 よ。友情が絶ち切れない様にあん
 なことをしようたって、それは無
 理ね。私は年に四人か五人はある
 わ。そのかわりそれだけ新しく造
 らなくちゃあならないから、とて

も努力するの。貴女もぱりぱりお
 やりなさいよ。そして詳しいお話
 をおききたいわ。貴女も誌上に
 御発表にならない? そうして頂
 けたら私にとって「奇巧」の値う
 ちが十倍にも百倍にもなると思
 うの。ね、お願い! でなかったら
 私と直接文通しましょうよ、貴女
 の住所が分る方法ないかしら?
 貴女は男を相手になさりたいんで
 すってね。私は真平。男の身体は
 美しさがいいし(女に較べて)ロ
 マンチックでないからいいや。そ
 れに女に負かされる男はどうせマ
 ンで芝居なんですもの、考えただけ
 でいやらしいわ。でも男を相手に
 するんだったら、男のマンは案外
 多いんだから相手に不自由はしな
 いわね。私はこれからでも女ばか
 り、それも美しい女性ばかりを相
 手に選んで行くつもりなの。私結
 婚してこんなことをやめてしま
 い度いとも思うけど、結婚した
 らあんなこと出来ないって思う
 と、とても淋しい気持がしてい
 やだわ。又、お便り下さいね、
 では戸破貞子様、さようなら。
 (長瀬昭子)

毎月「ふおと・せくしゅん」
 を見るのが楽しみです。三月号
 も実に素晴らしい出来映えであつた
 のはうれしかった。先ず四馬氏の
 縛り絵は何時ものことながら僅か
 な縄で身動き出来ぬ感じが現れて
 居り、絵全体が何となくエキゾチ
 ックで好きです。今月は比較的マ
 ゴ男性の責め写真が多かつたのは
 非常に嬉しい。殊に男性の渾美二
 葉は赤白のマダラ紐を用いた風変
 りな眼隠し、猿轡には大変興味を
 ひかれ、マゴ傾向の私にとっては
 モデルの湖田氏が実にうらやまし
 い限りです。「責めが終って」も
 中富嬢のホツとした眼の表情に激
 しかった責めの名残りがうかゞわ
 れ、私の好きな女性の一人です。
 萩嬢の責められるポーズと表情は
 実に素晴らしく、月を追ってマゴ傾
 向を増してゆくのが想像され魅力
 的です。読者通信に女装して責め
 られるのを喜ぶといったマゴ傾向



の男性の投書がふえて来たことは同じ傾向の私としては実にうれしい限りです。時折、いろ／＼な空想をしながら一人紐で自縛して秘かによるこびに浸っている私ですが、二月号の読者通信を理解して下さる方とプレーしてみたいと念願しています。編集部で次のような連続写真を誌上に載せるか、或は手札型の分譲品とでもして下さる様お願いします。(1)、春日ルミ嬢のようなサド女性が男性を押えつけ、全裸にしてブラジャー、パンティを男につける。(2)、柱を後手の間に抱えるようにして縛り、足も柱にくくりつけた上、猿轡、眼隠しをして責める。男性は恐怖にさいなまれ悶える。(3)、こんどは股を開かせ柱を挟んで足首を縛り、両手は頭上高く柱にくくりつけて責めを行う。(4)、更に正面にはこのマゾ男を十字架にかけ、左右にはパンティかバタフライだけの女性を柱縛りにし、男を処刑している。そしてなるべく風変わりな眼隠し、猿轡を使って欲しい。尙大変恥しい姿ですが、同封の写真は私が自演し、セルフタイマーで撮ったものです。読者通信欄の片隅にでも載せて戴ければ幸甚です

(大阪、T・I生)

【サディズム通信】

私は以前から貴誌の愛読者で、若い女性の切腹や縛りの写真、画や記事等に大いに興味を覚えていたのですが、何月号かの読者通信で誰れかと云って居られました。矢によって射られる女の写真や画があれば、どんなに楽しい事だろうと思っております。西部劇では銃で応戦する白人がインディアンの射る矢につぎつぎと射殺されるシーンが随所に見受けられますが、殆ど男で、これが女となるとさすが女尊の国、検閲の関係からかめったになく、たま／＼そんな光景があってもせい／＼矢が突刺る箇所は腕か肩程度で、男の様に胸にブツリと矢羽をふるわせて突刺る矢……と云った所はめったになかったのですが、最近見たシネマスコープ映画「エジプト人」の中で太陽を神として崇める信者を兵士が大量虐殺するシーンがありまして。その中で二列に並んだ兵士達が射かける矢に次から次へと射殺される男女が、シネマスコープの大きな画面に拡がって行く様は相当地に迫力があり、特に主演者の妻に扮するジーン・シモンズが祈りより立上った所をブツリと胸に（

乳房より少し上部）矢を射込まれ白衣を血潮で染めながら多勢の死者の中で、夫に見守られながら死んでゆくシーンは印象的でした。然し、これとても矢はさすが乳房は避けておりました。それで思いついたのは一寸古い話ですが、邦画の「大仏開眼」（大映）です。この映画の中では野原におびき出された日高澄子の扮する女巫子が、岡譲二扮する大臣に裏切られて遠矢に射殺されるのですが、ヒューイと矢音も高く放たれた矢が、女巫子の胸深く突刺さる……。袖を蝶の羽にひるがえしながら倒れる女巫子の豊かな左乳房に深々と射込まれた矢……。苦しい息の中で引抜いた矢を右手に持ち、左手で傷口を押え、裏切られた怨みをかすかにつぶやきながら……。矢口の小さい血の斑点がみるみる大きく拡がって白衣を染めてゆき、やがて息絶える……。この光景も私の忘れられない映画の一駒です。以上とりとめのない映画の光景を記しましたが、この様に女性の乳房や腹部を射抜く矢といった様なアイデアを写真や画に、是非御採用下さいます様お願い致します。少し以前に「地獄変」用のもので貴誌の巻頭面に載って居りました

鬼に射られる裸女がありましたがこの様な画を希望致します。一寸した画でも同封しようかと思ったのですが、時間がありませんので略しました。（大阪、古川正生）

○ 奇号を逐って隆昌のことお慶び申し上げます。私は直接読者ではありませんが、もう既に一ヶ年以上愛読しているものです。ところで私は女の縛りに興味を持っています。その次が女の寝顔。そんな趣味から覗きますと、最近はどうも男の縛りが増して、私の希望以上に多いような気がします。どうか女の縛られた写真、絵をもっと増して頂きたいと思ひます。文として好きなものは、アリスの降伏、蜘蛛と蝶々、クリスチーナの受難等々です。その外に絵物語悦虐の家などは殊に好きです。こうしたものは仲々材料も少いことでしょうが、精々蒐集して掲載下さるよう切望致します。

（愛知、間口二郎）

○ 前略、私達に毎度深い感動を与えて下さる貴誌に深甚なる感謝を捧げます。つきましては、私の感想と希望を述べさせて頂きます。私の傾向は勿論、第一に「女体緊



縛」で、その次に「女装の縛り」です。貴誌には各種のアブノーマルな姿が網羅されてあって、それだけに文獻的には貴重なものですが、又一方、その為各方面にスペースが割かれてしまつて、「女体緊縛」の写真並に記事は随分少なくなつてしまつた事は残念です。貴誌の読者の大半は女性に対するサディズムの傾向を持ったものと思われまふので、その方面のものが他に押されて少くなつたことは貴誌の発展に対しても問題になるうかと思われまふ。「男性マゾ」などというのは、私の知っている範囲では余り興味を持つ人は居ません。もっと読者層の大勢を考えられて「女体緊縛美」を追求して下さい。又、変化を持たせる為



コスチュームを多用せられたり猿ぐつわのオンパレードの様なことを考えられたり、まだ「研究の余地がある」と思ひます。次に「映画の縛りシーン」は近頃、大変多くその記事が現れて誠に結構な事です。映画はその本質上、極めて動的で空想性に富み、特に女性読者を掴む為によい企画です。更に続けて下さる事をお願いすると共に、このシーンを誌上に再現して頂きたいと思ひます。スチール写真やフィルムを借り受けて、それを複写する様な事は出来ないのでしょうか。二月号二七二頁の「告知板」に伊藤晴雨氏が映画の資料を提供されたそうですが、伊藤先生がその撮影に立会われたのでしたら、その映画の荒筋と共に、そ

の時の体験談でも発表して頂きたいと思ひます。(これは編集部の方からもお願いして下さい)。次に「女装の縛り」の問題ですが、未だ一度もこれがグラビアに載らないのは不思議です。これは男性マゾとサドの両者共、或る程度の満足感を得る点でいふ企画ではないかと思ひます。勿論、この場合のモデルは相当な経験者であつて「男らしさ」を感じさせない事が必要です。和服、洋服、どちらでもいふです。その写真を実際に眼にすればどんな感じを受けるか分りませんが、「男性マゾ」の写真よりは遙かにいふと思ひます。同封しました写真は私自身のものですが、出来たら掲載して下さい。この様なゴツ／＼した男の匂のするものは駄目と思ひます。これは急いで何の仕度もせずセルフタイマーの前に座つたので不完全です。以上無理かも知れませんがお願い致します。

(東京、東谷君男)

○ 小生御誌の長年の愛読者ですが二月号のサディズム通信で東京のK様の所感を見まして、本当に私の求めて居ります奴隷売買の礼讃者を発見、生来の筆不精もかえり

みずお便りする次第です。十一月号では宮脇礼子様も奴隷売買の絵や写真等を載せて下さる様お願いして居るようですが、小生もそれには大賛成です。御誌は読者の考えをすぐ反映してくれるとの事なので、敢て御誌に奴隷売買の絵又は写真を載せて下さる様お願い致します。同封の写真(1)(2)は「スーダンの岩」にて砂漠の中で奴隷商人の休んで居る間、横木に渡した丸太に吊し下げられた女奴隷が苦しうに喘いで居る所。(3)(4)は「砂漠の鷹」で略奪された女が奴隷市場で売買されて居る所です。小生は奴隷市場の出でくる映画が来る時、必ず愛機で撮影する事にして居りますが、光量不足の映画の場面を撮影するのは並大抵の苦勞ではありません。この時もこの映画のかゝつて居る間は、殆んど毎日映画撮影に出かけました。フィルムもセミで三、四本撮りました。余り良い出来のものではありませんが御送付致します。他に種々なる場面のもの及び引伸したのも等あります。どうぞ奴隷市場の写真画なれば四馬孝先生にお願い出来れば幸甚の至りと存じます。

(M・A生)

私はサディズム通信欄を拝見致しまして、此の世の無上の喜びを感じて居ります。昨年も貴誌に投稿致しましたのですが、本当にアクロバットの事が取上げられなかった事を、国島氏と共に残念でたまりませんでした。どうか此れから毎月アクロバットの写真とそれに関する記事を書いて下さらん事を御願ひ致します。それから通信欄で国島氏の云って居られる昨年の毎日グラフのアクロバットの練習所の事と、アサヒ芸能新聞の外人少女のアクロバットの写真の事です。が、何月号かお知らせ願えたら幸々と思つて居ります。

(兵庫、H・T生)

二十九年の七月号に載っておりまして外国文獻の服装利用という外国婦人の手記の中にあつた様な素晴らしいアクロバットをつけた写真を載せて下さい。(ストッキングと六時のハイヒールをはかせて)二月号に載っています外国婦人のアクロバット姿のようなものですがあのように寝て居らず、立って居る姿をお願いします。

(横浜市、H生)

絵と写真のアイデア。私は奇巧の愛読者です。同好者の待望の雑誌奇巧の誕生、そして毎号確実に発行されることはまことに喜ばしい事であります。この雑誌は同好者の慰安には絶対必要であり、今後の発展を祈ります。私はこの種の趣味の他にカメラも愛好して居りますので、この方面からの特に気づいた事を申し上げます。最近色彩フィルムがネガで二枚組合せビュアーでのぞく事が流行し、フランスモード、ドイツモード、日本モードと続々発売されております。ビュアーは簡単な紙製で折たみみのものもあり、平面写真をとって居られるマニアの方でも、これを緊縛フォトに利用すると、又一段と新鮮味も加わるのではないかと思います。又女優の緊縛フォトはマニアの垂涎の的ですが、これも合せて立体色彩フォトとして発売されん事を望みます。

(ロマンチックサディ狂)

一昨年の一月号以来の貴誌の愛読者の一人ですが、サド、マゾからフェチ、ソドミア、スカトロジイの果て迄、広い範囲にアブの世界を展開する貴誌の内容に、常に

興味と期待を寄せ、とくにサディズムに関する記事を楽ししく読ましていたゞいております。貴誌の愛読者中のサジストの殆ど大部分を占めていると思われる空想的サジスト(Idealer Sadism)の一人として、昨今の貴誌中サドに関する記事が余りにもサドに於ける行為上のゲームに流れすぎ、平凡で吾々空想的サジストの欲望をサブリーメーションするには、はなはだ弱すぎるので、

○新人挿絵画家を求む

雑誌の口絵、挿絵につき関心をお持ちの方々は、男女に限らず作品、略歴をお寄せ下さい。見込みのある方は誌上で紹介の上、本誌挿絵陣の一員として、活躍して頂きます。

愛好しております。尚、貴誌読者の投書のうちにオシメに関する記事載せる様に願う読者の声をしなばしは拝見致しますが、私としてもオシメを嫌がる女性に当る様な場合、フェチというよりサド的な興味に多く引かれ、今後オシメに関する記事やフォトをどしどし載せて下さる様、編集諸子の勇断を期待しております。最後に一愛読者として、又同じ出版屋の一人として、擬似赤本とは全く異つた出版界でも特異ある高水準の貴誌が、益々隆盛に向われんとを心からお祈りすると共に、編集諸子の勇氣を敬愛し、今後の御奮闘を期待する次第です。(東京、草加 茂)

現代でも戦争と共に行われた残酷行為の中に見られる様な、パブリックな、それだけにグロに近い強烈なサジズムや又サド的行為、相手のマゾを誘発する様なサドやマゾが直結された場合より、サドなラサド一方だけが拒否する相手を征服する様な場合にのみ昇華されるサジズムや、女死刑囚が死刑執行日を不安のうちに待ち受ける様な精神的サジズム等を高く評価し

三月号面白く読みました。貴誌最近の傾向としてソドミア的、或は男性マゾ的のものが非常に多く期待外れの感を味わわれていますが、三月号は小生の好みである女が女を責める記事多く満足しました。特に緑川純子さんの「寄宿舎での体験」に興味がありました

小生ソドミ的、或は男性マゾ的のものを廃止してしまえというのではありませんが、矢張り女が責められる記事を主として編集してくることを望みます。前者を好む者は眼にはつきやすいかも知れないが、量としては少いものと信ずるものであります。

(東京、K・K生)

【マゾヒズム通信】

私の惱ましい変態遊戯は今でも続いていますわ。奇巧の読者の方が私の事を今以て忘れずに居て下さると思うと、うず／＼致します。私の今の拷問用のけだものは三吉と安の二匹だけ。でも時々別の女を探してきて四人で集団プレーを楽しんだりしています。私が大共相手に使う言葉を一寸御紹介致しますよう。「やい、雄ぶため!」「このでぶやろう!」「ど助平!」「女王様の足の先を舐めやがれ!」「よくも女王様を馬鹿にしたな!やろう!たゞ殺してやる」これが最近の私の趣味で、けだものを裸にして勿論後手に縛り上げ顔には口紅や眉墨で如何にもけだの様に化粧してやり、猿まわしよろしく尻を振らせて淫らな踊りをさせるのです。びしっぴしっ

鞭の連打のもとに……。今三吉は南の方に出張中です。マゾの男と女がほしい。男はでっぶり肥った中年のお金持の紳士。この様に社会的にすぐれた男を恥しめ、虐待し、ひいひい苦しめて思いのままにしてこそ、私は満足するのであります。私の名は森山美歌。男や女を苦しめ恥しめて喜ぶ性の権化のサディスト。

(森山美歌)

前略、ふとした折に貴誌を入手致しました。まことに他に類例を見ない素晴らしい内容に驚き致しました。尙又、嬉しい事は貴誌編集部の方針が大変真面目である事でした。勿論、御担当各氏の大きい努力と、御研究の結果に感銘致している者で御座居ます。今後共私達同好の爲に、益々御研鑽御発展の様祈って止みません。過日、十二月号一冊入手一見して感激した様に、私は瞬く間に読み終りました。あゝ何んて素晴らしい本である。正に夢幻の花園にさまよう心地でした。いや夢ではない現実の花園です。今日迄幾度渴望したかも知れぬ私の楽しい花園でした。もっと早く入手せば淋しい思いもせず幸せであつたものと聊か悔いられた次第です。然し、この

一冊で半ば私の希望は満されたようです。今後これ程日々が楽しいかも知れません。私のイメージが実現するかも知れないからです。希望の花園の扉は自由に開かれました。私は勇気と希望をもって蝶の如く蜜を求めて行きたいと存じます。新年号掲載の山田美知子様の「夫婦の倒錯遊戯」を真先に、非常なる感銘で拝読させて頂きました。御両人のイメージを最初からあのレベルまで自然の儘に進められた点、相当な日数と手段方法等大変努力された事と存じます。特に扮装用具にはよく御研究されておられる点、実に感服致しました。又、劇中のお互いの「セリフ」等大変うつくしく興味を感ぜられました。読んで行く中に私自身が被虐者の主人公になつていく様で大変楽しいものでした。単なるプレイを更に美術化されていく主体を通じて少しも不自然さがなく、凄壮な幾多の場面は迫真力があり、其の内にもロマンチックな雰囲気を感じられ、読んでいて非常にいと存じました。唯少し物足りなかつた点は最後の組打ちの筋で、前演の通り詳しくお互いのセリフを入れて迫真力を出し、差支えのある最後の場面に近い場面のみを

オミットする様にせば、尙一層興味があつたらうと存じました。これは私の慾ばりかも知れませんが……。今後共素晴らしいプレイを御考案されましたら何卒御発表下さい。前述の如き劇化された手記等最も楽しいものですが、尙又其の他のプレイ等の手記も今後共どし／＼御掲載の程御願ひ致します。私はマゾヒストとして徹底的に女性から加虐される事が好きですが凄壮な中にも、ロマンチズムの漂つたプレイを期待致しております。尙、読者中の女性の方と御文通致したく思います。

(平山春夫)

小生三年程前から奇巧の愛読者ですが、このところ森山美歌様、乗杉貴代子様等の女性サジストの方の御投稿が見受けられませんので、いさゝか失望していたのでございませうが、長瀬昭子様の読者通信、白木近子様の御投稿、更に又三月号の読者通信に戸破貞子様等次々に名乗りをあげられた壮観さは望外の喜びでございました。殊に戸破様は長瀬様、白木様が女性にのみしか興味を持たれないと言われるのに反し、吾々男性に馬乗りになれたらどんなに素晴らしいだ

ろうとおっしゃっている点、小生の様なマゾヒストにとりまして、奇クに又新しい女王様を見出した喜びに浸っているものでございませう。小生は昨年春大学を出まして現在母校の建築関係の仕事をしてゐる者ですが、人知れずマゾヒスティックな欲望を燃しては悩んでゐるものです。殊に女性の方に馬乗りになって頂きたいと見果てぬ夢を追う愚かな男です。戸破様の読者通信を拝見致しまして、若し私の様な者でよろしければ、御便りだけでも結構でございます。哀れな奴隷の上に女王様として君臨して下さる様伏して御願ひ申し上げます。

(東京 直木昭)

○ 二十七年十月号以降愛読の四十才の男子、公務員であります。青年期から腰巻に興味を持ち、段々と女装マニアとなりました。尙、緊縛にも興味があります。新年号の大坂K・S生様の気持は全く私も同様です。重田氏、岸本氏の記事、変装写真の記事、その他読者通信に興味深く読んでいます。妻は私の気持を理解出来ないもので、一度も私の気持が満されたことはありません。このまゝ老年になるのは残念です。理解ある三十才前

後の女性と交際出来たらどんなに愉快だろうと思います。同性を慕う気持はありません。洋装より和装を望みます。緊縛は女装でなければ興味ありません。次の様な記事の掲載を望みます。絵によつて、(1)先ず男子を画き、(2)この男子が洋服を脱ぎ猿又をズロースに代える。(3)腰巻肌着となる。(4)長襦袢伊達巻姿。(5)袂の長い着物を着る。(6)巾広の帯を締める。(7)化粧して髪をつけて完全に女になる。(8)老婦人に緊縛せられる。(9)柱に縛られたり、吊り責めにされる。これを逐次画き簡単な説明をつける。女装の過程は婦人雑誌等にある着付の要領。この様な絵の載る事を期待して居ります。

(静岡 I O M 生)

○ 今日二月号をやっと購入出来ました。当地方は何しろ田舎の事とてめったに書店には現れず、たま／＼一冊か二冊出たなと思つてもぼや／＼して二、三日遅れたらそれこそ大変、誰が買うのか？忽ちにして姿が消えてしまします。読者通信欄に何んと先日貴誌へ投書したのが掲載されてあり、最後のネームも(広島T・K生)としてくれてある事が判かり、誠に嬉し

くなつてしまいました。お恥しいながら、未だ且って二十数年間、本とか新聞とか広告等に載せられた事のなかつた私は、何んだか「奇ク」の読者であるぞ……と自覚出来るような気がし、無精に嬉しかつた。尚毎月出る奇クの内容は新しく、読む毎に増々充実して居るのには編集者各位及び諸先生、モデルの方々、又告白体験をお書きになられる諸兄の、御努力下さる賜と深く感謝致します。都築峯子先生の画「腰巻の女」「花嫁御

手紙の転送について

「読者通信欄」は本来、文通幹旋を目的としているのではありませんが、手紙の転送を希望される方がありますので、読者係のサイド・ワークとして支障なき限り極力幹旋の労をとって参っております。最近再び希望者が漸増しておりますので整理の都合上、左記規定によつて下さるようお願いいたします。

- 一、手紙の転送は、あくまで読者係のサービスであつて報酬は頂けません。
- 二、切手貼布の白封筒に通信を入れ、開封のまゝ更に封筒に
- 三、先方の住所が判明し、受信を拒絶されない限りつとめて転送の労をとります。
- 四、手紙転送によつて生じた一切の事項については読者係としての責任は負いかねます故迷惑のかゝらぬよう願います
- 五、手紙転送によつて、支障やトラブルが生ずる恐れがある
- 六、右の規定によらないものは御取扱いいたしかねます。

(読者係)

以てその通りで、全然嘘のない文章です。其の世界に行つて来た人そのみの知る所です。かく云う私もその経験者で、最初のうちはアンコとして大変可愛がられて来たけれど、三年程後には逆にカッパと成つてしまいました。私も文才があるなら体験記でも書いて皆様に聞いて戴くんだけれど、誠に残念です。(広島 T・K生)

初めてお便り差上げます。私満二十八才、身長五尺五寸、逞ましき女体の所有者です。日本人はなれのしたきつい顔立ちで、お尻が大きいので「熊ん蜂」という仇名をつけられてしまいました。独身ですが売残りではございません。収入も大抵の男共にはひけを取らぬ位で、女中を置いて気儘に暮しております。亭主関白の日本の家庭なんて御免ですわ。それに今の仕事はとっても趣味に叶つてますのよ。大分以前からこっそりと奇譚クラブを読んでいますけど、読むのはごく一部分だけ、その代り繰返し繰返し読んでいます。二月号の白木近子さんの一文は、大きなお尻で顔を押しつぶしたり、太股で頸筋をしめつけるあたり、私の趣味にかなつていて気に入ります。

した。尤も私にとっては大抵の男が劣者、弱者に見えますけれど……小沼さんや湖田さんとなら仲良しになれるつもり、だけど春日さんより大分図体が大きいから、二人共本当にへばっちゃう心配があるわね。それにしてもマゾフトだなんて、男性中心の嫌な云い方だわ。サドフォトじゃないの、少くとも私にとってはホホ……はつきり申上げる訳には参りませんけど、或場合に、或人達をビシ／＼鞭でひっぱたい人も人が不思議がらない仕事をしていきます。とっても楽しくて、でもむずかしい顔をしながらやらなければならないのが一寸辛いわ。サジスチンなんて生れつきのものなんでしょう。小学校五年生の頃、八つになる徒弟と喧嘩して投げ飛ばし、顔の上に馬乗りになつておならをしたら母に見つかつて、さんざん叱られた事がありましてよ。その後も人知れずいろ／＼とね、でもちつとも問題を起ささないから偉いでしょう、フム。神戸の石本さんに逢えたらと思ひますわ、でも私のブローズ大き過ぎてとても貴方の口の中へ入らないんじゃないかしら。マゾ通信の男性を皆な集めて、私流のやり方で片っぱしからギニギニ云

わせて見たいけど、苦悶の表情を想像するだけでも嬉しくなっちゃってゾク／＼するわよ。では又お便りしましょう。詳しい住所は未だお知らせ致しません、悪しからず。そのうち誰か紹介して頂く氣になつたらお知らせします。誌上に石本さん達のお便りを楽しみに待っています。

(別府 荒井貞子)

【浣腸通信】

手札型の浴室の浣腸フォト嬉しく拝見致しました。何よりも嬉しかった事は硝子製浣腸器ばかりだった事です。改めて編集部にお願い致し度く、又是非共次の点に於てフォト作成上御配慮願ひ度いと存じます。(1)フォト全部に付いて浣腸の雰囲気(アトモスフィア)が出て居ないのが残念です。浣腸する点に於て浣腸器の持つ手が体裁的に思われ、浣腸する実感が欠けて居ると思うのです。勿論難解なるフォトに付きモデル嬢の要求もあつての事と存じます。(2)浣腸器に液が入つてない事、実際に浣腸を行えばこれに越したる事はありますが、例え浣腸は行わないにしても、液が入つて居りま

したら尙実感があると存じます。作成不能とまでされて居りました、御尽力に依つて吾々を慰め、又要求を充たして下さった事に對して暴言かと存じますが、もっと実感あるフォトが育見の本とか看護の本に描かれて居る様に、今少し突込んだフォトを作成して下さい。(3)数多くの同好者も願つて居る様に、全裸よりも衣服をまとつたモデル嬢のフォトを是非お願い致し度いものです。新妻遊戯冬姿の浣腸の図の様に作成して欲しいものです。(4)どの場合に於ても浣腸を行う際、浣腸器を持つ手のみというのは不可解でなりません。必ずや臀部を押えろとか双丘を開く、又出来得れば両足を支えるかど本當じゃないでしょう。か。全モデル嬢の表情に於ても、浣腸に對する恥しいとか苦痛に依る表情があると思うのです。いくら浣腸に願望を持つていてもと存じます。この点大いに汲みとつていたゞきまして作成して欲しいと思ひます。私の希望するアイデアは、自分自身で浣腸を行うフォトなんかはどうでしょう。仰臥して浣腸器を挿入して居る様なフォト(布団の上が最も効果的)又は同じく布団の上で横臥して浣腸をし

代理部月報

(大好評目下分譲中)

◎萩千恵子嬢悦虐集◎

手札型 五枚一組 三百円

◎浣腸シリーズ五態◎

キヤビネ版五枚一組 五百円

◎連続縛り「強盗」◎

キヤビネ版五枚一組 五百円

【今月の新版】

◎禪美と緊縛◎

手札型 四枚一組 三百円

禪立姿正面二枚、禪中腰一枚、禪緊縛一枚(モデル、湖田平雄)

◎マゾ・フオト◎

「尻の下に敷く」

キヤビネ版三枚一組 三百円

ルミ嬢の豊臀に押しひしがれて、うごめくマゾ・ボーイ、咽喉首を太股で締められる、頭をお尻で押しつぶされる、片手をねじ上げられて、どっかとお尻が背中の中にしかゝってくる。何れもマゾヒスト垂涎のマゾフオトの決定版。

◎アクロバット五態◎

手札型 五枚一組 三百円

◎浴室での浣腸五態◎

手札型 五枚一組 三百円

◎浅野末乃嬢悦虐集◎

手札型 五枚一組 三百円

◎バンド着用の縛り◎

手札型 五枚一組 三百円

◎裸女緊縛フオト◎

二女連縛晒責

キヤビネ版二枚一組 三百円

二人の美少女を柱に正面のまゝ縛りつけて晒ものにする。(モデル中富綾子嬢外一名)

◎浣腸フオト◎

漏斗による浣腸

キヤビネ版三枚一組 三百円

施術者、春日嬢。被術者、伊吹嬢のコンビによる全く素晴らしい異色ある浣腸フオト、十数態の中から特に秀抜なものを選んで提供

◎萩嬢ストリップ縛り◎

キヤビネ版三枚一組 三百円

均整のとれた優美な姿態が生々しい緊迫力をもつてその美しさを皆様に訴える緊縛フオト。

て居る処、しゃがんで浣腸している処等変って面白いと存じます。

(S・A生)

○
浣腸に対する憧憬と申しましたよ
うか、私は三月号の田村氏と同じ
様に、受動者をいじめて楽しむの
ではなく、浣腸そのものを愛好す
るものです。私が始めて浣腸され
たのはある手術の前でした。私は
何気なく教えられた室に入りまし
た。すると「ちよっと」と云って
大柄な看護婦が私の前に立ち塞
ました。しかし、すでに私は壁際
の寝台の上に向うむいて横臥して
いる赤い浴衣と、その裾から露わ
に投げ出されている白いものを見
てしまいました。別に私は病人の
事ですし何の感情も起きず、その
女の寝ていた寝台に云われる通り
の体位をとりました。看護婦の手
で浴衣の裾をまくられました。そ
の時私は堪え難い様な快感をおぼ
えました。次の瞬間、すうっと体
内に入り込む冷い液体、私はこの
時、浣腸に対する憧憬をはっきり
意識したのでした。それから数ヶ
月して、又別の医院で浣腸されて
いる婦人患者を偶然見て、いよい
よ自分の偏向を知りました。その
時の患者は中年の婦人でしたが、

立ったまま体をやゝ前に倒した姿
勢でした。その時は丁度診察室が
改築中で狭い室でベッドが持込め
ないので、患者にその様なポーズ
をとらせたのだと思います。浣腸
は単に相手を苦しめる(陰の花)
だけでなく、相手のポーズ、感情
からの反射する享楽をたのしみ、
相手に排便の快や被浣腸の楽しみ
を与えるものだと思います。この
点自分で自分に浣腸するのは手淫
的なものではないでしょうか。他
人(女)を浣腸した経験は三回程
ありますが、私の好きな浣腸ポ
ーズを挙げてみます。(1)仰臥させ両
足を組ませ手で各つま先を握らせ
る。(2)仰臥で腰の下に枕を入れ太
ももを両足で抱せる。(3)相撲の仕
切型。(4)立小便型(女)等で、横
臥位は好みません。花村、木村、
緑川、田村の諸先輩方も好きなポ
ーズを発表して下さい。(浣腸生)

【ソドミア通信】

読者通信にお便りする様になっ
てから、急に同好の友を得て全く
欲びにたえません。こんなにも多
くの友あるを知り再び筆をとりま
した。先ず何と云っても二月号の

禪姿による緊縛写真です。全身でなく少々不満でしたが、三月号では完全に禪マニアにとっては夢の実現でした。最近、記事と共に毎号こうした禪姿による緊縛写真が載る様になり、「奇ク」の読者直結の感を再認し、編集者の皆様に心から敬意を表します。十二月号でも述べましたが、僕は白の六尺禪愛用者で、寒さを我慢して素裸に禪を締め床に入り、きりりと締った臀部や覆れた部分の盛り上りを愛撫しつつ楽しい幻想に浸ります。今夜は家族不在、一人で寝ていたら泥棒に入られ、禪一本のまゝ高手小手に縛り上げられ、猿ぐつわまではめられて蹴ころがされてしまった等と、絵物語にでもよさそうに思います。禪姿のアイディアとして田舎の中学校での身体検査風景や、水泳準備中の生徒達、又は禪姿のまゝ両手を吊されていゝ若者等如何ですか、柏山多津夫様の写真は素晴らしいですね。埼玉のF・T生様、御交際願望すると共に、お便りお待ち致します。映画「潮騒」は僕も五回見ました。退ました新治少年の禪美姿を見る度に素晴らしいに、引きつけられました。編集部の皆様。今後共に禪マニアの夢を一つ一つ実現して下さい。

います様、お願い致し筆を置きま
す。
(名古屋 K・Y生)

【切 腹 通 信】

私は一昨年から御誌の切腹記事を愛読致して居ります。それは私自身が昭和二十年に〇〇で敵軍に上陸され、三人の友達と自決をはかって刀を腹に突立てた時、爆風のショックで気絶して命を取止めたという、奇蹟のような過去をもつて居るためです。他の友が息を引取る迄はつきりとは見て居りません。が、噴き出す血と腸を押えて苦しむ友の姿がちらっと目にうつりましたのを今も忘れません。それにつけても残念なことは、時々通信にも見受けるのですけれど女の身で肌脱ぎになって腸が出る程に引廻す姿を、見苦しいとか切腹の作法にかなわぬとか云って非難されることとでございます。私共は中康様、瀬川様などのように学問もなく、本当の切腹はどうやってするやら何一つ知らなかったのでございます。それでも敵の砲弾が飛び硝煙と火災にとりまかれた中では、せめて腹かき切って最期を飾りたい一心で、夢中で双肌脱ぐのもどかし、刀を力一杯突立て引廻したのでございます。僅

實の見世物百種の内

口絵 指 人 形 伊藤晴雨

「北海道、鮭(すけそ)港ひいきより」と記したふんどし旗や彩旗が寒風にはためいて、神田明神の年の市、飾や宮師や羽子板店の中にある掛小屋、表看板は岩見重太郎の狒々退治やら宮本無三四(?)のうわばみ退治などが極めて旧式な鉄線描法で描かれている、見世物小屋へ入ったのは大正三年頃であつた。

女が縛られて、割竹で力任せに打たれる、女の首がハズミで抜けて見物席へ飛んだりするのは珍らしくない、うわばみの胴を力一ぱ

かの距離を逃げ走るのに手足が飛び散って居るのを見、砂塵をあげて真黒になる中で、どうして心静かな切腹が出来ましょうか。その環境になつてお考え下さればきつとお分りいたゞけると存じます。前々より田谷様の記事には何かしら心打たれて居りましたが、特に「女性切腹断想」で、戦時の切腹と平時の切腹をはっきりと区別して下さいまして、本当にしみじみうれしく存じました。私共の他にも砲弾でめっちゃ／＼になった家の

いなぐる、女の責場も亦同様で、女の顔にヒビが入っているのは顔を打つからである。割竹は凡三尺以上あつて、人形を使う男と女を打つ男とは別人である、芸題はいゝ加減なもので、女の髪の毛が割竹にからまるのを無理に引っ張るので、私の見た時は人形の片髪が毛がむしり取られた。それ程乱暴な人形で、恐らく漁夫達のやる郷土人形であろうかと思われる、宮本武蔵の試合にしても力一ぱい叩き合うので人形が二つに割れる事があるという。此見世物は其時限り姿を消したが、私は今でも、もう一度こんな野蛮な見世物を見たいと思つてゐる。

台所の隅で、若い娘さんが丸裸のまま着物を着る間もなく、出刃をぬれ手拭で巻いて切腹して居たと云うことを後で伺いました。逃げ走った邦人が沢山岸壁で一斉射撃で蜂の巣のようになつたと云うことですが、それに比べればどんなにか幸福な最期かと存じます。近頃は切腹記事が少くなつて淋しく存じます。特に田谷様の記事を是非拝見致したく存じます。

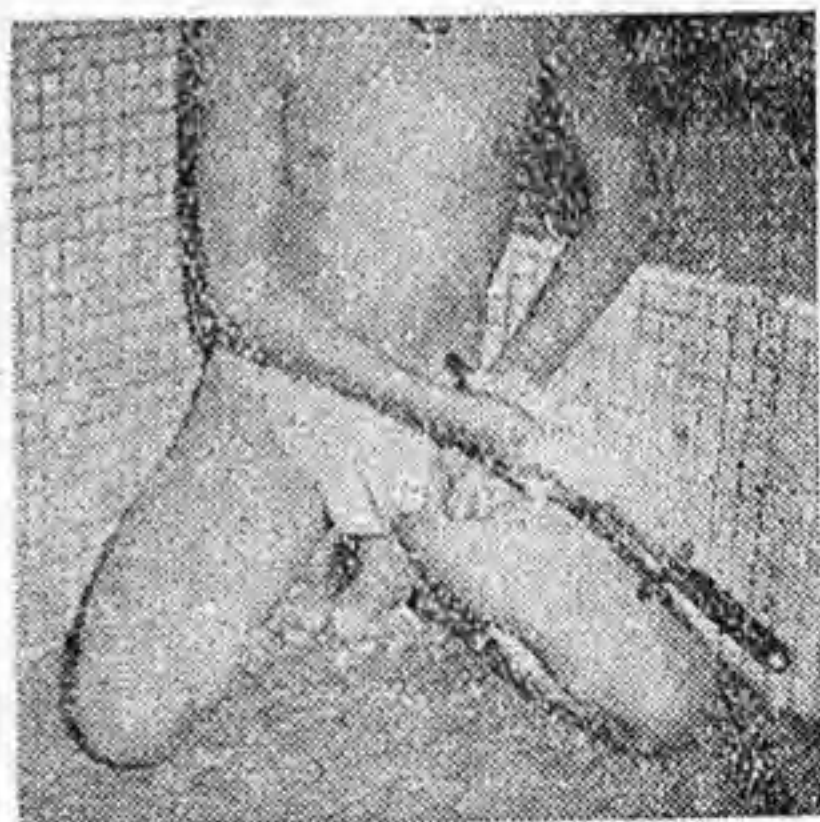
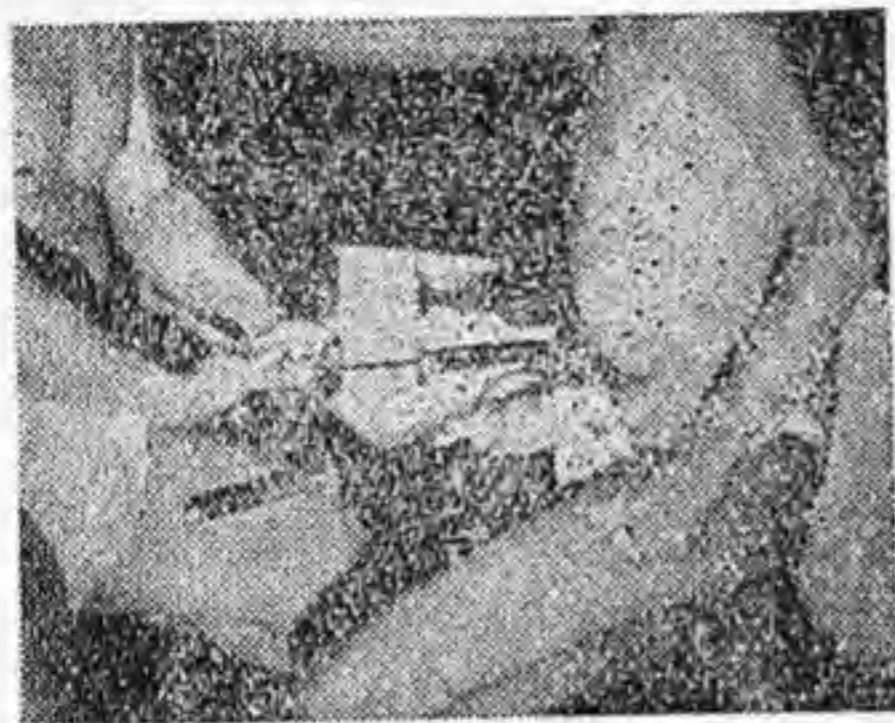
(栃木 原月田鶴子)

○ 一日千秋の思いで待ちこがれた三月号本日入手致しましたが、内容に目を通して、実はがっかりです。というのは、小生大の切腹マニヤなので、二月号に引続き画、文共に少々期待が多かっただけに……。例により川合様のは実にすばらしい。何時もながらの着想にはたゞ驚きの外はない。切腹姿態としてやはり現代的の望ましく(女学生の肌脱ぎパンティ姿)是非お願い致します。尙三月号切腹通信にもある様に(東京木村むつみ様)現代的切腹画帖を実現して頂きたいものです。勝手な申し分ですが、マニヤの一人としてお願い致します。

(名古屋 縦井夕彦)

○ 三月号切腹通信の兵頭庫一様、木村むつみ様、家田潔様、「女性切腹画帖」に御賛同下さって感謝致します。木村むつみ様、貴方も一月号向井芙佐子様の記事に賛意を示していただけるのを知って、大変嬉しくなりました。(一月号二月号の切腹通信、ローカル・レポートにおいて、私も向井芙佐子様の記事に対する同感を発表しているのを御存じのことと思います)

家田潔様、貴方の御提唱になる女性集団切腹(女の白虎隊、幕末会津の娘子軍、西郷一家の女性の自刃をテーマにした、集団女性切腹の作品並びに画)には私も同感です。亀岡絳七郎先生の「女腹切八景」以来、女腹切の単独物がだいぶ続いておりますので、これは絶好のテーマと思いますが、編集部の方達は、御意見如何なんでしょう。瀬川泰子様、賤機礼津子様、三宮浩生様、愛川晃子様、等女性切腹物のベテランの方達の御名前が、このところ全然本文中にも、切腹通信上にも全然見えませんが淋しいことです。もっと前の様に活躍して下さる様に切望致しております。どうぞ、今一度ペンをお



とりになって下さい。それから、かくれたる女性切腹ファンの方々貴方達のヒミツは編集部が必ず守って下さることを信じて、どしどし御意見を発表して下さい。そうして僕達にあたえられたこの誌面で、大いに親交をあたえようようではありませんか。

(東京 津島比呂史)

○ 兎島氏を始めとする男性切腹マニアの方々及び少年の渾美を夢見る山口氏、K・Y氏、T・M氏、S・K氏、M・T氏外多数の読者にお見せ致し度く、無理に無理を重ねて撮った作品です。時間もななく、増して始めての試みとてボーイズも何もあったものではありません。でも私の夢がたとえわずかで

も、此処に出ているので満足でした。若し此の写真の中のどれか誌上に載る様でしたら、私は張切ってより以上の雰囲気を出さるべく努力致す次第でいます。(山田一郎)

【フエチ通信】

二月号拝見、三人の腰巻女は面白く読みました。きものシリーズは、毎月とても期待して居り、れい子先生の挿絵と共に楽しみの一つです。グラビアのフエチシストの頁に、是非女性の腰巻の各種を載せて貰いたく思っています。ズロースも物干に干してあるところの図は私にとって尙一層心をゆするものですが、他の人々の希望もある事でしようから適当にお願い致します。その中に私が描いた干してあるお腰や其の他の絵を送ろうかと思っております。カラーにしてはつきりと写真が出れば、どんなにうれしい事でしよう。それから物干の責めのアイデアはよく出来ていました。出来るならあの様なポーズでお腰と男の下帯を竿にかけてもらいたかったです。(大阪 福本時三)

奇譚クラブ五月特大号豫告(定価百四十円)

本月号では三月号誌上で予告したものを忠実に掲載するだけでも誌面が足りない有様で、課題原稿募集以来、本月では最も多くの貴重な多数の投稿を頂きましたのに涙をのんで割愛しなければならなかったのは全く残念でした。それと共に最近の殊の外「読者通信」の投稿が多く、本誌全部を使っても載せきれない程の量でありますので、これも多くは翌月廻しとせざるを得ない実情でありました。さて、次号五月特大号であります。が、懸賞入選の原稿も出来るだけ早く御紹介したいと思っております。すが、常連の方々の、幽囚十ヶ月(春田一郎)ボクの責め方(宝塚二三夫)手帖(沼正三)きものシリーズ(ベス単行脚)血染の毛綱(伊藤晴雨)明治年間の新聞覚え書(吾妻新)残酷なる女性達(森本愛造)倒錯の英雄織田信長(笠置俊郎)等々にて相当の誌面を必要としますので、次号では、白面鬼(竹谷十三)奈落の欲情(沢井和雄)悪癖(榎本利子)汗について(みずしま・まもる)の四篇にとどめ、つとめて清新な原稿に門戸をひらきたいと思ひます。すべ

ての読者にひろく発言の機会を与えるということが、言論の自由の大原則であると信じております。現在の新聞、雑誌は一部の極く限られた人達にとつては、自由であつても一般大衆は只押しつけられるだけで、いさゝかも自由ではないのです。本誌では読者の雑誌として、その御意向を直接編集面に反映させるばかりでなく、誌面そのものも開放してゆきます。

私の体験記(長瀬昭子)続々女性切腹断想(田谷敬生)たのしむべしアブセックス(藤見郁)「呪い塚」縁起(畔野当磨)性への一考察(二俣志津子)秘められた日本人虐殺事件(二木良雄)縛り絵について(鳴海文雄)映画随想(河村操)アブホート談義(狩井麗作)継子いじめ(大村光子)等々の投稿作品に加えて、懸賞告白と手記と体験の入選作、課題原稿の応募作品中の優秀作を誌面の許す限り掲載します。尚、吾妻新氏から「きいたふう」(四十枚)の貴重な御寄稿があり、巻頭論文としては林弓志雄氏が「自らの問題として」を寄せられました。どうか次号も御期待下さい。

○ 先日代理部より注文の写真四組を早速送って下さって有難く思っています。中でも「腰巻」の写真は萩千恵子さんが非常に素晴らしい写真で居ます。小生が女性の下着類を愛しているから、そのような「腰巻」の写真に一番刺戟されたのかも知れません。それにしても切腹写真の切腹の場面は、やはり坐つて切腹する所の場面が一番効果的かと思ひます。小生の注文致しましたのは立腹でしたので感想を少し書いて見ました。

(静岡 K・M生)

○ 私は女装マニアですので、お店の前に立って女物の着物に目をつけ、夜になつてその着物を買いました。が、店にはいる迄の思ひは何とも云えません。男であつて女の人が身につけるものを男が買うとするのは、お店の人が変な目で見るのが当然でしょう。未だ女装するには足りないものがあります。が、何せ物が高いので手が出ません。私は着たいのは和服なのです。私は女の着物を身につけると、何んとも云えぬ気持ちになります。

(M生)

女優緊縛映画予告篇(白石稔)

(題名) (製作) (会社名) (女優名)

天晴れ浮世道中(松竹)清川 虹子
銀座令嬢 (ク) 月丘 夢路
恋 天 狗 (東映) 月丘 千秋
黄金夜叉 (ク) 安宅 淳子
石松と女石松 (ク) 水木 麗子
明治一代女 (新東宝) 木暮実千代
逆襲大蛇丸 (ク) 嵯峨三智子
新州天馬俠 (ク) 川田 孝子
三人の狙撃者 (ユナイト) N・ゲーツ

○ 寒さ厳しき折から其の後お変わりございませんか、御誌を毎号愛読致して居る者です。女性の下着に興味をもつて居りますが、貴社代理部にてその販売を扱って頂けるとの事です。が、本当でしょうか？若し本当でしたらその品名や価格その他を御一報願えないでしょうか。度胸がありませんので店で買えません。私女装してみたくて仕様がありません。但し洋装です。あのスラッとした靴下や下着にたまらない郷愁と欲情を感じます。たゞ一度この人生を渡るだけです。

そして青春もたゞ一度。最も充実したよろこびと胸のときめくフアンタジーに浸りたい。又こんな想像もしているんです。私は未だ独身ですが、美貌で豊満な肉体をもつおとなしい妻をめぐって、他人に思う存分恥しめてやりたいと……御一報をお待ちしています。

(大阪 R・A生)

貴誌益々の御発展を心よりお慶び申し上げます。皆様の云って居られることですが、誰に打明けることも出来ない此の性向を慰めてくれる唯一の心の友と感謝致して居ります。貴誌の類似誌も遂に廃刊とのこと、今此の奇クがなくなったら？それは考えるだけでも恐しいことでもあります。何卒今後の御健斗を祈ります。小生は美しい女性の便器となることを衷心より希望して居るものですが、こればかりは相手なしなので、毎日空想して居ります。と同時に、汚れ果てた女性の下着にも人一倍の興味を感じて居ります。小生は春日さんの大のファンです。「メンスバンド」と「ズロース」を(散々に汚れ果てた物)是非お願い致したいと思ひます。本当はズロースよりもパンティの白いのでしみのつ

いて汚れたものが欲しいのです。(東京 M・Y生)

○

始めて通信を致します二十八才の独身者です。最近の「奇ク」のすばらしさには心より編集者に感謝致します。特に口絵に於ける女性下着愛好者の投書が益々充実して来たことは、我々ズロース・マニアの歓喜する所です。私は勇を鼓して所感の一端を述べたいと存じます。(一)最初に貴社の毎月の分譲フォトの中にフエチの写真の少ないことは誠に残念です。浣腸や縛りのフォトは多数ですが、フエチの方は僅かに二月号に出たバンドフォトのみで、ズロースのみを扱ったのがありませんので、何卒女性下着のフォトを作って下さい。三枚作って頂くとして次に写真の構図を書きます。(1)初めの一枚は物干場の景で、物干にいろ／＼の下着(ブラジャー、ズロース、パンティ、スリッパ、シユミーズ)が干してある所です。下着の数や種類は多ければ多いほどよく、そして画面の隅に「タライ」と洗濯中のモデル一名を配すこと。(2)次の一枚はミス〇〇の選考試験の景といったもので、画面に五、六人のモデルを横に一列に配し、ブ

ラジャーと下着のみをつけて並んだもの、但しこれは下着の種類を見せるためです。モデルの下着は一人々々別のものをつけさせて下さい(例えば右のモデルから順にメリヤス白ズロース、メリヤス黒ズロース、黒ブルマー、人絹パンティ、ナイロンパンティ、メリヤスブリーフ、トリコットブリーフ、という様に)。二人位は後向きもいゝでしょう。(3)三枚目の写真は風呂に入る女性が今パンティを脱ぐという場面。大体右のような要領で下着を主としたフォトを作して下さい。(二)次にこれは空想です。一年に一回、全国のズロース、パンティ、月経帯同好者が曙書房の主催の下に、書房の一室に集り、各自の所有せる女性下着の展示会を開くのです。そして又「奇ク」の女性愛読者の中で我々マニアのために下着を提供して下さる意志のある方は、予め編集部まで出して置いて頂いてその展示会に出品され、そして即売される。そこで集ったマニア達はお互に苦心談を語り、相互の所持品を

りします。二月号フエチ通信の北海道、荒巻利夫さん、御交際をお願い致します。(愛知 S・T・D)

○

マゾモデルのお姉さま方の写真はおもつと羞恥心に富んだものをお願い致します。例えば滝麗子先生のお画きになって居ります新妻遊戯姿のように、たゞ処女のように恥しい——と思われるような写真(表現した写真)をお願い致します。それから前記の写真にはタイトルを出して、例えば「あゝ、いや、お姉さまのばか……(後は泣声)」又は組写真には初めは抵抗して「なにすんのよ、お姉さまの助平」等と反抗して居ても、終には「あゝ、お姉さま、許して、あたしたまんないのよ」等と興奮してしまつて、お姉さまにしっかりと抱きついたり、又抱かれたりするのを、是非お願い致します。誠につまらぬ事ばかりお願い申しまして恐縮ではありますが、前記のような写真の一日も早く誌上に掲載されん事を望んでやみません。

(パンティマニヤSH)

◎次号では掲載洩れの読者通信を大幅に掲載いたします。

課題原稿募集

(皆さまの共同の広場建設のために)

【創作】

異色ある題材を提げて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限る。採用原稿には掲載後相当稿料を支払います。

【異常体験記】

一生に一度あるか、二度あるか、肌に粟を生ずる真実の体験記、或は異常なる人生体験記、幻想や夢はとりません。(二十枚迄、三千円)

【エッセイ(小論文)】

本誌の巻頭を飾るにふさわしい啓発的にして人をうなずかせるに足るもの。(二十枚迄三千円)

【アブ・コント】

告白でも、創作でも、見聞でも、形式はどんなものでもよろしいですが、奇智に富んだ雅味のあるもの。諷刺は断りします。(十枚迄千円)

【ラブ・レター】

送り先はどなたでも結構、猛烈に甘いものをお送り下さい。(十枚迄千円)

【私は訴える】

皆さまの胸に持っておられる諸々の悩みや御意見、主張等を発散して下さい。本誌ならでは取り上げないような内容のもの。(十枚迄千円)

【口絵並に挿絵】

画材はサド、マゾ、流腸、切腹等御自由です。優秀なる作者には継続的に御依頼いたします。

【ローカル・レポート】

新聞記事の切抜き或は見聞等、皆さまの興味を持たれた事件につきお知らせ下さい。掲載の分につきましては本誌二カ月分乃至半年分贈呈します。

(開放した誌面を御利用下さい)

【編集者或は執筆者への公開状】

適当なものは回答と共に発表の上、(十枚迄千円)モデル嬢に対してでも可。

【映画、雑誌通信】

映画や雑誌の中で特に興味を持たれた事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には、本誌二カ月分乃至半年分贈呈します。

【私のイメージ】

熱烈奔放なイメージをぶっ放して下さい。イメージですからどんな荒唐無稽なものでも、奇抜なものでも歓迎します。(十五枚迄千円)

【実写写真】

御自身写されたものに限ります。裏面又は別紙に説明とデータをお忘れなく、掲載分は相当謝礼。

【アイデア】

将来本誌にて企画すべきもの一般につき出来るだけ詳細に、優秀なものに本誌半年分乃至一年分贈呈。

【告白、体験、手記】

本月号百六十頁に懸賞募集中、御参照下さい。

【読者通信】

編集者、執筆者、投稿者への便り、前号の批評、希望、或は編集や雑誌のあり方に対する御意見等掲載分に対する私信は支障なき限り、つとめて御取次、転送いたします。読者通信は封書でなく葉書でも結構です。

○締切は毎月五日、原稿の第一頁に応募の種目を附記して下さい。

奇譚クラブ編集部

◎本誌月極直接購読料◎

一月分一冊(送料共)百四十円
 三月分三冊(送料共)四百二十円
 半年分六冊(送料共)八百四十円
 一年分三冊(送料共)千六百八十円

本誌を毎月号御買洩れのないよう確実に御入手になるため、最寄りの書店へ御予約下さるか、直接購読の御申込みをして下さい。半年分前金御申込みの方には、責め写真二枚一組、一年分御申込みの方には、五枚一組、サ―ビス品として贈呈申し上げます。

昭和二十五年十月五日 第三種郵便物認可
 昭和二十六年一月廿四日 日本国有鉄道特別扱雑誌承認

奇譚クラブ

第九巻第四号
 毎月一回一日発行

四月特大号

定価百四十円

昭和三十年三月二十五日印刷
 昭和三十年四月一日発行

編集人 箕田 京二
 印刷人 上田 庄之助
 発行人 吉田 稔
 大阪府堺区区内菅原通四ノ三〇

発行所

曙書房

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。